

# 博士論文(要約)

## 横浜開港場の都市史研究

中尾俊介

横浜開港場の都市史研究

中尾俊介

# 横浜開港場の都市史研究

## 「目次」

### 本研究の視角―横浜開港場の都市史研究の意義―

#### 一 本論の目的

#### 二 都市史研究における位置づけ―「水辺都市」論の動向から―

##### 「水辺都市」研究の蓄積

##### 近世・近代移行過程について

##### 空間分析の方法的課題―空間復元、社会空間構造論、「領域」論―

#### 三 横浜開港場の研究動向と展開の可能性

##### 交易商に関する議論と幕末の商人像

##### 横浜開港場の空間史―都市の位置づけと近代築港事業の評価―

##### 神奈川・横浜の視点と領域内の「商人的対応」論

##### 維新时期社会経済史研究と、江戸内湾における横浜開港場

##### 小括

#### 四 各章の概要

### 第一章 近世後期の神奈川―宿と湊―

#### 一 問題の所在

#### 二 神奈川宿の概要

##### 中世の神奈川

##### 近世後期の住人と生業

#### 三 神奈川に分節構造

##### 役負担から見た宿駅の中核と周縁

街道と隣村

神奈川湊と舟運

小括

#### 四 屋敷地の変化

神奈川町の検地帳

青木町の新田検地帳

青木町の「海岸築出新地請名寄帳」と「海面請地名寄帳」

#### 五 青木町の海岸―宿と湊―

青木町の空間復元方法

築出新地と水際空間の具体像

個別事例

小括

#### 六 結語

## 第二章 開港期の「神奈川港湾中」

一 問題の所在―近世湊の空間理解にむけて―

二 幕府・奉行の「神奈川港湾中」支配

三 神奈川湊廻船問屋と湾中

開港前の神奈川湊と海

開港前後の積極的な事業展開

明治初頭の再編

#### 四 結語―神奈川湊と湾―

## 第三章 横浜開港場の都市形成―地所割渡し過程と地割から―

一 問題の所在―幕末都市形成史研究にむけて―

二 開港場の建設過程

開港場の概要

## 第四章 惣町と交易商―町の変容と売込商仲間から―

- 幕府役人による開港準備の概要
- 地所割り渡しと開発の過程
- 三 奉行による都市計画とその変容
  - 利用資料の概要と地割の復元手法
  - 絵図からみた都市計画の内容
  - 南北非対称性に関する仮説
- 四 編成と出店の具体像
  - 奉行による編成の痕跡
  - 出店商の人脈にもとづく地所取得
  - 家屋図面からみた敷地計画
- 五 結語 横浜開港場の史的位置づけ
- 一 問題の所在
- 二 横浜町の構成
  - 横浜町の輪郭―各町の町会所役人・家主役・薦頭―
  - 町々家主
  - 薦頭
  - 小括
- 三 都市のなかの売込商
  - 町と組合
  - 売込商の格差
  - 売込商の浮き沈みと営業の多角化
- 四 拝借地所内部の分離
  - 地所拝借人の変遷
  - 拝借地所のなかの長屋普請
  - 召仕と借家人

五 結語  
流入民・人宿・人足方

第五章 横浜開港場の波止場―移行期の港湾インフラと物流―

- 一 問題の所在
- 二 波止場の成立と海岸
  - 波戸場の計画思想
  - 開港直後の洲乾湊
  - 神奈川の海岸―佐藤屋関係資料から―
- 三 波止場運送の担い手―運送方・人足方・水主方―
  - 運送方
  - 人足方と水主方
  - 運送方と人足方
- 四 明治以降の展開
  - 運送方の事業展開
  - 人足方の変容と水主方
  - 御国産波止場の造成―運送方・人足方の揚棄―
- 五 結語と展望

第六章 海岸の民有地化と成熟―近代築港計画空間史序説―

- 一 問題の所在―港町の近代に関して―
- 二 日本人町の海岸と外国人保税倉庫
  - 元治元年の約定と海岸
  - 外国人保税倉庫の建設計画
  - 大火後の都市計画と海岸通りの誕生
  - 海岸石庫の誕生
- 小括

## 第七章 鉄道開通と神奈川―近代化事業と「伝統都市」―

- 三 倉庫用地の払下と海岸の民有地化
  - 三井組への売却と国産方
  - 石庫の曳家と海岸の空地
  - 三菱会社への売却当時の状況
  - 小括 日本人町におけるウオーターフロント
- 四 明治二十五年の請願にみる海岸の状況
  - 日本郵船会社
  - 左右田金作と海岸通り二〇番地
- 五 課題と展望

151

## 第八章 江戸内湾における横浜開港場―運送方と最寄船乗―

- 一 鉄道敷設計画の評価
- 二 埋立地の概要と明治初頭における県政の方針
- 三 高島町の形成と影響
  - 埋立地の計画
  - 竣工当初の高島町と遊廓
  - 高島町形成の影響
- 四 七軒町・宮洲町・瀧下町の形成
  - 宮洲町・瀧下町の造成
  - 鉄道敷補償用地としての七軒町
  - 埋立地の住人と機能
  - 埋立地の平面形態と海岸
  - 神奈川湊の行く末―埋立の進行と工業地帯化―
- 五 結語

- 一 問題の所在―江戸・横浜の二都市関係―

169

## 結章 近世近代移行期の湊と「港湾都市」によせて

- 二 両都市間舟運の前提―荷主としての江戸問屋―
- 三 江戸の横浜回漕業者  
万延から慶応期の生糸流通仕法の変更と新規願  
明治初頭までの展開
- 四 「最寄船乗」の動向  
波止場に入入りする船乗―船か海運か―  
幕末における船乗―文久二年の外国人荷物窃盗事件における船乗―  
明治三、四年の東京・横浜舟運の船乗  
明治十二年の運送船夫組合と運送方  
小括 船乗の参入と編成
- 五 結語と展望
- 一 交易の場としての日本人町  
惣町、売込商と「近代都市」横浜  
拝借地所と売込商の性格
- 二 神奈川と江戸内湾における住人の対応  
神奈川湊・神奈川宿と横浜開港  
横浜開港後の江戸と内湾町村
- 三 インフラの史的展開と近代築港事業の評価  
インフラの史的展開  
都市・地域からみた第一次築港事業の性格  
明治中期以降への展望―「港湾都市」研究にむけた課題

## 本研究の視角—横浜開港場の都市史研究の意義—

### 一 本論の目的

本論は、横浜開港場の成立から、築港事業や新しい全国的な海運網が発展する明治前期までの過程を都市の動向に注目して論ずる。これは安政六年に誕生した新興の港湾都市の成立をいかに論じ、近世・近代の移行過程を展望するか、という問いによっている。

横浜は幕末開港場のなかでもっとも劇的な誕生を果たした。半農半漁の横浜村へ安政六年に都市建設がなされ、つづく万延元年からは本格的な外国人居留地の建設、貿易の急速な拡大と人口の増加、慶応二年の大火後の大規模な都市改造、明治四年の東京・横浜間の鉄道開通と、立て続けに建設事業が展開した。そして明治十年代の東京・横浜の築港論争を経て、明治二十九年に国内初となる近代築港計画が完了されるなど、都市形成から数十年で近代港湾都市と化したことはよく知られたところであろう。

近世史・近代史における横浜開港場の位置づけについては、石井寛治と吉田伸之の主張が明快である。石井寛治は外国商人と直接対峙したところの横浜商人を、欧米列強による資本主義世界への編入に対し、国家の自立を保持しつつ受け入れた主体であり、同時に、生糸の産地に浸透する集荷体制への編成替えの頂点として産業資本家へ成長する存在と評価した<sup>一</sup>。吉田伸之は、とくに生糸流通において旧来の流通秩序の解体に起因した売込商の誕生を、株仲間解散以降の江戸における問屋・仲間の解体とあわせて論じ、「伝統都市」と「現代都市」の中間の「近代都市」として横浜を位置づけた<sup>二</sup>。近世から近代への移行のなかで、横浜開港場の成立は近世的な秩序を解体し、全国の産地と貿易都市、そして国際市場との関係の端緒であったといえる。

ただし、都市としての横浜開港場の理解は現段階の研究状況で十分に進んでいるとはいえない。そして、これまでの研究が明らかにしてきた通り、横浜開港場の形成と拡大は、内陸の隣接地域もさることながら、海を介して隣接することとなった沿岸の町村へ大きな影響を与え、他方でそうした町村があつて初めて実現しえたのであつた。したがって横浜開港場の研究、とくに形成して間もない幕末・明治初頭の動向を扱ううえでは、周辺との相互関係の検討が不可欠である<sup>三</sup>と考える。

本論は日本人町と沿海部分の動向を中心に、都市形成から明治前期までの横浜開港場を、開港以前からの文脈をもって可能な限り具体的に、かつ都市空間と住人の動きに即して明らかにすることを旨とする。とくに神奈川宿・湊から横浜までの湾を中心として、ときに巨大都市江戸およびその内湾（東京湾）を念頭に、開港場の具体像にせまりたい。ここで、港湾都市やその近代化を分析するうえで不可欠な問題として、海上輸送を中心とした物流の流通やそれを支えるインフラを扱うことになるが、産地・中継地・市場のあいだの流通構造や近代港湾インフラの事業そのものよりも、それらと密接な関係をもった都市開港場と周辺地域の空間と住人の分析を主軸にすえる。

### 一一 都市史研究における位置づけ—「水辺都市」論の動向から—

まずは、都市史研究における本論の位置を示したい。横浜は幕末開港場としての特殊な側面をもった一方で、近世期に誕生した港町であることに変わりはない。そこで、横浜開港場を近世港町の系譜に位置づけた宮本雅明の業績から整理を始めること<sup>四</sup>としたい。

#### 1 「水辺都市」研究の蓄積

宮本雅明は、城下町の平面比較と並行して、多数の事例研究から海岸に垂直な町並みからなる中世港町と、平行な町並みからなる近世港町の対比を明らかにした<sup>五</sup>。カール・ポランニーの提唱した交易システムの変化（管理交易から自由交易への移行）と重ねることで、中世から近世にかけて港町の平面形態が移行する様子を明快に示した重要な成果といえる。さらに宮本は近世中後期に特徴的な局面を均質な地割の変容にもとめ、近代への展開を横浜開港場に即して推察した。横浜は、近世前期の城下町・港町と共通する均質な地割による平面形態をもった最後の在方町である一方で、海に開かれた「バンド」（海岸通り）を介して市民と世界市場がつながった点において、特定の営業関係者に海岸沿いの土地が所持された近世港町の海岸とは異なる景観を伴ったと評価したのである<sup>六</sup>。

宮本の行論と親和的な考察は伊藤毅によって提示されている。伊藤は、水辺に立地する都市をひろく「水辺都市」として研究対象化することを提起し、水辺利用の技術を軸に古代から近世までの事例を通覧することで、日本の都市は水に対峙するのではなくむしろ背をむける事例が多く、開発の性格も水に寄り添うかたちでなされていたことを示した<sup>七</sup>。

水辺の利用・開発という多くの都市に通底する共通項を設定することで、都市機能にとらわれない空間類型を抽出した包括的な成果といえる。

両者の論考は親和的で、水辺に正面をむけて対峙せず、私的な海岸の集合としてあった伝統的な港町と、個々の建築が海へ立面をむけ、解放された海岸をもつ近代の、もしくは西洋の港町という対比をそこに読み取ることができるだろう。そして、古代から近世前期までの通時的な展開を示した伊藤の論考と、近世港町全般の類型性、そして近代への展開を見出した宮本の論考によって、前近代の港町の空間的な性質はひとまず明らかにされたといつてよい。

ただ、宮本による港町の中世・近世移行論に即して考えれば、海岸や波止場、埠頭といった物資流通のなされるインフラの分析から近代化を見通す試みも必要ではないか。ウォーターフロントの事例として伊藤がヴェネツィアを例示しているとおり、バンドの形成はむしろ外国人居留地に固有の景観というべきであろう。

一方、建築史において港町を代表とする「水都」を積極的に対象化し続けたのは陣内秀信の研究グループである。とくに、陣内秀信・岡本哲志による書籍でヨーロッパ・アジアの事例とともに日本近世の港町が多く取り上げられている<sup>六</sup>。各地の港町の魅力を伝えることに主眼が置かれた本書において、明確な論点を見出すことは難しいが、フィールドワークを主とした研究上の視角については通底した問題関心が読み取れる。それは、流域や内湾の都市群の対象化、海上からの都市立面の観察、海から陸への軸線による平面形態の読解、海路の体験と空間としての評価など、都市を水辺との関係からいかに読み解くか、というものである。水上をもフィールドワークの対象とする姿勢は、あくまでも陸上の形態を扱った宮本雅明や、水際に注目した伊藤毅の成果を、対象の拡大によって展開させる可能性を開示している。

こうした世界各地の港町研究の延長に「水都学」の提起があると考えるが、陣内による「水都学」の決起にあたっての論文では、新しい視角として「テリトリーオ」が明確に提示された<sup>七</sup>。そこでは東京の内陸の問題が例とされ、河川の流域や港町と内陸部の関係が念頭にありと思われるが、一方で、港町の類型を論ずる際には自然環境をふくめた広がりを目を向けて都市を分類する姿勢がとられている。流域や湾のなかで都市群をとらえていた以前の視点と通じるところがある。

それに先立って伊藤毅も港町から広域を視野にいった論考を発表している。舟運機能と

農地開発の両立する宿根木から、農地を不可欠な要素とする港町の両義性を見出した<sup>八</sup>。さらに先行する稲垣榮三研究室による輦の調査にみられた、沿海部に限らずに内陸の宅地・農地までを含めた分析視角を受け継いでおり<sup>九</sup>、港から内陸までの広域的な視点を提示した論考といえる。

以下では上記の蓄積を踏まえたうえで、方法上の視角を述べる。まず次項では、近世から近代への移行過程について、次々項では水辺の空間を分析する手法について検討したい。

## 2 近世・近代移行過程について

陣内秀信は「水都学」の成果をまとめる結論のひとつとして、現代までを視野に入れた「港町」の通時的展開を整理した<sup>一〇</sup>。舟運機能と都市が一体となった「港町」、港湾設備の巨大化によって都市から舟運機能が分離した「港湾都市」、港湾設備のさらなる移転とブラウンフィールドと化した旧港湾の再利用の結果としての新たな「水都」の再生という変遷を示している。伝統的な「港町」のみならず、港湾設備の巨大化や、現代の都市再生をも考慮にいった通時的整理として注目されるが、「港町」から「港湾都市」への展開過程は氏が「陸の時代」と称した近現代の重要な局面であり、その移行の過程を把握することが肝要になると考える。「水都学」の前提となる世界の「港町」の研究における、各地に叢生した中小の都市に関する調査の蓄積とは裏腹に、「水都」の復活が巨大な都市再生事業の紹介にとどまってしまうことをみたとき、「港町」から「港湾都市」への展開の構図や、「港町」と「港湾都市」の関係を問う必要があるように思われるのである。

そのためにはまず、「港湾都市」の対となる「港町」に包含される都市の、インフラが巨大化する寸前までの変化を考究するべきであろう。日本前近代の「港町」についていえば、流通の構造がその末端の担い手から変動しつつあった近世後期<sup>一一</sup>、物流にともなう関係は多様化したはずであり、そこで「港町」はどのように変化し、そこに生きた人びとといかなる活動をしたのか、という問いが立つだろう。こうした「近代の胎動」は<sup>一二</sup>、都市の形態や居住を問ううえでも意識せねばならない。宮本雅明による近世港町モデルを得た我々は、その空間構造の類型性ではなく、より積極的な変化の評価を試みる必要があるのではなからうか。

つぎに、「港湾都市」化の画期として最も明確な指標たる築港事業の研究をみていきたい。明治期日本の土木技術史を通時的に扱った松浦茂樹<sup>一三</sup>、築港を中心とした海港の行政を地

域における政治動向から論じた稲吉晃による業績が挙げられる<sup>一四</sup>。しかし、こうした近代築港史は、その計画が施される都市が必ずしも重要なフアクターとして扱われていない。

稲吉晃は、国家が加担した日本近代の港湾行政を扱ううえでは、前近代における都市と港が一体となっていた事例とは異なる手法をとる必要を主張した。それぞれが固有の港湾行政構想をもった諸種の政治主体のバランスのもとに築港事業が推進される様子を、日本各地にわたって描いた稲吉の成果は重要で、巨額な工費を背景にした地元住人と国政レベルでの判断のずれ、または築港実施地をめぐる地域間の対抗など、政治的問題として築港事業の実現を位置付ける視角は説得的である。

だが、築港事業を「港町」から「港湾都市」への展開の画期としてみたとき、事業と都市や周辺地域との関係はむしろ検討すべき主題になる。都市と港が一体となった前近代と、国家の主導による近代の港湾という稲吉の対比構造は、その行政の特質を見る上では妥当であろうが、都市の変動を考えるうえでは移行期の視点を要すると考える。公有水面たる海へ外国人技師による先端技術のともなう上からの計画が必要であった築港事業であつても、それが都市に接続される限り、都市との関係は無ではないはずである。

その点、江戸名所たる高輪海岸を事例として、そこに敷設された「現代都市インフラ」たる鉄道が、「伝統都市」を切り裂く様子を描いた吉田伸之の論考が、地域のなかでインフラの誕生を評価する試みとして注目される<sup>一五</sup>。また、市区改正計画について、地主の主体的行動による計画の変容や、表店層へ与えた影響を明らかにした松山恵の論考は、計画と住人の関係を論じ、ときとして双方向的な関係までも解明している<sup>一六</sup>。そして中川理は近代都市計画「事業史」を克服すべく、都市住人と計画の双方向の関係を明らかにする必要を主張した<sup>一七</sup>。近代都市計画やインフラ事業一般に目を向けてみれば、都市住人による計画の受容や参入、加担の構図、既存の空間との関係が検討されているのである。

また、近世・近代移行期に関する研究が、変動の図式的把握を措いたうえで当事者の直面した状況の丹念な分析として遂行されていることをみたとき<sup>一八</sup>、明確な近代化の基準たる築港事業も、当時の築港論者による言説の分析のみならず、それが克服しようとした前時代的な設備と運送の実態を明らかにしてこそ、その史的評価が可能になるように思われる。その点、開港場行政における外交問題を追跡したうえで、明治七年の横浜の築港計画案を、取締の徹底を志す税関・外務省による外洋船と開港場を直結しようとする戦略として位置づけた稲吉晃の成果は注目される<sup>一九</sup>。くわえて、急速に拡大する交易に比した設

備の「小規模性」が、都市と運送の実態から評価されねばならないだろう。

### 3 空間分析の方法的課題—空間復元、社会空間構造論、「領域」論—

近年、近世都市を扱う研究者から、「空間史」の方法上の進展に関して問題が提起されている<sup>二〇</sup>。本項では、具体的な事例研究の手法から「水辺都市」の手法上の可能性を探りたい。

水辺の空間の研究手法として、野口徹による竹原を事例とした研究が今なお重要な示唆を与える<sup>二一</sup>。本川沿いの都市化の類型を考えるなかで、「内島」「掛端」といった地尻の土地の屋敷地化、川に面した地先の土地の占有、離れた場所から川端への出店の確保など、単なる屋敷地利用の変化にとどまらない居住空間の展開が整理されている。

野口の提示する竹原の都市構造の変容過程は明快であるが、ここでは、土地の呼び名に注視する姿勢に注目したい。屋敷地への着目は氏の都市史研究に通底するが、当時の小地片の呼び名をキーワードとして意味するところを追求し、その質を考究する姿勢がそこに認められるのである。

空間の質をより理解するという視角については、浮世絵や切絵図、舟運が主体となった物流の性格から解釈された江戸の「水の都」像を、実物大とも呼びうる河岸空間の復元と、長期的な維持管理の実施状況から再考した高橋元貴の論考がきわめて重大な問題を提起している<sup>二二</sup>。必ずしも「水辺都市」論に限られた問題ではないが、少なくとも水辺の空間の物理的な質や、舟運がいかにして可能であったかを問いつけることがこれからの研究に求められるのである。

他方、水辺を流通の場として、社会・空間の双方から論じ続けているのは吉田伸之である。以下、流通社会史ともいえるべき諸論から、「水辺都市」論の深化という課題に引き寄せて論点の抽出を試みる。

吉田は、巨大都市江戸の中軸の一つである市場の社会構造を論ずる「市場社会論」の延長として、江戸の河岸における紀州蜜柑の流通を題材に、運送船・問屋・仲買・小売・運送従事者の構造的把握をおこなった。そのなかで河岸が水路から蜜柑を水揚げする場（揚場）であり、仲買への市売りの場（売場）でもあったことを明らかにした（揚場Ⅱ売場）<sup>二三</sup>。揚場Ⅱ売場の指摘は、問屋の関係所有を担保する場としての河岸の保持を論じた点で、都市内の流通の中枢といった河岸の抽象的な位置づけを超え、誰にとつての、何を支える場

（インフラ）であったのか具体的に問われている点が注目される。この点は、吉田の「市場社会論」を受けた原直史による「干鰯問屋」と「干鰯場」（干鰯売買の市場）に関する論考にも共通する<sup>二四</sup>。流通という問題を都市史の俎上にのせ、空間論の一環として具体的な機能を問うことを可能にした重要な手法であるといえるだろう。

つぎに、流通路の全体像を社会関係から解明しようとする試みが注目される。吉田は年貢米の納められる浅草御蔵を題材に、江戸内湾からの輸送の担い手と、浅草御蔵に集結する運送集団や札差の分析、そして港湾設備へも言及し、集約的な「前期的港湾」としての性格を明らかにした<sup>二五</sup>。そこでは、内湾各地の産地↓積み出しの湊↓江戸（流域都市）論<sup>二六</sup>を踏まえれば江戸湊↓江戸河岸、そして都市内部における問屋・仲買から小売りへ、という一連の物資流通を把握せんとする構想のうえで<sup>二七</sup>、広域（内湾）から都市の細部までが論じられている点に注目したい。これは、担い手を含めた流通路の復元と呼びうる試みである<sup>二八</sup>。

こうした研究は、物資流通の社会関係を切り口に都市をその外側におよぶ広域から分析するものといえる。「空間史」との関係でいえば、復元可能な「空間」と、社会的な関係に即応する不定形な「場」に関する岩本馨の問題提起が思い起こされる<sup>二九</sup>。岩本は、特定の行動がなされる場所の「場」が、地域的なスケールにまで及ぶ広がりになることに言及し、「場」と「空間」を区別したうえで、両者の相互生成を論ずる必要を主張した。これは人間同士の関係と物的・可視的な空間を、両者の一致・不一致の検討も含めた相互影響の分析により考究する氏の関係論的「空間史」の理論的基盤であろう。

一方、伊藤毅は「領域」をキーワードに、居住を成立させる根本を探究する研究視角を表明した<sup>三〇</sup>。そこでの研究の対象は集落や都市に限られない。むしろ、その対象の切りだし方そのものを問う必要を主張したものである。例示された視角は農地と地質への着目、水と陸の中間としての沼地や、耕作不能の土地としての荒地地への興味など、主として都市や集落から地続きの広がりや、その質に注目して考究する試みといえる。

物資流通の拠点としての港町をあつかう本論においては、その端点となる空間、たとえば揚場・売場や海岸を、築かれた「空間」として、「場」の論理との関係から評価することがまず課題となるだろう。くわえて、伊藤の提起した居住の全体性の探求としての「領域」論から「空間史」の方法的試論を実践するには、「場」に対応する構築的ではない広がりや、その質に着目して考究することが求められると考える。そして、都市を超えた関係が本質

ともなる港町の研究においては、「場」の生成そのものも主体的に論ずる必要であるのではないか。前節でみたとおり、近世後期を扱ううえでは港町における関係の把握も重要な課題となるのである。

本論は、「水辺都市」における既往の広域的研究の試みに対し、海を含んだ広域を論ずることを提案したい。すでに陣内秀信らによって伊勢湾、東京湾に関する試みがみられるが<sup>三一</sup>、地理的な分布や立地の読解に留まっている。地理的な広がりをいかにして論ずるかが方法上の課題であり、今後一層の試論が必要であろう。地図に表現されるような空間に対し、その質に注目することが重要になるのではなからうか。現段階では海およびそれを取り巻く地形への注目と、そこに充満する関係と「場」の読解・復元が具体的な手がかりとなると考える。

最後に、吉田伸之の研究で注目されるのが運送船への注目である。とくに、浅草御蔵が解宿を介さずに大型の茶船や伍大力舟の停泊を可能としたと推測し、江戸市中の河岸に設備として勝る「前期的港湾」の根拠とした点は重要である。都市に入り込む船がどのようなもので、それを受け入れるインフラはどのようなものか、という点は、必ずしも資料から明らかにしやすい問題ではないが、さきの高橋元貴の問題提起と関連して、重要な問いであろう。

以上、本論の課題は、①近世後期の「水辺都市」における流通の基盤としての都市空間の検討、②①を経たうえでの近代築港事業の評価、であり、分析手法として、①都市空間の物理的な質と機能を追求すること、②地形を踏まえた海上の空間の対象化、③港町を中心とした広域に広がる関係と「場」を意識することとする。

## 三 横浜開港場の研究動向と展開の可能性

つぎに、横浜開港場の研究動向を瞥見し、本論の具体的な課題を整理したい。

横浜開港場の研究は、開港五十周年記念の『横浜開港五十年史』<sup>三二</sup>と『横浜開港側面史』<sup>三三</sup>、戦前の自治体史の『横浜市史稿』<sup>三四</sup>、藤本実也による生糸交易に関するデータベースとも言いうる『開港と生糸貿易』<sup>三五</sup>を経て、『横浜市史』<sup>三六</sup>が大きな達成点となった<sup>三七</sup>。

『横浜市史』のハイライトは横浜開港場の交易商についての議論であろう。福地源一郎の言説をもとにして冒険的投機商、門閥豪商という分類を提示し、前者の代表格として甲

州屋忠右衛門、後者の代表格として三井横浜店について論じ、さらに前述の二類型にとどまらず、茶取引に関して駿府、江戸の都市商人の活躍を紹介した。また、幕府と江戸問屋による流通統制である五品江戸回送令に対する売込商の対抗と、外国人の圧力も加わったものの統制の撤回は、国際交易港の誕生の衝撃を鮮やかに描いた成果といえる。

『横浜市史』による交易商研究の特長は、『開港と生糸貿易』や『横浜市史稿』以来続く市外への資料調査にもとづき、出店商の出自にも目を向け、その系譜や生産地との関係をも論じている点である。交易の開始を契機とした農村部におけるマニユファクチュアの成熟をも射程に入れており、開港場をキーに全国的な維新過程を論じようとした展望において、今なお重要な成果である。

『横浜市史』以降の横浜研究はだまかに五つの流れがある。一つ目は、交易商、横浜商人像に関する実証研究の蓄積である。二つ目は、建築史、土木史の研究者を中心とした都市の形態やインフラに関する研究、三つ目は、開港以前よりの都市たる神奈川を中心とした地域史のなかで開港場を再評価する試み、四つ目は、維新时期経済史における横浜開港場の評価、五つ目は外国人居留地と対外関係に関する研究である。

以下、本論の関心から、初めの四つを中心に動向を概観し、その展開に重要とおもわれる論考を参照しながら本論の具体的な課題を整理していきたい。

## 1 交易商に関する議論と幕末の商人像

松本四郎は大坂の三井両替店の収支分析から、同店が慶応三年の段階で、幕府権力にてこ入れをもって荷為替金融に着手したことを重視し、都市商人金融から豪農とつながる都市新興商人（横浜の生糸売込商を含む）に対する金融への展開と読み解き、明治初頭に直接豪農・地方都市商人とつながるところの府県為替方への展開の端緒、つまり、都市から在方へ広がる金融網の萌芽ととらえた<sup>三三</sup>。横浜開港場の出店商を都市商人として扱うのではなく、産地豪農の手先としての性格を強調した論考といえる。

一方、開港場での交易において、外国人は居留地制度と攘夷運動の激化によって産地への買い付けは結果的に制限されていたため、開港場に売込商からの購入か、前貸しによる買弁化が主な輸出貿易の手法であった<sup>三六</sup>。石井寛治は、自由貿易帝国主義とも称された外圧を、その実体である外商の経営から具体的に明らかにする必要を喚起し、同時に、外商と対峙した売込商・引取商の評価・分析をおこなった。イギリスのジャーディン

・マセソン商会の経営文書の分析を軸に、伝記や回顧録、公文書などの近代資料を駆使して開港から明治前期までの横浜開港場における経済的な外圧と、そこへの日本人商人・新政府官僚の対応を論じた氏の浩瀚な業績は、安政開港直後から明治十年代までの動向を通時的に明らかにした重要な成果となっている<sup>三九</sup>。そこでは、生糸売込商による外商からの前借りや産地買い付け、または、彼らの仲間組織に関する整理など、都市商人としての主体のある存在として交易商の姿が追求されている。

その後、主として売込商の生家の資料調査に基づく個別事例の発掘から、市史の提示した冒険的投機商・門閥豪商という二類型の再考が試みられてきた。なかでも西川武臣による中居屋、吉村屋に関する論考がとくに重要である<sup>四〇</sup>。幕僚との人脈を築きながら藩との関係も構築して大量の生糸を入荷した中居屋、委託貿易へ経営の重心を移行することで幕末の生糸相場の高下を乗り切った吉村屋の事例は、門閥豪商の類型外にあった在方の出店商についての新しいイメージを提示した。より歴史的な評価を試みれば、中居屋は近世後期において商業をふくむ多面的な行動をした農村有力家としての一類型を、吉村屋は明治以降の交易商へと連続し、在方へ浸透した金融網（売込商体制）の頂点にたつところの一類型を示している。

他方、斎藤多喜夫は、二類型把握を克服すべく、開港当初の出店商のリストを作成した。リスクを低減すべく同郷から集団出店をした商人や、幕府からの要請の痕跡が読み取れる例を紹介したうえで、積極の出店から幕府の要請への対応まで、出店意志の濃淡をもつて把握する必要がある<sup>四一</sup>。

とくに冒険的投機商という類型については、市史編纂の時期に豊富な資料のえられた甲州屋忠右衛門から敷衍された理論として、西川・斎藤による批判の対象とされた。ここで、甲州屋忠右衛門の特徴として、リスクと収益の大きな生糸・蚕種紙売込への積極的な参入、多業種への事業展開、広域にわたるネットワークの形成があげられるが<sup>四二</sup>、こうした性格は、短命に終わる可能性の高い冒険的な側面から、近世後期に台頭した新興商人に共通するとみられる側面まで看取できる点に注目したい。

そこで参照したいのは近世・近代移行期における商人と流通に関する研究である<sup>四三</sup>。局的市場圏または「地域的市場圏」というべき市場圏の形成と新たな運送集団の誕生、そしてその拡大の大きな契機となった株仲間の解散は、旧来の流通秩序を大きく変質させた。この時期に成立した運送集団や流通のシステムは、直接的に近代へと連続しない場合もある

ったが、少なくとも時代の移行を端的に表したものとみてよい。そして、こうした状況で成立したのが横浜開港場であった。

吉田伸之は、江戸における問屋と仲間の通時的な展開を論じ、近世後期には地縁的な結合にかわって都市社会に深く浸透した問屋・仲間の結合が、株仲間の解散と横浜開港を機に不可逆的に解体されたと指摘した<sup>四四</sup>。江戸問屋を介さずに、売込商を介して在方と横浜の外国人が短絡される構図を、株仲間解散後に芽生えつつあった「自分荷物の論理」の圧倒的開花の象徴としてとらえている。そして、遊廓の存在や共同体としての惣町などの「伝統都市」の要素を残しつつ、外国人居留地と（問屋・ヘゲモニーではなく）売込商・ヘゲモニーを内包する点においてそれとは異質な、「現代都市」への移行過程の都市類型である「近代都市」として横浜開港場を位置づけた。

横浜の交易商研究との関係で注目されるのは、「伝統都市」の問屋と、「近代都市」の売込商（商人）が対置されている点である。幕末開港場の「冒險的」な商人を、近世後期段階における「自分荷物の論理」と近世後期の商人の一形態としてとらえ返すことが、横浜売込商論を、広く幕末維新期の文脈に位置付けるためには重要であろう。そして、「近代都市」・横浜という吉田の問題提起は、そこで提示された特徴的要素、すなわち横浜遊廓と惣町の実態と、外国人居留地の直接的な影響、売込商・ヘゲモニーの内容を追求するという具体的な課題を投げかけるものである。

本論はいま一度石井寛治の手法に注目し、交易商の都市における動向に注目することで、「近代都市」の商人の姿に迫りたい。一都市規模の新規願ともいえるべき横浜開港場の成立のなかで、国元との強固なネットワークを有した彼らがいかに行動して都市をつくり、運営していったのか。在方での集荷や産地商人との関係など、交易の担い手としての側面を解明することはもちろん重要であるが、同時に、都市の内部での彼らの位置づけや結合のあり方を検討することも、横浜開港場の、そして周辺一帯の、近世・近代移行期を論ずるためには必要な作業となる。本論では、都市形成と明治初頭までの都市社会の分析から、吉田が言うところの「惣町」と「売込商・ヘゲモニー」についての考察を試みる。

ただし、横浜開港場の都市社会の分析はさほど蓄積があるわけではない。『横浜市史』においては、売込商の結合は専ら権力のものとの編成として解釈され、主体的な結合は基本的に想定されていない<sup>四五</sup>。先に示した石井寛治の論考や、西川武臣による開港場町政に関する論考は<sup>四六</sup>、都市内における売込商の結合や立場の変遷に迫るものではある。ただ、交易

商が個々に金融・集荷網を築いた事実、秘密主義に基づく安価での買い付けと高値での売却という投機的な売込の性格と<sup>四七</sup>、近隣関係が希薄であったという記録もあいまって<sup>四八</sup>、横浜の都市内部における組合や町に関する研究は盛んではない。横浜開港場の都市社会の分析は、いまだ資料と基礎的な史実の発掘段階にあるのである。

## 2 横浜開港場の空間史―都市の位置づけと近代築港事業の評価―

横浜開港場の都市形態について、地図資料等から分析した研究はいくらか認められるが、宮本雅明と青木祐介の論考が格別に重要である。

前節でもみたとおり、宮本雅明は、近世城下町・近世港町において卓越した均等な地割に町屋が建つ「マチ空間」がみられる「最後の在方町」と横浜を評し、くわえて、バンドの成立に近代港町の景観の誕生を見た。青木祐介は、横浜開港場が幕府によって設計された近世計画都市であることを強調し、両側町、六〇間四方の街区寸法といった要素に江戸との共通を見、さらに近代都市計画の端緒とみなされてきた慶応三年の新しい街路を、火除地に類する防火帯として位置づけた<sup>四九</sup>。両人ともに横浜開港場の近世計画都市としての性格を明らかにした成果といえる。

しかし、宮本の論考も青木の論考も開港場の測量地図をみるようなスケールから主要な議論がなされている点は看過できない。モデル化や、近世都市・近代都市一般への位置づけはつねに問われる必要があるが、市史編纂以降、横浜開港場の近世史研究に着実な蓄積がされた今、都市空間への立ち入った分析が求められると考える。

幕末から明治初頭の開港場を扱った諸研究は、必ずしも具体的な都市空間を意識したものではない。たしかに、新市街地の開発に関する斉藤多喜夫や高村直助による論考は都市史研究に近い側面を持ち、ときに都市空間への関心を示している<sup>五〇</sup>。また、横浜町の組織や住人に関する西川武臣の成果も都市開港場へ迫る成果といえるだろう<sup>五一</sup>。だが、基礎的作業というべき都市空間の復元が街区レベル以上ではなされていないのである。

関連する課題として、交易商研究の進展によって開港場周辺の物資流通は事例研究レベルにおいて着実に把握されてきているものの、その物流の担い手や中核となった空間については研究がほとんどなされていない点も挙げておきたい<sup>五二</sup>。つとに指摘されるように奉行の開港場計画の骨子は取締の徹底であり<sup>五三</sup>、長崎の出島に例えられることが多い。そうした計画理念と、国際交易が拡大するなかでの実際の物資流通の関係は、空間に即して検

討する価値のある問題であろう。

他方、横浜開港場は、外国人を交えた都市計画、インフラ整備がなされたこともあり、都市の近代化をあつかう建築史・土木史の研究者による成果も多い。とくに明治前期から計画が提案されはじめ、二十九年に第一次事業が完成した築港計画は、東京・横浜の近代築港に関する研究とともに長らく一定の注目が向けられてきた<sup>五四</sup>。

横浜の築港についての研究は、計画を推進する主体の変化から、明治中期の政治史のなかで計画を位置づけた内海孝の通時的な整理がまず挙げられる。①外交戦略としての事業（外務省主導）→②外貨獲得の手段としての構想（大蔵省主導）→③財政不足を背景とした横浜港民との共同の画策→④官民共同事業の雛形化という変遷を見出した<sup>五五</sup>。また、前節でみた松浦茂樹や稲吉晃の論考は、技術史や、中央・地方の政治史というそれぞれの文脈で横浜の築港事業を掘り下げて論じた成果である。

しかしながら、横浜開港場の都市と築港計画の関係は、計画内容以外の資料が少ないこともあって、横浜港民の参与に言及した内海孝以降はさほど論じられていない。前節で提起したが、本論は、築港事業以前の都市住人、空間と物資流通を具体的に分析し、事業の竣工がどのような都市において実現し、何を達成し、何を達成しえなかったのかを分析することで、都市の文脈から築港事業を評価することを目指す。

### 3 神奈川・横浜の視点と、領域内の「商人的対応」論

横浜開港場を地域史的視点でとらえなおそうとする研究は、西川武臣による研究が代表的である<sup>五六</sup>。神奈川湊とその周辺の、おもに沿岸の町村を対象とした物資流通の解明によって、開港以前における神奈川一帯の経済的な成熟が明らかにされている。

また、斎藤善之は、尾州廻船の研究のなかで江戸内湾における拠点であった神奈川の隆盛を、横浜開港場の選定に関連付けた<sup>五七</sup>。移行期に活躍した廻船集団の実績を、後世への影響からも評価しようとする姿勢は、内海船の西国拠点であった兵庫津の繁栄と神戸開港の関係、東廻り航路での買積船から輩出された箱館の名望家の事例など<sup>五八</sup>、斎藤の他の事例研究にも共通するが、本論としては神奈川の隆盛が横浜開港場の成立へ帰着したことが明確に示されている点に注目したい。

開港後の生糸輸送網を、既存の水運のネットワークの延長上に位置付けた高村直助の論考も<sup>五九</sup>、開港前における北関東・江戸・神奈川の物資流通網の発展の延長上に開港場を論

ずる視点に立つものである。神奈川宿を開港の前提となる一帯の中核としてとらえた井上攻の論考も<sup>六〇</sup>、開港前後の神奈川湊・神奈川宿を中心とした既存の地域と開港場の連続的な関係を見出そうとするものである。陸路・海路の結節点であった神奈川に、実際の物資流通のうえで依存していたとみられる幕末の開港場を論ずるうえで、神奈川を視野に入れることはもはや必須ということができよう。

本論も横浜開港場の成立と展開を、開港以前の都市・地域の成熟のうえで捉えようとするものであるが、開港場と周辺の関係を問う上では、石井寛治によって提起された「商人的対応」に関する西向宏介と原直史の研究を方法の参考とした<sup>六一</sup>。

石井寛治は、外庄にさらされた日本における資本主義の成立を、直接的に外庄と対峙する中間層の対応、つまり商人の活動に注目して明らかにする必要を主張し、「商人的対応」というキーワードを打ち出した<sup>六二</sup>。西向宏介は、姫路藩の木綿専売制への産地商人と大坂問屋の対応が、江戸回送を志向する藩の思惑とは反対に、大坂への産物回着量の増加へと帰結したことを示し、幕末における対内的な「商人的対応」として位置付けた<sup>六三</sup>。原直史は、幕末の房総の魚輸送において、網本から独立しつつあり、近代以降の流通の中心的存在となる浜商人（産地の魚商人）が既存の流通秩序から脱しようとする動きを、網本、中継ぎ宿、積み出しの湊、江戸や浦賀などの都市にわたる広汎な血縁関係・人脈によって統制しようとした飯高家の「商人的対応」を描いた<sup>六四</sup>。

移行期における都市・地域について、大局的な動向から吸収や衰退といった影響関係を描き出すのではなく、集団から一家系、一人物にまで迫るスケールから構図を問い直す試みといえる。神奈川と横浜の関係も、経済的な成熟や物流の結節点としての位置を再評価するだけではなく、開港場成立への対応として積極的に位置づけることが可能であると考える。なお、神奈川宿や神奈川湊の成熟のうえに横浜の成立をみる諸論が、その空間に言及する場合は稀であり、復元作業も試みられていない点を付言しておきたい<sup>六四</sup>。

### 4 維新时期社会経済史研究と、江戸内湾における横浜開港場

開港による国内市場の国際的な開放は、維新时期の社会経済史研究において重要な論題であった。開港をきっかけとした物価高騰への反応（攘夷意識の高まり）や産地の再編に関する研究もあるが<sup>六五</sup>、ここでは、とくに江戸との関係を論じたものに注目したい。

佐々木潤之介は、大間々町の藤生家が産業的基盤をもたない経営体制ゆえに生糸価格高

騰と五品江戸回送令から重大な影響をうけ、コスト的に有利な江戸問屋からの仕入れ量が増大したことを示し、「藤生家本店―横浜店」の結合から「横浜店―江戸問屋」の結合への変化、つまり生糸輸出の共謀関係の誕生として位置付けた<sup>六六</sup>。幕府の流通統制と江戸問屋売込商の関係は『横浜市史』の大きな論題であつたが、氏の主張は「江戸系問屋―幕府」と、「売込商―外国人」の対立構造に再考を促すものであつたといえる。

林玲子は、近世後期以降に商圏を拡大した近江の新興商人丁吟を論ずるなかで、江戸系問屋の構成が多数の休み株により変質し、開港期には三井を代表とする旧来の問屋と丁吟を代表とする新興商人によつて占められたことを指摘した<sup>六七</sup>。石井寛治は、林玲子による江戸後期以降の新興商人論と開港場に関する指摘をうけ、引取商が常とした現金決済の背景に三都商人による金融網を想定し、輸入品の流通が江戸を介するものであつたこともあわせ、都市商人の金融網の発達のをこそ成立した輸入貿易（「引取商体制」論）を仮説的に提唱し、横浜開港場と江戸（東京）をまたぐ研究視角を提示した<sup>六八</sup>。

そして、さきにみた吉田伸之の横浜開港と江戸問屋・仲間に関する論考は、横浜開港のもつた江戸への影響が非常に大きく、深いものであつたことを示している。佐々木や石井の提起を踏まえれば、横浜と江戸の都市スケールでの対抗関係を措いたうえで、広く江戸・横浜を包含する領域における動向を論ずることが今後の研究に求められよう<sup>六九</sup>。

幕末の江戸を横浜開港場の成立に関連付けた論考は、江戸を介した村落有力者の結合と横浜開港場の普請事業の関係について述べた阿部征寛<sup>七〇</sup>、御用商人の伊勢屋に関する西川武臣の研究が挙げられる<sup>七一</sup>。また、前に示した中居屋重兵衛の事例研究でも、江戸芝金杉の屋敷で藩産物方との会合をおこなひながら出店準備を進める姿が描かれている。

本論においても都市・農村住人のネットワークを解明することで幕末から明治初頭の動向の解明に臨みたい。また、江戸と横浜の相互関係をより積極的に論ずるべく、開港場の港町としての機能上重要であつた江戸・横浜間の物資輸送を題材としたい。そこで運送の担い手となつたのは江戸河岸<sup>七二</sup>の中枢に住んだ運送業者と、内湾町村の船乗で、後者は江戸・横浜間に限られない、内湾における横浜開港場の成立を評価することにつながると考へる。それは、原直史が提示した複合的地域としての「環江戸湾」における<sup>七三</sup>、新都市横浜開港場の成立を論ずる試みである。

## 小括

以上、「水辺都市」の研究を念頭に、横浜開港場研究を踏まえた論点整理をおこなつた。以下に本論の具体的な課題を列記する。

- (1) 神奈川の住人による横浜開港場の誕生と拡大への対応の解明。その前提として、神奈川の空間・住人の復元をおこなう。そして、神奈川から横浜までの湾を、広域的な空間として、地形と、「場」の生成過程から論ずることを試みる。
- (2) 横浜開港場の都市空間の復元と、そこに形成された新しい都市社会の分析。都市の空間復元は、形成過程の考察から横浜の特徴を明らかにする直接的な課題であるとともに、都市社会を空間に即して理解する枠組みとなる。
- (3) 近代築港事業以前の物流とインフラの、運送の担い手を含めた検討をおこなう。具体的には横浜開港場の限定された船着き場としての波止場を、運送業者や実際の労働者、近傍の都市施設や住人と合わせてその機能を分析し、史的評価を試みる。
- (4) 横浜開港の影響を、江戸・横浜間の舟運を例として、江戸と内湾町村の住人の対応に迫る。これは他方で、流動的で広範に広がる「都市住人」の船乗の都市内への編成過程を論ずる試みであり、(3)で扱った波止場の機能の史的評価に通ずる間でもある。
- ここで、江戸内湾という広大な範囲を念頭におくが、神奈川・横浜の湾とは異なり、具体的な形状の分析ではなく、その中での関係と「場」の形成を論ずる。
- (5) 以上の都市空間と住人、物資流通の幕末から明治前期の状況をもつて、近代築港事業を評価する。

## 四 各章の概要

最後に、本論文の構成を示す。各章はおおむね時系列にそつて並ぶが、幕末から明治初頭を中心にあつかつており、時期は互いに重なり合っている。第一章から第四章は横浜開港場が形成・成熟する過程を近世後期の文脈から考察した論考である。第五章から八章は、より明治中期以降を展望すること意識しており、とくに築港事業の評価をそれぞれの文脈から試みた論考である。

なお、以上の行論では宮本雅明による用語の選択にならつて「港町」を用いたが、以下の本論部分では固有名詞（たとえば「横浜開港場」や「神奈川港、湾中」）をのぞいて前近代

の港町に対し「湊」の呼称を用いたい。それは、文書資料においては専ら「神奈川湊」といった呼び名であることに加え、海域を指すこともある言葉として、「港町」より海を意識的に包含する呼称としてふさわしいと考えるためである<sup>七四</sup>。また、類似した言葉の「港灣」は横浜開港場の港に言及する際に用いた。これは、横浜の港が神奈川を中心とした既存の物流の再編のもとで成立した一方で、より集約的なインフラとしての波止場を有し、近代へ連続する側面を持つと考えるためである<sup>七五</sup>。

## 第二章 近世後期の神奈川—宿と湊—

第一章と第二章では横浜の前提たる神奈川宿・湊を扱った。

第一章は、既往研究と神奈川宿の空間・住人の復元作業から、横浜開港場の選定の前提となった近世後期の神奈川の成熟を論じた。十七世紀前期の近世宿駅文化から約二百年を経た十九世紀の神奈川宿は、宿駅の中核部分のまわりに町場が付随する構成をとっていた。同時に、近世前期の屋敷地割は、街道沿いの両側町という構成を維持しつつも、間口分割や奥行きへの延伸によって変化していた。

本章ではとくに海岸の埋立による屋敷地の拡大に注目した。近世後期までに拡大した埋立地は、旅籠屋においては船着き、海に臨む客席の建設、廻船問屋においては土蔵用地や揚場として利用された。そして、海に近い新地は、流損のリスクの高い土地として帳簿上の面積が半減され、物理的にも段差によって旧来の屋敷地とは区分されていたとみられる。これらは、水辺に寄り添う開発という伊藤の指摘とも、海に沿って宅地が並ぶ宮本の近世港町モデルとも合致するものであるが、近世後期における行楽地、廻船の停泊する湊としての成熟を示す重要な変化であると位置づけた。

## 第二章 開港期の「神奈川港灣中」

第二章は横浜開港に対する神奈川湊廻船問屋の対応を、「神奈川港灣中」とよばれた神奈川から横浜までの湾のスケールから論じた。斎藤善之によって横浜開港場成立の前提として位置づけられた近世後期の神奈川湊だが、その中核たる廻船問屋と横浜開港場の関係はこれまで検討がなされていない。本章では、まず安永期の将軍献上用の鯛を囲う生け簀の設置位置をめぐる争論を題材として、神奈川湊廻船問屋が目光させた海上の空間を水深の情報を変えて検討した。そのうえで、開港前後における外国奉行や瀬戸内の藩専売に対する新規願と横浜での廻漕会社の設立を取り上げ、廻船問屋が開港を機に集荷を拡大させようと積極的な活動し、最終的には横浜へも進出していたことを明らかにした。神奈川の

側から横浜開港場の成立を描く試みであり、広域的な湾の地形とそのなかでの「場」の生成から、廻船問屋と近世湊に不可欠な海上を「空間」として分析する試みである。

## 第三章 横浜開港場の都市形成—地所割り渡し過程と地割から—

第三章と第四章は、他の章であつかう開港後の物流や築港事業の前提となる横浜開港場の特徴を都市の形成過程と、明治初頭までの都市社会の分析から明らかにしたものである。

横浜開港場の形成史は『横浜市史』で詳しく論じられているが、近世都市としての史的位置づけは十分に議論されていない。本章では横浜開港場の形成過程を拝借地所に注目することで出店商・神奈川奉行の双方の文脈から分析し、その史的位置づけを試みた。幕末の新都市横浜の形成過程では、奉行による募集に応じた出店商が、それぞれの人脈を動員して地所の取得をおこなった。一方で奉行は個々の出店商を個別的に、拝借地所の規模や位置を出店商側の選択にゆだねる手法で編成した。

結果として、おおむね均等な間口からなる区画とならんで、関東地方の農村出身者が広大な地所を取得することとなった。横浜開港場はその成立の段階から近世末期の状況を如実に反映し、そこに編成された出店商は個々の力量を発散しうる舞台が与えられたと考えられる。

## 第四章 惣町と交易商—町の変容と売込商仲間から—

第四章は、都市社会における売込商の位置を探るべく、彼らの都市内部での結合を明治初頭まで追跡した。第三章で論じた形成後の横浜について補足的に考察しつつ、吉田による「近代都市」横浜という位置づけの都市内部からの検討を試みた。

万延元年に品目に関係なく売込商全員によって整えられた商法（荷渡所の設置）の整備を端緒とする売込商の結合は、町会所の機能を取り込む側面をもち、構成員が地所拝借人の大半を占めていたことから、惣町の結合に近似的なものであった。そして商法の策定は町を母体とした惣代の主導によっている。これは、外国人への対応や荷主に対する信用確保のために、開港当初の売込商が、惣町の論理を利用したものであったと考えられる。

一方で、地所拝借人に課された家主役の代理人や各町の人足を統括する鳶頭が早くから登場し、地所拝借人も交易の名義貸しや貸家経営に傾斜する者が拡大していったと推測される。これは地所拝借人と出店、または地所拝借人と町中の対応が希薄化する過程と解釈できる。そして、開港から五年ほどで拝借地所には地所拝借人の予備軍ともいえる表店の借家人から、小売りや職人、「日用」層に至るまで多くの世帯が抱えられるに至ったのであ

る。

横浜開港場の都市社会は、構成員たる地所拝借人の性格の変容によって町が虚構と化する。一方で、惣町の論理に依拠した売込商の仲間を土台として一部の売込商が成長していき、明治初頭には売込商ヘゲモニーが確立していくことを仮説的に展望した。

## 第五章 横浜開港場の波止場―移行期の港湾インフラと物流―

第五章と第六章では、横浜の水辺に注目した論考である。第三章と第四章が日本人町の中心部分(有力な交易商の集まった本町通りや弁天通り)を主としてあつかったのに対し、日本人・外国人の荷物が出入りした波止場と、明治初頭に造成された日本人町の埋立地について、築港事業の寸前までの変遷を追跡した。

第五章は横浜開港場の物流の中核としての波止場の性格を運送の担い手の分析から論じた。物資流通の統制のために唯一の船着き場となった波止場は、周囲の海岸の船着き機能を否定することで成立した。そこには物資の運送を独占的に仲介する集団(運送方・人足方・水主方)が成立し、明治初頭までの運送を支える。とくに日本人荷物の運送を担った「運送方」のなかには、明治期以降に蒸気船の運航を開始し、明治中期まで営業を継続するものが少なくない。

波止場の運送業者から明治以降に実業家が輩出された要因は、当時としては巨大で着岸性能の優れた設備であつた点と、幕府の開港場支配に位置付けられた独占的な立場、個々人が海岸を持たなかつた交易商の代理人としての位置、そして運送業者自身による新しい関係の構築にあつたと考えられる。波止場は、封建的インフラとしての側面と、そこに定位された集団の蓄積・成長の場となつた側面を併せ持ち、近世・近代の中間に位置付けうる港湾インフラであつたと結論づけた。

## 第六章 海岸の民有地化と成熟―近代築港計画空間史序説―

第六章は横浜開港場の海岸の変化を幕末から明治前期まで論じ、海岸が内国荷物の流通の中核として成熟する過程を説明することで、第一次築港事業(鉄製栈橋、防波堤、馴導堤からなる本格的な築港事業)の評価を試みた。

安政六年の地所割り渡し後の海岸は、運送方や芝居小屋、茶屋や興行地として活用されていたが、慶応二年末の大火をうけた外国との条約に基づき、幅十間の新海岸通り(環状道路の一角)が造られた。これは開放的な海岸通り(バンド)に類するものであつたが、その直後の明治三年には七千坪を超える外国人向けの貸庫用地が誕生した。そして広大な

倉庫用地は明治六年に三井組へと払い下げられる。

三井組のもとで倉庫用地には改修が施され、倉庫の付随する物揚げ可能な海岸が明治十年ごろには成立したとみられる。くわえて、倉庫用地の隣に明治五年には波止場が新設され、明治六年には蓬萊社による埋立地が完成するなど、日本人町の海岸全体が新しい民有地で満たされることとなった。そして、内国荷物の流通の中核として、巨大な「波止場」と化していく。

本章は、こうした過程を経て成熟した海岸と、明治二十九年の第一次築港事業の関係について、事業に付随する海岸の鉄道敷設案をめぐる争論を再読し、都市空間の文脈から築港事業を評価することを試みた。

## 第七章 鉄道開通と神奈川―近代化事業と「伝統都市」―

第七章は、横浜開港場が神奈川までの湾へ拡大していく過程、つまり湾全体が港湾と化する過程の端緒として鉄道開通事業に注目し、神奈川の住人の対応を検討した。

明治四年に完成した東京・横浜間の鉄道は、横浜から神奈川までの区間において、湾を横断する長大な埋立地(高島町)をともなつて成立した。本章は、高島町の形成が神奈川へ与えた影響を、主に沿海部について検討した。馬車の通行可能な高島町の誕生と、明治七年に誘致された横浜遊廓は、迂回路を介していた神奈川と横浜の距離を縮めた。そして神奈川湊の廻船問屋・仲買や飯売旅籠屋が、高島町やそれに続く埋立地(宮洲町・瀧下町、七軒町代地)へ進出したことも相まって、和船の停泊域を囲む横浜から神奈川までの海岸が、新しい水際空間として機能するようになったと考えられる。

「現代都市インフラ」の鉄道が、「伝統都市」たる神奈川を破壊しつつしたわけではなく、神奈川の住人側の主体的な対応、とくに第一章でみられたような伝統的な海岸の再生産として認められることが重要である。また、第二章でみた停泊域としての神奈川の海は、第一次築港事業に伴う馴導堤(河口と港区を分ける堤防)によって分断された後も存続した。そして、馴導堤を基準に拡大する埋立のなかで、明治初頭に誕生した埋立地の海岸は碇泊域とともに昭和初期まで機能を存続させるのであつた。

## 第八章 江戸内湾における横浜開港場―運送方と最寄船乗―

第八章は、江戸内湾に目を向け、江戸(東京)と横浜開港場の舟運の担い手について考察を加えた。とくに、交易の発達とともに両都市間舟運が拡大していくなかでの江戸の運送業者と、広義の横浜開港場住人とも呼びうる船乗の動向を明らかにした。

江戸は、出店商の本店の所在地として、荷主の居所として、五品回送令の下での物資中継地として、輸入品の国内流通の中継地として重要な位置にあった。そして江戸と横浜開港場の間は、交易の拡大に従って舟運が盛んになっていく。その舟運を支えたのは、第五章で検討した横浜の運送方、「江戸河岸」の中核である小舟町・小網町の住人を中心とした江戸の運送方、内湾に叢生した海付村落を出身とした船乗であった。東京・横浜ともに明治以降は運送方の人数が拡大し、船乗の参入も拡大していったとみられる。

横浜の運送方は、明治初頭から船乗を掌握しようと努め、明治十二、三年の運送船夫組合と横浜運送方の契約をもって、両者の結合は（おそらく前者が後者に半ば従属する形で）強まった。そして、こうして拡大していった両都市間舟運の秩序が、築港論争のなかで課題とされた波止場の規模を補完したことを指摘した。

## 結章 近世近代移行期の湊と「港湾都市」によって

小括で示した課題のうち、(1)に第一、二、七章、(2)に第三、四章、(3)に第五、六章、(4)に第八章がそれぞれ対応する。結章では、各章で得られた理解を踏まえて横浜の事例における湊と、陣内秀信のいうところの「港湾都市」の関係を整理した。

始めに第三、四章から横浜開港場の史的な位置づけを試み、第一、二、七章と第八章から横浜開港の広域的な影響、相互関係をみたうえで、第五、六を交えて築港事業以前におけるインフラの史的展開をみた。そして、第一次築港事業が持った特質を、港湾に都市の論理が色濃く影響している段階における、前時代的秩序の温存と漸次的な更新に求めた（⑤の課題）。

- 一 石井寛治『近代日本とイギリス資本 ジャーディン・マセソン商会を中心に』東京大学出版会、一八八四年。
- 二 吉田伸之「伝説都市の終焉」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座7 近世の解体』東京大学出版会、二〇〇五年。
- 三 宮本雅明『都市空間の均質化と近世都市の建設』中世都市研究会編『都市をつくる』新人物往来社、一九九八年。宮本雅明「中世港町の空間とその近世化」および「近世港町の都市空間」宮本雅明『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年。
- 四 宮本雅明「日本型港町の成立と交易」（歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』青木書店、二〇〇六年）、宮本雅明「近世都市の歴史・空間・景観」（『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年）。

五 伊藤毅「水辺の空間—都市と建築—」伊藤毅・吉田伸之編『別冊都市史研究 水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。

六 陣内秀信・岡本哲志『水辺から都市を読む—舟運で栄えた港町』法政大学出版部、二〇〇二年。

七 陣内秀信「水都学」をめざして」陣内秀信・高村雅彦編『水都学1 特集水都ヴェネツィアの再考察』法政大学出版部、二〇一三年三月。

八 伊藤毅「港町の両義性—宿根木の耕地と集落」伊藤毅・吉田伸之編『別冊都市史研究 水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。

九 東京大学稲垣研究室『近世の遺構を通して見る中世の居住に関する研究』新住宅普及住宅建築研究所、一九八五年。

一〇 陣内秀信「世界の港町に関する発展・衰退・再生のメカニズム比較」（『水都学4 特集水都学の方法を巡って』二〇一五年六月）および、「港町から港湾都市へ、そして新たな水都へ」（『水都学5 特集水都研究』二〇一六年三月）。

二 斎藤善之は、十九世紀初頭に台頭した新興の廻船集団である内海船の盛況を、農民的商品生産と消費文化の成熟という大きな変動へ対応し、地域市場を結合するのにふさわしい経営体制（買積方式）に求めた（斎藤善之「菱垣・樽廻船と内海船」吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。原直史は、地域の流通が前時代的な問屋や村落の枠組みと共存しつつも新たな勢力が誕生した状況を分析する必要があると主張し、個々の運送の担い手（旧来の問屋も新興商人も含め）の直面した営業上の課題を明らかにしながら、対抗や共同が具体的に意味するところを一貫して追求した。そのなかで、叢生する生産者に対応してひろく地域に成立した運送の実際の担い手が追求されている。研究対象として本論と具体的に関係する点として、江戸内湾の多数の運送業者の存在（駄賃稼ぎや船稼ぎの者）の指摘、具体的な活動の復元が重要である。（原直史『日本近世の地域と流通』山川出版社、一九九六年）。

三 藤田寛編『日本の時代史17 近代の胎動』吉川弘文館、二〇〇三年。

四 松浦茂樹『明治の国土開発史』鹿島出版会、一九九二年（第六章）。

五 稲吉晃「海港の政治史 明治から戦後へ」名古屋大学出版会、二〇一四年。

六 吉田伸之「高輪海岸 現代都市インフラの起点」伊藤毅・吉田伸之編『伝説都市3 インフラ』東京大学出版会、二〇一〇年。

七 松山恵「東京市区改正事業の実像—日本橋通りの拡幅をめぐって」松山恵「江戸・東京の都市史 近代移行期の都市・建築・社会」東京大学出版会、二〇一四年。

八 中川理「京都と近代 せめぎ合う都市空間の歴史」鹿嶋出版会、二〇一五年。また、中川理編『近代日本の空間編成史』（思文閣出版、二〇一七年）の序文。

九 吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。横山百合子「明治維新と近世身分制の解体」山川出版社、二〇〇五年。松山恵「江戸・東京の都市史 近代移行期の都市・建築・社会」東京大学出版会、二〇一四年（序章）。佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊廓社会2 近世から近代へ』吉川弘文館、二〇一四年（佐賀朝による序論および第二章「居留地付き遊廓」）。

一九 稲吉晃「不平等条約の運用と港湾行政」首都大学東京法学会編『法学会雑誌』（一篇目が四六一、二〇〇六年一月、二編目が四七一、二〇〇六年七月）。

二〇 岩本馨「日本近世都市史」『都市史研究』第一号、山川出版社、二〇一四年十一月（小特集「都市史の現在1」に収録）、高橋元貴「学界展望 江戸の都市史」『建築史学』第六六号、二〇一六年三月。

二一 野口徹「都市と建築の発達Ⅱ 竹原」『日本近世の都市と建築』法政大学出版局、一九九二年。

二二 高橋元貴「江戸市中における堀川の空間動態とその存続」『江戸町人地に関する都市史的研究 道・堀川の維持と存続をめぐる』（二〇一六年度東京大学学位論文、のち「江戸市中における堀川の空間動態とその存続——古町之川岸の川渡を通して——」『都市史研究』第四号（二〇一七年十一月）。

二三 吉田伸之「紀州蜜柑問屋の所有構造——蜜柑揚場と手付仲買」吉田伸之編『流通と幕藩権力』山川出版社、二〇〇四年。「市場社会論」は、吉田伸之「都市の「空間」 日本近世の巨大都市と市場社会」『歴史学研究』第六二二号、一九九〇年十一月。

二四 原直史『日本近世の地域と流通』山川出版社、一九九六年（第三部）。

二五 吉田伸之「御蔵米」と江戸の湊『都市史研究』第三号、二〇一六年。「前期的」とは、浅草御蔵が運送集団の集結や中型船の入り込む入り堀を有しつつも、まったく幕府権力のための設備でしかなかったことによっている。

二六 吉田伸之「流域都市・江戸」伊藤毅・吉田伸之編『別冊都市史研究 水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。

二七 産地側からみた江戸までの舟運への注目、吉田伸之「佐倉炭荷主と江戸問屋」（近藤和彦・伊藤毅編『別冊都市史研究 江戸とロンドン』山川出版社、二〇〇七年十二月）にもみられる。

二八 原直史は、流通をその担い手を含めて考察する必要性を提起している（前掲書注二四）。

二九 岩本馨「近世都市空間の関係構造」吉川弘文館、二〇〇八年（序章）。

三〇 伊藤毅「領域史への視点、領域史の方法」日本建築学会『建築雑誌』第一三〇集一六七一号、二〇一五年五月（特集「都市史から領域史へ」のインタビュー記録）。

三一 前掲書注六、陣内秀信・高村雅彦編『水都学3 特集東京首都圏水のテリトリー』、二〇一五年二月。

三二 肥塚龍「横浜開港五十年史」上・下巻、一九〇九年。

三三 横浜貿易新報社『横浜開港側面史』、一九〇九年。古老への聞き取りを収録した書籍である。

三四 横浜市『横浜市史稿』（横浜市役所、一九三二—三三年）。とくに産業編（一九三三年）や風俗編（同年）には、所在のわからなくなっている横浜開港場周辺の都市史に係る資料が収録されており貴重である。ただし、市史稿の記述については明治期の回顧録である「横浜沿革誌」の無批判な活用や、推定の根拠が不明で、他の資料から否定されるような叙述も含まれていることが指摘される（斎藤多喜夫『横浜もののはじめ物語』有隣堂、二〇一七年）。

三五 藤本実也『開港と生糸貿易』（開港と生糸貿易刊行会、一九三九年）。とくに中巻に横浜生糸売込商に関する多くの資料や考察が収められている。

三六 とくに幕末の開港場に関する問題は、横浜市『横浜市史』第二巻（一九五八年）。開港場の成立から交易商の分析、居留地の成立、外交問題を広く扱う。

三七 松本四郎「維新変革期における経済的集中」『歴史学研究』第三二九号、一九六七年十月。また、その改稿の松本四郎「市場構造の変化と商業金融——幕藩制の経済構造の瓦解と転成の道筋」（『幕末維新期の都市と経済』倉書房、二〇〇七年）。

三八 石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』（東京大学出版会、一九八二年）、石井寛治前掲書籍（注一）。巨大商社との力関係が不均衡であるために、売込商が外国商館の買弁とされる危険はつねにあったものの、石井の分析したジャーディン・マセソン商会による前貸は一八六四年度には挫折し、おりしも五品江戸回送令が撤回されたことをうけて売込商の国内的な立場も向上しつつあったという。

三九 前掲書注一。

四〇 西川武臣「幕末明治の国際市場と日本 生糸貿易と横浜」雄山閣、一九九七年。

四一 斎藤多喜夫「開港時の横浜商人——御貿易場瓦版から——」『横浜開港資料館紀要』第二〇号、二〇〇二年三月。同論文の具体的な行論についての筆者の立場は第三章注四にて述べた。

四二 石井孝編『横浜売込商 甲州屋文書』有隣堂、一九八四年。

四三 吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。とくに、移行期における変動の主体や、それへの対応については、斎藤善之「菱垣廻船・樽廻船と内海船 幕藩制流通構造解体過程と海運集団」、原直史「近世両総地域における物流の構造——九十九里産魚肥と年貢米を中心として」、中西聡「場所請負商人と北前船——日本海海運史研究序説」。

四四 前掲論文注二。

四五 前掲書注三六（第二編四章一節）。

四六 西川武臣「幕末から明治初年の横浜市街地と町政」『駒沢史学』第四六号、一九九三年十二月。

四七 前掲書注三六（第二編四章一節）。

四八 佐藤孝「地域社会と新聞——幕末開港場の新聞を中心として」『シリーズ日本近現代史 構造と変動 1 維新変革と近代日本』岩波書店、一九九三年。

四九 青木祐介「幕末・明治初頭の横浜」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市1 イデア』東京大学出版会、二〇一〇年。

五〇 斎藤多喜夫「幕末期横浜の都市形成と太田町——太田屋新田西部地区造成関係資料を中心に——」『横浜開港資料館紀要』第四号、一九八六年三月、高村直助「二つ目沼埋立て伊勢佐木町の誕生」（『横浜市歴史博物館紀要』第二二号、二〇〇七年三月）。

五一 西川武臣「幕末から明治初年の横浜市街地と町政」『駒沢史学』第四六号、一九九三年十二月、西川武臣「幕末の横浜市街地の住民構造」『横浜開港資料館紀要』第一四号、一九九六年三月。

五二 西川武臣「明治初年の神奈川県の無宿人対策」『横浜開港資料館紀要』第三号、一九八五年三月、西川武臣「幕末・明治初年の東京（江戸）・横浜間の水運について——和船から蒸気船へ——」（横浜開港資料館・横浜近世史研究会編『一九世紀の世界と横浜』山川出版社、一九九三年）や高村直助「水

上のシルクロード」(前掲書注四三)では、開港場の運送集団に関する言及がみられるが、その業務内容に考察を加えるものではない。

五三 前掲書注三六。また、開港前後の外交政策を連続的に把握しようと試みた上白石実『幕末期対外関係の研究』吉川弘文館、二〇一一年。

五四 東京都公文書館『都市紀要二十五 市区改正と品海築港計画』(一九七六年、藤森照信『明治の東京計画』(岩波書店、一九八二年、第三章二節)、横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜』(横浜市ふるさと歴史財団、二〇一四年)など。

五五 内海孝『横浜築港史論序説―産業資本確立期を中心に―』『郷土よこはま』第八八・八九号、一九八〇年十一月。

五六 西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院、一九九三年。

五七 斎藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房、一九九四年。第三章。

五八 斎藤善之『東廻り航路と奥筋廻船』(前掲書注一一)。

五九 前掲高村直助論文(注五二)。

六〇 井上攻『宿場世界の多様性と広がり―近世後期の神奈川宿―』『交通史研究』第八二号、二〇一四年二月。

六一 前掲書注一。

六二 西向宏介『幕末期姫路木綿の流通と大坂問屋資本』大阪歴史学会編『ヒストリア』第一三三号、一九九一年十二月。

六三 原直史『近世両総地域における物流の構造』(注四三参照)。また、前掲書注二四。

六四 斎藤善之は、聞き取り調査から内海船との密接な関係をもった紀伊国屋三郎兵衛の屋敷地一を推定している(前掲書注五七)。

六五 宮地正人『幕末政治過程における豪農商と在村知識人―紀州日高有田両郡を視座として』『シリ―ズ日本近現代史 構造と変動1 維新変革と近代日本』岩波書店、一九九三年。石井寛治『維新変革の基礎課程―対外的契機と「編成替」―』『歴史学研究』第五五四号、一九八六年五月。

六六 佐々木潤之介『幕末社会論―「世直し状況」研究序論』塙書房、一九九九年(ⅡB「幕末期、売込商の性格」)。

六七 林玲子『呉服方の動向』財団法人近江商人郷土館・丁吟史研究会編『変革期の商人資本―近江商人丁吟の研究』吉川弘文館、一九八四年(第二章五節)。

六八 前掲石井寛治論文(注六五)。

六九 むろん、江戸全体と横浜全体の対抗関係を措いても、江戸の内部や産地周辺にはそれぞれ対抗関係が想定される。この点には十分には論じられていないので今後の課題としたい。

七〇 阿部征寛『幕末期の名主の動向』横浜近世史研究会『幕末の農民群像―東海道と江戸湾をめぐる―』横浜開港資料館・横浜開港資料普及協会、一九八八年。名主層の情報網を既往研究や日記資料によって解き明かしながら、横浜開港場の波止場普請との関係まで論じており、注目される。

七一 前掲書注四〇。第一章一節。

七二 前掲論文注二六。

七三 前掲書注二四(第三部「まとめと展望」)。産地と中継地、湊にそれぞれ展開した運送集団による新たな流通の展開を考えるうえでは、湊とその後背の地域市場(そこにはそれぞれ運送集団が想定される)を横断して結ぶ江戸湾の蓄積を想定する必要を喚起し、その複合的なまとまりを氏は「環江戸湾」と称した。

七四 市村高男は、古代・中世の港湾や港町を示す言葉としての「津」と「湊」に言及し、「津」が「わたしば」や「ふなつき」を主要な語義としたのに対して、「湊」の本義は「水のあつまるところ」であり、河口の「みなと」であることを指摘した(市村高男「中世日本の港町―その景観と航海圏―」歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』青木書店、二〇〇六年)。近世において「湊」は港町を示すとともに、海域を指すこともあり、たとえば第二章で扱った資料では「大海と違イ湊之儀二付(資料2)」という用法がみられる。この場合の「湊」は大海との対比で入江状の海という意味であろう。

七五 吉田伸之が近代の「港湾」として使用することにあらわれているとおり(注二五)、「港湾」の用語が近代的なイメージを持つことは同意が得られると思われる。なお、神奈川・横浜の一带においては、横浜開港以降に資料中で「港」の文字が登場する(「御開港場」や「神奈川港」、「神奈川港湾中」など)。明治以降に「港」がよく用いられることとあわせ、「湊」と「港」の語の利用は興味深い間であるが、今後の課題としたい。



## 第一章 近世後期の神奈川―宿と湊―

## 一 問題の所在

本章では、横浜開港以前よりの地域の中核であった神奈川について、近世後期の社会状況の概略と、空間的な成熟を論ずる。近世神奈川の概略としては、井上攻による論考が挙げられる。宿、湊、寺社といった都市的要素の列挙から神奈川宿が論じられており、宿駅論を脱し地域の中核として論ずる必要を主張している。

個別研究としては、論集『東海道神奈川宿の都市的展開』がまず挙げられる。中世の神奈川にも視野を広げつつ、神奈川の宿駅、御殿、街道筋の文化、湊を扱った各論を収録する。くわえて、東側の神奈川町を中心に論じた井上攻の書籍があり、同書の序文は都市としての神奈川宿に関する情報を網羅した重要な成果である。

一方で流通史においては、青木町の住人であった廻船問屋・仲買を中心とする神奈川湊が研究対象とされてきた。廻船問屋や仲買が持った特権的立場を解き明かした西川武臣の論考<sup>四</sup>、江戸内湾における尾州廻船の拠点として神奈川湊の隆盛を論じた斎藤善之の論考<sup>五</sup>、資料の極めて少ない神奈川湊の貴重な成果である。また、神奈川湊に陸揚げされた下り塩の輸送については、井上攻が長尾村（現神奈川県川崎市）の日記から考察を加えている<sup>六</sup>。

近世神奈川に関する研究の蓄積は以上の通りだが、神奈川町を対象とした東海道神奈川宿の個別研究も、廻船問屋・仲買を中心とした神奈川湊の研究も、神奈川という都市の全体像からは離れてしまい、井上による概論も、「宿場町Ⅱ宿駅」という視野に対する問題提起を脱するものではない。都市の分節的な把握から、神奈川に関するやや詳しい概論が必要であると考えられる。宿駅にとどまらない複数の機能をもった都市であるからこそ、空間に即した整理が有効なのではないだろうか。

そこで以下では、変則的ではあるが、はじめに本論の対象である都市神奈川の概略を既往研究といくらかの資料から論じ（第二、三節）、そのあと、屋敷地の変化を軸にして近世後期の神奈川の都市空間について考察を加えたい（第四、五節）。

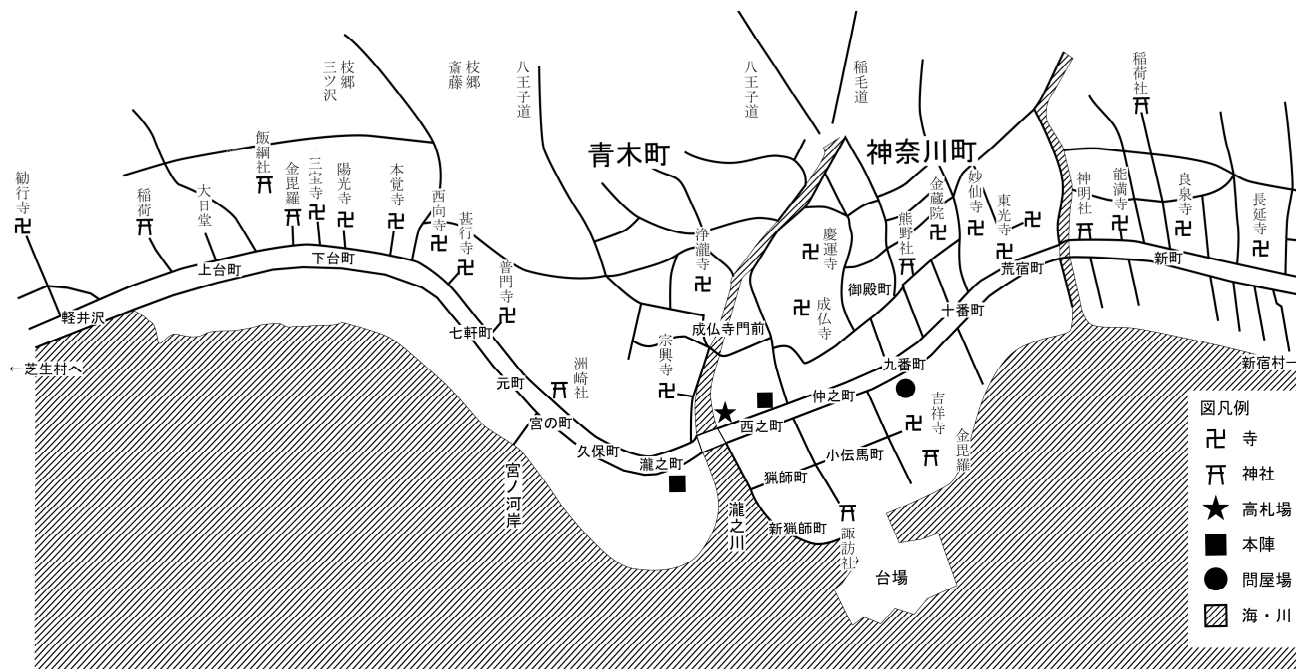


図1 神奈川宿の概要 万延～文久期「東海道神奈川宿絵図面」（横浜市『横浜市史稿』附図に収録）をもとに作成。

## 二 神奈川宿の概要

### 1 中世の神奈川

少なくとも戦国末期以来の宿駅であった神奈川は、慶長六（一六〇一）年の宿駅設定後、近世宿場町となる<sup>七</sup>。福島金治によれば中世期の街道は小机の城塞へとつながる瀧之川沿いの道と神奈川町の往還からなっており、神奈川町から青木町へと東西に伸びる近世の街道とは異なるものであった。そして、寺院の開基年代から中世の市街地は神奈川町から青木町の東側までであった<sup>八</sup>。

一方、青木町から本牧の山々にかこまれた内海は、中世以来風おだやかな停泊場であった<sup>九</sup>。これが神奈川湊である。宮の河岸、瀧之川、帷子川河口（芝生村の南、後掲図3参照）が船着き場で、それぞれが別個の領主・交易圏と関係づけられていたという<sup>一〇</sup>。市村高男による中世湊のモデルを参照すれば<sup>二</sup>、街道筋の町場と分散した船着き場からなる中世都市神奈川の姿が想定される。

### 2 近世後期の住人と生業

宿駅としての神奈川の社会構造は深井甚三によつて整理されている<sup>三</sup>。神奈川宿は東の神奈川町と西の青木町からなり、それぞれは複数の町組（小名）から構成された。町組は年貢徴収の単位となり、葬儀や祭礼の単位でもある近隣共同体として、生活に深く関係したという。

神奈川宿の概略を伝える資料は、近世後期に編纂された「東海道宿村大概帳」<sup>三</sup>と、安政二年「武州橋樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」<sup>一四</sup>、年代不明だが、近世中期作成とみられる「宿鑑」の写しが残る<sup>一五</sup>。

安政二年「武州橋樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」によれば、人口は両町合わせて男三二七四人、女三二五四人、家数は一四七七軒であった。馬は四三疋飼われていた。家持・借家人の比率は明らかではないが、宝永二年には一〇八八軒中、約半数の四九〇軒が借家世帯であった。

神奈川町には安政六年の人別帳が残されており、井上攻が町組ごとの住人構成を整理している<sup>一六</sup>。全体の軒数・人口のなかで（九〇四軒、三七三一人、

本町（西之町・仲之町・九番町・十番町）に軒数・人口の三分の一ほど（二九一軒、一三八二人）、続いて獵師町（一五五軒、七〇二人）、小伝馬町（六三軒、一三五人）・荒宿（一〇四軒、四三二人）・新町（二三二軒、五〇八人）までを含めれば七四五軒、三一四八人となり、八割を占めることとなる。地借・店借は本町（地借五一軒、店借一三〇軒）・荒宿（六軒、四七軒）・新町（二軒、五九軒）が多く、東海道沿道の特徴となっている。

残る人口は寺院の門前町と農村部のものである。東海道の北側に立地した寺院のうち、朱印地を有した成仏寺・慶運寺・金蔵院・妙仙寺には門前町があり、本町や荒宿町、獵師町とともに人別把握の単位となっていたことが指摘される。また、寺院と門前住人の関係も密接であった<sup>一七</sup>。なお、青木町の人別帳は確認されないが、浄瀧寺・宗興寺・甚行寺・西向寺は所持する土地に地借の居住者を抱えていたことがわかる<sup>一八</sup>。

とはいえ、安政六年の人別帳によれば、寺院の門前町は成仏寺門前（三八軒、一四三人）が最大で、金蔵院門前（二五軒、八八人）、慶運寺（一八軒、八二人）妙仙寺門前（九軒

表1 成仏寺門前の農間渡世と世帯(明治2年12月調べ)

渡世内容	人名	男	女	下男・下女	計	備考
農業渡世	忠七	1	1		3	
菓子渡世	新兵衛 午三月長次郎	1	1		3	
蕎麦屋渡世	岩次郎		2		3	新兵衛店
榎木・材木	半右衛門	1	2	下女1	5	
瀬戸物	松五郎	2	2		5	
韓物・青物	又吉	4	3	召使男2、女2	12	
材木	治郎兵衛		2	下男1、下女1	5	
穀物・肥料	清八	2	3	下女1	7	
水油	作十郎 午三月安之助	2	1		4	清八店
手間稽古	藤兵衛		1		2	清八店
農業	松五郎	2	2		5	
農業	藤七	1	1		4	
下駄屋	庄兵衛	2	2		5	久蔵店
春米	卯之助	2	1		5	
八百屋	米次郎	1	1		3	卯之助店
菓子	長次郎	1	2		4	卯之助店
春米・荒物	浅次郎	1	2	下男1、下女1	6	
糒	勘七		4	下男1、下女1	7	
湯屋	与兵衛	2	4	下男2	9	
麩・蒟蒻	文吉郎	1	2	下男19、下女2	25	吉五郎家守
八百屋	政吉	1	5	下男3人	10	利兵衛地借
八百屋	豊吉		1		2	政吉店
大工	利兵衛	1	3		5	
桶職	平藏	3	3	下男2人	9	
樽屋	銀藏	2	2		5	喜八店
往還渡世	芳松		1		2	喜八店
往還渡世	松五郎	1	2		4	喜八店
荒物	金三郎	3	3		7	
酒屋	長兵衛		4	下男2、下女1	8	
砂糖・春米	政吉		1	下男2、下女1	5	源三郎地借
農業	治郎吉				1	
農業	留次郎	3	2		6	
往還渡世	八五郎	1	2			留次郎同居
石工	文右衛門	2	4	下男4、下女1	12	
飴屋	重藏		2		3	権八店
蕎麦屋	吉五郎		1		2	権八店
八百屋	六兵衛		1		2	権八店
米穀・薪	五右衛門	6	3	下女1	11	権八店
鉄物小売	与四郎	3	4	下男1 下女1	10	
雑穀・荒物	名主源七		3	下女1	5	
髪結	銀次郎	2	2		5	
菓子	久太郎					銀次郎店カ
医師	秀哉		1		2	源七店

[典拠] 明治二年「御触書並用留帳」(神奈川町藤井家文書、請求記号 2200465016、神奈川県立公文書館所蔵)。

三三人」と続くもいずれも大規模な町場ではない。成仏寺門前名主の藤井家文書から補足すれば、文久三年の調べでは、家数二三軒（家持の数か）、土蔵一三か所、借家一三軒であった<sup>二九</sup>。明治二年時点での生業も明らかとなる（表1）<sup>三〇</sup>。

宿全体の生業に関しては、安政二年「武州橘樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」に記載がみられる。東海道の旅人相手の休泊・酒食、諸国廻船の荷物を扱う廻船問屋・仲買、彼らから物品を買い取る小商いの者、または手船により内海運送を行う者、「往還稼」に頼る多くの男女がいた。

旅人相手の酒食は天保九年の申し渡しに連印したメンバーが参考になる<sup>三一</sup>。申し渡しの内容は天保の飢饉を背景とした食物の価格高騰を抑えるため、いたずらに手間をかけること、高値での販売、新規開業を禁じたもので、旅籠屋、茶屋、菓子屋、店借の屋台店、そばや、水菓子屋、煮売が連印した。品川歩行新宿の疑似遊郭を論じた吉田伸之の指摘に依拠すれば、飯売旅籠・茶屋に付随するように、店借層による小規模な関連業が存在したといえる。

つぎに、男女ともに従事した「往還稼」とはどのような生業であろうか。井上攻が紹介した天保飢饉時の例がヒントとなる<sup>三二</sup>。神奈川町名主の石井家による日記を扱った井上攻は、天保の飢饉による米価高騰時の救済について、①品川宿から藤沢宿までの宿が共同して人馬賃金の値上げが実施されたこと、②困窮人への救済に加えて「御伝馬馬持共」へ大豆が配布され、粉めかの安売りが春米屋に命ぜられたこと、③「御伝馬役・歩行役之者」が困窮しているとして、合力が要求されたことを明らかにした。三つ目の合力対象の人びとは、役の負担者ではなく役を実際に勤める人びとであろう。

ただ、役を勤める者について、家持との間の関係、たとえば請負人の存在などについてはよくわからない。安政六年の人別帳によれば神奈川町には二五疋の馬があり、斎藤分の五世帯に各一頭、本町宗兵衛（熊野社の南側、図5参照）の世帯に二〇疋が登録されている<sup>三三</sup>。馬はいずれも「宿内抱」と注記され、伝馬役負担の際に駆り出されたことが推測される。神奈川町の馬の大半を抱えた宗兵衛は、伝馬役の請負を行っていたとみられる<sup>三四</sup>。「往還稼」とは、伝馬役を実際に勤める労働者であったといえる。成仏寺門前にも「往還渡世」が確認されるが（表1）、東海道の沿道には、一層多くの往還稼ぎの者がいたことは想像に難くない。

## 三 神奈川の分節構造

### 1 役負担から見た宿駅の中核と周縁

宿の役負担は町組で分割されていた。資料1・1は、獵師町・小伝馬町の魚問屋四人と仲買二四人が新町の魚商いを相手に出訴したことに対する新町の与平次の応答の一部（文政十二年二月十四日）である。

【資料1・1】<sup>三五</sup>

（前略）

一、小伝馬町之儀者、追々家数相増候間、宿役勤度旨、先達而申上候得共、御伝馬百疋者神奈川本宿・青木町二而相勤、人足百人者本宿之内当町・荒宿、青木町之内台町二而相勤、夫々割合も有之候間、宿役百疋・百人之内江者難差加趣二而、往還小役等相勤候由二候得共、獵業之渡世二拘り候儀二者無之、既二獵師町者一向宿役等相勤候儀も無御座候

（後略）

伝馬役百疋が神奈川宿本宿と青木町、人足役百人が新町（当町）・荒宿・台町に割り当てられ、人口が増加しつつあった小伝馬町に新しく往還小役を負担させるようになったという。「宿鑑」から軒数に関する記述をみると、神奈川町本宿で馬役五〇疋<sup>三六</sup>、歩行役五〇人<sup>三七</sup>、一五九軒、青木町は馬役五〇疋<sup>三八</sup>、歩行役五〇人<sup>三九</sup>、九二軒であった。「本宿」とは荒宿や新町、小伝馬町を除く部分、つまり「本町」に該当すると考えられる。

安政二年「武州橘樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」に付された往還の町並み図をみると、神奈川町・青木町ともに瀧之川周辺に旅籠屋が集中し、東西の縁辺には茶屋が分布していたことが明らかとなる。表2は、町並み図に載る旅籠屋について、「金川日記」の安政四年の祝儀記録から町組を特定したものである<sup>四〇</sup>。旅籠屋が西之町・仲之町・九番町・十番町からなる本町に集中していたことがわかる。

旅籠屋について、天保九年の連印と安政二年の町並み図を参照して、安政六年の人別帳から把握できた限りでリスト化した（表3）。家持が多数を占め、家内に食売女を抱える者が確認される。ただし大半の持高はわずかなもので、伝馬役の負担は旅籠屋と飯売渡世の利潤から賄われていたとみてよい。下男・下女の人数は、「大旅籠」とされ、十人ほど抱えていた新羽屋や大米屋が筆頭となっているが、半左衛門店の清次郎のように地借人でも多

人数を抱えている。世帯の合計人数はおおむね十人前後であった。

一方、青木町も第五節の復元から、瀧之町・久保町・宮之町に旅籠屋が集中していたことが明らかとなった（表6、図7）。神奈川町の本陣が西之町、青木町の本陣が瀧之町、問屋場が九番町に立地したことから考えて、宿駅としての神奈川は、瀧之川を中心とした部分であったといえる。伝馬役屋敷と徒歩役屋敷の区分にも対応していたといえる。

旅籠屋の集中した中心部分に対し、神奈川町本町の東には荒宿、新町が、北には門前町と御殿町、南には小伝馬町、獵師町が付随した。それぞれ本町とは別に組頭が置かれ、人別帳の記載も別であることは井上攻の指摘のとおりである。青木町の町組の構成については、明治五年の記録と年欠の記録から、瀧之町・久保町・宮之町・元町・七軒町・下台町・上台町・軽井沢にそれぞれ組頭がいたことがわかるが<sup>20</sup>、江戸時代の状況や変遷は不明である。ただ、資料1・1によれば伝馬役負担の「青木町」と徒歩役負担の「台町」が別々に把握されていたことを示している。台町は宿駅の中核から外れた位置にあったことが推測され、中世における町場から台町周辺が外れていたことと無関係ではなからう。

青木町の西のいずれの台町は、下台町と上台町からなり、西側に枝郷である軽井沢が続いた。下台町は後述する通り神奈川湊廻船問屋の拠点であった。上台町には、袖ヶ浦と呼ばれた内湾の景観を一望できる茶屋が並び、浮世絵の題材となる名所であった。同じく茶屋の並んだ神奈川町東の荒宿・新町・並木町と対称をなしており、一方は江戸からの入り口という立地を、もう一方は江戸内湾を見渡す高台の景色を武器として宿駅の周縁部を彩ったといえる<sup>21</sup>。

表2 旅籠屋の所在（西から東への順番）

No	陸側	小字	No	海側	小字
1	新羽屋源兵衛 食売持（大）		1	大米屋佐七（大）	西之町（佐吉）
2	本陣 石井源左衛門	西之町	2	市原屋平右衛門 食売持	西之町
3	清水屋儀左衛門 食売持		3	住吉屋庄吉 食売持	西之町
4	小倉屋長三郎 食売持	西之町	4	青柳屋長兵衛（小）	
5	秩父屋武助	西之町	5	樽屋伝四郎	
6	北村屋市郎兵衛 食売持		6	伊東屋源藏 食売持	仲之町「伊東」
7	箸屋源右衛門 食売持		7	亀甲屋鉄五郎（小）	
8	桑名屋清兵衛 食売持	仲之町	8	〔人馬継問屋場〕	九番町
9	伊勢屋藤助		9	万屋金次郎 食売持	
10	近江屋伊助 食売持		10	田村屋長兵衛 食売持	
11	鮎屋初五郎（小）		11	田村屋藤五郎 食売持	十番町 新田村屋
12	新箸屋定太郎 食売持		12	東三河屋清吉 食売持	
13	太田屋吉五郎 食売持	九番町	13	松葉屋巳之助 食売持	
14	川嶋屋五郎右衛門（小）	十番町	14	米屋喜兵衛	
15	塩屋文治郎 食売持				
16	和泉屋伊兵衛 食売持	十番町			
17	三河屋由五郎 食売持				

〔典拠〕「武州橋樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其他書上帳」（注14）、「金川日記」（注26）。

表3 安政六年の人別帳にみられ神奈川町の旅籠屋

表2 対応	名	身元	世帯
陸1	新羽屋源兵衛	百姓、4斗5升7合5分	源兵衛、妻、息子夫婦+娘、下男1、下女6、飯売女2（14人）
陸3	清水屋儀左衛門	百姓、1斗9升5合	儀左衛門、妻、母、息子1、娘2、下女1、飯売女2（9人）
陸4	小倉屋長三郎	百姓、2石6斗5升5号3分4厘	長三郎、妻、母、息子夫婦、息子、下男1、下女5、飯売女2（14人）
陸5	秩父屋武助	百姓、1斗5升	武助、妻、下女1（3人）
陸6	北村屋市兵衛 後家こと	百姓、8斗7合	こと、孫、下女4、飯売女2（8人）
陸7	箸屋源右衛門	百姓、2斗5升8合	源右衛門、妻、下女3、飯売女2（7人）
陸8	桑名屋清兵衛	百姓、5升7合	清兵衛、妻、妹1、娘1、息子1、同居人1、下男1、下女7、飯売女2（16人）
陸13	太田屋吉五郎	善兵衛店	吉五郎、妻、息子1、下女3、飯売女2（8人）
陸14	川嶋屋五郎右衛門	秀五郎店、1斗7升1合	五郎右衛門、娘1、弟1、（他所奉公の孫1）、下女1（4人）
陸15	塩屋文次郎	百姓、1斗1升1合5分	文次郎、兄1、妻、娘1、下女1、飯売女2（7人）
陸17	三河屋由五郎	百姓、2斗1升	由五郎、妻、母、娘1、下女4、飯売女2（10人）
海1	大米屋佐七	百姓、4斗9升5分	佐七、息子1、娘1、下女9、下男3（15人）
海3	住吉屋庄吉	百姓、2斗4升	庄吉、妻、母、継母、娘、下女3、飯売女2（10人）
海10	田村屋長兵衛	百姓、7斗7升8合5分	長兵衛、妻、息子夫婦、下女3、飯売女2（8人）
海13	松葉屋巳之助	百姓、4斗5升3合	巳之助、妻、息子2、下女5、飯売女2（11人）
海14	米屋喜兵衛	百姓、4斗1升8合5分	喜兵衛、妻、父母、祖母、弟2（+他所奉公）、息子1、娘1、下女1（10人）
	忠藏	百姓、9斗5升3分3厘	忠藏、妻、下女2、飯売女2（6人）
	清次郎	半左衛門店	清次郎、妻、母、伯母、下女6、飯売女2（12人）
	喜三治	長兵衛店	喜三治、妻、息子1、下女2、飯売女2（7人）

〔典拠〕安政六年「宗門人別帳」（神奈川宿本陣石井家文書、請求記号 2199435091、神奈川県立公文書館所蔵）。

## 2 街道と隣村

神奈川町の東には新宿村、子安村、生麦村、鶴見村が東海道にそって続き、青木町の西には芝生村、保土ヶ谷宿が続いた。

### （1）荒宿・新町・並木町と隣村

神奈川町の本町の東側につづいた荒宿、新町、並木町に旅籠屋は分布しない。以下は、資料1・1の前後の部分で（中略部分が資料1・1）、小伝馬町・獵師町・新町の魚問屋に関する条項である。

〔資料1・2〕○内は引用者注。

### （前略）

一、訴訟方之者共儀、往古 御上洛之砌并享保年中御用相勤候趣申立候得共、右御用相勤候連問屋株并仲買等人数取極被 仰付候儀与承り及不申候、尚更〔又〕消し字）御本丸御菜御用割合出銭差出し候上者同様二而、問屋・仲買稼方相替り候義者無御

## 座候

一、宝暦年中青木町伝七其外之者共魚問屋致、又者保土ヶ谷宿清八青木町廻船問屋ニ而魚類売捌候義者、何れも新規之趣ニ付、相止メ候儀ニ而、当町之義者、古来方仕来候問屋・仲買ニ而数年来渡世仕候ニ付、是迄何方方も故障無御座候

一、当浦辺者古場与唱江戸日本橋魚問屋方、獵師共義船網仕立候節仕入金与申金子借受候得共、右問屋其外江魚荷物相送不申、仕入金借受不申自分入用ニ而船網仕立候分者、日本橋ニ限芝金杉其外勝手次第売捌候仕来ニ而、私共方ニ而も近頃久良岐郡根岸村外浦々江、仕入金無之自分才覚ニ而船網仕立候者江少々宛金子貸渡、右金子相済候迄者、荷物引請、右貸金引取候儀ニ而、獵師町仕入致者方江金子貸渡荷物引請候義ニ者無御座候間、此度、訴訟方獵師之者共故障可申筋無之、殊更私ニ不限当時近村江仕入金差出シ、又者何方方仕入金借受不申候者共者、勝手次第私外式人間屋江魚荷物相違（ママ「遣」カ）仲間も大勢有之候処江、不調法也与見掠メ、私老人相手取候段難心得奉存候

## （中略）

一、新町之儀者、諸魚引請干鰯ニ致候間、干鰯場与唱反別七畝十歩御年貢地有之、右御年貢獵師共方相納候儀与（欠文カ）古来方獵師とも差上候魚買取候を問屋与申、右魚所々江持出し売捌候者を仲買与唱、獵師町同様ニ而、獵師町者古株、当町者新規与申差別無御座候

## （後略）

小伝馬町と獵師町には魚問屋が四人おり、仲買は二四人いたが、新町の者も御菜御用を勤めてきたことが主張され、古来より魚問屋・仲買渡世を続けてきたという。彼らは根岸村などの獵師のうち、江戸日本橋の魚問屋（古場）から前借りをしていない者に対して前貸しおこなって魚を仕入れ、干鰯に加工して売却していた<sup>三〇</sup>。また、与平次の言い分からは、江戸魚問屋から仕入金を受け取らずに獵師町以外の魚問屋へ売却する者が増えつつあることが理解される<sup>三〇</sup>。

「古株」を主張したとみられる獵師町の魚問屋からすれば看過できない状況であったと推測されるが、獵師町・小伝馬町・新町は近在の獵師から魚を仕入れる魚市場として機能した一帯であったといえる。茶屋が散在する一方、宿駅とは異なる機能が存在したといえる。なお、小伝馬町の平左衛門と平兵衛は横浜開港場へ魚類・塩魚・干魚・貝類の出店を

はたした<sup>三一</sup>。元治元年の退店願には「神奈川宿小伝馬町仲間惣代」という肩書がみられる<sup>三一</sup>。また、文久二年には根岸村・北方村（横浜村隣村）の魚売の者が立ち入るようになり、駒形町が魚市場同然となっていることを訴えており、その時の肩書は「神奈川宿魚問屋仲買七拾四人惣代」であった<sup>三二</sup>。魚問屋と仲買の人数が大きく増加しており、平左衛門と平兵衛が、資料1・2にみられる新興の魚問屋・仲買を含む集団の代表として横浜へ進出したことが読み取れるだろう。

また、後述する横浜開港以後に許可された神奈川宿内の物揚げ場には、荒宿も含まれた。そして、安政二年の「武州橋樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」によれば、東隣の新宿村にも物揚げ場があった。こうした揚場での流通の実態は不明であるが、東海道沿いの海付村落として、物資の出入りがあったことが推測される。

そして、新宿村のさらに東には子安村、鶴見川河口の生麦村が続く。西川武臣によれば、生麦村は名主の関口家を筆頭に米穀商や廻船業の者が住む村落であった<sup>三四</sup>。また、斎藤善之によれば、生麦村関口家と神奈川湊廻船問屋中村家（紀伊国屋）の婚姻が試みられることもあった<sup>三五</sup>。

## （2）軽井沢・芝生村と八王子街道

軽井沢は青木町の枝郷である。その住人についてはほとんどわからないが、横浜へ出店をはたした廣屋栄助、同じく横浜の出店商であり、穀物を扱い、醤油醸造もおこなった鶴屋八郎右衛門、穀物を扱ったとみえる漆原屋専助が挙げられる。軽井沢は東海道沿いの枝郷として、近世中後期に宅地開発が進展した。この点は後述したい。

軽井沢の西につづく隣村の芝生村は河岸を持ち、八王子周辺からの薪積み出しの場として機能した（図2、後掲図6）<sup>三六</sup>。芝生村の河岸は、宝永四年の富士山噴火以降、堆積によって水深が保たれなくなった保土ヶ谷宿の帷子川河岸に代わって利用されるようになり、保土ヶ谷宿の薪商人との間で争論がありつつも、天保十四年ごろには全長一四〇間ほどに拡大した。明治五年の記録によると、戸数一九三戸のうち八〇戸が「商業」（炭薪・荒物・酒など）、八六戸が「雑業」（髪結・日雇・船乗・馬士）で、輸送手段として船一六艘、人力車三八両、馬六疋が記録される<sup>三七</sup>。

また寛政三年には、芝生村の穀物商人が神奈川湊の廻船問屋と直取引をおこなったとして、仲買から出訴されている<sup>三八</sup>。その結果、廻船問屋が引き受けた荷物はすべて仲買に売



町村との関係を体现する人物といえる。相州津久井縣牧野村（現神奈川県相模原市、相模湖の南西）へ穀物を売却した記録が残っており、八王子街道・甲州街道の村との関係が伺える。また、同一人物かは断言しがたいが、神奈川宿青木町の鶴屋市郎右衛門が、八王子宿南の下比企村の磯沼源蔵へ借金を申し出ている（年代不明）。「仕込」の入用が不足している<sup>四二</sup>とされ、鶴屋八郎右衛門と同門であれば醤油か酒の仕込みであろう。くわえて、赤穂の塩や米の相場が報告され、両家の縁談もあったことがうかがわれる<sup>四三</sup>。赤穂の塩と米は斎藤善之が指摘した神奈川湊と尾州廻船の代表的な取引品目である<sup>四三</sup>。

もう一点、西川武臣によって紹介がなされている資料だが、芝生村と神奈川宿の者が連名で馬士の不正を訴えた証文が残る<sup>四四</sup>。神奈川宿の藤兵衛ほか一七人と芝生村の清六ほか一七人は、神奈川宿と芝生村から八王子宿や相州筋在々へむけて商荷物や船荷物を駄賃馬の雇用によって輸送してきたという。馬士が商品を抜き取り砂や水で重量を工作する不正を訴えるなかで、「就中八王子・厚木辺江附送り候荷物者、馬士共自分宅江附込、右様之仕業致」とされ、馬士が八王子や厚木までの間に居室を持つてることが理解される。くわえて、「宿馬士共在々出候馬士共江喧嘩口論仕掛ケ、酒手等ねたり、在馬士迷惑為致候義、間々御座候」と訴えていることから、八王子街道の近辺に住まう馬士とは別に、宿場の馬士が存在したことが理解される。こうした宿内の馬士は、馬持から雇用されて駄賃稼ぎにあたっていたようである<sup>四五</sup>。「往還稼ぎ」の一形態といえるだろう。

以上のとおり、宿駅の周囲に、漁師町・小伝馬町・新町からなる魚市場、内陸側の門前町が付随した。神奈川湊の中核となった西のはずれの台町周辺にくわえ、八王子へ続く街道筋の海付村落としての性格の強い軽井沢、隣村の芝生村も、近世後期には都市化していたとみられる。横浜開港前後の神奈川は、東海道と瀧之川の交差点を中心とした宿駅の中核に、隣村までの広がりを持った町場が接合する集合としてとらえる必要があるだろう。

### 3 神奈川湊と舟運

神奈川湊の廻船問屋・仲買はいずれも青木町の住人であった。西川武臣によれば、神奈川に入津した廻船の荷物は、廻船問屋を通して仲買や送り状の宛名の人物へと渡った。ここでは、両者とそのほかの商人の関係について、若干捕捉したい。資料3は、安政六年二月に廻船問屋・仲買が外国奉行へ提出した願書の下書きとみられる。修正跡が多く、囲み

字で示した箇所のうち後半の方は朱で打ち消しており、後に続く文章へ書き直されるものであろう。

〔資料3〕<sup>四六</sup>

（前略）

一、酒・封印水油・其外荒荷物、都而大坂表商人方御府内商人共江積下シ候荷物之儀者、菱垣廻船荷物と相唱、途中揚之儀者難相成、譬大坂表商人共江神奈川商人共方注文差遣シ候共、御府内十組商人共之外買付等者不相成事故、是迄「」右品類入用之節者、江戸問屋方買取□（居カ）候処、今般当「」（所御カ）開港相成候上者、前書菱垣廻船積諸荷物之儀茂、当湊商人共又者御府内方出店仕候商人共江も、諸荷物水揚仕度砌者、其着船之廻船問屋江、先前仕来之通庭料銀差出し引取候様仕度、依而者庭料之儀、其品ニ依り高下御座候間、御尋御座候ハ、別帳を以可奉申上候

一、各宛送り状有之荷物は前書上方筋并近国方積来り候廻船共、当湊江入津致し、銘々引受之間屋江入着仕候ハ、早速送り状相札、荷主方江及通達置、水揚致し候荷物送り状名宛江荷物相渡、庭料銀受取来り候儀ニ御座候

一、異人江直売買仕候儀ニは無御座、仲買共も同様之心得ニ罷在候

一、神奈川青木町廻船水揚荷物仲買共之儀は、先般奉願上候通、当所御開港被仰出候ニ付而は、御府内は不及申、諸方方出稼之者入込候人数不少奉存候間、右ニ准シ万物入用多分ニ相成候ニ付而は、勝手渡世可致は眼前之儀と奉存候、左候得は、是迄年来仕来候仲買渡世如何可相成哉、其次第二依り仕来りは相崩商法茂不相立様罷成候而は、嘆ケ敷奉存、依而は、他所方入込候者共勝手尽之渡世不致候様仕度、就而は、私共旧来仕来候規矩相立候様、此段偏奉願上候、且、諸廻船上方筋方買積致「」「荷物」。売買之儀は先規仕来之通、仲買共ニ限り□（取カ）扱方仕度奉存候、

尤右荷物私共之外当所又は国々在々之者共買請度候節は、是又前々之通買次口銭私共江差出し買入方仕候様、奉願上候、且、是迄仲買之者共諸荷物売買先々之儀は安房・上総・下総売買之儀は其時々廻船入津之節、着船之問屋方仲買共方江船毎ニ積高相触候砌、私共不限何時即刻問屋方江罷越、時之相場を以値段取組買取申候仕来ニ付、已来之儀も仲買共ニ限り右取扱方仕度奉存候、尤、右荷物私共之外当所又は国々在々之もの共買請度候節は、是又前々之通買次□（銀カ）私共江差出し、買

入方仕候様奉願上候、且、是迄仲買之者共方諸荷物売買先々之儀は安房・上総・下総国行徳、都而海岸筋、其外居廻り・相州路江荒渡し来り候儀ニ御座候  
(後略)

廻船問屋の呼びかけで仲買が集合し、値組・入札がなされ、口銭・庭銀が支払われた点が特に注目される。この仕法は、引用部分の二条目に記載された送り先の決定している荷物以外の場合であつたと推測される。安政二年「武州橘樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其外書上帳」では、神奈川宿に市立てはなされていないとされるが、おそらく穀物や塩、肥料を中心とした廻船・廻船問屋・仲買による船荷物の取引は、廻船問屋の持ち場を市場に類する場として機能させたと思われる。

また、西川武臣も指摘しているが仲買の販路も重要であろう。彼らは、神奈川やその近傍の村々の者が廻船荷物を買いに来た際には買次口銭を得ており、さらに安房・上総・下総国行徳といった海岸沿い各地と、居廻り(周辺諸村か)、八王子街道や甲州街道沿いを示すとみられる「相州路」へと売却していたという。

廻船問屋との関係で注目されるのが船宿の存在である。年欠の資料だが、海岸に店を構えた船宿が蓼草の売買を独占しているという報告がなされている<sup>四七</sup>。また、青木町の旅籠屋議定書には船宿からの紹介に応じて水主を旅籠屋へ迎えることが申し合せられており、飯売女を派遣する直接的な客引きは禁止された<sup>四八</sup>。また、尾州廻船の講組織である戎講は、不正を働いた船頭への制裁を徹底するように要請し、その際には廻船問屋の紀伊国屋三郎兵衛に対して「小船宿」への対応を求めている<sup>四九</sup>。

このように、おそらく廻船問屋のもとで廻船に必要な物資を調達し、船乗と旅籠屋の仲介をおこなった船宿の実名は、原直史の論考にて紹介され、干鰯抜け荷を試みた、青木町の房州屋清右衛門・上総屋九右衛門、神奈川横町の伊勢屋喜八の名が確認される<sup>五〇</sup>。原によれば彼らは安房国・下総国の船頭と謀って江戸問屋を介さない流通を試みたのであつた。上総屋九右衛門は、「船乗渡世」の七軒町の住人としてその名が確認される<sup>五一</sup>。ここでの「船乗渡世」とは、船乗の雇用者の意味であろう。神奈川の海岸へ諸国廻船は接岸できなかつたため、船宿を営むには小舟による輸送をとまなうことが必須の条件であつたのではなかろうか。

廻船問屋の町における位置づけは、井上攻が天保飢饉時を例に推定を加えている。幕府の江戸廻米指令のもとで、宿内の米を確保しようとする神奈川町の宿役人・組頭と、穀物

の津留を解除するよう持ち掛ける青木町役人という宿内の対立構造を示し、青木町のなかで廻船問屋を中核とした舟運関係の渡世の者による要望があつた可能性を指摘した。文化十年に青木町百姓が名主源太左衛門と問屋清九郎の貯穀や宿会計に関する不正を訴えた記録が残るが、訴訟人には廻船問屋と同名の人物が多くみられる(表4)<sup>五二</sup>。印形や屋号が記載されず断定は困難であるが、町の内部の代表的な立場にあつたことを推測させる。

諸国廻船荷物の流通を独占した廻船問屋・仲買であつたが、船付き場が彼らの海岸に限定されたわけではなかつた。中世以来の船着き場であつた瀧之川沿岸や芝生村周辺、宮の河岸は、近在の村の年貢積み出しの場として機能しており、商い荷物の出入りの場としても機能したと考えられる。

神奈川の船着き場の位置は、安政六年九月の宿内五か所の物揚げ場許可から知られる。横浜開港後の輸出入荷物統制のため、宮の河岸以外の物資入りを禁じた安政六年八月の触れに対し、宿内から嘆願がなされ、五か所の物揚げ場が認可されたのであつた(図3)。

表4 有力な青木町百姓と廻船問屋・仲買

文化10年に署名した「青木町百姓」	嘉永6年、明治2年の廻船問屋	文久3年の仲買
次郎右衛門 藤兵衛 太兵衛 次郎兵衛 彦四郎 伊左衛門 茂兵衛 市兵衛 藤左衛門 忠右衛門 弥兵衛 甚介 玄良 三郎兵衛 太右衛門 惣助 忠兵衛	紀伊国屋(中村)三郎兵衛 山田屋(小林)彦四郎 茅木屋(太田)次郎右衛門 伊勢屋(河合)孫兵衛 小野屋茂兵衛 新満屋(河合)甚兵衛 遠州屋(河合)藤兵衛 和泉屋(佐野や)金五郎 津屋(保見)太兵衛 和泉屋太平治	八郎兵衛(鴨居屋か) 八郎右衛門 太次郎 又四郎 銀次郎(大坂屋か) 勘兵衛(堀部屋か) 甚吉 喜八(大野屋か) 利兵衛(近江屋か) 藤兵衛(鴨居屋か) 藤次郎 佐左衛門 次兵衛

文化10年の人物のうち、廻船問屋と同名の者をゴシック体で示す。  
[典拠]

- ・文化10年：神奈川宿本陣石井家文書(注52参照)
- ・廻船問屋：嘉永六年「魚介問や神奈川廻船問や惣名前等」(小笠原家文書、横浜開港資料館所蔵)、明治二年「神奈川湊廻船問屋仲間名前印鑑帳」(武蔵国橘樹郡青木町廻船問屋間宮家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。
- ・仲買：「問屋仲買方取置一札写」(県史資料原本、神奈川県立公文書館所蔵)。

## [資料4] 五

一、十八日、神奈川町海船運送場、軽井沢広屋栄助海岸東  
西十軒、台町堀部屋勘兵衛海岸同断、青木宮ノ川岸東西  
同断、荒宿松五郎海岸東西同断、成仏寺門前内田屋半右  
衛門川岸南北同断、右五ヶ所二運送場二御免二相成、右  
五ヶ所ノ外ワ御禁制二相成候

五か所の物揚げ場は、軽井沢の広屋栄助海岸、台町の堀部屋  
勘兵衛海岸、宮の河岸、荒宿の松五郎海岸、成仏寺門前の内田  
屋半右衛門川岸である。開港後の物流管理の部分的緩和といえ  
る内容であるが、おそらく旧来の船着き場の位置に基づいたも  
のである。「十軒」が、屋敷地十筆分なのか、寸法としての十  
間（けん）なのか不明であるが、当時の神奈川宿の船着き場が  
広く宿全体に分布していたことを知ることができる。

まず、軽井沢の広屋（高木）栄助は、横浜開港場へも出店し  
た人物で、一四七番地の廣屋高木福太郎の先祖とみられる<sup>五四</sup>。  
台町勘兵衛は、下台町の人物とみられ、廻船問屋・仲買の集ま  
った一帯である（図7参照、築出新地五七、五八番）。表4に示  
した仲買の勘兵衛と同一人物の可能性も想定できる。宮の河岸  
は洲崎神社の正面に位置し、「江戸名所図会」にも描かれた中世  
以来の船着き場である（図4・1）。開港後には荷物の改め所が  
置かれ、交易品の出入りはここに限定された<sup>五五</sup>（図4・2）。

神奈川町の成仏寺門前の半右衛門は材木商と推測される（表  
1）。荒宿松五郎は、検地帳にみられる荒宿海側の家持松五郎と  
同一人物とみられる。明治の地番で二二四番地の位置で、荒宿  
のなかでは西側にあたる（図5）。青木町の三ヶ所にくわえ、神  
奈川町の周縁部にも許可されたことが理解されよう。西側の宮  
之河岸・台町・軽井沢・芝生村、北側の成仏寺門前、東の荒宿・  
新宿村というように、宿駅の中核を囲むように船着き場が分布  
したといえる。

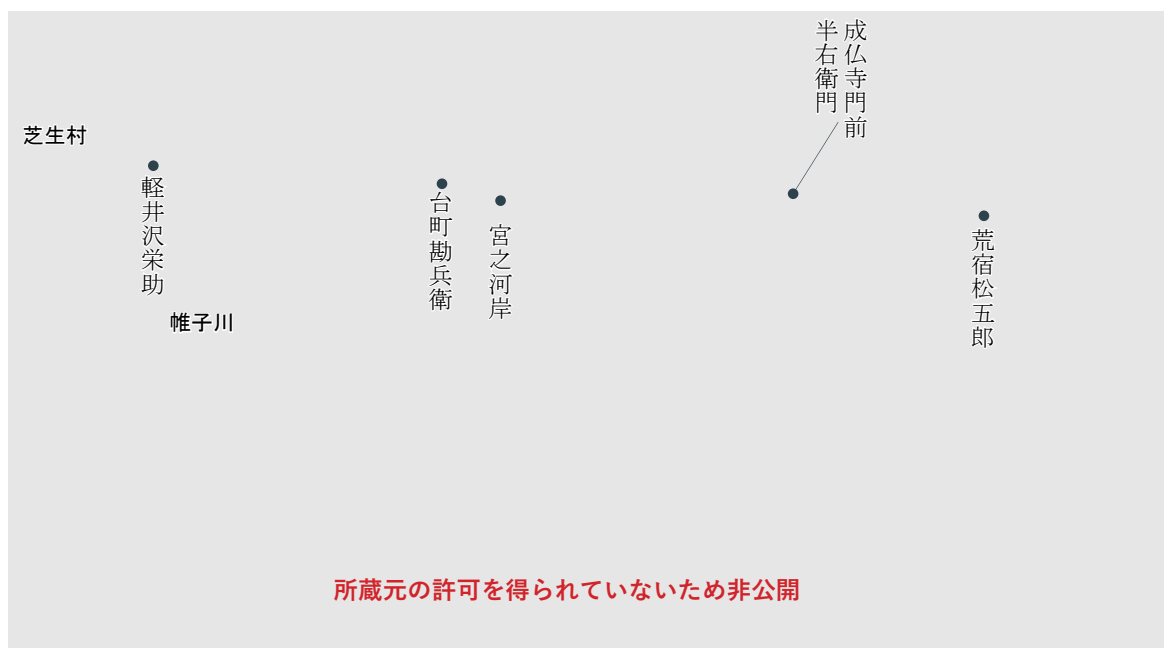


図3 安政六年に許可された物揚げ場（「神奈川御開港横浜絵図」（安政六年、横浜開港資料館所蔵、部分）に加筆）



図4-2 慶応4年ごろの宮之河岸

橋本五蘭斎貞秀「大港横浜之図」（横浜開港資料館所蔵、請求記号 Bb2-06.2-09）

図4-1 「江戸名所図会」に描かれた宮之河岸

人物往来社(1967)による大日本名所図会刊行会本の複製版(下巻)から転載。

なお、湊における運送従事者について伝える資料は少ない。青木町の小揚人足たちは開港場での運送業の開業を願ひ、出店を果たした<sup>五〇</sup>。神奈川の海岸に接岸できない諸国廻船からの運送を担った「舩中」の存在は、下台町の飯綱社の棟札にその名が確認される<sup>五七</sup>。

内湾の運送を担った神奈川の船乗りは、神奈川猟師町の者がおこなったことは確認できる<sup>五八</sup>。また、七軒町の住人として船乗り渡世は非常に断片的ながらも確認される<sup>五九</sup>。上総屋の事例とあわせ、七軒町には船乗や船宿が集まったことが想像される。そして、上総国富津村の無宿が神奈川にて船乗として働いていたようである<sup>六〇</sup>、内湾での船乗の行き来が想定される<sup>六一</sup>。仲買から安房、上総、下総国の売り先までの運送は、こうした近傍の船乗りが担ったと想像される。

#### 4 小括

以上、近世後期の神奈川について分節的な把握によって概観した。瀧之川と東海道の交差する神奈川宿の中心部が、本陣・旅籠屋・問屋・高札場のあつまる宿駅の中核であつた。その周囲には、茶屋、船着き場、魚問屋・仲買など、多様な機能が分布していた。とくに神奈川湊から東海道や内陸への道を介して広がる物資流通網は、宿駅の中核のみならず、周縁部から隣村にまで広がる都市的な成熟をもたらしたといつてよい。一方、青木町の仲買から内湾各地へ売却される物資や、魚荷物の流通、船乗の行き来によって、海側にも大きく関係は広がっていた。

最後に次節以降の考察に向けて、神奈川町の旅籠屋、八王子街道と関係をもった宿内の穀物・肥料商がいずれも家持（百姓）であつたことを確認しておきたい。

### 四 屋敷地の変化

#### 1 神奈川町の検地帳

神奈川町の名主を勤めた本陣石井家の文書群には、数冊の検地帳が残る。ここでは文政三年の帳簿を検討したい<sup>六二</sup>。これは検地にもとづく帳簿ではなく、元禄八年の検地帳をもとに現状を記録したものである。跋文には以下のような記載がある。

#### 「資料5」

御水帳寫旧来破損、殊ニ銘々地所違ニ而、流地ニ相成所持致来候茂有之ニ付、此度相談之上一同立会引合候処、相違無之、然共全入替り候場所も相見候得共、双方納得之上致所持候ニ付、前書処々脇書ニ其文相加へ候、以来地所入違・渡違為無之、則此度御水帳写、畝歩肩書・番付ヲ加へ、并ニ別紙夫々絵図面相仕立、畝歩番付致置候間、末代ニ至迄地所渡違等無之様、此帳面・絵図面引合候上、地所引渡可申候、仍而銘々致印形置候処、如件

文政三庚辰年十月

（以下、名主源左衛門ほか連印）

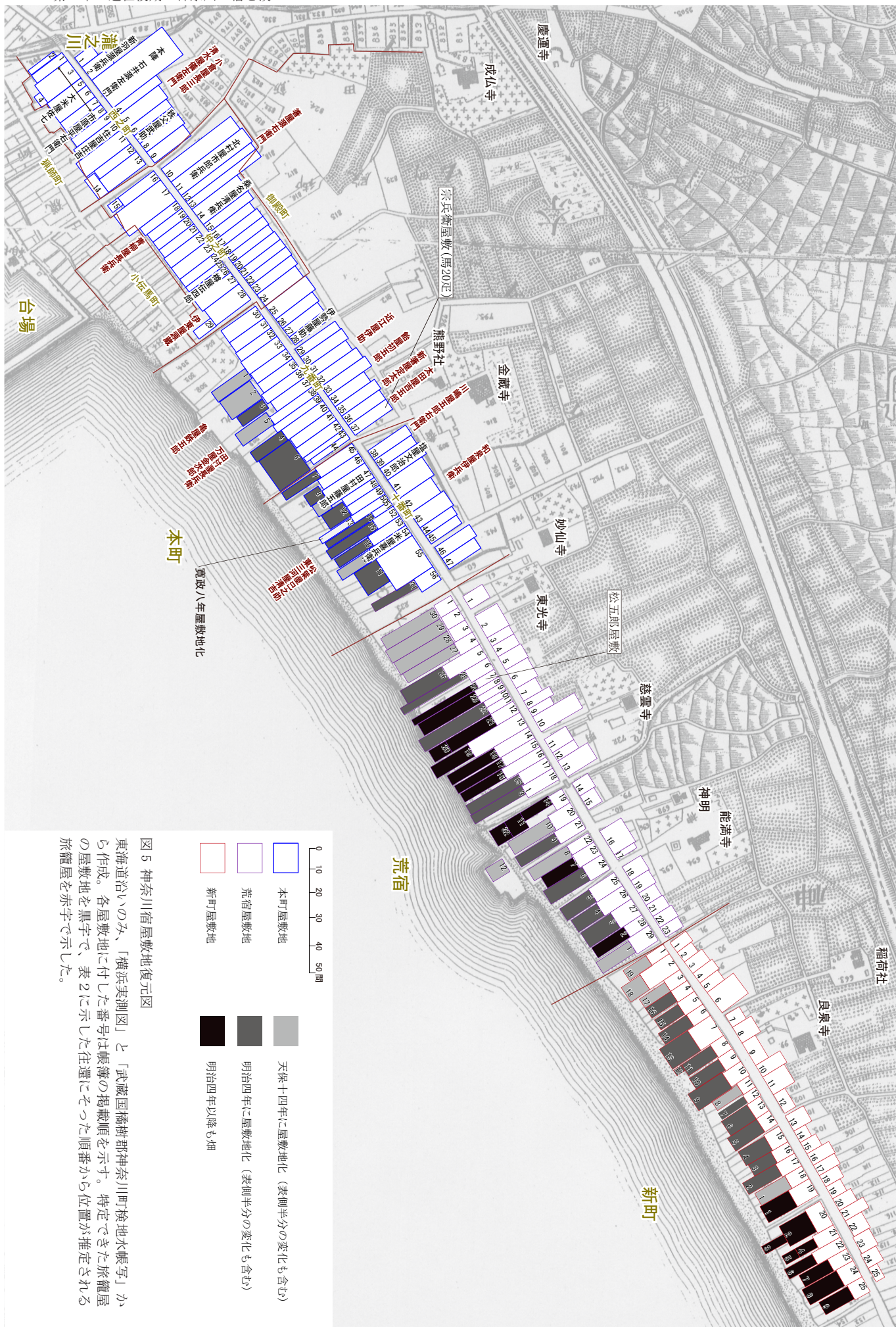
「水帳寫」(変更を逐一記録するための現行の帳簿か)の破損と土地の所持者の異動をうけ、一同立会のもと帳簿を作成しなおしたということであろう。書式は元禄検地帳の記載を写し、元禄期の所持者を「…分」とし、文政三年の所持者を印形とともに記録する形式である。元禄・文政で変化がない場合は「…名所」と記載される。

東海道沿いの屋敷地を検討すると、大半の土地が「名所」ではないことにくわえ、屋敷地を二分し、さらに分割された隣り合う屋敷地が集積される場所もみられる。つまり、元禄期の屋敷地割は細分化・再編成され、所有境が変化しているのである。

各筆は空間的な順序にそつて記録され、明治九ノ十一年に測量、十三年発行の「横浜実測図」に描かれた宅地の間口と帳簿に記載された屋敷地の表間口寸法は対応する(図5) <sup>六三</sup>。なお、屋敷地の分割が変化している場合は貼紙によって示された状態が「横浜実測図」の地割に合致する。

一方、奥行き方向は、元禄段階で①街道に沿った屋敷地、②裏側の農地にわかれる。②は文政の帳簿では「字本町裏海手」といった呼び名がされる。①と②は元禄から文政までの変化、その後の貼紙の変化も一致することから、一体的な所持となつていたことがわかる。新町の山側の裏手は同様の呼び名がみられないが、所持者が一致することから「砂地」とされた土地が該当すると推測される。

①の屋敷地は、海側・山側の全体にわたつて二〇間ほどの奥行きを有する本町と、奥行き十間前後でばらつきのある荒宿・新町が対照的である。伝馬役屋敷のあつた字本町の奥行きがそつて二〇間であることから、地子免許当初の屋敷地であつたことが想像できるのではないだろうか。資料1でみたとおりに新しく役負担が課された新町にくわえ、荒宿も



最初期の町割りにおいて一次的に創出された屋敷地ではなかったことが理解されるのである。

②の海側は、天保十四年、明治四年、六年に「屋敷成」したという貼紙の付された筆が多い。山側は農地のままの筆が多く、「横浜実測図」を見ても山側の宅地の奥行き寸法は①の部分と大差ない。天保十四年は後に見る「海岸築出新地請名寄帳」の見分とほぼ一致した時期で、天保末期に屋敷地裏の利用状況の調査が厳密となったことを示す。寛政期に屋敷地となった筆もわずかにみられるが、その変更から漏れた②の農地すべてが寛政から天保の間に屋敷地となったとは現段階では断定しがたい<sup>六四</sup>。ひとまず元禄八年から天保十四年の間の変化としておきたい。

## 2 青木町の新田検地帳

青木町の名主文書は横浜開港資料館に所蔵されるが、その内容は十冊の検地帳（次節の二冊を含む）と、徒歩役に関する議定証文の写しのみで神奈川町の石井家に比してごくわずかな点数である<sup>六五</sup>。検地帳についても、表紙に「三番」という張り紙のある元禄八年の居山検地帳のほか、後世に作成された検地帳・新田検地帳が七点残されているのみである。

後世の検地帳は数筆のみを記録し、うち五点は四番以降の番号が時代順に振られていることから、元禄以降に高入れされた土地を補足的に記録したものと考えられる。町域の地割を把握するには、一、二の番号が振られたであろう元禄八年の検地帳が必要だが、その所在は不明である。以下では、新田検地帳に記録された町域の土地の内容と、昭和期の写本として残された元禄八年の軽井沢の検地帳について検討したい<sup>六六</sup>。

新田検地帳は、宝暦十一年（五番）、寛政八年（八番、九番）がいずれも三ツ沢や沢渡、飯田、松本といった内陸部の農地、居山のみを記録するのに対し、享保十六年（四番）と宝暦十三年（番付なし六番に該当か）は台町と軽井沢の屋敷地を記録する。明和七年（七番）の新田検地帳も沢渡、飯田にまざって一筆だけ下台町の屋敷地を記録する。明治四年の新田検地帳は鉄道敷のために買収された土地の代地（七軒町代地）の帳簿である。

いずれも字名が押印されており、「明治五壬申歳改」の印もみられることから、明治五年に改められたものとみられ、同年まで現行の帳簿であったことを示している。この印によって、たとえばいずれも下台町の一部となる筆の、「台町」や「青木台町裏」、「台下」といった帳簿に登場する多様な地名が近代以降の字に比定される。また、所持者の変化しない

ものも含めたすべての筆には苗字・名前の記入された貼紙が付される。明治五年に改めた旨が書かれる筆がみられることから、明治五年の調査に基づくものであろう。

ここでは享保十六年、宝暦十三年（表5）、明和七年の帳簿に記録された屋敷地について考察をくわえたい。まず下台町の屋敷地だが、享保十三年に登録された三筆、明和七年の一筆は寸法のみで位置を知る手がかりは少ない。宝暦十三年に高入れされた「台下」の新地は東南西の三方が海であるという。

宝暦当初の所持者は長兵衛、のちに「下台町町内持」を経て明治五年には小林彦四郎の所持するところとなった。明和七年の新地も同じ経緯をたどる。そして享保十六年の新地のうちの一筆は「惣町持」から「台町町内抱地」を経て明治五年には小林彦四郎へ移る。

こうした土地は、下台町の共有地が廻船問屋の代表格たる小林彦四郎の所持地として登録されなおされたことを示しており、土地制度の近代化にともなう共有地の解体過程の一端を示している。逆に言えば、下台町の町内とは、廻船問屋の論理が強く働く共同体であったことがうかがえるのではないだろうか。ひいては町内持の屋敷地が、廻船関係の機能のために共有されたことを想像させる。

つぎに、宝暦十三年に登録された屋敷地には、宝暦期に「台」とよばれ、明治五年には「軽井沢」へ編入されたものがみられる。字境が変化したこと示しているが、江戸時代における厳



図6「横浜実測図」に描かれた軽井沢周辺

白地に地番の付された筆が宅地、ハッチングが田（山側宅地の北側）、点描が畑（田のさらに北側）である。

表5 宝暦13年の台町・軽井沢の新地

字 (宝暦)	明治判子	面積	長(間、尺、寸)	横	隣接関係	所持者	貼紙(明治五年以前の所持者変更、一部判読できず)	明治五年の貼紙
台下	下台町	5畝6歩	20.0.6	7.4.8	東南南海	長兵衛	下台町町内持	小林彦四郎
台	上台町	15歩	4.3.2	3.2.4	南方往還道		台町平七	玉置平七
台	上台町	15歩	5.0.6	3.0.0	南方往還道	長作		
台	上台町	21歩	5.0.6	4.0.0	南方往還道	伝兵衛	長作→台町清兵衛(元治元年)	佐藤清兵衛
台	上台町	9歩	5.0.6	2.0.6	南方往還道	太郎兵衛	台町吉次郎→清兵衛か	佐藤清兵衛
台	上台町	9歩	4.1.2	2.1.8	南方往還道	惣右衛門	台町清兵衛	佐藤清兵衛
台	上台町	18歩	5.4.2	3.2.4	南方往還道	次郎兵衛	台町清兵衛	佐藤清兵衛
台	上台町	6歩	4.3.0	1.4.2	南方往還道	喜兵衛	台町三右衛門→台町平次□	小松平次□
台	上台町	9歩	4.5.4	1.5.4	南方往還道	弥兵衛	台町清兵衛	佐藤清兵衛
台	上台町	9歩	4.3.6	1.5.4	南方往還道	久兵衛	台町良助	三好良助
台	上台町	3歩	2.1.2	1.4.2	南方往還道	八郎兵衛	台町勝三郎(明治元年)	森勝三郎
台	上台町	3歩	1.5.4	1.3.6	南方往還道	市左衛門	台町勝三郎(明治元年)	森勝三郎
台	上台町	6歩	3.4.8	1.4.8	南方往還道	□		中村三九郎
台	軽井沢	6畝	19.0.0	9.3.0	東南海	太兵衛	軽 忠兵衛→二分割(解読できず)	国領平 鈴村卯之助
台	軽井沢	3畝18歩	8.4.2	5.3.6	南方海、北方往還道	市兵衛	軽 八郎右衛門(カ)	加藤八郎右衛門
台	軽井沢	6畝	13.3.0	13.2.4	南方海	□	八郎右衛門	加藤八郎右衛門
台	軽井沢	6畝	13.2.4	13.2.4	南方海	□	貼紙二枚重ね、解読できず。	加藤八郎右衛門 山北忠七
台	軽井沢	2畝24歩	15.1.□	5.3.0	南方海	□		宮田治兵衛 田沢市兵衛
台	軽井沢	1畝3歩	13.2.4	2.3.6	南方海	□		藤巻長左衛門 藤巻与兵衛
台	軽井沢	3畝9歩	14.0.6	7.0.0	南方海	□		小畔八郎兵衛
台	軽井沢	18歩	6.4.8	2.3.0	南方海	□		大野甚右衛門
台	軽井沢	18歩	6.4.8	2.3.0	南方海	彦四郎	軽 甚右衛門	大野甚右衛門
台	軽井沢	3畝27歩	7.3.6	7.2.4	南方海	清助	二分割。解読できず。 片方は慶応四年	大野甚右衛門 久保田藤助
台	軽井沢	2畝12歩	9.4.2	7.3.0	南方海	□	貼紙二枚重ね。解読できず。	久保田藤助
軽井沢	軽井沢	6畝27歩	15.1.8	13.3.0	南方海、北方往還道	仁左衛門	軽 三郎兵衛	山□三郎兵衛 柳下藤兵衛
軽井沢	軽井沢	1畝9歩	12.3.8	3.0.6	南方海、北方往還道	久治郎	軽 藤助 →慶応四年二月 鉄□	久保田藤助カ
軽井沢	軽井沢	2畝21歩	13.4.8	5.4.8	南方海、北方往還道	政右衛門		大野善次郎
軽井沢	軽井沢	6畝24歩	15.4.2	13.0.6	南方海、北方往還道	喜兵衛	軽 喜兵衛カ→三分割、喜兵衛、 文蔵(→廣屋栄助)、喜八	高木栄助 大野喜八
軽井沢	軽井沢	2畝12歩	12.1.2	6.0.0	南方海、北方往還道	佐右衛門	文吉→軽井沢加藤八郎右衛門	加藤定七
軽井沢	軽井沢	2畝	12.1.□	5.0.0	南方海、北方往還道 西方悪水堀際除	□	軽井沢鶴屋八郎右衛門 ※間に貼紙あるか不明	加藤八郎右衛門
軽井沢	軽井沢	8畝15歩	17.2.4	14.3.6	南方海、北方往還道 東方悪水堀際除	佐右衛門	七右衛門、藤助(両者の関係不明→二分割)	三分割カ
軽井沢	軽井沢	8畝15歩	16.4.2	15.1.□	南方海、北方往還道	□		中村三郎兵衛 竹内平吉
軽井沢	軽井沢	15歩	4.3.0	3.1.8	南方海、北方往還道	□	軽 平吉	竹内平吉
軽井沢	軽井沢	1畝12歩	12.4.2	3.3.8	南方海	□		竹内平吉
軽井沢	軽井沢	2畝	16.2.4	3.3.6	南方海、北方往還道	上と同じ		竹内平吉
軽井沢	軽井沢	7畝21歩	15.5.4	14.3.0	南方海、西方道	□郎右衛門		大野文治郎 稲葉八助 平野勘六
軽井沢	軽井沢	6畝21歩	17.2.4	11.3.6	南方海、西方道	□郎右衛門		稲葉八助 平野勘六

[出典]宝暦13年「武蔵国橘樹郡神奈川青木町新田検地帳」(購入地方文書、青木町名主文書、横浜開港資料館所蔵)。

密な字境の位置はわからないため、以下では明治五年の字に便宜上したがう。

上台町の新地はいずれも南側が往還とされ十坪ほどの狭小な土地である。位置は不明だが、東海道の山側で、大日堂周辺のものと同推測される。

一方、軽井沢の土地は比較的大きい。いずれも南側が海、多くは北側に往還が通る屋敷地で、合計二四筆、二八一一坪となる。元禄八年の検地帳に記録された屋敷地は一九筆、合計一五三九坪であった。十八世紀に海側の宅地化が進み、筆数にして倍以上、面積で三倍近くに拡大したことがわかる。また、後述する海岸築出新地は、軽井沢で合計四七九坪分であった。

「横浜実測図」をみても、軽井沢山側の宅地はいずれも小さく、農地が広がっていた(図6)。近世中後期においてとくに海側の顕著な拡張があったといえる。この点は、近世後期における芝生村の河岸付き百姓の台頭と平行しており、八王子街道へとつながる立地のもと、神奈川宿の周縁の都市化、とりわけ水辺の空間の拡大が進行したことを示している。

### 3 青木町の「海岸築出新地請名寄帳」と「海面請地名寄帳」

先述した青木町検地帳の残存状況のなかで、以下に挙げる二つの台帳は青木町における都市空間の具体的な一面を、町の大部分にわたって記録する貴重な資料で、空間・住人の復元作業の基軸となる。そして、屋敷地地尻の埋立地と海面を記録した台帳として、とくに水際の空間について示唆を与える資料である<sup>六七</sup>。

#### (1) 弘化元年「海岸築出新地請名寄帳」

〔資料6〕

青木町

従瀧之町 屋敷地尻附

至軽井沢

一、海岸築出新地六反六畝歩

此地代永八百五拾八文 但反永百三拾文

此小前

字瀧之町

一、間口四間 此御改地 四歩 壹番(朱書) 萬助

奥行二間

(以下同様の書きだし。中略)

右者天保十四卯年九月、当御支配御代官関保右衛門様御手代中村条助様・山口定八郎様御見分、青木町海岸築出新地御取調有之、翌弘化元辰年方地代永上納被仰付候、以上

弘化元辰年十二月 青木町

名主

源太左衛門

造成時期についての記録はないが、瀧之町から軽井沢までの屋敷地地尻の埋立地八四筆を書きだしている(表6)<sup>六八</sup>。各筆は字ごとにまとめられており、「見分」に基づく間口・奥行・面積、名請人の名が記載される。名請人に関する情報は基本的に名前のみである。また、名請人の変更は貼紙で示されており、明治初頭まで台帳として更新されていたことがわかる。

萬助が名請人となっている築出新地の面積は四歩と記載され、間口と奥行を掛け合わせた八歩のちょうど半分の数となっている。この関係は全ての筆に共通し、検地帳に記録される通常の屋敷地にはない課税上の特質である。

#### (2) 安政五年「海面請地名寄帳」

〔資料7〕

安政五年年、当御支配御代官小林藤之助様御役所江願上、海面請地御聞濟相成、同年方来ル戊辰年迄五ヶ年季請、壹ヶ年藻草永五百文、五ヶ年分合永式貫五百文午年一時上納

(文久三年に延長を願い出て許可された旨。中略。)

但、永方取立之儀者、請地横長間数御水帳表口間数不引合二付、仍而御水帳表口

間数江割付取立候事、御水帳表口間数壹尺二付永三分六厘八毛宛

青木町字瀧之町源太左衛門屋敷尻東角方

字元町利右衛門屋敷尻西角迄

一、海面請地五町九反八畝歩

但、沖之方江海面縄先 六拾間

横 長二百九拾九間

此請地、人居屋敷表間口

御水帳面

二百三拾間三尺五寸

(貼紙) 内

三町八反式畝七分 明治五年

壬申

埋立

引残

二町老反五畝廿三分

請地

此小前

字瀧之町

御伝馬五分役

御水帳名請割地

一、間口二間七寸五分

源太左衛門

(以下同様の書きだし。中略)

一、右之通、相違之無候以上

安政五年二月 名主

源太左衛門

屋敷地地尻の海面を、水帳表間口を単位にした請地として瀧之町から元町まで四九筆分記載している(表6)。奥行は六〇間で統一されており、課税の単位となっている間口は、請地の間口を屋敷地の表間口に割り当てたものである。実際に水帳の間口は合計で二三〇間三尺五寸、請地の合計の間口は二九九間となっており大きな差がある。

「海岸築出新地請名寄帳」と同様で、明治初頭までの異動が貼紙によって示される。最も新しい記録は明治五年の瀧下町・宮洲町の埋立による海面請地の面積の変更である。また、明治期の旧土地台帳には所有者が「青木町共有」、地目が「船入堀」または「沼沢」の土地が登録されており、明治期まで請地が残存していたようである<sup>六九</sup>。そして、「御代官

小林藤之助様御役所江願上、海面請地御開濟相成」とあることから、海面を請地とすることは住人側からの要望であったことがわかる。

各筆は、「御伝馬：軒役 間口…」とある上段部分と、水帳名請人と海面請地の名請人が記載された下段によって書きだされる。上段の「：軒役」の部分が「一軒役」以外の記載の場合は必ず水帳の名請人が「：割地」となっており、次の筆も同様の人物の名前で「割地」と記載されている(表6の「伝馬役」「水帳請人」の列を参照)。そしてその二筆は上段の「：軒役」の部分が必ず合計して一軒分になっている。したがって、「一軒役」とあれば屋敷地一筆分、「五分役」のようにある場合は屋敷地一筆分を分割した間口であることを示しているのだろう。

なお、元町までの軒数は、一番(五分役)から数えて三七軒分である。次節で提示する復元図(図7)のとおり、明治の地番でいう九番地に海面請地の一番が該当すると考えられるので、あと五軒分ほどが東につくと思われる。山側・海側で同じ軒数として概算すると、八五軒分ほどとなり、伝馬役五十足分の屋敷八二軒に匹敵する。七軒町も伝馬役屋敷の外側であったのだろうか。詳しくは今後の課題としたい。

次節では、(1)、(2)の帳簿を用いて、青木町東側(瀧之町から下台町まで)の空間復元を試みる。

## 五 青木町の海岸―宿と湊―

### 1 青木町の空間復元方法

「海岸築出新地請名寄帳」と「海面請地名寄帳」は、名請人の順序が一致し、旅籠屋の町並図とも対応することから、ともに実際の空間に基づいて書上げられたものであることがわかる。名請人が共通する筆の間口寸法は、屋敷地の海岸側と街道側の差が認められるものの、ほとんど同一のである。よって、名請人の共通する海面請地と海岸築出新地は、空間的に対応すると考えて間違いないだろう。表6には、対応する海面請地と築出新地を同じ行にまとめた。

つぎに、両台帳に記載された寸法から屋敷地割、海面請地の間口割、築出新地の作図をおこない、実際の都市形状にあてはめた。ベースマップには「横浜実測図」を利用した。旧土地台帳から字境を特定し、「海面請地名寄帳」に記載された屋敷地の表間口を「横浜実

測図」上に作図すると、大きなずれは見られない。よって、瀧之町から元町までの間は海面請地の場所が特定でき、同名の名請人となっている築出新地の位置も比定される。さらに、明治以降の商人録によって数名の地番が特定できる<sup>71)</sup>。

以上は、「海面請地名寄帳」に記載された水帳表間口や地番の特定によってある程度正確な位置が把握できた部分である。くわえて字ごとの築出新地の間口の合計が字全体の海岸線の長さに相当する七軒町の場合は、比較的正確な位置が割り出せる。築出新地の間口分割は、「横浜実測図」に描かれた地割とよく合致する。

台町に関しては、築出新地番号六一番の与右衛門が明治期の六七番地（伊東与右衛門）にあたることがわかり、五一番から六一番までの築出新地の合計間口が六七番地以东の海岸線の長さに相当するため場所が特定できる。七軒町と同様に、築出新地の間口割と明治の地割は符合する。また、台町は小字の下台町と上台町からなるが、西側の上台町の地尻はいずれも崖地となっており、海側の屋敷地は非常に狭小である。台町の築出新地は比較的大規模であるため、台町のものとして登録された築出新地は下台町のものであると考えると良いだろう。このように推測すると、六七番地以西の築出新地の位置も、多くは明治期の土地の間口との対応から場所を比定することができる（築出新地六二番～六六番）。

以上から、場所によって蓋然性は異なるものの、瀧之町から下台町の範囲で築出新地・海面請地の位置が明らかになった（図7）。軽井沢の築出新地は、



図7 築出新地復元図（「横浜実測図」、「海岸築出新地請名寄帳」、「海面請地名寄帳」から作成）

字瀧之町から下台町について、台帳に記載された寸法から屋敷地表間口と海岸築出新地（地番が特定できたものを太線で表現）の外形を示した。赤：旅籠屋、青紫：廻船問屋、青緑：仲買（推定含む、斜線は複数候補の者）。上段から、海面請地の番号、表間口割、海面請地の名請人（以上は字瀧之町から元町まで）、築出新地の番号・名請人、字という順序で記載した。明治期の地番は○を付けた数字で表した。下台町の西側の塗りつぶしは、「横浜実測図」に表現された崖を示す。また、明治初頭に造成された瀧下町・宮洲町（瀧之町～宮之町地先）、七軒町代地・鉄道用地（元町～台町地先）を白の破線で示した。

表 6 青木町の地番、海面請地、築出新地、生業の対応表

地番	「海面請地名寄帳」				「海岸築出新地名寄帳」		貼紙	生業
	No	伝馬	水帳名請	名請人	No	名請人		
瀧之町(1～10 番地)								
9	1	0.5	御水帳名請割地	源太左衛門				本陣(a)
	2	1	御水帳名請	源太左衛門				
	3	1	御水帳名請	源太左衛門				
10	4	1	三郎右衛門	直五郎				
					1	萬助		
久保町(11～17 番地)								
11	5	0.4	庄兵衛割地	吉兵衛				旅籠屋(a)
	6	0.6	庄兵衛割地	仁左衛門				
	7	1	御水帳名請	仁左衛門				
12	8	1	七郎兵衛	新八	2	新八		旅籠屋(a)、注 12(e)から 12 番地であることがわかる。
	9	1	久左衛門	新八	3	新八		
					4	平兵衛	嘉永 4 年 2 月 新八(1)	
13	10	1	伝伝左衛門	源吾	5	源吾 五番佐七郎	明治 2 年 12 月 紀伊国屋佐右衛門 (3)	旅籠屋(a)
14	11	1	甚五兵衛	惣右衛門			同上 (2)	
15	12	0.5	十郎左衛門割地	才三郎				旅籠屋(a)
16	13	0.5	十郎左衛門割地	長兵衛				
17	14	1	伝右衛門	佐兵衛	6	佐兵衛		旅籠屋(a)
宮之町(18～28 番地)								
18	15	1	五兵衛	敬五郎	7	敬五郎	文久元年 11 月 八郎兵衛 (3)	仲買(c)*
	16	1	安兵衛	八郎兵衛	8	八郎兵衛		
19	17	1	弥右衛門	次兵衛	9	次兵衛	十番 藤平 (1)	旅籠屋(a)
20	18	1	甚右衛門	藤兵衛				
21	19	1	九右衛門	政五郎	10	政五郎		旅籠屋(a)
22	20	1	源七郎	浅右衛門	11	安五郎か	弘化 4 年 12 月 浅右衛門(1)	旅籠屋(a)
23	21	1	喜右衛門	藤兵衛	12	藤兵衛		
24	22	1	七兵衛	八郎兵衛	13	清蔵	天保 15 年 3 月 八郎兵衛(1)	仲買(c)*
25	23	1	留兵衛	専次郎	14	専次郎		旅籠屋(a)
	24	1	利兵衛	専次郎	15	専次郎		
26	25	1	安右衛門	三郎兵衛	16	三郎兵衛		
27	26	1	三右衛門	八十七	17	八十七		
28	27	1	御水帳名請	彦兵衛	18	彦兵衛		
元町(29～44 番地)								
29	28	0.5	十郎右衛門割地	藤七	19	藤七		旅籠屋(a)
	29	0.5	十郎右衛門割地	次右衛門	20	次右衛門		
30	30	0.32	新右衛門割地	又兵衛	21	又兵衛	明治 2 年 11 月 元町松井三吉(3)	米穀商(d)
	31	0.68	新右衛門割地	三吉	22	三吉		
31	32	0.4	与右衛門割地	庄右衛門	23	庄右衛門		
32	33	0.6	与右衛門割地	与右衛門	24	与右衛門		石材商(d)
	34	0.5	半七郎割地	与市	25	与市		
33	35	0.5	半七郎割地	佐兵衛	26	五兵衛	嘉永 5 年 12 月 佐兵衛(1)	佐兵衛は呉服屋(d)
	36	0.61	佐太郎割地	佐兵衛	27	五兵衛	同上	
34	37	0.39	佐太郎割地	喜助	28	喜助		
	38	0.16	権左衛門割地	喜助	29	喜助		
35	39	0.84	権左衛門割地	三郎兵衛	30	三郎兵衛	文久元年 9 月 4 間 5 尺×4 間 9 寸 半左衛門(3) 4 間 5 尺×4 間 2 尺 1 寸 清右衛門、慶応 3 年 4 月 浅次郎(1)	
36	40	0.5	善左衛門割地	次郎右衛門	31	次郎右衛門		旅籠屋(a)、廻船問屋に次郎右衛門がいるが詳細不明(b)。
37	41	0.5	善左衛門割地	孫兵衛	32	孫兵衛		廻船問屋(b)
	42	1	権三郎	孫兵衛	33	孫兵衛		
38 39	43	0.7	三郎左衛門割地	三郎兵衛	34	三郎兵衛か	明治 2 年 4 月 質物(1 年季) 宮之町榊村専次郎(3)	
40	44	0.3	三郎左衛門割地	甚兵衛	35	甚兵衛	明治 2 年 11 月 質地(2 年季) 元町鴨居屋藤兵衛(3)	廻船問屋(b)
41 42	45	0.5	八左衛門割地	儀右衛門	36	儀右衛門	明治 4 年 11 月 引当、松井三吉へ(3)	
43	46	0.5	八左衛門割地	新助	37	新助	明治 2 年 4 月 質地(2 年季) 元町鴨居屋 藤次郎(3)	貼紙の鴨井屋藤次郎は仲買(c)
	47	1	半兵衛	藤兵衛	38	藤兵衛		仲買(c)
	48	0.425	長兵衛割地	藤兵衛				
44	49	0.575	長兵衛割地	利右衛門	39	利右衛門		

地番	「海岸築出新地名寄帳」			生業
	No	名請人	貼紙	
七軒町(40～57 番地)				
45	40	藤兵衛	文久 2 年 4 月 啓次郎	
46	41	清兵衛		
47	42	太次郎		
48	43	清一郎		
	44	清一郎		
49	45	利兵衛	明治元年 11 月 七軒町清次郎	仲買(c)
50	46	利兵衛		
51	47	三郎兵衛		廻船問屋(b)
	48	藤兵衛		鴨居屋。 仲買か(c)
56	49	金五郎		廻船問屋(b)
57	50	清八	嘉永元年 4 月 銀次郎	
台町(下台町は、58～74 番地)				
58	51	与八		
59	52	清一郎		
60	53	幸次郎		
61	54	太次郎	嘉永 3 年 11 月 台町大野屋喜八	仲買 (c)*
62	55	藤兵衛		
63	56	藤兵衛		
64	57	勘兵衛		
65	58	勘兵衛	弘化 2 年 11 月 三郎兵衛	仲買(c)
			安政 3 年 11 月 弘明寺林 八右衛門	
			慶応 3 年 4 月 下 台町吉次郎	
66	59	太兵衛		廻船問屋(b)
60	太兵衛			
67	61	与右衛門		酒店(d)
68	62	銀次郎		仲買(c)
69	63	彦四郎		廻船問屋(b)
70	64	太次郎		仲買 (c)*
71	65	惣五郎		
73 ?	66	伝右衛門	与七	

「地番」列には「横浜実測図」の地割と水帳表間口の対応から対応関係を推測して示しているが、他の資料から地番が特定できたものはゴシック体で示した。「海面請地」「海岸築出新地」は、それぞれに番号を付し、「No」の列に記した。「伝馬」列は五歩役なら 0.5 というように略記。「貼紙」列は文末に(1)「海岸築出新地請名寄帳」のみ、(2)「海面請地名寄帳」のみ、(3)両方で共通、の記号を付した。「生業」列には把握できた限りの生業を記載している。廻船問屋・仲買で候補が複数の者は「\*」を付した。末尾の記号は生業の根拠となる資料を文末注 68 の記号で示した。

[典拠] 弘化元年「海岸築出新地請名寄帳」、安政五年「海面請地名寄帳」(横浜開港資料館所蔵、注 67)、「横浜実測図」(注 63)。

名請人の情報が少なく、筆数も少ないことから特定が困難であった。

なお、安政七年には宮の河岸両側の彦兵衛・藤七の地尻を埋め立てることで舟会所が置かれるが<sup>76</sup>、基本的には築出新地と屋敷地の合計が明治期の宅地になると考えられる。

最後に、こうして位置の特定ができた築出新地の名請人について、廻船問屋関係文書（宿場の町並図、明治期以降の商人録を用いて生業の把握を試みた（表6の「生業」の列を参照）。町並図から海側・山側の区別ができ、往還沿いの順序も把握できる旅籠屋や、商人録に名がのこる一部の人物がまず比定できる。つぎに、青木町海側に居住していたと考えられる廻船問屋・仲買については<sup>77</sup>、具体的な位置のわかるものが少なく、複数の同一名称の名請人がみられるので確定することはできないが、少なくともその候補者とすることはできるだろう。くわえて、前節でみた青木町の検地帳から、たとえば七軒町の三郎兵衛が中村三郎兵衛（廻船問屋）であることなど、貼紙の記載から苗字が明らかとなった人物もいる。

以上の作業から、部分的ではあるが、築出新地・海面請地の名請人の生業が明らかとなった。空間・住人の網羅的な復元というには不足であるが、この作業をもとに具体的な考察をおこないたい。

## 2 築出新地と水際空間の具体像

### (1) 間口分割の検討と「築出新地」の示す意味

まず、両台帳の項目をまとめた表6から所有物としての性格を検討しよう。海面請地と築出新地の名請人は、人名・順番とよく一致する。貼紙によって示される名請人変更も時期・内容とも共通する。両者にずれがみられるのは、(1)築出新地四番のような安政五年以前の変更、(2)海面請地二一番のように対応する築出新地がない場合、(3)築出新地三〇番のように奥行方向に分割された築出新地のうちの陸側の筆の変更の三パターンだけである（表6の「貼紙」の列の末尾(1)・(3)を参照）。したがって、両者は一体的な所持によっていたと考えられる。一方で築出新地・海面請地の名請人は、「海面請地名寄帳」に記載された水帳の名請人とは一致しない。以下では、この傾向が顕著な字元町を中心に検討したい。

図8には、水帳の表間口と水帳の名請人、築出新地の形状と名請人、海面請地の名請人を示した。築出新地・海面請地の間口および名請人と、水帳の分割・名請人との間にずれ

が顕著である。また、水帳の表間口に割り当てた海面請地だけではなく、築出新地の間口割も屋敷地の名請人ごとに分割されていることが明らかである。

図9には、元町で呉服屋渡世をおこなっていた太田佐兵衛（海面請地三五、六番、築出新地二六、七番、明治期の地番は三三番地）の慶応三（一八六七）年における屋敷平面図を示した。慶応三年のほかに嘉永七（一八五四）年、安政三年の記載のある屋敷絵図が残る<sup>78</sup>。表間口が八間ほどであることは共通しており、水帳の名請人による間口の分割は具体的な形状としては認められない。おそらく、ひとまとまりの地面として機能していたの

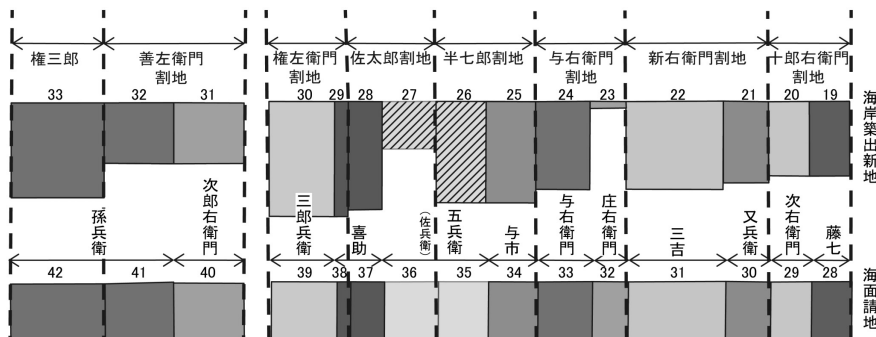


図8 元町における分割復元図

上から、水帳請人ごとの間口割（破線でも表現）、水帳請人名、築出新地の番号、築出新地の形状、築出新地・海面請地の名請人名、名請人ごとの間口割、海面請地の番号、海面請地の順に表した。図9の茅木屋は斜線を付けて示した。

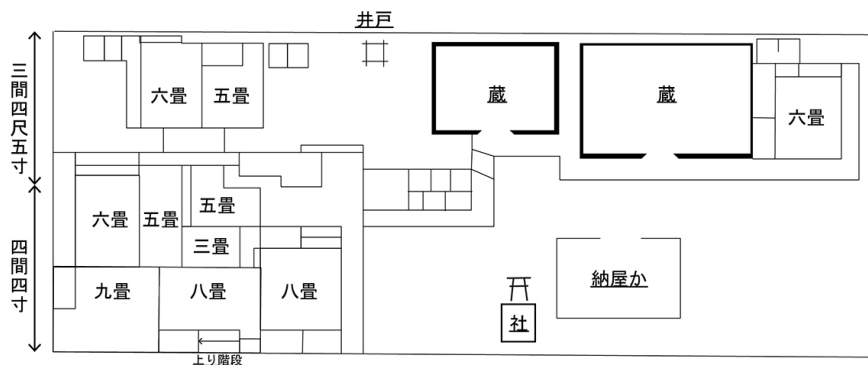


図9 慶応三年の茅木屋の平面概要図（青木町太田佐兵衛家旧蔵文書、横浜開港資料館所蔵）  
水帳表間口の分割と屋敷地利用は具体的な形状として見られない。また、図の右側が南方であるが、海までの表現はなされていない。

だろう。つまり、「海面請地名寄帳」に記載された表間口と水帳の名請人は、安政五年時点の状況を表していないことが推測される。御伝馬一軒役ごとのまとまりと築出新地・海面請地の間口割のずれ、そして両者の名請人の不一致は、当時の屋敷地所持と築出新地・海面請地の所持との乖離を表しているのではなく、水帳が作成された後に屋敷地の分割が変化していることを示しているのではないか。

これは、「海面請地名寄帳」の資料的な性格であり、あくまでも参照用の情報として、元禄八年作成の水帳に記載された屋敷地の名請人と屋敷地割が書かれていたと考えられる。第四節一項にてみた神奈川町の検地帳と共通する性格である。

生業の比定に利用した幕末期の資料や明治以降の商人録に、水帳の名請人の名前をほとんど見つけることができない。一方で、先述した元禄八年の居山検地帳には、末尾に案内人が書きだされており、名主源太左衛門、年寄十郎左衛門、三ツ沢名主三右衛門、軽井沢の三郎右衛門・新右衛門・与右衛門など、水帳の名請人と同一名称の人物が複数みられる。このすべてが「海面請地名寄帳」に記載された人物と同一であるかはわからないが、水帳作成当初の名請人・分割が参照されていたことを裏付けるものであろう。

そして、「横浜実測図」に描かれた明治前期の地割と「海面請地名寄帳」に書かれた表間口とを比較すると、明治前期の地割は、一軒役ごとのまとまりよりもむしろ、海面請地の名請人ごとのまとまりとよく一致する(表6「地番」の列を参照)。貼紙による変更がなされている箇所を検討すると、訂正後の名請人ごとのまとまりの方が明治前期の地割と一致する。名請人の変化は屋敷地所持の変化と同期していたのであろう。また、太田佐兵衛や伊東与右衛門(表6の六一番)が旧土地台帳に載る土地所有者であることも、両台帳の名請人が屋敷地所持者であったことを示すものである。

さらに、青木町に残る屋敷地証文を交えて検討したい。屋敷地に関する記載がある資料は台町に五点、久保町に一点確認される(表7)<sup>七五</sup>。台町の屋敷地証文のなかで特に注目すべきは嘉永三年の質地証文Eであり、「築出新地」の記述がみられる。彦四郎名請の築出新地と面積の記載が一致しており、表6の六三番(六九番地)に該当すると考えられる。そして、彦四郎が所持していた屋敷地について、元禄八年の水帳で九右衛門が名付、表間口が十間九寸、奥行十四間半となっていることを併記している。

このことは、嘉永期においてなお、屋敷地の言及のために水帳作成当初の情報が参照されていたことを表している。安政五年の「海面請地名寄帳」において、水帳作成当初の情

報が参照されていても不思議はなく、元町における推測の傍証となろう。また、築出新地が屋敷地に付随する土地として扱われていたことが理解される。

久保町の屋敷地証文Fは、享保十七(一七三二)年に十兵衛が所持していた間口八間五寸、奥行三十間の屋敷地のうちの半分を、相模屋長兵衛に対して質にいたれたことを示す。この屋敷地は、海面請地の一二、三番に対応した、表間口が四間二寸五分の割地に該当すると考えられる。分割された地所が質に流れたのかどうかは確認できないが、長兵衛が海面請地の名請人になっていることは、屋敷地の権利が移動したことを示唆しているよう。そして、元禄の居山検地帳には、水帳請人と同名の十郎左衛門が認められる。享保十七年における半分の屋敷地の質入れがきっかけとなって、元禄期には十郎左衛門の所持していた一筆が、安政五年の段階では才三郎・長兵衛の両人に二分されて所持されていたのではないだろうか。

以上から、「海面請地名寄帳」に記載された水帳の名請人と間口割は、水帳作成時(元禄八年)における屋敷地の所持者と分割であると考えられる。享保期に役負担が高割になる以前の<sup>七六</sup>、伝馬役と屋敷地間口割が対応していた状況をよく示しているといえるのではないだろうか。

表7 青木町の屋敷地証文

	年代	文書名	場所	屋敷地の大きさ	水帳名付	質物主	質入先
A	元禄9(1696)	永代売渡シ申家敷之事	台町南側	表口十間裏行海に至迄有次第	-	九左衛門	甚兵衛
B	正徳3(1713)	駕遺跡ニ遣ス証文之事	台町	表口十間裏行海端迄之屋敷家(家屋敷か)、家財蔵等、商売物(ほか、他所に所持する田畑)	-		婿入りの際の、山田甚兵衛から彦四郎への譲渡
C	享保16(1731)	相渡申質物家屋敷之事	台町	表間口十間九寸裏行有次第 立屋七間半裏迄五間半	-	青木台町 彦四郎	- (虫損)
D	宝暦8(1758)	質物ニ相渡申屋敷之事	台町	十間九寸、十四間半	元禄八年九右衛門	台町 彦四郎	- (後欠)
E	嘉永3(1850)	質物相渡家屋敷証文之事	台町	表間口十間九寸奥行十四間半、四畝廿五歩 御水帳面九右衛門 外二畝五歩天保十五辰年築出新地。右地所表間口五間半奥行六間半建家一ヶ所、土蔵三ヶ所	元禄八年九右衛門	台町 彦四郎	神奈川町 宗次郎
F	享保17(1732)	質物相渡申家屋敷之事	久保町海側	表口八間五寸裏行三十間之家屋敷のうち、表口四間二寸五分裏行有次第之家屋敷	御水帳之通り我等数年所持	青木久保町 十兵衛	相模屋長兵衛

[典拠] 軽部亀松収集文書、相模国武蔵国各郡文書(神奈川県立公文書館所蔵)、神奈川宿青木町相模屋文書(横浜市立歴史博物館所蔵)より作成(注75)。

対して、築出新高と海面請地の名請人は弘化から安政期における屋敷地所持者であろう。

御伝馬一軒役分を分割した間口を二筆分所持するものが多くみられる傾向からは、元禄八年の水帳作成以後、屋敷地の所有が分割・統合され、役の単位と即応しない分割へ変化していたことを示している。台帳から復元される形状は複雑だが、元禄八年の水帳作成以降における屋敷地の増分を、再編成される所有境のなかで書きだした結果であるといえる。

神奈川町の検地帳においては、裏手の畑地の屋敷地への変化は貼紙による修正で処理されていた。「海岸築出新高」とは、こうした元禄八年当時からあった陸地の屋敷地化ではなく、新たに形成された地面であったことが理解される<sup>七〇</sup>。また、既存の屋敷地に付随する点が、新田検地帳に記載される新地とは異なる点であろう。

築出新高の造成時期については、嘉永三年の質地証文Eの「天保十五辰年築出新高」という記載、「海岸築出新高請名寄帳」の序文の記載（資料6）があるが、天保十四年前後に一帯に埋立がなされたのか、徐々に進化した新地の形成を天保十四年に見分れたのが明らかにはならない。この点については屋敷地証文における奥行寸法の表現に着目したい。

証文Eに「表間口十間九寸奥行十四間半 四畝廿五歩 御水帳面九右衛門 外二畝五歩 天保十五辰年築出新高」と書いてあることから、「表間口十間九寸奥行十四間半」とは元禄の水帳の寸法であると考えられる。証文Dも水帳の所持者を記載していることが共通しており、屋敷地の寸法として同じ値が記載されていることから、元禄の水帳の寸法であろう。対して、こうした証文DとEのほかは、奥行きを「海に至迄有次第」「海端迄有次第」というように曖昧に表現している。こうした表現は、課税上の寸法としての水帳寸法と、実際の陸地の寸法が異なるものであったことを推測させる。証文作成当時における新しい陸地の表現、または将来的な屋敷地の延伸を前提とした表現であると言えるのではないだろうか。

「海岸築出新高請名寄帳」の作成が意味するものは、屋敷地裏側における、水帳寸法外の空間利用に対する調査・課税なのではないか。そして、その寸法は元禄八年から天保十四年の間に拡張された陸地の大きさを示していると考えられる。

## （2）分布の傾向と開発の性格

台帳に記録された築出新高が元禄八年以降の屋敷地の増分であることが明らかになったが、その分布は青木町全体にわたっている。これは築出新高の造成が、限定された場所や

生業のもとに行なわれていたのではなく、町全体にわたる地形条件のもとに実現されたことを示している。まず、山のせまる狭隘な都市空間であったという青木町に共通する地理条件のもとで、地先海面の埋立が屋敷地拡張の有効な方法として共有されていたことが推測される。

近世における横浜市域沿岸部の地理条件を整理した岸上興一郎は、鶴見川から大岡川河口の間は湾入した内海となっており、沿岸は砂州が発達していたとする<sup>七八</sup>。安政五年の浮世絵には宮之町の地先に「宮洲汐干」と名付けられた寄洲が描かれており<sup>七九</sup>、「横浜開港場見聞記」の万延元年五月の記事は以下のとおりである。

〔資料8〕<sup>八〇</sup>（引用元のルビを○に入れて記す。）

英吉利蒸気船自丈九尺余・巾七尺余・高サ五尺程有白木ノ箱ヲ乗、船ニテ宮ノ河岸沖エハシケ来候所、汐（シヲ）干ケレ共是非直ニ旅館エ荷次ト申ニ付、鳶人足セビニテ汐干エ下（オロス）、殊ニ大汐ニテ沖自問屋徒歩役右箱ヲ四天ニ致、廿四人ニテ重ク荷次（カツギ）、様々宮ノ河岸見張御役所前ニ下御見分有、其砌宮ノ河岸エ見物人夥數有、旅館浄灌寺エ人足ヲ増荷次（カツギ）行ケル

干潮の際には舁でさえも使えないほど海が浅くなっていたようである。青木町全体の地先の状態を具体的に明らかにすることはできないが、こうした寄洲が埋立の素地となっていたことが推測される。神奈川宿の隣町である芝生村では寄洲を利用した新田開発が、子安村では海面請地に形成された寄洲を利用した埋立造成が明治初頭になされている<sup>八一</sup>。そして、品川の歩行新宿・南品川宿<sup>八二</sup>、玉井哲雄の分析した函館にも類似した埋立が見られる<sup>八三</sup>。こうした事例は地先の海が浅いものであった点が神奈川と共通する。築出新高の造成は、遠浅な海に生まれる寄洲を固めて地面とするような、自然の変動と不可分な側面をもっていたのではないだろうか。

次節では、青木町の主要な都市機能である廻船業と旅籠屋が、埋立によって拡張された屋敷地において、海との一体性をもちながら実現されていた例を示すが、水際の積極的な計画が必ずしも青木町全体でおこなわれていたわけではないと思われる。図9に示した茅木屋佐兵衛の屋敷絵図には屋敷地裏の表現がなされておらず、嘉永期・安政期の絵図も同様である。最も奥まで表現された慶応期の絵図でさえも、横浜実測図における宅地の奥行の六割程度である二十間分ほどまでの表現に留まっている。築出新高の造成が必ずしも積

極的な水辺の空間利用、とくに建築をともなうような行為へ直結していなかったことを示している。

水辺利用については、青木町においては海岸が芥捨て場として利用されたことが知られる<sup>八四</sup>。「海岸築出新地請名寄帳」から復元された新地は、神奈川宿内で、ひいては遠浅な環境では一般的な行為としての埋立造成の結果であり、水際までの空間計画とは同義ではなかったことが推測される。この点は、伊藤毅の指摘した水辺に背をむけるような居住の形式によく合致しているといえるだろう<sup>八五</sup>。

### 3 個別事例

最後に、具体的な場所として、下台町周辺と、久保町周辺について考察する。本章ですでに言及してきた通り、海岸築出新地の復元と人名の比定から、旅籠屋が元町の東側あたりまでに集中し、廻船問屋・仲買は七軒町・下台町に集中することが明らかとなった。神奈川湊の中核としての下台町と、水辺の飯売旅籠屋の林立した久保町周辺から、近世後期の神奈川の空間的な成熟を読み解きたい。

#### (1) 下台町―廻船問屋と海岸―

まず、表7にまとめた台町の屋敷地証文を検討したい。証文A～Eは、台町の間口十間前後の屋敷地に言及し、記載された人名がある程度共通することから、全て同じ屋敷地であることを示している可能性がある。ただここでは、少なくとも彦四郎の所持とされる表間口十間九寸の屋敷地に言及した証文C・Eが同じ屋敷地に関するものであるとするととどめ、内容を検討したい。

証文に登場する彦四郎は、嘉永六年の資料には小林彦四郎、明治二年の資料には山田彦四郎として現れる廻船問屋である<sup>八六</sup>。証文D、Eによれば、水帳の屋敷地寸法は間口十間九寸、奥行一四間半であるため、築出新地によってちょうど奥行が二倍に拡大したことになる。

つぎに、証文C、Eに書かれた家屋の記載をみると、享保十六年の時点では「立屋七間半裏迄五間半」、嘉永三年の時点では「右地所 表間口五間半奥行六間半建家一ヶ所、土蔵三ヶ所」とある。「右地所」が水帳記載の屋敷地と築出新地を合わせた土地を指し、寸法は建屋のものであると考えられる。すると、享保十六年から嘉永三年の間に建家は縮小して

おり、築出新地の造成後における屋敷地全体の面積に対しては、かなり小さいことがわかる。彦四郎が所持した屋敷地の配置を知る事はできないが、建屋部分が間口・奥行ともに小さく、大部分が土蔵や空地であったと考えられる。

絵図と写真から下台町の水際についてさらに検討したい。神奈川宿の住人の煙管亭喜莊による地誌「神奈川砂子」の挿絵「飯綱社」には、下台町の様子が海側からの視点で描かれている(図10)<sup>八七</sup>。後述の久保町周辺とは異なる描き方がなされており、間口方向に境界装置がない河岸地のような水際空間となっている。廻船から諸荷物を受け取り捌いていた廻船関係者が集まっていたことを考えれば、荷物の水揚げと引き請けのための空間として水際を共有していた可能性が高い。また、海側に並ぶ奥行の長い建物は、屋根材と壁の表現が表家とは異なっており、瓦葺の土蔵であることが読み取れる。

つぎに、明治期に撮影された古写真を見ると、海岸線に沿って建てられている塀と門が確認でき(図11)、「神奈川砂子」の描写と共通する<sup>八八</sup>。この点から、「神奈川砂子」の挿絵がある程度正確に描かれたと考えられるとともに、水際状況が地誌作成年の文政七(一八二四)年から明治期まであまり変化していなかったことがわかる。

築出新地の造成後に水際が共有されていたのであれば、一筆ごとに区々な状態で復元された築出新地も、実際には海岸線をそろえるように造成されたことが推測できる。先述の彦四郎が所持する屋敷地のなかで、建家の占める面積が小さかった点は、挿絵にみられる大規模な土蔵や河岸の機能をもつ共有の空地があったことで説明がつく。古写真をみると奥行の長い切妻屋根の建物が類似したかたちで並んでおり、おそらく彦四郎の事例から読み取れる敷地計画は二帯の典型であったのだろう。

東海道が坂道になっていたことも下台町の築出新地を理解するうえで重要である。当時の傾斜を正確に復元することはできないが、現在でも比較的東海道の形が残っている台町周辺においては、現状から地形を推測することが許されるだろう。「横浜実測図」をみると、下台町の宅地は全体的に奥行が深く、築出新地は現在坂となっている西側にも比定される。また、崖地を回り込むように造られた宅地も見られる(図12)。

海岸付近が海に近い高さになっていたと考ええると、地図には表現されない段差が屋敷地に内包されていたのだろう。「神奈川砂子」の挿絵「飯綱社」には、往還側の表家と海側の土蔵群のあいだに階段が表現されている。下台町における築出新地の造成は、段差によって区分された海側の空間を拡張、または生成する行為であったということができよう。山

所蔵元の許可を得られていないため非公開

門 段差

河岸地

東海道

所蔵元の許可を得られていないため非公開

塀と門状の構造物

図 10 描かれた台町の海岸（上）  
「神奈川砂子」（三井家旧蔵文書、  
国文学研究資料館所蔵）に加筆。

図 11 明治期における台町周辺  
横浜開港資料館所蔵写真（FA50-  
27-23）に加筆。  
図中に示した塀のほか、建ち並ぶ  
土蔵の隙間の塀や棧橋が写る。

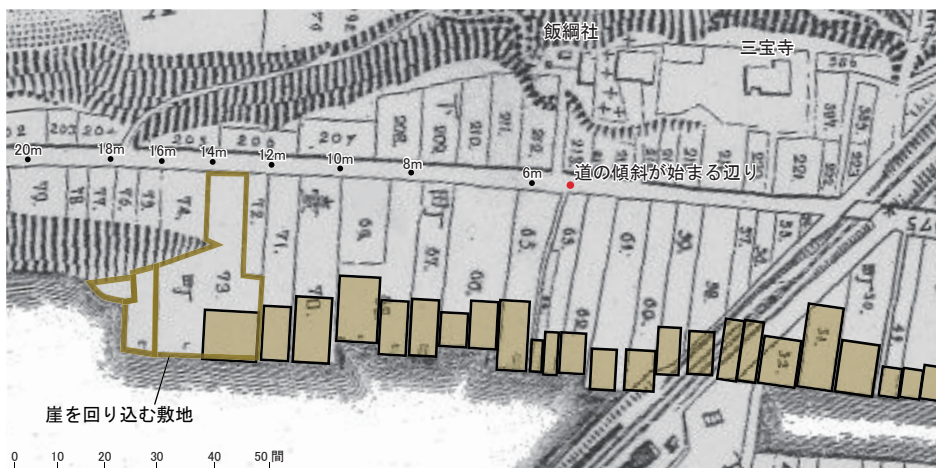


図 12 下台町の地形と築出新地  
「横浜実測図」に加筆。東海道に  
沿って黒の点の位置の標高を示し  
た（国土地理院にて公開される  
現状の標高 [https://fgd.gsi.  
go.jp/download/menu.php]）。

の迫る台町の立地において廻船取引の中核をつくろうとするきわめて積極的な開発意図が読み取れるのではないか。

下台町は海岸線の大半にわたって造成がなされており、築出新地の奥行は概して深い。中世以来の町場であった瀧之川周辺とは異なり、台町周辺が東海道の整備以降の新市街地であったことと関係すると考えられる。

西川武臣は神奈川町慶運寺の過去帳を分析するなかで、秀吉による侵攻による衰退の後、紀州からの出稼ぎの人びとが神奈川湊の再興に関わっていたとし<sup>八九</sup>、神奈川には「紀伊国屋」を屋号とする者が多いこともあわせて指摘している。また、大正七年の商人録『横浜社会辞彙』に収録された廻船問屋保見（津屋）太兵衛の由緒は、以下のとおりである。

〔資料9〕（句読点等追記）<sup>九〇</sup>

津屋主人保見太兵衛君は嘉永三年を以て青木町下台に生る。先祖は伊勢の津より出て三百余年系統連綿として九代を重ね、代々廻船問屋を以て業とし、西国・四国・諸国大名の用達を為し、船員の厄難頻々たるを以て加州侯典醫より起死回生の名薬を授けらる。即ち現在の神妙湯にて（中略）明治維新後は廻船問屋を廃して売薬専門となり

（後略）

津屋太兵衛は十七世紀前期（一九一八年の三百年余り以前）に伊勢から移住してきたということになる。神奈川湊廻船問屋が、十七世紀になって西国からの移住者によって担われたことを想像させる。

宿駅としての神奈川の周縁部に、近世以降の新たな町場として形成された台町周辺は、一方で、深さのある水域が近いという利点もあったとみられる。大型の廻船が停泊するようになった近世前期から中期において、廻船問屋の渡世の基盤として、台町は誠にふさわしい位置であったと考えられるのである。

神奈川湊の廻船問屋株が認められるのは享保六年であるが<sup>九一</sup>、元禄期以降に屋敷地が大きく拡大したことは、物資流通の基盤となる揚場や土蔵のために大規模な開発が行われたことを示しているのではない。資料3でみた廻船問屋・仲買による廻船荷物の独占的な取り扱いには、廻船荷物を揚げ降ろし、荷物を引き請ける保管の場が必要である。また、廻船問屋から仲買へと捌く際に想定される、市場的な場をも、下台町の海岸周辺に求めることができるのではない<sup>九二</sup>。海岸築出新地、もしくは前節にてみた下台町共有の海辺の新地がその機能を果たしたと想像される。

## （2）久保町―旅籠屋の海岸―

二つ目の具体例として、青木町東側の久保町周辺をみていきたい（図13）。旅籠屋が密度高く並ぶ宿駅の中心部であった。久保町周辺の築出新地は、下台町に比べてまばらであり、奥行寸法も小さい。しかし、この傾向が屋敷地の変化を否定するわけではない。「横浜実測図」をみると、山側の屋敷地にくらべ海側の屋敷地の奥行がかなり深く、青木町全体の中でも深い奥行をもったことがわかる。神奈川町の本町部分の形態から考えれば、初期的には南北で対称な奥行きであったことが想像される。久保町の三十間の奥行の屋敷地表7Aは、奥行二十間ほどの最古層の屋敷地と元禄期までの拡大分が内包されたことが想像される。

前項の下台町に比べて旧来の市街地である久保町一帯は、台帳に反映される時期より前に埋立が成熟しつつあったのだろう。つまり、元禄八年の水帳作成時点で、少なくとも幕末まで変わらない屋敷地の奥行きが実現されていたと考えられる。瀧之川河口付近に位置するために、堆積によって広い陸地が形成されやすかったことも要因であろう。

所蔵元の許可を得られていないため非公開

図13 「神奈川砂子」（国文学研究資料館所蔵）に描かれた久保町上：「青木街裏座舗」、下：「羽澤屋」

具体例として神奈川宿で有数の旅籠屋であった羽沢屋（一七番地）をみたい。羽沢屋には文政八年の屋敷図面が残っており、空間構成を具体的に知ることができる（図14）<sup>九三〇</sup>。

まず、前面部は右手が水回り、左手が座敷、中央に廊下が通る。貼紙による修正が多く、作成当初の状態が推測し難いものの、主屋・付属屋・蔵からなるひとまとまりの平面形式をくくりだすことができる。対して西側の廊下を介してつながる後方部分は別個のまとまりとしてしつらえられた室である。

後方の座敷は、「神奈川砂子」に描かれており、海を臨む客席であったことがわかる。敷地後方の座敷は東西に並んだ形になっており、それぞれに庭園が一つずつ造られている。東側の庭園は、石垣によって海へ迫り出すように造成されており、木造と思われる舞台が海へ向かって設けられている。また、東西の庭園の境には「橋上り場」と書かれており、先に進むと土間の空間があることから、海からのアプローチがあったこともわかる。

西側の庭園からは西隣の敬五郎の屋敷地へつながるような表現がなされ、両者が何らかのつながりをもっていた可能性がある。羽沢屋の旗竿状の敷地との関係は難解であるが、敬五郎が名請人となっている築出新地は西側の庭園の一部に、海面請地はその地先の海面にあたるのではないだろうか（表6海面請地一五番、築出新地七番）。羽沢屋の店主佐兵衛の築出新地は間口六間一尺、奥行四間であるため寸法としてはやや小さいが、迫り出した東側の庭園に該当すると考えられる（築出新地六番）。

以上のように、陸側とは別個の平面計画がなされ、複数の座敷が確保されて海への眺望を備えている点からは、海側の空間が客室のための固有の価値をもっていたことを示している。瀧之町・久保町の手前の海側からの景観を描いた「神奈川砂子」の挿絵「青木街裏座舗」には、海に面した庭園と棧橋が描かれる。有数の旅籠屋であった羽沢屋は、周辺よりも迫り出した庭園と舞台を構えたやや特殊な事例であるが、景勝地であった神奈川宿のなかで、海側に立地した旅籠屋の多くが類似した水際空間を有していたと推測される。

#### 4 小括

結語のまえに海岸築出新地の性質についてまとめておきたい。まず、「海岸築出新地諸名寄帳」は、元禄八年の水帳作成以降における屋敷地の増分を記録したものである。そのとき対象とされたのは、元禄八年以降に新たに形成された地面であり、既存の屋敷地に付随した。

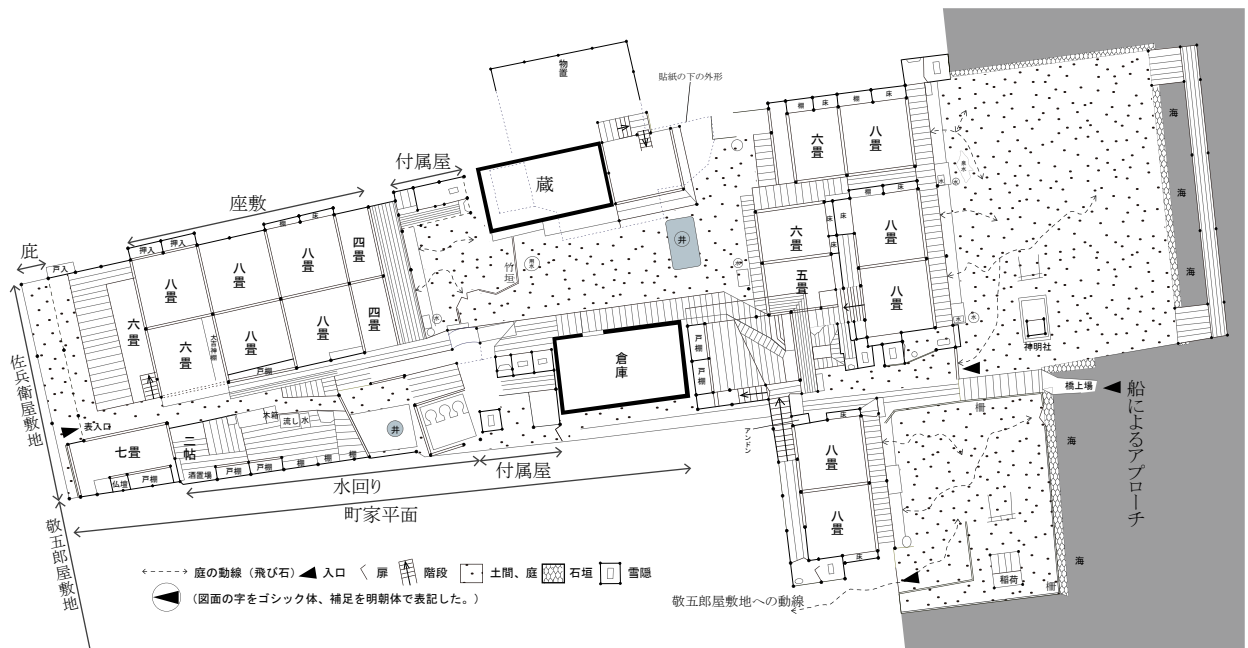


図14 羽沢屋（17番地）の平面図

横浜市歴史博物館所蔵「羽沢屋見取図」（文政八年）から作成。

下台町や久保町の事例からは、海に接した空間を優位な場所とする考えが読み取れる。築出新地によって延伸された屋敷地が、海際まで計画され、神奈川宿・神奈川湊の都市機能を実現する空間となっていたことは、近世後期の海岸開発の達成として評価することができるだろう。

ただ、下台町や久保町周辺に計画された水際空間は、災害によって破壊されるものであったと考えられる(資料2)。実際の半分の面積で築出新地の課税額が計算されていることは、確固たる地面とは異なる不安定な性質によるものではないだろうか。太田佐兵衛家の屋敷地利用とは対照的に、海際まで空間を利用して下台町・久保町の例からは、こうした流損のリスクがついてもなお、海岸が彼らにとって価値のある空間であったことを示している。

## 六 結語

以上、近世後期における神奈川についての概略と、屋敷地の変化、とくに水際の空間をやや詳しく検討した。近世後期の神奈川は、宿駅の中核たる東海道沿道の瀧之川両側を中心として、東に荒宿、新町、並木町、隣村の新宿村、子安村、西に台町、軽井沢、隣村の芝生村、南側は狛師町と小伝馬町、北側には瀧之川に沿って成仏寺の門前があった。こうした宿駅の中核の縁辺に広がる町場は、役負担上も分節されており、展開した生業も異なる者であった。近世後期の神奈川は、宿駅機能のまわりに展開する諸種の都市機能が発達していたといえるだろう。

屋敷地の変化も近世後期の神奈川の変化を表している。一つは伝馬役に即応するところの屋敷地間口が再編された事実であり、もう一つは海岸への敷地の造成である。後者は、神奈川町においては元禄期にすでに想定される。近世後期までのあいだで、台町や軽井沢などの青木町の西側での新地形成は顕著であり、宿駅機能とは異なる都市の繁栄が表れているといえる。近世前期の神奈川宿について具体的なことはほとんどわからないものの、中世以来の街道筋に伝馬役賦課と地子免許がかぶせられたばかりの神奈川宿と、近世後期の神奈川の地割は、東海道沿いの両側町という構造は共通しつつも、不連続なものであったことが推測される。

とくに下台町周辺にみられた大規模な海岸の拡張は、宮本雅明、伊藤毅による近世港町の空間モデルとの関係で重要な行為であるように思われる。街道にそった細長い屋敷地と水辺に寄り添うような水辺空間の範囲にありつつも、江戸内湾、周辺一帯における物資流通の拠点としての神奈川湊の近世後期における成熟が、明確な形で表れているのである。

なお、海面請地は屋敷地の表間口を課税基準とし、奥行は一律で六〇間と定められており、具体的な空間利用の形態に基づいた課税ではない。帳簿の冒頭では「藻草永」を納めるとされ、肥料としても利用される藻草の採集がおこなわれたことを想像させる。ただ、屋敷地の延長として課税された海面の利用は、海岸の埋立や芥捨て場、生け簀の設置や係船、釣り船など、様々な利用方法があった。「海面請地」として高入れがなされることとなった契機の解明は今後の課題としたい。

一 井上攻「宿場世界の多様性と広がり―近世後期の神奈川宿―」『交通史研究』第八二号、二〇一四年二月。

二 山本光正編『東海道神奈川宿の都市的展開』文献出版、一九九六年。

三 井上攻「近世社会の成熟と宿場世界」岩田書院、二〇〇八年。

四 西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院、一九九三年。

五 斎藤善之「関東地廻り経済圏と神奈川湊の興隆」『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房、一九九四年。

六 井上攻「一九世紀の神奈川湊と塩の流通―武州橋樹郡長尾村鈴木藤助日記を中心に―」『横浜市歴史博物館紀要』第二号、二〇一七年三月。

七 神奈川東海道ルネサンス推進協議会『神奈川の東海道 上 時空を越えた道への旅』神奈川新聞社、一九九三年(斎藤司執筆)。実際の町割りの年代については慶長と元和の二説があるという。

八 福島金治「中世神奈川湊の構成とその住人」(前掲書注二)。

九 江上文恵「神奈川湊と品川湊 熊野信仰との関わりを中心に」『横浜開港資料館編』『江戸湾の歴史―中世・近世の湊と人びと―』横浜開港資料普及協会、一九九〇年。

一〇 前掲論文注八。

二 市村高男「中世日本の港町―その景観と航海圏―歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』青木書店、二〇〇六年。

三 深井甚三「宿と町」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅱ 町』東京大学出版会、一九九〇年。

四 児玉幸多編『近世交通史料集4 東海道宿村大概帳』吉川弘文館、一九七〇年。

五 内田四方蔵編『横浜郷土資料Ⅰ武州橋樹郡神奈川宿組合村々地頭姓名其他書上帳』横浜郷土研究会発行、一九七八年。

二五 「宿鑑」(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)。市史稿写本は、昭和初期の『横浜市史稿』編纂にあたって筆写された写本群である。失われた冊も多いが、原本の所在が分からなくなっている資料が多く収録される。

二六 前掲書注三(序論)。

二七 成仏寺の「門前中」が寺院方丈の年札にそろって参詣する様子が紹介され、「領主寺」たる慶運寺と門前百姓の擬制的な領主・領民関係が推察されている。

二八 天保七年「申渡」(神奈川宿本陣石井家文書、請求記号2199435049、神奈川県立公文書館所蔵)。

二九 文久三年「御用留」(神奈川町藤井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。

三〇 明治二年「御触書並用留帳」(神奈川町藤井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。

三一 天保九年閏四月「被仰渡小前御請印形帳」(神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。

三二 井上攻「天保飢饉時の神奈川宿」(前掲書注三)。

三三 安政六年「宗門人別帳」(神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。

三四 吉田伸之「江戸南伝馬町二丁目他三町の町政機構と住民」『近世巨大都市の社会構造』東京大学出版会、一九九一年。

三五 文政八年「天保六年」願書・訴書留(神奈川宿本陣石井家文書。文政十二年二月十四日「乍恐以返答書奉申上候」という題の小伝馬町からの出訴に対する新町百姓与平次の返書の写し)。

三六 小林紀子・横浜古文書を読む会「資料紹介「金川日記」について」二「横浜市歴史博物館紀要」第一四号、二〇一〇年三月。安政四年正月二日の記事。

三七 「青木町上台玉置氏記録」(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)。また、題名、年代の欠けた書き出し(神奈川宿本陣石井家文書、2199435086、神奈川県立公文書館所蔵)。

三八 斎藤司によれば、保土ヶ谷宿側(京都側)から歩くと、台町で初めて江戸内湾(東京湾)を見渡すことになったという(前掲書注七)。また、品川宿のなかで江戸側の歩行新宿は、農地が付随せず旅籠屋の収益のみで成立した一帯で、その立地から飯売旅籠・茶屋が櫛比したという(吉田伸之「品川歩行新宿と飯売旅籠屋」佐賀朝・吉田伸之編『遊郭社会1 三都と地方都市』吉川弘文館、二〇一三年)。宿駅の周縁としての両端部に茶屋が展開する構図が、品川と共通していたといえる。

三九 後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』山川出版社、二〇一一年(第一章)。

四〇 吉田伸之「芝金杉町組魚問屋仲間と雑魚場」『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、一九九九年。魚河岸の中核たる江戸七組問屋の集荷体制の危機を訴える書付において、横浜開港以降の「田舎富饒」によつて浦方から在方各地へ直売するものが増加したことが指摘されている。本資料はかかる幕末の状況の前提となるような、神奈川の浦の拡大部分としての新町における新興の問屋と猟師の関係構築を示しているのではなからうか。

四一 「御拝借地所・御願済渡世合寫」(山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書 六、七に所収、県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵)。

四二 元治三年三月「書付以願上候」(神奈川宿本陣石井家文書、請求記号219943568)。

四三 『神奈川県史』資料編一〇(近世編七、一九八七年、資料番号四一一)。

四四 西川武臣「商人の活動と流通の諸相」(前掲書注四)。

三五 前掲論文注五。

三六 横浜西区史編集委員会『区制五十周年記念 横浜西区史』横浜西区史発行委員会、一九九五年。芝生村についての記述は、注記がない限り本書によっている。

三七 「芝生村名主三村氏記録文書」九(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)。

三八 西川武臣「江戸内湾地域の湊の様相」(前掲書注四、第四節)。

三九 神奈川宿本陣石井家文書 この資料は西川武臣が、神奈川湊を中心とした物資流通のネットワークを示す事例として紹介する(前掲論文注三八、資料3)。

四〇 「金川日記」安政三年八月二十五日の記事(注二六参照)。

四一 「城山町編『城山町史』第六卷(通史編、近世)、一九九七年(第四章一節)。

四二 「新八王子市史」資料編四(近世二)、二〇一五年。資料番号八〇四。

四三 前掲論文注五。

四四 「芝生村名主三村氏記録文書」六(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)。

四五 文久元年「願書・訴書留」(神奈川宿本陣石井家文書)。

四六 安政六年「乍恐以書付奉申上候」(青木町廻船問屋間宮家文書、神奈川県立公文書館所蔵、請求記号2199435110)。

四七 横浜市神奈川図書館編『武蔵国橘樹郡神奈川宿青木町枝郷三ツ沢山田家文書』東海道シンポジウム神奈川宿大会記念刊行『横浜市神奈川図書館、二〇〇四年]。

四八 「横浜市史稿」風俗編 一九三三年(四六一頁)。

四九 前掲論文注五。

五〇 原直史『日本近世の都市と流通』山川出版会、一九九六年(第三部三章、表三七)。

五一 安政七年「御用留」(神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館)。四月二十一日、七軒町の「船乗渡世上総屋九右衛門」が火附盗賊改から呼び出されている(用件は不明)。

五二 「文化十四年青木町百姓ヨリ源太左衛門・清九郎相手取訴一件并二内済済口証文共 附り品川在大崎村養父江養子市五郎孝行二次第」(神奈川宿本陣石井家文書、2199435041)。

五三 「横浜開港場見聞記」『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四一二、安政六年八月十八日の記事。

五四 表5に示した宝暦の青木町新田検地帳によれば、廣屋栄助の苗字は高木で、大正期には一四七番地の売薬・煙草商の高木福太郎の名が確認される(保科文次郎編『横浜商工案内』横浜商工協会発行、大正四年)。

五五 前掲資料注五三(安政七年一月四日の記事)。

五六 「雑資料」三(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)に所収(軽井沢平野英一氏蔵書の大正十三年写)。

五七 前掲論文注五。

五八 斎藤義之「内海船と幕藩制市場の解体」(柏書房、一九九四年)二章二節。江戸打越の塩輸送を担当した猟師町の船乗り甚五郎が紹介される。

五九 文久二年の外国人荷物盗盗事件(第八章資料9)。

六〇 横浜開港資料館編『江戸湾の歴史―中世・近世の湊と人びと―』一九九〇年。四五頁にて紹介される。原本は佐藤安弘家文書。

六二 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』（通史編近世2、二〇〇八年）によれば房総の諸村は江戸や、東京都・神奈川県各地との船の往来が多く、木更津から神奈川湊への旅客輸送や、海をまたいだ婚礼があったという。

六三 「武蔵国橋本郡神奈川町検地水帳写」（神奈川県宿本陣石井家文書、請求記号2199435114、および2199435115）。

六四 地図資料編纂会『明治前期内務省地理局作成地図集成』柏書房、一九九九年。

六五 新田検地町は明和七年、寛政七年、天保三年のものが残る。

六六 武蔵国橋本郡青木町名主文書（購入地方法文書、横浜開港資料館所蔵）。

六七 武蔵国橋本郡青木町名主文書（購入地方法文書、横浜開港資料館所蔵）。

六八 表6の「生業」の列の記号に対応する資料を記す。(a) 神奈川宿の町並図（注一四参照）。(b) 廻船問屋の名は、嘉永六年「魚介問や神奈川廻船問や惣名前等」一、小笠原家文書、横浜開港資料館所蔵（写真製本）、明治二年「神奈川湊廻船問屋仲間前印鑑帳」（青木町廻船問屋間宮家文書、神奈川県立公文書館所蔵）。(c) 仲買の名は「問屋仲買取置一札写」（県史料原本、神奈川県立公文書館所蔵）。

(d) 『百家名鑑』（小幡宗海編『神奈川文庫第五集』神奈川文庫事務所発行、明治三十三年）。(e) 山田忠発行『横浜近代史辞典』（改題横浜社会辞典）湘南堂書店、一九八六年（原本は比野十郎発行「大正七年」で、当時の人物録・店舗案内・名所案内・歴史資料翻刻が合わさった内容である）。

六九 横浜地方事務局神奈川出張所所蔵。

七〇 前掲資料注一四。屋号と店主の名、茶屋と旅籠屋の別、飯売り女の有無を書くのみで、具体的な場所の特定には他の資料を利用する必要がある。

七一 前掲資料注六八、(d)、(e)。

七二 前掲資料注五三。

七三 文久元年「宿相統方御尋二付奉書上ヶ候廉々之写」（市史稿写本「青木町上台玉置氏記録」に所収、横浜開港資料館所蔵）には廻船問屋・仲買は海岸に棧橋を設けて自らの屋敷地へ荷揚げしていた、とあり、彼らが海側に住んでいたことがわかる。この点は『神奈川区誌』等でも指摘される。複数候補となった人名については、元禄八年の居山検地帳の貼紙や、明治四年の新田検地帳（第七章表3）から部分的に名字と居住する小字の対応が知られ、廻船問屋として特定ができた。

七四 太田佐兵衛の業種・住所は、『百家名鑑』による（注六八(d)）。屋敷図面は、神奈川県青木町太田佐兵衛家旧蔵文書（横浜開港資料館所蔵）の「屋敷図面」（請求番号一、二、七）。なお、嘉永の屋敷図面には「室 庚辰産」とあり、もっとも近い庚辰年の文政三年以前に遡る屋敷であったことがわかる。

七五 証文A：軽部亀松収集文書（神奈川県立公文書館所蔵）、証文B～E：相模国武蔵国各郡文書（神奈川県立公文書館所蔵）、証文F：神奈川宿青木町相模屋文書（横浜市歴史博物館所蔵）。

七六 前掲論文注一一。

七七 前掲資料注六一。

六八 岸上興一郎「横浜の海―新編武蔵風土記稿の世界―」（『横浜市歴史博物館紀要』第三号、一九九九年三月）。

六九 安政五年「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」（横浜市歴史博物館『陸の道と海の道の交差点 江戸時代の神奈川』横浜市歴史博物館、横浜市ふるさと歴史財団、二〇〇九年）所収、初代広重作）。

七〇 前掲資料注五三（万延一年五月十七日の記事）。

七一 芝生村については、芝生村藤江氏文書 二（止）（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。子安村については神奈川県立図書館編『神奈川県史料第二巻（神奈川県立図書館、一九六五年）の「拓地」（明治一〇七年）を参照。

七二 歩行新宿については、利田家文書（品川歴史館所蔵のマイクロ複製本）の安永三年四月「屋敷裏海面築立拾ヶ年延願」、南品川宿については、『品川町史』中巻（品川町編、一九三三年）を参照。

七三 『函館市史』都市・住文化編、一九九五年（第一章一節）。

七四 前掲資料注二五に所収。

七五 伊藤毅「水辺の空間―都市と建築―伊藤毅・吉田伸之編『水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。廻船問屋の名前については注六八(b)参照。寛政九年「差上申御請証文連判帳」（三浦郡須原家文書、神奈川県立公文書館にてデジタルデータ公開）の山田屋彦四郎と証文の印形が一致するため同一人物と確定される。また、青木町の元禄八年「居山検地帳」の貼紙から台町の彦四郎が小林彦四郎であることがわかる。

七六 煙管亭喜莊「神奈川砂子」（三井文庫旧蔵資料、国文学研究資料館所蔵、天保八年）。「神奈川砂子」は写本として伝来しており、序文の記載からその執筆は文政七年であろうと考えられる（斎藤司民間地誌にみる「神奈川宿」認識について―「神奈川砂子」を素材として―横浜開港資料館・横浜近世史研究会編『日記が語る一九世紀の横浜』山川出版社、一九九八年）。

七六 横浜開港資料館所蔵の写真（請求記号FA60-27-23）。

七九 西川武臣「近世神奈川湊の成立と展開―紀州の住民と廻船問屋をめぐる―」（前掲書注四）。

八〇 前掲書注六八 (e)。

八一 前掲論文注八九。

八二 吉田伸之は、『紀州蜜柑問屋の所有構造―蜜柑揚場と手付仲買―吉田伸之編『流通と幕藩権力』（山川出版社、二〇〇四年）において、江戸河岸における蜜柑の揚場が、問屋を介して仲買へと売りさばかれる売場としての機能を併せ持ったことを明らかにした。

八三 「羽沢屋見取図」（横浜市歴史博物館所蔵）。



## 第二章 開港期の「神奈川港湾中」

## 一 問題の所在―近世湊の空間理解にむけて―

本章は、横浜開港前後にみられた神奈川湊の廻船問屋の活動を分析し、近世湊と海の空間を考究することを試みたい。建築史における近世湊の研究のなかで、全国の湊の平面比較によってその形態的な特徴を明快に示した宮本雅明の業績がとりわけ重要である<sup>一</sup>。管理交易から自由交易への移行を軸に、水辺に沿って家並みが形成される特徴的な景観が中世から近世への移行過程で誕生したという宮本の主張は、各地に叢生した近世湊の理解を大きく助けているといえるだろう。ただし、通りに沿った均質な空間の成立を、近世城下町と近世湊を並行させて説明する点が宮本の論考の最大の関心だったのであり、それは近世湊の陸上の形態に関する成果であった。

一方、陣内秀信と高村雅彦による「水都学」と、それに先立つ国内外の水都に関する研究は、一貫して水辺そのものを関心の中心に据えてきた。日本各地の湊について、水域からの都市の姿や海路の体験など、水辺の側からの考察を試みた陣内秀信・岡本哲志の書籍<sup>二</sup>、蘇州の水路を都市空間の要素として積極的に考察対象とした高村雅彦の論考が挙げられる<sup>三</sup>。また、陣内秀信はのちに自然地形による水都の分類や、「テリトリーオ」の観点をまじえた研究の方針を発表しており、一つの都市を越えて広域を見渡す視点が認められ注目される<sup>四</sup>。都市と緊密な関係にあった水域をいかに評価するか、という如上の関心は現代的な意義を持ち、たとえば伊根浦伝統的建造物群保存地区の調査報告書においては、舟屋が取り囲む内海を積極的に図化し、祭礼の場として分析を試みている<sup>五</sup>。

ただ、ことに広域的な視点から考察する場合、広大な地理的な広がりの中で意味のある空間をいかにして見出すか、という点を議論する必要がある。そこで、当世の人びとがどのように湊と海を認識していたかを広域における活動の復元から推察し、近世湊の空間に不可欠な水域をくくりだすことを試みたい。

具体的には、近世湊神奈川とその沖合に広がる湾について、横浜開港場が誕生する前後の絵図資料・文書資料を読解する。湾のなかに新たな都市が形成されるなかで発揮されるところの、神奈川湊の水域という既存の空間の論理を、流通の中枢であった廻船問屋を軸に検討したい。

開港期の神奈川湊については、流通史の蓄積が多く、尾州廻船の江戸内湾拠点として隆盛を誇った神奈川湊の経済的達成が、開港場の選定に帰結したと論じた斎藤善之の論考<sup>六</sup>、奥州・上州から江戸、神奈川を経由して開港場へもたらされる生糸の輸送ルート<sup>七</sup>の確立を指摘した高村直助の論考が開港場の成立に対する神奈川の重要性を指摘しており注目される<sup>七</sup>。

一方、神奈川湊の流通の担い手についての論考は、資料の少なさもあって、開港以前の廻船問屋・仲買の業務内容や役を整理した西川武臣の論考が唯一の成果である<sup>八</sup>。また、氏は別稿にて開港期の神奈川周辺について論じ、神奈川奉行による神奈川宿とその周辺地域の支配や、横浜市域諸村の物資輸送と開港場への出店者についても考察を加えており、注目されるものが多い。ただし、神奈川宿を中心とした地域全体の経済的蓄積に主眼が置かれており、開港期の神奈川湊廻船問屋を直接扱ってはいない<sup>九</sup>。

本稿では、既往研究で検討されてこなかった廻船問屋関係文書の読解と部分的な考察にとどまっている文書の再読をまじえ、空間的な考察を試みることで、水域を含めた近世湊の理解に供することを目指す。

## 二 幕府・奉行の「神奈川港湾中」支配

まず、既往研究に依拠しつつ、幕府や神奈川奉行が神奈川と横浜をどのように掌握していたかを概観したい。

江戸開港の対案として、内海開港場の候補に挙げたのが神奈川と横浜であった。安政四（一八五七）年六月、アメリカ総領事ハリスが開港場を下田から江戸や大坂へ変更するよう要求してくると予想し、大目付・目付は江戸の近くを開くことが適切とし、「初発応接有之神奈川横浜港之辺可然」と上申している<sup>一〇</sup>。果たして江戸の開港要求がなされ、その後の交渉では、下田奉行はハリスに対して「神奈川港」を提案し、「一湾中」の横浜を含むかどうかを聞かれ、肯定している<sup>一一</sup>。『横浜市史』にて石井孝が推論するように、神奈川から横浜までの一帯が、漠然と日米間の合意となっていたのであろう。

その後、井伊直弼は、神奈川の「向方」である横浜を選定することを主張した。外国奉行に対し、横浜は神奈川の「一湾中」にあり、たとえば長崎開港なら稲佐、兵庫開港なら和田の岬を居留地とすることと同様であり、開港場を横浜としても条約違反に当たらないとして交渉するように指示したのである<sup>一二</sup>。外国人公使はこれに反対し神奈川に領事館を

おいたが、日本人の居住地が横浜に成立したことをうけて外国人商人も横浜を選び、結果的には横浜が開港場として確立していった。このように、東海道へ外国人が流入することに対する懸念から、開港地としての神奈川の明確な否定と横浜への限定が提案されたことで、漠然とした神奈川の「一湾中」という空間概念が問題となったのであった。

以後、神奈川から横浜までの一帯は、幕府による横浜開港場支配のなかで重要な地域であった。神奈川奉行の支配域は横浜村、野毛村、戸部村、本牧村など開港場用地の近傍に

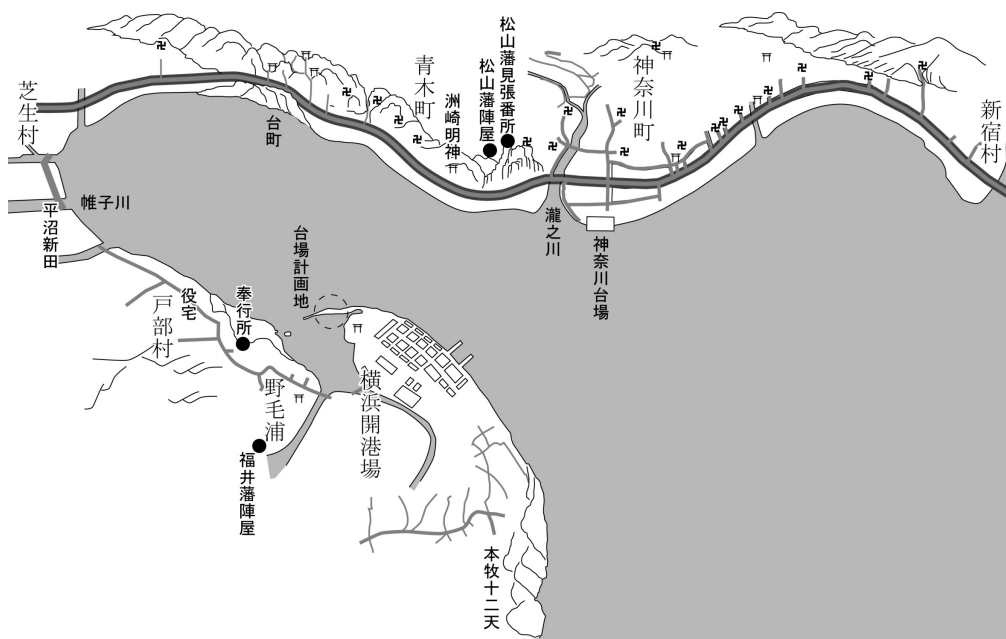


図1 安政六年の神奈川・横浜

安政六年「神奈川御開港横浜絵図」（横浜開港資料館所蔵）をもとに作成。

すぎない範囲であったが、安政六年一月、神奈川奉行は「神奈川港湾中」の沿海部や最寄りの宿村に代官の預地が入り混じってしまったのは開港場の取締りはままならないとして、湾中を囲む全域を支配域とすることを求めた<sup>二一</sup>。結果、安政六年六月には神奈川宿が、翌年十一月には鶴見村・生麦村等の東海道沿い五ヶ村が支配範囲に入り、最終的には保土ヶ谷宿も含む一万石余りの支配域を持つに至った。神奈川奉行と支配域の関係は、人物の搜索や関門の設置などの治安維持、開港場に関係する規制の伝達のほか、普請入札や労働力調達、神奈川宿の廣屋栄助を介した蔵米の売却、物資の調達にも及んだ<sup>二二</sup>。安政六年の八月には、神奈川宿の船着き場を青木町の宮の河岸に限定する触れが出された<sup>二三</sup>。

神奈川奉行による横浜開港場の建設は、横浜村域の都市計画に限られず、神奈川の湾一帯を視野に入れた地域計画ともいうべきものであった。安政六年四月、東海道と開港場をつなぐ横浜道の整備とともに沿道は沽券地化され<sup>二四</sup>、神奈川奉行の奉行所は野毛の山中に置かれ、野毛から神奈川宿までの間に役宅が設置された。

一方、警衛を命ぜられた藩の陣屋や番所も湾一帯の各所に置かれた。安政五年十一月から陸上の警衛を担った福井藩の陣屋は太田屋新田におかれ、翌年には飯遠見番所が本牧十二天に置かれた。安政四年以来神奈川の警備にあたり、安政五年十一月以降は海上の警衛を担った松山藩の陣屋は神奈川宿青木町の権現山周辺にあり、遠見番所は山上におかれた<sup>二五</sup>。奉行所や松山藩の陣屋は湾を一望できる立地であったことが推測される。そして、神奈川漁師町地先と弁天社西の二ヶ所に台場を設ける計画であった（後者は未実現）。

安政六年六月に作成された絵図に、本牧十二天から横浜開港場、野毛村、戸部村、芝生村、神奈川宿、新宿村、子安村との村境までの一帯を描くものがある（図1）。絵図には、海の深さや寺院から往還までの距離、台場から開港場までの距離などが記入され、一帯の取締りや警衛に向けて作成されたものとみられる。横浜市に伝わった本絵図は、同月に写しとられたものが松平文庫に伝わっており、陸上の警衛を担った福井藩と共有されていたことを推測させる<sup>二六</sup>。

一方、長崎の軍艦方が作成した海図「神奈川港図」は、本牧十二天から羽田浦までの範囲を描いており、慶応三年に幕府が外国領事に通達する港域の範囲に合致する（図2）<sup>二七</sup>。「神奈川港図」は、イギリス人による測量と海図の作成の請願に対し、測量中のトラブルを避けること、ゆくゆくは自前の海図が必要になるという考えから作成されたものであった<sup>二八</sup>。その作成背景からは、外国側との共有が目されていたことが推測され、実際に出版が許可された。安政期から対外的な横浜港域は羽田浦までの範囲が念頭に置かれていた

所蔵元の許可を得られていないため非公開

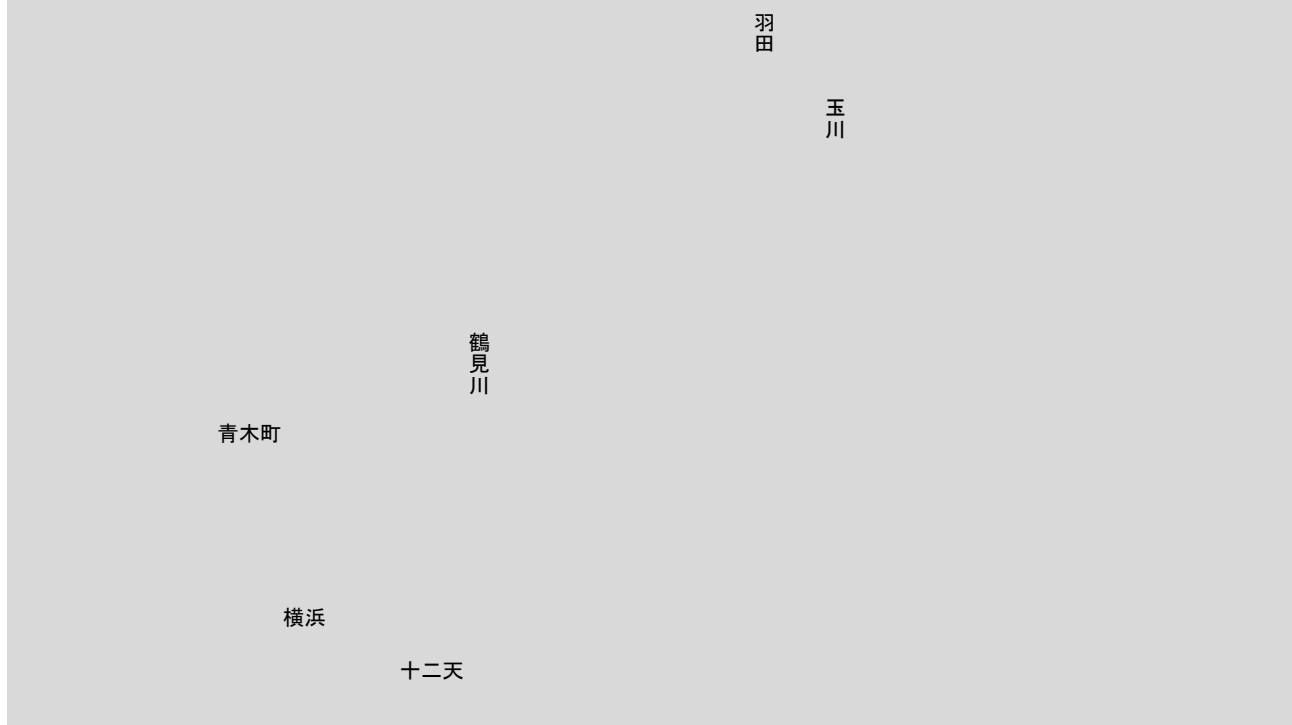


図2 「神奈川港図」に描かれた港域

三井文庫所蔵資料に加筆。本牧十二天から羽田沖までの範囲について、村落、河川、山、水深を記録する。

と考えられるだろう。海図とずれた絵図の範囲は、一帯の取締りのうえで枢要となる部分を描くことに目的があったことを示している。

以上に例示した「神奈川港湾中」の支配は、開港場を成立せしめる基盤として東海道神奈川宿の都市的な発展があったこと、警衛や貿易荷物の取締りのためには横浜一都市の監視だけでは不十分で、陸運・海運の拠点たる神奈川と海上を含めた全域を掌握する必要があったことを示している。外国人の居住地と東海道を離すという方針にもとづく横浜の選定によって、神奈川の湾一帯は一円的な地域へと再編されていったといえるだろう。

最後に、奉行や警衛諸藩による神奈川・横浜周辺の支配と神奈川湊廻船問屋との関係の一端を、安政六年三月の外国奉行水野忠徳の手記から伺いたい。

#### 〔資料1〕 三

一、異国船入津之儀遠見所方注進可致旨、御固両家へ達、加奈川廻船方へも達置之

警衛を担当した両家（福井藩と松山藩）にくわえて外国船の入津の注進を指示された「加奈川廻船方」とは、従来神奈川湊において入津した廻船を改める役目を負っていた廻船問屋であったと推測される<sup>三</sup>。「神奈川港湾中」の管轄にあたつて、海上を把握していた在地の集団が求められたのであり、開港期の湾中における廻船問屋の位置を表しているように思われる。

日米間の開港場の位置に関する交渉と、神奈川奉行による一帯の管轄に際してみられた神奈川の「一湾中」や「神奈川港湾中」といった呼び名は、海を囲む町村の総体が、まとまりをもった空間として認識されえたことを示している。以下では、神奈川湊の廻船問屋に関する資料を利用して、湾の空間をより具体的に検討したい。

### 三 神奈川湊廻船問屋と湾中

#### 1 開港前の神奈川湊と海

##### （1）神奈川湊の概要

神奈川湊は中世以来の良港で<sup>三</sup>、近世以降にも追い風を待つ碇泊場として機能した<sup>四</sup>。「新編武蔵風土記稿」によれば<sup>五</sup>、本牧浦から神奈川の入海は山に囲まれて風波の心配がない停泊地で、そこに接した青木町が古来の湊であった。入海は「袖ヶ浦」ともよばれる山に囲まれた景勝の地であり、とくに青木町においては東海道のすぐ北に崖が迫っていた。

入津した廻船の荷物を独占的に扱った廻船問屋と仲買の屋敷は、青木町中央部の七軒町から下台町までに集中した<sup>二六</sup>。神奈川町との間に流れる瀧之川周辺に比べ、山の迫る台町周辺は水深が深かったようである（図4・1、2）。

享保期以降、問屋株を取得した廻船問屋の生業については西川武臣の研究に詳しい<sup>二七</sup>。廻船問屋は江戸内湾の取締りの一角を担い、積荷の搬出入に立会って確認するとともに、船中も確認し船手形との照合を行い、御法度の品や乗組員の欠落、病死を確認していた。改めの対価として、彼らは廻船との直接的な取引を独占し、仲買へと入札によって売りさばき、手数料を得ていた。

## （2）安永六年の一件

開港以前の湾と廻船問屋の関係を示す資料として、安永六（一七七七）年の争論の議定証文をとりあげたい。紙背には「活鯛御定杭相建候ニ付、御肴屋廻船問屋双方儀（ママ）定証文」と記載される。

### 「資料2」<sup>二八</sup>

右者去申十一月中、御賄御吟味役山田八重郎殿・同御下役間庭勘九郎殿・伊奈半左衛門御内山本嘉内殿御出役被成、双方立会被仰付、御見分之上、神奈川浦活鯛置場江御用仮り杭四本相建候處、左候而者、御城米諸廻船掛り場狭り、廻船入津無之様可相成哉、依而ハ廻船問屋共始メ一宿難儀仕候旨、伊奈半左衛門様御役所江願出、御吟味之上御賄頭様方江御掛合有之、御用杭建所絵面之通、沖江式本、磯柵際江式本都合四本相建候、尤沖之杭式本ハ活鯛有之節計建置、活鯛無之節ハ所入用を以て抜取置、例年御用已前猶又所入用を以て建置候積り、相済候上ハ障無之旨、双方御答申上、依而此度御出役之上、猶又立会被仰付、前書絵図面墨星之通相成候上ハ、於宿内ニも御願之筋聊無之、為後証、双方左之通義（ママ）定いたし置候事

一、御用杭難風之節ハ、昼夜ニ不限、諸廻船之儀ハ不申及小船・地所之船、船頭之自力不及船乗掛右御用杭損候儀ハ、其領風ニより全ク誤而之仕業相違無之候間、庄次郎方ニ而も申分無之ニ付、右乗掛々候船ハ早速出帆為致、右之趣廻船問屋・宿役人方庄次郎方江掛合、宿入用を以、宿役人共一同立会絵図面ニ引合、先場所江立替可申候事

附リ難風之節ハ格別、大海と違イ湊之儀ニ付、万一心得違無之様、出入之節大切ニ心付可申候、尤右之趣、宿役人共平日小前之者共江申付、決而心得違無之様可仕候

一、御用杭建場所之儀、前書絵図面ニ有之候最初相定候朱星□通百間二百五拾間之場所、四本共ニ水中ニ相建可申處、左候而ハ、前文之通難儀之旨申立候間、此度絵図面墨星之通、杭建方願通沖江ハ式本相建、岡之杭式本ハ磯柵際江相建候、依而大汐之節、杭木之内あさく相成節ハ、杭木之外江實船有之儀も可有之候、且又、活鯛数多御困之節ハ、猶又余程杭木之外江差置可申儀も可有之候、其節ハ、實守方方地所江通達可致候、尤極暑之砌、水暖ニ相成候節ハ、沖之方杭木之外江出シ候儀も可有之事

附リ風波之節、御定之場所方外江實船吹出シ候儀も可有之哉、其節ハ猶又大切ニ心付可申候、此旨心得違無之様、小前迄不洩様可申渡置事

△

右之通、此度及対談ニ置候上ハ、已来相互ニ無違失取計可申候、依而為后後（向後力）義定証文如件

安永六年酉五月

神奈川青木町

廻船問屋 茂兵衛

同 八兵衛

同 甚兵衛

同 太兵衛

同 藤兵衛

同 三郎兵衛

同 彦四郎

同 甚兵衛

同 孫兵衛

名主 源太左衛門

年寄 庄兵衛

百姓代 市兵衛

同 清九郎

同 重兵衛

同 太郎兵衛

同 小平次

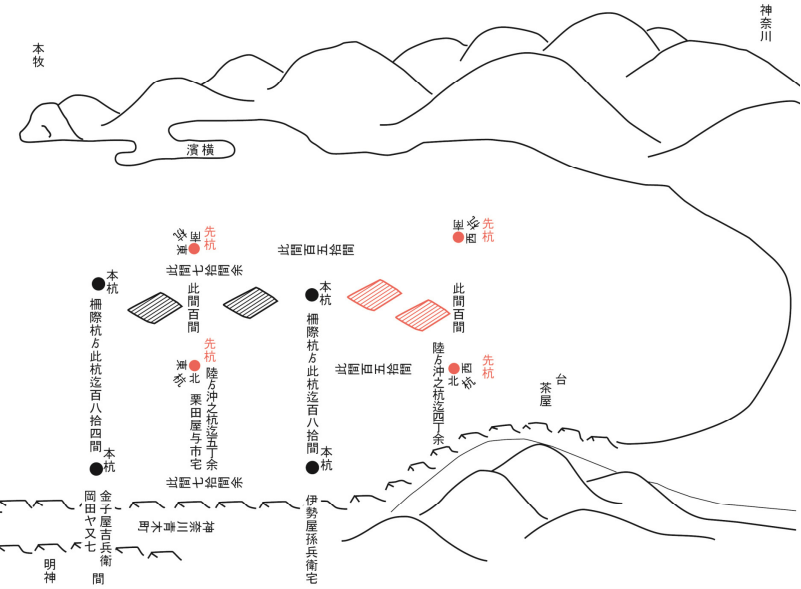


図3 安永6年争論の付図（神奈川宿石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵）

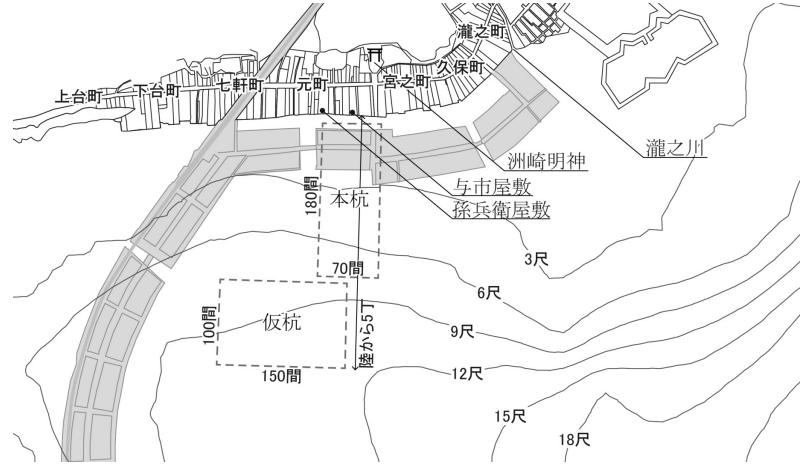


図4-1 安永6年争論の杭の位置（明治期の地図上へ復元。その精度は注29参照）



図4-2 明治初頭の神奈川・横浜の湾

△此奥書之間江可入ケ條

一、御用活鯛神奈川浦引払之節者、庄次郎方々實守を以宿役人共方江掛合可申候間、其節者、願之通、宿入用を以右御用杭拔取、宿役人共方江預り置、御用已前又候通達有之次第、是又双方立会絵面ニ引合、場所絵面通り宿入用を以、無相違相建可申

神奈川町  
名主 甚左衛門  
年寄 源兵衛  
百姓代 重右衛門  
江戸小田原町  
御肴屋 庄次郎

候

一、活簀之儀 風波之節者、宿役人并百姓共一同心附口（為）致活簀吹流等不仕候様、進退同様二心付可申候事  
一、活鯛数多御用之節者、御用杭外江活簀被差置候儀も可有之儀（ママ）定之事  
但シ、其節者、實守方々宿役人共江其段通達可致事

安永五年十一月、將軍献上用の鯛の生簀の置き場を示す杭を打つべく、御膳方吟味役と下役、代官伊奈半左衛門の配下の者が出張し、江戸小田原町御肴屋の庄次郎と神奈川廻船問屋の双方が立ち会うなか、見分の末に仮杭が建てられた。ところが、年貢の移出船や諸廻船の碇泊場が狭まって廻船は入津しなくなるかもしれない、そうなるに廻船問屋をはじめ一宿が難儀するとして、代官役所へ出訴がなされた。結果、吟味の末に御膳頭へ談判がな

され、杭は打ち直されたのであった。

同資料には、問題となった仮杭（図中では「先杭」）の位置と新しく打たれた本杭の位置を描いた絵図が付随する（図3）。図中の金子屋と岡田屋の屋敷位置は不明だが、伊勢屋孫兵衛と栗田屋与市の屋敷位置は明治期の測量図へ比定することができる。変更前後の杭の位置を明治期の測量地図と海図を下図に復元した（図4・1、2）<sup>二九</sup>。

仮杭は、字元町から七軒町の沖合で、幅百五十間、奥行百間の範囲を囲んでおり、沖にある杭まで四、五丁ほどであった。新たな杭四ヶ所の位置は、伊勢屋孫兵衛宅の裏に打たれた一本が西端、洲崎明神よりも少し西側の位置が東端となり、この二本から沖合へ百八十間ほどの位置に二本打たれた。以前よりも東側かつ陸側に移ったといえる。また、沖合の二本は、生簀を設置する時期にだけ打ち、抜き差しは宿入用によつて賄うことが決定されている。陸側の杭が打たれた「磯柵際」の厳密な位置はわからないが、杭の管理や生簀の扱いに関する細かい取り決めのなかに、仮杭が四本ともに「水中」で問題があったので、「岡」側の二本を磯柵際に打つという記載があるため、海岸付近であったことが推測される。

仮杭の建てられた位置は、六〇九尺の水深の水域が割合陸に近い一帯に該当する。積荷の少ない廻船は岸の近くまで来ることができたようだが<sup>三〇</sup>、満載時には二メートル程の水深が必要だったとみられ<sup>三一</sup>、大変重要な水域であったと想像される。新たな杭のうち、生簀設置の時期以外は取り除かれる沖の二本も水深二メートル程の位置に該当する。廻船の停泊可能な水域から障害物を排除しようとする意図が強く表れている。

また、作成された絵図に横浜、本牧までを含む一帯が描かれている点にも注目したい。争論となった沖合五丁ほどの空間を大きく越え、湊に重要な空間としての入海を表現した絵図といえるだろう。廻船の碇泊を妨げる杭に反対したように、廻船問屋は海上に強い関心を払っていた。対岸までを描く絵図の作成主体は不明だが、自らの縄張りである湾一帯を確認しようとする廻船問屋の意志が表れているように思われる。杭の位置の決定にあたって廻船問屋の立ち合いが命ぜられたのは、海に対して利害の発生する当事者であったからだろう。一度目の決定が「仮杭」とされたことは、御肴屋と廻船問屋の意見の相違を示しているのかもしれない。

## 2 開港前後の積極的な事業展開

つぎに、開港を契機とした神奈川湊廻船問屋の活動を検討する。横浜開港場への物資流通と神奈川の関係については、五品江戸回送令のもとで生糸が神奈川宿を経由しており問題視されたこと<sup>三二</sup>、同令が一定の効果を発揮しつつも、神奈川から横浜までの陸路が整備された後は、江戸から神奈川までを舟運で、神奈川から横浜までを陸運による生糸の輸送ルートが確立したことが指摘される<sup>三三</sup>。その際、江戸と横浜を仲介したのは神奈川宿青木町の三文字屋と八と漆原専助であった。また、元治年間に横浜へ送られた水油の多くが神奈川宿の住人から回送されていた<sup>三四</sup>。

開港前後における廻船問屋の活動も積極的で、たとえば安政六年二月一日以前には菱垣廻船荷物の直揚げを許可するようお願いしていた。

### 〔資料3〕

乍恐以書付奉申上候

一、小林藤之助御代官所武州橘樹郡神奈川青木町廻船問屋拾人惣代彦四郎、廻船諸荷物仲買拾貳人惣代勘兵衛奉申上候、先般私共惣代之者を以、品々奉願上候処、大坂表并撰州灘目方積下シ候封印水油・其外荒荷物之類、取扱方可申（カ）立旨被仰渡、且右趣意并廻船問屋・同仲買之者共、先規仕来候振合御尋二付、左二廉書を以奉申上候

（後略）

資料3は第一章の資料3と同一の資料の序文である。廻船問屋と仲買から外国奉行に提出された願書で、①序文、②廻船改めの内容、③廻船問屋の請願、④仲買の請願、⑤結語と署名からなる<sup>三五</sup>。多くの推敲跡があるため下書きであろう。

仲買の請願は、開港後には江戸をはじめ各地から移住してくる者も多いことが想定されるが、自由に廻船荷物の売買をおこなわれると仲買渡世に支障がでるため、従前のとおり廻船問屋から仲買を経由して諸品が売捌かれるようにしてほしいという内容であった。対して、廻船問屋による請願は、それまで禁止されていた菱垣廻船荷物の直揚げを<sup>三六</sup>、開港後には許可してほしいとする新規願であり、きわめて積極的な姿勢が読み取れる。仲買やそこから買い受ける神奈川宿や周辺町村の商人を指すと考えられる「当湊商人共」にくわえ、江戸の出店商が水揚げを求めた場合も仲介することを請願している点が注目される。

（第一章資料3、引用部分の一、四ヶ条目）。

安政六年二月一日は、開港場が横浜と神奈川のどちらに設けられるか未決定の段階であり、廻船問屋が横浜までを含みこむ空間を想定していたわけではないと思われる。ただ、自らの掌握する流通網に交易荷物を編入しようとする野心は認められるだろう。なお、外人への直売買は行わないことも記載されている（第一章資料3、引用部分の三ヶ条目）。また、序文にみられるように、外国奉行が廻船問屋・仲買の請願に対し、荷物の取り扱いの方針やこれまでの仕法を聴取しようとしている点も興味深い。たとえば日本海側の開港場の選定のための外国奉行らによる議論のなかでは、既存の都市でどの程度の交易を実現しうるかが重視されていた<sup>三七</sup>。神奈川開港にあたって外国奉行が既存の物資流通とその主体に関心を示していたことが理解されよう。

開港後においては、管見の限り二件の藩産物取扱申請が確認される。まず、徳島藩の塩取扱に関する記録を検討したい。

#### 〔資料4〕 三

##### 御請書之覚

（中略）且又、神奈川宿廻船問屋拾人連名之惣代伊勢屋孫兵衛・山田屋彦四郎方、彼地御開港交易御免被仰出候、就而者、御国産塩手広取扱、御手捌同様御仕法聊差支不申様、万端出精仕度旨、委曲別紙書付ヲ以願上候処、右両様共厚御評議之上、御開港被為遊候御趣被仰渡、夫々難有奉畏、帰村早々問屋并二船持へ不洩様申聞可仕候、仍而私共当座御請書仕奉差上候、以上

##### （後略）

#### 〔資料5〕 三

##### 一札之事

一、阿州様御国産御手捌之儀、貴殿并当所廻船問屋一同相談之上、年来御志願被成候処、去ル三ヶ年前申年中、於当所ニ、御願済相成候ニ付、私共迄取扱振申合儀定連印仕候処、当所問屋共ニおゐて差支之儀有之、今般貴殿一手進退被成候義問屋共一同相談之上、御手捌塩ニ限り売事取計向任相候ニ付而者、当宿江壳捌所御取建者勿論、都而売事ニ付同様之御仕法建被成候共、私共ニおゐて故障之筋毛頭無御座候、依之仲間一同連印一札差出候所如件

##### （後略）

資料4は文久元（一八六一）年三月に撫養の産地問屋の代表格であった大問屋が塩業の監督者たる郡代へ提出した請証文で、神奈川宿廻船問屋の国産塩の取り扱いが許可された

ことが記される。資料5は神奈川の廻船問屋・仲買から、徳島藩の塩取扱いをともに請願していた浅田重作という人物へ、文久三年に提出された文書の下書きとみられる。引用部分は仲買の連名がなされた部分で、ほぼ同内容の廻船問屋連名部分が続く。年来の志願の末、三年前の申年、つまり万延元（一八六〇）年に国産の塩の売買が許可されたことが記される。

徳島藩の特産品であった塩は藍とともに専売制が敷かれ、藩財政を支えた品目であった<sup>四〇</sup>。塩田の面積が最大規模の撫養の塩は「芥田塩」と呼ばれ、下り塩として江戸で大量に消費され、尾州廻船によつて神奈川にもたらされていた<sup>四一</sup>。

相良英輔によれば、徳島藩は天保十一（一八四〇）年から江戸問屋を排除した専売制に着手し、株仲間の解散以降は、自国・他国廻船に対し、江戸におかれた「元取」を介した売買を強制した<sup>四二</sup>。しかし、江戸の塩問屋の抵抗があり、主要な他国船であった尾張・伊勢の廻船は仕法を守らず積入を禁止され、結果として徳島藩への他国廻船の入津が減少してしまふ。江戸の塩問屋の抵抗から「元取」の利益も少なく軒数を減少させ、下り塩が捌ききれない状態であったという。

資料4のなかでは、廻船問屋の総代の伊勢屋・山田屋が、交易の許可を受けて阿州の塩を取り扱いたいと主張していた点に注目したい。万延期に許可のおりた請願が開港前後のどちらで出されたかは不明だが、交易の開始と都市横浜の誕生によつて生ずる塩需要は、廻船問屋にとつての好機であったことが伺える。

なお、資料5の宛先の浅田重作は、居所も記載されずどのような人物かは不明である。下り塩の扱いを請願したことから神奈川周辺の者と思われ、横浜開港場の本町五丁目の朝田屋重作が候補となりうる。江戸の「元取」の広屋吉右衛門は、丸中屋吉右衛門という名義で開港場へ出店したよう<sup>四三</sup>、専売塩の扱いを複数の店で行っていたのかもしれない。つぎに、廻船問屋の紀伊国屋三郎兵衛から元治元（一八六四）年五月に出された願書を検討したい。江戸南新堀町渡辺熊次郎を身元引受人として、赤穂藩産物役人に提出された願書である。

#### 〔資料6〕 四

##### 乍恐以書付奉願上候

一、武蔵国神奈川廻船問屋紀伊国屋三郎兵衛奉申上候、私儀者、旧来諸家様御穀宿、其外上方筋商船引請諸荷物捌方渡世仕来候、然ル処、当 御屋敷様御領分廻船追々相増御産物御積廻しニ可相成御儀ニ御座候処、是迄神奈川湊ニおゐては、御産物積

廻船御用宿無御座、若近海非常之儀は勿論、臨時御用向之節、其時々御出役等御座候得者、乍恐御手数相掛り候儀ニ奉存候間、御産物積廻船御穀宿、其外御用向、当所持場限私江乍恐被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置候ハ、精々御用向大切ニ相勤、都而御用弁ニ相成候様丹誠仕度奉存候間、何卒以<sub>レ</sub>御憐愍願之通御聞濟被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置候様、偏ニ奉願上候、以上

(後略)

旧来務めてきた「諸家様御穀宿」と、神奈川湊に欠けていた赤穂藩の「御産物積廻船」の「御用宿」、請願内容である「御産物積廻船御穀宿」は同じ機能であろう。赤穂藩の産物の具体的な内容は不明であるが、当時の藩特産物は塩を中心としており、領外の廻船に依存しながら江戸へ下り塩を輸送した<sup>四五</sup>。紀伊国屋三郎兵衛が出願した御用宿、御穀宿とは、こうした藩産物を輸送する廻船が入津した際の世話をおこなう業務であつたと考えられる。明記はされていないが、廻船が紀伊国屋のもとへ碇泊することが想定されていると推測され、廻船問屋の営業を鑑みれば、宿や御用にとどまらずに産物の輸送や売買の仲介が前提とされていたことだろう。

赤穂藩の廻船の増加は横浜開港場の誕生と無関係ではなからう。湾一帯に入津する廻船が開港を機に増加したことをうけ、廻船問屋紀伊国屋が既存の実績をもとに藩へ掛け合つたことが理解される。徳島藩の塩取扱いと同様に、開港後の塩需要の増加が背景として想定されるだろう。

身元引請人の南新堀町渡辺熊次郎は江戸廻船問屋の渡辺屋熊次郎と同一人物とみられる<sup>四六</sup>。塩廻船問屋四軒の一人で、赤穂、阿波、讃岐の下り塩を取り扱つた<sup>四七</sup>。前資料中の赤穂藩の産物が塩であつたことを示している。斎藤善之によれば、渡辺熊次郎は株仲間再興直前に断絶し、渡辺熊次郎の名を継いだ別人による営業の再開後は、それまで取締り対象としていた尾州廻船とのひそかな関係構築を試み、奥川筋への塩売却を構想していた<sup>四八</sup>。赤穂藩への請願は、紀伊国屋三郎兵衛と渡辺熊次郎が協力して新たな塩流通網を構築しようとしていたことを示しているのではないだろうか。なお、元治二年には神奈川湊の廻船問屋の伊勢屋孫兵衛の持ち船が赤穂藩の塩を輸送していた<sup>四九</sup>。神奈川湊と赤穂藩の関係の深さを示しているよう。

わずかに二例にすぎないが、開港後における神奈川湊廻船問屋の積極的な姿が確認されたといえる。徳島藩と赤穂藩の事例はともに塩の集荷であつたとみられ、輸出品ではなく日用品を中心としたものであつたと考えられる。資料3にみられる酒、水油、荒物への関与

や輸出品への介入については課題とせざるをえないが、新都市横浜の誕生は廻船問屋にとって事業拡大のチャンスにはかならなかつたことは指摘できるだろう。

ここで、安永の一件を思い起こされたい。湾一帯は廻船問屋の渡世上の縄張りであり、そこに生まれた開港場を自らの掌握する流通網のもとに置こうとする野心的な姿勢が認められるのではないだろうか。開港後に作成された浮世絵には、神奈川の沖に碇泊する廻船と外国船、開港場が描かれたものが残る<sup>五〇</sup>。おそらく海側の屋敷地にいた廻船問屋からは、開港場と一帯の海を見渡せたことだろう。安永期にみられた湾一帯への視線の延長線上に、開港後における物資流通への積極的な介入が位置づけられるのではないだろうか。

### 3 明治初頭の再編

最後に、明治初頭の廻船問屋について検討したい。明治五年、廻船問屋の小林(山田屋)彦四郎・杉崎(和泉屋)金五郎・中村(紀伊国屋)三郎兵衛と、廻船問屋とみられる河合藤一郎<sup>五一</sup>、横浜貿易商人の鈴木保兵衛が頭取となり、横浜開港場に廻漕会社(廻漕船取扱会社と同義)が設立された。以下は、『神奈川県史料』に収録された文書であるが、会社設立に関する神奈川県令陸奥宗光から大蔵大輔井上馨への伺いと、頭取から提出された規則書、文末の横浜における廻漕会社の所在の書き出しからなる。

【資料7】<sup>五二</sup> □ は原文ママ

当港貿易盛大随テ我国々物産夥多港着相成候処、未ダ廻船問屋不便理ニ付、右渡世差許方辛未五月中、元弁官工伺書差出候得共、御下知無之、然処、追々右渡世願出候モノモ有之候処、今般商社ノ者共ヨリ同様願出、元来廻船問屋ノ儀ハ何レノ港浦等ニモ有之候儀ノ処、前書ノ通、彼我人民輻湊ノ地ニ乍有之、右渡世ノ者無之故、我商船ハ入港候デモ積荷ハ悉皆神奈川表工陸揚致シ、右ノ者共ニ於テモ不得便宜、依テハ当港工諸国回漕船取扱所開業差許候ハ、商法ノ道一層隆進土地愈繁栄可致、尤御採用相成候上ハ、願人共ハ何レモ商社ノモノ共工合併致、便利専務他ノ自由ヲ不妨様、夫々規則相設置候様致可申候、依之此段相伺申候、至急御指揮可被下候以上

(中略)

諸国廻漕船取扱規則

諸国回漕船取扱所営業ノ儀御免許相成候ニ付、一同協議ノ上会社取結、左ノ通規則相定候事

#### 第一則

一、合併開業ニ付、身元金トシテ金壹万両会社エ相備、此紙末ニ記スル鈴木保兵衛外四人ニ付金千両宛差出頭取ト相定、其他ハ一人ニ付金五百両宛出金イタシ、利益損失トモ出金ノ金高ニ割合勘定可致事

## 第二則

一、会社ハ適応ノ場所見立建築可致候得共、夫迄処元浜町三丁目門屋幸之助跡地所家作共代金五千八百両ニ買取、仮会社ニイタシ可申事

但シ、本文金五千八百両ハ、第一規則備金ノ外、鈴木保兵衛其外四人ノ者ヨリ出金可致事

## 第三則

一、廻漕船取扱ノ儀、此度願済ノ者〔共〕之〔他〕、会社エ加入イタシ候者、身元金高ハ一人ニ付金五百両宛出金為致、金千両ノ者ハ頭取トイタシ可申事

但シ、式人〔亦〕ハ三人申合五百両亦ハ千両差出候儀不苦候得共、組合ヲ以千両出金イタシ候者ハ頭取ト可致候事

## 第四則

一、諸国廻漕船横浜エ入港、積込ノ荷物主ヨリ当社エ送り越候分ハ勿論、船頭直積ノ荷物、或ハ送先無之分船頭ヨリ売捌方申出候ハ、会社エ引請取計可申、且船頭出帆ヲ急キ候歟、又ハ売捌兼候分等有之節、仕切代金ハ遂示談、速ニ相渡可申事

## 第五則

一、他港エ投錨□致船当社エ引付、又ハ送先有之荷物、或ハ船頭ヨリ頼無之荷物等、当社ニテ一切差構申間敷、其佗（ママ、他カ）船頭止宿等ニ至迄適意ニイタシ、都テ相對ニ任セ佗（ママ、他カ）ノ自由ヲ不妨様可致事

## 第六則

一、各品藏鋪料ノ儀ハ、嵩張品或ハ湿氣ヲ厭ヒ候品等、夫々區別ヲ分チ月数ニ応シシ相当無之様相對ヲ以荷主并船頭ノ内ヨリ請取可申事

## 第七則

一、当社ニテ引受荷物売捌候分、各品トモ売上代金百分ノ一ヲ口銭トシテ請取可申事

## 第八則

一、送先有之荷物ヲ船頭頼ニ任セ当社エ持込候分、元船ヨリ波止場迄解下并波止場ヨリ当社迄ノ運賃等ハ当社ニテ引受、右手数料トシテ、積湊ヨリ当港迄ノ海上運賃高ノ二百分ノ一、金五両ニ付永式拾五文、船頭ヨリ請取可申、尤陸揚ケノ荷物積高ノ

四分ノ一ノ二百分一、金壹両壹分ニ付永六文式分五厘〔其〕佗（ママ、他カ）、右ノ割合ヲ以計算可致事

但シ、右荷物送先エ速ニ相届候ハ勿論ニ候得共、運賃ハ其届先ヨリ相對ヲ以請取可申事

## 第九則

一、横浜港ヨリ諸国エ積送候荷物□分船積ノ節、当社ニテ海上請合等イタシ候儀ハ荷主ヨリノ示談ニ任セ可申、愈請合イタシ候事ニ相成候ハ、其品々金高及ヒ遠近ノ差別ニ応シ双方不都合無之程ノ請合料請取可申事

但シ、開業ノ上追々請合料ノ定額取極可申事

## 第十則

一、横浜港ヨリ諸国エ積送候荷物船積ノ節、海上請合等ハ第九則ノ通候得共、貫目品欠減、或ハ濡痛品相損シ候節ハ、当社ニテ引受償ヒイタシ、且当社ヨリ波止場迄并元船エノ瀬取等運送ハ当社ニテ引受取計候間、手数料ハ海上運賃ノ百分一金五両ニ付永五拾文船頭ヨリ請取可申事

## 第十一則

一、諸国ヨリ当社エ送越候荷物為替金、并当港ニテ船頭ヨリ荷物預リ金子貸渡候節ハ、一ヶ月金壹両ニ付銀九分宛ノ利之（「りし」カ）請取可申事

## 第十二則

一、諸国廻船ノ船頭止宿賄料、一泊□昼ニテ壹人ニ付金壹分宛請取可申事

## 第十三則

一、飛脚蒸氣船エ便船人乗込便利ノ為、当社エ止宿イタシ候者ハ、不都合無之様取計、賄料壹飯銀五匁ツ、請取可申事

## 第十四則

一、横浜エ入港并出帆ノ廻船取計方ノ儀、碇泊御規則通り相心得、不都合無之様篤ト注意イタシ營業可致事

## 第十五則

一、年分会社益利金有無ニ不拘、税金トシテ壹ケ年金百両上納、公会入費トシテ金百両町会所エ差出可申事

## 第十六則

一、当社中此規則ニ違反スル者ハ、元金没収シ除名可致事

右之通確定二付一同固守可致事

廻漕船取扱会社

神奈川青木町

頭取 小林彦四郎

同所

頭取 河合藤一郎

同所

頭取 杉崎金五郎

同所

頭取 中村三郎兵衛

横浜元町三丁目

頭取 鈴木保兵衛

同旭町通相生町

合併人金森長

前書之趣聞届候条向後規則更換候節ハ其時々申出可受指図者也

壬申月日

神奈川県権令大江 卓

第一大区海陸運送会社 四ヶ所

武州久良岐郡横浜北仲通三丁目

回漕会社社長

廻漕

小林彦四郎

但、明治五年十一月中創立、鈴木保兵衛・高島嘉右衛門・杉崎金五郎・吉田平之

助・小林彦四郎、合併引続營業罷在候

同国同郡横浜南仲通巷丁目

三菱会社出張所

廻漕 熊谷伊助

但明治五年十一月中創立、東京南茅場町三菱商会ヨリ出張引続營業罷在候

同国同郡横浜湊町六丁目

郵便汽船会社預り入

石橋幸助

但明治七年一月中創立、本社東京靈岸島銀町ニテ、高崎長右衛門・山路勘（介）・

岩橋万歳三人合併、同所ヨリ出張引続營業罷在候

貿易が盛んになってきたなか、明治五年当時において開港場に廻船問屋がなく、当時開港場に向けて送られた国内船の荷物が、神奈川へ陸揚げされていたことが分かる。「悉皆」とはいえ、開港場にも水揚げと陸送を担う集団がいたため、全ての荷物を処理していたわけではないと考えられるが、かなりの量の荷物であっただろう。明治初頭にも神奈川を経由するルートが機能していたことが理解される。ただ、旧来のルートだけでは開港場に向かう荷物の量に対応しきれない状況に至っていたのであろう。

会社は明治七年段階で北仲通り三丁目に所在し、社長は小林彦四郎であった。第二条にみられる元浜町三丁目とは街区をはさんで反対側にあたる。廻漕会社の具体的な活動を伝える資料は未見であるが、規則から読み取れる内容は以下になるだろう。

①送り先の決まっていない荷物売買を仲介し、仕切り代金の仮決定に基づく代金の立替もおこない（第四条）、一パーセントの口銭を收受する（第七条）。

②売買が成立するまで倉庫にて品を預かり（第六条）、荷為替による諸国への金融、船頭への荷物引き当てによる金融をおこなう（第十一条）。

③送り先の決まっている荷物の、廻船から送り先への運送を代行し、船頭から〇・五パーセントの手数料を受け取る（第八条）。

④荷主の依頼に応ずる形で海上保険（第九条）。また、横浜から各港へ送る際に、貫目品の減量や濡れたり、傷んだりした場合の補償（第十条）。

⑤依頼に応じて、船頭を止宿させる（第十二条）。蒸気船への乗組みのための止宿希望者も受け入れる。

既存の神奈川湊廻船問屋の営業は、売買の仲介と口銭収取の①に該当する。それに加えて、荷為替金融とセツトになった倉庫業、都市内・港内の運送請負業、海上保険業、船宿の機能を併せ持った多角的な経営方針である。とくに②や③は近代的な倉庫営業、海運業への展開を読み取ることができ、注目される。

また、各頭取が千両ずつの身元金を払っている点も、当時の廻船問屋の資金力を示すものである。また、第十五条では税金として年百両、町会所へ「公会入費」として年に百両の納付を規約している。

また、下記の書付が同社に関係すると思われる。内容は明治六年六月二十六日、神奈川宿青木町の中村三郎兵衛、河合藤一郎、杉崎金五郎の三名から神奈川県権令大江卓に対し提出された上申である<sup>五三</sup>。

## 〔資料8〕

以書付奉申上候

神奈川宿三郎兵衛外式人之者奉申上候、今般高嶋町分会社二付、私共客船止宿同社へ案内可致旨被仰付、承知奉畏候、分会社開業之上者、入津之船々船頭案内可仕候、右之内船頭会社江罷越不申、銘々宅江止宿致度申居候節ハ、其意ニ相任せ可申候間、此段御聞濟被成下置候様、奉願上候以上 (後略)

高島町に「分会社」を設けたところ、客船（廻船の意か）の止宿を「会社」へ案内するよう命ぜられたようで、船頭の意向にしたがって止宿の案内をおこなうことを許可するよう上申している。社長の小林彦四郎を除く神奈川の三名が共通していることから、この「会社」が先述の廻漕会社であったと推測される。

高島町は、東京・横浜間の鉄道敷設の際に横浜と神奈川をつなぐ土手に形成された新しい町であった(図4・2)。土手の埋立造成を請け負った高島嘉右衛門への補助として、鉄道敷周囲以外の土地が与えられたのである。

湾を横断し十丁目まである高島町のなかでの分会社の具体的な位置は不明であるが、神奈川宿の三名に命ぜられていることから、比較的神奈川宿に近い位置であったことが推測される。廻漕会社の分会社で正しいとすれば、本社のある横浜から離れた位置にあると考えるほうが妥当であろう。神奈川へ入津した船とともに、横浜と神奈川を結ぶ船も担当したことが推測される<sup>五四</sup>。なお、借地希望者が少なく埋立事業の採算の取れない状況下で、明治五年六月に高島嘉右衛門は、高島町九丁目がとくに船着きに便利であるとして廻漕業の開業を請願した<sup>五五</sup>。高島町のうちの神奈川宿に近い場所が船着きに便利であったことを証明しているといえよう。

明治四年に完成した鉄道敷と高島町が、廻船問屋と仲買の集中した七軒町・下台町を貫通し、外海から切り離してしまったことも、回漕会社の設立動機の一つであったと考えられる(図4・2)。ただし、明治元年に本町三丁目の鈴木保兵衛、五丁目の佐野屋直助とともに廻船問屋総代の彦四郎(小林か)が開港場での廻船問屋開業を出願したという記録も残っており<sup>五六</sup>、鉄道開通以前の廻船問屋の活動の延長として廻漕会社の開業を位置づけることができるだろう。

幕末から明治初頭にかけて継続した神奈川を経由する流通路は、神奈川湊の海岸を破壊して造成された鉄道敷・高島町の成立を大きなきっかけとして、横浜と神奈川付近の新たな海岸それぞれが機能するかたちに変化していったと思われる。ただし、横浜商人による

一方的な神奈川湊の機能吸収ではなく、廻船問屋を含めたメンバーの新規願による再編成であったことを重視したい。物資流通のうえでの横浜開港場の相対的な自立は、神奈川湊の廻船問屋も交えて実現したのである。むしろ、日米の交渉過程にみられた「一湾中」を横断し、横浜開港場をも神奈川湊の一角へ編入するように、廻船問屋の活動が展開したといえるのではないか。

#### 四 結語―神奈川湊と湾―

安永六年の争論は、神奈川湊廻船問屋が自らの縄張りとして湾中の空間を主張した事件であった。議定の絵図が神奈川宿の地先のみではなく、横浜村、本牧までを描いていたことは、生簀の設置された地先海面にとどまらず、廻船の碇泊可能なきわめて広い範囲を廻船問屋が掌握しようとしていたことを表しているように思われる。そして、碇泊域としての海に接するかたちで誕生したのが横浜開港場であった。海陸の交通の便が良いという地勢的な条件が神奈川を経由した流通ルートの主要因であったことは確かだろうが、既存の集荷圏である湾中に開港場を包摂しようとする廻船問屋が誘引した側面も無視しえない。開港以前の延長上に開港以後の集荷を位置づけるだけではなく、開港を契機とした廻船問屋自身の活動を評価すべきであろう。

斎藤善之が指摘したとおり、神奈川は関東地回り経済圏のなかで新興の廻船集団の拠点となり、経済的な繁栄期にあった。万延期の徳島藩、元治期の赤穂藩の産物取扱の事例にみられた神奈川湊廻船問屋の活動は、江戸後期以降における新興の廻船集団を介してつながった地域との主体的な交渉を特徴としていたように思われる。幕末における神奈川湊の発展は、神奈川・横浜が開港場の候補地に選定されたことや、神奈川奉行による地域支配の一角として位置づけられたことに帰結しただけではなく、廻船問屋の側からの物資流通への介入として直接的に開港場を支えたのであった。

ただし、廻船問屋十軒がそろって開港期に新規需要の恩恵を受けたわけではないと考えられる。斎藤善之は、神奈川の隆盛を横浜開港場の選定に結び付けるのみならず、異国船の到来や条約交渉にあたっての神奈川宿への金銭的負担の急増を指摘し、内海船の組合戒講へ合力を求めている例を紹介した。文久元年の訴えでは、湾中の物流統制の一環として実施された海岸の棧橋の取り払いによって、入費が嵩んでいることが訴えられている<sup>五七</sup>。そして、明治二年には、廻船問屋への加入が自由となり、特権的な営業権とはいえない状

況になってしまふ。明治四年には、廻船問屋の孫兵衛（伊勢屋）が、「□（借カ）地建家」と廻船問屋株を抵当にして中村三郎兵衛から借金をしている<sup>五八</sup>。

そして、本章でみた具体例についても、たとえば赤穂藩との交渉が紀伊国屋三郎兵衛単独で行われたこと、廻漕会社の頭取となつたのが中村三郎兵衛ら四名に限られたことなど、開港以後の廻船問屋組合の内部は均質ではないのである。尾州廻船内田佐七家との取引が、廻船問屋のなかでは紀伊国屋三郎兵衛との間でのみ行われたことも示唆的であろう<sup>五九</sup>。近世後期の流通変動、横浜開港、明治初期の営業自由化、高島町の形成を経て、廻船問屋はきわめてシビアな状況に置かれていったといえる。

他方、近世湊と海の空間を問うという意味では、まずは廻船の停泊を担保する十分な水深のある水域の認識が注目される。第七章で再び検討を試みるが、横浜開港場での廻漕会社の開業は、この停泊可能な水域を中心とした陸上の拠点の移動として位置付けることができるのではないだろうか。

そして、神奈川から湾一帯への視線が重要であろう。神奈川から対岸まで広がる一円的な空間「神奈川港湾中」は、外因としての開港場の設定や奉行・諸藩による地域再編を経て、安永期にみられた廻船問屋の潜在的な空間認識が顕在化、拡大された結果といえるのではないだろうか。廻船問屋自らが、停泊する廻船との関係を積極的に構築しようとした点において、幕末における「商人的対応」がそこに見出せるように思われるのである。

「宮本雅明『中世港町の空間とその近世化』、『近世港町の都市空間』（宮本雅明『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年）。

二 陣内秀信・岡本哲志『水辺から都市を読む…舟運で栄えた港町』法政大学出版社、二〇〇二年。

三 高村雅彦『中国江南における明末清初の水辺空間について—土木史・建築史・社会史を結びつけて描き出す都市史の可能性—』伊藤毅・吉田伸之編『水辺と都市』山川出版、二〇〇五年。

四 陣内秀信「水都学」をめざして」陣内秀信・高村雅彦編『水都学Ⅰ 特集水都ヴェネツィアの再考』二〇〇三年三月。

五 京都府与謝郡伊根町教育委員会『伊根浦伝統的建造物群保存対策調査報告書』伊根町、二〇〇四年。

六 斎藤善之「関東地廻り経済圏と神奈川湊の興隆」『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房、一九九四年。

七 高村直助「水上のシルクロード」吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。

八 西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院、一九九三年。廻船問屋・仲買についてはとくに第二章

「江戸幕府の流通統制と江戸内湾の湊」（二節）、第三章「江戸内湾地域の湊の様相」（四節）。

九 西川武臣「横浜開港と神奈川宿」（山本光正編『東海道神奈川宿の都市的展開』文献出版、一九九六年）。また、西川武臣「幕末から明治初年の物資流通」（前掲書注八、第五章）。

一〇 『大日本古文書 幕末外国関係文書』一六。資料番号一七三番。

一一 横浜市編『横浜市史』第二巻、一九六一年。第一篇第二章「通商条約の調印とその内容」。

一二 同右。

一三 『大日本古文書 幕末外国関係文書』一一。資料番号五四番。

一四 西川武臣「横浜開港と神奈川宿」山本光正編『東海道神奈川宿の都市的展開』文献出版、一九九六年。

一五 「横浜開港場見聞記」（神奈川県史）資料編一〇（近世編七、一九八七年）、資料番号四二二。なお同資料によれば、宿からの嘆願で安政六年九月には五ヶ所の物揚場が許可された。

一六 「水野忠徳雑録」二（東京大学史料編纂所蔵）。横浜開港の準備にあたって調役に指示した内容の控えとみられる「神奈川御用取扱大要」の一節で、調役の成瀬善四郎への指示である。

一七 西川武臣編『神奈川台場関係資料集』、一九九九年。遠見番所は横浜開港資料館所蔵「神奈川御開港横浜絵図」に記載がみられる。

一八 横浜開港資料館所蔵「神奈川御開港横浜絵図」、松平文庫「横浜之図」（福井県立図書館所蔵。前者にみられる「旦望舎」は絵図の作成や出版をおこなった主体とみられるが、詳細は不明である。

一九 「神奈川港図」（三井文庫所蔵）。慶応三年の港域については斎藤多喜夫「開港港則の成立過程」『横浜開港資料館紀要』第三号、二〇〇五年三月。

二〇 横山伊徳「一九世紀日本近海測量について」黒田日出男・メアリ・エリザベス・ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年。

二一 前掲資料注一六。

二二 本資料は断片的な記述で注進の主語が断定し難いが、遠見番所を置いた両藩は、外国船の入津を外国奉行に連絡する立場にあったと推測され、「加奈川廻船方」へ達した内容も、列記されていることから考えて外国奉行への報告を指示したものであったと推測した。なお、天保十三年には、海付村々に対し、台場の箇所と、外国船漂着や沖合での発見について注進をした経験の有無が尋ねられており、神奈川宿問屋惣代七郎兵衛と青木町名主源太左衛門が回答している（天保五年・嘉永四年「願書・訴書留」（神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵）。廻船問屋・仲買の属した青木町の名主と問屋が応じたことは、神奈川の湊と宿を代表した回答であったことを表しているとみられる。本資料の指示内容は、こうした海付村々を通して海上把握の延長に位置すると考えられる。

二三 江上文恵「神奈川湊と品川湊—熊野信仰との関わりを中心に」『横浜開港資料館編』江戸湾の歴史—中世・近世の湊と人びと—横浜開港資料普及協会、一九九〇年。

二四 西川武臣「江戸内湾地域の湊の様相」（前掲書注八）。

二五 「新編武蔵風土記稿」巻之七〇、橘樹郡之十三（国立国会図書館のデジタルアーカイブにて公開）。

二六 第一章参照。（拙稿「屋敷地裏の埋立造成に関する研究—近世後期の神奈川宿青木町における「海岸築出新地」の造成と水際空間—」『日本建築学会計画系論文集』第八〇巻七二七号、二〇一五年十一月）。

二七 前掲書注八。

二八 安永六年「活鯛御定杭相建候二付御倉屋廻船問屋双方議定証文（活鯛置場漁師廻船問屋の出入港口）」（神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵）。

二九 明治十一年測量の「横浜実測図」、明治七年測量の「武蔵国横浜湾」から作成。図4・1、2の深線は、地理情報システムを用い、「武蔵国横浜湾」に記入された水深の測量点から地形を復元して作成した。高島町の造成以前の海岸線を計算に利用しているため（水深ゼロメートル）、一部高島町を貫通する等深線が描かれている。むろん、利用した数値は高島町造成後の海図のデータであるため、高島町の西側には測量点が無い。そのため、この場所についてはかなり大まかな状況を示すものとして読解いただきたい。ただし、杭の打たれた辺りについては、多くの測量点から復元された数値であるため、本論の考察に大きな影響はないと考える。なお、孫兵衛、栗田屋与市の屋敷の位置特定については第一章表6（伊勢屋孫兵衛は築出新地の三、三三番、栗田屋与市は築出新地の二五番）。

三〇 横浜開港資料館の館報「開港のひろば」第三〇号、一九九〇年五月（西川武臣執筆、文久元年にガワが撮影した写真（横浜開港資料館所蔵）の紹介）。

三一 石井謙治『和船』（法政大学出版、一九九五年）によれば、千石積みの弁財船の深さ（上船梁の上端から底までの寸法）は八尺五寸であった。満載時には上船梁の下端あたりが水面の位置であったので、喫水は二メートル強であったと考えられる。

三二 西川武臣「幕末から明治初期の物資流通」（前掲書注八）。

三三 前掲論文注七。

三四 『横浜市史』資料編一。資料番号八四、八五番。

三五 安政六年「乍恐以書付奉申上候」（青木町廻船問屋間宮家文書、請求記号200801110、神奈川県立公文書館所蔵）。西川前掲論文（前掲書注八、第二章）に引用された文書（横浜開港資料館保管の「市史写本」）は同文書の写しとみられ、②の部分を中心にして廻船改めについて考察している。

三六 菱垣廻船の下り荷物は、浦賀から江戸までの間の水揚げが享保期以降禁止されていた（西川武臣「近世神奈川湊の成立と展開——紀州の住民と廻船問屋をめぐって——」（前掲書注八））。

三七 上白石実「幕末期対外関係の研究 十九世紀日本の海防と開港」（吉川弘文館、二〇一一年）。

三八 鳴門市史編纂委員会編『鳴門市史』上巻（鳴門市、一九七六年）。一二六頁。

三九 文久三年「問屋仲買取置一札写」（県史資料原本、請求番号220043004、神奈川県立公文書館所蔵）。

四〇 相良英輔「徳島藩における塩業政策の展開」石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究 五近世・近代編』清文堂出版、一九八三年。

四一 前掲論文注六。

四二 前掲論文注四〇。以下の徳島藩による塩専売制とその顛末については本論文を参照した。同論文においては江戸に滞った塩に困った産地問屋から神奈川廻船問屋への働きかけが想定されているが、資料②の文中に「年来志願」とあることから、廻船問屋側の希望もあったことだろう。なお、同論文では江戸で塩を荷受けする者を「元取問屋」と呼ぶが、本論文では資料中の呼称にならって「元取」を用いた。

四三 『鳴門市史』上巻に収録された「仕上御請書之覚」には「御手捌塩元取店屋吉右衛門義 此度武州神奈川江出店相構、丸中屋吉右衛門名ヲ以、江戸表同断塩荷物為取捌候条」という記述がある（二二六四頁）。開港場の本町二丁目南側には安政六年六月に塩と醤油の取り扱いを許可された丸中屋吉右衛門が確認できる。上記の「武州神奈川」は横浜開港場のことを示すのだろう。

四四 武蔵国神奈川宿青木町廻船問屋紀伊国屋中村三郎兵衛家文書（神奈川県立公文書館所蔵、請求番号220048248）。

四五 赤穂市史編さん専門委員編集『赤穂市史』第二巻（一九八三年）。第三章五節。

四六 旧幕引継書「諸問屋名前帳」五七（国立国会図書館所蔵）。渡辺熊次郎は二番組に所属。

四七 東京都「江戸東京問屋史料 諸問屋沿革誌」、一九九五年。

四八 斎藤善之「株仲間再興後の下り塩流通」『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房、一九九四年。

四九 前掲書注四五。第三章四節。

五〇 三代広重「東海道五十三次 神奈川」の「台の茶屋」、芳虎「金川ヨリ横浜遠見の図」（万延元年）、二代広重「横浜海岸図絵」（横浜風景画帳）など。

五一 第一章表4に整理したとおり、河合藤一郎は嘉永六年、明治二年の廻船問屋の名としては確認されない。ただ、伊勢屋孫兵衛、新満屋甚兵衛、遠州屋藤兵衛の三名は河合姓であることから本文のように推測した。

五二 神奈川県立図書館編『神奈川県史料』第五巻、一九六九年（「駅通」のうち「回漕問屋及外国人荷物輸送」）。

五三 神奈川宿青木町廻船問屋紀伊国屋中村三郎兵衛家文書（神奈川県立公文書館所蔵、請求番号220048248）。

五四 斎藤善之によれば、尾州廻船の内田家と紀伊国屋三郎兵衛の取引は明治十四年まで確認できるといふ（前掲論文注六）。神奈川・横浜間の舟運については、時代は下るが明治二十九年、第一次築港事業で造成された横浜と神奈川を仕切る馴導堤の切れ目に燈明台設置が申請され、そのときの報告によれば、和船九百六十艘、漁船百七十艘、西洋型の船三十艘が堤の切れ目を通過していた（神奈川宿本陣石井家文書、請求番号219943248～253）。

五五 横浜市『横浜市史稿』政治編三、横浜市役所、一九三二年。第一章「土木」三「高島町の埋立」で、高島家所蔵日記録の内の願書として紹介される。

五六 太田久好著『横浜沿革誌』（一九二二年）。

五七 「青木町上台玉置氏記録」（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）に所収の文久元年「宿相統方御尋ニ付奉書上ヶ候廉々之写」。

五八 明治四年八月「入置申一札之事」（中村三郎兵衛家文書、請求記号220048250、神奈川県立公文書館所蔵）。

五九 前掲論文注六。



## 第三章 横浜開港場の都市形成

### —地所割渡し過程と地割から—

#### 一 問題の所在—幕末都市形成史研究にむけて—

本稿は、安政六年に江戸内湾の国際交易港として誕生した横浜開港場の形成過程を分析し、近世都市史へ位置づけることを目的とする。諸国から集まった出店商への地所割渡しの過程と完成した地割に着目し、神奈川奉行と出店商の双方の文脈から形成過程に迫りたい。近世前期の事例を中軸としてきた都市形成史研究において<sup>一</sup>、近世末期の新都市であり、都市計画の内容と建設の過程がある程度あきらかになる横浜開港場の事例研究は重要な貢献となるはずである。以下、既往研究の整理から問題の所在を示したい。

横浜開港場の出店商は、国際交易許可の触れのもと、関東を中心に全国から集合した。彼らは江戸を中心とした旧来の流通秩序を揺るがす一方<sup>二</sup>、資本主義世界への編入のもと、商人の立場から外資の侵入を退け、明治以降に産業資本家へと成長するものもみられた<sup>三</sup>。

幕末維新期において如上の位置にあつた出店商は戦前から研究対象とされ、『横浜市史』の編纂以降、とくに生糸売込商についての研究が格段に進展してきた<sup>四</sup>。ただ、個々の出店商の性格が着実に解明されてきた一方、奉行が出店商をどのように編成して都市を形づくったか、という点についての議論は『横浜市史』以降進められていない<sup>五</sup>。横浜開港場を史的に評価するためには、都市の計画・形成の過程から、出店商と奉行の関係を問うことが必要であろう。

一方で建築史研究者からは、開港場の都市計画について空間的な考察から仮説が提示されてきた。田中祥夫は、開港場の都市計画の叙述の中で日本人町の街区基本単位を六〇間四方とした<sup>六</sup>。宮本雅明は近世都市の平面比較のなかで横浜に言及し、近世前期の城下町・港町の特徴である均質な地割が卓越した最後の在方町と評価した<sup>七</sup>。青木祐介は横浜に近代都市の黎明を固定的に読み取る既往研究を批判し、六〇間四方の街区や本町通り沿いの両側町に江戸と共通した近世都市計画を見出した<sup>八</sup>。

西欧的な都市計画が施される以前の横浜開港場において近世的要素の存在を看破した宮本・青木の業績はとりわけ重要である。しかし、近世史研究者の精力的な資料調査によって出店商に関する研究が蓄積された今、奉行側の都市計画論から出店商に関する考察が欠

けている点があたためて自覚されなければならない。ここでは都市形成の過程で発現されるはずの出店商の意向が全く捨象されているのである。計画主体と住人の双方の文脈が追跡可能な本事例においては、都市形成の分析方法が見直されるべきだろう。

また、いずれも街区規模の考察にとどまっており、宮本は近世都市に共通する単一の空間類型を、青木は近代都市の対としての近世都市像を、横浜開港場へあてはめてはいないか。安政期に誕生した横浜開港場であるからこそ、日本近世都市のなかで持った特徴を具体的な形成過程の分析から解明することに都市史研究上の意義があるように思われる。

本稿では、奉行による編成と出店商の意向が交差する土地に注目し、開港場の都市形成を両者の意図の均衡のなかで検討することを試みたい。横浜開港場の地割り復元図は管見の限り『横浜市史』で提示された復元図が最新のものでは、発掘調査や出店商に関する最近の研究でも活用されている<sup>一〇</sup>。しかし、慶応期以降の埋立による市街地の拡張が考慮されておらず、とくに海岸付近に大きな誤謬がある。そこで、拡大する以前の街区形状を念頭に、市史が参照したであろう土地の帳簿「御拝借地所・御願済渡世合寫」を再活用し<sup>一二</sup>、数点の絵地図から得られる情報とともに出店経緯に関する新資料をまじえ、新たな復元図を提示したい。

#### 二 開港場の建設過程

##### 1 開港場の概要

本題に入る前に、横浜開港場の基本的な事項を概観しておきたい。横浜開港場の日本人町は安政六年の地所割渡し以降、徐々に町場を拡大させるが、当初の都市域は図1に示した範囲である。メインストリートの本町通りが丁字型に走り、西側に洲千町、南側に弁天通りと南仲通り、北側に海岸通りと北仲通りが設けられた。

本町のみ一から五丁目、弁天通り、南仲通り、北仲通り、海岸通りは二から五丁目に分かれた。これらはあわせて横浜町と呼ばれた。本町一丁目と洲千町、弁天通り南側、海岸通り北側等の外周部は、新道の形成や海岸の埋立によって形状が変化するが、中央部の街区形状は現在まで変わらない<sup>一二</sup>。

五丁目と外国人居留地の間は運上所と波止場、役宅に充てられ、運上所の南側には町会所が設けられた。そこには保土ヶ谷宿の名主蒔部清兵衛と横浜村の石川徳右衛門が務めた惣年寄、神奈川宿名主石井源左衛門の務めた惣年寄兼役、各丁から集められた町役人が詰

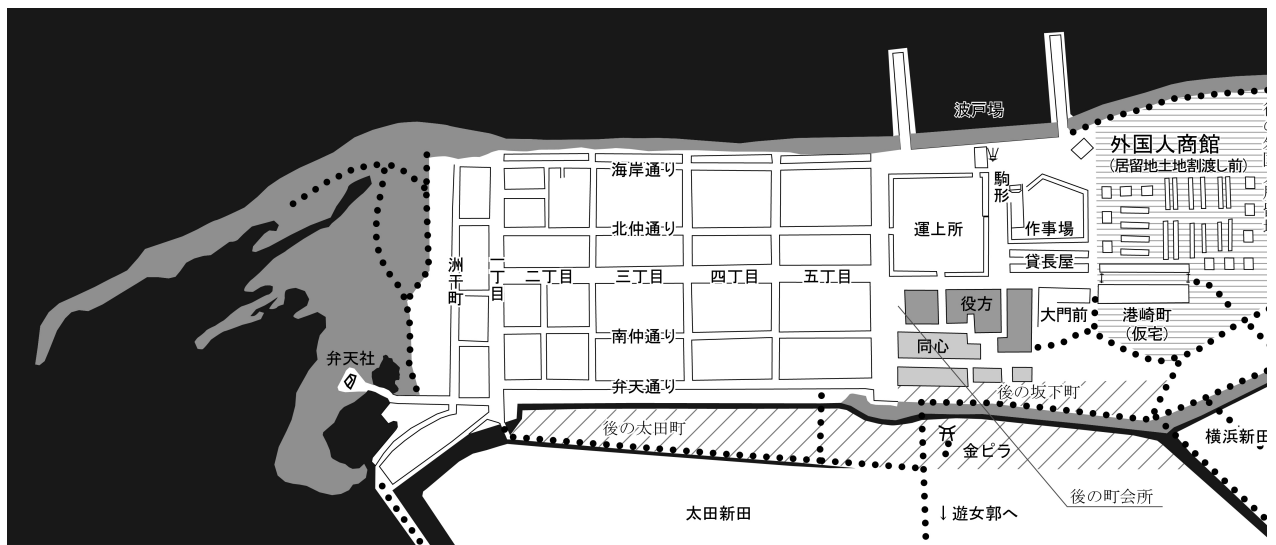


図1 安政六年の横浜開港場「御持場海岸分見画図」から作成（松平文庫、福井県立図書館所蔵）

め、町を統括した<sup>三</sup>。万延元年の名主は、横浜町一丁目、二・三丁目、四・五丁目、元横浜町、太田町、戸部町、港崎町に一名ずつ、計七名が置かれていた<sup>四</sup>。  
なお、運上所や役宅が建つ開港場の中央部分には、五丁目の小町としての駒形町、坂下町も成立した。遊廓である港崎町に向かう吉原道とともに、小規模な営業主体による町場が形成された。

## 2 幕府役人による開港準備の概要

開港場の建設過程については『横浜市史』に詳述され、運上所や波止場の建設、神奈川宿から横浜へ向かう道の造成などの御普請の内容がまとめられている。また、交易開始にあたっての外国奉行・町奉行・老中の議論もくわしく紹介される<sup>一五</sup>。ここでは、出店商人の募集から土地の割渡しや都市計画に関連する内容を簡単に整理したい。本項では『大日本古文書 幕末外国関係文書』を典拠とした際に、「(巻・資料番号)」の形で詳細を示す<sup>一六</sup>。  
安政五年末から出店商人の募集方法が議論され始める。安政五年十一月、交易に参加する人びとを移住させるか旅客人として営業させるかが議論された。その段階から開港場の地所は貸渡す構想であった(二一・三四六)。以降、開港場の土地は幕府に帰属しており、地券発行まで出店商人に土地所有権は認められなかった。

十二月の段階で、外国交易許可のを知り、江戸、御料、他領から多くの出願があったことが報告される(二一・三九八)。そして十二月晦日の江戸町触により、江戸の間屋商人のうちで出店や出荷を希望する者が募集された(二一・四一八)。翌安政六年一月十二日、老中から大目付へ、神奈川・長崎・箱館の三港が開かれるので、出稼ぎや、移住して自由に商売をしたい者は港ごとの役人へ申請するようにせよ、という内容に触れることが指示された(二一・一九)。江戸市中につき全国へ出店者の募集が触知されたことが知られる。

安政六年の正月の段階では、地所の規模を申請させるか、一人当たり決まった規模で貸渡すかの二通りの手法が考えられており、決定されていない(二一・一一)。結局、地所の規模を各人に申請させる手法が採択されるが、その背景は明らかではない。拝借人の総数が未確定では一人当たりの規模を決めることができなかったためであろうか。

そもそも、開港場を神奈川と横浜のどちらにおくかについて外国側との妥結がないなか、日本人出店商を横浜に移住させることに本決定されたのが二月二十七日であった。条約で定められた開港日の六月二日のわずか三ヶ月前である。同月二十二日、決定に先立って外国奉行は、横浜への日本人町の建設に着手することを許可するように老中に求めるなかで、

最低限の施設を御普請によって調べれば、町人たちの自力普請を鼓舞する方法を考えてあるため、開港日までに準備を終えることができると主張している（二一・一七〇）。出店商の力に期待する方針であったことが伺え、各人に希望する土地を取得させる方式の背景といえるかもしれない。いずれにせよ、個々の土地まで介入する手法が採択されなかった点に注目しておきたい。

三月三日、外国奉行は勘定奉行吟味役と勘定組頭らとともに現地で計画の確認をおこなった。日本人町周辺は「移住町人ハ交易之方、横浜畑地海岸之分、弁天社より本郷村之方へムけ一円に割渡し、中へ往來を附け両側町とし、波止場式ヶ所同所海岸へ築出し、其所より南方へも往來を通し、右脇に運上会所を取建」という決定がなされた<sup>二七</sup>。

開港場建設のマスタープランといった内容で、二月に外国奉行が老中へ確認した内容が基本となっている。本郷村は横浜村の東隣の村であるので、弁天社から東側を交易に関わる移住商人に割り付け、通りを作って両側町とする計画であったことがわかる。

数日後には出店商が現地へ赴き、土地を取得し始めた（表1A）。同月中には割渡しが進んだことで寸地も残らない状況となった（二二・三三六）。

### 3 地所割り渡しと開発の過程

安政六年一月の募集に応じた出店希望者による、出店申請から地所取得、普請までの過程はいくつかの事例から明らかとなる（表1）<sup>一八</sup>。

まず申請の主体であるが、D 八木屋兵助、I 大川屋七郎右衛門、H 中居屋重兵衛やO 永嶋庄兵衛のような個人のほか、A、L 駿府町人やG 下田町人、S 芝生村住人のように町、村から共同出店しているもの、K 塩谷新八郎やF 甲州屋忠右衛門のように近隣の村落の者と共同する場合もあった。共同の出店者はおおむね均等な土地を並べて拝借している。C 佐藤屋は個人の申請だが、安政六年四月以降は共同出店として準備を進めていた。佐藤屋は相州佐野川村（現神奈川県相模原市、甲州街道の吉野宿の近く）の名主で、八木屋、大川屋、塩谷も名主である。P 福井藩の商館や、藩産物を専売したQ 肥前屋、藩産物の販売を請け負った中居屋やM 松坂屋のように藩専売の末端として機能した出店もあった。

出店への直接のきっかけが明らかとなる例は少ないが、下田町人や肥前屋は災害による損失の回収を目指しており、永嶋庄兵衛は開港場の普請をきっかけに出店している。御用金預かりとともに交易の要請をも外国奉行からなされたE 三井組の例は有名であろう。

出店と地所拝借の申請の経緯には多くの共通点が認められる。開港前においては、国元の名主や支配領主の添翰をもって外国奉行へ申請し、営業の内容と必要な地所の大きさを伝え、現地での見分と周囲の拝借人との示談のうえ、絵図面を提出し、最終決定する過程であった。家作絵図面の提出を指示された例も確認できる。また、仕法の遵守を誓約した請証文を提出し、村役人や五人組の者が連帯保証人となった。

出店の申請者が希望する地所の大きさを主張し、場所の選定をしていたことは注目に値する。たとえば三月六日、大川屋七郎右衛門は絵図面を提出し、希望する場所を主張している。この点は、さきにみた安政六年正月の議論において土地の大きさを申請させる方法が提案されていたことに端を発している。そして、出店商側の意向が奉行の介入と折り合いつつも横浜開港場の形状を左右することになるのである。

また、申請者がおのおの横浜に赴き縄張りしており、三月下旬に横浜へ到着した甲州屋や下田町人が荒地しか残っていないことを報告していることから、基本的には先着順であったことがわかる。思うように地所の獲得ができなかった者は、外国奉行の支配方や町役人によって融通が図られ、土地となった土地が再配布された。

中居屋の残した記録によると、普請の遅れた場合は土地すると言い渡されており、加部安左衛門や佐藤屋才兵衛の記録には、家作普請の催促に対して日限の申し出や日延べの嘆願がみられる。外国奉行水野忠徳は、四月十五日中に普請が終わらなければ地所を取り上げる旨を通達するように外国奉行調役に指示している<sup>一九</sup>。未利用地のまま保有することに対する厳しい規制として解釈することができる。家作の絵図面を提出させたことも目的は同じであろうか。

割渡し中に散見される「土地」は、家作普請の進まない土地が没収された結果であろう。幕府側に帰属する土地は再配分が容易であり、多数の出店希望による流入の圧力を逃がす手法が担保されていたのである。事後対応ではあったが、出店商を編成する実行手段であったと解することができるだろう。なお、借金の末に質流れとなる場合、家屋は売買や譲渡によるが、土地は土地を請願する形をとっており、出店商が土地の拝借者でしかなかったことを明示している<sup>二〇</sup>。

このように、江戸町触れ、ついで全国触れによる募集に応じた出店商は、町村役人を保証人として開港場へ参入し、希望する規模・位置の地所を取得していった。奉行によって身元が確認され、土地を介して掌握された彼らは「地所拝借人」と呼ばれ、地代を納め、町中の構成員となった。ただし、その多くは横浜にはおらず、店支配人が代理を務めた<sup>二一</sup>。

K	塩谷新八郎 上州 邑楽郡川俣宿 本陣	5 月 23 日, 5 丁目の間口 9 間奥行 30 間を新八郎が, 間口 6 間奥行 30 間を新宿村金蔵が拝借する。 6 月, 金蔵が病氣となり普請ができなくなったので, <u>上地のうえ, 新八郎が拝借したい旨</u> , また, その場合は旅籠屋渡世をしたい旨を御奉行所様へ請願。
L	駿府町人 4 人	安政 6 年 12 月 9 日, 町奉行へ, 翌日に外国奉行へ, 駿河国産物売り捌きのための地所として間口 1 人 6 間余りずつ拝借したい旨を申請。28 日に外国奉行へ駿河国産物をあつかう出店申請。 ※ともに町役人惣代との連印。出店は許可されるも, 地所については横浜の御役人に申請するよう指示された。 万延元年 1 月 9 日, 横浜町年寄中へ地所拝借の申請。万延元年 1 月 25 日, 海岸通り 3 丁目に間口 36 間奥行 6 間の土地を仰せつけられた。長さ 8 間の家と土蔵一棟を建て, 4 月 16 日に開店し, 家作は平吉しか完成させられなかったため, 残り 3 人は同居して商売することとし, 「駿河屋平吉」の名義とした。 2 月 4 日, 請証文を提出した (C 佐藤屋の例と同内容)。 ※町年寄代理の六左衛門との連印。
M	松坂屋彦右衛門 江戸小舟町 3 丁目文左衛門地借	安政 7 年 2 月 22 日, 横浜へ出店し呉服物, 諸品を売買したい旨を町奉行へ申請し, 許可を得た。 3 月 10 日, 「我等」は安藤対馬守の屋敷に出入りしており, 岩城, 美濃, 三河の産物売捌き方を申請して許可されたため, 弁天通り 4 丁目の間口 6 間奥行 20 間の地所拝借を願い出た。 ※下書きと推測される資料には, 「相応の地所」と書かれる。
N	市郎右衛門, 専左衛門, 嘉助 相模国津久井縣若柳村 (市郎右衛門は組頭)	万延元年 12 月 4 日, 農間諸商いをしてきたが, 神奈川開港にあたり出店と地所拝借をしたい旨, くわえて 24 種の渡世許可を神奈川奉行へ申請。同年 12 月 19 日, 神奈川奉行から地所を選び申請するよう仰せ渡される。 ※以上は 3 名による申請。以後, 嘉助と, 市郎右衛門・専左衛門の二手に分かれる。 【嘉助】 万延 2 年 1 月 26 日, 地所が見当たらないので, 当分は 3 丁目の繁蔵家作のうち間口 6 間奥行 5 間を仮仕切でつかうことを, 絵図面を提出して許可申請。 ※名主徳兵衛との連印。 文久 3 年 3 月 13 日, 材木・竹以外の渡世内容と, 繁蔵の借間について許可されたので, 取締りの内容を承知している旨について請証文を提出。 ※繁蔵と嘉助の代理人, 町役人惣代重兵衛の連印。 【市郎右衛門, 専左衛門】 文久 3 年 4 月 23 日, 地所拝借と移住が許可され, 商法, 高札の内容, 町法, 町役人の指示に従うことについて請証文の提出。 ※横浜町役人惣代源兵衛, 惣年寄徳右衛門との連印。 4 月 28 日, 弁天通り 4 丁目の (佐藤屋) 才兵衛の拝借地のうち, 西側が上地となったので拝借したい旨の申請。
O	永嶋庄兵衛 相州三浦郡公郷村	横浜御普請で種々の請負をしたところ, 手違いから損耗をこうむってしまった。開港場で諸商いに都合の良い場所をえらび, 地所拝借の申請をするよう内々に仰せつけられたので, 幸いに思い, 本町 2 丁目新道に間口 10 間奥行 15 間の地所拝借を願い出たところ, 許可された。相州に居所があるので店支配人をおいた。 万延元年 10 月に類焼し, すぐには普請しかねたため, 元治元年 2 月まで閉店することとした。その間も地代・町入用は滞りなく会所へ月々納めた。 元治元年 2 月, 町内の保之助が地所・株式を譲ってくれるよう言いに来たので, 譲ることはできないが, 当分貸し渡すことで示談した。しかし, 他の者へ譲渡すること, 貸し株にすることはできないとのことだったので, 余儀なく保之助の倅の徳二郎を養子にし, 地所・株式を貸し渡すことにした。
P	越州屋小左衛門代金右衛門 福井藩の商館 ※ 石川徳右衛門の地所。	福井藩の諸産物売捌所を設けようとしたところ, 太田屋新田の陣屋を警衛の持場とされた際に御用向を頼み, 扶持も与えている (横浜村の) 名主石川徳右衛門がいたので, 徳右衛門の名前で地所を拝借し, 店支配人に与助という者を召し抱え, 渡世内容の出願をおこなった。このときの地所は間口 6 間, 奥行 15 間であった。 安政 6 年 11 月, 太田陣屋の普請中に作事方下代を務めていた金右衛門を御制産方の下代とし, 安政 7 年 3 月には横浜商館の手代として, 与助と同様の待遇とした。 文久元年 12 月, 陣屋の場所替えを命ぜられ, 城下町人の山口小左衛門の出店へ変更するため, 石川徳右衛門から上地願いをだし, 小左衛門の拝借地とした。生糸店の新規開業は認可されなかったため, 徳右衛門の店を間仕切り, 生糸店とすることを指示され, 益暮れに三両ずつ支払うこととなった。
Q	肥前屋小助 肥前城下町人 (高島嘉右衛門) ほか	安政 6 年 1 月 25 日, 松平肥前守の家来野口栄次郎から, 領内商人が神奈川へ出店して領内産物を売り出し, 異人の持ち込んだ品を買い入れたいと出願しているので, 問題なければ許可してもらいたい旨, また, 追って出店の請地や売買品について商人から申請をする旨の書付を外国奉行へ提出した。 ※以下, 高島嘉右衛門の回顧 安政 3 年の暴風雨の損害を処理する方法を, 鍋島家家臣の田中善右衛門に相談したところ, 開港場での肥前藩の陶器販売を担当し, 一割の利益を得て営業する申請をするよう助言された。申請したところ許可され, 建築費 7000 両から身元金 3000 両を引いた 4000 両を交付された。本町 4 丁目の角に間口 15 間, 奥行 20 間の店舗を新築する計画を立て, 安政 6 年 4 月に普請に着手, 6 月 2 日に開店し屋号を肥前屋とした。 その後, 鍋島家の物産を担当しようとしていた深川の油穀物問屋の丸山七右衛門に頼まれて義兄弟となり, 組合営業となった。また, 芝神明前の瀬戸物商花菱屋太一郎という者を, 娘が田中善右衛門の愛妾であった関係から支配人にすることとした。上記の 2 人との共同の営業になったが, 肥前屋の名請人の決定について合意がとれず, 鍋島家物産役人の山口小助が仲裁を試みたので, 名義を「肥前屋小助」とした。
R	明石屋平蔵 江戸日本橋材木町	海岸通りの麦畑だったところの地所を見立て, 60 間四方 3600 坪の貸下げを出願した。奉行所から広大な地所の必要性を問われたので, 生糸, 海産物のほか, 磐城国白水仙山鉱山の石炭を黒船に売るつもりで, 石炭置場が必要だと主張した。結局, 35 間四面 1235 坪の土地を拝借した。その際, 空地に残った場合は返地することに同意した。 西側の 60 坪は親類の材木商宝田屋太郎右衛門に貸し, 板葺の平家で店舗・倉庫・石炭置場を隙間なく建てた。
S	芝生村住人 6 人	神奈川から地続きの芝生村で直交易ができると思い, 手塚清五郎を中心に 13 名が江戸の外国奉行に申請したところ, 地所が何坪必要かを問われ, 横浜村への出店と知った。相談したところ辞退する者もあり, 6 名で出願した。 手塚清五郎・松木屋清六・保田善蔵の 3 人は芝屋三八の名義で出店し, 吉野屋庄七・金子新兵衛は金子屋庄七の名義で酒屋とし, 福田屋治兵衛はひとりで荒物を扱うこととなった。 間口 10 間奥行 5 間の裏に 2 間の通しと葺きおろしをつけた家屋を建て, 6 間分を芝屋, 4 間分を金子屋・福田屋の店とした。その後, 手塚清五郎は普請代金支払いを滞らせ, 合同を拒絶され, 2 間分を与えられた。

表 1 出店申請から地所取得、家作普請の経緯（依拠した資料は注 18 を参照）。

A	名前	経緯（地所取得に関する部分に下線を付した）
A	駿府町人 14 人	<p>安政 5 年 9 月，下田での交易をしてきていたが，不況であるため，新しい開港場所での塗物に限らず扱うことを，駿府町奉行へ出願。同年 10 月に町奉行から添え翰を受け取り，<u>11 月 4 日に外国奉行へ出願した。</u></p> <p>安政 6 年 2 月 23 日，外国奉行に召出され，1500 坪ほどの地所を申請した。産物はできる限り手広く扱うことを求められた。惣代から請証文を提出し，駿府の町役人から身元を保証する一札を提出した（ともに C 佐藤屋とはば同文）。</p> <p>3 月 8 日，神奈川に行くも役人は江戸出張中であった。9 日，小網町桑名屋茂兵衛宅を訪ねて様子を聞くと，4 日に御呼出しがあり，茂兵衛をはじめ，駿府出店商の惣代として頼んでいた人達（詳細不明）は神奈川へ行ったとのことであった。翌日神奈川に向かうも，茂兵衛らとは再びすれ違ってしまった。11 日，江戸で茂兵衛に様子を聞くと，<u>9 日に拝借地所引き渡しになり，縄張りも終わったことを伝えられた。</u></p> <p>3 月 13 日，茂兵衛とともに横浜へ行き，4 丁目海側 1 丁 60 間四方の拝借を仰せつかり，縄張りした。</p> <p>3 月 16 日，外国御調役より，新道ができるので，表間口 1 丁，奥行は新道までにすること，小安村の者が出願しているので，示談のうえ絵図面を出すように指示された。3 月 17 日，隣人の小安村の 2 人と現場で示談のうえ縄張りした。</p> <p>3 月 18 日，<u>源左衛門という者に地ならしを頼んだ。</u></p>
B	教屋清左衛門 上野国多胡郡吉井宿	<p>安政 5 年 12 月，上州国産品の絹，館煙草，日野紙，桐生呉服，干し大根などを取り寄せ，信州産物は塗物などを扱えるので，必要の場合（外国奉行が，という意味か）は神奈川で売買したいので，許可してほしい旨の申請。</p>
C	佐藤屋才兵衛 相模国津久井縣佐野川村 名主	<p>安政 6 年 1 月 10 日，弟彦次郎から願書を早く差出すよう書簡が来着。11 日，明後日に出府する旨を連絡。</p> <p>1 月中，従来，絹や漆などの土地産物にくわえ，まわりの村々からも品物を買ひ受け，農間渡世として諸国へ売捌いていたので，開港場所に参上し，こうした品々の「御用向」を勤めたい旨を申請。</p> <p>※「御用向」は，会所交易を念頭においた表現とみられる。以降の資料では外国人へ直売りするという表現となる。</p> <p>1 月 24 日，召出され（外国奉行へか），<u>拝借地所の有無を尋ねられたので，100 坪を願い上げたが，26 日に，100 坪では足りないので 300 坪に増やしてほしいと外国奉行へ請願した。</u></p> <p>2 月，別紙の命令を守り，引負いや密売買があった場合は責任をとる旨の一札を，組頭の助右衛門より提出した。</p> <p>2 月 23 日，外国奉行から呼び出された。24 日，<u>ペ売をせずに正路に商売をすること，密売買の報告，押し売りや賄賂の禁止，開港場で相当の地所を貸渡し地代金は追って町並地位に応じて仰せ渡されること，高札の遵守，役人の指示へ従うことについての請証文を提出。</u>神奈川へ出張した御役人から追って指示があるので，帰村を命じられた。</p> <p>3 月 12 日，山口市郎右衛門と専左衛門のもとに戸部村から差紙が届く。飛脚の者が言うには，<u>地割は大半完成し，14 日ごろには全ての地割が決定するとのことであった。</u></p> <p>3 月中，成瀬善四郎から差紙が届く（上記の差紙か）。風邪のため，弟の彦次郎を村役人とともに派遣した。弁天通り 4 丁目の地所拝借を仰せつかり，「佐藤屋才兵衛」と名を立て，家作は彦次郎と親類の専左衛門に任せることにした。</p> <p>※年欠の書付の控えによれば，<u>請願した土地の家作模様と完成日限について申上げるよう命ぜられたので，粗絵図面を提出し，5 月中に完成することを報告している。</u>図 10 はこのときの絵図面と推測される。</p> <p>4 月，若柳村の市郎右衛門と専左衛門，中沢村の武左衛門と共同する議定書を交わした。</p> <p>4 月 13 日には切り組，14 日には基礎と組み立てを開始した。</p>
D	八木屋兵助，代源兵衛 相模国津久井縣上川尻村 名主	<p>2 月 24 日，農間に酒造，醤油渡世をしてきたが，御交易場御役所の御用を務め，異国の品との交易があった場合は指名してほしい旨を神奈川奉行へ申請。</p> <p>※役所の賄いと貿易商人への指名の願書だが，以下では，外国人への直売を許可されたことが記される。</p> <p>3 月 22 日，年寄の太郎左衛門が，源兵衛の身元を保証する一札を提出。請証文も提出（C 佐藤屋の例と同内容）。</p> <p>3 月 28 日，<u>土地を選ぶよう指示を受けたので，地所を選び，絵図面を差上げたところ，上地があったので，選び直した。</u>絵図面も改めて早々提出し，4 月 1 日に参上するように命ぜられ，3 月 29 日に提出した。</p>
E	三井横浜店	<p>安政 6 年 2 月 27 日，外国奉行より出店の要請が，29 日に外国方御金御用達の指名がなされた。</p> <p>3 月 7 日，出店の請書を，17 日に外国方御用達の請書を提出。</p> <p>3 月 20 日，<u>早急に店普請に取り掛かるように命ぜられ，建築に着手。</u>6 月 1 日，開店し，11 日から開業した。</p>
F	甲州屋忠右衛門 甲斐国八代郡東油川村 長百姓	<p>3 月 1 日，600 坪の地所拝借の申請（初めは 500 坪を願い出たが，不都合があり，300 坪の地所を二筆拝借したいという申請をした）。※図 9 の家屋の計画図はこの時点で作成か。</p> <p>3 月 25 日，戸部の仮御奉行所で，<u>地所を見分して決めるよう御達しがあつた。</u>横浜村では，すでに銘々に地所の割渡しがされ，空いていた場所は条件の悪い場所であった。困惑しつつも地所を選ぶ。</p> <p>4 月 3 日，<u>代地を発見し，取得した。</u></p>
G	下田町人 ※申請時は 17 人，確認できた地所拝借人は 10 人。	<p>2 月 19 日，吉兵衛ほか 16 人から神奈川で相応の地所，または輸出場所の下田町人の分が拝借できるように申請。</p> <p>3 月 22 日，役所への届け出が終了。神奈川へ向かったところ，希望者が多く，下田の者は出遅れ気味であった。すでに地所は残らず割渡され，場末の荒れ地しか残っておらず<u>当惑していたところ，神奈川奉行組頭，支配調役の取計いによって弁天通りの地所が上地され，</u>拝借できることになった。</p> <p>4 月 1 日，銘々が拝借地へ立札を建て，地ならしをしており，早いものは小屋組などをしていた。</p>
H	中居屋重兵衛 上野国吾妻郡中居村 芝金杉にも居所。	<p>2 月 5 日，神奈川役所，商館の日々の諸色御用を仰せつけてほしい旨を町奉行に申請したところ，3 月 6 日に御白洲で，御奉行様（町奉行か）より直々に許可された。14 日，外国奉行から許可を得た（同内容か。※5 人組が同行）。</p> <p>4 月（7 日以前），紀州・会津・上田産物の売込をする出店用地として間口 30 間奥行 40 間 1200 坪の地所を申請。</p> <p>4 月 11 日以前，外国奉行へ，間口 20 間奥行 30 間 600 坪の地所を申請。26 日，間口 30 間奥行 20 間への変更申請。絵図面を添え，<u>拝借できた翌日に地ならしに取り掛かり，墨書きで示した本家は即日切り組をはじめ，5 月 20 日には建前，月末には普請完成の見込みであるとする。</u>同日に，<u>5 月 20 日までに本普請に取り掛からなければ他の願人へ土地を割渡すことに同意した請書を提出した。</u></p> <p>5 月 18 日以前，30 間四方の土地を拝借でき，22 日までに普請を完成させるよう命じられた。25 日には開店し店奉公人を 60 人余り抱えて引越す予定である。</p>
I	大川屋七郎右衛門 武蔵国都筑郡山田村 名主	<p>2 月 18 日，これまで扱ってきた御国産物を外国人へ直売する申請が認められたので，山田村年寄勇次郎が七郎右衛門の身元を保証する一札を外国奉行に提出した（C 佐藤屋の例と同内容）。</p> <p>3 月 6 日，直売が許可され，<u>拝借地所については追々沙汰があるとのことだが，普請手当等を頂きたい旨，また，</u>拝借地所も別紙絵図面の辺りに拝借したい旨を，七郎右衛門，勇次郎から外国奉行へ請願。※絵図面無し。</p>
J	加部安左衛門 上野国吾妻郡大戸村 名主	<p>2 月 12 日，外国奉行から出府の申渡しを受けて出府中に足痛のため延着の願いを出した。</p> <p>（5 月 19 日以前）5 月 10 日までの普請日限の延長が許可され，請書を提出した。代理の新八が江戸へ日帰りのつもりで赴き，大工共へ指示していたところ，持病が発症し，滞在が伸びてしまった。</p>

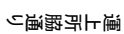


図2 文久二年時点の地割復興図 番号は「御拝借地所・御願済渡世合算」の記載順を示す(表2に対応)。破線は慶応元年の測量地図に描かれた街区形状と海岸線を表す。本文中で言及する拝借人の地所を灰で示し、アルファベットは表1の記号、ゴシック体の数値で地所の寸法を記した。

表 2 地所拝借人名 番号は図 2 と対応 (駒形町、坂下町は省略)。本文中で言及するものを灰で示した。地借り、新しい拝借人は、新地とみられる洲干町 38、39 以外は割愛。

一丁目、洲干町			二丁目			三丁目			四丁目			五丁目					
No	拝借人	出身	No	拝借人	出身	No	拝借人	出身	No	拝借人	出身	No	拝借人	出身			
1	六左衛門	相模 1	1	高須屋清兵衛	三河	40	種實屋武兵衛	神	1	大川屋七郎右衛門 門 伊三郎	武蔵 4	35	小林屋清助	36	亀屋和助	37	鎌倉屋忠右衛門
2	薬種店繁蔵	江戸	2	千秋屋東屋次郎	保	41	玄良	保	2	高橋屋安兵衛	芝生	38	浅見屋喜兵衛	39	金子屋常次郎	40	細谷屋河蔵
3	青木屋忠七	神	3	鍋屋保次郎	保	42	伊勢屋系四郎	保	3	金子屋新兵衛	芝生	39	車屋喜八	41	山形屋仙吉	42	山形屋仙吉
4	車屋七右衛門	神	4	水屋与右衛門	保	43	夷屋兵右衛門	保	4	福田屋治兵衛	芝生	40	村田屋与次右衛門	武蔵 6	金吉屋清七	43	伊勢屋善四郎
5	鶴屋七右衛門	神	5	和泉屋次郎右衛門	保	44	紀伊国屋与次右衛門	保	5	福田屋治兵衛	芝生	41	門田屋与次右衛門	武蔵 6	金吉屋清七	44	伊勢屋善四郎
6	廣屋栄助	神	6	八百屋平次郎	保	45	柏屋吉次郎	保	6	福田屋治兵衛	芝生	42	鶴屋新兵衛	3	丹波屋惣左衛門	45	伊勢屋善四郎
7	和泉屋基右衛門	神	7	海屋入次郎	江戸	46	中村屋仲次郎	保	7	福田屋治兵衛	芝生	43	扇子屋宗亮兵衛	江戸	北村彦次郎	46	伊勢屋善四郎
8	若所屋如右衛門	神	8	伊勢屋徳兵衛	江戸	47	長岡屋細之助 増地	増地	8	福田屋治兵衛	芝生	44	越前屋吉次郎	野呂伝左衛門	駿府	47	伊勢屋善四郎
9	万屋徳兵衛	相模 1	9	伊勢屋徳兵衛	江戸	48	長岡屋細之助	増地	9	福田屋治兵衛	芝生	45	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	48	伊勢屋善四郎
10	倉屋平左衛門	品川	10	甲州屋忠右衛門	甲斐 2	49	久良岐屋豊吉	保	10	福田屋治兵衛	芝生	46	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	49	伊勢屋善四郎
11	稲屋平左衛門	神	11	甲州屋五郎右衛門	甲斐 2	50	松屋才次郎	保	11	福田屋治兵衛	芝生	47	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	50	伊勢屋善四郎
12	日野屋真五右衛門	下野 1	12	都内屋喜右衛門	甲斐 2	51	名主徳兵衛	保	12	福田屋治兵衛	芝生	48	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	51	伊勢屋善四郎
13	水鳥屋武助	江戸	13	濱吉屋次郎兵衛	江戸	52	山田屋長次郎	保	13	福田屋治兵衛	芝生	49	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	52	伊勢屋善四郎
14	陸奥屋、東国屋伊之助	江戸	14	永喜屋富之助	江戸	53	河内屋万蔵	保	14	福田屋治兵衛	芝生	50	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	53	伊勢屋善四郎
15	中屋吉兵衛	江戸	15	丸中屋吉右衛門	江戸	54	伊豆屋善三郎	保	15	福田屋治兵衛	芝生	51	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	54	伊勢屋善四郎
16	福井屋弥兵衛	江戸	16	丸江屋惣助	江戸	55	伊勢屋五郎兵衛	保	16	福田屋治兵衛	芝生	52	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	55	伊勢屋善四郎
17	髪結木縁次郎	江戸	17	丸江屋惣助	江戸	56	伊勢屋五郎兵衛	保	17	福田屋治兵衛	芝生	53	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	56	伊勢屋善四郎
18	清水屋利兵衛	江戸	18	田口屋善兵衛	保	57	永嶋屋三郎	保	18	福田屋治兵衛	芝生	54	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	57	伊勢屋善四郎
19	太田屋要次郎	太田	19	大坂屋源次郎	神	58	伊豆屋善三郎	保	19	福田屋治兵衛	芝生	55	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	58	伊勢屋善四郎
20	松屋文蔵	江戸	20	小橋屋伝右衛門	神	59	鍛冶屋忠七	保	20	福田屋治兵衛	芝生	56	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	59	伊勢屋善四郎
21	吉左衛門	江戸	21	小橋屋伝右衛門	神	60	鍛冶屋忠七	保	21	福田屋治兵衛	芝生	57	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	60	伊勢屋善四郎
22	元村屋平右衛門	横浜	22	茅木屋佐兵衛	神	61	紺屋安次郎	保	22	福田屋治兵衛	芝生	58	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	61	伊勢屋善四郎
23	丸喜屋喜右衛門	江戸	23	伊勢屋弥兵衛	江戸	62	樹屋幸吉	保	23	福田屋治兵衛	芝生	59	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	62	伊勢屋善四郎
24	豊八	江戸	24	岩田屋和助	根岸	63	松本屋平八	保	24	福田屋治兵衛	芝生	60	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	63	伊勢屋善四郎
25	与右衛門	江戸	25	岩田屋→上地	根岸	64	中村屋留次郎	保	25	福田屋治兵衛	芝生	61	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	64	伊勢屋善四郎
26	勝蔵	江戸	26	岩田屋→上地	根岸	65	髪結利人	保	26	福田屋治兵衛	芝生	62	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	65	伊勢屋善四郎
27	若所屋土兵衛 上地	相模 1	27	岩田屋→上地	根岸	66	片倉屋増次郎	江戸	27	福田屋治兵衛	芝生	63	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	66	伊勢屋善四郎
28	文次郎	江戸	28	榎並屋庄兵衛	江戸	67	三井八郎右衛門	江戸	28	福田屋治兵衛	芝生	64	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	67	伊勢屋善四郎
29	駿河屋彦兵衛	江戸	29	三井八郎右衛門	江戸	68	髪結利人 1 丁目録次	江戸	29	福田屋治兵衛	芝生	65	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	68	伊勢屋善四郎
30	与次右衛門	江戸	30	江戶屋徳兵衛	武蔵 1	69	薩摩屋田蔵	江戸	30	福田屋治兵衛	芝生	66	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	69	伊勢屋善四郎
31	峰屋十助	江戸	31	若所屋貞太郎	武蔵 1	70	河内屋半平	江戸	31	福田屋治兵衛	芝生	67	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	70	伊勢屋善四郎
32	若所屋太郎兵衛	横浜	32	元町平次郎	横浜	71	小高屋善右衛門	武蔵 2	32	福田屋治兵衛	芝生	68	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	71	伊勢屋善四郎
33	沖右衛門	横浜	33	髪結政吉	神	72	金子屋次郎右衛門	武蔵 3	33	福田屋治兵衛	芝生	69	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	72	伊勢屋善四郎
34	録次郎	江戸	34	諏訪屋金次郎	神	73	大井屋徳兵衛	武蔵 1	34	福田屋治兵衛	芝生	70	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	73	伊勢屋善四郎
35	八郎右衛門	横浜	35	諏訪屋喜平次	神	74	近江屋 善八	江戸	35	福田屋治兵衛	芝生	71	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	74	伊勢屋善四郎
36	元村屋右衛門	横浜	36	万屋四郎右衛門	横浜	75	下田屋文吉	神	36	福田屋治兵衛	芝生	72	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	75	伊勢屋善四郎
37	新八	江戸	37	田村屋吉兵衛	江戸	76	下田屋文吉	神	37	福田屋治兵衛	芝生	73	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	76	伊勢屋善四郎
38	近江屋栄助	江戸	38	相模屋善四郎	江戸	77	下田屋文吉	神	38	福田屋治兵衛	芝生	74	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	77	伊勢屋善四郎
39	海屋入次郎	江戸	39	相模屋善四郎	江戸	78	下田屋文吉	神	39	福田屋治兵衛	芝生	75	細谷屋又内	坂木屋平七	駿府	78	伊勢屋善四郎

【出身地の略称】 神: 神奈川宿、保: 保土ヶ谷宿、根岸: 武蔵国久良岐郡根岸村、芝生: 同国橋樹郡芝生村、太田: 同国久良岐郡太田屋新田。 武蔵国 1: 荏原郡大井村、2: 都筑郡小高新田、3: 金子村 4: 都筑郡山田村、5: 多摩郡用賀村、6: 橋樹郡生麦村、7: 橋樹郡西子安村、8: 都筑郡二俣川村、9: 橋樹郡西大戸村、10: 豊島郡上尾久村、11: 橋樹郡小机村、12: 埼玉郡米原村、13 多摩郡所沢村。 相模国 1: 足柄下郡畑宿、2: 三浦郡公郷村、3: 津久井縣佐野川村、4: 津久井縣上川尻村、5: 鎌倉郡山之内村。 上野国 1: 吾妻郡大戸村、2: 山田郡大間々町、3: 多胡郡吉井町、4: 吾妻郡中居村、5: 吉村屋幸兵衛: 勢多郡新里村、吉村屋忠兵衛: 橋樹郡大豆戸村、6: 山田郡桐原村、7: 邑楽郡川俣宿。 下野国 1: 下都賀郡北生川村、2: 塩谷郡高徳村、3: 都賀郡上加園村。 三河国: 幡豆郡一色町 甲斐国 1: 八代郡東油川村、2: 同郡広瀬村。 下総国: 香取郡下小川村。 信濃国: 上伊那郡小野宿。『横浜市史』注 4 斎藤多喜夫論文等を参照した。）

地所拝借人の土地のもとには地借りの者が多数含まれた。たとえば地所獲得がかなわなかった場合、他の地所拝借人のもとに仮住まいすることで猶予を得ていたようである（表1 N）。また、「御拝借地所・御願済渡世合寫」の記録には、地借り中に営業が認可された旨が朱書きで記される例がみられ、地所を獲得する前に地借りのままで営業申請をしていたことを伝えている。地借りの立場で願済渡世が記録されている者も確認される。拝借地所は日本人町の基本単位であったが、そのもとで地借りの者が別個の店を営みえたといえるだろう<sup>二二</sup>。

割渡された土地は横浜村の農地であったため、家作前には地業が必要であった。万延元年に神奈川奉行は、地揚げ作業を要する家作普請が思うように進まないで、地代の上納を一年間免除することを決定した<sup>二三</sup>。四月一日の段階で、出店の準備が早いものは各自の地所に立札を立て、地ならしをしていた（表1 G）。駿府町人も、地所の縄張りが済んだ後、源左衛門という者に地ならしをさせている。

駿府町人のように同郷の共同出店者で一体の普請が行なわれることはあったようだが、町の枠組みとは異なるものであったことを確認しておきたい。町の開発をまとめて行う主体が不在であったためか、普請の進捗は区々であった。たとえば安政六年の五月一日の段階で、二丁目のなかで三井家と篠原家以外は家作普請が済んでいなかった<sup>二四</sup>。

### 三 奉行による都市計画とその変容

本節では地割を復元し、奉行の編成と出店商の意向が折り合うなかで都市が形作られていく過程を検討する。

#### 1 利用資料の概要と地割の復元手法

本稿が地割の復元に利用した「御拝借地所・御願済渡世合寫」は、本町通り、弁天通り、海岸通り、南仲通り、北仲通り、横町、洲千町、運上所周辺の地所について、寸法と面積、地代（坪当たりの額と合計額）、拝借人の名と願済の渡世を記録した帳簿である。表紙には朱書きで「維時安政六未年起立 文久二戌正月写」とある。安政六年は開港の年を、文久二年の正月は帳簿を筆写した年月であろう。

四丁目の地所拝借人について記録した万延元年閏三月作成の「拝借坪数軒別取調書上扣」という別の帳簿と比較すると、多くの地所拝借人と地所の寸法は共通するものの、中居屋

重兵衛と平間屋平五郎はともに間口が二倍ほどの数値として記載される<sup>二五</sup>。また、「閏三月改」として児玉屋甚左衛門から松坂屋彦右衛門への変更が記録された筆を「御拝借地所・御願済渡世合寫」で確認すると、松坂屋の名しか記載されていない。「御拝借地所・御願済渡世合寫」には地所割渡し以降の変更を経た状況が記録されていることがわかる。

本帳簿の項目から復元した地割は、文久二年正月のものであり、都市計画から三年後、開港場の成熟期の状況であるといえる。文久三年ごろに攘夷運動の高まりをうけて退店していく江戸問屋の名が多数みられることも矛盾しない。

各筆の位置については、例えば「本町通り北側」のように記載されるが、通りの呼び名にはばらつきがあり、方角の記載がない筆も散見される。「横浜市史」に収録された復元図は数点残る絵図を参照しているようだが、それ以上の位置や向き決定には成功していない。

本稿では、新たな資料としての大正期の地割と<sup>二六</sup>、既往研究では検討されていなかった地代を計算することによって各筆の位置と向きを決定した。また、朱書きや貼紙によって示される地所の形状変化や新道の形成も各筆の位置を決定する手がかりとした。各筆の地代は、通りごとに定められた坪当たりの額を表側五間分に適用し、裏側について

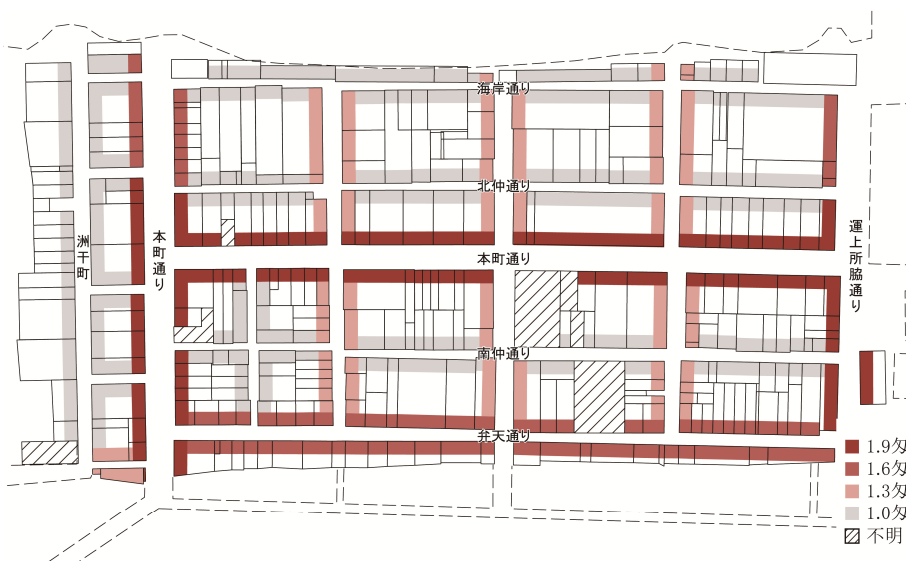
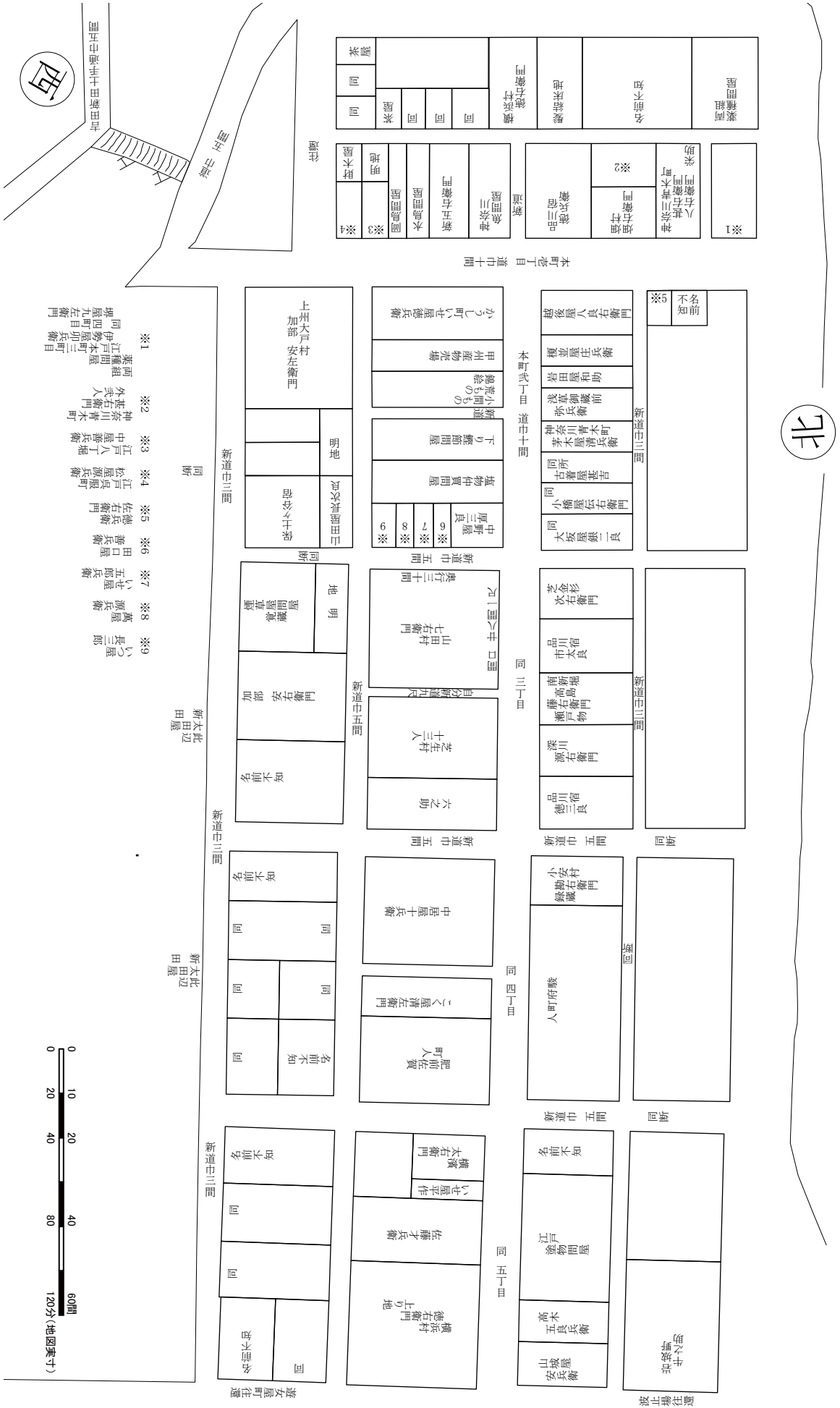


図3 文久二年の坪当たり地代の分布

図4 「神奈川開港地割元図」  
三井文庫所蔵資料。日本人町部分のみ。





道や縁辺部の宅地化によって、最終的に南北六列の街区が成立したことを示しているように思われる。三月三日のマスタープランにみられた「両側町」は、本町通りに沿ったこの計画用地に該当するのではないだろうか。この点に関連して、地所割渡し期間の貿易瓦版が、本町通沿いの両側に海岸と太田屋新田付近まで伸びる区画を描いている点は非常に示唆的であるといえるだろう(図5)。田中祥夫が想定した基本寸法は、初期的な都市計画の痕跡であったといえる。

### 3 南北非対称性に関する仮説

文久期の復元図をみると、街区の南北寸法のばらつきが目につく。街区の奥行きが北側は約二〇間・四〇間弱、南側は三〇間弱・三三〇間弱となっているのである。南仲通りは六〇間を二分するものであるが、北仲通りは、一度は六〇間四方を得た駿府町人の土地を二〇間の奥行に修正する形で新設された(表1A)。

また、「神奈川開港場地割元図」にみられた北仲通りの北側の街区が奥行き約二〇間の街区として表現され、文久期の北仲通三・四丁目北側地所には二〇間ほどの奥行が多い。北仲通りの新設時に、奥行き約二〇間の街区二列が設定された可能性も考えられる。

地代の分布を検討すると、本町一丁目と連上所脇道で共通して海側の地代が軽減されている(図3)。また、本町通りを挟んで対称の位置に通る弁天通りと海岸通りの地代も大きく異なり、裏通りという呼称もされる南北仲通りと海岸通りは同一の額となっている。

これらの地代は文久二年の帳簿に記されたものである。佐藤屋才兵衛の残した記録によると、安政六年二月には立地に応じた地代とすることは決定していたようで、遅くとも万延元年四月には本決定されていた<sup>三〇</sup>。通りごとに差別化された集金は、管見の限り安政六年七月の町会所新規取建普請金と六、七分の諸雑費、役料の徴収が初見だが<sup>三一</sup>、文久期における表坪の坪当たり地代とは一致しない。計画段階で地代が定められていたとは考えにくく、むしろ新道の設定と同じく、地所の割渡しのなかで通りの優劣が確定していたのではないだろうか。

「御拝借地所・御願渡世合寫」に記載された渡世許可の年月を見ると、安政六年六月の開港以前から許可を得ていたものは海岸通り沿いでは少ない。また、海岸通り沿いの土地は間口がきわめて広いものが多くみられる。駿府町人四人は、開港後となる万延元年に出店を出願し、海岸通り北側の間口三七間の地所を獲得した。海岸の周辺が広い空地として残り続けたことを示している。

さらに注目されるのは海岸通り沿いで固有にみられる両側の地所拝借である。北側の土地の多くは独立した拝借とはなっておらず、周囲の拝借人が確保している。通りの両側を拝借している場合も多く、特殊な傾向である。北仲通り北側の街区のさらに外側において、海岸までの空閑地を開発した経緯が想定できるのではないか。奉行の御普請の項目に、後の絵画にみられる護岸は認められない<sup>三二</sup>。周辺の拝借人によって護岸と宅地化が行われた可能性があり、通りの両側が拝借される状況に関係しているのかもしれない。こうしてできた海岸通り沿いには二丁目下田屋文吉の芝居小屋と長屋や、茶屋が建てられていた記録も残る<sup>三三</sup>。地所拝借人のなかで目立つのは波止場運送を担った「運送方」と呼ばれる集団である。交易商の集まった本町通りや弁天通りとはやや異質な業種の集まった場所であったことがわかる。

また、北仲通りと南仲通りの違いも示唆的である。北仲通りの南側は本町通り北側の土地の裏側だが、北側は間口を向けた地所がいくらかみられる。対して、南仲通りはある程度両側に表を向けた土地が並ぶ。「神奈川開港地割元図」の表現を考えれば、本町通り沿いの土地と弁天通り沿いの土地が奥行き方向に分割された結果であろう。

以上に挙げた奥行二〇間の街区、海岸通りの軽減された地代と両側の地所拝借、北仲通りと南仲通りの差は、海岸の周辺が忌避されたことに起因すると考えられる。出店商が拝借する土地の位置を選択できたことを思

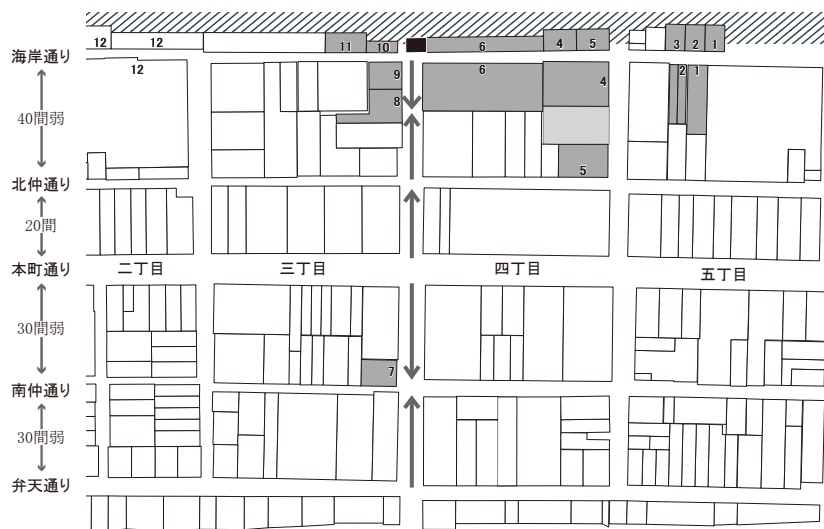


図6 地所割渡しの順序と海岸通り周辺の両側拝借

い起こされたい。弁天通りと本町通りの両側から宅地化が進行した南側とは対照的に、一貫して本町通り側から地所が取得されていったことが想像される(図6)。

本町通りを挟んだ南北の非対称性は、両側の六〇間四方の用地という前節で想定した都市計画とは異質で、地所の割渡しシのなかで生じた歪みと判断できる。海岸を避けて本町通りの北側に設定された奥行の二〇間は、町屋敷によくみられる基本的な単位寸法である。割渡しと前後しつつも奉行の主導でつくられた北仲通りは、出店希望者の増大と海側の忌避に対する都市計画的応答であったといえるだろう。

未利用地の土地と再配分や新道の導入は、強制力をともないながらも事後的であり、街区や地割の寸法に一貫した計画性は認め難い。本町通りを軸とした開港場の都市計画は、割渡し過程における拝借人の選択と多くの出店希望者に起因する新道の形成や土地の再分割によって、南北で非対称なものへと歪んでいったと考えられる。

#### 四 編成と出店の具体像

##### 1 奉行による編成の痕跡

奉行による編成意図は、波止場や居留地に近い一等地であり、運上所、役宅にも近い五丁目にその痕跡を認めることができる。

本町五丁目北側の江戸塗物問屋(図2、表2の五丁目の一七番目が江戸塗物問屋である)は、三月十七日に駿府町人によって作成された絵図に記載されており、初期期の地所取得であったことが推測される。出店希望者の募集が江戸問屋に対してまず行われた結果であろう。また、本町五丁目には、「御拝借地所・御願済渡世合寫」に「最初願済渡世」とされる者が多くみられる。

そして、本町五丁目や運上所脇通りに伊勢屋、明石屋、朝田屋ら御用を勤める商人が集まった<sup>三六</sup>。五丁目の明石屋平蔵は石炭を供出する御用商人で、運上所脇に一〇〇〇坪を超える広大な地所を拝借した。元治二年の人別帳では、三世帯一七人が住み、波止場に近い広大な土地を活用して貸倉庫業も営んだ<sup>三七</sup>。

五丁目東側の運上所周辺の小商人の存在も注目される。安政六年六月には小商人が五〇軒も集結していたとされ、開港場全体の店舗の準備状況から考えてきわめて早い<sup>三八</sup>。初期的な御普請は運上所・役宅周辺に集中しており、図1には貸長屋の南に「作事場」が確認される。開港場建設中の賄いについては分からない点が多いが、立地や集結の具合から彼

らが担当した可能性もあるだろう。なお、建築は御普請の長屋のうち五棟分が惣年寄の荻部清兵衛に売却されたもので、地所拝借人も荻部清兵衛である<sup>三九</sup>。

また、本町通り南東角の石川徳右衛門を筆頭に、横浜村出身者がみられる点も五丁目の特徴である。石川徳右衛門は横浜村の名主で、一帯の警衛を担った福井藩の御用を勤め、横浜町の惣年寄に任ぜられた<sup>四〇</sup>。村落有力者を都市運営に編入しつつ、一等地を与える優遇策といえる。

つぎに、本町通り南側の塩谷新八郎は、上州邑楽郡川俣宿(現群馬県邑楽郡明和町)の本陣で、五月二十三日の遅い段階での取得にもかかわらず間口一五間奥行三〇間の土地を得た(表1K)。後述する「金川御用」を勤めたよう、地所拝借の背景には奉行による優遇があった可能性がある。「神奈川開港地割元図」(図4)には当該の位置に「佐藤才兵衛」の名が書かれる。安政六年一月には地所拝借の申請に着手していた佐藤屋が得た本町通りの地所が上地され、塩谷新八郎へ再配布されたことが推測される。

本町通り北側三丁目にも江戸、とくに周縁部からの出店者が集まる。森屋源右衛門(深川)、高島屋藤右衛門(南新堀)、油屋市太郎(南品川宿)、市川屋治右衛門(芝金杉)は三月ごろの作成とされる瓦版の付図(図5)にも名前が確認でき、早い段階で申請・地所取得に着手していたとみられる。ただしその営業内容には共通点が少なく、共同出店や編成の痕跡は読み取り難い。

全体を俯瞰すれば、本町通りの北側には江戸を中心とした都市商人が、南側には村落出身者が目立つ。また、後述の通り四丁目南側には藩産物を扱う者が集まっていた。とはいえ、五丁目を除くと出店商の分布から強い操作は読み取り難い。地所取得の優先措置のよ

##### 2 出店商の人脈にもとづく地所取得

奉行による強い編成が読み取りにくいのに比して、出店商が各々土地の規模を申請し実地検分で場所を選定した過程から、出店商側の論理が分布に色濃く表れている。

本町通り三丁目から四丁目南側にかけて、藩産物の売捌きをおこなう権利をえたとみられる鈴木屋六之助、中居屋重兵衛、肥前屋小助が間口一〇間から三〇間ほどの地所を取得している。穀屋清左衛門については不詳だが、国元では吉井藩の御用商人で、同藩とのつながりのもとでの出店も考えられよう。早くも安政五年十二月に、上州・信州の産物売込についての申請書への添え翰を領主に求めている<sup>四二</sup>。

肥前屋は肥前佐賀藩の藩産物売り捌きを担った。安政六年の一月二十五日という早い段階で、佐賀藩の野口栄次郎から外国奉行に対し、出店希望者への許可申請がなされた(表1Q)。

のちに最大級の生糸売込商となる中居屋重兵衛は、上州中居村(現群馬県吾妻郡嬭恋村)の出身で江戸へ進出し、開明派の幕僚と人脈を築いた。中居屋による日記には、紀州・信州・伊賀・会津の産物方との会合が記録される<sup>四一</sup>。

安政六年三月の作成とされる瓦版には中居屋の名はみられず、のちに中居屋が取得する本町通り四丁目の角地には、高德屋半左衛門の名が記載される<sup>四二</sup>。その後の作成とみられる地割図には一つの区画に高德屋と中居屋の両名が記載され<sup>四三</sup>、その後、中居屋の単独での拝借となる。安政六年の四月という遅い段階で申請をおこなった中居屋が一等地の広大な地所を取得した背景として、藩の産物売捌きという立場が有利に働いた可能性も考えられる。奉行側の介入の一端とも解し得るだろう。

中居屋の日記には同業者や協働者とみられる名が多数みられ、芝金杉の屋敷への頻繁な訪問や饗応の様子が伝えられる。数回登場する「用賀村鈴木氏」は、用賀村出身である本町通り三丁目南側の鈴木屋六之助と関係があるだろう。中居屋とは横町通りを挟んで隣同士となる。彼は中居屋の家で尾州、雲州の産物取扱いの願書を提出した<sup>四四</sup>。中居屋が核となり、開港場への出店の地盤が固められたことを示している。

幕末の新都市横浜への進出には、こうした既存の人脈が強く影響を及ぼした。駿府町人たちの地所取得に江戸小網町の桑名屋茂兵衛が関係している点にも注目したい(表1A)。桑名屋茂兵衛は、白子組木綿問屋飯組と紙問屋飯組の株をもつ江戸小網町三丁目の桑名屋源次郎の店支配人であった。源次郎自身は駿府に住宅を構えており、駿府町人たちの地縁的な関係が想像される<sup>四六</sup>。

駿府町人は安政五年九月の時点で出店申請しているが、横浜での地所獲得にあたっては桑名屋が奉行との面会を仲介し、地所の見分と縄張りを行っている。駿府から離れた開港場における江戸問屋の迅速な行動が、本町通り四丁目での広い地所獲得につながったのだろう。また、桑名屋が北仲通りを挟んで向かいに位置する点も、近隣関係が既存の人脈にもとづいて形成された例として興味深い。

つづいて、村落出身者についても検討したい。外国奉行水野忠徳の手記に収められた「金川御用ニ付内調筋」という記事は、一三名の人物の素性を記録する<sup>四七</sup>(表3)。「金川御用」の内容は不明だが、開港場で移住者の取り持ちをする者や、普請に入札した者、画師が含ま

まれ、開港場建設に付随する御用であったと推測される。以下、地所拝借人に関係する清吉と愛次郎、加部安兵衛、塩谷新八郎について検討したい。

下総国香取郡小川村の愛次郎の手代清吉は清左衛門とも名乗り、地所取得を願って料理屋を計画していたという。貿易瓦版の付図には弁天通り五丁目北側に小川村の「下総屋清左衛門」の名が認められる。同じ場所に地所を得た同村出身の下総屋清蔵と同一の経営体であろう。小川愛次郎は、外国方調役と推測される中井経蔵と浅草新堀に同居し、外国奉行調役の成瀬善四郎の親類を名乗っていた三井国蔵なる人物を親に持ち、経蔵の叔父で国蔵・経蔵と同居していた下総国の神主に代わって横浜遊廓の建設に参与した<sup>四八</sup>。外国方の武士を核とした浅草居住者の関係が、下総屋清蔵の出店に寄与したのである。

下総屋清蔵の拝借地所には、元治二年の人別帳によれば、自らの店の支配人の世帯に加えて七世帯が借家していた<sup>四九</sup>。広い土地を借家・借地経営に活用していたことがわかる。加部安兵衛は安左衛門の親で、浅草山の宿に隠居し、安右衛門とも名乗った。大戸村(上野国吾妻郡)の加部安右衛門は瓦版にみられる名前、表1Hの加部安左衛門と親子というであろう。

加部安左衛門は大戸村の名主である。文久期の拝借地所の弁天通り三丁目のほか、「神奈川開港地割図」には弁天通り二丁目北西角地(図4)、三月二十九日に提出された地割図には海岸通り四丁目の土地(図2の高德屋の拝借地29番)に加部安左衛門の名がみられる<sup>五〇</sup>。五月に普請日限の延長を嘆願しており(表1J)、初期的には各所に広大な地所を押さえていたが、上地されてしまったことが推測される。

加部安左衛門は国元で広大な土地を所有し、近辺の者に融資をして多角的な営業を傘下に入れていた<sup>五一</sup>。また、長崎奉行から開港前に上州一帯の産物の集荷を仰せつけられ、上州・信州の富家と会合を開いていたという記録も残る<sup>五二</sup>。上州有数の豪農として、御用を機会に早期参入し、地主として多数の出店を抱えようとする野心的な姿が想定できる。

最後に、塩谷新八郎は先述した川俣宿の本陣である(表1K)。新八郎は万延元年に居留地を囲む新堀川の普請に参加するが、開港以前の普請との関係は不明である<sup>五三</sup>。元治二年の人別帳によれば、拝借地所には本町通りに沿って四つの店が設けられ、南仲通り側は貸家に供された<sup>五四</sup>。

開港前の御用との関りという点で、相州三浦郡公郷村の永嶋庄兵衛の例が示唆的である(表1O)。上述の「金川御用」関係者がどのような段階を経て出店したかは詳らかにならないが、御用関係者の出店に神奈川奉行が便宜を図ったと推定しうるだろう。

また、加部安兵衛と清吉が共通して浅草に足がかりをもっていた点も注目される。相州津久井縣佐野川村の名主の佐藤屋才兵衛も、懇意であった浅草田町の広瀬屋祭吉から紹介された大工に普請を請け負わせている。また、江戸にいた弟の彦次郎が外国奉行の人事を連絡したり、出店申請や出府にあたっての助言をしたりしている。さらに、交易品の準備に関しても共同出店者の市郎右衛門と相談をおこなうなど、彦次郎は開港場での出店に大きく寄与した<sup>五五</sup>。

同様に、本町通り三丁目南側の大川屋七郎右衛門は武州都筑郡山田村（横浜市都筑区）の名主で、高輪台町の三河屋清右衛門との共同による出店であった<sup>五六</sup>。また、南品川海蔵寺門前の家持幾蔵と懇意であったため普請を任せ、その結果普請代金の支払いが滞り出訴されている<sup>五七</sup>。いずれも江戸周辺の人物との深い関係を表している。

本項の最後に、複数人がまとまって地所拝借を願い出ている例をみていきたい。外国交易のリスクを軽減すべく同じ町村から共同出店した商人像は斎藤多喜夫が提示している<sup>五八</sup>ので簡単な紹介とする。駿府町人一四名は、相互の競争を排し、土地の権利移転の際には互いの合意を義務付ける協定を結んでおり、強い同郷の結合を認めることができる<sup>五九</sup>。

保土ヶ谷宿の出店者は惣代の兵右衛門（夷屋、図2の43番）と善兵衛（田口屋、図2の18番）が身元保証人の役割を果たした。二丁目南の十字型の新道に沿って均等に分割された土地の大半は保土ヶ谷宿の者が拝借している。本町通り三丁目の芝生村出身者、弁天通り五丁目の下田出身者も同郷の集団での出店で、均等な分割がなされている<sup>六〇</sup>。

神奈川宿の出店者は保土ヶ谷宿ほどの集中は見られないが、本町通り一丁目の肴屋平兵衛と稲屋平左衛門は、神奈川町の小名である小伝馬町の出店代表者である<sup>六一</sup>。また、

表3 「金川御用ニ付内調筋」に記された身辺調査の結果

1	成瀬善四郎親(三井国蔵) →5 三井国蔵と同一カ	小普請組の隠居、三井国蔵と名乗る 55, 6 歳。 倅愛次郎を連れて浅草新堀吉田役所に寓居。 善四郎の内親を自称し、神奈川では移住願人の取持ちをしている。
2	七兵衛	土方請負願人 武州榛沢郡高嶋村の組頭として四郎右衛門、樋ノ口村の名主として七兵衛を名乗る。 横浜役宅関係の土方請負を願った高嶋村万太郎の下請負として、戸部石崎から野毛の大岡川まで新道を落札したが、万太郎が江戸に出居しており、現場にすることができない。七兵衛を代理として担当させたい旨を願い、地頭大久保淡路守の使者もきているが、七兵衛は川々御普請所でトラブルをおこし、内海台場の御普請の際にも不正の筋があり筑後守へ張り訴がなされている。使者も不審なため、一番札から除名する予定である。 七兵衛は今江戸に借宅している。
3	藤井十蔵	秋元但馬守の家来で三人扶持、善四郎の近所に住み鉄砲術の師範である。 もともとは長崎でコンプラ(仲買)をし、高嶋四郎太夫に属し、徳丸ヶ原で調練の際に太鼓打ちをしていた。 高島の咎の後は秋元家に抱えられ、永井玄番頭、高橋平作、成瀬善四郎と懇意とのことで、御開港御普請の出張の際にも訪れ、神奈川で土地を十両で買い上げ、秋元家へ九十両と申上げ、差額を神奈川本陣源太左衛門、旅籠屋浜屋某と三人で分配したという。 森山多吉郎とも懇意で、長崎屋源右衛門へも立入、触書の手話をしている。
4	清吉 下総小川村愛次郎手代	清左衛門と名乗る。 浅草に住み、藤屋喜六という料理渡世である。 横浜地所を数カ所願い立て、俵屋次左衛門や喜六を名乗る。
5	三井国蔵	浅草新堀三筋町東町の御書院同心相原源助の地面に住み、吉田殿貸付取扱人である。 三井国蔵とも、中井経蔵父隠居とも名乗る。
6	下総香取郡小川村愛次郎 同組頭徳蔵 国蔵	国蔵は青山辺りの御徒の二男とのことで、三筋町中町に7, 8 年以前から養父躰の者のもとに半年余り同居し、当所(相原源助地面か)に住む。 妻は中井(中井経蔵か)の姉とのこと。 ※中井経蔵は外国方調役 経蔵も同居し、経蔵の母は下総神主の娘である。経蔵の伯父は下総の神主で、国蔵のもとで同居している。 この度の願筋は神主では差支えるため、愛次郎の名目で遊女町を請願したとのこと。徳蔵も組合である。 横浜に千二百坪を引き請けた。 ほかに、総髪躰、怪しい者が国蔵のもとで同居している。
7	加部安兵衛	安左衛門の親である。 浅草山ノ宿に隠居し、手代の徳左衛門は神田山本丁代地の万屋左兵衛という旅籠屋に旅宿している躰を拵え、安右衛門の名前で出願しているとのことである。
8	塩谷新八郎	上野国川俣宿本陣の旧家である。
9	金三郎(錦斎) 本石丁三丁目家主林蔵地借	日之下開山日本第一入歯師神翁金斎という看板を出す。 もとは竹沢藤(友力)治の召使であった。(金三郎は横浜遊廓の建設者である。)
10	画師 貫山香国 金三郎方同居	丹州笹山の生まれ。 久しく金三郎のもとで同居している。
11	仙台抱医師 椎名玄淳 牛込中御徒丁住居	医業に通じ、蘭学の心得もある。 金三郎の近縁である。
12	当時浪人 籙台輔 本所番場丁住	仙台の生まれ。 昨年まで酒井貞伯と名乗り、浅草辺りに住む町医者であった。
13	儒者 太田喜三郎 浅草馬道医王院地内住	当時占筮渡世。
14	菅野要助 本所原庭丁	公事訴訟などを引き請け、それを渡世とする。 入墨があるとのこと。
	文末	玄淳は香国御役人方と人脈が強いとのこと。 井戸公用人竹村某が金三郎と別懇で、川路家来高村俊蔵とも別懇である。

〔典拠〕「水野忠徳雑録」二(東京大学史料編纂所所蔵)。

本町通り二丁目北側の東四軒の出店商も、神奈川宿青木町で近隣に店を構えており地縁的なつながりをもとに参入していると思われる。

以上、出店者各人の人脈による地所取得や近隣関係の形成について述べた。同郷の共同出店に限らず、既存の人的関係が新都市横浜開港場への参入においてきわめて大きな意味を持ち、近隣関係が築かれることもあった。何らかの御用を契機とした参入も想定されるが、出店の強制と必ずしも同義ではない。土地による調整がなされながらも基本的には各人が寸法と位置を自由に選べた状況のもとで、江戸を核とした人脈をもつて一等地の巨大な地所を取得した出店商たちの力量と積極性を評価するべきであろう。

### 3 家屋図面からみた敷地計画

最後に、拝借地所によろんな建築が計画されたのかについて考察したい。開港場出店者は拝借した土地の利用について絵図面を差し出していたが、そうした申請用の絵図面のほか、数点の平面図や家屋の様子を伝える文書の記録が残る。全体から見れば非常に少ない数ではあるが、貴重な事例として可能な限り敷地計画の読解を試みたい。

(1) 駿府町人一四名（本町通り四丁目北側、図7。図2の3番）

地所拝借の過程で奉行に提出した絵図であり、表側に店、裏手に蔵が描かれる<sup>六〇</sup>。非常に簡素な図ではあるが、表側に底が付され、店は一つの図形で描かれ、奥行きのある形状で表現される。玉井哲雄が近世初期の江戸に見出した表長屋のようなものであろうか<sup>六一</sup>。

店の間口は一人につき三間ほどで等分され、底を含んだ建坪が二五坪であるため奥行きは五間であろう。本拠地の駿府から離れており、拝借人や店支配人の居住空間が必要になることを考えれば、大変小規模な作りといえるのではないだろうか。

駿府町人の敷地計画は、同業者・同郷者の集団による共同出店の姿がよく表れている。同様に共同出店である芝生村住人たちは間口十間奥行五間の店舗を共同で建設した（表1 S）。下田町人の家屋の形状は不明だが、五丁目を描いた絵図では、源助、幸助、弥兵衛、善兵衛、万太夫、喜兵衛、吉兵衛が「ベニ二十八間全建家 拝借地廿九間半」と、七人分まとめて記載される<sup>六四</sup>。連棟の建家であったのかもしれない。

(2) 三井横浜店（本町通り二丁目北側角地、図8。図2の29番）

『横浜市史』にて三井横浜店の構成が紹介される<sup>六五</sup>。首肯できる内容だが、図と典拠を欠いているので補足的に紹介したい。

三井横浜店は本町通りの二丁目と一丁目の角地に建つ。両替店と呉服店の出店であるが、呉服営業はさほど振るわなかったようである<sup>六六</sup>。家屋の図面は二種類あり、計画変更の前後の様子を伝える<sup>六七</sup>。二枚の図面は建坪がかなり異なり、店舗と倉庫が大半を占めた初期計画が見直され、本計画では水回りと座敷が追加された。また、敷地後方の利用も異なり、「荷物土蔵」と西側の本町通りからの「荷物出入口」が設けられた計画から、台所入口と水回り、納屋・穴蔵からなる計画へと変更された。

交易品の盛んな出入りを想定した平面計画が断念される一方、充実した居住・応接の室が設けられたといえる。北東には庭付きの座敷、二階も北東の部屋は床のついた部屋となっている。表側の式台玄関は御用金の扱いのために必要であったと考えられる。

なお、「異人代呂物売場」として、九間の会所がしつらえられている。外国人を迎え入れるために特別に設けられた室として興味をひく。

(3) 茅木屋佐兵衛（本町通り二丁目北側、図9。図2の23番）

神奈川宿の呉服屋であった茅木屋の家に伝わった図面で、「安政六己未歳四月吉晨」と作成年が書かれる<sup>六八</sup>。神奈川宿の屋敷地とは方角・寸法が異なり、部屋の寸法から算出される間口五間、奥行きの二〇間の敷地は本町二丁目の拝借地所と一致する。方位にも矛盾がない。

家屋一階は見世、六畳半の室と水回り、土蔵からなり、非常にコンパクトにまとめられた最小限の店舗構成といえる。先の見えにくい開港場での営業のリスクを減らす意図とともに、対岸の神奈川宿に本店があることから機能の省略が図られたことが読み取れる。また、きわめて小規模な家屋構成ながらも土蔵が設けられている点が注目される。交易場に必須の機能として確保されたのだろう。

(4) 甲州屋忠右衛門、五郎右衛門（本町通り二丁目南側、図10。図2の11番）

(1)と同じく、地所拝借の過程で提出された絵図とみられる<sup>六九</sup>。拝借地所の寸法が一五間×二〇間と最終的な寸法とは異なり、実現された計画ではない。共同出店者である広瀬村の五郎右衛門との連名で、三〇〇坪の土地二ヶ所を同様に計画することが付記される。三月一日に忠右衛門は、六〇〇坪ほどの「荷物積小屋場」を開港場かその周辺に設けたいと請願しており、それに対応する図面と考えられる<sup>七〇</sup>。

表側に六間×四間の「居住場」、七間×四間の「表店」を配し、間に通路を設け、中央の土間に向けて「物置」、「土蔵」、「品物繰出し場」（商品の準備、加工用の場所か）を設け



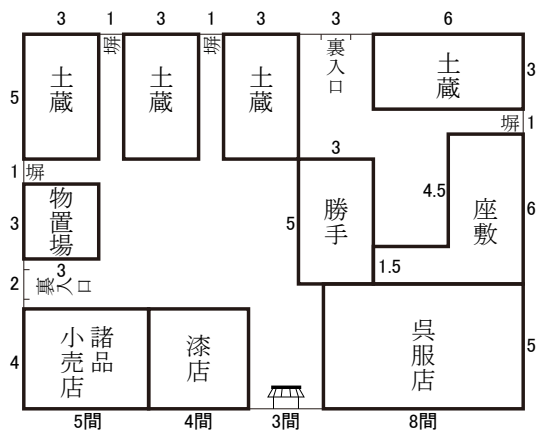


図 11 佐藤屋才兵衛の出店  
佐藤英雄家文書（相模原市立博物館所蔵、箱⑦ - 1 - 5 - 18）より作成。

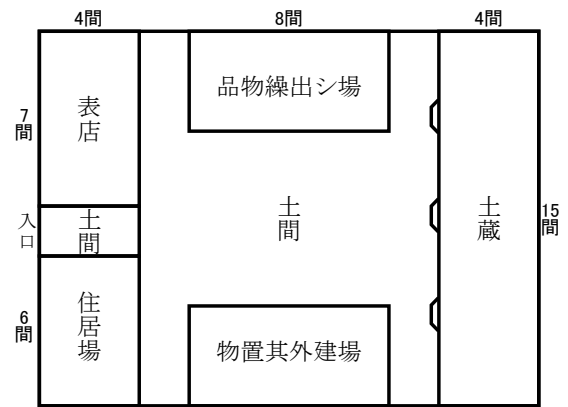


図 10 甲州屋忠右衛門の出店  
山梨県立図書館所蔵資料「篠原文書 8」（神奈川県立公文書館所蔵）より作成（注 69）。

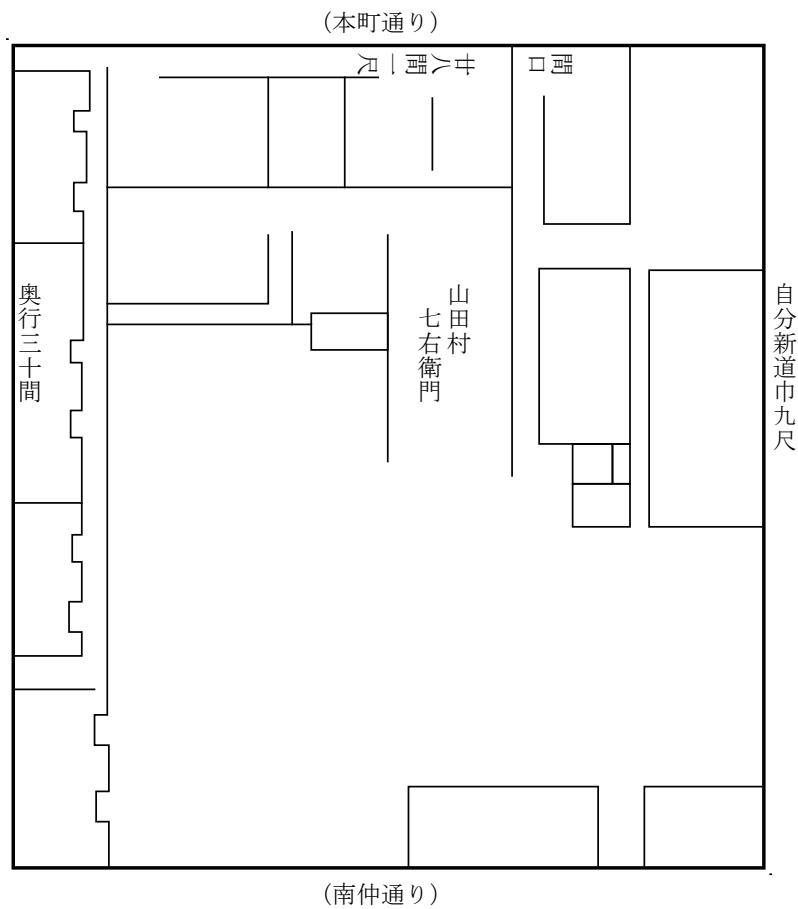


図 12 「神奈川開港地割元図」の大川屋七郎右衛門の地所  
「神奈川開港地割元図」（三井文庫所蔵資料）から作成。

る計画である。居住場所や店もそれなりの大きさではあるが、三〇〇坪の敷地に対して大半を作業場と倉庫に使用している点が特徴である。

結局、甲州屋忠右衛門は、「甲州産物会所」として間口三間、奥行七間の町家を普請した<sup>七二</sup>。本計画図は、出店申請当初における「荷物積小屋場」という利用意図をよく表しているといえるだろう。

#### (5) 佐藤屋才兵衛（弁天通り四丁目北側、図11。図2の15番）

図11は、佐藤屋才兵衛が間口二〇間、奥行一五間の地所拝借を申請した際に提出した敷地計画の絵図と考えられる<sup>七三</sup>。二〇間の間口のなかに「荒物小売店」「漆店」「呉服店」の三つの店を配し、呉服店の背後に勝手と座敷を設け、物置と四棟の土蔵を建設する計画であった。実施された計画図面は未見だが、やや小規模の類似した敷地計画となったようである<sup>七四</sup>。

二〇間という広い間口は複数の表店を配するためのものであったことがわかる。佐藤屋は安政六年四月以降、若柳村（現神奈川県相模原市）の組頭市郎右衛門、同村の専左衛門、中沢村（現神奈川県相模原市）の武左衛門と乗合渡世をする議定を結んでいた。専左衛門は才兵衛の親類で安政六年春から店の手伝いをおこなっており<sup>七四</sup>、市郎右衛門は出店の準備段階から土地取得や交易品の仕入れについて才兵衛・彦次郎と意見を交わしている<sup>七五</sup>。在方有力者が連合して扱いうる多様な品目を受け入れる場が出店に求められたのである<sup>七六</sup>。

以上、図面の残された事例を瞥見したが、間口の広い土地について若干補足したい。「神奈川開港地割元図」の大川屋七郎右衛門の地所には、全ての地所のなかで間口・奥行寸法が唯一明記され、細い線で家屋らしきものが描かれる（図12）。本図の作成目的すら不明ではあるが、広大な地所の敷地計画を具体的に知る記録なので、解説を試みたい。

本町通り沿いには奥行四、五間の表店らしきものが複数配され、裏側に町家の平面図のようなものが認められる。西横町沿いの図形は土蔵であろう。また、東側には「自分新道」が描かれる。東側に書き込みはみられないが、敷地奥までを活用しようとしていたことが伺える。

文久二年までに拝借地所は奥行方向に半減された（図2、三丁目1番）。それでも広い間口は残されており、複数の表店の実現されたのではないだろうか。多様な品目を売りさばく基盤となったことが推測される<sup>七七</sup>。

佐藤屋才兵衛や大川屋七郎右衛門の事例は複数の表店を計画するもので、広い間口の敷地計画の一類型として認めうる。先述の本町通り五丁目の塩谷新八郎も類似したものである。藩産物の売捌きを担当した肥前屋、中居屋、鈴木屋も、多数の品目を許可されており、複数の表店を設けた可能性が考えられる<sup>七八</sup>。間口二、三〇間といった広大な土地を拝借するにあたり、家作絵図面が提出されたことを考えれば、割合有力な候補となり得るのではないだろうか。

中居屋は自らが横浜に移動したが、佐藤屋才兵衛や大川屋七郎右衛門、塩谷新八郎のような村名主は店支配人を派遣した。まとまった土地の経営者兼開発人としての性格を持ったといえるだろう。加部安左衛門のようなほかの村名主による地所拝借の事例も類似した開発過程をとった可能性が想定できる。開発段階で町を統括する存在は認められない一方、横浜開港場に特徴的な広い拝借地所に対し、不在の地所拝借人が開発者として、町の請負人に類する役目を果たしたといえる。

また、いずれの例でも大きな比重をしめる土蔵が目を引く。茅木屋佐兵衛の居住空間のように狭小な事例では特に目立つ。対照的に、三井家と佐藤屋才兵衛の例は居住部が広く、独立した座敷が計画された。御用金の取り扱いをおこなった三井横浜店に接客空間は必須であろう。佐藤屋の座敷は共同出店者や在方の荷主を受け入れる場であったと推測される。中居屋重兵衛は壮麗な表店を構え、在方の糸商人や荷主が逗留する宿として活用したという<sup>七九</sup>。輸出品の仕入れを担保する在方荷主との結合が空間の利用にも表れた好例といえよう。

## 五 結語 横浜開港場の史的位置づけ

以上、開港場の都市形成を土地に関する分析を主軸に考察した。幕府・神奈川奉行による編成の手法と出店商（地所拝借人）の性格から横浜開港場の史的位置づけを試みることで結びとしたい。

幕府は、安政五年末の江戸問屋商人への出店募集のあと、翌月に全国触れによる募集をおこなった。神奈川奉行は本町通りを中心軸としたマスタープランと、希望する位置と規模の土地を拝借させる仕組みを用意し、新道の設定や上地と再配分をまじえて多数の出店商を編成した。そして家作絵図面の提出は、未利用地の普請督促とともに出店商による実際の開発に対する規制として機能したと考えられる。

ただしそこには決まった寸法の町屋敷の割り当てや業種・出身地による強い操作は見出したい。全国的な募集と、出店商へ多くをゆだねる編成方法が横浜開港場の特徴であったといえる。

本町通りを軸とした両側町はマスタープランの通り、たしかに創出された。ただし、多くの出店希望者と各々の選択による地所取得によって、両側町は複数の街区から構成され、十坪前後から千坪以上まで、大きさの区々な土地を内包する「丁」へと歪んでいった。文久期の南北非対称な街区と不均一な地割は、出店商による申請と選択に応じて町割を遂行した神奈川奉行による編成の特質をよく表している。

また、横浜開港場の形成過程において、出店商の移住や宅地開発の単位と、両側町としての横浜町は必ずしも合致しない。駿府町人の共同開発や佐藤屋による複数の店の開発の例が示す通り、横浜の両側町は都市開発の単位ではなかった。同郷の者による共同出店、駿府町人と桑名屋、中居屋と鈴木屋のような既存の人脈に基づいた近隣関係も、本町通りの両側とは異なる範囲で実現された。

一方で奉行は、寸法や形状に大きな差のある開港場の土地分割に対して、「二軒」のような単位や小間割ではなく地代をそれぞれ賦課した。そもそも、役の請負に対応して創出された町の形成とは異なり<sup>八〇</sup>、店やその集合の統括者としての地所拝借人は、出身地の町村役人を介して個別に町人として掌握されたのであった。

このように、旧来の近世都市と共通する両側町の創出よりもむしろ、出店商各自の人脈と神奈川奉行による個別的な掌握こそが、横浜開港場の都市形成の特徴であったといわねばならない。ここでは、地所の大きさの申請に象徴されるとおり、各々の力量に應ずる方法が採用されたのである。急速な都市形成を実現すべく、マスタープラン以下の部分が出店商へ転嫁されたともいえようが、編成の理念として、個々の実力を解き放つ当世なりの合理性が看取されるのではないか。おそらくこの点は、城下町ではなく開港場として都市が形成されたことにも起因すると考えられる。

そして、遠方の村落出身者が均等な地割から逸脱する巨大な地所を取得したという当該時期の固有性も注目される。彼らは、江戸を核に蓄積された人脈を駆使して参入し、江戸の間屋や神奈川宿・保土ヶ谷宿といった近傍の都市商人と肩を並べ、凌駕したのであった。全国からの移住が広く認められ、地所取得が競争にさらされたとき、近世後期以降に資力を蓄積して都市へも進出していた豪農、またはその連合体の実力が如実に現れたといえる。

横浜開港場の形成過程において、全国に開かれた募集に応じた出店希望者は個別的に、おおむねその実力のままに編成された。こうした状況のもと、欧米列強の商人と対峙し、とくに生糸集荷において旧来の物流秩序を揺るがした横浜貿易商が誕生したといえる。幕末の新都市横浜は、幕府・神奈川奉行による開放的な編成と出店商が築きあげた人的関係のうえでこそ成立し、そこに内包された小さな自由は、近世の終焉と近代への展開を決定づけたのである。

一 伊藤毅は、大坂を対象に近世領主による縄打ちや地割、街区割について、その均等性や基準寸法を指摘した『近世大坂成立史論』生活史研究所、一九八七年。一方、町の誕生からみた近世都市の形成は、近世初頭の京都冷泉町文書から町と町人の誕生とその展望を看取した吉田伸之「町人と町」『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、一九九八年。城下町大坂の都市建設を町の開発において考察し、領主と住人を媒介する役目を果たした開発人の特質を明らかにした内田九州男「都市建設と町の開発」『高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門2 町』一九九〇年』が特筆される。また、宮本雅明は、城下町の平面考察のなかで均等な地割の卓越を重視し、中世・近世移行期の港町の平面形態へ図式を展開した『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年。

二 吉田伸之「伝統都市の終焉」歴史学研究会、日本史研究会編『日本史講座7 近世の解体』東京大学出版会、二〇〇五年。

三 石井寛治「近代日本とイギリス資本—ジャーディン・マセソン商会を中心に—」東京大学出版会、一九八四年。

四 横浜市『横浜市史』第二巻、一九五八年。市史以降の研究としては、藩との関係を築いて生糸の大量輸出を成功させた中居屋、低リスクの委託販売をおこなって明治中期まで存続した吉村屋など、新たな生糸売込商像を解明した西川武臣の業績が重要である『幕末明治の国際市場と日本 生糸貿易と横浜』雄山閣、一九九七年。ほか、下田の出店商を扱った鷺崎俊太郎「幕末期における商人移動の人口地理学的分析・横浜開港に伴う豆下田欠品売込人の転入経緯と世帯構成の変遷」『歴史地理学』四四号、二〇〇二年三月。や、貿易瓦版から開港当初の出店商のリストを作成し、広域から多人数の集合を実現せしめた要因を探ろうとした斎藤多喜夫「開港時の横浜商人—御貿易場瓦版から—」『横浜開港資料館紀要』第二〇号、二〇〇二年三月。など。

五 こうした研究動向のなか、前掲の斎藤多喜夫論文（注四）が注目されるが、奉行による計画や出店商の意志についての実証を欠いたまま、市史の提示した幕府による出店の強制という側面を強調してしまっている。本論は氏のリストを大いに参照したが、奉行による編成と出店商の意向のバランスについては首肯しえない点を含むと考える。

六 田中祥夫「都市横浜の成立とその発展」神奈川県建築士会編『神奈川県建築史図説』一九六二年概説編、Ⅱ近代。

七 宮本雅明「近世都市の歴史・空間・景観」（前掲書注一）。

八 青木祐介「幕末・明治初頭の横浜」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市1 イデア』東京大学出版会、

二〇一〇年。

九『横浜市史』第二巻の付録「安政6年現在横浜町居住商人配置図」。

二〇玉川文化財研究所『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書三三 北仲通一丁目遺跡』(二〇一五年)、角和裕子「江戸の粉屋と水車稼人」(都市史研究会編『年報都市史研究』第一九号、山川出版社、二〇一二年三月)、驚崎俊太郎前掲論文(注四)。

二一「山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書」六・七に所収(県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵)。本町二丁目の甲州屋忠右衛門が町役人を務めたなかで作成したとされる土地の帳簿である。神奈川県図書館協会郷土資料集成編集委員会編『未刊横浜開港史料』(神奈川県図書館協会、一九六〇年)にて資料紹介と全文の翻刻がなされる。

二二明治初頭、五丁目が一丁目、一丁目が五丁目となるように住所の順番が入れ替えられた。また、海岸通りは「海辺通り」とも表記され、慶応三年の海岸の埋立によって新しい海岸通りが完成し(現在の海岸通り)、それまでの海岸通りは「元浜町」と改称された。

二三西川武臣「幕末から明治初年の横浜市街地と町政」『駒沢史学』第四六号、一九九三年十二月。

二四斎藤多喜夫「幕末期横浜の都市形成と太田町―太田屋新田西部地区造成関係資料を中心に―」『横浜開港資料館紀要』第四号、一九八六年三月。序文にて横浜開港場の町について簡潔にまとめられている。

二五『横浜市史』第二巻、第三章「開港場の建設」(石井孝執筆)。

二六東京帝国大学文学部史料編纂所『大日本古文書 幕末外国関係文書』。

二七「続通信全覧」の「神奈川開港二件」。本資料は引用部分の後で途切れ、不自然な形で最後の一つ書きへ続く。文末に「右水野筑後守忠徳日記」と書かれ、原典とみられるが、その所在は不明である。

二八表の作成に利用した資料を以下に列挙する。A①『静岡市史編纂資料』第六巻(一九二九年)、②『静岡市史』近世資料三(一九七六年) 所収の村本喜代作所蔵文書「神奈川御開港御場所地所拝借一条ニ付惣代出府日記」。③「大石善言日記」(葵文庫、請求番号S289.4.6特、静岡県立図書館所蔵) B 古井町誌編さん委員会『古井町誌』一九七四年。C 佐藤英雄家文書(相模原市立博物館所蔵)。請求記号は、箱⑤-238,240,241,244,247,253(請願書類)箱⑦-1-5-1,1-5-8-9,1-9,1-27-18(書類類)。D『神奈川県史』資料編一〇(一九七八年)、資料番号三九二。E『横浜市史』第二巻、第三篇第四章。F『横浜市史』資料編一(篠原家文書「神奈川出張起立記」)。G『下田市史』資料編三幕末開港下二(一九九八年)。H①『群馬県史』資料編一一(資料番号三三三、三三三番)。②阿部勇「安政六年、上田藩の生糸輸出」『千曲―郷土の研究―』東信史学会、第一四六号、二〇一一年一月。I 都筑郡大柵村平沼家文書(慶應義塾大学文学部古文書室所蔵)、請求記号MS3000483。MS3000484。J 吾妻郡吾妻町大戸区有文書(群馬県立公文書館所蔵)、請求記号H4-24-1 近世6526-65269。K 塩谷正久家文書(群馬県立公文書館所蔵)、請求記号PF0208 13170。L『静岡市史編纂資料』第六巻。M 安政七年三月「江戸小舟町彦右衛門、横浜出店願書」(館蔵諸文書、請求記号四九、横浜開港資料館所蔵)。N『神奈川県史』資料編一〇(資料番号四〇七)。O「永島重美氏所蔵資料」一六(県史写真製本、請求記号2200028774、神奈川県立公文書館所蔵)。P「横浜商店時

情書」『未刊横浜開港史料』(注一一参照)に所収。Q①『大日本古文書 幕末外国関係資料』二二。(資料番号六四)②藤本実也「開港と生糸貿易」中巻(開港と生糸貿易刊行会、一九三九年)の第四章二節(一四九頁)、「高島嘉右衛門自叙伝」の抜粋。R 横田渉編『福寿翁』渡辺利二郎、一九四五年。S 横浜貿易新報社編『横浜開港側面史』(一九〇九年) 所収の浅間町(芝生村) 藤江昌房翁の回顧(八八頁)。

二九「水野忠徳雑録」二(東京大学史料編纂所所蔵)。原蔵者水野克謙の資料を一九一六年に謄写したもので、安政六年三月「金川御用雑録」と安政四年「長崎御用雑録」の記事が一冊に混在する。外国奉行水野忠徳が残した政務上のメモを写したものである。当該の記録がみられる記事「金川御用大要」は、開港場建設中の普請や周辺住人との折衝について外国奉行調役へ指示した内容を控えたものとみられる。

三〇「為取替申一札之事」(塩谷正久家文書、請求番号PF0208 873、群馬県立公文書館所蔵)。

三一前掲資料注一一。

三二斎藤多喜夫は、住吉町と常磐町の明治初頭の事例ではあるが、屋敷地の配置図から、一つの土地に複数の店が含まれていたことを指摘した(前掲論文注一四)。横浜町でも同様の利用が想定される。

三三『大日本古文書 幕末外国関係文書』二二、資料番号二二六。

三四石井孝編『横浜売込商 甲州屋文書』有隣堂、一九八四年。文書番号一〇番。

三五万延元年閏三月「拝借坪数軒別取調書上扣 横浜町四丁目」(館蔵諸文書、請求記号一五、横浜開港資料館所蔵)。本帳簿や人別帳を確認する限り四、五丁目にも不在地主が多数いたが、「御拝借地所・御願済渡世合寫」は一三三丁目に比して四、五丁目の店支配人をほとんど記録しない。帳簿の情報量が各丁で異なることを示しており、作成者の甲州屋忠右衛門が二丁目の町役人であったことと関係すると思われる。

三六藤本測量事務所編『横浜市土地宝典』、一九一六年。

三七明治四年の資料にも同様の計算法が確認される(丹羽邦男「市街地における地租改正」『横浜市史』第三巻下、一九六三年)。

三八横浜開港資料館所蔵の地図(題名欠、万延元年〜文久元年「横浜之図」(写))、請求記号Bb2-062-04。三九三井文庫所蔵(地図目録CG11-11)。「安政六歳在己未正月」という年代の記載があるが、出店商人の募集が始まった年月であろう。

四〇『群馬県史』資料編一一(注一八H①参照) および、前掲資料注二五。

四一慶応元年「横浜絵図面」(ブルーム・コレクション、横浜開港資料館所蔵)。

四二『横浜市史』資料編六に所収の「横浜外国人居留地地税二件」一。なお、駿府町人大石善言(砂張屋善右衛門)の日記によれば、万延元年の四月二十六日の横浜よりの書状に、「当正月」から地代徴収になり、表通り一坪につき一・九匁、裏通り一坪につき〇・七匁の計算であったという(前掲資料注一八、A③)。当年上半期における地代の揺らぎを示しているのではないだろうか。

四三「御触書并願書扣」(神奈川県立博物館所蔵資料)一(県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵)。三分冊のうちの二冊目。七月二十七日の回状の控え。小間一間につき、大通り銀五匁、弁天通り銀二匁、横町通り銀二匁、海岸通り一匁五分、新通一匁、惣坪割一坪につき一分、外国人への売高・

買高百両につき銀三十匁が徴収された。

三四 前掲論文注一五。

三五 安政四年（文久四年）「永書」十七（三井文庫所蔵、本一三八）。安政六年七月二十八日の記事。

三六 前掲資料注一一。伊勢屋については西川武臣「貿易の開始と売込商の登場」（前掲西川武臣書籍注四）。

三七 高村直助「幕末・明治前期における売込商石炭屋の経営形態」（『横浜市史』補巻、一九八二年）。

三八 安政六年六月「御免貿易場明細書」（五味文庫、請求記号一・七四、横浜開港資料館所蔵）。

三九 「保土ヶ谷宿本陣文書」二十（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。「御拝借地所・御願済渡世合寫」には、「町年寄引請御貸長家駒形町」とされる間口六〇間ほどの地所が登録される。

四〇 福井藩については注一八Pを参照。

四一 前掲書注一八B。

四二 安政六年「昇平日録（中居剛屏日記）」（前掲書注一一に収録）。なお、前掲西川論文（注三六）にて考察が加えられている。

四三 横浜開港資料館所蔵の貿易瓦版。三月ころ作成の瓦版（Ab3-21-1）や、五、六月の作成と推定される瓦版（Ab3-21-6）。瓦版の年代判定は、前掲斎藤多喜夫論文（注四）に依拠した。

四四 『横浜市史』第二巻に所収の、軽部三郎氏所蔵の地割図（二二二、二三頁）。本書は安政六年六月の作成と推定するが、五丁目南側に塩谷新八郎が確認できないので、五月以前の状況を示していると思われる。

四五 前掲資料注四二。一月二十九日の記事。頻出する「名古屋氏」も同日に河州侯、佐竹侯に産物願を出しているが、人物像は不明である。

四六 『諸問屋名前帳』細目四（国立国会図書館参考書誌部、一九六四年）によれば問屋株をもつ桑名屋源次郎は小網町三丁目清兵衛地借りで、茂兵衛は出店申請時「小網町三丁目清兵衛地借り源次郎駿府住宅二付店支配人」として駿府町人とともに連印している。（前掲資料注一八A②）。

四七 前掲資料注一九。

四八 「金川御用二付内調筋」には「三井国蔵」、「愛次郎」、「経蔵」が数度登場し、関係も複雑なために同一人物として必ずしも断定しきれない部分があるが、住所や各人の人脈の共通点から推定した。なお、遊廓建設に関する資料に「下総国香取郡下小川村名主愛次郎代清左衛門」の名が確認される（『神奈川県史』資料編一〇の資料番号三九三）。

四九 元治二年「本町五丁目人別帳」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。

五〇 『神奈川県史』資料編一〇（資料番号三九二）。八木屋兵助（表1D）が地所拝借にあたり提出した地割図である。

五一 『群馬県史』通史編五（近世一産業・交通）、一九九一年（第四章三節）。また、『開港と生糸貿易』中巻（第四章第二節、一一七頁）。

五二 「乍恐謹奉上書候」（木内家文書、請求記号1579-3、茨城県立歴史館所蔵）。那珂湊の豪商木内家に伝わった資料で、安政六年二月（未二月の記載と内容から推定）の中居屋撰之助（四丁目中居屋重兵衛の別名）による外国奉行への訴状である。「木内兵七」や「木内氏」「木内君」は中居屋の日

記に数回登場する。校正が加えられていることから両者の相談のうえで作成された書付と推測される。

五三 明和村誌編さん室編『明和村誌』、一九八五年。同書では居留地を囲む新川の普請を開港前とするが、万延以降の事業である。

五四 前掲資料注四九。川俣村出身の店支配人のほか、「親人郎一ノ店支配人」といった記載方法で三人の支配人が記録される。南仲通りには新八郎地借りの四世帯が記録される。

五五 佐藤英雄家文書の書簡（箱⑦133-1-27-20）。

五六 『横浜町会所日記 横浜町名主小野兵助の記録』（横浜開港資料館、一九九一年）の明治三年五月十八日の記事に、地所拝借時の七郎右衛門について記述される。また、「御拝借地所・御願済渡世合寫」の大川屋七郎右衛門の筆には朱書きで「清右衛門」と記入される。

五七 文久二年閏八月「乍恐以返答書奉申上候」（都筑郡大柵村平沼家文書、請求記号MS03000456、慶應義塾大学文学部古文書室所蔵）。

五八 前掲斎藤多喜夫論文注四。

五九 半田市太郎『近世漆器工業の研究』吉川弘文館、一九七〇年（第六章四節）。

六〇 前掲鷺崎俊太郎論文（注四）。下田の地所拝借人が相互に手代の請人となっていたことを人別帳から明らかにした。下田町人の相互扶助の関係がよく表れている。

六一 元治二年三月「書付以願上候」（神奈川県宿本陣石井家文書、請求記号219835558、神奈川県立公文書館所蔵）。

六二 前掲資料注一八A①。

六三 玉井哲雄『江戸 失われた都市空間を読む』平凡社、一九八六年。

六四 「五丁目絵図」（小野忠秋家文書、目録番号二二、横浜開港資料館所蔵）。地所拝借人や店支配人の名前と土地の間口・奥行、建家の寸法が記入された絵図。作成年は不明。前掲鷺崎論文（注四）にて紹介される。

六五 『横浜市史』第二巻、第三編第四章一節「幕府権力との関係」（中井信彦執筆）。

六六 石川治夫「文久二年における三井横浜店の経営転換とその貿易金融展開の動向」慶應義塾経済学会『三田学会雑誌』八二巻二号、一九八九年七月。文久二年四月の類焼を機に呉服売込を中止したという。

六七 三井文庫所蔵資料。大元方八郎右衛門の意見による台所入口の開鎖（別五五八）が反映された図面が変更後の状況を表現していると推測した。変更前の計画は、本一四八四・三二一四、実現した計画は本二一八〇・一〇・一二（階平面図は一〇・一二）。

六八 太田佐兵衛家旧蔵文書（横浜開港資料館所蔵、目録番号四）。

六九 「山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書8」（県史写真製本、請求番号2200045431、神奈川県立公文書館所蔵）。

七〇 『横浜市史』資料編一（篠原家文書の資料番号一）。

七一 前掲書注七〇（篠原家文書の資料番号三）。

七二 佐藤英雄家文書（相模原市立博物館所蔵、箱⑦-1-5-18）。

三 安政七年「家作質入証文之事」（佐藤英雄家文書、箱①・26）には、①間口八間奥行三間の一階建て家屋と二間×三間の建て出し、雪隠、②同寸法の二階建て家屋と座敷（二間×四間）と勝手（三間半×四間）、雪隠が書きだされる。万延元年三月「仕訳明細帳」（箱①・104）によれば、建物は本店、荒物中店、本店脇の建て掛り、荒物店があった。なお、亀屋（原）善三郎による明治十六年の述懐によれば、安政六年六月十一日に建っていたわずかな家屋の一つとして、弁天通りの「二丁目ニ佐藤佐兵衛ノ長屋建ノ家屋」があったという。明治の二丁目は幕末の四丁目であり、佐藤才兵衛の店のことと考えられる（前掲書注三、七三頁）。

七四 「乍恐以書付奉願上候」（佐藤英雄家文書、箱⑦・3-13）。

七五 前掲資料注五五。また、表1Cも参照。

七六 「御拝借地所・御願済渡世合寫」によれば、安政六年四月に織物、荒物、醤油が許可され、翌月末に二品目が追加された。

七七 「御拝借地所・御願済渡世合寫」によれば、安政六年二月十一日に呉服、糸類、荒物ほか七品目が許可されていた。

七八 「御拝借地所・御願済渡世合寫」によれば、開港前に限っても、肥前屋は陶器ほか一二品目、中居屋は塗物ほか三〇品目、鈴木屋は酒ほか九品目の許可を得た。

七九 西川武臣「開港直後の横浜と貿易―三井横浜店の手紙から―」『横浜開港資料館紀要』第七号、一九八九年三月。当該の記事は史料三。

八〇 前掲吉田伸之論文、内田九州男論文（注二）。

## 第四章 惣町と交易商―町の変容と売込商仲間から―

### 一 問題の所在

吉田伸之は、横浜開港場を「伝統都市」と「近代都市」の間たる「近代都市」として位置付ける際に、売込商ヘゲモニーと外国人居留地という異質な要素とともに、「伝統都市」の要素として惣町と遊廓の存在を指摘した<sup>二</sup>。本章は、この問題提起をうけ、横浜開港場における惣町と売込商の理解を目的とする。

横浜開港場における惣町については、町会所の基本的な役割を明らかにした『横浜市史』の論考（石井孝執筆）と<sup>三</sup>、江戸・大坂の都市史研究の蓄積をうけ、町会所からの回状や惣年寄を務めた保土ヶ谷宿本陣の荻部清兵衛が残した記録、明治初年の町会所日記の断片的な記録から町政の仕組みに迫った西川武臣の論考が到達点である<sup>三</sup>。はじめに石井・西川の成果をまとめれば下記のようになる。

- ・町会所は横浜町と太田町を統括し、町年寄が名主、町役人を管轄した。
- ・会所には各町の名主が詰めた。名主は、出願や届け出、公事訴訟、地所拝借・渡世願、上地・退身・相続、人別出入の書類を取り次ぎ、裁判所（旧奉行所）へ提出した。人別帳の作成や会所の入費管理、触書の公布、訴訟の調停も名主の職務であった。
- ・外国人との売買品は、会所役人の「売買品掛」（『市史』では「売込品掛」とされる）が毎日取り調べ、会所詰の当番名主が奥印し届け出していた。
- ・町会所の経費は万延元年八月の提案に基づき売り込み金高の〇・五パーセントを歩合金として徴収してこれに充て、余剰分は積み立てて共済に利用した。慶応三年以降、引取金額からも〇・五％が納付されることとなった。これは横浜開港場に特有な仕組みである。
- ・安政六年六月二十八日、①地所拝借人から月行事を輩出し、市中巡視させること、②地所拝借人全員参加の寄り合いを設けること、③議定連印書などは、月行事が預かることが命ぜられた。また、月行事は、奉行・町会所を経た町触れを地所拝借人へ回覧・通達した。
- ・各町からは十名前後の「家主」が町会所の役人として任命された。彼らは借家人や

召仕、町会所書役など、地所拝借人ではない層が担い、自身番屋に詰め、名主の手代のような存在であったとみられる。その職務は多岐にわたり、訴訟への立会をし、訴状・届け出・願書などの書類を名主へ取り次ぎ、戸籍調査・退身・養子届も扱い、火災・捨て子・行き倒れの報告、祭礼関係の仕事が認められる。

大枠については把握されたといえるが、町政の仕組み以上の問題、たとえば住人との関係や共同組織としての機能の実例に関する指摘は見られない。

一方、佐藤孝は生系売込商の甲州屋・吉村屋による国元への書簡を読解し、江戸問屋や幕府権力の浸透を排しようとした神奈川奉行の支配も相まって、横浜開港場の都市は領主や共同体の規制が弱い都市であったと指摘した<sup>四</sup>。有力売込商であった吉村屋の手代が面倒な近隣付き合いのない横浜生活を謳歌している様子は印象的であり、内地の縁辺たる開港場の都市社会を読み取った興味深い指摘といえるが、実在した町会所や町、売込商の組合の内実の分析めきでは、その妥当性は評価し難い。

西川武臣の指摘のとおり、横浜開港場の町会所はその運営の源泉を輸出高の歩合金から得ており、交易商へと依存する体制であったことが理解される。横浜町を考察するには交易商の都市内部における行動を探る必要がある。これは、同時に都市における売込商の位置、すなわち売込商ヘゲモニーの分析にもつながる。そこで、注目されるのは石井寛治による生系売込商の組合に関する議論と<sup>五</sup>、西川武臣の提示した生系売込方法の変化である<sup>六</sup>。

石井寛治は、外商への共同での対応を条項に盛り込んだ本格的な売込商の仲間が五品回送令の撤回の後に成立したことを指摘し、国内における立場の確立が、対外的な交渉をおこなう仲間の形成を可能にしたと論じた。そのうえで、明治以降に最大級の生系売込商となる亀屋善三郎が開港当初は荷主として、慶応元年に当店として参入したことに意義を見出した。

一方、西川武臣は吉村屋幸兵衛が、自己資金（実家・国元からの融資による）による買付けに代わって、藩専売との関係を梃子に委託販売の販路を拡大していったと述べた。また、盛衰の激しい開港当初の状況から安定的な都市地主へと成長するという図式を提示した。さらに氏は三井横浜店の書簡の分析から売込商の組合にも言及している<sup>七</sup>。

他方、吉田伸之の町会所に関する論考のように、惣町の評価においては、町政や地所拝借人の性格のみならず、都市下層民への対応の読解が手法的に有効となる<sup>八</sup>。とくに港湾労働や都市建設で多くの労働者を必要としたであろう横浜においては有効であろう。関連する考察として、さきの西川武臣の論文内の人別帳（元治二年、慶応二年）にもとづく住

人に関する整理をみておきたい。

①海岸通りから弁天通りに向かって住人が増える。

②家族を作らない独身者が二百人を超え、召仕や下女と呼称された。一戸当たりの人数は四人で核家族が多かったといえる。年齢は、四〇代が最も多く、二、三〇代が続く。

③地所拝借人が六二軒、借家が一一一軒であった。渡世の確認された地所拝借人は貿易商が多く、土地のまた貸しの結果、借家は明治五年まで制度的に認められていなかった。

④全六一一人の居住者の出身地は三二か国と多様で、武蔵(三七三人、五六%)、信濃(四二人)、伊豆(三八人)、相模(三一人)、越後(二五人)、駿河(二三人)が多い(計八割強)。武蔵国のなかでは江戸がもっとも多く二一人、残るは横浜周辺、東海道の宿場が多い。

⑤元治二年から慶応二年までの一年間で三五人が入れ替わり、五%にあたる。

②の独身者については、石塚裕道が参照しており、近代都市における都市下層民への連続性を指摘した<sup>9)</sup>。③にみられる西川の借家人に関するイメージは、参照した明治五年の資料からの敷衍にやや問題があると思われる。明治五年の布達は土地のまた貸しが原因の紛争を認めなかっただけで、前章で見た通り、地借の立場で渡世の許可を得たものもみられた。また、②の一戸あたりの人数は、各店の世帯構成を分類してから検討すべきであろう。

都市住人という意味では地所拝借人やその代理人はごく少数であり、地借・店借の者が多数存在したのであった。また、③によれば貿易商が多いとされ、町中を構成した地所拝借人、またはその代理人が、地借・店借の人びとどのような関係にあったのが明らかになるべき点であろう。

以上の成果と課題をふまえ、売込商と町・惣町の関係を、彼らの結合と地借・店借の人びととの関係から理解することを目指す。しかしながら、町や町会所に関する実証研究が乏しい今、管見の限りで把握できた資料から町の構成そのものや、地所拝借人や売込商の変遷について、復元しながらの行論となる。

## 二 横浜町の構成

### 1 横浜町の輪郭―各町の町会所役人・家主役・鳶頭―

前章でみたとおり、横浜町は、一から五丁目からなり、坂下町は五丁目の小町として位置づけられた。また、運上所脇の役宅周辺から居留地に至るまでの一帯は、安政六年の六月の調査によれば、小商人五〇軒余り、寄席講釈場が展開した<sup>10)</sup>。そして南側には太田町と、沼地のなかの遊廓港崎町が置かれた。

まず、弁天通り四丁目の佐藤屋才兵衛の生家に残された資料「御祭礼日記」の記述のうち、町内祭掛りについての部分を検討したい。本資料は、万延元年五月の開港一周年記念の祭礼開催にあたって各丁の責任者や宿を記録したものである。

〔資料1〕二

町内祭掛り

祭会云所

壱丁目 繁蔵

水茶屋

壮兵衛

石田

会所方

御休息所

三木右衛門

福井

武助

茂次郎

鳶頭 清蔵

二丁目

源左衛門

弥兵衛

会所方

季太郎

源兵衛

安兵衛

鳶頭 瀧吉

三丁目

重兵衛

彦二郎



まず、一から五丁目につき七丁目が記載される。鳶頭の要蔵は、第五章であつかう外人荷物輸送を担った駒形町人足方の鈴村要蔵であろう。運上所周辺が七丁目と称されたことがわかる。

三井文庫に伝わった絵図(図1)では、運上所の隣の区画に「七丁目」と記される。また、貿易瓦版の挿絵(第三章図5参照)、開港場の普請計画を表したとみられる絵図は(第五章図2)、その後の横浜町とは異なる丁数で描かれている。こうした絵図の表現は、一から五丁目までの横浜町と運上所周辺の一带が同列のものとして認識されていたことを示している。

つぎに各町で書き上げられた人物について検討する。上部に記載される「祭会所」と「御休息所」は祭礼にあたって臨時に取り立てられた屋敷と考えられる。下段の人名は、「会所」と肩書の付された人物と、二名ずつの二組がわかれて記載され、末尾に鳶頭の名が書かれる。ここで、文久元年の武鑑と比較すると、初めの二名が町会所につめる「町役人」、「会所」の肩書の人物は「横浜町会所付役人」、続く二名は「町々家主」に対応する者が多い。太田町と港崎町は武鑑の記載方法が異なっており対応がつかないが、港崎町の家主平蔵、玄関守要介、港崎廓会所守五兵衛は書き出された人物と同一の可能性があるだろう。元横浜町の人名は、半右衛門は名主、つづく四人が組頭で元横浜村の住人とみられる。政吉は鈴村要蔵とともに外国人荷物輸送を担った元町人足方政吉と同一人物であろう。以上から、一から五丁目、太田町、港崎町がある程度類似した構成をとっていたことが推測される。以下、「町々家主」と「鳶頭」について補足したい。

## 2 町々家主

「町々家主」は西川武臣が言及した家主役のこととみられる。西川は「横浜沿革誌」の記述からその任命を安政六年十一月と推測しているが、下記の記録から、「大家役」の選出が万延元年の初旬に命ぜられたことが知られる。資料2は、駿府町人砂張屋善右衛門(本町四丁目に出店)の日記の万延元年二月二十五日の記事である。

[資料2] 三〇内は引用者注

戸塚氏江内談有之罷出、丹惣殿(丹波屋惣左衛門)え立寄、昨夜横浜方下魚町金次郎帰駿之由、同所廿一日出状持参、今般御奉行所方被仰出二而、壱ヶ町二而大家役拾人相立可申旨、嚴重被仰渡、四丁目二而肥前屋、穀屋、茅の屋、駿府店十四軒にて三人、

所蔵元の許可を得られていないため非公開

七丁目町家

図1 安政六年「神奈川港 横浜御貿易場大絵図」(新栄堂、三井文庫所蔵、別1484-13)に加筆。

弁天通商人、海岸通商人都合十人相立候積、然ル処駿府店は鬪取ニ而、当店并㊤（板屋又兵衛）、宮しま（宮島屋勝太郎）三軒相当り候由、幸板又殿明朝彼地へ出立ニ而、相拘迷惑之趣相談、同人義相含談之上、月代りニ成共可致積之談（ママ「段」カ）同  
 出店江書状認、㊤江頼遣

各町から十名ずつの「大家役」を立てることが厳達され、四丁目は本町通りの店から六名、弁天通り、海岸通りから二名ずつという配分となった。駿府町人一四名へまとめて三名が割り付けられ、くじ引きで当選した点は彼らの出店の共同性を示しており興味深い、ここでは「大家役」のその後の経緯に注目したい。

同日記の万延元年の五月十八日、七月二十三日の記事に「家主役」が確認される。

〔資料3〕（万延元年五月十八日）

一、上田屋隠居来ル、横浜家主役之儀、頼置候処、下足洗村儀三郎殿可相勤候旨治定之由申来、尤当月者難参旨申候

〔資料4〕（万延元年七月二十三日）

一、横浜貿易一件、高源寺江出会同所拝借地之内木屋庄左衛門殿二貸候地代壹ヶ年分御上納、当方持ニ而金五拾両ニ可相定、宮殿方談致候積、先頃右地代之内、金拾五両送り来候旨、（中略）横浜家主役代りとして足洗帯金儀三郎殿相頼、差遣候処、駿河店三人勤之処、兩人ニ相定り、不要ニ相成候逆、空敷帰国被致候間、右往還入用為補、一同方金五両差遣ス（後略）

「家主役」の人選は、下足洗村（現静岡市葵区）の儀三郎に依頼することが決まり、横浜へ向かわせたところ、「駿河店」で三人の家主役であったのが二人に変更となったので、不要となったという。人数の一致から、さきの「大家役」とは「家主役」と同義であろう。資料2から、家主役とは主だった地所拝借人に賦課された負担であり、家主役の担当者を砂張屋らが画策していることから、基本的にはその選定は地所拝借人が当たったのである。名主・月行事と並んで町政の重要な位置を占めた借家人としての「家主」像は、その成熟の結果であったのではないだろうか。地所拝借人の大半が不在であったことも関係していると考えられる<sup>一四</sup>。

万延元年の二月に家主役の設置が厳達されたことは、外国人襲撃事件との関連が推測されよう。安政六年十一月の警備体制の整備後においても万延元年二月にはオランダ人の殺傷事件があった<sup>一五</sup>。二月十日には、定廻役の補佐として仮自身番所へ町役人が詰めるよう

言い渡され、同月には外国人居留地を提灯なしで出歩いた場合は射殺することが宣言されており、緊迫した情勢のなか治安維持の強化が図られたのであろう。町政の補填よりは治安維持に「家主役」の最たる目的があったと考えられる。

元治二年の人別帳から把握された五丁目の家主と万延元年の「祭礼日記」、文久元年の武鑑に共通する人名がみられる（表1）。月ごとや年季による職種ではなかったのであろう。在勤が続く中、町政のなかでの地位は拡大していったと考えられる。

家主に任命された者の立場について、万延元年八月の上州邑桑郡川俣宿の塩谷新八郎（本町五丁目）へあてた店支配人市之丞の書付が示唆を与える。

〔資料5〕<sup>一六</sup>

#### 入置申請状之事

一、貴殿義横浜五丁目御地所拝借被成候ニ付、右家主ニ市之丞御遣し置、横浜人別ニ加、貴殿店支配人ニ被成候間、御上様方地守役被 仰付、町内方定行事役被依頼、一ヶ年給金貳拾四両受取候身分ニ相成、忝仕合ニ御座候、然ル所対貴殿へ、勤方等閑、乍畏諸勘定出入御勘弁ヲ受ケ、取調出来候上者、町内茂吉郎「」（貴殿方）地面江同人頼ニ付、貴殿方家作いたし遣候、店・地代・町入用ハ茂吉郎殿方、自分家作・店賃貴殿江相納候心得ヲ以相払、修覆之外ハ一切出銭無之、永住相成候場所・家財・商物相添、別家被成下、忝仕合ニ御座候、□（然カ）ル処、貴殿店支配人人名目無之候而者、前書定行事役可相離哉与歎敷存、私共ヲ以、是迄之通支配人ニ御召仕被「」尤、店賃・地代之義者別ニ貴殿方月々取立人御遣し被成、地守・家主分之町役請者、住居無出銭并ニ支配人「」置被下候為謝義与、大切ニ相勤可申候、且又別家致□上者、市之丞家業向之義者不及申ニ、金銭取引「」ニ付、何様之義出来候共、私共兩人ニ而引受、貴殿江聊御苦難相掛申間敷答ニ而、「」申入候所、御承引「」所奉存候、仍之為後日請状連印入置申所如件

（後略）

虫損が多く文意がつかみ難いが、市之丞は、新八郎から家主・店支配人へ任命されたあ

表1 五丁目の家主

文久元年	元治二年
大助	伊兵衛
清助	良右衛門
武助	武助
嘉十郎	大助
市之丞	茂助
長八	
喜助	
秀蔵	
留吉	
伊兵衛	

〔典拠〕 文久元年「神奈川横濱 太平餘楽」（『開港七十年記念 横浜史料』、注12）、元治二年「五丁目人別帳」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。

と、御上からの「地守役」への指名と、町内から「定行事」の依頼がなされ、一ヶ年に二四両の給金を得るようになったという。文中にて、始めに任命された「家主」と、「地守」と列挙された町役としての「家主」の関係がわからないが、先にみた文久元年の武鑑には、五丁目家主として市之丞の名が確認され、後にみる万延元年十月の商法議定の連印には、塩谷新八郎の店支配人として市之丞が連印しているので、少なくとも店支配人として家主役にあたっていたことは把握できる。なお、「定行事」とは後に見る荷渡所の係と推測される。

新八郎の店は町中の茂吉郎に任せたくて、別家として家主と定行事の役目に専念しようということであろう。開港と町会所の設置、家主役の厳達からほとんど間を空けないうちから、こうした拝借地所内部の分離が看取されるのである。

「私共」を店支配人とした、とされるため、茂吉郎と市之丞がともに「店支配人」となったとみられる。これは、元治二年の人別帳において、新八郎の店支配人が四名いる事態につながっているとみられる（後掲表7、一四、一〇四）。そのなかには名義上の「店支配人」が含まれているとみられ、不在の地所拝借人の出店経営から分離したことが推測される。これは、町（拝借地所）へ賦課された家主役を負う主体と出店が分離していったことを意味する。

### 3 鳶頭

俳人南草庵松伯による紀行文「珍事五ヶ国横浜はなし」には七つの火消組について頭取、世話番、纏持、梯子持の名を記録する<sup>二七</sup>。港崎町伊勢屋幸吉板の冊子「横濱みやげ」によれば、一番本組は本町通り・弁天通り・海岸通り・洲千町・駒形町、二番組は元町一丁目から六丁目、四番を組は太田町一丁目から八丁目、五番の組は野毛、六番は組は吉田新田町をうけつた<sup>二八</sup>。記載はないが、三番組は外国人居留地、七番組は港崎町であろうと思われる。

「祭礼日記」と「珍事五ヶ国横浜はなし」の人名を比較すると、鳶頭と火消頭取が一致する。明治初頭の資料からは、普請の持ち場を町ごとにさだめ、下水さらいに町抱えの鳶が駆り出されたようで、町と鳶の関係は江戸と類似したものであったといえるだろう<sup>二九</sup>。

横浜開港場の鳶頭の特異な点になりうるのは、外国人の波止場荷物運送を一手に担った「駒形町人足方要蔵」が七丁目の鳶頭要蔵に、「元町人足方政吉」が元横浜町の鳶頭政吉に該当する点である<sup>三〇</sup>。「人足方」と呼ばれた集団と、その外の町の鳶頭の関係はいかなる

ものであったのだろうか。

ここで、もう一点、鳶頭に関する記録を参照したい。万延元年十二月の武鑑には、「御開港場町々鳶人足」として元横浜町政吉ほか一人を列記する（表2）<sup>三一</sup>。「出方：人」という記載は各人に課された人足の数を示すのではないかと推測される。御用人足の供出と火消を負っていた火消組の各頭取が「人足方」であったことを示唆しているのではないだろうか。

彼らはあくまでも町の鳶頭としての立場にあり、町に代わって人足を供出する立場が「人足方」であったと推測されるのである。そして、明治初頭における要蔵の新規願をみると、居留地と日本人町の間の新町である境町への火消人足差配の請願は「駒形町人足方要蔵」、市中の芸者鉢の者の取締については「駒形町要蔵」を名乗る<sup>三二</sup>。外国人荷物運送以外の問題であっても火消人足に関係すれば「人足方」であり、そのほかは町の住人を名乗るのである。

また、昭和期の回顧には下記のような記録が残る<sup>三三</sup>。運上所の事業であった居留地の埋立事業の普請請負人が行方をくらまし、代理の者が見つからないため、「消防七組」の頭取を呼び出し一組につき若干ずつの人夫を出すよう命じた。しかし、手当は安く、普段は外国人相手の遊び半分の労働をしている連中であり、真平御免といった様子で騒ぎ立て、土船持・水主へも迷惑をかけたので、結局本職の土木請負人に任せたという。

居留地のための埋立事業にあたって、火消各組の頭取が呼び出されたという話は、御用人足の供出が各組の頭取に等しく賦課されたことを示している。すなわち、火消七組が「人足方」に対応すると考えられるのである。

ただし、駒形町要蔵と元町政吉以外の者が外国人荷物運送を担ったという記録は管見の限りみられない。先の回顧にて、七組の火消組から出された人足が外国人相手の労働者となったとされる程度である。ここではひとまず、「人足方」<sup>三四</sup>「各町鳶頭のもの」の集団であるが、「各町鳶頭」≠「外国人荷物運送の統括者」であったと、推測しておく。さきの回顧にみられた「人夫」の気質は共通しつつも、外国人荷物運送の統括は元町と駒形

表2 鳶頭と供出人数

住所	頭	出方
元横浜町	政吉	出方 70 人
港崎町	源八	出方 25 人
本町一丁目	清蔵	} 五ヶ町出方 56 人
本町二丁目	又右衛門	
本町三丁目	長二郎	
本町四丁目	政五郎	
太田町	虎吉	出方 30 人
戸部町	今蔵	出方 (欠カ)
野毛町	卯之助	出方 65 人
青木町	清五郎	出方 (欠カ)
神奈川町	松五郎	
	兼松	

[典拠] 万延元年十二月「神奈川奉行所職員録」(『神奈川県史』資料編 10、資料番号 388)。

町の人足方の二名が取り仕切ったのではないだろうか。ただし、万延元年の武鑑に五丁目鳶頭政吉の名がみられないことは(表2)、政吉が元町・五丁目の両方を持ち場としていたことを示す可能性がある(資料1の五丁目鳶頭政吉と元横浜町政吉が同一人物の可能性)。横浜町五丁の人足方と元町や駒形町の人足方が画然とした差を持っていたわけではなかったとみられる<sup>二四</sup>。

#### 4 小括

以上、横浜町の構成について概観した。遊郭の港崎町と横浜村の構成を残す元横浜町が特殊であるが、一から五丁目、七丁目、太田町は町役人・家主・鳶頭のそろった町となっていた。家主役は地所拝借人への負担であった。横浜町における人足方の濫觴を考究する必要があるが、各町の鳶頭が供出した人足も町を構成する地所拝借人が本来は負担するものであったのではないだろうか。

塩谷新八郎と市之丞の例から読み取れる、不在の地所拝借人のもとでの家主役の代替や、荷渡所の係としての勤務を本業とする「店支配人」の存在は示唆に富んでいる。拝借地所・地所拝借人に対応した諸負担が専任の家主や鳶頭によって代替されたこと、地所拝借人と交易を実際に担う者の対応すらも早くから解体されたことが導かれるのではないだろうか。

### 三 都市のなかの売込商

#### 1 町と組合

各町から月行事が選ばれ、家主役、町会所役人の選出、町の鳶頭など、一から五丁目はそれぞれ一定の輪郭をもつたとみられる。そうしたなか、各町をこえた出店商同士の連携は万延元年の早くからみられた。それは物流統制策としての五品江戸回送令への対応と、売込の商法議定の過程においてみられる。以下では、出店商の組合と町の関係について検討する。

#### (1) 生系売込商の結合

万延元年三月、雑穀・水油・蠟・呉服・糸の江戸を介さない横浜直輸送を禁じた五品江戸回送令が達せられた後、江戸系問屋と横浜売込商の間で談議がなされた。おおまかな内容は、口銭收受と江戸回送が不便な地域からの輸送に関して意見を一致させるためのもの

であった<sup>二五</sup>。江戸を経由するのに不便な地域からの生糸輸送は、はじめ、横浜へ会所を設けて問屋の者が出張することが提案されたが、横浜売込商一〇四名は出店の甲斐がないとしてそれに反対した。結局神奈川から軽井沢、芝生村のあたりに改め所を設けることとなり、万延二年正月の議定では神奈川の出張所もと定めることとされた。このとき議定証文に連印したのは「生系売込商人惣代」の七名であった(表3、後掲図2)。

まず、生系売込商とされる人物が当時一〇四名にのぼったことがわかる。文久三年には出荷していないものを入れて一五二名、慶応二年の生系売込商仲間の議定に連名したのは一三二名、明治二年の調査によれば一二四名の生系売込商がいた<sup>二六</sup>。後述する商法の議定が万延元年十月になされるが、その際の連印者は「諸品売込商人」の一七九名であった。同時期の地所拝借人の数は本町部分で二五三名と試算される<sup>二七</sup>。過半が売込商、半数前後が生系売込商であったといえる。

つぎに、彼らが自らの利権を守るべく町を超えて連合している点は注目される。おなじく万延元年四月、四丁目の生系売込商二六名は、全員での集会には費用が掛かるとして、遠州屋清三郎、幸助(茅野屋店支配人か)、専左衛門(佐藤屋店支配人か)、専助(肥前屋店支配人か)を惣代とし、四人で相談にもとづく適切な取り計らいをするよう委託した<sup>二八</sup>。これは町限りでの生系売込商の結束と評しうる。万延二年の江戸問屋との議定書に連印した「生系売込商人惣代」は、一・二丁目から一人ずつ、三・四・五丁目から二人ずつ選出されていた(表3)。各丁から惣代が集まっていることは、四丁目の売込商惣代の決定が特殊な事例ではなかったことを思わせる。各町での組合を基盤として各町をこえた同業者の結合が形成されたといえるだろう。

#### (2) 商法と「荷渡所」仕法

つぎに、万延元年に内談のうえ、奉行所への伺いがなされた売込商法の成立過程について

表3 万延二年正月の生系売込商人惣代

住所	名前	出身
一丁目	日野屋真五左衛門(代善兵衛)	下野国北生川村
二丁目	海屋久次郎(代清兵衛)	江戸堀江町
三丁目	金吉屋庄七(代与平)	芝生村
	掛塚屋権七	浦賀カ
四丁目	肥前屋小助(代専助)	佐賀町
	津久井屋専左衛門	相模国津久井縣若柳村
五丁目	朝田屋重作(代忠七)	小机村
	林屋市右衛門(代五郎左衛門)	神奈川宿

[典拠] 万延元年四月～二年一月「五品江戸回送令につき横浜商人願書・申上書」『神奈川県史』資料編10、資料番号402。

てみたい。三井横浜店の手代は万延元年九月の町触を以下のように報告した。

〔資料6〕 二元

御開港以来、未交易商法筋一定之所意無之、自然一己之利二走り、見居候も無、品々猥ニ約定致シ証書等相渡候方、終ニハ違約ニ相成、外国人ニ相手被取候者無少、当時之姿ニテハ商人共追々衰微致、商業難行届可相成ニ付、町役人共之内、重立致世話候人物相撰、諸事商法筋取締、売品不同無之様、正路ニ差略致し、別紙口達ケ条ハ勿論、其地町法等申合之廉々違背致間敷旨等、堅儀定書取究連印取置、往々規則不弛様、精々誠入念取計可申事

(後略)

商法がなく、違約になる事例が後を絶たないため、町役人から商売方法を取り締まらせるものを出し、四ヶ条の規則と「其地町法」の厳守を誓約するよう命じたものである。規則の内容は、下記のとおりである。

- ① 見本を持ち込み値組が済んだあと、品を半分ずつ二箱にわけ、片方は売込人が封印して買主へ預け、もう片方は買主が封印し売込人が保管すること。
- ② 値段が決まった後も、代金を受け取るまでは商館へ商品を渡さないこと。
- ③ 注文された品を渡すときは、店先か土蔵・納屋の前で見本に引き合わせて治定とし、保管代金(庭代金)と引き換えに品物を渡すようにすること。
- ④ 諸品の値段をきめるときに外国人が不法行為におよんだ場合は、名前を確認し、すぐに町会所へ届け出ること。町会所で届け出の内容を市中へ触れ、不法行為の始末がつくまでは商人一同で、その外国人と売買をしないようにすること。

内容はいずれも売込に関する仕法であり、外国人への商品の引渡しをかなり慎重におこなうよう指示しており、不法行為への団結した対応もあわせ、外国人が原因のトラブルを防止する内容となっている。西川武臣によれば、外国人の横暴による売込商とのトラブルが背景にあったという。

西川は本資料をもって、売込商の組合が従来言われていたよりも早く、上から結成されたことを指摘したが、本文書から組合の結成は必ずしも読み取れない。むしろ、出店商側から提案された後述の荷渡所の仕法のなかで「組合」が文書中



図2 万延元年の売込商組合加入者と荷渡所仕法の推進者

万延元年10月の売込商組合に加入した地所拝借人の地所を、文久2年の復元図(第三章参照)に示した(濃い灰)。万延元年10月の時点で渡世の許可が得られていない者を斜線で、屋号は一致するが同一人物かどうか不明な者を薄い灰色でしめた。人名は、生糸売込商惣代(※印)、売込商惣代(荷渡所仕法の推進者、ゴシック体)、荷渡所の敷地となる高須屋、土屋を記載した。なお、掛塚屋は、万延元年10月の組合では弁天通り4丁目、翌年正月の生糸売込商の惣代としては弁天通り3丁目が存在となる。「御拝借地所・御願済渡世併寫」の3丁目の地所拝借人掛塚屋の項目で4丁目吉村屋にて渡世の許可を得たことが記載されるので、万延元年末から翌年初めに掛塚屋が地所を得たと推測した。

に見られるようになるのである。

万延元年の十月に、売込商一同の相談のうえで、一七九名の連印つきで提出された商法は(図2)、左記の五ヶ条からなる非常にシンプルなものであった<sup>三〇</sup>。

①外国人貿易の品は、各人が店先で値組をおこなうこと。

②見本を商館へ持ち込む売込はおこなわないこと。

③売込の荷物は荷渡所へ持ち込み、品物の見分のうえで代金と引き換えに渡すこと、ただし、連印した者が立ち合い、秤量が必要な物品は双方の枴・秤を使うこと。

④車力・軽子の人足賃や荷造りについては、荷渡所より先は買主の範疇であるので介入しないこと。

⑤商法で取り決めた事項のうち、外国人にかかわることは連印の者から外国人へ対談し、妥結すること。

この商法案には「荷渡所」という施設がみられ、売込商と外国人が商品・代金の交換と検査をおこなう場として構想されている。

つづいて、荷渡所の建設の請願が五ヶ町の惣代によって請願された<sup>三一</sup>。それによれば、昨月に商法の案文を提出したところ、寛大な御沙汰をいただき感謝しているが、いまだに値組のうちに外国人商館へ送り、代金を受け取る方法が慣習として残っており、相場の高下のある品は商機を逃さないためにもやむなく旧慣どりの方法で売り込むものもいるという。そこで荷渡所を、開港以来の慣習的な売込方法を刷新するべく設置したいという請願であった。そして荷渡所は、五丁目北横町の高須屋清兵衛拝借の蔵地を当分利用することとしている。

五丁目の高須屋清兵衛の拝借地所は、北仲通りと町会所の南に一か所ずつみられるが(図2)、前者は「横町」に、後者は「北」にそれぞれそぐわない。「御拝借地所・御願済渡世合寫」によれば、西横町と海岸通りの角地の土屋半兵衛の拝借地所の半分(一二間四方)を清兵衛が借地していた<sup>三二</sup>。「北横町」の呼び名も納得しうる。元治二年の人別帳によれば、ここには店支配人が一名いるだけで<sup>三三</sup>、蔵地の呼称に合致するように思われる。ただし、万延元年の段階で清兵衛が借地していたかは確証が得られない。もともと、輸出荷物が一度は通過する場であったことを考えれば、町会所南の拝借地所が最適であるように思われる。

この新しい商法と荷渡所の設置は外商とのトラブルを避けること、逸脱的な方法による交易を監視することを目的としていたといえる。外国人との関係については、慶応元年の

生糸売込商の議定にみられるような、外商への引き負いに仲間の連帯によって対処し、荷主の利害の代表者としての立場を明確に表すというほどのものではないにせよ<sup>三四</sup>、相手に一定のルールを強いることを想定している。そして、生糸売込商の仲間と同様に、多人数での連合がみられる点は注目される。そこで、この荷渡所仕法のその後の展開を佐藤屋才兵衛の生家に伝わった資料から検討したい。原資料は、商法の提案への対応を催促する書付と、神奈川奉行定役元締の高橋渡世平・加藤啓之進の諮問に対する返答書の写しからなる。前者を以下に引用し、後者は表4に内容を示した。

〔資料7〕<sup>三五</sup>

一、横浜町商人惣代弁天通四丁目掛塚屋権七、同五丁目朝田屋重作、同式丁目海屋久次郎奉申上候、諸色商法之義二付当四月以来商人共一同申合、議定書等示談仕、十月廿六日奉願上候処、訴状上置候様被仰渡、難有仕合ニ奉存候、然ル処、御調中ニ而未商法相定り不申哉、商人共之内ニ者自促之直段を以取引仕候間、異人江売込品諸国在々荷主共方江買注文申遣候処、兎角差扣「」ニ積送不申、当五月以来者諸色払底、商人共一同休業同様之儀ニ而、昨今之姿ニ而者、相続仕兼、甚に難渋至極仕候、仍之商法相定、実直ニ取引仕、諸色売捌所取建之儀共、御許容被成下置候ハ、銘々荷主共夫々文通仕候得者、元方ニ而危路不申、追々御当所江諸色潤沢仕、外国人共持渡之品々、自然速ニ交易茂行届、異人共永く滞船不仕候得者、双方利益弁用ニ奉存候、其段私共より異人共江内掛り合仕候処、品々御願済ニ相成候上者、同慶之趣申聞候間、何卒以御憐愍御聞濟ニ被成下候様仕度奉存候、不願恐再応奉願上候、以上

万延元年十二月

横浜町商人

弁天通四丁目

掛塚屋権七

同五丁目

朝田屋重作

同式丁目

海屋久次郎

御運上所様

この願書は「横浜町商人惣代」たる掛塚屋権七・朝田屋重作・海屋久次郎によるもので、

先にしめした生糸売込商の代表者でもあった人物である（表3、掛塚屋の所在は図2の注を参照）。いずれも文久元年の武鑑の町役人とは一致しないため、万延元年九月の町触（資料6）で命ぜられたとおりの町役人からの選出ではなく、生糸売込商の代表者が商法の決定にあたったことが明らかとなる。万延元年四月から商法の話し合いがなされていることを考えれば、江戸問屋との交渉を経た生糸商の結合の深化と無関係ではなからう。そして、資料6にみられた「其地町法申合之廉々」という表現は、こうした売込商の協議が念頭におかれていたとも考えられるだろう。

なお、神奈川奉行定役の諮問への回答は、肥前屋小助（代専助）、飯田屋五郎左衛門、海屋久次郎があつた。飯田屋については不明だが、肥前屋は生糸売込商の代表者である。

商法と荷渡所（資料7の「諸色売捌所」と同義であろう）の仕法を開始する大きな動機は、「自伝」の売込みの横行による荷主の信用の失墜とその結果としての仕入れ品不足である。商法が決まり次第、荷主へ連絡するとされていることから明らかにであろう。ここで注目されるのは、

表4 荷渡所仕法に関する外国奉行の諮問と回答

条	諮問の内容	回答
1	荷渡所の入費	売込歩合金の五厘から賄う。不足した場合は商人相互で出金する。
2	荷渡所に持ち込む対象は、買目品だけでなく漆器のようなものも含むか。	どのような品であれ、少しでも代金を受け取る品ならば荷渡所へ持参させる。店先で現金売買をした場合は、荷渡所で見届け、品商、代金を届け出たうえで、鑑札をもつ者が商館へ持ち込むこととする。
3	20両ほどの売買ならば店先だけで済ませてもよいか。	少額でも売買のたびに届け出させることとする。
4	月番で運用するか、常務の世話役を任命するか。	商法の議定に主だって世話をした者で相談し、五ヶ町全体から定行事と世話役を10人、月行事25人を任命し、売主・買主のもとに立ち会う。また、行事で相談して5、6人の泊り番を置く。
5	町年寄は日々見回るか。	町年寄1名を取り締まりのために見回らせる予定である。もともと商事にかかわるわけではない。
6	私的に異人から金品を借り受けることは許可するか。	商法が成立した後は、基本的には禁止する。やむを得ない場合にはその意を行事へ伝えるようにする。そのうえで、商事のうでで共同しているもの(18条目の5人の組合か)が調印し、滞った場合は弁済することとする。返済が延引した場合は、行事と相談して期日を決定すること。無断での借り入れは厳しく取り締まる。
7	せり売り、見本のみの売買、出奔や拵え物(まがい物)、抜き荷の売買などの取り締まりはどのように行うか。	行事の者が念を入れて荷渡所で相場を打ち合わせ、せり売りにならないように取り計らう。 見本のみの売込は、相互(行事・外国人の意か)に警戒し、本体が来て初めて手打ちとする規定を定める。 拵え物は、行事・世話方が売買ともに、どのような品でもよく改めて対策する。抜け荷がないよう取り締まるために、すべての商人が荷渡所に立ち入るように(原文では「都而商人共商館江立入候様可致」とあるが、抜け荷と商館への出入りの関係が不明で、「商館」ではなく「荷渡所」かと思われる。)することとする。また、御触れのとおり、朝五つ時から夕七つ時以外は立ち入りを禁止し、みだりに立ち入る者へは咎を仰付られたい。
8	横浜商人で申し合わせた仕法書などはあるか。また、この度の願は商人一体によるものか、主だったものだけによるものか。	商人共で申し合わせて商法を立てるよう願ったもので、議定もしているが、今回お尋ねがあった内容に基づいて仕法を立てるつもりである。仕法出願は、惣商人の存意で、今後売込渡世を認可された者のほかは、貿易に携わらないように名前を外国商人に断っておくこととする。
9	後に移住商人が類似した商いを始めた場合はどのように取り計らうか。	どれほど増加しようとも、今回仕法を定めた人数に組み入れて規則通りにさせる。
10	江戸、京阪へ荷物を積み出す方法はどのように取り計らうか。	出荷の際はいかなる品も荷渡所の係の者が荷主に取り調べをおこない、送り状へ割印をして、その旨を(町会所へ)申告する。かつ、諸品の出入りについて荷渡所で調印したうへは、関門や波止場で手板同様の証印として改めていただく所存である。 ただし、押切印鑑はかねて届け出ておき、世話方のものが取り扱うつもりである。送り先である江戸、京阪の仕法は追っつかう。
11	申し合せを守らない者はどのように取り計らうか。	心得違いの者は、仲間で相談して売込渡世をしないように取極め、そのことを届け出る。心得違いの内容によって斟酌するかどうかは一同相談し、また、たびたび相談にあがるつもりである。
12	役人の見回りを必要としているか。	取り締まりのために恐れながら役人のうちから商法掛の派遣を願い上げ、荷渡所を見回ってくださるようにしたい。売買の帳面の検査は、定世話掛の者が運上所へ持参し見分を願い上げ、押切印を頂戴したい。
13	月々に諸雑用はどれほどかかる見通しか。	惣商人で組合をたて、四ヶ条目の世話方10人の手当50両(1人5両)、月行事25人の手当75両(1人3両)、下働きの日雇い50人ほどの手当100両(1人銀4匁)を(負担する ※本文中には熟語にあたる表現がない)。ただし日々の商い高によって増減が見込まれる。筆、墨、炭薪、帳面など雑費100両ほどを合わせて325両であり、出勤の者は手弁当の積りである。
14	荷渡所に居付手代などはいるか、その賄いの見込みはどの程度か。	すべて売込商人が相談して勤めさせるつもりで、居付手代の有無はこの度は保留し、一同相談のうでで決定し、その際にまた伺いたい。
15	日々の売品や買品に至るまで、商法にかかわることはすべて荷渡所で取り扱うか。	返答なし(内容の重複のためか)。
16	五厘(歩合金)は荷渡所で徴収するのか。町会所でも当節は入用が多くかかっているが、五厘のうちからどの程度を町会所へ送るつもりか。	荷渡所で代金を引き換える際に即刻徴収し、町会所で扱う御用の入用、諸失費、諸駄賃を話し合い、毎月町年寄と名主が立ち合いのもと、一か月分の取調、割印の帳面を回覧し、荷渡所行事共が見届けたうえで、五厘のうちから(町会所の入用を)賄う予定である。
17	臨時入用があった場合はどのようにして出金する見込みか。	五厘のうちから支払うつもりだが、万一不足した場合は、売込商人から出し合って勘定を立て、町会所で臨時入用があった際には、地所拝借人一統から町入用に割り込み小間・土坪に応じて支払うようにしたい。
18	諸商人で組合などを立て、万一異人と引合、差よじれる事件が起こった場合は組合で取調のうで出金するといった規則を立てるか。	五ヶ町全体で5人ずつの組合を作り、万一異人と引き合い、差よじれた場合は、世話掛の者から御担当者の方へ事情を申し上げ、伺いのうで取り計らい、その事件によって行事らの存意を申し上げる。売買で差よじれた金子を差し出すことは6条目に申し上げた通りにするつもりである。 買品については、買い取ったうえで、他国商人から売り渡すよう、一同取り計らい、組合が受け持つ。
19	積み金が蓄積された場合は、誰に預けるか。	諸入用の支払いの残りは積み立て、恐れながら運上所へ納めて置き、年柄によって凶作や不時の天災の際には当支配所の救民へ夫食・貯穀となるように備えることを願いあげたい。

【典拠】「諸色取扱所取建方之儀ニ付再願書写」(佐藤英雄家文書、箱③-106、相模原市立博物館所蔵)。

荷渡所と商法の策定が売込商の主體的な行動によって進められている点である。そして、その中核には生糸売込商の代表者が居たが、御用商人の朝田屋、浦賀の人物とみられる掛塚屋、江戸の海屋久次郎、福井藩城下商人肥前屋小助（高島嘉右衛門）など、彼らは生糸産地出身の豪農やその手先というよりは、御用商人や都市商人に該当することが理解される。

諮問はより具体的な内容で、「荷渡所」の機構と役割、町会所との関係、商法の背景等がうかがえる（表4）。

荷渡所には少量であっても品目にかかわらず荷物を通過させること（二、三条目）、売込渡世を許可されているもの以外の売込は禁止すること（八条目）、新規開業の者も荷渡所の仕法を守らせること（九条目）といった条目は、売込の渡世許可を受けた者による排他的な管理を志すものとして評価できるだろう。八条目に主張されたとおり「惣商人」による請願であることがその正当性の根拠となつていられると思われる。

六条目は外国人からの仕入金の受け取りを想定したものと考えられ、原則は禁止としつつも、行事へ届け出たうえで「商事之上二而組合候もの」の連印をし、弁済の責任を負うことが義務付けられた。一八条目は、外国人から訴訟された場合の対処で、五ヶ町の商人を五人ずつの組合に分け、金銭については六条目に依拠するという。これは、「商事之上二而組合候もの」が五人ずつの「組合」と同義であることを示している。

借金や外商とのトラブルへの共済をうたっているものの、全員での対応ではない。商法を守り売込渡世の許可を得た約百八十名の商人は、全体での経営に関する共同がさほど念頭にはなく、五名ずつの連帯保証人の「組合」が共同体としての性格をより強く持つように構想されているのである。売込の品目が異なる売込渡世の許可を得た商人による共同としては当然の結果といえるかもしれない。売込商全体での「組合」は一三条目にみられるが、荷渡所の係への給金や雑費の負担のためのものである。

一六条目は売込歩合金の納入についての回答だが、荷渡所で即時に歩合金をあつめ、町会所と相談のうえで用途を決定することが主張されている。これは町会所が主体となつて回収していたとされる歩合金の徴収について一定の主導権を得ようとするものである。この点は、明治十年の歩合金取立の規則における、売込商らが区費の点検のうえで歩合金の納入を決定するという条項を彷彿させる<sup>三六</sup>。売込商が町政へ関与しようとする動きと評価できるだろう。

一九条目では、積立金が蓄積された場合は不時の天災にそなえる貯穀をおこなうと返答

されている。売込商の結集は、惣町規模の団体として、町会所を補完する性格を帯びつつあったといえるのではないか。ただし、万延元年十月の案文①から⑤と比較したとき、取り締まりや抜け荷の対策を担う部分がより具体的かつ多岐にわたるようになっており（六、七条目）、諮問をおこなった奉行側の誘導で付加されていった側面も否めない。つまり、生糸売込商の代表者を核として練られた商法の策定を機に、奉行側が交易の取り締まりを請け負わせる体制を作り出そうとした可能性も想定できる。

最後に、先にみた塩谷新八郎の店支配人市之丞の請書（資料5）に出てきた「定行事」とは荷渡所の役職であろう（四条目）。万延元年八月は仕法実行前の段階であるが、店支配人の者が基本的な構成員として想定されたことを示している。

そして、荷渡所の仕法は、元治元年九月以降の生糸売込商仲間の議定書の下地となつたと考えられる<sup>三七</sup>。生糸売込商の仲間議定では、まず、歩合金の収集や売込帳を「行事」が判を押して町会所へ持ち込むとされ、二条目の内容に対応する。そして行事のつめる「寄合所」とは、荷渡所の代替として生糸売込商たちが設けた施設であることが推測される。寄合所には定行事や商人惣代、書き役・子使いが詰め、売込歩合金から手当が出されるとされており、一三条目の内容に対応する。また、商事のとりきめ（おそらく生糸売込商仲間仕法の議定のこと）や家作の入費に充てた余りは「非常備」や「余事入用」に充てるとされる。「非常備」とは一九条目にみられた備蓄と同様のものと考えられる。

生糸売込商は、荷渡所と売込商全体の共同から、自らの仲間を生成し、他方でその仕法や町会所との関係は維持されたものとみてよいと考える。このように、交易の存続や奉行による都市支配の都合から荷渡所は都市の運営上重要な構想であり、生糸売込商の仲間を受け継がれる都市下層民への救恤の萌芽としても、町内の有志の者が果たした役割は小さくなかつたといわねばならないだろう。

## 2 売込商の格差

万延期には、五品江戸回送令への対応の必要もあつて惣町規模での結合が認められたが、西川武臣によれば、安政から文久期にかけての生糸売込は藩と結びついた一部の売込商が量的には大半を占めた。また、慶応四年の吉村屋幸兵衛の売込額は百万両をこえたとい<sup>三八</sup>、この額から算出される町会所への歩合金は年に五千両となる。そして、高村直助は慶応期の石炭屋の経営帳簿を分析するなかで、売込商の仲間で決定した口銭よりも下値で売買していたことを指摘し、同時期の野沢屋にも共通することから、中小の売込商は組合の

仕法を破つてでも顧客獲得に奔走したことを推定している<sup>三</sup>。

このように、百人を超える生糸売込商の内部は全く均質ではなかった。そもそも開港以前において在方の荷主や金主、藩との関係を構築してこそ円滑な輸出貿易を実現できたのである。資料8は、那珂湊の豪商木内家に伝わった文書で、安政六年二月の中居屋撰之助（本町四丁目の重兵衛）による外国奉行への進言の案文を、木内家が修正した際の写しとみられる<sup>四</sup>。

#### 〔資料8〕

##### （前略）

一、世二人気程大切成る者無御座候、近世悪き方二人気動き、都而不実之取引方御府内者勿論御国内一般ニ現金取引ニ相成、金不足仕、別而此両三年者諸品捌方と国産之出方と見競候得者、半高ハ残、代ものニ相成世之様欲ケ敷奉存候内、今般御開港と申事御国内一時ニ承伝へ、未だ御開港ニ茂不相成候内、人氣動き是迄品沢山之絹糸、旧冬<sup>一</sup>追々引上、当時金壹両ニ付百廿目迄ニ相成申候、去秋之相場ニ見合候得者、金壹両ニ付四拾目程之相違ニ御座候、弥当五月御開港ニ相成候ハ、金壹両ニ付百目迄引上ケ可申見込ニ御座候得者、百姓農間ニ蚕養取候蘭代、是迄拾兩取入候家ニ者廿兩之取入ニ相成候、亦白蠟茂其証合ニ寄金壹両ニ付懸ケ目七百五拾目より九百目迄引上申候、右ニ准し諸品多少共引上申候、是人氣之成す所ニ而、如何共致方無之、右ニ付旧冬<sup>二</sup>当春江相懸ケ、田舎者近來稀成融通宜敷、実々百姓之悦候事無限事之由、諸国<sup>三</sup>方日々之來狀端書ニ無之者無御座候、御国内之御潤ひ不少事ニ御座候間、御領主・御地頭まで自然御潤ひ可有之候得共、右様諸品引上候而者、市中問屋共ハ差支無之共、小前之者ハ、行々ハ宜敷事ニ至リ可申候得共差向難渋之慮ニ落入可申候、尤今般御開港無之とも市中何渡世ニ不拘、難行立姿ニ有之處、米穀高直之上諸色引上ケ候而者、田舎者益強候共、御府内小前之者ハ弥及難渋ニ候上、交易ニ相成候諸品も高直ニ相当リ可申候、踏者上ル之理、世之人氣難及力ニ奉存知候、且交易商法者私始メ心得不申候得共、口々願人共も同断相弁へ不申、損益之無差別先暗ニ而、只利益而已と心得、銘々見込を以人氣之變化、此上願人共申立之通御差許ニ相成候ハ、御国内騒ぎを入、品纏メニも不相成上、格外之高直ニ糶上ケ可申候、既ニ、長崎御奉行様方堀留町ニ老<sup>一</sup>人、伊勢町ニ老<sup>二</sup>人右両人江絹糸御用被仰付、當時聊之買入、又加部安左衛門と申者、上州一ヶ国之産物買込人ニ被仰付候旨を以、上州・信州之富家江沙汰<sup>三</sup>及ひ会合等日々致し、人氣を動し候故、近国江も相響き申候、諸品引上候弊を相除く之策者、各国江相向候

品有之候国々者、其御領主御地頭ニ而国産を纏メさせ、町人を以交易為致候ハ、交易換り品茂市中問屋共へ延金ニ而為相捌候仕方も相立可申、然して国産差出し候大小名様江者、此度御開港ニ付而者諸品引下ケ方第一ニ可心懸旨被仰渡有之候ハ、諸色引下ケ方之御世話行届き可申候、又百姓ハ諸品直段引下ケ候共、捌方差支無之候得者、難渋之筋毛頭無御座出精いたし、産物産出し可申候、米穀之他天然自然之相場と申儀者無御座候、其他皆人氣之成す所ニ御座候、扱交易差向之处ニ而者、御国内も異国茂事珍敷、思之外之交易茂出来可申候得共、御国内只今之形勢ニ而国産相開候ハ、三、四ケ年も相立候ハ、存外之諸品を産出し、又交易も追々功者ニ相成、相互ニ損益を計候故、必ず諸品餘リ可申候、我諸品下落仕候得者、亦持渡り物も下落可仕、其時ニ至而全ク之交易ニ可有御座と奉存候、市中・田舎とも当時頻ニ諸品交易奉願上候得共、十五ヶ年前之人氣ニ候ハ、餘程之大交易取組茂出来可申候得共、前文奉申上候次第ニ而現金取引と相成候而者、何分手狭窮屈ニ相成居候間、当分之内ハ交易人も思之外不都合之義茂可有御座哉と奉存候、通用金銀二者其数限り有り、産物二者限り無之、既ニ長崎唐物御代銀・御上納金、去冬大坂表町人共差支有之、御日延奉願上候向茂承知仕居候、此度御交易ニ付大切之御儀者、異国之諸品捌き方肝要之御儀ニ奉存候、何分当時悪賢敷而已ニ相成居候間、御上様之御仕方ニ而人氣之二字を計る之外、乍恐無御座と奉存候（後略）

「人氣」をキーワードにして在方の者の自由な商品売買を批判し、国産物を領主・地頭によつてまとめて町人（各城下、または江戸町人か）に売り込ませ、輸入品（交易換り品）は市中問屋が延金（延べ取引の意であろう）によつて捌くという交易方法を提案している。大坂町人による長崎唐物代銀・上納金が滞ったことに言及し、外国交易において商品と正金のバランスが崩れる可能性を指摘している<sup>四</sup>。この考えが延べ取引を提案する背景にあると推測される。中居屋が藩の生糸輸出を準備していたことと関連すると思われる注目されるが、ここでは生糸に関して彼が得ていた情報に注目したい。

開港の情報を知り、交易が実際に始まる前から生糸の購入の動きがみられて価格が高騰していること、長崎奉行から指示を受けて数名の者が生糸の購入に着手していたらしいことが知られる。とくに、上州の加部安左衛門に関する風聞は、上州・信州の豪農との結合がみられ注目される。北関東の豪農を通じて生糸に関する情報は伝播したはずであり、上州中居村（現群馬県吾妻郡嬭恋村）を実家とし、信州上田藩の藩産物役人との交渉に臨もうとしていた中居屋が加部安左衛門らの会合を知ったのも当然であつたといえるだろう。

交易に向く品の見当がつかない状態で開港にいたったという話は、出店商が多く品の目取り扱いを申請したこととにもよく指摘される。また、長崎での下見から巨大商社ジャーディン・マセソン商会在生系交易に注目していた点は石井寛治が明らかにし、内外商の情報格差を指摘している<sup>四〇</sup>。

中居屋の証言は、おそらく都市長崎や長崎奉行を介して情報をつかんだ江戸と北関東の一部の富裕者と、そこから二次的ではあれ情報を得た中居屋のような出店商が、交易開始後に生系交易を始めようとした出店商との間に歴然とした格差をもって交易開始に臨んだことを示している。第三章でも言及したネットワークが重大な資産であったことを明示しよう。

以上から、売込商の共同は限定して考える必要があるだろう。荷渡所の設置や商法の議定は、組合外商人の排除と外国人との商法確立に最も大きな意味があったと考えられ、それは新興の都市商人である売込商が在方の人びとの信用を確保する手段であったといえる。

### 3 売込商の浮き沈みと営業の多角化

慶応二年に生系売込商組合に加入していた一三一人のうち、明治六年の生系改会社に加入した者がわずか一六名（全三二名）であったことがすでに指摘されている<sup>四一</sup>。その変化に迫るべく、組合と生系改会社の間の時期における売込商の調査記録に検討を加えたい。

明治二年、生系売込を許可された人物の調査がなされた<sup>四二</sup>。そこでの分類は、④生系売込を専らつづけている二六人、⑤断続的な営業となっている五〇人、⑥許可されているだけで商いは行っていない三〇人、⑦営業を停止し、引き負いの吟味や土地によって土地を失ったものなど一八人であった。⑧は下げ札によって現状が追記されている（表5）。合計すると、一二四名となる。彼らは身元の軽重はあるがいずれも地所拝借人であった。

生系売込の渡世を許可された人数は万延期からほぼ同程度の人数で、半数強は生系輸出を続けていたことが理解される。そして、④の構成員を中心として生系改会社が設立された。しかし、それでも半数は明治二年から六年までの間に開業した人物とみられる。

ここで、ジャーディン・マセソン商會から借用した生系仕入れ金が返済困難となり出訴された高須屋清兵衛が、家作入札を経てなお、出店の準備をおこなっていることがわかる（表5、※10）。家作入札後に新浜町に居住した鶴屋与兵衛も、復帰の機会を狙っていた可能性がある（表5、※13）。また、明治二年段階では、野沢屋忠兵衛は引合の末に休業していたが（表5、※12）、生系改会社の一員となっている。

生系売込商ではないが、肥前藩の産物売込商であった高島嘉右衛門は、金の輸出を自首して入牢となり、復帰後は入船町で材木・普請請負をおこない、居留地関係の普請で活躍した。明治三年からは鉄道用地埋立、瓦斯灯や水道事業に着手するなど、実業家としての名を残した。

同様に、元佐野藩士西村勝三は、横浜で朱の密売による入牢後、弾薬販売の店を江戸に構えたが、明治初頭には横浜との関係もみとめられ、外国人船積業や外国への出店者の宿など、多様な新規営業を試みた<sup>四三</sup>。

また、冒險的な取引をおこなったものに、糸屋田中平八が挙げられる。横浜交易へ参加し、巨利を得、その後生系交易や銀行業に尽くした人物で、災害への救恤にその名が確認される<sup>四四</sup>。亀屋や吉村屋が代理貿易によって安定した利益を得るようになった一方、投機的な取引は行われ、そこから上昇した人物も確かにいたのである。

横浜開港場の交易商は、安定した営業形態による繁栄と、投機的な形態による衰退という明確な分割があったわけではなく、その間でうごめく層を分厚く内包したのであった。安定して蓄財することのできた吉村屋のような売込商のほか、浮き沈みの中から明治初頭のインフラ事業や困窮者への救恤を行う都市名望家もわずかながら認められるのである。

ほか、開港直後に藩との関係のもとで大量の生系輸出を果たし、入牢後に第一線から退いたとされる中居屋重兵衛の名が確認できる（⑥群、四丁目）。また、上州大戸村の豪農加部安左衛門も、店支配人のおこした争論をもってさほど活躍がなかったように論じられるが<sup>四五</sup>、大規模ではなくとも生系交易をおこなっていたのである（⑥群、三丁目）。生系売込商は盛衰による入れ替わりが激しかった存在とされるが、一度の没落程度では退散しない野心と熱意が読み取れる。新興の売込商が生まれ続けた下地として、旧来の売込商が作り出す飽くなき売込成功への願望が都市に満ちていたといえるのではなからうか。

生系売込の中核にあった④群と、引き負いや吟味、土地のされた⑤群以外の八〇名ほどは、どのような経営を行っていたのだろうか。この集団には開港当初から出店した人物が多くみられ、横浜開港場の継続的な町の構成員として注目されるが具体的なことはほとんどわからない。

表8は、次節にて地所拝借人の変遷をみるために作成した表だが、五丁目の⑥群、⑦群の人びとについてみると、四番木村屋は、茶店（茶売込の意と思われる）と金物、六番杉本屋は上道具、一八番小西屋伝次郎は両替商、三〇番江一屋は茶店、三四番鴨居屋は金物を扱う商人として「大港光商君」（横浜商人の番付表）に登録される<sup>四六</sup>。

表 5 明治二年の生糸売込商調査「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）から作成。

	生糸売込商	人名	貼紙	生糸改め会社
㊤群	本町一丁目	中沢屋五兵衛		
		海屋久次郎		●
	本町二丁目	糸屋勘助		
		小松屋平兵衛	◎	
		小橋屋伝右衛門	●	
		上野屋忠作		
		郡内屋四郎左衛門	◎	
		奥州屋新助		
	本町三丁目	亀屋善三郎	◎	
		鈴木屋保兵衛	○	
		不入屋修助		
		芝屋清五郎	○	
		上沢屋与三郎	●	
		旭屋留吉		
		金子屋新兵衛		
	本町四丁目	野沢屋惣兵衛	◎	
		吉村屋幸兵衛	○	
		大国屋六助	●	
		藤屋善十郎		
		橋本屋弁蔵	●	
		肥前屋七右衛門	●	
	本町五丁目	石炭屋福三郎	●	
		松屋吉太郎		
		漆屋惣右衛門 外三人	※1	
		橋本屋弥兵衛		●
	若松町	大和屋三郎兵衛		
㊤群	本町老丁目	廣屋栄助		
		和泉屋保兵衛		
		田村屋仁兵衛		
		菜種店繁蔵	※2	
		元村屋鎗五郎		
		津久井屋新三郎		
		石田屋善兵衛		
	本町式丁目	古木屋甚吉		
		増田屋嘉兵衛		
		甲州屋忠右衛門		
		田口屋三吉		
		万屋四郎右衛門		
		万屋善兵衛		
		郡内屋常三郎		
		信州屋又右衛門		
		相模屋伊惣作		
		岩田屋伊兵衛		
		武蔵屋定次郎		
		糸屋七五郎		
	本町三丁目	金吉屋庄七		
		加部屋安左衛門		
		大川屋甚兵衛		
		鹿島屋亀吉		
		愛知屋安兵衛		
		遠州屋清吉		
		越後屋清次郎		
		海老屋文右衛門		
		松屋重之助		
	本町四丁目	伊勢屋平太		
		茅野屋源兵衛		
		敷嶋屋正左衛門		
		中居重兵衛		
		中嶋屋半兵衛		
		八幡屋七五郎		
		砂張屋善右衛門		
		佐藤屋彦兵衛		
	本町五丁目	越前屋源太郎		
		鴨井屋平次郎		
		杉本屋長次郎		
		山城屋彦太郎		
		木村屋文次郎		
		塩野屋親八郎		
		立野屋源助		
		林屋市右衛門		
		石川屋徳右衛門		
		綿屋政吉		
		常磐屋音次郎		
		兼村屋源次郎		
		江一屋嘉助		
		阿波屋五兵衛	※3	

㊤群 身元宜しき者	本町二丁目	諏訪屋喜平治		
		松木屋久七		
		伊豆屋保兵衛		
	本町三丁目	森屋半次郎		
		関屋新三郎		
	本町四丁目	杉村屋甚三郎		●
㊤群		下倉屋太七		
		上田屋庄七		
	本町五丁目	小西屋伝蔵		
	本町二丁目	河内屋重兵衛		
		万屋伊三郎		
		久良岐屋豊吉		
	本町三丁目	神崎屋重右衛門		
		永喜屋増吉		
		和泉屋又兵衛		
		嶋屋新兵衛		
		高嶋屋藤右衛門		
		近江屋喜八		
	本町四丁目	遠州屋与兵衛		
		万屋半之助		
		矢入屋重十郎		
		大和屋一兵衛		
		坂名屋平七		
㊤群		八木屋兵助		
		平間屋平五郎		
		三河屋庄兵衛		
		福井屋八右衛門		
	本町五丁目	富屋右平		
		浦賀屋直吉		
		田辺屋国太郎		
	一丁目	久保屋七右衛門	※4	
		境屋久八	※5	
		日野屋信五右衛門	※6	
	二丁目	大坂屋銀次郎	※7	
		雑賀屋武兵衛	※8	
		三文字屋金六	※9	
		高須屋清兵衛	※10	
		丸中屋吉右衛門	※11	
	三丁目	野沢屋忠兵衛	※12	●
		鶴屋与兵衛	※13	
		山木屋芳兵衛	※14	
		植屋喜八	※15	
		佐原屋伝之助	※16	
		柏屋政吉	※17	
	四丁目	鴨居屋藤次郎	※18	
		太田屋勇七	※19	
		山口屋惣兵衛	※20	
		松田屋定吉	※21	
	若松町	三野民弥?	※22	
	吉田町一丁目	太田屋定次郎	※23	
	吉田町一丁目	万屋長吉	※24	
	新浜町	井上屋小左衛門	※25	
	録町	若山屋九兵衛	※26	

- ※1 惣右衛門、平七、伊兵衛、藤助の四人で地所を拝借し、年番をたてて一人ずつ在店している。
- ※2 御用地となり、2丁目庫次郎方にいる。
- ※3 普請中で、太田町自分家作に居る。
- ※4 御用地となり、弁天通四丁目に住む。
- ※5 本町1丁目繁蔵の同居人として生糸商売を許可されたが、当人は東京におり名目化している。
- ※6 当時養子願を出している。
- ※7 拝借地はあるが、神奈川宿在住。
- ※8 拝借地はあるが、神奈川宿在住。
- ※9 2丁目拝借地が御用地となり馬車道通住む。
- ※10 外国人との引合で、休業していたが、明治元年に示談し開店。
- ※11 拝借地はあるが、東京に住む。
- ※12 引合で、休業中。
- ※13 外国人との引合で、家作入札となる。今は新浜町に住んでいる。
- ※14 外国人との引合で、家作が入札となる。元の家に住んでいる。
- ※15 外国人との引合で、家作が入札となる。高崎屋に同居している。
- ※16 外国人との引合の吟味中に欠落
- ※17 本町1丁目の地所が上地。三丁目の久次郎の同居となっている。
- ※18 引合にて、吟味中。
- ※19 拝借地はあるが東京在住。
- ※20 拝借地が上地となり、駒形町徳太郎の同居となっている。
- ※21 上地となり、本町五丁目愛甲屋安兵衛の同居となっている。
- ※22 先年から生糸商いをし、時々続いている。
- ※23 許可されているが生糸売込はしていない。
- ※24 許可されているが生糸売込はしていない。また東京在住。
- ※25 許可されているが生糸売込はしていない。
- ※26 許可されているが生糸売込はしていない。

「生糸改め会社」列の記号は、◎：社長、○：頭取、●社員を示す（『横浜市史』第三卷上より）。

なお、表に現れないメンバーは、三井得右衛門（社長）、小野善三郎（社長）、糸屋田中平八、田辺屋伏島近蔵、常盤屋福島瀬平、行田屋行田小兵衛、平越屋渡辺逸八郎、京屋田部井芳兵衛、富屋堀越源七、永楽屋楽千代八郎、五中屋五十嵐万七、川喜多屋川喜多定兵衛、小林屋小林彦助、星野屋星野宗七、米沢屋高橋万右衛門であった。

また、⑧群の甲州屋忠右衛門は、生糸交易とともに多種の品目に手を出した<sup>四九</sup>。文久元年には食料渡世を許可され、手堅い業種の開業を思案し、文久二年から足袋を扱い始めた。元治から慶応期には繰り綿、慶応期には茶や鯛などの輸出品の扱いが認められ、高利貸しの開業も確認される。明治二年には大規模な座敷を普請し、おそらく生糸の荷主をターゲットとした宿を開業し、大いに繁盛したという。生糸以外の輸出にくわえ、拡大過程にあった交易都市において、日用品の取り扱いや旅人宿が経営を支えたのであろう。

また、⑨群に入った石炭屋だが、高村直助によれば、全体の数パーセントほどの売込高であつた<sup>五〇</sup>。石炭屋は初期的には石炭御用や洋銀取引をおこない、運上所の向いという立地を生かして借地・借家経営もおこなつた。前章で見た通り、借地・借家経営は新規開店希望者が地所を得るまでの猶予期間をあたえ、甲州屋の副業のような日用品をあつかう店を受け入れる重要な前提であつたとともに、新興の売込商が開業するきっかけにもなりえたと推測される。甲州屋の旅人宿は、荷主への貸家という形はとらないまでも、それに類する形態であつたといえるだろう。

そして、断片的ではあるが、慶応三年、江戸の木挽町七丁目の家主助七という者が、開港場の地所を二ヶ所拝借していた<sup>五一</sup>。都市形成の段階から不在地主が多い横浜開港場であつたが、交易とは関係が薄いとみられる江戸の家主が、土地経営を行っていたのである。生糸売込商仲間構成員としての地所拝借人は維持されつつも、その内部には多角的な営業が含まれ、同時に、借地・借家営業による、「交易商」地所拝借人あるいはその店支配人」という対応の解体が広がっていったのではなからうか。

## 四 拝借地所内部の分離

### 1 地所拝借人の変遷

本節では、拝借地所の利用形態の変化に迫りたい。はじめに、明治初頭までの地所拝借人の変遷を簡単におさえておきたい。

まず、明治元年の調査による地所拝借人の人数を文久二年と比較すると、人数が増えていることが明らかであろう(表6)<sup>五二</sup>。安政六年から文久二年までの間には地所の再分配が行われていたが、明治元年までも同様な状況が続いたことが推測される。以下、横浜の住人を業種によらず把握できる元治二年・慶応二年の五丁目人別帳と二丁目の生糸売込商甲州屋忠右衛門の残した商人名簿「濱之真砂」から地所拝借人の変遷をみていきたい。

### (1) 人別帳(表7)<sup>五三</sup>

五丁目に限られるが、元治二年と慶応二年の二冊の人別帳が残る。通りごとに地所拝借人を単位としてその世帯、地借りの世帯を記録する。個人については名前と年齢、生国、寺院、請人が基本事項で、稀に職業が記載される。

人別帳はおおむね空間の順序に従つて世帯を記録したとみられ、地所拝借人の名前から、第三章にて作成した復元図へ各世帯の位置を比定することができた(図3)。攘夷運動の高まりとともに江戸の横浜出店者への脅迫がなされ、江戸塗物問屋は退散した後であり、本町通りの地所拝借人は一致しない。一方、弁天通り周辺はおおきな変化は認められない。

文久二年の復元図と元治二年の地所拝借人の位置から推定される地割を比較すると、本町通り南側(人別帳の番号一〇〇一三)や東横町(五二、五三)、西横町(五九、六〇)で若干細分化がみられるがほぼ変化がないといえる。

### (2) 「浜之真砂」

藤本実也による『開港と生糸貿易』に、篠原家(甲州屋忠右衛門)の家に残された商人録として紹介される<sup>五四</sup>。氏によれば、神奈川県職員の寺島陶蔵の名が冒頭に記載されており、明治元年九月から二年三月末の作成とみられるという。同書のリストは屋号、人名、生糸・蚕種紙の取り扱いを記すのみである。

文久二年の復元図との対応を確認すると、各町ともに前半部分は人名の対象が可能で、おおむね通りごとの記録であることが知られる。五丁目の明治元年の地所拝借人が七五人で(表6)、人数が同程度なので、とくに「同居」と注記がない者は地所拝借人であろう。人別帳によつて元治二年の地所拝借人のわかる五丁目と比較した(表8)。文久二年以来の地所拝借人は二五人で、半数弱まで減少している。人別帳との比定ができたのが一九人で、

表6 明治元年の住人構成

住所	明治元年			
	文久二年	地所拝借人	借家	人口
1丁目	39	27戸	137	男350、女294
2丁目	73	85戸	221	男618、女444
3丁目	57	59戸	226	男630、女466
4丁目	56	64戸	139	男525、女309
5丁目	62	75戸	114	男533、女265
太田町、入船町、末広町		50戸	730	男1387、女1387
新浜町、真砂町、緑町、若松町		123戸、	286	男723、女645
吉原町		280戸	26	男573、女561、遊女1396 (町並遊女529、局遊女867)

〔典拠〕『神奈川県史』資料編10、資料番号593。

通り名	番号	地所拝借人	備考	世帯番号	肩書	世帯主名	家族人数	備考	召仕人数	備考
南仲通	41	金五郎	54番参照	41-0	-					
南仲通				41-1	金五郎借家	富蔵	7		0	
南仲通				41-2	金五郎借家	熊次郎	7		0	
南仲通	42	浅次郎	55番参照	42-0	-					
南仲通				42-1	浅次郎借家	政吉	3		0	
南仲通				42-2	浅次郎借家	又吉	3		0	
南仲通	43	利兵衛	10番カ	43-0	-					
南仲通				43-1	利兵衛借家	安五郎	2		0	
南仲通				43-2	利兵衛借家	捨五郎	3		1	
南仲通				43-3	利兵衛借家	藤次郎	3		0	
南仲通	44	重作	居付き	44-1	地所拝借人		1		2	1+1(召仕娘)
南仲通				44-2	重作借家	清太郎	6		0	
南仲通				44-3	重作借家	兵五郎	3		0	
南仲通				44-4	十作借家	勇吉	2		0	
南仲通				44-5	重作借家	勘吉	2		0	
南仲通	45	松右衛門	居付き	45-1	地所拝借人		2		0	
南仲通	46			46-1	親八郎借家	幸次郎	6		0	
南仲通				46-2	親八郎借家	吉五郎	9		0	
南仲通				46-3	親八郎借家	条次郎	2		0	
南仲通				46-4	親八郎借家	磯八	2		0	
南仲通	47	源五郎	64番参照	47-0	-					
南仲通				47-1	源五郎借家	為吉	2		0	
南仲通				47-2	源五郎借家	兼吉	4	3+1(後見人)	0	
南仲通				47-3	源五郎借家	喜助	2		0	
南仲通				47-4	源五郎借家	喜三郎	4		0	
南仲通	48	巳之助	居付き	48-1	地所拝借人		6		0	
北仲通	49	辰吉	61番参照	49-0	-					
北仲通				49-1	辰吉借家	長兵衛	3	2+1(同居人)	0	
北仲通				49-2	辰吉借家	徳次郎	7	3+4(同居人家族)	0	
北仲通				49-3	辰吉借家	善蔵	2		0	
北仲通				49-4	辰吉借家	庫之助	3		0	
北仲通				49-5	辰吉借家	元竜	1		0	
北仲通	50	季太郎	不在	50-1	店支配人	吉五郎	2		0	
東横町	51	清兵衛	不在、二丁目住宅	51-1	店支配人	庄九郎	1		0	
東横町				51-2	清兵衛借家	喜兵衛	3		3	
東横町				51-3	清兵衛借家	正兵衛	2		3	
東横町				51-4	清兵衛借家	源次郎	2		0	
東横町				51-5	清兵衛借家	三次郎	1		2	
東横町				51-6	清兵衛借家	茂兵衛	2		0	
東横町				51-7	清兵衛借家	清右衛門	4		0	
東横町				51-8	清兵衛借家	徳次郎	4		0	
東横町				51-9	清兵衛借家	吉兵衛	3		0	
東横町	52	清蔵	不在	52-1	店支配人	泰助	2		2	1+1(召仕弟)
東横町				52-2	清蔵借家	勇吉	2		0	
東横町				52-3	清蔵借家	伊助	3		0	
東横町				52-4	清蔵借家	挑蔵	4		0	
東横町	53	政吉	居付き	53-1	地所拝借人		2		0	
東横町				53-2	政吉借家	勝太郎	1		2	
東横町				53-3	政吉借家	新吉	3		0	
東横町				53-4	政吉借家	源次郎	4		1	
東横町				53-5	政吉借家	安右衛門	2		1	
東横町				53-6	政吉借家	勘蔵	3		0	
東横町				53-7	政吉借家	亀吉	2		2	
東横町				53-8	政吉借家	武助	4	3+1(同居人)	0	
東横町				53-9	政吉借家	政五郎	2		3	2+1(召仕弟)
東横町	54	金五郎	居付き	54-1	地所拝借人		3		1	
東横町				54-2	金五郎借家	徳太郎	2		0	
東横町	55	浅次郎	不在	55-1	店支配人	兵吉	1		2	
東横町	56	伝右衛門	不在	56-1	- (店支配人カ)	与兵衛	1		4	
東横町	57	平兵衛	居付き	57-1	地所拝借人		1		3	
東横町	58	吉兵衛	居付き	58-1	地所拝借人		1		6	
東横町				58-2	吉兵衛借家	又七	1		3	
東横町				58-3	吉兵衛借家	長次郎	6		0	
西横町	59	茂兵衛	不在	59-1	店支配人	善蔵	1		0	
西横町	60	清兵衛	不在	60-1	店支配人	弥七	1		0	
西横町	61	辰吉	不在	61-1	店支配人	徳次郎	7	5+2(同居人夫婦)	0	
西横町				61-2	辰吉借家	政次郎	4	1+3(後見人親子)	0	
西横町				61-3	辰吉借家	よし	7	2+1(後見人)+1(弟子)	0	
西横町				61-4	辰吉借家	伊助	1		0	
西横町				61-5	辰吉借家	丑太郎	5		0	
西横町	62	太郎左衛門	17番参照	62-0	-					
西横町				62-1	太郎左衛門借家	忠兵衛	5		0	
西横町				62-2	太郎左衛門借家	清八	1		0	
西横町				62-3	太郎左衛門借家	正蔵	4		0	
西横町				62-4	太郎左衛門借家	栄助	3		0	
西横町				62-5	太郎左衛門借家	藤次郎	5		0	
西横町				62-6	太郎左衛門借家	金太郎	3		0	
西横町				62-7	太郎左衛門借家	平助	3		0	
西横町				62-8	太郎左衛門借家	万吉	2		2	
西横町	63	善之助	居付き	63-1	地所拝借人		2		1	
西横町				63-2	善之助借家	伊兵衛	2		1	
西横町	64	源五郎	不在	64-1	店支配人	国太郎	3		0	
西横町				64-2	源五郎借家	清太郎	2		1	
西横町	65	市右エ門	不在	65-1	店支配人	斎次郎	1		0	
西横町				65-2	市右エ門借家	巖春	2		0	
西横町	66	浅長吉庵	居付き	66-1	地所拝借人		4	3+1(弟子)	0	
西横町	67	忠兵衛	不在	67-1	店支配人	藤吉	2		0	
西横町				67-2	忠兵衛借家	為八	4		0	
西横町	68	太助	書役	68-1			3	1(書役)+2(定番)	0	
西横町	69	亀吉	木戸番	69-1			1		0	
西横町	70	弥助	木戸番	70-1			3		0	
西横町	71	金兵衛	木戸番	71-1			1		0	
西横町	72	金蔵	木戸番	72-1			6		0	
西横町	73	善之助	木戸番	73-1			3		0	

表 7 五丁目の世帯構成 「本町五丁目人別帳」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵) から作成。

通り名	番号	地所拝借人	備考	世帯番号	肩書	世帯主名	家族人数	備考	召仕人数	備考
本町	1	百次郎	不在	1-1	店支配人	直吉	2		1	
本町				1-2	百次郎借家	長右ヱ門	1		1	
本町	2	金兵衛	不在	2-1	店支配人	喜兵衛	1		2	
本町	3	利兵衛	居付き	3-1	地所拝借人		4		6	
本町	4	文次郎	居付き	4-1	地所拝借人		1		2	
本町	5	乙次郎	居付き	5-1	地所拝借人		2		2	
本町	6	喜兵衛	不在	6-1	店支配人	林兵衛	1		2	
本町	7	七五郎	居付き	7-1	地所拝借人		3		5	下女1
本町				7-2	七五郎借家	七蔵	3		2	下女1
本町	8	安兵衛	居付き	8-1	地所拝借人		1		2	下女1
本町	9	徳右衛門	不在	9-1	店支配人	藤次郎	2		0	
本町				9-2	間仕切同居	金右衛門	4		2	
本町	10	利兵衛	不在	10-1	店支配人	勝蔵	1		0	
本町	11	吉助	居付き	11-1	地所拝借人		5		6	下女1
本町	12	安兵衛	不在、四丁目住宅	12-1	安兵衛借家	十助	6		0	
本町				12-2	安兵衛借家	久兵衛	1		2	
本町	13	徳右ヱ門	不在	13-1	店支配人	久兵衛	5		4	
本町				13-2	徳右衛門借家	喜八	5		0	
本町	14	親八郎	不在	14-1	店支配人	良右衛門	4		0	
本町				14-2	親八郎一ノ店支配人	松次郎	1		6	
本町				14-3	親八郎二ノ店支配人	治郎吉	1		0	
本町				14-4	親八郎三ノ支配人	直助	2		3	
本町	15	吉兵衛・惣右衛門	不在	15-1	店支配人	彦七	1		1	
本町	16	平作	不在	16-1	店支配人	政七	1		9	
本町	17	太郎左衛門	不在	17-1	店支配人	庄蔵	3		2	
弁天通り	18	源助	不在	18-1	店支配人	吉太郎	3	1+2(同居人夫婦)	3	
弁天通り	19	幸助	不在	19-1	店支配人	信兵衛	1		1	
弁天通り	20	弥兵衛	不在	20-1	店支配人	勝蔵	1		3	
弁天通り				20-1	弥兵衛借家	弁蔵	4		1	
弁天通り				20-2	弥兵衛借家	伊兵衛	3		0	
弁天通り	21	善兵衛	不在	21-1	店支配人	治助	3		2	
弁天通り	22	万太夫	不在	22-1	店支配人	又兵衛	2		2	
弁天通り				22-2	万太夫借家	直蔵	4		0	
弁天通り				22-3	万太夫借家	慶次郎	2		0	
弁天通り				22-4	万太夫借家	ちよ	3	2+1(後見人)	0	
弁天通り	23	平次郎	居付き	23-1	地所拝借人		2		4	
弁天通り	24	吉兵衛	不在	24-1	店支配人	政吉	1		2	
弁天通り				24-2	吉兵衛借家	久七	2		0	
弁天通り				24-3	吉兵衛借家	とし	3	2+後見人	0	
弁天通り	25	源太郎	居付き	25-1	地所拝借人		1		3	
弁天通り				25-2	源太郎借家	庄兵衛	2		0	
弁天通り				25-3	源太郎借家	富次郎	2		0	
弁天通り				25-4	源太郎借家	富吉	1		0	
弁天通り				25-5	源太郎借家	松五郎	3		0	
弁天通り	26	清蔵	52番参照	26-0						
弁天通り				26-1	清蔵借家	秀次郎	3		0	
弁天通り				26-2	清蔵借家	忠兵衛	3		2	
弁天通り				26-3	清蔵借家	藤兵衛	5		0	
弁天通り				26-4	清蔵借家	房次郎	2		0	
弁天通り	27	吉次郎	不在	27-1	店支配人	伊助	1		0	
弁天通り				27-2	吉次郎借家	勇次郎	2	1+後見人の父	0	
弁天通り				27-3	吉次郎借家	岩五郎	2		0	
弁天通り				27-4	吉次郎借家	茂兵衛	3		0	
弁天通り				27-5	吉次郎借家	大助	7		3	
弁天通り				27-6	吉次郎借家	和助	2		0	
弁天通り				27-7	吉次郎借家	平兵衛	3		0	
弁天通り				27-8	吉次郎借家	為八	3		0	
弁天通り				27-9	吉次郎借家	茂助	5		0	
弁天通り				27-10	吉次郎借家	求馬	2		0	
弁天通り	28	伊兵衛	居付き	28-1	地所拝借人		2		2	
弁天通り				28-2	伊兵衛借家	金兵衛	1		2	1+1(召仕妻)
弁天通り				28-3	伊兵衛借家	久次郎	4		0	
弁天通り	29	磯兵衛	居付き	29-1	地所拝借人		3		1	
弁天通り	30	繁蔵	不在	30-1	店支配人	三郎兵衛	3		2	
弁天通り				30-2	繁蔵借家	松之助	2		0	
弁天通り				30-3	繁蔵借家	甚七	2		1	
弁天通り				30-4	繁蔵借家	吉太郎	2		0	
弁天通り				30-5	繁蔵借家	弥助	2		0	
弁天通り	31	弥助・渡邊禎庵	居付き	31-1	地所拝借人		6		0	
弁天通り	32	富太郎	居付き	32-1	地所拝借人		2	1+1(同居人)	7	
海岸通り	33	喜助	居付き	33-1	地所拝借人		9	8+1(同居人)	5	4+1(召仕妻)
海岸通り				33-2	喜助借家	藤助	3	2+1(同居人)	5	寄子
海岸通り				33-3	喜助借家	政吉	1		0	
海岸通り	34	善四郎	居付き	34-1	地所拝借人		2		2	
海岸通り				34-2	善四郎借家	甚七	2		0	
南仲通	35	市右衛門	65番参照	35-0	-					
南仲通				35-1	市右ヱ門借家	長兵衛	3		0	
南仲通				35-2	市右ヱ門借家	福蔵	3		0	
南仲通	36	丹蔵	居付き	36-1	地所拝借人		2		0	
南仲通	37	又右衛門	不在	37-1	店支配人	直太朗	2	1+1(後見人)	3	
南仲通	38	惣兵衛	不在	38-1	店支配人	善助	1		0	
南仲通				38-2	惣兵衛借家	安吉	4		0	
南仲通				38-3	惣兵衛借家	金蔵	1		0	
南仲通	39	兵助	居付き	39-1	地所拝借人		6	5+1(同居人)	0	
南仲通				39-2	兵助借家	喜兵衛	2		0	
南仲通				39-3	兵助借家	弥兵衛	3		0	
南仲通	40	安蔵	不在	40-1	店支配人	清助	1		0	
南仲通				40-2	安蔵借家	菊蔵	5		0	
南仲通				40-3	安蔵借家	喜代次郎	4		2	
南仲通				40-4	安蔵借家	勇次郎	2		0	
南仲通				40-5	安兵衛借家	久助	4		0	
南仲通				40-6	安蔵借家	政吉	2		0	
南仲通				40-7	安蔵借家	栄次郎	2		0	



表8 五丁目の店の変遷

濱之真砂人名		生糸	蚕種	居所推定	文久2年 地所拝借人	元治2、慶応2 人別帳	慶応～明治初頭 大港光商君	明治2年 生糸売込商の分 類(表5)と、新興の商人取調
1	浦賀屋直吉	○	○	本町			本町、塗り物	表5C群
2	山田屋喜兵衛		○	本町北		店支配人→地所拝借人(慶応二年)	本町、山田屋久兵衛、小島	
3	鈴木屋利兵衛		○	本町北		○	本町、茶店	
4	木村屋文次郎	○	○	本町北		○	本町、茶店金物	表5B群
5	常盤屋吉次郎	○	○	本町北		○	-	表5B群
6	杉本屋長次郎	○	○	本町北		慶応二年～	本町、上道具	表5B群
7	秋原屋七五郎		○	本町北		○	-	
8	山城屋彦太郎	○	○	本町北	屋号のみ		-	表5B群
9	東屋幸八			本町南	屋号のみ		-	
10	漆屋藤助、半七、惣右衛門、伊兵衛	○	○	本町南	○		本町、口店	表5A群
11	信野屋新八郎	○	○	本町南	塩谷新八郎カ			表5B群
12	信野屋孫一郎			本町南		新八郎店支配人	-	
13	愛甲屋安兵衛		○	本町南		○	-	
14	澤田屋とり後見十助			本町南		徳右衛門借家人	-	
15	福田屋吉助		○	本町南		○	-	
16	石川屋惣右衛門(徳右衛門カ)	○	○	本町南	○		-	表5B群
17	松屋吉太郎	○	○	本町			本町、売込	表5A群
18	小西屋伝蔵	○	○	南仲通			南仲通、両替	表5C群
19	相模屋浅次郎		○	東横丁	○		-	
20	越前屋港一郎			東横丁カ		徳右衛門借家人金右衛門倅		
21	和泉屋金五郎			東横丁	○		-	
22	石川屋又七			東横丁カ		吉兵衛借家人	海辺、石川屋又四郎、運送方	
23	下総屋清蔵		○	東横丁	○		-	
24	伊勢屋吉次郎		○	弁天南東角	○		-	
25	静岡屋伊兵衛(師岡屋カ)			弁天南	○		弁天、錦絵	
26	橋屋儀兵衛			弁天南	○		弁天、橋屋儀兵衛、売込	
27	石川屋盤蔵(繁蔵カ)		○	弁天南	○		-	
28	伊豆屋富太郎		○	弁天南カ		○	-	
29	立野屋源助	○	○	弁天北	○		弁天、売込	表5B群
30	江一屋嘉助	○	○	弁天			江一屋新兵衛、茶店	表5B群
31	橋本屋弥兵衛	○	○	弁天北	○		弁天、売込	表5A群
32	富屋右平	○	○				弁天、富屋源七、売込	表5C群
33	安房屋五兵衛	○			阿波屋万太夫?		-	表5B群
34	鴨井屋平次郎	○	○	弁天北		○	弁天、金物	表5B群
35	綿屋政吉	○	○	弁天北	○		弁天、売込	表5B群
36	越前屋源太郎	○	○	弁天北		○	弁天、越前屋惣兵衛、売込	表5B群
37	石炭屋福三郎	○	○	海岸南	○明石屋から改称		本町、売込	
38	松屋幸一郎						-	表5A群
39	山形屋仙吉			海岸南	○		北仲、山形屋直吉、運送方	
40	田辺屋国太郎	○	○				-	表5C群
41	伊勢屋いゝと		○	海岸南	○	善四郎妻	海辺、伊勢屋善四郎、運送方	
42	中島屋喜助			海岸南	○		海辺、運送方	
43	柏屋吉五郎			北仲	○←音次郎	季太郎店支配人	-	
44	松川屋又右衛門			南仲	○		-	
45	石川屋惣兵衛			南仲	○←石川屋又四郎		-	
46	山城屋兵助			南仲	○		-	
47	高木屋五郎兵衛(兵助方同居)						-	
48	兼村屋源次郎	○	○				-	表5B群
49	澤見屋松右衛門(深見屋カ)		○	南仲	○		本町、御用達	
50	山城屋武助		○			政吉借家人カ(53-8)	-	
51	山須唯三郎(音次郎方同居)→5番カ		○				-	
52	和泉屋六太郎		○				-	
53	杉田屋惣助						海辺、杉田屋藤兵衛、売込	
54	古木屋定吉						-	
55	谷川屋富吉						-	
56	石川屋藤次郎						-	
57	和泉屋八郎右衛門						-	
58	駿府屋閑太郎		○				-	
59	鴨屋亀吉						-	
60	越前屋勘之助		○	西横町			-	西横町
61	総川屋権五郎						-	
62	油屋満次郎						-	
63	松屋伊助			南仲			南仲、唐物	
64	近江屋安兵衛			南仲			-	南仲通、両替渡世
65	下岡屋太郎次郎						弁天ヨコ、下岡蓮杖、写真	
66	河内屋彦七						海辺、河内屋半平、御用達	
67	末廣屋宗右衛門						海辺、河内屋新兵衛、時計	
68	林屋市右衛門	○		西横町	○		-	表5B群
69	富屋源七			弁天			弁天、売込	
70	福島屋国太郎			西横町		慶応二年～	-	
71	松屋栄次郎			本町			本町、売込	本町(鉄道敷設申請)
72	源見屋松次郎(深見屋カ)			本町			-	松右衛門弟、平蔵(伊勢屋カ)
73	増田屋為吉						-	關所
74	橋屋吉太郎						-	
75	村田屋武右衛門			弁天			弁天、唐物	
76	山形屋平兵衛						弁天、売込	弁天、呉服唐物渡世
77	伊勢屋和助						-	
78	松多屋定吉(安兵衛方同居)	○	○				-	
79	鈴木屋源次郎						本町、鈴木屋吉蔵、売込	
80	伊勢屋庄助						-	
81	伊達屋四郎兵衛						本町、売込	本町

「濱之真砂」に列記された商人を別の資料から比定した(初出を網掛けで示す)。

〔典拠〕注54(濱之真砂)、27(文久二年地所拝借人)、33(人別帳)、48(大港光商君)、22(「諸留記」)を参照。

借家人や複数の店支配人のいた新八郎の店支配人とみられる人物もいる。

だが、これでも全体の半数強の人物が把握できたに過ぎない。慶応末期から明治三年までの間の作成とみられる「大港光商君」にて二人、明治二年の「諸留記」に書き出された新しい商人が四人確認される。

また、多くはないが表8の二番山田屋喜兵衛、四三番柏屋吉五郎のように、店支配人から地所拝借人へ変化している例もみられる。これは、江戸の海産物問屋榎並屋庄兵衛が、攘夷運動の高まりのなかで退店するなか、その店員であつた増田嘉兵衛と安部幸兵衛が店を継いだ事例が想起されよう<sup>五五</sup>。拝借地所、店の内部において店主が変化していたのである、柏屋のように屋号を継ぐ場合もみられ、店舗の経営の連続・不連続を評価することは難しい。

ただ、地所拝借人について、元治二年までに江戸の出店者が減少し、明治初頭までの間に約半数が入替わつたことは推測できる。文久二年から元治二年の三年間と元治二年から明治元年までの三年間の間にそれぞれ一五軒ほどが退店した。外国人との訴訟問題や出店商同士の出入りもあつたとみられ<sup>五六</sup>、文久三年から元治元年の攘夷運動の高まりや鎖港談判など、外的要因による交代もあつた。慶応期の変動は慶応二年末の大火と、生糸・蚕種輸出の不振による不景気によるものとみられる。慶応三年十一月八日には一坪につき二両ずつの上納が命ぜられるなど<sup>五七</sup>、臨時の負担もあつた。他方、戊辰戦争を避けて東京から多くの移住者があつたとされ<sup>五八</sup>、「浜之真砂」に見られた新しい商人の一部はこうした明治元年の流入者であつたと考えられる。

## 2 拝借地所のなかの長屋普請

安政六年三月から割り渡された拝借地所のなかには広大なものが多い。これらは、取得経緯において交易を支える基盤となることが期待されたと思われ、一部は実現したと考えられる。ただし、拝借地所の取得にあつて提出された敷地計画が必ずしも実現されたわけではなかった。まず、普請の規模の縮小は、佐藤屋才兵衛の地所で確認できる。

原善三郎の回顧によれば、佐藤屋は長屋状の家屋を早くから普請しており、開港前の活動の甲斐もあつて安政六年の中ごろには交易品の集荷に成功していた。佐藤屋は三百坪の地所を申請し、結果的には弁天通りから南仲通りまで至る六〇〇坪ほどの地所を取得した。ただし、土蔵の普請には着手しつても資金が不足し、現地の専左衛門からはしばらく貸蔵として利用することが報告されている<sup>五九</sup>。

こうした広い拝借地所に対し、外国奉行は空き地を取締り、上地・再配分していた。佐藤屋は、安政六年九月十八日に明地への早急な建設を命ぜられており、翌々月までの猶予を申し出た<sup>六〇</sup>。十一月二十四日には、長屋の普請を試みたものの、普請を受け負わせた浅草の大工万蔵が工事を進めないとして、出訴している。空地を埋めるための措置として長屋建設が選択されたことを確認しておきたい。

つぎに、駿府の出店商砂張屋善右衛門の日記から、敷地計画に関する記載を紹介したい<sup>六一</sup>。まず、安政六年十月七日、拝借地所の空いた五間分に遠州屋清次郎が出店することとなった。遠州屋は地所拝借人となる<sup>六二</sup>。つづいて十二月二日、出店へ座敷を建てるのが丹惣(丹波屋惣左衛門)から相談されている。同月二十六日、「城内渡辺様」の座敷を下石町大工から買い取ることが思案され、万延元年一月二十日、「御城内渡辺様古家」の解体が始まり、舛七(榊屋七郎兵衛)とともに視察のうえ、大工源助、左官、人足を差し出した。二十二日には土蔵の普請のために大工へ給金を支払っている。二月十七日、座敷の材は清水湊へ運送された。船便によつて輸送されたのであろう。閏三月の上旬には土蔵の切組が終わつたようである。

こうして、簡素な作りであつた駿府町人の店に本格的な座敷と土蔵が追加された。「城内渡辺様」とは駿府藩家臣であろうか。移築に値する建築であつたと想像される。同時に、空地への建設催促に対応して、長屋普請に着手した。

〔資料9〕(万延元年一月二十四日)

一、横浜出店支配人ニ差遣置候川辺村幾蔵儀相登り今夕着ニ付、丹惣殿方江出会、右幾造(ママ)相登り候儀者、裏地面之儀未タ普請不相掛、数度厳敷申渡候得共、等閑ニ相心得、弥来ル廿八日迄普請取懸リ無之候ハ、上地ニ可相成旨、五ヶ町月行事御呼出ニ而、其上五ヶ町一同御呼出急度被仰付候ニ付、猶餘不相成、依而態々相登候旨、談有之、直様一同談之上、裏新道之賃長家差立候積聞評、直様大工呼寄明日出立為致候積申談、八幡村熊蔵儀、明朝出立先江欠付材木等買入候様申取極

〔資料10〕(万延元年三月十七日)

一、先日横浜江差遣候熊蔵殿、昨日箱脇方遅々帰村之由、同所出店方之書状、十二日出、金七様遣之持参、家主役之儀、久兵衛義右ニ掛り限罷在、無人ニ而困入候趣、裏長家之儀、大家之名前ニ無之而者異人江商内不相成趣ニ付、如何取計候哉之旨申来ニ付、丹波屋江出会、店賃者同所振合ニ而受取、異人商之儀者逸々談事之上、名前書上等迄当方ニ而致し、売口錢五分□(与カ)取極申度相談、田中屋与兵衛殿江

者（七）談候積、大家役之儀、太方当夜野崎氏江談候積

佐藤屋と同様に、早急な普請の命令への対応として、長屋建設が選択されたことが理解されよう。資料10は、「家主役」と「大家」が混在しているが、おそらく「大家」とは地所拝借人や店支配人のことで、長屋の借家人では外国人との交易に参加する権利が得られないということであろう。名義を貸して五分の口銭を収受しようと思案している。

以上のように、中規模から大規模の拝借地所において、空地の充填策として長屋普請が選択されたことがわかる。多数の借家人を受け入れたことが想定されよう。また、駿府町人の例に見られたとおり、借家人の外国交易が名義貸しのかたちで早くからおこなわれたことを示している。拝借地所に付随した営業権の分配ということができらるだろう。

### 3 召仕と借家人

図3と表7に整理した元治二年「五丁目人別帳」を利用して拝借地所内部の世帯構成をみていこう。まず、本町通りの地所は、地所拝借人や店支配人の家族、召使やその家族からなる場合が多い（表7）。少数の貸家もみられるが、単一の店として機能していた場合も多い。

地所拝借人の世帯の構成をみると、十人近い召仕を抱える店は伊勢屋平作（九人、一番）や弁天通り富太郎（七人、三番）、石炭屋吉兵衛（六人、五八一番）、などのごく少数に限られ、多くは数人程度である。多数の奉公人を抱える大店の姿は読み取れない。なお、甲州屋忠右衛門は、文久三年二月の段階で、息子直次郎夫婦と数人の雇人によって店を切り盛りしていた<sup>六三</sup>。前章にて、中居屋が奉公人六〇人余りを横浜へ連れていく予定を報告しているのを見たが（第三章、表11）、巨大な生糸売込商であれば大所帯であったのだろうか。この点については、巨大な売込商がいなかった五丁目の人別帳の限界であろう。

また、地所拝借人の代理たる店支配人の世帯が、必ずしも大きな人員によって構成されてはいない。たとえば一〇番の利兵衛は、店支配人が一名いるだけである。南仲通り側の世帯（四三番）と同一の地所とみられ、貸家経営をしていたと推測される。徳右衛門（石川屋、横浜村名主）の店支配人久兵衛も夫婦のみの世帯である（九一番）。南仲通り安蔵の店支配人清助（四〇一番）、弁天通り伊勢屋吉次郎の店支配人の伊助（二七一番）も類例である。

つぎに、南仲通りの世帯として塩谷新八郎の拝借地所の世帯が登録されている例（五四

番）や、北仲通りの文次郎の借家人（四二番）は一筆の地所のなかで、本町通りの逆側に立地したと推測される。対して、本町通り側の一番から一八番までの地所の借家人で、召仕を抱えていたような世帯は、表店を構えていた可能性が高い（一・二番の長右衛門、七・二番の七蔵など）。前章にてみた福井藩の産物売買の店が借家人の金右衛門（九二番）と推定されることも、傍証となつていると考える（第三章表1・P）。運上所脇道（東横町）も、運上所の正面で波止場へつながるメインストリートとして、多くの借家人の世帯に召仕が抱えられている。砂張屋善右衛門の日記にみられた名義貸しによる営業（外国交易）が表店のかたちによってなされたと推定できるのではないか。

そして、借家人のなかには、弁天通り角地の伊勢屋吉次郎借家の大助（二七・五番、夫婦、娘二人、息子夫婦、弟の計七人十召仕三人）や、運上所脇通りの高須屋清兵衛借家の喜兵衛（五一・二番、夫婦、娘十召仕三人）など家族の人員もさることながら、召仕を複数人抱えている。小規模な世帯の地所拝借人や店支配人の店と遜色のない規模であり、さきにみた一名だけの店と比べれば、大きく凌駕しているとも評しうる。

拝借地所には複数世帯が含まれており、名義貸しのもとで地所拝借人と商店が即応しなくなつていたと考えられる。第三章にて、複数の表店を抱える拝借地所の配置計画に言及したが、元治二年の段階から推定すれば、その表店が、必ずしも地所拝借人の営業ではなく、店賃の収入源でしかなくなつてきていることも推定できるのではなからうか。また、表8の一・二番の信野屋孫一郎、一四番の澤田屋とり後見十助、越前屋港一郎、二二番石川屋又七（石川屋又四郎の店支配人）は、人別帳において借家人であり、明治一、二年ごろまでに地所拝借人となつて独立したことを示していると思われる。信野屋孫一郎と信野屋新八郎、石川屋又七と石川屋又四郎など、共通する屋号から考えれば完全な独立に至つていとは断定できないが、借家人層の上昇を示していると考えられる。

むしろ、夫婦や核家族などの小規模な世帯の借家人も多く、とくに弁天通りや南仲通りに目立つ。たとえば万延元年、海岸通り四丁目の高德屋半左衛門の拝借地所のなかには石工や仕立て商の者が居住した<sup>六四</sup>。また、西川武臣は常清寺の過去帳から職人と、水菓子や料理屋のような飲食関係の者の存在を明らかにしている<sup>六五</sup>。夫婦や核家族の世帯は、こうした小規模な経営での小売りや職人であつたと想像される。

なお、人別帳に記入された借家人の渡世は、木戸番や書役、三味線師匠と弟子、車力頭・軽子頭および寄子とごく一部である。借家人の出身地は多様であるが、江戸、神奈川が多く、秩父や埼玉郡、内湾の村々も多い。信州は生糸交易との関係であろうか。五丁目の町

役人小野村（現長野県上伊那郡辰野町）兵助との関係もあろう。四丁目の駿府町人、五丁目の下田町人の出店を反映してか、駿州・豆州の出身者も多い。

召使の請け人は、店支配人や借家人などの世帯主と同じ請け人になっている者と、個々の召使が異なる請け人になっている者が認められる。前者は店全体でまとまった移住、後者は横浜開港場での雇用の結果と推測される。ただ、各地所を横断するような幹旋業者の存在は、人別帳の請け人の記載からはいくかがうことができない。

江戸麹町谷町家主で四番組人宿の彦四郎が横浜での人宿開業の許可を得て地所を取得したようだが<sup>六六</sup>、こうした業者の影響は、「本町」ともよばれる横浜町部分において薄いものであったのだろうか。

借家人の世帯数に関する本町通りと弁天通りの性格の差は、さらに場末にあたる太田町においてはより顕著になったと推測される。明治元年の各町の住人構成を表6で確認したとおり、横浜町一から五丁目に比して太田町・入船町・末広町の借家人の比率は、拝借人五〇人に比して借家人七三〇人と圧倒的多数である。二七七四人という人口も注目されよう。同様に、吉原町も、拝借人二八〇人に対して人口二五三〇人、うち遊女一三九六人という構成であった。太田町は横浜町と同程度に早くからの市街地で、家主や町役人が共通して存在し、吉原町も古くからある港崎町の構成を残していると考えられるが、住人構成は大きく異なるものであったといえるだろう。

#### 4 流入民・人宿・人足方

新都市横浜開港場は各所からの移住人によって成立した都市であった。そこには地所拝借人や店を営業する借家人よりも流動的な都市住民もいたことが推測される。まず、元治二年の根津宮永町の地借定七らによる奉公人口入・日雇木賃宿の開業請願書を見たい。

〔資料11〕<sup>六七</sup>

（朱書）丑正月廿七日、田中陽吉を以相渡、翌廿八日一ト通相糺候処、訴状面不行届之儀有之、訴状下ケ相願候事

乍恐以書付御訴訟奉申上候

一、根津宮永町徳兵衛地借定七・同町竹蔵地借平蔵事平八、右兩人奉申上候、横浜表御開港二付、繁多之地二相成候二付、奉公人・車力・輕子・日雇稼之もの諸国より多分二入込候、中二者人別外之もの多分有之、彼是間違等之儀も有之、混雜致候儀も及承、且右之もの共止宿所二差支、且者病氣等二而難渋仕候者俟有之候様子、承知

仕候二付、私共儀、彼御地江出稼仕奉公人口入、日雇木賃宿仕度奉存候、然ル上者右稼之もの共生国・出所・年齢等駈与取調、帳面江印（しるし）カ）置、忝人別腰札相渡置稼先二而何様之儀御座候共、私共引受、主人迷惑不相成様仕、自然御鑿穿（ママ「穿鑿」カ）もの御座候節々、即刻取調可申上候、且又右稼之もの共、病氣等之節者、厚世話いたし遣り度、且一ヶ町壹兩人宛辻番人差置、右稼人共取締為致候者勿論、怪敷ものが見候ハ、早速御注進可申上候、右渡世御差免被成下置候上者、為御冥加非常之節者人足百人宛差出、相応之御用被仰付度奉存候、何卒以御慈悲横浜表二而相当之御地所拝借被仰付、右渡世御差免被成下置候様、偏二奉願上候、尤異人運送之儀者、人足方方御願立相成、夫々取締相附居候二付、右江差障不申様可仕候間、御憐慰之御沙汰奉願上候、以上

前書之通其御筋江奉願上度奉存候間、何卒以御慈悲御添翰被成下置候様、偏二奉願上候、以上

元治二丑年正月廿六日

根津宮永町

徳兵衛地借

願人 定七 印

家主

徳兵衛 印

同町

竹蔵地借

願人 平八 印

家主 竹蔵 印

御奉行所様

冒頭にあるとおりこの請願は、「訴状面不行届之儀」のために取り下げとなっているが、当時の事情の一端は伝えてみるとみて検討したい。

諸国から奉公人・輕子・車力・日雇稼の者が多数流入し、人別外の者や止宿先のない者もいたことが報告されている。輕子や車力は横浜開港場の荷役を担ったことであろう。生糸を主とした大量の物資流通が、各地で流動化しつつあった賃金稼ぎの人びとを吸着させたと理解される。横浜開港場の日雇い労働者が、太田町のような場末の借家人層としてだけではなく、人別帳には表れない人びととして本町部分にも存在した可能性を示している。また、外国人荷物運送については人足方が取り締まることになっているという。

交易都市に不可欠な荷役労働のほか、断続的な普請も流入に影響したと推測される。安政六年七月には、横浜から神奈川宿までの一帯で主だった職人の名前・家主・町所を書き出し提出するよう回状があった<sup>六八</sup>。開港場建設後の御普請の事例として、万延元年の居留地を囲む堀川普請（横浜元町四郎右衛門の統括）や<sup>六九</sup>、慶応元年の外国人調練場普請（弁天通り二丁目四郎右衛門、新石町壺丁目（清水）喜助の落札）が挙げられる<sup>七〇</sup>。安政六年七月の回状からは、後々の建設事業のために職人を把握しようとする意図が読み取れるだろう。

また、慶応二年の大火後の条約にもとづく都市改造と居留地の拡大、運上所周辺の町と遊廓の移転は、外国側からの普請催促をうけて完成が急がれた事業であった。慶応三年二月には戸部役所（神奈川奉行所）より下記のような回状があった。

〔資料12〕<sup>七一</sup>

太田屋新田沼地并吉田町地内港崎町代地埋立、横浜海岸築出等、いつも差急候御普請二候処、諸場所一時之儀ニ而請負人共遠近在町より土方稼之もの相雇候得共、何分人数引足兼、御普請出来日限二拘り候間、其村町土方稼之者ハ勿論、右稼二無之者ニ而も土持等出来候者ハ、農業手透之折柄ニも候間、御普請場所江罷出、請負人共江相対いたし相当之賃銭請取相稼候様可致、右は御普請抄取方而已ニハ無之、身薄之もの共一廉之助成ニも相成候儀ニ付、村役人共厚世話可致、且海岸村々船持共之儀、荷船ハ勿論何船ニ而も土運送ニ可用立、船所持之ものハ御普請場所江相廻し、是又相当之賃銭請取相稼候様可致候、此触書早々順達、從留可相返もの也

二月六日

戸部御役所

急ぎの事業であるにもかかわらず進捗が思わしくなく、請負人が遠近の町から土方稼ぎの者を雇っているものの人数が足りないとして、近隣の町村に対し、土方稼ぎや土運びなどができる者で十分なので、村役人が斡旋するよう布達されている。西川武臣は、台場の普請に横浜周辺の村落から多数の出稼ぎの者が参入したことを指摘したが<sup>七二</sup>、対外的な事業であった慶応期の普請は、よりその傾向を強め、周辺町村に存在した賃金稼ぎの人びとを横浜開港場へと強く編入する可能性をもったといえる。すくなくとも横浜開港場は、その拡大過程において周辺からの流入を不可欠としたのである。そして、明治初頭には、職人・日雇い稼ぎの者への鑑札交付がなされた<sup>七三</sup>。当時は鉄道敷設や吉田新田の埋め立て、掘割の開削など、多くの事業が展開しつつあったことと関係するだろう。

最後に、明治初頭の教育所と流浪する人びとへの対策を取り上げたい<sup>七四</sup>。

明治二年、昨年の米価高騰をうけた龐大な生活困窮者の援助に関して、「教育所」が設けられ、表9にみられる有力売込商を中心とした都市の有力者が出資をおこなった。また、町会所役人は、給金の前借を元手とした穀類の購入を請願し、許可を受けている<sup>七五</sup>。

幕末における武州一揆や打ちこわしのような騒動と、横浜開港場の関係はこれまで指摘されることはなく、本家の両替店が打ちこわしの対象となった生糸売込商吉村屋幸兵衛は、実家への見舞いをおこない休業を勧め、慶応四年の書簡では横浜の泰平を報告している<sup>七六</sup>。

教育所の記録と、その後たびたびおこなわれた交易商による救恤は、横浜開港場が幕末維新期における都市騒擾とは無縁ではなかったことを示す。むしろ打ちこわしの対象に浜商人が企まれていたことに対し、買付けのうえで在方と強い関係をもった横浜売込商が無関心であったとは考え難いのではないか。

その後、明治五年に米商ウエンリート（ヴァンリード）によってハワイ島へ回送された人足が帰還した<sup>七七</sup>。神奈川県による彼らの処遇として、有罪判決の刑期を終えた者や、零落した流民とともに、鈴村要蔵へと一任することが決定され、教育所は廃止された。しかし翌年に鈴村要蔵から支給金が不足しているとの連絡をうけ、鈴村に任せるのを断念し、教育所の再開と町費による運営が決定されたのであった。

外国人荷物の輸送を担う一方、御用人足の供出や火消しの頭をつとめた人足方の鈴村要蔵へ、横浜開港場の龐大な困窮者の統括が、一時的とはいえ担当させられていた点は興味深い。交易都市を運営・拡大するうえで不可避の労働需要は多くの流入民を呼び寄せ、そして、人足方を核として、開港場の下層社会が編成されていたことを示唆している。

## 五 結語

生糸売込商の例に見られたように都市における同業者の結合の単位は町であった。そして、万延期に町触がだされ、出店商による議定・提案をへて完成した売込の仕法は、きわめて大きな格差を内包していた交易商に一定の秩序を付し、災害の際に救恤をも行うことが考案されていたことは重要であると考ええる。仕法の策定にあたって商人惣代として神奈川奉行へ掛け合ったのは、豪農出身の有力な生糸売込商というよりは、むしろ都市商人、御用商人の系譜の者であった。

そして、生糸売込商仲間にも荷渡所仕法の脈絡が続いたのである。微弱ながらも町会所

を補完する惣町規模の共同組織としての性格を、売込商の連合と生糸商の仲間が帯びるに至っていることを示しているのではないか。

一方、生糸売込商にとつての惣町規模の仲間はいかなる意味を持ったのか。荷渡所に関する伺いのなかで、「惣商人」の存意であることが主張されている点に注目したい(表4、八条目)。在方との強固な関係を持った面々を主体とした生糸交易の成功者と、組合には加入しつても浮き沈みをくりかえす多くの中小売込商という構図は、明治初頭まで継続した。百軒をこえる、実質的には売込をおこなっていない構成員を含む仲間は、惣町規模の集団として、仲間外の商人を排除して貿易を独占する正当性を得て、かつ江戸問屋や外国人荷主に対する立場を固めるための手段となつたのではなからうか。

仲間内の大きな格差の象徴としての生糸売込の専門者の減少、つまり余業の展開は、資料5にみた店支配人と拝借地所管理者、町政の担い手が分離していく状況と平行して起こっていた。有力な売込商は地所拝借人かつ経営者の立場を保持したと思われるが、交易都市横浜における、地所拝借人・店支配人と実際の交易者のずれは拡大していったと考えられる。

そして、出店・出稼ぎ希望者の増加と神奈川奉行による土地再配分の圧力を背景に、地所拝借人のなかには借家経営や営業権の分配へと傾斜する者もいたと推測される。この点は今後の調査が必要であるが、都市建設時にみられた店経営者としての地所拝借人が増加し、拡大する都市に土地経営から加担するようになっていく過程もあつたのではないだろうか。そこには人別帳にみられた核家族ほどの小経営の店とともに、召

表9 明治二年の救恤者

住所	人名	屋号比定	金額	営業内容	典拠(屋号と営業内容)
本町4 西横町	橋本弁蔵	橋本屋	100 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	上原四郎右衛門	郡内屋	200 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	原善三郎	亀屋	200 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	金子平兵衛	小松屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	堀越源七	富屋	150 両	生糸売込商	生糸改会社
	茂木総兵衛	野沢屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	吉田幸兵衛	吉村屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	鈴木保兵衛	不明	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
	三井八郎右衛門	越後屋	300 両		生糸改会社(社長)
	北仲通2 清吉、弁天通4 幾五郎、太田町5 松五郎、本町5 横町相模屋弥吉、弁天通2 梶三郎、太田町4 大三郎	不明	30 両		
本町1	中沢五兵衛後見、重兵衛	中沢屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
本町2	増田嘉兵衛代、治兵衛	増田屋	100 両	砂糖、石油(1)、生糸(2)	(1)明治三年商人録 (2)「諸留記」㉔群
弁天通3	鉄太郎	北国屋	100 両	菜種(1)、米穀(2)	北国屋又兵衛(もとは弁天通り三丁目遠州屋嘉兵衛地借)と同店とみられる。(1)「大港光商君」、(2)明治三年商人録
本町2	岡本伝右衛門	小橋屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
本町4	西村七右衛門	肥前屋	150 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
弁天通4	榎本六助	大国屋	150 両	呉服	「大港光商君」
弁天通5	立川磯兵衛	橘屋	100 両	陶器売込カ	明治三年商人録には、弁天五丁目陶器売込の橘屋儀兵衛、「大港光商君」には弁天五丁目に売込の橘屋儀兵衛。
弁天通5	藤井清吉	綿屋	100 両	洋物引取	明治三年商人録
入舟町	太郎右衛門	宝田屋	100 両	材木	「大港光商君」
太田町2	鉄之助	万屋	50 両	開発人→湊町波止場運送方	湊町波止場開発は斎藤多喜夫論文(注52)。湊町波止場の運送方は、第5章の表1参照。
入舟町	高島嘉右衛門		100 両	材木、普請	「大港光商君」
本町3	田中正三郎	関屋カ	50 両	茶商	「大港光商君」
本町3	奈賀川茂兵衛	駿河屋カ	50 両	茶商	「大港光商君」
本町4	岡野利兵衛	岡野屋	50 両	茶商、海産物	「大港光商君」、明治三年商人録
本町3	手塚清五郎	芝屋	50 両	生糸売込商	「諸留記」㉔群
北仲通4	山本宗次郎	江一屋	50 両	茶商	「大港光商君」
北仲通4	小倉藤兵衛	伊勢屋	50 両	茶商	「大港光商君」
北仲通3	森谷半次郎	森屋	50 両	茶・金物	「大港光商君」
海辺通4	安達重助	駿河屋	50 両	砂糖	「大港光商君」
海辺通4	中条順之助		100 両	茶商	明治14年の商人録
本町4	杉村甚三郎	杉村屋	100 両	織物、唐糸、金巾引取商	明治14年の商人録 売込、とされるが、「諸留記」では㉔群。
本町2	正三郎	敷島屋	100 両	生糸売込商	明治三年商人録
尾上町	瀬三郎	但馬屋	100 両	建具	「大港光商君」
本町5	松右衛門	深見屋	100 両	御用達	「大港光商君」
本町5	渡辺福三郎後見太右衛門	石炭屋	200 両	石炭、海産物、生糸	「諸留記」㉔群
東横丁4	平間屋平五郎	-	沢庵50 樽	運送方	「大港光商君」(第5章も参照。)

[典拠]松右衛門まで:『神奈川県史料』第2巻(注74)、渡辺福三郎と平間屋平五郎:「諸留記」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵)。

右列の各資料は、「諸留記」:横浜開港資料館所蔵、小野忠秋家文書の生糸売込商書上げ(表5)、生糸改会社:『横浜市史』第三巻上、明治3年商人録:藤本実也『開港と生糸貿易』中巻に収録(199頁～)、「大港光商君」:注48参照、明治14年の商人録:横山錦柵編『横浜商人録』大日本商人録社、1881年。

仕を複数人抱える借家人も入り込み、新しい売込商の予備軍となった。それと同時に、横浜では殊に重要であつた荷役と普請事業へ引き寄せられた膨大な「日用」層が長屋に受け入れられたのである（図4）。

交易都市の運営と拡大を実現するために不可欠な「日用」層は、各丁の鳶頭、また、「運送方」をはじめとする一部の人足請負業者によって掌握されたと考えられる。人足方の鈴村要蔵に依拠した編成を脱しつつも、復活された救育所は最終的には町費によって運営された。町費とは、中心市街地の地所拝借人による町入用の出資と、売込歩合金に他ならない。そして明治二年にみられた町会所役人らによる救恤は、都市形成から約十年のうちに会得された惣町としての共同性が維新期の危機にあたつて発揮されたと評価できる一方で、その完遂には、別途売込商たちによる巨額の出金を要するのであった。地所拝借人の変質の末に形成された都市社会が、一部の売込商の巨大な利益の余沢によってようやく維持されていったといえるだろう。

開港から明治初頭までの町と売込商の仲間、地所拝借人の変遷の過程は、町中・交易商としての地所拝借人が変質し、うごめく売込商の群れのなかで一握りの成功者が、おそろく地所拝借人＝交易商の対応を維持しつつ上昇していく過程として理解されよう。ただし、売込商の上昇が、都市形成の段階から巨大な拝借地所としてその兆しを見せつつも、すぐには確立に至らずに、上述の通り惣町の論理に依拠する形で仲間のなかで達成されたことを確認しておきたい。

そして、安定した層と浮き沈みのある層を内包しながらも惣町規模を保った仲間から、有力な、都市のなかでは名望家となりうるような売込商だけの結合が試みられるのが、大蔵省官僚の介入をへた明治六年の生系改会社の創設であつたと現段階では展望しておく。その背景には、慶応三年の三井組による御用金貸付を経た、売込商による自立的な仕入れ体制の形成が想定されるだろう<sup>74</sup>。亀屋善三郎が明治三年には産地への貸付を行っている事実が<sup>75</sup>、都市内の仲間の変動と連動しているように思われるのである。

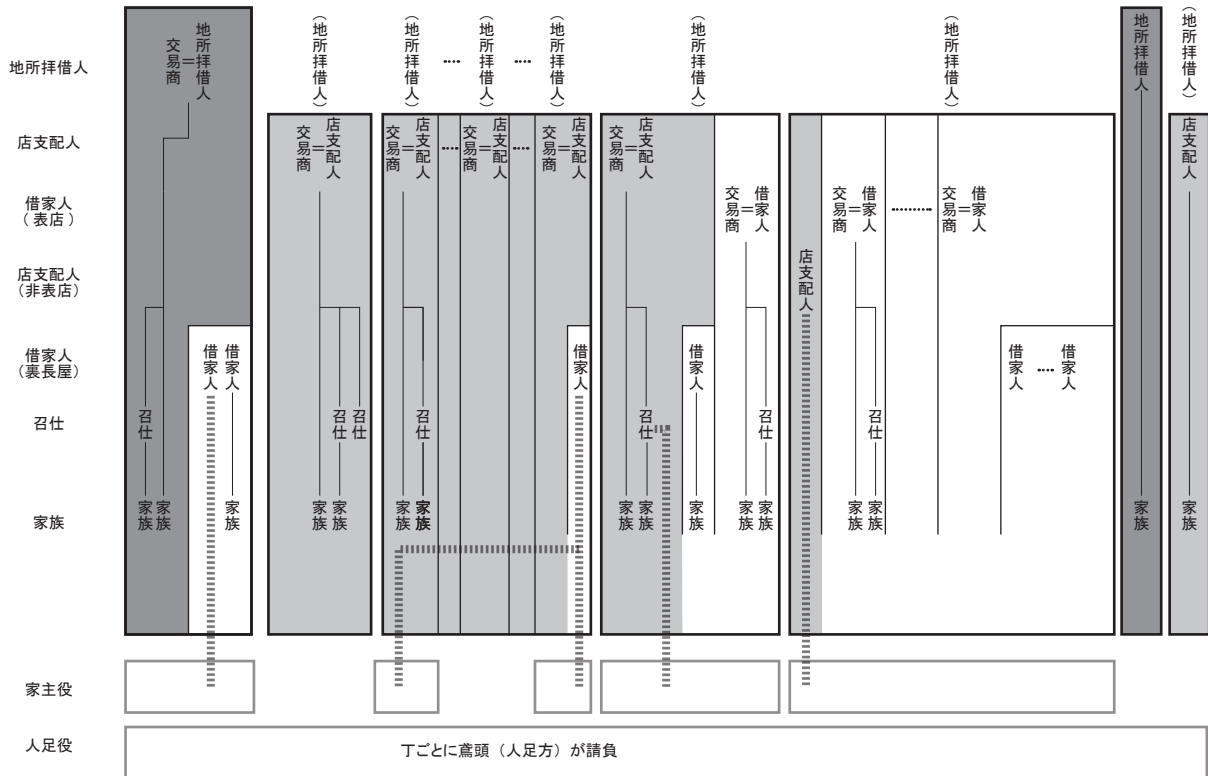


図4 拝借地所の諸形態

一 吉田伸之「伝統都市の終焉」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座7 近世の解体』東京大学出版会、二〇〇五年。

二 『横浜市史』第二巻、第三章一節。

三 西川武臣「幕末から明治初年の横浜市街地と町政」『駒沢史学』第四六号、一九九三年十二月。

四 佐藤孝「地域社会と新聞―幕末開港場の新聞を中心として」『シリーズ日本近現代史 構造と変動Ⅰ 維新変革と近代日本』岩波書店、一九九三年。

五 石井寛治『近代日本とイギリス資本―ジャーディン・マセソン商会を中心に―』東京大学出版会、一九八四年。第一章三節「輸出貿易の展開、とくに注一七四、一八一」。

六 西川武臣「幕末明治の国際市場と日本 生糸貿易と横浜」雄山閣、一九九七年（第二章「生糸売込商体制の成立過程」）。

七 西川武臣「開港直後の横浜と貿易―三井横浜店の手紙から―」『横浜開港資料館紀要』第七号、一九八九年三月。原資料は「永書」（三井文庫所蔵）。

八 吉田伸之『近世巨大都市の社会構造』東京大学出版会、一九九一年（第一部一章）。

九 石塚裕道「横浜居留地像の形成」横浜開港資料館・横浜居留地研究会編『横浜居留地と異文化交流 一九世紀後半の国際都市を読む』山川出版社、一九九六年

一〇 安政六年六月「御免貿易場明細書」（五味文庫、請求記号一・七四、横浜開港資料館所蔵）。

一一 万延元年五月「御祭礼日記」（佐藤英雄家文書、箱②・106、相模原市立博物館所蔵）。

一二 「神奈川横濱 太平餘楽」（横浜市史編纂掛編『開港七十年記念 横浜史料』（一九二八年）、資料番号四二）。

一三 万延元年「大石善言日記」（葵文庫、請求記号289.46特、静岡県立図書館所蔵）。

一四 この点は、江戸における「家守の町中」の展開のなかで、家守たちがもともとの町の構成員であった町人の進退を脱していった過程を提示した塚田孝の論考が想起される（塚田孝「下層民の世界―身分的周縁」の視点から」『近世身分制と周縁社会』東京大学出版会、一九九七年）。

一五 前掲書注二。第三章三節「外国人殺傷の頻発と警備体制の強化」。

一六 塩谷正久家文書（群馬県立公文書館所蔵、請求番号 PFD208.13/165）。

一七 神奈川県図書館協会郷土資料集成編纂委員会編『未刊横浜開港史料』（神奈川県図書館協会、一九六〇年）に所収。

一八 山田忠発行『横浜近代史辞典（改題横浜社会辞典）』（湘南堂書店、一九八六年）に所収。

一九 『神奈川県史料』第一巻（神奈川県立図書館編・発行、一九六五年）および、「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。江戸の為頭については、吉田伸之『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、一九九八年（第八章「巨大都市における身分と職分」）。

二〇 「保土ヶ谷宿本陣記録文書」十六（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。詳しくは次章で検討する。

二一 『神奈川県史』資料編一〇に所収の、万延元年十二月「神奈川奉行所職員録」（資料番号三八八）。

二二 ともに「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。

二三 前掲書注一八。文久二年「珍事五ヶ国横浜はなし」への編者（日比野重郎）の補足説明（三七四頁）

二四 各町為頭の「人足方」頭取としての同質性と、政吉・要蔵による外国人荷物運送の独占的な請負のギャップは、彼らの持ち場が町会所や元町、居留地である点、また、外国船への艀輸送や旅客輸送、密貿易の取り締まりを担った水主方への賃金供出を担っている点によるものであると考えられる（前掲資料注二〇、また、第五章を参照）。

二五 万延元年四月―二年一月「五品江戸回送令につき横浜商人願書・申上書」『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四〇二。『横浜市史』資料編一（一九六〇年）、「外国貿易諸色一件」。

二六 「横浜市史」資料編一（資料番号は文久期・生糸横浜輸出調の二六番、慶応期：軽部家文書の一巻、明治二年の人数は「諸留記」（注二二参照）。

二七 「御拝借地所并願済渡世合寫」（山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書 6、7冊目に所収（県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵）から、万延元年までに何らかの渡世を許可された者を数えた。

二八 『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四〇一。

二九 前掲論文注七。

三〇 万延元年十月「五ヶ町議定連判帳写」『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四〇四）。

三一 万延元年十月「願書之下写」『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四〇五）。

三二 前掲注二七。

三三 元治二年三月「本町五丁目人別帳」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。

三四 前掲書注五。原資料は、前掲資料（注二二）。

三五 「諸色取扱所取建方之儀二付再願書写」（佐藤英雄家文書、箱③・106、相模原市立博物館所蔵）。

三六 「横浜市史」第三巻下、一九六三年（第二編一章二節）。

三七 『横浜市史 資料編』第一巻。「規定連印之事」（篠原家文書、資料番号二二）。年代について本書は元治元年の七月とするが、前掲書籍注五にて、石井寛治が五品回送令撤回（元治元年九月）以降のものとは推定している。

三八 前掲書注六。

三九 高村直助「幕末・明治前期における売込商石炭屋の経営形態」『横浜市史』補巻、一九八二年。

四〇 「乍恐謹奉上書候」（木内家文書、請求記号 1579-3、茨城県立歴史館所蔵。長文だが、前半には漆や楮の効率的な栽培方法とその経済的な効能についての記述がなされる。年代は、朱書きで「未

二月」と追記されることから推定した。

四一 長崎での輸入貿易の決済は、俵物（と諸品）や大坂銅座から回送される棹銅によっていたが、安政四年の日蘭追加条約によって、外国人向けの銀札発行が決定され、大坂銅座からは多額の銀札代銀が送られていたという（賀川隆行『江戸幕府御用金の研究』法政大学出版局、二〇〇二年、第五章三節）。資料中で言及される大坂町人の日延べ願は確認できておらず詳しくは今後の課題としたいが、長崎貿易での貿易量や決済方法の変化に対し、正金の確保が追いつかない状況に至っていたと推定しておく。

四二 前掲書注五。

四三 『横浜市史』第三巻上、一九六一年（第一編一章二節一項）

- 四四 「諸留記」(注二参照)。
- 四五 「諸留記」(同右)、明治三年「門屋幸之助書簡」(大隈重信文書、請求記号イ14 B1015、早稲田大学図書館所蔵。後者については、明治二年に鉄道の敷設と営業を請願した旧士族の門屋らとの共同である。慶応末期から明治初頭にかけての横浜では、こうした旧藩士や外国方の出身者が新規規を盛んにおこなったとみられる)。
- 四六 「神奈川県史料」第二巻(一九六五年)、「賑恤」。また、同書二巻の「賞与」の部。
- 四七 斎藤多喜夫「開港時の横浜商人―御貿易場瓦版から―」『横浜開港資料館紀要』第二〇号、二〇〇二年三月。
- 四八 横浜市史編纂掛編『開港七十年記念 横浜史料』(一九二八年)に収録。
- 四九 石井孝編『甲州屋文書』有隣堂、一九八四年。
- 五〇 前掲論文注三九。
- 五一 「市中取締書留」(旧幕引継書類、国立国会図書館所蔵)。第八章にて検討する(資料6)。
- 五二 文久二年は同右。明治元年は、『神奈川県史』資料編一〇、資料番号五九三。明治元年の人口構成については、斎藤多喜夫がすでに言及している(斎藤多喜夫「幕末期横浜の都市形成と太田町―太田屋新田西部地区造成関係資料を中心に―」『横浜開港資料館紀要』第四号、一九八六年三月)。
- 五三 前掲資料注三三。同家資料に慶応二年の人別帳が含まれる。
- 五四 藤本実也「開港と生糸貿易」中巻(名著出版(一九八七年)、一九三七年刊行の書籍の復刻。一三三から一四九頁)。
- 五五 同右(一九〇頁)。
- 五六 『群馬県史』資料編一一(近世三)、資料番号三二六。加部安左衛門の争論。
- 五七 前掲書注四九(一三四頁)。「御拝借地所并御願済渡世併寫」に登録された拝借地所は太田町や入船町、港崎町を含まない中央部分のみでも、合計三万五千坪ほどであり、徴収が成功すれば七万両ほどになる。
- 五八 前掲論文注四。
- 五九 佐藤英雄家文書、相模原市立博物館所蔵(箱⑦-1-12)。
- 六〇 「御触書并願書扣」(「神奈川県立博物館所蔵資料」一(県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵)。三分冊のうちの二冊目)。
- 六一 「大石善言日記」(葵文庫、静岡県立図書館所蔵)。安政六年・万延元年分。
- 六二 前掲資料注二七。また、第三章の表2を参照。
- 六三 前掲書注四九(四七頁九八番)。
- 六四 「検使書類」(五味文庫、請求記号一・二九、横浜開港資料館所蔵)。
- 六五 西川武臣「幕末の横浜市街地の住民構造」『横浜開港資料館紀要』第一四号、一九九六年三月。
- 六六 「市中取締書留」慶応十一ノ二十一、三分冊ノ二(旧幕引継書類、請求記号八二二・五、国立国会図書館所蔵)。
- 六七 「市中取締書留」文久十一ノ十四、分冊ノ二(旧幕引継書類、国立国会図書館所蔵)。

- 六八 安政四年「御用留」(神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。本冊は安政四年の記事によって構成されるが、末尾に開港以降の記事が収録され、墨で打ち消されている。「未七月」とあることから、安政六年七月の回状であろう。おそらく消し字のうえ、安政六年の御用留に転写されたのだろうが、石井家文書のなかには残存していない。
- 六九 塩谷正久家文書(群馬県立公文書館所蔵、請求番号 PFD208.13/166)。
- 七〇 「市中取締書留」元治十一ノ十七、分冊ノ一(旧幕引継書類、国立国会図書館所蔵)。
- 七一 「生麦村御用留」第三巻(横浜市文化財調査報告書第十四輯の三、一九八九年)、資料番号二〇。神奈川宿成仏寺門前の藤井家の文書にも同様の触れが確認される。
- 七二 西川武臣「近代日本の社会と交通 横浜開港と交通の近代化」日本経済評論社、二〇〇四年。
- 七三 「諸留記」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵)。第五章資料5を参照。
- 七四 「神奈川県史料」第二巻、「賑恤」。本件は西川武臣がすでに簡単な言及をしている(明治初年の神奈川県の無宿人対策)『横浜開港資料館紀要』第三号、一九八五年三月)。
- 七五 「諸留記」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵)。
- 七六 横浜開港資料館編『古村屋幸兵衛書簡 復刻版』(一九八九年)、および、前掲論文注四。
- 七七 事件のいきさつは、旧幕期に許可を得たとして、横浜出店商のウエンリットがハワイの開拓のために横浜の人足一五〇人を連れ去ったもので、ハワイとの国交や渡航許可に関して明治政府からの合意がないまま出航したことから外交問題となった。その後、帰還を希望する代表者よりの書簡もあり、政府が派遣した使節にしたがつて帰還を望む四十人が連れ帰られた(「米国人我國民ヲ英船ニ搭シテ布哇島ニ送ル」(太政類典)第一編(慶応三年〜明治四年) 第五四巻、外国交際、外国贈答、請求記号太 00054100)。松永秀夫によればウエンリットの名は Eugene Miller VanReed である(松永秀夫「明治維新時の横浜―江戸(東京) 通船の消長―稲川丸、シテー・オブ・エド、弘明丸の三船を中心に―」『海事史研究』第五〇号、一九九三年六月)。
- 七八 松本四郎「維新変革期における経済的集中」『歴史学研究』第三二九号、一九六七年十月。また、その改稿の松本四郎「市場構造の変化と商業金融―幕藩制の経済構造の瓦解と転成の道筋」(『幕末維新期の都市と経済』倉書房、二〇〇七年)。
- 七九 『横浜市史』第三上巻、(第二編二章一節)。



## 第五章 横浜開港場の波止場

### — 移行期の港湾インフラと物流 —

#### 一 問題の所在

本稿は、横浜開港場における物資流通の中核であった波止場の成立過程と運送集団の性格の検討から、近代築港事業以前における港湾インフラの史的位置づけを試みる。

つとに指摘されるとおり、明治二十七年に外洋船の着岸できる鉄製棧橋が完成するまで、横浜開港場の物資流通を支えたのは舢舨輸送を要する波止場に過ぎなかった。また、外国との自由交易という新しい問題にあたり、貿易を掌握すべくして計画された波止場は、まったく封建的な「前期的港湾」をなす構築物であったことは確かである<sup>一</sup>。一方、波止場の運送を担った集団のうち、日本人荷物を扱った「運送方」のなかには、明治中期まで物資流通を支え続け、海運業者として、または都市内の実業家として成長を遂げた者が少なくない。

横浜開港場における運送については、生糸の輸送ルートを開港以前から存在していた流通網の再編・整備として捉え直し、奥州・上州から江戸へ、江戸から神奈川を経由して横浜へという経路の確立を提示した高村直助の論考が重要である<sup>二</sup>。また、波止場運送業者については飛脚制度の研究のなかで出店商から運送関係者のリストを作成した藤村潤一郎の論考<sup>三</sup>、神奈川県による開港場への流入民対策という文脈で波戸場運送業者に言及し<sup>四</sup>、他方で東京・横浜間の舟運についての通時的なスケッチのなかで横浜の運送業者に言及した西川武臣による論考がある<sup>五</sup>。

しかし、生糸売込商を中心とした交易商の研究に比して運送に関する研究は少なく、開港場の空間に即した物流の検討が欠けている。また、波戸場やその運送業者の業務内容に考察が加えられておらず、明治以降に「運送業者」、「廻漕業者」として同化していく状況をそのまま幕末に当てはめてしまう論考もみられる。そして、第四章で述べたとおり、町中の中核たる売込商と流動的な「日用」層を、町と共存しつつ連絡した運送の差配者を論ずる意義は、横浜開港場の都市社会を論ずるうえで小さくない課題である<sup>六</sup>と考える。

本章では、まず物資流通の中核となる波止場と運送業者が成立する過程を明らかにする。開港場を長崎の出島と同様な外部から隔絶された都市としてみる論考があるが<sup>六</sup>、交易管理の下で物資が出入りした波止場は、海岸の着岸機能を否定することで初めて成立しえた。横浜の日本人町の復元図と開港当初における若干の物資輸送の事例から、海岸との対比を念頭に波止場の成立過程を検討したい。

つぎに、奉行によつて物流の要所に位置付けられた三つの集団、運送方・人足方・水主方について、それぞれの営業内容の整理をおこない、都市社会における位置を確認する。そのうえで明治以降の彼らの営業の展開を概観し、運送業者の性格から波止場を評価することを試みたい。

#### 二 波止場の成立と海岸

##### 1 波戸場の計画思想

横浜開港場の中央の二本の波止場は、都市建設のなかで幕府によつて造成された。馬踏み幅五間、長さ六〇間の波止場は百間ほどの間隔をあけて造成され、内側に三か所ずつの上がり場が計画された（実現したのは二ヶ所、後掲図6参照）<sup>七</sup>。海へとせり出す六〇間の波止場は当世の設備としては長大で、半漁村であった横浜村の着岸可能性を大きく高めたと思われる。万延元年に作成された浮世絵をみると、帆のついた伍大力船らしき船が描かれており中型船は着岸することができたようである（図1）。波戸場周辺の水深は、各種海図によつて六〇一二尺でばらつきがみられるが、六〇間伸びた形態も相まってそれなりの設備として機能したことが理解される。この点は後述したい。

一方、内側にしか設けられなかった上がり場は、むしろ巨大な入り掘りを造成する意図を感じさせる。運上所前の番所がおかれた広場に都市全体の船着き場を限定するべく、単一の巨大な設備を造成する計画だったのだろう。安政六年の五月、三井八郎右衛門ほか一二六人から提出された請証文には、「波止場外之揚場所、陸揚・船積共決而仕間敷候事」という内容が含まれた<sup>八</sup>。波戸場の機能が、面的に広がる海岸の揚げ降ろし機能を否定したうえで成立したことを示している<sup>九</sup>。

そもそも波止場は長崎の「大波止」のほか、安政二年に下田に計画され<sup>一〇</sup>、安政六年に



図1 五雲亭貞秀「神奈川横浜二十八景」 国立国会図書館デジタルコレクションにて公開

所蔵元の許可を得られていないため非公開

図2 「開港図」 相模国・武蔵国各郡文書（新収） 請求記号 2200430270

年欠で、所蔵元の地図で作成背景は不明である。「朱引此度出来ノ分」として朱書きで新たな普請箇所を示していることから、開港場建設にあたって入札箇所を記録した図であろうか。

は箱館にも造成されるなど<sup>二</sup>、開港場に共通するインフラであった。また、築地居留地の形成をうけて、築地・鉄砲洲へ回送された貿易荷物やその他の荷物（居留地向け日用品か）は、稲荷橋脇物揚場・南小田原町橋脇物揚場・数馬橋脇貿易商社水門内の三ヶ所のほかは出入りが禁止された<sup>三</sup>。海岸の機能の否定と波戸場の導入が明治初頭までの一貫した開港場計画の方針で、その目的は貿易荷物の取締りにあったのである。

## 2 開港直後の洲乾湊

横浜開港場の波止場は、西側が日本人荷物、東側が外国人荷物の出入りする場となった。万延元年の「神奈川横浜二十八景」には、東波止場は「買取たる荷物を小船二積入本船にうつす之有様なり」、西波止場は「江戸ヨリ積おくるの荷物を水揚の所」と説明する。西波止場へは江戸以外からも荷物が入ったと思われるが、当時の主要な荷元が江戸であったことにもつく表現であろう。

ただし、中央の機能分化された二本の波止場が初めから決定されていたわけではなかったようで、たとえば、開港場の計画を示した絵図には二本の波止場とともに「異人上がり場」と書かれたものもみられる（図2）<sup>二</sup>。また、初期的には中央の波止場以外から水揚げがなされたこともあった。阿部勇によれば、信州から江戸屋敷を経由して開港場に送られた生糸は、「弁天河岸」と呼ばれる場所で水揚げされた<sup>四</sup>。厳密な位置は不明だが、おそらく弁天社のある都市の西側の海岸であろう。

その点、神奈川宿青木町の小揚げ人足溜まり青木屋と運送渡世の大井屋惣左衛門の拝借地所が本町通り二丁目に分布することは示唆的で（後掲図5）、開港前の安政六年三月の瓦版には、「貿易諸荷物運送所 大井屋惣左衛門間口 十五間」という記載が、本町通り壱丁目の突き当り（神奈川への渡船場）にみられる（図4）<sup>五</sup>。中央の波止場へと船着き機能が一本化される以前、開港場の西側海岸が最初期には物資出入り可能な場所であったことを示している。大岡川河口の横浜村・戸部村・吉田新田に囲まれた入江は、「洲干湊」と呼ばれた古い停泊場であった<sup>六</sup>。「新編武蔵風土記稿」によれば浅瀬になってきたところであったようだが、大岡川の舟運そのものは年貢米や吉田新田の開発主吉田家の物資出入りなどがあり<sup>七</sup>、「弁天河岸」はこうした大岡川における旧来の舟運路を受け継ぐものであったと考えられる。

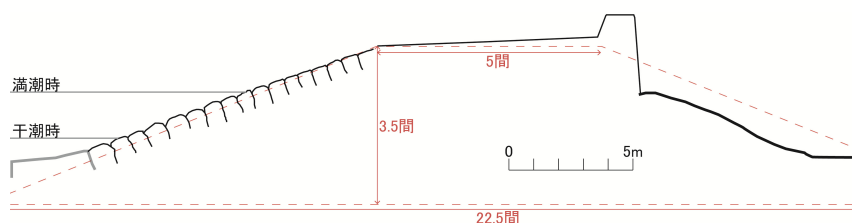


図3 波止場断面図

明治7年のプラントンによる築港計画の断面図をもとに、普請入札にあたって作成されたとみられる「波止場仕様書」（永嶋家文書、神奈川県立公文書館所蔵）の記述を交えて作成。黒で示した輪郭が慶応3年に改修された波止場の断面、朱で示した輪郭が「波止場仕様書」の寸法に基づく断面。

青木屋、大井屋以外の運送業者の分布をみると、海岸周辺に一定の集中が認められる。北側海岸での水揚げの実例は確認されておらず、西の海岸についても、慶応元年には江戸の横浜回漕問屋により「弁天海岸」から陸揚げされる「隠荷」が問題視された<sup>八</sup>。波止場以外での水揚げが禁じられている以上、正式な荷物の出入りは最初期の例外的なものであったとすべきであろう。ただし、出店商がみずから開港場へ赴き、安政六年の三月から四月にかけて地所を取得していった経緯を鑑みて、運送渡世を許可された者の地所が西と北の海岸周辺に集中していることを重視しておきたい。旧洲乾湊付近での生糸水揚げは、海岸での水揚げが初期的には存在していたことを表しており、開港場の建設期には成立しえ



図4 貿易瓦版に記録された大井屋貿易諸荷物運送所惣左衛門間口十五間の地図。貿易瓦版（横浜開港資料館所蔵、請求記号 Ab3-21-20）に加筆。

た海岸の機能が、波止場へ限定する仕法の確立のなかで厳密に否定されていた過程を示しているように思われるのである。

### 3 神奈川の海岸―佐藤屋関係資料から―

弁天通り四丁目の佐藤屋才兵衛の店の記録とみられる帳簿に、安政六年下半期の荷物水揚げや売込の許可申請の写しがみられる<sup>一九</sup>。数点から数百俵まで規模はさまざまで、送り主である江戸の間屋商人と浦賀の掛塚屋権七のほか、輸送の仲介者として神奈川宿青木町の三文字屋与八の名が確認される。輸送過程の様子を示す記述は少なく、横浜の運送業者の名は確認できない。神奈川宿青木町三文字屋与八が佐藤才兵衛へ荷物を輸送した記録はその様子をわずかながら明らかにする。

#### 〔資料1〕<sup>二〇</sup>

##### 送り状之事

一、銅船釘 四箇

一、同火屋 四箇

べ八箇

右者江戸中嶋屋太兵衛方へ横浜弁天通四丁目佐藤才兵衛仕入荷物積入申候間、御改御通し、御法通御取計被遊可被下候、以上

未九月八日

神奈川宿三文字屋与八

横浜御改所御役人衆中様

右之通当港着船二付、水揚げ候間、何卒御改被成下置度、偏ニ奉願候、以上

安政六未年九月八日

才兵衛代

御奉行所様

伊兵衛

#### 〔資料2〕

##### 御預書之事

一、銅十能 七箇

一、同船釘 式箇

右者今般神奈川三文字屋与八方へ私方江積送申候二付、水揚げ御改請候處、売買之儀も御差留ニ相成候趣被仰渡、驚人恐入候、就而者、右品御沙汰迄ハ急度積□（過カ）し候間、御預ケ一札差上置申候、仍而如件

安政六未年九月十五日

弁天通四丁目

佐藤屋

才兵衛

御改所御役人衆中様

右書面差上申候處、御手入有之左之通御認直し差上申候

##### 御預置之事

一、銅十能 七箇

一、同船釘 式箇

右者今般神奈川青木町三文字屋与八方へ私方江積送り申候二付、御改請候處、右品御沙汰御座候迄者、封印之俣差置候様被仰渡、奉畏候、依之御請書奉差上候、仍如件

安政六未年九月十五日

弁天通四丁目

佐藤

才兵衛

西波止場御改所御役人衆中様

ともに安政六年の九月の例である。イギリスのジャーディン・マセソン商会による本格的な交易は、洋銀との交換比率が安定した安政六年九月以降とされるため<sup>二一</sup>、横浜での交易の初期の事例といつて良いだろう。

一点目は、江戸の釘鉄銅物問屋の中嶋屋太兵衛から佐藤屋才兵衛へ送られた船釘と火屋の改めを三文字屋与八が請願したもので<sup>二二</sup>、佐藤屋の記録のなかに三文字屋が初めて登場する記録である。才兵衛による奥書に「水揚げ」と記載されていることから、神奈川から横浜へ海路で運ばれたことがわかる。二点目は、三文字屋から積み送られた十能と船釘が西波止場で売買を差し止められ、封印のまま保管するよう命ぜられたことへの請書である。

差し止めは、日用品に見立てた銅輸出の横行を取り締まるためのものであったと考えられる<sup>三〇</sup>。結局九月二十六日に送り主へ戻す申請をしており、許可が下りたのちに三文字屋へ積み戻された。同様の記録は安政六年十一月十二日と十三日の水油の差し止めとしてみられるが、両件とも数日後に英十番船デイスムへ売却された。

一点目は水揚げ位置が、二点目は送り主がそれぞれ不明であるが、「江戸問屋↓神奈川宿三文字屋与八↓(舟運)↓西波戸場」のルートが推定されよう。神奈川宿の三文字屋与八は、漆原(漆原屋)専助とともに横浜への運送の仲介を担った人物である。万延元年十二月の「神奈川奉行所職員録」には、「諸荷物・生糸積問屋三文字屋与八」と「生糸荷次漆原専介」の名が記録される。その肩書から推測すれば、三文字屋が生糸以外の荷物も運送し、漆原は生糸を専門的に扱っていたということになるうか。

万延元年六月の三井糸店による記録によれば、江戸釘店伊勢屋平作から出荷された生糸一駄が、「神奈川船問屋三文字屋与八」のもとで送り状を準備するように強いて請願されていた<sup>三一</sup>。五品江戸回送令のもとでの糸問屋による生糸改めの課題として、神奈川飛脚問屋・船問屋によって送り状が作成されていれば正当な荷物として妥協せざるをえなかったことが挙げられている<sup>三二</sup>。右の一件も神奈川宿の船問屋三文字屋による中継を江戸回送に代替させようとする生糸荷主の意図を示しているといえるだろう。また、五品江戸回送令の発令の直後の万延元年四月二十三日、仕法が決定するまで横浜へ送ることのできない生糸が神奈川宿にて一九八箇半滞っていた<sup>三三</sup>。一箇五六・二五斤、四箇一駄として、一九八箇半は一一一六五斤強、五〇駄弱となる<sup>三四</sup>。三文字屋や漆原屋がある程度の保管能力を有したと評価するべきであろう。

駿府町人の砂張屋善右衛門の日記のなかに、開港直前の安政六年五月初旬、同人の横浜向け荷物を三文字屋が仲介した例が確認される。

〔資料3〕<sup>三五</sup>

一、三村屋鉄蔵殿、昨日より明後日頃川渡し罷出候積二付、笠原氏江相預ケ候相良和布運賃取替、神奈川三文字屋与八殿扱二而、横浜本町四丁目丹波屋惣左衛門行と送状相認、差出呉候様手紙相認遣

開港以前より、三文字屋の仲介による物資運送の体制が整っていたことが明らかである。五品江戸回送令のもとで、江戸を介さない生糸流通の仲介者としてやり玉に挙げられるこ

ともあった神奈川宿飛脚問屋と船問屋であったが、佐藤屋・砂張屋の事例は改めの強化や抜け荷の横行に先行して神奈川を経由する荷物が相当数あったことを示しているようで見られる。

一方、漆原専助による開港後の運送の具体例は確認できていないが、第一章で紹介した「金川日記」に登場する軽井沢の漆原専助と同一人物と思われる<sup>三六</sup>。軽井沢は、神奈川宿青木町の西側の枝郷で、そこにあった物置三軒は安政三年の風雨で壊滅し、小麦・小豆が水につかって大きな被害をこうむったと記録される。第一章でみたとおり、八王子街道との深い関係をもつ穀物商人であったと推測される。

三文字屋与八は、佐藤屋の資料中の肩書から神奈川宿青木町の住人であることが知られるが詳しい位置はわからない。三文字屋与八は、慶応元年八月、神奈川湊廻船問屋の紀伊国屋三郎兵衛から金三百両をあずかっている<sup>三七</sup>。一方で屋号は不明だが、第一章にて検討した「海岸築出新地請名寄帳」には、青木町下台町の名請人に「与八」がおり、明治五年以降陸送会社の代表を務める玉置与八と同一人物とみられる<sup>三八</sup>。また、年欠の資料であるが台町の組頭は「与八」であった<sup>三九</sup>。

さきにみた生糸の保管から、固有の倉庫を持つ家持層であったことを推測させること、廻船問屋紀伊国屋との関係をもっていること、一般的に明治初頭の陸運会社が既存の運送集団によって開業されたことを考えれば<sup>四〇</sup>、三文字屋が台町玉置与八であった可能性が高い。神奈川湊の中心にあった廻船業者との密接な関係のもと、海陸をつなぐ運送の仲介をおこなっていた人物だったのではなかろうか。

なお、安政六年八月、神奈川での物揚場を番所が新設された宮の河岸へ限定することが達せられた。住人の訴えによって宿内に五ヶ所の物揚場が許可されることになるが<sup>四一</sup>、交易荷物の取り締まりが及んだことは、開港場の物流のなかに占めた神奈川の海岸の重大な位置を物語っている。

かくして横浜開港場の波戸場は、横浜村洲乾湊や神奈川湊の海岸のなかで成立し、とくに前者の厳密な否定のうえで開港場の中核的なインフラとなった。一方で神奈川湊については高村直助が指摘する通り元治年間にも健在であり、神奈川を経由して横浜へ運ばれるルートは少なくとも明治初頭まで継続したとみられる<sup>四二</sup>。

### 三 波止場運送の担い手―運送方・人足方・水主方―

#### 1 運送方

##### (1) 運送方に共通した業務

年代不詳ながら最幕末から明治三年までのあいだに作成されたとみられる開港場商人の番付表「大港光商君」は、「世話人」のランクに「運送方」の十人の名を列記する<sup>三六</sup>。万延元年の出店商人の書き出しのなかでも、他の出店商とは別記するかたちで「諸荷物運送所」の十人が列記される<sup>三七</sup>。幕末から明治初頭において他の出店商と区別されたこれら「運送方」は、西波止場の荷物運送を担う集団であった。いずれも日本人町の地所を得た。

表1には、日本人町の地所拝借人の帳簿から摘記した運送関係者を下地として、明治前期までの資料にみられる波止場運送業者の人名をまとめた。後述する文久三年の訴え（表1・④列）と明治二年の船乗取締の請願（表1・⑥列）はともに西波止場の荷物を担当した「運送方」によるもので、先述の「大港光商君」（表1・⑤列）や「神奈川奉行所職員録」（表1・②列）にみられる人名とおおむね共通する。

一方、弁天通り三丁目の飛脚屋や四丁目の馬持音兵衛、車力営業を許可された三丁目の車屋や、三丁目の運送方・小揚げ人足営業の細谷屋、運送渡世の越前屋など、運送関係の営業が許可された地所拝借人は他にもみられる<sup>三八</sup>。彼らは波戸場関係の資料には確認されず、商人録で特記されることはない。波戸場における運送渡世がやや特殊な性格を持ったことを示している。

運送方の構成員は、運送関係専業の者から、生糸や茶のような輸出品の扱いを許可されている者まで様々である。また、拝借地所の大きさにも大きな差が認められる。たとえば二丁目に間口五間の地所を拝借した青木屋は、神奈川宿青木町の小揚げ人足が所右衛門の名を借りて出店した店で、「小揚げ人足溜所」とされることもあった<sup>三九</sup>。対して海岸通り四丁目の高德屋半左衛門は、安政六年五月末に舁輸送、瀬取廻船の許可を得ているが、先行して七種類の取扱品を許可されており、その後も営業品目を拡大し続けた。高德屋の拝借地所での心中の検分によれば、高德屋の地所に仕立て職、石工が店借していたことが明らかに<sup>四〇</sup>。間口四〇間を越える土地のなかで複数の店が経営されていたのだろう。

つぎに、彼らの業務内容について、資料から見ていきたい。資料4は文久三年九月に、



図5 波止場の「運送方」と運送渡世の拝借地所

濃い灰で波止場の「運送方」を、薄い灰で運送渡世の者を示した。斜線は、新興の「運送方」である駿州屋と八幡屋の所在地を示す。

表1-1 開港場運送業者の変遷

[illegible]

第五章

〔典拠〕①「山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書」6, 7に所収（県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵）、②「神奈川県史資料編」10、資料番号 388、③「神奈川県図書館協会『未刊横浜開港史料』（一九六〇年）④神奈川宿本陣石井家文書（神奈川県立公文書館所蔵）。請求番号 2199436288（資料 4）、⑤横浜市史編纂掛編『開港七十年記念 横浜史料』（一九二八年）、⑥「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵、第八章資料 7）。

表 1 - 2 開港場運送業者の変遷 (後半)

	⑦明治6年波止場築造 ※県庁からの御下金1000円。	⑧明治12、3年 運賃嘆願 御国産波止場附、湊町 波止場の運送問屋	⑨明治14年 横浜商人録			⑩明治25年 海岸の鉄道 敷設へ請願 ※2	⑪明治25年海岸の鉄道敷設へ請願
	人名	出資額 ※1	人名	屋号	業種	住所	
青木屋							
石川屋	朝田又七 A: 570両 B: 2000両		朝田又七	石川屋	運送商	元浜町1-1 南側東角地	朝田又七
大井屋							
金子屋	柏木健蔵 A: 570両 B: 500両		柏木しげ 後見 柏木健蔵	金子屋	運送商	本町4-63 北側東角地	
桑名屋							
高徳屋							
山形屋	土屋五三郎 A: 570両 B: 500両		土屋五三郎	山形屋	廻漕商	北仲通3-48 北側中央	土屋五三郎
伊勢屋	森山善四郎 A: 570両 B: 100両						
							『横浜市史稿』産業編 政治部の長男、文政十年九月一日生まれる。安政六年五月、貿易を志し資産を弟新三郎に委して廻漕業を本町三丁目 に開業。汽船を建造して横浜・清水間の航路を開始。商号を村田屋とした。ほか、製米業、施設水道の敷設、碇泊船の飲用水、機 関用水の請負をおこなった。明治四年二月、本店を娘婿孝助へゆすり、太田町六丁目に移居。十六年六月十四日死去。生ま れ安養寺。三男徳三郎が家督相続した。 海老塚徳三郎 805頁 与次右衛門の長男、横浜清泉社を継ぐ。公共事業に尽くし、県会議員 参事会員へ。本町区会議員 横浜商業学校商議員、 横浜市所得税調査委員、土地収用審査委員、港湾改修委員、横浜商業会議所議員を歴任。図書館を作る。 市史稿産業編に記述。
村田屋	海老塚与次右衛門 A: 570両 B: 1500両		海老塚孝助		運送商	元浜町3-18 南側東角地	海老塚孝助
平間屋	成川平五郎 A: 570両 -		成川平次				
中嶋屋							
八幡屋	高木七五郎 A: 570両 B: 500両		高木七五郎	八幡屋	運送商	元浜町2-17 北側西角地	高木七五郎
駿州屋	松下定助 A: 570両 B: 1976両1分		松下くら	駿河屋	廻漕商	北仲通2-17 南側東角地	松下くら
人足方	鈴村要蔵 A: 470両 -		鈴村要蔵				
人足方	石川繁蔵 A: 200両 -						
村田屋	田辺喜八 A: 570両 B: 500両		田辺喜八	村田屋	質商	元浜町3-20	
湊町波止場			太田源介(太田屋)	太田源助	運送商	湊町2-11	※1 A:波戸場建設支払代、B:立替 ※2 ⑩には、海岸通四丁目日本波止場廻漕業者として中沢金蔵と福寿要蔵も連名しているが、その人物像は不明である。
			和田勝二郎(梶屋)	和田勝次郎	運送商	湊町-12	
			玉浦熊二郎(丸屋)	玉浦熊次郎	運送商	湊町-13	
			林新七	林新七	運送商	湊町-7	
			大森良助(山田屋)	山田良助	運送商	湊町-7	
			伊藤久兵衛(万屋)	伊藤久兵衛	運送商	湊町1-1	

【典拠】⑦成川慎蔵『横浜日本波止場—三代目成川平五郎についての一考察—』（注 69 参照）、⑧明治 12 年「運賃改正嘆願」（鈴木裕一 家文書、神奈川県立公文書館所蔵、第八章資料 11）、⑨『横山錦細編』『横  
浜商人録』大日本商人録社、1881 年、⑩中野健明・臨時横浜築港局編『横浜築港誌』、1896 年（51 ～ 64 頁）、⑪『横浜近代史辞典 改題横浜社会辞集』湘南堂書店、1986 年、『横浜市史稿』産業編、  
1933 年。

運送方二一名から惣年寄衆中、名主衆中へ提出された訴状である。

〔資料4〕<sup>四一</sup>

乍恐以書付奉願上候

一、運送方二統左之名前之者奉申上候、当七月中、西御波止場出入荷物御改之御儀、御改革ニ相成候ニ付、御会所方町役人衆御出張ニ相成、日々水揚積出し等仕、難有仕合奉存候、然ル処御役人衆之内利吉殿御儀者、私共一同迷惑筋而已御談し、殊ニ当四日引請荷物、御談し中者水揚願書差出候共、御奥書御調印不被下、彼是時刻相立、午之刻過、名主六左衛門様を一同御談し上、御調印被下、漸く御見分濟ニ相成候次第、且又、日々御談し而已ニ而時移り渡世ニ相成兼、一同迷惑難渋仕候間、何卒以 御慈悲一同安心渡世仕候様偏奉願上候、以上

（後略。以下は年代、署名、宛名。）

運送方が西波止場に入りする荷物の水揚げ、積出しを担ったことがうかがえる。海岸通り五丁目の地所拝借人であった中嶋屋喜助の拝借地所には、車力頭、軽子頭が居住した（表2）<sup>四二</sup>。四日市出生の車力頭である借家人藤助と、同居人・寄子の六名は同一の請け人となっている。また、伊勢屋善四郎が車力賃を受け取っている明治三年の送り状も確認され<sup>四三</sup>、波止場から各店までの陸送を人足の幹旋により請け負っていたことが知られる。

また、水揚げ願書の提出をして町役人の奥書を求めていること、奥書がもらえず時間がたつことで渡世が成立しないと訴えていることから、水揚げの手続きを運送方が代行していたことを推測させる。開港場に入る荷物は厳重に管理されており、荷役とともに改めを代行することにこそ運送方の業務の真価があり、彼らの地位を保証したと思われる。

明治二年には、職人・日雇い稼ぎ人足に対する鑑札配布をうけ、運送方惣代から以下の出願がなされた。

〔資料5〕<sup>四四</sup>

乍恐以書付奉願上候

今般諸職人・日雇稼人足等、御当港江立入候者とも御鑑札御下ケ被遊、御取締被為在候ニ付、西御波戸場江諸荷物水揚致し候船方水主等、上陸致し候者之儀

表2 喜助の拝借地所  
元治二年人別帳(三世帯)

人名	肩書	歳	出身
喜助	地所拝借人	48	江戸深川北川町
きよ	妻	44	右同断
さく	娘	8	右同断
かめ	妻	6	右同断
吉兵衛	喜助弟	44	右同断
よし	妻	30	右同断
こと	娘	15	右同断
亀吉	倅	12	右同断
金次郎	同居	54	江原郡品川伊八倅
清兵衛	召仕	38	江戸青山久保町藤八倅
やす	妻	24	右同断
専蔵	召仕	39	豊前企救郡小倉才助倅
良助	召仕	26	武州埼玉郡樋遭川栄助倅
庄兵衛	召仕	28	江戸芝口一丁目平蔵倅
藤助	喜助借家	35	勢州三重郡四日市新兵衛倅
とみ	妻	27	右同断
留吉	同居	30	江戸浅草阿部川町玉吉倅
駒吉	寄子	29	越後蒲原郡高山村新八郎倅
清吉	寄子	30	長州豊浦郡西川村然十郎倅
源次郎	寄子	29	江戸浅草阿部川町又七倅
弥兵衛	寄子	41	江戸下谷長者町万右衛門倅
林蔵	寄子	28	江戸本郷春木町久平倅
政吉	喜助借家	33	江戸芝金杉三丁目茂兵衛倅

慶応二年人別帳(一世帯)

人名	肩書	歳	出身
喜助	地所拝借人	49	江戸深川北川町
きよ	女房	45	右同断
さく	娘	9	右同断
かめ	娘	7	右同断
良助	養子	27	武州埼玉郡樋遭川栄助倅養子
専蔵	召仕	40	豊前企救郡小倉才助倅
辰次郎	召仕	32	下総国葛飾郡関宿新八倅
徳太郎	召仕	25	江戸本石町老丁目武兵衛倅
長吉	召仕	17	相州高座郡戸塚庄兵衛倅
藤助	車力頭	37	勢州三重郡四日市新兵衛倅
とみ	妻	28	右同断
孫兵衛	軽子頭	34	江戸深川諸町小兵衛倅
せい	妻	35	右同断

〔典拠〕「五丁目人別帳」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）。

も、為御取締、御鑑札御下ケニ相成御冥加上納仕度段、去月中奉願上候義、全運送方仲間手船其外共、私共都而年来取扱差配仕候義ニ付、右御鑑札御下にも相成候義ニ御座候ハ、何卒私共江取締方被 仰付被下置候様奉願上候、依之其段乍恐以書付御伺奉申上候、以上

明治二巳年十一月

御裁判所

西波止場に入出する船を年来差配してきた実績をもとに、波戸場へ上陸する水主へ鑑札を配布することを請願している。水主への鑑札配布についての他の願書によれば、「運送方溜り所」で入船・出船・艀船を差配していた<sup>四五</sup>。本資料中の運送方仲間の手船とその他の

運送方  
惣代  
長吉 印  
半右衛門 印

船という分類との関係は不詳であるが、旧来より江戸・横浜間の物資輸送が多かったことを考えれば、内湾を行き来する入船・出船のなかには運送方の手船ではない、たとえば江戸側に所属する船もみられたというであろう。

明治三年に東京永嶋町忠次郎は、新しく大岡川に開かれた波止場との往復運送業を開業することを請願したが、そのなかで、「横濱町在来候運送方」から送られる荷物の受け入れも想定している<sup>四六</sup>。運送方による海運業の具体例は未確認だが<sup>四七</sup>、江戸からの荷物の受け入れ（入船）だけではなく、横浜運送方からの出荷（出船）も存在したことが知られる。

## （2）運送方構成員の変遷

つぎに、運送方の構成員の変遷を見ていきたい（表1）。明治中期まで連続する店もみられるが、文久三年から明治初頭にかけて変動があり、西側の青木屋と大井屋、四丁目の桑名屋と高德屋の名が消え、八幡屋と駿州屋が加入している。

青木屋は文久三年の資料には運送方として連名し、後述のとおり石炭屋から土地を借りているが、明治以降の資料には名前をみることはできない。二丁目の大井屋も同様である。

八幡屋七五郎は、生糸売込商の連印にその名が確認され、四丁目に店があった。駿州屋の幕末における拝借地所の位置を知ることとはできない。明治十四年の商人録に記載された住所をみると、八幡屋が高徳屋の海岸側の地所、駿州屋は桑名屋の南向いの地所にあたる。結果的には、より波戸場周辺へと運送方が集まることとなったといえるだろう。波止場への物資出入りの限定にあわせ、初期的な分布に変容が迫られたといつてよい。

新興の運送方のうち駿州屋は、東京の横浜回漕問屋の駿州屋の横浜支店とみられる<sup>四八</sup>。東京小網町駿州屋定次郎から積みだされた荷物はいずれも駿州屋定助が水揚げした<sup>四九</sup>。

## （3）石炭屋資料にみられる運送方

運上所の向いに千坪を越える地所を得た石炭屋は、江戸の米穀（地回り米穀問屋と脇店八か所組米屋）、乾物（仮組）、畳表・荒物（仮組）の間屋株をもった明石屋治右衛門の出店で、外国船と幕府調練所への石炭売却、生糸を中心とした輸出とともに貸倉庫・貸地の経営をおこない、明治中期には横浜最大の地主となった<sup>五〇</sup>。また、物品を担保とした貸付も行っており、明治初頭には茶の輸出にも着手した。

ここでは、石炭屋の経営帳簿にみられる波戸場運送に関する記録を検討したい。具体的には、①石川屋への支払い記録、②貸倉庫の記録、③明治三年の送り状を扱う<sup>五一</sup>。

### ①石川屋への支払い記録

明石屋・石炭屋の文久三年の経営帳簿には、「石川又四郎殿」という項目が他の会計から独立して設けられている。支払いの項目は、西波止場で水揚げした石炭や海産物の車力賃、運賃の立替（手数料か）、世話料、東波止場や商館への車力賃、東波止場からの舟積みがみられる。日本人町の店（または前章でみた荷渡所）から東波止場への輸出品運送は運送方が担ったことが伺われる。東波止場で外国人荷物の運送を担った人足方との関係については後述したい。

こうした項目は、③にみる明治三年の送り状にも記入され、石川屋が運送船の運賃や車力賃を立て替えていたことが明らかである。「世話料」の意味するところが不明だが、波止場での水揚げ荷物が書き出された後にのみ見られ、西波止場や商館への車力賃には付随しない。また、運賃の立替がなくても水揚げ荷物には「世話料」の項目がみられる。さらに資料4で推定した波止場における改めの代行に対するものとみられ、運送代金の立替が示す通り波止場に店主（石炭屋）が不在であることに関係するのではないかと思われる。

石川屋又四郎は、万延元年から明治三年まで一貫して認められる人名で（表1）、旧横浜村の村役人で元町に住んだ人物とみられる。同人の拝借地所は南仲通り五丁目に確認されるが運送に関わる渡世は申請されていない<sup>五二</sup>。また、南仲通りの拝借地所は江州犬上郡高宮宿（現滋賀県彦根市）の宗兵衛の手へ移り<sup>五三</sup>、「大港光商君」では石川屋又四郎の所在が「海辺五丁目」、つまり海岸通り五丁目とされる（表1⑤列）。

すくなくとも明治以降は店支配人であった石川屋又七の住所が明治以降に運上所脇道と海岸通りの角地（元浜町一丁目一番地）にあたることから<sup>五四</sup>、「大港光商君」の「海辺五丁目」とは石炭屋の拝借地所に石川屋の店が存在したことを示すのであろう。現段階では不明な点の多い石川屋であるが、店主の又四郎は元町に居住し、石炭屋の拝借地所内で運送方の営業をおこなっていたと考えておきたい。

### ②貸倉庫の記録

文久二年の貸倉庫業は高村直助の指摘したとおり、近隣の者が借り手の中心となっていた。ただ、本稿では、中嶋屋をのぞくほぼ全員の運送方の名前が確認される点に注目した

い。青木屋は地代を支払い土地を借りていたようである。

広大な拝借地所を得た高德屋や平間屋も蔵を借りており、運上所に近い立地が重要であったことを表している。運送請負専業の山形屋も蔵を借りていることから、運送方の業務に蔵が利用されたことが読み取れる。波止場での揚げ降ろしや陸送の請負のみならず、外国人との売買が完了するまで保管する業務も含まれた可能性があるだろう。

石炭屋の貸倉庫は、波戸場や運上所に近いからこそ機能したといえる。そして、石炭屋の拝借地所に店があつたとみられる石川屋、海岸通り五丁目の伊勢屋・中嶋屋・山形屋など運送方の店も集まり、中嶋屋の拝借地所には軽子頭、車力頭とその頼子が住んでいた。

波戸場と運上所前の広場を中心として、狭くみても五丁目の北側までを含む一帯が、開港場の物資流通上重要な場であつたといえるだろう（図6）。

### ③明治三年の送り状

石炭屋の経営帳簿のひとつである「水揚帳」には、明治三年から四年にかけての送り状の写しや水揚げ許可申請の写しが収録される。必ずしも石炭屋へ向けた荷物ではなく、茶商とみられる北仲通り三丁目釜屋金兵衛へ向けた荷物も多い<sup>五五</sup>。

ここでは、東京から送られた事例について考察したい。

#### 〔資料6〕

送り状之事

午六月十一日

三五郎船

新宮山

一、杉 三間六寸 四拾四本

〔写〕 運賃 金老両壹分

三朱也

〔写〕 世話料 九匁六分

〔写〕 水揚 金一步式朱

百文

〔写〕 車力 六貫五百文

〔引合〕 金式両式分式朱

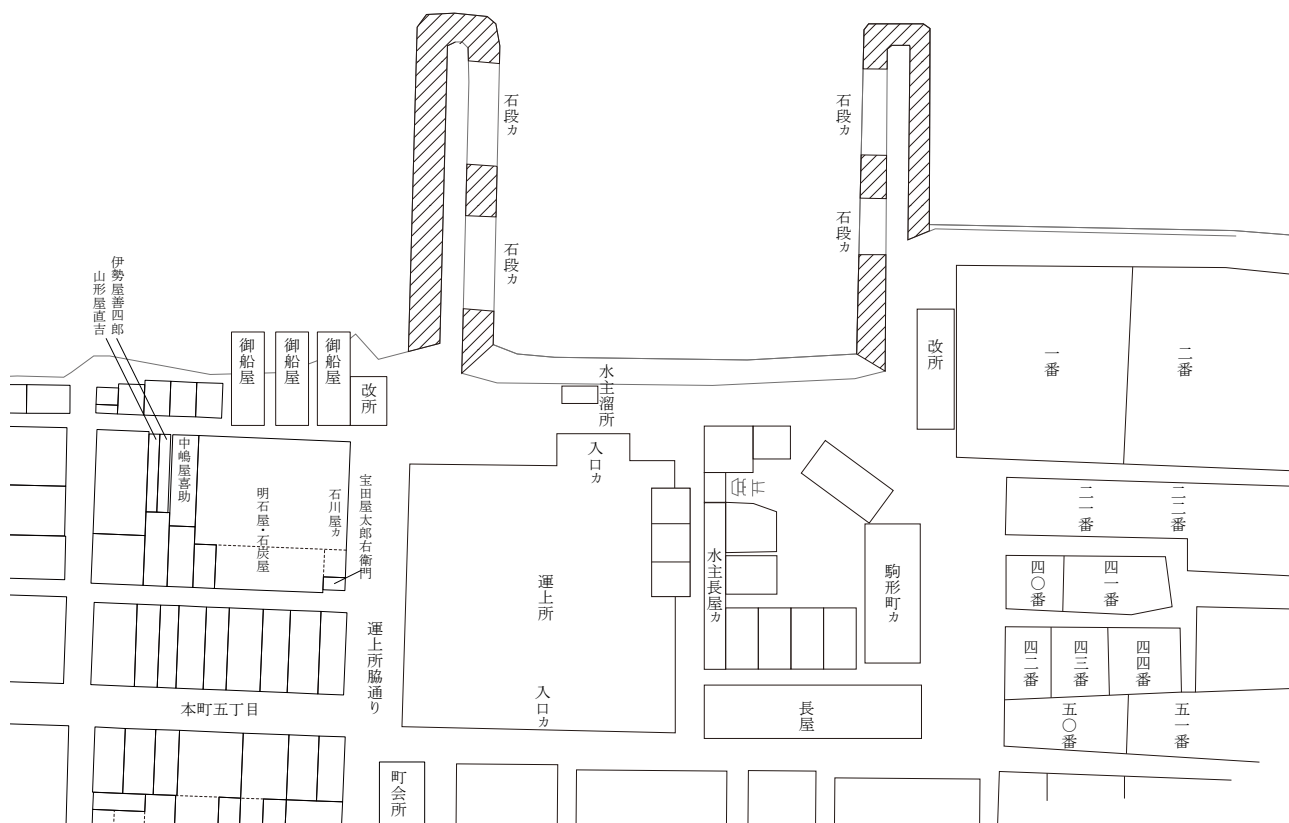


図6 慶応元年ごろの波止場周辺

慶応元年「横浜絵図面」（フランス人クリペの測量図）と地割復元図をもとに作成。「御船屋」と「改所」、運上所とその東の区画については、慶応元年「御役所其外地割絵図」（定式御普請掛 五味文庫 2-10-1、横浜開港資料館所蔵）。また、慶応二年夏に作成された地図（題名欠、横浜市中心図書館所蔵）を参照した。

石川屋江松

宝田屋

午六月 太郎右衛門

石川屋又四郎上ヶ

石福店入

宝田屋は横浜開港場にも出店した石炭屋の親類で、深川からの建材の廻漕者として数回帳簿に登場している。材木が東京から船によつて横浜に運ばれ、「運賃」、「世話料」、「水揚」、「車力」が計上されている。支払い項目については後述する。

「水揚帳」に収録された東京・横浜の廻漕で注目されるのが、ほぼ決まった組み合わせで登場する両都市の運送業者の存在である(表3)。駿州屋定次郎と駿州屋定助の関係を筆頭に、木屋小左衛門と石川屋、大村屋伝次郎と金子屋健蔵の関係があげられる。大井屋勝四郎が積みだした荷物も、中嶋屋喜助と鈴村屋要蔵の水揚げによる場合が多い。また、たとえば関宿産物方の荷物と駿州屋のように、荷主との関係からある程度決まった人物が登場する例もみられる。

また、横浜の運送方が明記された二八二件のうち、石川屋(一〇三件)と駿州屋(七五件)が過半を占める。帳簿が石炭屋の店向け、または石炭屋を介して金屋金兵衛ら他の商人へとわたった運送の記録であることを思えば、石川屋・駿州屋と石炭屋の関係を想定することができるだろう。とくに、関宿産物方からの荷物が大半を占める駿州屋に比して、様々な荷主からの荷物や日用品と思しき物資も水揚げしていた石川屋は、石炭屋との関係がより深いといえる。また、石川屋は英米の蒸気船によつて運ばれた箱館産物の水揚げにもかかわっていた。

限られた事例であり、土屋(榎屋)勝次郎のように横浜の運送方がランダムに水揚げしている者もみられるが、運送方の面々がそれぞれ得意関係を作りつつあったことを表しているよう。

資料6の支払いの項目に「立替」の語は見られないが、合計金額を石川屋へ払っているため、①でみた文久期の例と同様に、石川屋が運送代金を立て

替えていたことが明らかである。「水揚帳」には、海上輸送の運賃の立替が明記されている事例も認められる。水揚げから立替の決済までの期間があくこともあり、運送方にある程度の金銭的な負担能力が必要であったことが推測される。また、昆布の荷請に関しては、目方の確認に立ち会っている例が認められた。

個々の運賃であるが、「世話料」は資料6の「運賃」、「水揚」、「車力賃」と別個に計上されているため、①で推測したとおり波戸場での改めに関するものと考えられる。なお、車力賃は「引込」という項目とセットになることが多い。店や倉庫への搬入の意であろうか。そして、蒸気船稲川丸の事例を除いて「解賃」の支払いはみられない。必ずしもすべての運送代金が記載されているわけではないため更なる傍証が必要ではあるが、東京から横浜を航海する海舟が、解への積み替えに頼ることなく波戸場へ着岸できたことを示しているのではない。巨大な廻船については不明だが、伍大力舟ほどの中型船であれば、浮世絵の通り接岸可能であったと推測される。この点は、巨大な波戸場の形態から実現されたインフラとしての特長であったといえるだろう。近世末期の御普請による土木事業の達成とも評しうるのではなからうか<sup>五</sup>。

表3 「水揚帳」にみられる東京・横浜の運送業者

横浜運送方	件数	東京運送方、送り主等	件数
石川屋又七、又四郎	104	木屋小左衛門	7
		榎屋勝次郎	5
		大野屋徳三郎	1
		大井屋勝四郎	3
		大坂屋徳三郎	1
		江島屋与八	1
		松坂屋宇右衛門	2
		山下喜助	1
		蒸気船稲川丸	2
		箱館産物(外国蒸気船)	13
駿州屋定助	75	平潟、石炭	1
		駿州屋定次郎	26
		榎屋勝次郎	2
		大坂屋留蔵	2
鈴村屋要蔵	33	小松原五右衛門	1
		大井屋勝四郎	13
中嶋屋喜助	32	大井屋勝四郎	23
		箱館産物(外国蒸気船)	3
辻井屋嘉助	8	常州石炭	1
		井上伝次郎	3
吉田屋清兵衛	6	榎屋勝次郎	3
金子屋健蔵	4	大村屋伝次郎	3
山形屋五三郎	3	佐野屋半右衛門	1
		松坂屋弥兵衛	1
平間屋平五郎	3	上中屋与八	1
		榎屋勝次郎	1
		箱館産物(外国蒸気船)	1
新田屋七五郎	3	不明	
八幡屋七五郎	2	木屋小左衛門	1
中野嘉助	2	榎屋勝次郎	1
村田屋与治右衛門	2	上中屋与八	1
村田屋喜八	1	上中屋与八	1
太田屋源助	1	榎屋勝次郎	1
太田屋庄兵衛	1	榎屋勝次郎	1
宝田	1	不明	
万屋鉄之助	1	不明	
林屋周蔵	1	不明	
不明		井上伝次郎	1
		駿州屋定次郎	16
		大坂屋留蔵	1
		榎屋勝次郎	2
		米屋嘉兵衛	1

[典拠]「水揚帳」(三丸興業株式会社文書、横浜開港資料館所蔵)。

## 2 人足方と水主方

外国人の荷物運送は元町人足方政吉と駒形町人足方要蔵が担った。まず、明治初頭に彼らから裁判所へ提出された二つの願書を検討したい。資料7は元町と駒形町の人足方による水主雇賃納入の差面を嘆願した書付、資料8は町会所付きの火消人足の供出に関する文書で、こちらも人足方による嘆願とみられる<sup>五七</sup>。

### 〔資料7〕

乍恐以書付奉願上候

横浜元町人足方政吉・繁蔵、駒形町要蔵奉申上候、私共儀、御當港初年より御用人足并外国人荷物取扱方之儀、一手二渡世御願濟之上仕来候段、難有仕合奉存候、右二付、早速小漁船老艘水主四人乗為御冥加差出し、尤水主方江八月々購入用相渡頼ミ置、御用相勤来候処、去ル卯年正月中、外国人諸荷物取扱方之儀は最寄相稼候もの共江勝手次第雇入候而も故障等無之趣被仰渡、承知奉畏候、然ル処居留外国人馬車ニ而運送仕候二付、猶追々渡世筋手薄ニ相成、當時誠ニ以必至難渋仕候、右二付昨辰年二月中、右御冥加御免奉願上候処、乍恐折柄御用多之砌二付、御聞届ニ不相成其不奉御窺申上候段奉恐入候、就而は今般右冥加之儀、乍恐御免被仰付被成下置候様奉願上度、尤人足御用之節は都而は追相勤来候通、聊差支無之旨可仕候間、何卒以御慈悲右願之通り御聞届被成下置候様、此段偏ニ奉願上候、以上

巳二月廿九日

人足方

政吉代兼

繁蔵

同

要蔵代

直次郎

久兵衛

御裁判所

### 〔資料8〕

去未年御開港始町々消防人足無時、「」異人波止場荷物場は要作(ママ)一手二引

請被仰付、利潤も有之候二付、為冥加町会所附き消防人足差出候処、当時波止場荷物馬車ニ而牽候二付、要蔵方利潤無之相成候二付、是迄之通消防人足差出候事難渋二付、御免願上度趣、惣年寄名主共江取次願上呉候様、申出候二付、(後略)

慶応三年の外国人荷物の取り扱いの自由化と、馬車による運送の発達によって仕事が減少したことを訴えている。

火消人足、御用人足、水主方への賃金を賄った要蔵と繁蔵は、外国人荷物の取り扱いを独占的に担っていた。ここで、石川屋が石炭屋の輸出荷物を東波止場まで運送していたことを考えれば、資料7にみられる「外国人荷物取扱方」とは、資料8の「異人波止場荷物場」を主としていたことが推測される。馬車による運送と競合するのは、波戸場から外国人商館までの陸運も担っていたためであろう。東波戸場における運送の独占的請負というよりは、外国人の求める運送業を独占的に請け負ったと考えるべきであろうか。

また、明治三年には、要蔵と繁蔵から、外国人荷物の船による運送と、市中の運送荷物取扱を新しく許可するよう請願が出された<sup>五八</sup>。外国人荷物の艀輪送は人足方の管轄ではなかったことがわかる。そして、この請願は、先にみた明治三年の「水揚帳」に鈴村屋要蔵が運送業者として登場する状況につながるのである(表3)。外国人荷物運送における特権的な地位の事実上の剥奪をへて、元町政吉・駒形町要蔵が、外国人荷物以外の顧客確保に迫られたことを示している。

政吉・繁蔵は元町に、要蔵は駒形町に住んだ。元町は横浜村の居住者へ与えられた、外国人居留地の東側に位置する新市街地である。山手居留地が文久期に開発されて以降、新堀川の東側は横浜村の村民と外国人が居住することとなった。駒形町は、横浜町七丁目と称する資料もあり、運上所の東側で、居留地との境界あたりに位置する。もとは外国人向けに建設された長屋であったが、町年寄へ払い下げられたものである。いずれも居留地に近い町域であり、東波止場荷物運送の統括者が持った外国人に直面する特異な性格を表している。

人足方の派遣をおこなう拠点については絵地図から確認することができない。鈴村要蔵が人足溜まり所の名目で賭場「要蔵部屋」の経営をおこなったことが回顧録にみられる程度である<sup>五九</sup>。元治元年の「横濱みやげ」には、火消し組「三番ヨ組」の主だった構成員につづき、「右は異人館日雇人足方元程ヶ谷部屋要蔵一手の組なり」と記す<sup>六〇</sup>。要蔵は、

もともと保土ヶ谷宿での河岸人足で、保土ヶ谷宿本陣で横浜町惣年寄となった荻部清兵衛に抜擢されたと伝えられる<sup>六六</sup>。「保土ヶ谷部屋」と「要蔵部屋」は同じものであろう。

一方で、資料7にみられる「水主方」は元町水主頭取九蔵のもとと集団である<sup>六七</sup>。水主頭取九蔵は、同村の勘次郎とともに横浜の獵師から抜擢されて扶持を与えられた。以下は明治二十五年刊行の歴史年表『横浜沿革誌』の安政六年七月の記事である<sup>六八</sup>。

〔資料9〕※○内は割注。

同月運上所附用船十余艘（海辺通四丁目ニ造船所アリ）を備ひ、横浜村の漁夫勘次郎・九蔵の兩名に水主頭取を命ず、玄米四石二斗二人扶持宛を給し水主三十名に一人扶持宛給与す（扶持アル水主ハ親方株トナリ他ノ水主ヲ指揮ス、外国船ノ出入増加スルニ随テ客船運送船ノ業務頻繁ニシテ、頭取ハ数百人ノ水主ヲ指揮スルニ至レリ）運上所北門脇へ溜所を設置し、外国船の出入を注進す、入船ある時は役々三名、通弁一名、下番二名尋問の爲直に出張す、商船なれば下番二名を其船に乘組ましめ（出帆迄交代乗船ス）密商を予防す（日没後ハ荷物出入口を開チ日出ニ之ヲ開ク）

資料中から読み取れる業務内容は、客船・運送船の指揮と、入津した外国船の見回りであった。人足方の二人へ重大な影響を与えた慶応三年の外国人荷物運送業の自由化は、東西運上所（中央の波止場と居留地に新設された波止場の運上所のこと）の輸出入荷物を運送する荷船・通い船についてもそれまでの独占を廃し、最寄の船稼ぎをしているものに外国人との相対による雇用を許可するものであった<sup>六九</sup>。外国人荷物の陸送を独占した繁蔵・要蔵と同様に、荷船・通い船を独占した主体とは水主方であったと推測される。頭取と親方に与えられた扶持にくわえ、外国船との往復舟運も役に対する特権であったとみられる。

絵地図には、運上所の東隣りに「船会所」または「船役所」、慶応元年の役宅を記録した絵図面には両波止場の間に「水主溜所」がみられる<sup>七〇</sup>。文久二年の見聞記「珍事五か国横浜はなし」には、「水主勘次郎同九蔵船会所なり、まかりて両脇は水主長家なり」とあるため<sup>七一</sup>、水主方の詰め所と水主の住宅が所在した一帯であったことが理解される（図6）。

外国人荷物の運送は、横浜村出身者に保土ヶ谷宿河岸出身の鈴村要蔵を加えた人足方・水主方の頭取が取り仕切った。荷物運送の需要に対し、外国人の荷物運送の担い手を限定して統括させる体制は、取締を彼らに請け負わせようとする奉行の意図を想像させる。

### 3 運送方と人足方

運送方と人足方は、波止場で荷役をおこなう人足の差配をおこなう点が共通している。資料10は、安政七年閏三月の町会所からの回状の写しで、波止場に入入りする人足へ腰札を配布することが達せられている。

〔資料10〕<sup>六七</sup>

今般御運上所納屋東西之御波止場諸荷物運送致し候義者、御伺済之上、御場所江立入候人足共江右御願濟渡世之もの共より銘々腰札壹枚宛老人別ニ取調、其日限り相渡し、差出し候様被 仰付候間、以来無札之者立入候上者、急度被仰付候趣被 仰渡候間、無札ニ而老人たり共立入申間鋪候、依之此段相達し置候間、借家・店借等ニ至迄、不洩様可相触候、以上  
申間参月廿三日 町会所

廿四日 児玉方送り来候間、直様写取鴨井屋江送り渡し候諸荷物運送の許可を得たものは、東西の波戸場へ立ち入る人足を腰札によって管理し、一日ごとに配布したうで派遣することが命ぜられた。以後、無札の人足は波止場から排除されたのである。

鑑札配布の許可を得た具体的な人名は不明だが、諸荷物運送の許可を得た者であるので、西波止場は運送方、東波止場は元町政吉・駒形町要蔵が該当すると考えられる。交易が本格化するなかで波止場での人手需要が拡大し、多数の出稼ぎ人が流入したことが背景として想定される。波止場は交易上の要であり、運送業者を介して取締の強化を試みた触れといえる。

横浜開港場に流入する人足については第四章で資料を紹介したが（資料11）、ここでは荷役に従事する人足の口入・木賃宿の開業が申請され、外国人荷物を扱う人足については「人足方」が取り締まっているとされていた。安政七年に義務付けられた腰札による波止場人足の取締規則が、とくに外国人荷物輸送ではない部分において、運送人足全体を掌握するほどは機能していなかったことを思わせる。

「人足方」という名称からすれば、むしろ人足を統括する役割のほうが中心にあったとも考えられ、東波止場運送の請負は、都市全体の「日用」層統括の一つの形であったと考えられる。

人足方頭取のうち、とくに鈴木要蔵は明治期の回顧によくあらわれる人物である。火消組、御用人足、外国人荷物運送を統括し、一方で「要蔵部屋」とよばれる賭場を所持したとされる人足方頭取は、江戸の鳶に類する人格を有したことが推測される<sup>六八</sup>。

他方、運送方の面々はどのような人物であつたのか、必ずしも明らかにはならない。江戸南伝馬町三丁目の人足請負・運送・土木を家業としていたとされる平間屋平五郎は<sup>六九</sup>、人足の差配をする経験を有したと推測される。また、中嶋屋喜助の拝借地所に借家人として住んだ軽子頭・車力頭の存在は、地所拝借人たる運送方と人足を実質的に結び付ける存在であつたと思われる。表2に示した通り、元治二年には借家人として別世帯の登録となつていた藤助が、慶応二年には中嶋屋喜助の世帯に組み込まれている。両者の密接な関係を示唆していよう。人足の統括者を店に抱えるような運送方の一形態として認めうるのではないだろうか。資料10にみられた腰札も、実際には頭の方が管理したのではないかと思われる。元治二年の人別帳に記載された「寄子」の呼び名は、人足方要蔵の例にみられた「部屋」の空間を想像させるためである。

#### 四 明治以降の展開

##### 1 運送方の事業展開

##### (1) 都市名望家への変化…石川屋又四郎、又七

明治以降に石川屋又四郎の店支配人として現れる又七は天保九年三河国生まれで、後に区会議員、県会議員、水道局長、商工会議所の役員、貴族院議員などを歴任し、銀行業や火災・海上保険会社等の重役をつとめ、棧橋会社の発起人をもつとめた名望家、朝田又七である。元治二年の人別帳によれば、西横町吉次郎（石炭屋）の借家人又七は、天保九年生まれ、遠州敷知郡橋元村（現静岡県湖西市）出身で元町又四郎を請人としていた<sup>七一</sup>。明治期の朝田又七の住所が石炭屋の土地に該当することから、同一人物ではないかと思われる。出身地の橋本村は遠見国の西端にあり、後世に三河国出身を称したものと想像しておきたい。

明治二年六月、石川屋又七は弁天通四丁目地所拝借人伊勢屋平太らとともに「外国船積問屋」の開業を請願した。

〔資料11〕<sup>七二</sup>

「外国船積問屋御願上写」上

乍恐以書附奉願上候

弁天通り四丁目御地所拝借人伊勢屋平太幼年二付、後見安兵衛外四人奉申上候、私共儀は御開港以来御当所ニ安住仕、今日迄當罷在候段、難有仕合奉存候、先般御開港場所外国便船江御国人乗込、且外国船雇人荷物運送共、御免許被 仰出候二付、商事は殊更便利ニ相成一同難有奉存候、然ル處、遠近国辺鄙之者ニ至ッては、右外国船雇向御規則等心得不申、殊之外手数数ニ相心得、無抛不便利を患ひ陸地運送仕候得ハ、自然物価響キ、亦は竊ニ外国人小遣に紛れ乗船仕候輩も有之哉ニ御座候、依之今般私共右外国船積問屋家業當候様仕度、然ル上は乗込人并諸荷物、書状ニ至迄委細取調、聊不審之簾御座候得は篤と吟味仕、早々御届ケ奉申上、乗込人之義、出帆前二居住身元相糺、御裁判所江奉願、御免状頂戴仕候上ニ而乗込為仕候義ハ勿論、其外御規則堅ク相守、不調法無之様、精々心付營業仕度奉存候、右は御開港被成下置候ハ、両三ヶ月相試候上、弥利潤相成候ハ、其節方相応之御運上相納候様仕度、何卒以 御慈悲右願之通外国船積問屋被 仰付被下置候様、偏ニ奉願上候已上

明治式巳年六月

弁天通四丁目

御地所拝借人

伊勢屋平太幼年二付

後見

安兵衛

太田村

清六店

伊勢屋

勝三

南仲通五丁目

御地所拝借人

伊勢屋

勝郎

弁才天町

亀吉店

伊勢屋

金兵衛

本町五丁目西横町

御地所拝借人

石川屋

又七

#### 御裁判所

「外国船積問屋」の具体的な営業内容は記載されていないが、許可を得た外国船への旅客と、外国船による荷物運送を仲介する営業であったと推測される。本資料では、石川屋又七は西横町の地所拝借人とされるが、地所の取得年代は不明である。

申請者の伊勢屋平太は売込商で<sup>七三</sup>、南仲通五丁目の伊勢屋勝郎は東京本材木町三丁目の伊勢屋勝三（旧佐野藩士西村勝三）の出店とみられ<sup>七四</sup>、明治三年には門屋幸之助とともに海外への直輸出や宿の機能を果たす同盟会社の結社を請願した<sup>七五</sup>。伊勢屋金兵衛の居所弁財天町は、弁天社移転にあたって誕生した新市街地である。いずれの人物も文久二年の地所拝借人にはその名がみられず、比較的新興の住人であったことが推測される。運送方の成員に限られない人びととの新規願として注目される。

朝田又七は、はじめは車引きであったところ、三菱会社で重用され、各種の事業を展開する実業家となったとされるが<sup>七六</sup>、明治初頭にはすでに独立した活動を始めていたのである。幕末から明治初頭にかけて石炭屋、石川屋又四郎のもとで蓄積を得たといえるだろう。明治以降にも営業のつづく者が多い運送方のなかでも、特に幕末段階ではずみをつけることに成功した人物である。波止場に近い広大な地所を有した石炭屋との関係は、石川屋にとって重要な地盤であったといえるだろう。

#### (2) 蒸気船航路の開拓…金子屋常次郎、健蔵ほか

三丁目西横町の金子屋は、車力渡世の車屋と同じ三丁目東横町（横町通りと南仲通りの角地）の地所を拝借した。文久期までは金子屋常次郎、明治の初めごろから金子屋健蔵の名義となるが、「大港光商君」によれば金子屋健蔵の所在は本町三丁目横町、後述の蒸気船就航申請では南仲通り三丁目とされており、金子屋常次郎と同一の店と考えられる。

慶応元年に江戸の横浜回漕問屋へ新規加入を出願した人物に、小網町一丁目の金子屋健蔵という者がいたが、横浜店の名義の変更時期や営業の内容から同一人物の可能性が高いと考えられる。出店時の金子屋の出自は不明だが、慶応期ころには江戸・横浜をまたぐ活動となっていたといえる。明治五年、金子屋（柏木）健蔵は蒸気船を購入して東京・横浜間の運送を開業した<sup>七七</sup>。翌年までには清水湊との航路をつないでおり、上総・房州への連絡船開業を請願している<sup>七八</sup>。

開業の詳細は不明ながら村田屋、八幡屋、平間屋も蒸気船営業に着手していた。村田屋（海老塚）与次右衛門は蒸気船を建造し、横浜・清水間をつないでいたという<sup>七九</sup>。八幡屋七五郎は、明治四年に高木回漕店を開業し、蒸気船三邦丸を活用した<sup>八〇</sup>。明治三年に平間屋を継いだ三代目の（成川）平五郎は、屋号を回漕問屋平間屋と改め、東京との間の汽船営業を開始したという<sup>八一</sup>。

また、明治九年二月には、駿州屋定助とみられる横浜の「駿定」と静岡・清水の富商によつて蒸気船清水丸が就航となり、茶などの荷物を輸送した<sup>八二</sup>。清水は駿府の外港であり、幕末以来、駿州や遠州の茶の積み出しが行なわれた湊であった<sup>八三</sup>。駿州屋と駿府・清水商人の関係を表す資料は未見であるが、東京の駿州屋定次郎と駿府に本店をもつた桑名屋源次郎の江戸店がともに小網町三丁目清兵衛の屋敷地に所在し、かつ横浜の駿州屋定助が駿府町人の拝借地所であった位置に該当する点がヒントとなるかもしれない。「駿州屋」の屋号を考えても、駿府に縁の深い人物であった可能性はあるだろう。

なお、海岸通り三丁目の駿府町人による出店、駿河屋の広告では、東都の小舟町一丁目木屋小左衛門と横浜の海岸通り四丁目高德屋半左衛門が荷物の送り先として指定されていた<sup>八四</sup>。年代は不明ながら、駿河屋の開業後で高德屋の営業した期間の万延・文久期のものであると考えられる。高德屋が送り先としてとくに指定された点に注目したい。運送方の

構成員は、横浜開港場の内部においても得意先（横浜商人）との関係を結んでいたことが推測される。明治初頭に開かれる清水・横浜間の蒸気船航路は、各地の出店商が集う都市横浜開港場における幕末の物資輸送の実績が重要な前提であったと考えられる。

## 2 人足方の変容と水主方

### （1）人足方 鈴木要蔵

外国人荷物運送の特権の否定と馬車の導入から、人足方の業務と御用のバランスは明治初頭には崩壊したとみられる。管見の限り、人足方頭取のうち鈴木要蔵は、①明治二年の「芸者躰之者」の取締についての新規願<sup>八五</sup>、②明治五年の陸運会社設立<sup>八六</sup>、③同年の人足・車力・馬士の規則にその名を確認することができる<sup>八七</sup>。③について資料から考察を加えた

い。

〔資料12〕

（前略）

#### 第九則

一、便利車勢之為之当社ニ付、継立方遅々不可致者勿論、荷物大切ニ取扱、濡痛不相成様可致、若人足・馬士・車力之者共荷品盗取、其外不埒之所為有之節ハ、社中におゐて相償可申事

#### 第拾則

一、当社中人足・車力・馬士等者目印ニ可相成半天着用為致、名前并番号等記し候鑑札相渡置可申、且、一樣二者不相成与も股引をも為履、決而裸躰ニ為致間敷候事

#### 第拾壹則

一、人足・馬士・車力共ニおゐて、荷主并荷物送先、其外江対し、酒代者勿論、訳柄を設けねたりケ間敷義、一切いたす間敷、若心得違いたし候者有之趣相聞候ハ、社中より相償可申事

#### 第拾貳則

一、賃錢者、表面之通ニ候へ共、夜中或者乗船時刻ニ差掛り、又者着船・上陸等急遽に荷物運転之儀、船客等より申聞候節者、定賃錢之五割増可請取、尤其段表面ニも掲載いたし置可申事

#### 第拾三則

一、人足・車力・馬士名前并人足・車・馬之教員取極置可申事

#### 第十四則

一、持馬を以継通し来候分者勿論、当社江不継送帰馬等之分者、荷物運送致候与も、差構申間敷候事

#### 第拾五則

一、市中辻々ニ立湊居候輕子人足共者、身元も不慥成より、強而不相当之賃錢等貪取、不取締之いたし方も多く候間、当社之附属与いたし、辻々ニ立湊様為致事

#### 第拾六則

一、賃錢請取候節者、会社之仕切判押有之手形を以可請取之、荷主より荷物請取候節者、送状に会社之押切判可致事

#### 第拾七則

一、社中一同熟議之上規則相立候者、確守可致者勿論、一己之了簡を以損益を量る則外之儀、決而致間敷、営業之上遺漏之儀も候ハ、猶協議之上規則書加へ可申事

右之通確定候事

明治五年壬申五月

港内

駒形町

鈴木要蔵

弁天通二丁目

関谷音兵衛

戸部町・野毛町・宮崎町

右三ヶ町惣代

川本源八

太田村

日高儀兵衛

戸部町・野毛町

拾三人組惣代

第八則の前半までが欠けており、主体は明らかにならないが、ねだりがましき行為に対する社の補償（一一条目）、賃金・荷物の請取のさいに会社の印をつけることが条文にみられることから（二六条目）、陸運会社の規則とみられる。連印者は駒形町鈴村要蔵、弁天通り二丁目関谷音兵衛、戸部町・野毛町・山手町三ヶ町惣代川本源八、太田村日高儀兵衛、戸部町・野毛町十三人組惣代深野勘右衛門であった。横浜開港場周辺での結社であったといえる。

一三条目には人数・名前の確認、一五条目には市中にうろつく（「立湊」は「たちあつまる」か）軽子人足は身元が不確かで賃金をむさぼり不取り締めりであるため、会社の付属とし、辻々に建たないようにすることがそれぞれ定められている。開港場周辺における陸運会社は、流入する「日用」層の管轄を不可欠の課題としていたといえる。

なお、連印した弁天通り二丁目関谷音兵衛は、地所拝借人の馬持音兵衛であると考えられる（表1、図5の弁天通り四丁目馬持音兵衛（明治の二丁目））。波止場の運送を担った「運送方」ではない運送渡世の者が、明治初頭まで継続して馬による陸送営業をおこなっていたことが理解される。『横浜市史』によれば二俣川村の出身で<sup>八八</sup>、神奈川から八王子にむかう街道に近い村落である。関屋音兵衛の営業内容は現段階では不明だが、横浜にとって重要な陸運の結節点であった神奈川を経由する運送、とくに二俣川の近隣であった八王子や相州への街道にむけた運送が想定されよう。第一章でみた神奈川湊・宿にかかわる運送の担い手が横浜へ参入したことを示している。

また、先に見た通り鈴村要蔵は波止場における日本人荷物も取り扱った。明治十三年の「横浜区御国産波止場附」の面々にも、旧来の運送方にくわえて鈴村要蔵の名前が確認でき、継続的な営業となっていたようである（表1・⑧列）<sup>八九</sup>。明治期の回顧によれば、明治維新後に特権が排除された影響で、人足請負の競争が激化していったという<sup>九〇</sup>。鈴村要蔵はそうした状況のなかで新規願を繰り返し、したたかに運送業者としての立場を確保できた人物といつてよいだろう。外国人荷物の取り扱いが手薄になるなか、民衆のとりまとめとしての位置を強固にしつつ、広く開港場の運送業に乗り出していったことが伺える。

（2）水主方頭取 山口九蔵

横浜村獵師から拔擢された九蔵（山口九蔵）は、明治以降もひきつづき外国船荷物の取り扱いを担った。この点について、明治三年五月に布告された外国船との往復輸送船の規則から検討したい。

〔資料13〕<sup>九一</sup>

港内碇泊之外国船江往来いたし候船々取締方取扱

一、外国船江往復之客船并荷船とも官許願出候節は、港内ニおいて其稼方被許てあるものの寄子ニ成、何国何村誰船之子何人乗、生国・名前・年附等相認候書面、何れも寄親共方差出す事、実相違無之候ハ、客船江は号旗・燈籠并船主誰と相認候極印相渡、船子共江は生国・名前・年付等認たる鑑札相渡、荷船へハ、燈籠は不渡、其余前同断相渡、規則之趣申渡、且元帳江留置、都而船壹艘ニ付手数料として壹ヶ月金壹朱ツ、船子共方も鑑札料として壹ヶ月金一朱ツ、之割ニ而月々取立ル一、官許請たる船々勝手ニ付休業いたし候旨申立候船は承届、兼而渡置たる号旗・鑑札・其外等差配人共方取立納む、其旨元帳ニ記す

一、船々江渡し置たる号旗、暴風等ニ而失ひ候段訴出候ハ、其始末船頭共相糺、無念之廉に陥り候ハ、罰錢三貫文取立、新ニ号旗を渡ス

同月に出された港内に停泊する船へ往復する場合の規則「横浜港内往来の荷船・客船の規則」とは別個のものであり、外国船との行き来に限定して適用されたと考えられる<sup>九二</sup>。

表4 明治の褒章記録にみられる水主方  
明治8年11月19日の褒章

石井茂兵衛	房州朝夷郡千田村
滝口慶次郎	相州三浦郡毘沙門村
山口仙蔵	房州館山
長島吉五郎	相州三浦郡長沢村
佐久間角蔵	上総国周准郡富津村
渡辺勘七	
川口重吉	相州高座郡茅ヶ崎村
竹内福松	
山口九蔵	横浜元町五丁目
森尾八五郎	相州三浦郡走水村
石渡五郎吉	
細川治郎吉	
佐久間仙蔵	
奈輪直吉	
石渡長吉	上総国天羽郡千種村
鈴木若造	横浜元町三丁目
馬場長吉	上総国周准郡篠部村

明治9年3月の褒章

山口富蔵	元町五丁目山口九蔵長男
山口忠次郎	
山口国蔵	
大久保久次郎	上総国周准郡富津村
大浜平三郎	
多田常吉	
由島金次郎	安房国平郡岩井袋村
森山八五郎	石川町五丁目
菱倉権十郎	走水村（三浦郡）

〔出典〕『神奈川県史料』第3巻、1966年。

外国船との間で旅客・荷物の輸送をする場合には、すでに許可を得ているものの「寄子」になることが義務付けられていることが理解されよう。他方、「横浜港内往來の荷船・客船の規則」によれば、外国船ではない場合には、船頭が許可を得て船子へ鑑札を配布することになっていた。

つまり、外国船との旅客・荷物運送は統括者が依然として限定されていたのであり、寄親・寄子という関係の表現は、資料9の水主方の組織を彷彿させる。人足方に大きな影響を与えた慶応三年の自由化であるが、水主方の位置が大きく揺らぐことはなかったといえるだろう<sup>九三</sup>。また、明治十四年の「横浜商人録」には、元町の「廻漕商」一八人を記録する。おそらく横浜村出身とみられる彼らは、「水主方」の親方であつたのではないだろうか。

水主方とみられる船乗りは、明治八、九年の褒賞記録にその一端がみられる<sup>九四</sup>。明治八年十一月、東京へ向かう魚の運送船が「東波止場」付近で風にあおられ難船した事件がおこつた。山口九蔵の配下にあつたかどうかは不明であるが、東波止場付近に居合わせていたことから水主方の者と推測される。出身地をみると上総、房州、相州の者がみられる。

九年の事件は、波止場から郵船玄海丸への舢舨が転覆したもので、こちらは山口九蔵（または長男富蔵）の雇人であることが明記される（表4）<sup>九五</sup>。資料9で水主頭取が数百人の水主を指揮したとされるように、非常に多くの船乗りが流入したことがわかるが、神奈川や野毛、戸部、横浜などの近在のみならず、江戸内湾、東京湾に叢生した海付村落からの流入があつたことが推測される。

そして、山口九蔵には新しい業務も追加され、明治元年九月には横須賀行の蒸気船への乗客の管理者として<sup>九六</sup>、明治二年三月には、築地居留地が新設されるにあつて、税関を出入しない東京・横浜運送の担い手として、神奈川県庁から指名された<sup>九七</sup>。

### 3 御国産波止場の造成—運送方・人足方の揚棄—

中央の波止場に日本人と外国人の荷物がともに出入りする状況は明治五年に変更された。税関と神奈川県は、中央の波止場を外国人荷物出入りに限定し、日本人の荷物出入りは、四丁目の海岸（江戸時代の二丁目）に移転されることとなつたのである（図7）。これは外国人の荷物の出入り場所を明確にすることで密貿易を防ぐ目的であつたとされる<sup>九八</sup>。日本船の碇泊位置を明確にさだめた同年の法令と目的は同じであろう<sup>九九</sup>。

明治二十五年、第一次築港事業の一環として新設されようとした、鉄製棧橋と既存の鉄道敷を連絡する線路が、国産波止場と海の連絡を損なうとして計画の変更をせまつた際の請願書には、波止場造成の顛末が記されるので、以下に概要を記す<sup>一〇〇</sup>。

慶応三年、神奈川奉行から税関波止場に沿つた千坪の埋立地（明治二十五年当時の税関煉瓦倉庫地、図7）の造成費用として金三千円の上納を命ぜられ、年賦による上納を申し出、明治四年に完納した。ところが、貿易の発展とともに専ら外国人荷物の揚場として使われるような状況になり、旧來の波止場で窮屈なこともあつて、明治五年、税関・県庁の協議によつて、海岸通り四丁目（江戸時代の二丁目）の海岸が波止場として決定された。しかし、海岸通りは道が狭隘で荷車の便が悪く、浅瀬なために舢舨の係留に不便であつた。明治六年、業者から出願して、道の修繕と海面二三四〇坪の埋立を自費で遂行した。以後、海岸の修繕も自分たちで賄い、明治十七年に出願して建設した上屋についても同様であつた。

以上の記録にくわえ、明治六年の埋立事業については、明治四十四年の「実業通信」に収録された資料が波止場の埋立への出資について詳細を伝える<sup>一〇一</sup>。埋立の出資者をみると、運送方と人足方頭取の面々であつたことがわかる（表1・列⑦）。当時の出資額は区々であるが、出金の際の証文によれば、運送の仲介料から差額を賄うことが決定されている。

運送方の面々は波戸場建設代を一律で五七〇両負担しており、もと人足方頭取の鈴木要蔵、石川繁造とは若干の差がある。また、追加負担金をみると、最高額の朝田又七（二〇〇〇両）から負担していない成川平五郎（平間屋）や人足方頭取の二人と大きな差が認められる。これらは当座の資金負担能力をあらわしたものと見て良いだろう。朝田又七、松下定助（駿州屋）、海老塚与次右衛門（村田屋）の三者が当時の波止場運送業者の筆頭であつて、つぎに蒸気船営業にも着手していた柏木健蔵（金子屋）、土屋五三郎（山形屋）、高木七五郎（八幡屋）が次点となつていたことが理解される。なお、田辺喜八については、明治十四年の商人録に村田屋の屋号をもつ田辺喜八が海老塚与次右衛門と同じ住所にあり、両者の深い関係を示している<sup>一〇二</sup>。

新しい御国産波止場は、大岡川の岸に明治三年にひらかれた湊町波止場とともに東京・横浜間の舟運の発着点となつた<sup>一〇三</sup>。湊町波止場の運送は湊町の五名の廻漕業者が担当した（表1・⑧、⑨列）。

こうして中央の二本の波止場が国内外の荷物運送の中枢であった幕末の状況は終結した。運送方・人足方の区分は解消され、新しい波止場の運送集団として明治中期にいたるまで国内荷物の運送を支え続けたのであった。旧来の運送請負人の蓄積が新しいインフラの形成として結実したと評価できるだろう。

一方で、明治二十五年の請願は、回漕業者と海岸の地主であった三菱会社・左右田金作とともに提出され、日本人町の海岸への鉄道敷設は中止となった。そして、大正七年の新港埠頭（現在のみなとみらい周辺）が造成されてようやく鉄道と埠頭が一体化したのである。新港埠頭が鉄製栈橋や居留地周辺ではなく、御国産波止場の位置に計画されたことは、海底地形によるところも大きいが、鉄道との連絡が容易で、すでに物資輸送の拠点としての繁栄があったことも影響したのではなかったか。その背景には、明治五年に移転された幕末以来の運送の担い手、運送方・人足方の活動が想定されるのである。旧運送方・人足方の成長は、二度の近代築港計画に少なからず影響を与えたといえるだろう。

## 五 結語と展望

安政の開港にあたり、既存の海岸を否定して造成された近世巨大港湾インフラの波止場は、そこに編成された運送集団をとめない明治初頭まで、都市全体の物資流通の中核であり続けた。蒸気船は着岸できず、奉行による貿易の取締りを目的として計画された波止場は、一方で、中小の海舟が着岸できる形態と、都市全体にわたる利用者の集約された巨大さから、明治中期以降に誕生する「埠頭」と旧来の湊に共通した「海岸」の中間に位置づけることができる。

都市の船着き場が限定されたために、日本人・外国人ともに波止場の三集団を介して都市外からの物資を受け入れ、搬出したことであろう。また、東西波止場は、開港直後の初期段階からすでに流動的な「日用」層が数多く滞留していたのであり、抜け荷・密輸の防止のような内外商人への取締りとともに、波止場内部の労働者に対する強い編成が必要とされたのであった。運送方・人足方に対する支配者・利用者の両側からの要求のうえで彼らの営業が成立したといえる（図8）。

そして、波戸場に集約された物資運送を担った集団は比較的安定しており、明治中期ま

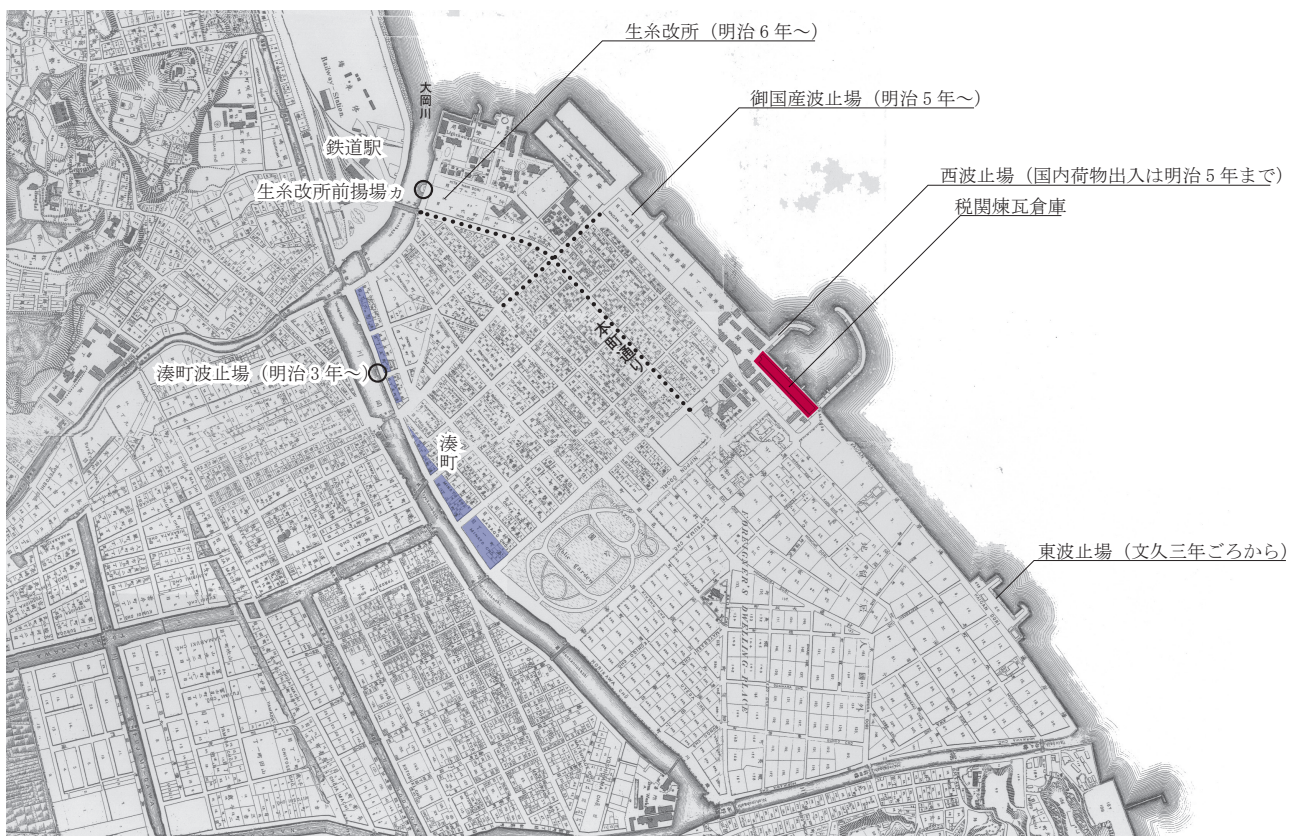


図7 「波止場」の分布 明治十三年測量「横浜実測図」に加筆。

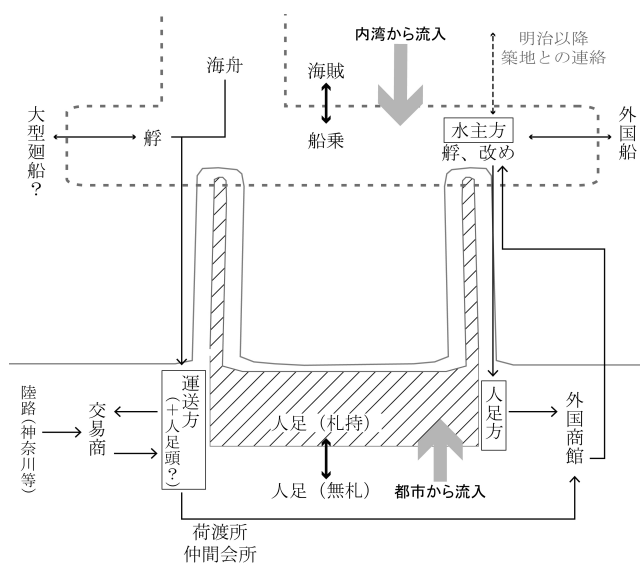


図8 都市社会における波止場の構図

外国商館と外国船との間の運送については不明な点が多いが、現段階の理解を示した。

で営業を続けたものが少なくない。蒸気船による海運業を代表とする新規願によって、明治前期の実業家層の一角となるものも輩出された。横浜商人の番付表「大港光商君」における位置、慶応三年の波戸場周辺の普請への出金、明治六年の御国産波戸場造成は、とりわけ運送方の面々の蓄積を明示している。つまり、取締りを主目的とした波止場は、物として鉄製棧橋の築造へと連続するだけではなく、そこから明治以降の物流を担う集団をはぐくんだのであった。

最後に、明治十年代以降の動向について課題を挙げておきたい。次章では海岸の地主を論ずるが、そこで重要な位置にあったのは、明治五年に支店を南仲通りに開き、さらに明治九から十年ごろに海岸通りに店を開いた三菱会社である。たとえば駿州屋定助と静岡・清水の富商による蒸気船営業は、三菱会社の参入によって値下げ競争となった。また、朝田又七が三菱会社にて人足頭となり、上昇したという成功譚が伝わっており、差波亜希子によれば、明治十四年、横浜の石川屋は三菱の汽船荷物取り扱い業者であった<sup>一〇四</sup>。そして、八幡屋のひらいた高木回漕店は、大正七年の時点では「郵船会社の専属」とされたの

である(表1・列⑪)。明治二十五年の請願においては、波止場で揚げ降ろされる荷物の三分の二ほどが日本郵船会社の汽船によるものであったという。三菱会社を受け継いだ日本郵船会社と波止場運送業者の密接な関係を示しているよう。

このように、強大な海運業者は、既存の集団を組み込みながら開港都市横浜の支店を成立させたとみられる。次章では、御国産波止場と隣接する三菱会社・郵船会社の土地の変遷を追うことで、両者が一体的に機能したことを明らかにするが、運送業者と三菱会社の関係の詳細については今後の課題としたい。

一 吉田伸之「御蔵米」と江戸の湊『都市史研究』第三号、二〇一六年十一月。

二 高村直助「水上のシルクロード」吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。

三 藤村潤一郎「横浜における飛脚屋と郵便役所」『創価大学人文論文集』第一号、一九八九年三月。

四 西川武臣「明治初期の神奈川県の無宿人対策」『横浜開港資料館紀要』第三号、一九八五年三月。

五 西川武臣「幕末・明治初年の東京(江戸)・横浜間の水運について」和船から蒸気船へ」横浜開港資料館・横浜近世史研究会編『一九世紀の世界と横浜』山川出版社、一九九三年。

六 『横浜市史』第二巻、一九五九年。

七 「水野忠徳雑録」二(東京大学史料編纂所蔵)。また、フランス人クリペによる慶応元年の地図「横浜開港資料館所蔵、請求記号 B32.032.24」をみても、波戸場の内側のみに石段が表現される。

八 財団法人三井文庫『三井事業史』資料篇二(一九七七年)。資料番号二六。

九 この点に関して、宮本雅明の示した近世港町のモデルが参考となる(宮本雅明「近世港町の都市空間」宮本雅明『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年)。

一〇 『大日本古文書 幕末外国関係文書』九(東京帝國大學文庫史料編纂部編、一三九頁。下田取締掛から老中へ下田の取り締まり方法についての意見書で、既存の二ヶ所(鼻黒・柿崎)にくわえ、見分のうえで手軽で取締に適した場所への新築が提案されている。外国船停泊時には動番の者をおき、改めるとし、老中の許可も得た。また、嶋村元宏「横浜居留地成立の前提—日米和親条約を起点として—」横浜開港資料館・横浜居留地研究会編『横浜居留地と異文化交流 一九世紀後半の国際都市を読む』山川出版社、一九九六年。

一一 『大日本古文書 幕末外国関係文書』附録六、二五〇頁。外国奉行村垣淡路守の公務日記。安政六年四月二日の記事に、御船小屋一棟と波止場一ヶ所、木戸門の建設の費用が減るように、老中太田資始から指示されている。

一二 明治元年七月〜十二月「達掛合留乾」(東京都公文書館所蔵、請求記号 A605.A3.06)。また、吉田伸之「流域都市・江戸」伊藤毅・吉田伸之編『別冊都市史研究 水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。

三 第三章にて言及した通り、安政六年三月三日には日本人町の東側に運上所と役宅、波止場を造成することが現地で決定された。本図はこの計画以前における普請の概略を検討するためのものであったと考えられる。

四 阿部勇「安政六年、上田藩の生糸輸出」『千曲―郷土の研究―』東信史学会、第一四六号、二〇一年二月。

五 開港資料館所蔵の貿易瓦版「異国五箇国東海道神奈川在横浜御貿易場」(請求記号 Ab3-21-20)。

六 「新編武蔵風土記稿」(横浜村の項)。

七 岡本哲志・日本の港町研究会「港町の近代 門司・小樽・横浜・函館を読む」学芸出版社、二〇〇八年。

八 「市中取締書留」(慶応十一ノ二十、三分冊之一(旧幕府引継書、請求記号 812-3、国立国会図書館所蔵)。小船町壺丁目木屋小左衛門ほか四人による、横浜運送方の人数量定に関する請願。本資料の内容は第八章にて扱う。

九 安政六年五月「御触書并願書扣」(県史写真製本「神奈川県立博物館所蔵資料」一、神奈川県立公文書館所蔵)。三分冊のうちの一冊。

一〇 万延元年九月、生糸売込商肥前屋小助から提出された訴えによれば、生糸が江戸問屋から神奈川宿の荷次問屋三文字屋与八と漆原専助を介して送られてきたようである。神奈川から横浜へ生糸を陸送する経路は、両所を結ぶ道の整備を一つの要因として元治年間には定着していたことが高村直助によって明らかにされている(前掲論文注二)。

一一 石井寛治「近代日本とイギリス資本 ジャーデイン・マセソン商会を中心に」東京大学出版会、一九八四年。

一二 『諸問屋名前帳』細目四(国立国会図書館参考書誌部、一九六四年)。

一三 『大日本古文書 幕末外国関係文書』三三。

一四 『横浜市史』資料編一。「三井家文書」の資料番号一。三井戸店による生糸取締に関する日誌「貿易荷物取締向一件始末書」(二五四頁)。

一五 『横浜市史』資料編一。「外国貿易諸色一件」の資料番号三九、万延元年六月の糸問屋行事の報告。

一六 同右。「三井家文書」の資料番号一「貿易荷物取締向一件始末書」(三二二頁)。

一七 西川武臣「幕末明治の国際市場と日本 生糸貿易と横浜」雄山閣出版、一九九七年。第一章注七八の計算方法に依拠した。

一八 安政六年「大石善言日記」(葵文庫、静岡県立図書館所蔵。五月二日の記事)。

一九 「金川日記」安政三年八月二十五日の記事。また、屋号不明ながら、神奈川宿から八王子への荷物運送に関する願書には、甲州街道を通じて穀類を輸送する主体として「専助」と「八郎右衛門」が署名している。開港場運送の仲介者としての漆原専助は、開港以前から神奈川宿・神奈川湊の運送に従事していた可能性を示している。

二〇 慶応元年七月「預申金子之事」(神奈川宿青木町廻船問屋紀伊国屋三郎兵衛家文書、神奈川県立公文書館所蔵)。

三 神奈川県立図書館編『神奈川県史料』第五卷、一九六九年。「駅通」のうちの「陸運会社」の項(四九〇、四九二頁)。

三三 神奈川宿本陣石井家文書(神奈川県立公文書館所蔵、請求記号 2199435089)。年・題欠(神奈川町青木町組頭世役等名前書上)。

三四 増田廣實『近代移行期の交通と運輸』岩田書院、二〇〇九年。

三五 『神奈川県史』資料編一〇(近世七)、一九七八年。資料番号四二二、「横浜開港場見聞記」(原題は「外国貿易場所開港見聞記 卷之三」)八月二十日、九月十八日の記事。

三六 『神奈川県史料』第五卷。「駅通」のうちの「廻漕船問屋及外国人荷物運送」(四九三頁)。第二章を参照。

三七 「大港光商君」は、横浜市史編纂掛編『開港七十年記念 横浜史料』(一九二八年)に収録される。

三八 『神奈川県史』資料編一〇に所収の万延元年十二月「神奈川奉行所職員録」(資料番号三八八)。

三九 文久二年正月写「御拝借地所・御願済渡世合寫」(山梨県立図書館所蔵資料 篠原家文書 六、七に所収(県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵))。

四〇 「雑資料」三(市史稿写本、横浜開港資料館所蔵)。同資料の末尾には、軽井沢平野英一氏蔵書を大正十三年に写した旨が記載される。

四一 「検使書類」(五味文庫、請求記号一・二九、横浜開港資料館所蔵)。

四二 神奈川宿本陣石井家文書(神奈川県立公文書館所蔵、請求番号 2199436289)。

四三 慶応二年「本町五丁目人別帳」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵)。元治二年の人別帳には軽子頭孫兵衛の名は見られない。

四四 明治三年「寛」(横浜遊郭関係文書、請求番号二七、横浜開港資料館所蔵)。日付は午七月十七日で、伊勢屋善四郎を五丁目の住人とする印形が打たれているので、明治三年以前であることが明らかで、かつ開港以後の午年であることから明治三年とした。

四五 「諸留記」(小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵)に所収。

四六 同右。本資料については第八章参照。

四七 『東京市史稿』市街編第五に所収の、明治三年八月二十三日「積荷運送問屋新規営業許可」(四七〇頁)。

四八 西川武臣「商人の活動と流通の諸相」『江戸内湾の湊と流通』、岩田書院、一九九三年(第四章)。森公田村倉藤家からの薪輸送の送り状に、海岸通り五丁目の伊勢善、元町の石川又四郎、山形屋直吉の名がみられるという。ただし、運送方の主体的な海運業としてみなしうるのか、斎藤家からの送り荷の受動的な受け入れ、仲介に過ぎないのかの判断はできない。

四九 前掲資料注四六。明治三年に横浜廻漕問屋一名が廻漕会社の役員として任命され、そのなかに小網町三丁目の駿州屋定次郎の名が認められる。詳細は第八章であつかう。

五〇 明治三年「水揚帳」(三九工業株式会社文書、横浜開港資料館所蔵)。

五一 高村直助「幕末・明治前期における売込商石炭屋の経営形態」『横浜市史』補巻、一九八二年。

五二 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五三 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五四 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五五 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五六 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五七 三九興業株式会社文書(横浜開港資料館所蔵)。

五二 この点については、石川屋又四郎が元横浜村住人で元町に住んだことと関係している可能性がある。

「御拝借地所御願済渡世合寫」は、横浜町（一丁目から五丁目、駒形町や坂下町）の地所拝借人と願済渡世は記録しているものの、元町に居住する者については記録されない。また、表1の石川屋慶次郎が同一の屋号で、「運送」、「人足方」を許可されており、石炭屋の貸地の記録には「運送方石川屋政吉」の名がみられるという（前掲論文注五〇）。何らかの関係がある可能性もあり、石川屋政吉と、元町人足方の政吉（横浜村出身者は地名「石川」をとって「石川屋」の屋号が多い）との関係も、人足方と運送方の関係（運送方—人足方—人足の重層した関係）を示しているように思えて重要だが、現段階では保留しておきたい。

五三 「御拝借地所御願済渡世合寫」では、朱書きにて、石川屋又四郎から宗兵衛への変更がなされる。また、元治二年「本町五丁目人別帳」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）によれば同地所の拝借人として「惣兵衛」が確認される。

五四 横山錦欄編『横浜商人録』大日本商人録社、一八八一年。

五五 高村直助によれば、釜屋金兵衛は茶を引き当てにして石炭屋から貸付を受けていた（前掲論文注五〇）。

五六 吉田伸之は、城下町江戸の発展段階の最後、折しも幕府が解体するタイミングにおいて、オランダの技術を取り入れつつも近世の土木普請の達成がみられた例としてペリー来航後の台場建設に言及した（吉田伸之『都市 江戸に生きる』岩波書店、二〇一五年、一章第四節）。

五七 資料7、8ともに「保土ヶ谷宿本陣記録文書」十六（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。写本中で資料8は後欠で、題名も記録されていない。明治元年に鐘撞所と番人小屋を普請する際の仕様書や入費の集金のための一連の資料のなかに収録される。鐘撞所の普請と火消人足の関係は不明で、前後欠のために書付の内容は確定し難い。後略の部分には冥加としての町会所付き火消人足供出の辞退が取り上げられず、「私共」の「見込」を申し出るよう命ぜられた旨と、「見込」の内容が続く。神奈川や保土ヶ谷のように横浜の周辺への欠け付人足には要蔵の配下の者は向かわせないこと、火消道具等は、五ヶ町の振り合いをもつて町会所歩合金からもらい受けた旨を主張している。「見込」とは、町会所付き火消人足に関して今後希望する仕法のことであり、「私共」は人足の供出者、つまり要蔵と繁蔵のことであろう。したがって、本文書は人足方二名による、町会所付き火消人足の負担が外国人荷物輸送の利益と対応していた旧来の仕法から、五ヶ町の火消人足と同じ経費とすることへの嘆願と推測される。

五八 「保土ヶ谷宿本陣記録文書」十八（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。

五九 横浜貿易新報社『横浜開港側面史』、一九〇九年。田澤仁右衛門の回顧（二七一頁）。

六〇 『横浜近代史辞典 改題横浜社会辞彙』湘南堂書店、一九八六年（五四八頁）。『横浜社会辞彙』（大正七年）の復刻版。

六一 同右。文久二年「珍事五ヶ国横浜はなし」への編者（日比野重郎）の補足説明（三七七頁）。

六二 「保土ヶ谷宿本陣記録文書」十六（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）。「元町水主頭九蔵」が人足方の水主雇賃の滞納について出訴したことが記載される。

六三 太田久好『横浜沿革誌』、一八九二年。開港当初から明治二十八年までの編年による回顧録で、明治期になって神奈川奉行同心、神奈川県士族で外務省へも勤務した太田久好が執筆したもの。何らかの記録をもとに作成されたものとみられるが、回顧をまじえて書かれているため誤謬や時系列とは異なる順序の叙述も見られることが指摘される。ただ、文久元年の武鑑には、「水主頭船頭」として、勘次郎・九蔵と三十人が記載される。少なくとも人名や人数については正しい記載といえるだろう（『横浜史料 開港七十年記念』の資料番号四二番「神奈川横浜太平餘衆」）。

六四 横浜文化財総合調査会編『武州生麦村御用留』第三卷（慶応二年・三年）、一九八九年。

六五 国立国会図書館所蔵「御開港横浜正景」、大隈重信関係資料「御開港横浜大絵図」（早稲田大学図書館）。慶応元年の絵図面は、五味文庫「御役所其外地割絵図」（横浜開港資料館所蔵）。

六六 神奈川県図書館協会『未刊横浜開港史料』（一九六〇年）に所収。

六七 『神奈川県史』資料編一〇、資料番号三七三。

六八 横浜貿易新報社編『横浜開港側面史』（一九〇九年）の田澤仁右衛門氏の回顧（二六八頁）。

六九 成川禎蔵「横浜日本波止場—三代目成川平五郎についての一考察」『郷土よこはま』横浜市立図書館、第一〇六号、一九八七年三月。

七〇 肥塚龍「横浜開港五十年史」下巻、一九〇九年（附録「横濱の功労者」）。

七一 前掲資料注四二。

七二 「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）に所収。

七三 前掲資料注三六。

七四 「亜国川蒸気船破裂一件」（604.D3.01、22番、東京都公文書館所蔵）。アメリカ蒸気船の破裂事故の被害者について、乗船した経緯を記録した簿冊。横浜の伊勢屋の生業は不明だが、同資料によれば、「鍋島藩山口様」より伊勢屋勝三が預かった茂吉という乗船者は、商法と英学修行のために伊勢屋勝郎の店に来ていた。東京の伊勢屋勝三と横浜の伊勢屋勝郎の深い関係を示しており、また、後者が外国人との直接的な関係のある営業であったことを示している。

七五 「門屋幸之助等書翰」（大隈重信文書、請求記号イ14.b1015、早稲田大学図書館所蔵）。

七六 島田福太郎『成功者と其人格』春江堂書店、一九一一年。

七七 「各裁判所府県住復留」（請求記号 605.D3.08（一八番）、東京都公文書館所蔵）。

七八 「諸願諸届留」（606.D3.04（七番）、東京都公文書館所蔵）。

七九 『横浜市史稿』産業編、三〇三頁。また、村田屋は、明治九年、朝田又七とともに製氷業、明治十一年に朝田又七・伏島近蔵とともに共益社の社長となり、白米・醤油・薪炭の販売をおこなった。また、内外外国戦艦への飲料水販売もおこなったという（前掲書注七〇）。

八〇 前掲書注六〇。「高木回漕店」および「高木七五郎君」の項（五七九、五八〇頁）。

八一 前掲論文注六九。

八二 「清水・横浜航路の競争」（「重静岡新聞」の記事、『静岡県史』資料編一六（近現代一、一九八九年、資料番号五八番）。

八三 菊地悠介「幕末期の横浜貿易と茶流通—加藤家と駿遠地域の茶商たち—」小田原近世史研究会『近世南関東地域史論—駿豆相の視点から』岩田書院、二〇一二年。

八四 『横浜市史稿』産業編（一九三三年）の八一〜八三頁に所収。

八五 「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）に所収。

八六 『神奈川県史料』第五卷、「駅通」のうちの「陸運会社」（四八八頁）。

八七 小野忠秋家文書（横浜開港資料館所蔵）。目録の番号一〇番。前欠。

八八 『横浜市史』第二卷（一九五九年）の卷末資料「横浜商人録」による。

八九 明治十二年「運賃改正嘆願」（鈴木裕一家文書、請求記号2200333532、神奈川県立公文書館所蔵）。

九〇 前掲書注六八。

九一 「金川港規則」人（外務省引継書類、東京大学史料編纂所所蔵）本資料については、斎藤多喜夫によつて詳細な資料紹介がなされる（斎藤多喜夫「明治初年の横浜居留地―「金川港規則」から―」横浜開港資料館・横浜居留地研究会編『横浜居留地と異文化交流』山川出版社、一九九六年）。氏によれば、条約改正交渉の準備として、明治三年段階の現行法を記録した簿冊である。また、国立公文書館の所蔵資料「各港規則書類」（アジア歴史資料センターの請求記号A0401714800）のなかに同文の資料が収録される。

九二 こちらの規則は第八章であつかう（資料8）。

九三 慶応三年に許可された外国人との相対による雇用と、寄親・寄子関係の義務化がどのような関係にあったかは不明である。現段階では、身元の保証としては寄親に属しつつ、雇用は相対での契約が成立しえたと推測する。

九四 『神奈川県史料』第三卷（一九六六年）、「刑賞」。

九五 三浦郡の村々との関係は、横須賀製鉄所の誕生後に強まったことが推測される。たとえば、明治三年に鈴木安兵衛、水町久兵衛、山城屋和助によつて東京・横浜の運行が始まった蒸気船の乗組員には、稲川丸乗船経験のある三浦郡各村の出身者が水主として同乗した。

九六 横浜文化財総合調査会編『武州生麦村御用留』第四卷（慶応四年・明治元年）、一九九一年。資料番号六九。

九七 前掲論文注五。

九八 稲吉晃「不平等条約の運用と港湾行政（一）」首都大学東京法学会編『法学会雑誌』第四六巻二号、二〇〇六年一月。

九九 「太政類典」第二編第一九五巻（運送二十一・海運二）、国立公文書館所蔵。停泊位置については第七章参照。

一〇〇 中野健明・臨時横浜築港局編『横浜築港誌』、一九八六年。五一〜六四頁に掲載。

一〇一 この資料は前掲論文注六九に紹介されている。

一〇二 前掲資料注五四。

一〇三 湊町波止場の造成については、斎藤多喜夫「幕末期横浜の都市形成と太田町―太田屋新田西部地区造成関係資料を中心に―」（『横浜開港資料館紀要』第四号、一九八六年三月）にて論じられ、一帯の宅地開発人の負担で造成されたようである。

一〇四 差波亜希子「近世近代移行期における地方都市新興商人」吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。

## 第六章 海岸の民有地化と成熟—近代築港計画空間史序説—

## 一 問題の所在—港町の近代に関して—

本稿は、慶応末期から明治初頭にかけて大きく変動した横浜日本人町の海岸が、内国荷物の流通の場として機能するに至る過程を明らかにし、そうした海岸の成熟が第一次築港事業に及ぼした影響を検討したい。

近代港町の誕生について、私的に占有された近世の水際の空間に対し、横浜開港場に計画された海岸沿いのメインストリート（バンドー海岸通り）があまねく市民に開放された近代港町の画期的な要素であると論じた宮本雅明の論考が注目される<sup>二</sup>。この点は、ウォーターフロントと呼びうる解放された海岸空間に着目した点において、伊藤毅による前近代の「水辺都市」論（ウォーターアロング）とも親和的である<sup>三</sup>。また、横浜の近代港町としての遺構に関する論考とも関係する点であろう<sup>四</sup>。

ただし序章で示した通り、宮本自身の近世港町論を踏まえた港町の近代化を描くには、海岸の景観よりは機能の検討が必要であろう。そこで海岸での物揚げ機能の有無をキーにして、変遷をたどることとした<sup>五</sup>。

元治元年に締結された約定によって、日本人町の海岸の土地が外国人の入札によって再配分されることとなった。日本人が海岸の土地を拝借しながらも全く活用していないとして、外国人への明け渡しと海岸の利用が要求されたのである。日本人による海岸の不使用は、波止場への物揚げ機能の限定によるものである。結局、日本人町、居留地から港崎遊郭に至るまで広範に被害の及んだ慶応の大火もあってこの条目は実行されず、海岸が外国人に独占されるという事態を免れることとなった<sup>六</sup>。

外国人への海岸の土地の明け渡しに代わって、慶応二年十一月の条約では馬車の通れる環状道路の開通が決定され、その一部分としての新しい海岸通りが造成された。そして明治三年ごろには外国人向けの保税倉庫用地が造成される。明治六年に倉庫用地は払い下げられ、周囲の埋立造成とともに横浜の海岸は民有地化していく。

そして、この海岸の埋立地の民有地化が築港計画へ影響を及ぼす。新たな海岸の利用者

は、築港計画の一環であった鉄製棧橋と既存の鉄道敷をつなぐ海岸の線路の計画の変更を要請したのであった。この請願をうけ、埠頭と鉄道が一体化した港湾設備の完成は新港埠頭の完成まで待たねばならなくなったのである。第五章にて言及したこの争論を、海岸の成熟過程のうえで読解したい。

## 二 日本人町の海岸と外国人保税倉庫

## 1 元治元年の約定と海岸

元治元年、薩英戦争と四国艦隊下関砲撃事件の後に江戸で取り結ばれた約定は、外国人に有利な新条件を含むものであった。そのなかで、第七条の日本人町の海岸周辺の地所に關する内容は、開港当初の拝借地所の半分近くを入札によって再配分するというものであった。対象とされたのは本町通りから海岸までの一帯である（図1）。

外国側が海岸の土地を要求する目的は、七条目の説明として「海岸に今住する日本小商人又は日本の商人に右海岸の地所必要ならず、如何となれば右商人等荷物を船積せず、また陸揚もせざるなり、外国人は就中船積陸揚するなり、故に海岸の地所は日本人は要用の事にあらざれとも外国人には最肝要なるへし」とある通り、海岸での物資の揚げ降ろしであった<sup>五</sup>。

その後、イギリス、アメリカ、オランダ、フランスとの議論のうえで結ばれた条約に対するプロイセン・スイスによる条約面の変更の要望がなされた。また、本町通りから海岸通りまでの間の土地の全てを外国人に渡すと書く一方で、土地再配分のための入札には日本人と外国人が参加できるとされた第七条は、日本人による家作を認めているのか否かが曖昧であるという意見も出た。そこで、すでにそれなりの家作をし、渡世永続を望んでいる出店商を排除することになる第七条の変更を希望していた神奈川奉行・外国奉行は、条約面の改正交渉に乗り出した。

土地の再配分がなされないうちに慶応二年十月の大火となり、新たな約定が締結された。元治元年の約定の第七条は全面的に見直されることとなり、土地の明け渡しは実現されなかった。しかし、次項にみる大火以前の保税倉庫（資料中では「エンテレボット」（仏語で「倉庫」や「保税制度」を意味する *Entrepôt*）または「貸庫」）の建設をめぐる議論のな

かでは、海岸の明け渡しは実現されうる問題として認識されていたのである。

## 2 外国人保税倉庫の建設計画

保税倉庫計画の端緒は万延元年のオランダ人よりの要望であり、文久三年にはアメリカ公使と「エンテレボット」建設の約定が結ばれた。約定の期限が迫った元治元年の五月の段階では、横浜鎮港の談判中であつたために延期となつたが、翌元治二年の三月には、フランス公使から碇泊日数の短い飛脚船への物資の積み降ろしに関する要望が出され、貸庫建設が本格的に検討されることとなつた。

フランス公使の要望は、①飛脚船の入津後にすぐ倉庫へ荷物を入れ、倉庫から取り出す段階で改めを受け、納税をおこなうこと、②輸出品は改めを受けたうえで倉庫に保管しておき、飛脚船にすぐに積み込めるようにすることである。また、倉庫の管理は日本側がおこない、蔵を建設する場合には敷料を支払うことを申し出ている。この要望をうけ、一度は延期した「エンテレボット」の建設も、実現可能な時節となつたと外国奉行も判断した。

その後、貸庫の用地について外国奉行と神奈川奉行の間で議論となつた。外国奉行が老中へあてた上申書案にて、日本人町の海岸通り周辺を取り払つて建設用地とすることを提案したところ、神奈川奉行は「別段見込之筋」があるとしてしばらく見合わせ置くことを主張した。そして、運上所の構内の六〇〇坪ほどを模様替えることによって対応することを提案している。対して外国奉行は、飛脚船に限らず荷物は全て積入れることが想定され、アメリカ公使との交渉では二千坪ほどの計画で(図2)、さらに海岸に近くなければ機能しないとして、再び海岸通りの周辺を用地とするよう求めた。

外国奉行の提案をうけた神奈川奉行は、図面の通りに用地を確保すると本町通りの北側辺りまでを空けなければならず、市中全体への支障となるので、運上所構内にくわえ、野毛に造られた石炭倉庫用地に手をくわえることを提案し(図4)、外国奉行も合意した。資料1は丑三月(元治二年)の、貸庫の設置に関する外国奉行から老中への上申書の一部で、外国奉行の意見に神奈川奉行が訂正をくわえた箇所である。「で困んだ部分が訂正され、野毛石炭倉庫の土地を利用する案に変更された。」

### 〔資料1〕

(前略)「横浜運上所より弁天境内迄之間、海岸通り之地所者、是迄之人家追々引移し、

彼我商人入札借地之積り、先般各ミニストル共と約定書為取替にも相成居候間、往々者同所之儀、多分外国商人之家居と相成申べく、右者素より好まざる筋に候へ共、不得止之場合に而、致し方無之儀に付、幸同所地内へエンテレボット御取設相成候へ者、悉皆外国商店と相成候様にも至り不申、夫是之御都合可然、乍去同所者彼方兼而注目致し居候場所故、渠之承諾者予め難見据候へ共、エンテレボット御取設も是又渠之願候条件故、彼とは是とに談を搦ミ引合候ハ、存外見込通行届可申哉、(後略)

外国奉行が海岸通り周辺を提案した意図は、「第二回地所規則」による海岸周辺の土地の再配分をうやむやにすることであつたといえる。一方、神奈川奉行の「別段見込之筋」の具体的な内容が結局不明であるが、海岸を貸庫用地として外国人居留地化を防ぐという外国奉行の方針とも、日本人の家作や土地を撤去するという外国人側の要求とも異なるものであつたと考えられる。また、外国人の要望に対して、奉行側の意志だけで決定できる問題ではないことは訂正前後で共通して自覚されていた。

慶応二年十一月末、イギリス公使パークスから貸庫の建造について、外国人の技術者を雇い入れるよう提案がなされた。大火を経たばかりで、とくに貸庫の出入は各国の懸念するところとなつていゝとして、普請の請負は日本人が、絵図面と仕様書の作成と現場での監督を外国人がおこなうという提案であつた。大火とは慶応二年十月の大火であろう。

神奈川奉行からの回状によれば、波戸場に設ける鉄屋根の上屋や舢舨から荷物を引き上げる器械についてはもとより外国人に托す予定であつたが、日本側のみで普請をしてはたとえ堅固に完成しても苦情の口実になりかねないため、貸庫や運上所などの周辺の建設については絵図面を頼むことにし、「土仕事」については断るという意見で、外国奉行も同意している。翌年には返答の催促がなされ、神奈川奉行へ一任する旨が返答されているが、回答の文面は不明である。ただ、神奈川奉行の方針とパークスの要望が一致しているため、少なくとも設計に関しては外国人技師を雇つたものとみられる。

また、パークスは、翌慶応三年の一月に、波戸場の延長と消失した「貸倉」の地を移して新しく造営するように求めている。甲州屋忠右衛門の書簡によれば、慶応の大火によつて外国人の購入した「新石庫」が焼失したという。野毛の石炭倉庫は類焼していないはずであるが、ここでは新しい倉庫用地が求められている。大岡川を隔てた位置は、保税倉庫の位置として不便であつたのだろう。

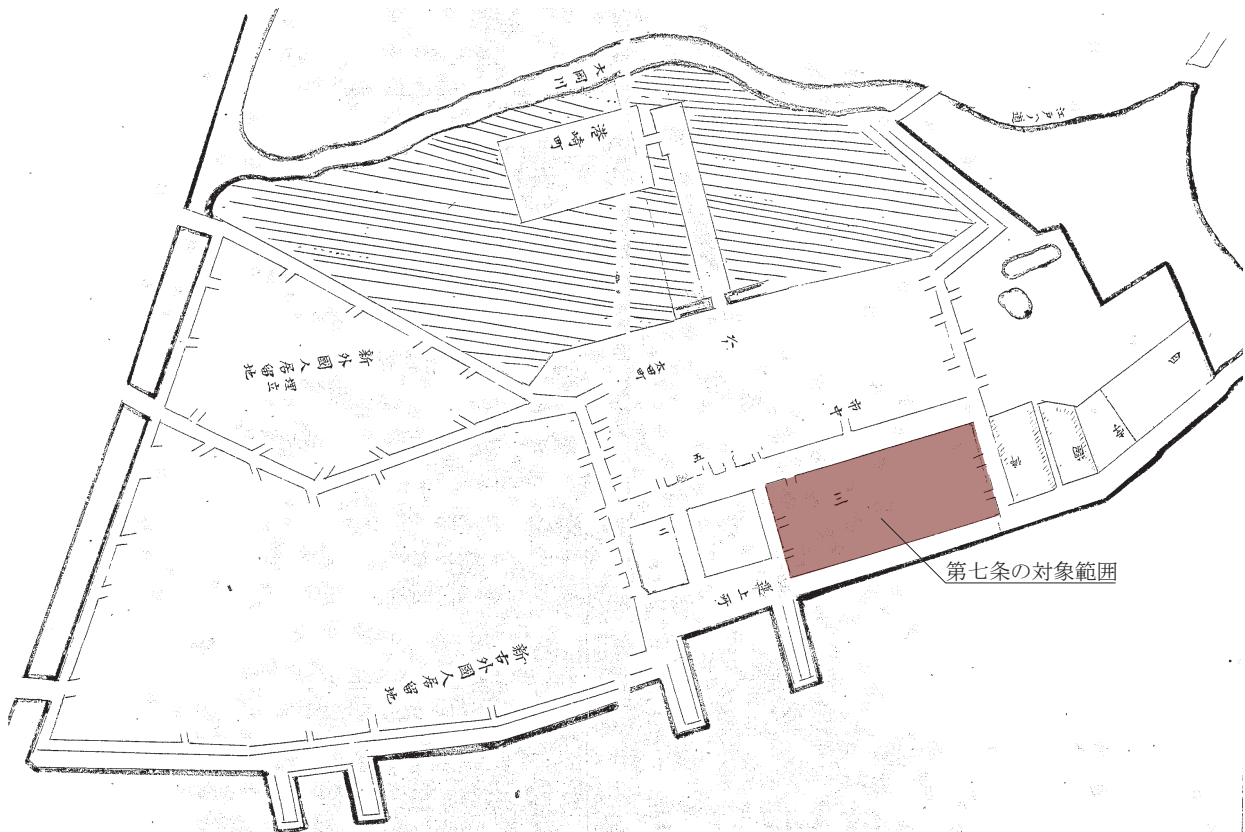


図1 「第二回地所規則」第七条の範囲

「続通信全覧」類聚の部、地所門、「横浜外国人居留地一件 二」の図（JACAR:B13090446000、外務省外交史料館所蔵）に加筆。  
図中の「三」で示された箇所が七条目による再配分の対象範囲。

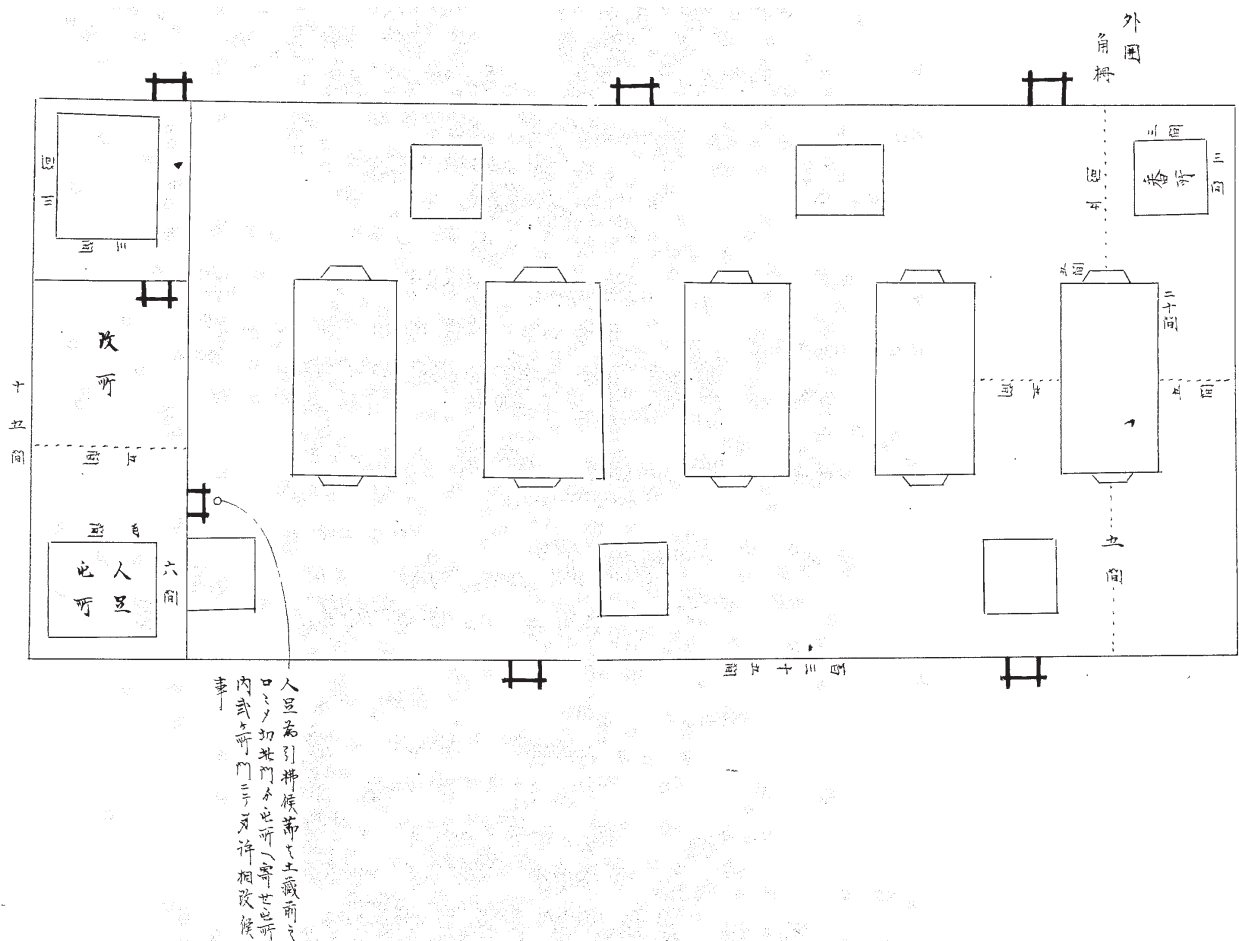


図2 保税倉庫の計画

「続通信全覧」類聚の部、官舎門、「各港貸庫設置一件附録 一」、（JACAR：13090483200、外務省外交史料館所蔵）。

明治元年四月に書きたされた神奈川県の修繕場所の調査には、「エンテルホット」として土蔵四棟、門番所一棟が書上げられている。これは、慶応三年三月十三日に運上所や石堀、下水とともに普請請負の募集がなされた「貸庫四棟」（「石蔵」という注記あり）に該当するとみられる<sup>二〇</sup>。明治三年の鳥瞰図で「御蔵」と記載された運上所構内の蔵四棟であろう。野毛の石炭倉庫は書上げのなかにみられないが、同鳥瞰図には「石炭御蔵」と記載されている（後掲図7）。野毛の石炭倉庫が輸出入品のための保税倉庫としては機能していなかったことを推測させる。

### 3 大火後の都市計画と海岸通りの誕生

慶応二年十一月の約定によって環状の新道が造られることが決定された<sup>二一</sup>。海岸から本町通りまでの一円を外国人・日本人の入札によって再配布するとされた「第二回地所規則」の七条目を廃した代わりの決定で、道幅は全て六〇フィート、期限は十四ヶ月間とされた。その一部分として、日本人町の海岸の埋立によって海岸通りが新設され、旧来の海岸通りは「元浜町」と改称された。

元浜町と海岸通りの間の街区は、五丁目から二丁目に向かって細くなっており、八間から十数間ほどの奥行である。また、明治前期の測量地図「横浜実測図」や大正五年の地籍図「土地宝典」をみると、元浜町から海岸通りまで貫通する地割となっており、大正五年段階で、南北で土地所有者は一ヶ所を除き同一である。海岸通りに沿って新たな宅地ができたというよりは、文久期から奥行が区々であった元浜町北側の土地を整形するかたちで海岸通りが設けられたことを示している（後掲図6）。

つぎに、絵図資料の表現から造成の過程を読み取りたい。嘉永四年の絵図に明治前期までの建設事業が書きこまれた「横浜村并近傍之図」には、「慶応三年此海岸埋立」と記載される<sup>二二</sup>。元治元年原板、慶応四年春再板とされる「横浜明細全図」には<sup>二三</sup>、海岸通りの海側に広い空地と白抜きの二重線を描く（図3）。同じく慶応四年の作成とされる「大港横浜之図」には海岸通りの海側に細長い街区と新しい海岸通りを描く（図4）。一丁目と五丁目の街区が台形状になっている点は測量地図と一致する。これらから、おおむね慶応四年頃には埋立が完了し、街区が完成したとみられる。「横浜明細全図」の不明瞭な表現は、外形の未だ定まっていない状況を反映しているのかもしれない。

慶応三年二月六日に「太田屋新田沼地并吉田町地内港崎町代地埋立、横浜海岸築出」が急ぎの御普請であるとして人足や土船を集めるよう布達された（第四章資料12）。「横浜海岸築出」が海岸通りの造成であり、「太田屋新田沼地」は旧港崎遊郭の東側にあたる新しい居留地の予定地、「吉田町地内港崎町代地」は大岡川の対岸の吉田町の裏手にあたる遊郭の移転用地を指すと考えられる（図4）。また、神奈川奉行による慶応三年二月二十日の触れから、日本人町の海岸が普請中であつたことが明らかとなる。

〔資料2〕<sup>二四</sup>

卯二月廿日

御触書写

昨十八日大風雨ニ而、横浜本町裏手海岸築出御普請所御用材、松木式拾五〇挺長式間巾壹尺厚五分、跡者切組口（近カ）之木材流失いたし候分、其宿村海岸江流寄候ハ、横浜海岸通三丁目御普請小屋場江可訴出候、此触書早々順達、留方横浜御役所江可相返もの也

（後略）

明治三年に出版された測量地図は、日本人町に新たな海岸通りが完成している様子を伝える（図5）。日本人町の東西通りに、本町通り、北仲通り、南仲通り、弁天通り、太田町の名を記す一方で、新旧の海岸通りには通り名が記載されていない。建設直後の段階であり、通り名の変更もされたことがその理由と考えられる。完成した海岸通りは本町通りに匹敵する一〇間ほどの道幅を有し、外国人居留地のバンドと類似した形態といえるだろう。ただし、通りに面した土地はきわめて小規模であつた（図6）。

この、居留地のバンドにも似た新海岸通りの造成は何を意味していたのだろうか。斎藤多喜夫によれば、イギリス公使パークスは、居留民の運動や商業の活性化のための環状の馬車道の計画として本国へ報告したようで、資料の性格からみて正しい計画意図の指摘といえる<sup>二五</sup>。

では、なぜ環状道路が「第二回地所規則」の土地入札に代替され得たのだろうか。居留地と日本人町の間に設けられた幅二〇間の通りが防火帯のように設えられたことが示しており<sup>二六</sup>、内外雑居につながる第七条の内容は大火後の都市計画としては不適切であつたことがまず考えられよう。ただ、もう一点、元治元年の約定における海岸周辺の土地の要求

所蔵元の許可を得られていないため非公開

——本町  
——北仲通り  
——海岸通り（元浜町）

図3 慶応4年「横浜明細全図」 横浜開港資料館所蔵、Bb2-06.2-10.1

吉原町（新しい遊廓）

所蔵元の許可を得られていないため非公開

図4 慶応4年「大港横浜之図」 横浜開港資料館所蔵、Bb2-06.2-09

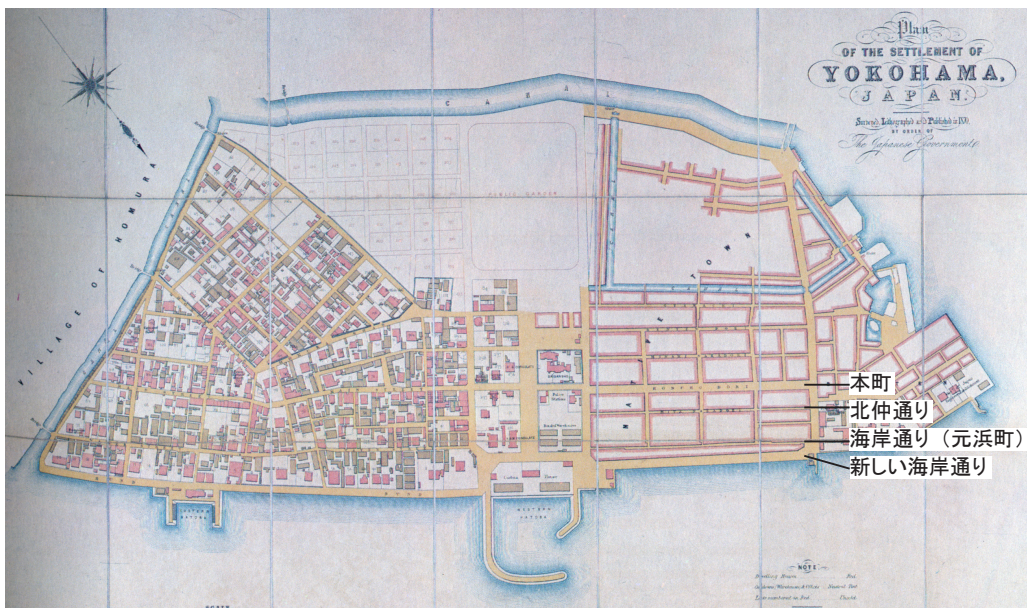


図5 明治3年「Plan of the settlement of Yokohama, Japan」  
横浜市企画調整局『港町 横浜の都市形成史』（横浜市企画調整局、1981年）から転載。

が海岸での物揚げを目したものであったことを重視したい。広大な海岸通りは、小船に限られるだろうが広く上陸・物揚げ可能な場を生み出そうとするものではなかったか<sup>一七</sup>。同時期に都市計画のなされた神戸開港場においては海岸通りへの艀輸送によって交易品が出入していたことは示唆的であるように思われる<sup>一八</sup>。

一方、海岸通りの完成後、元浜町と海岸通りの間の街区はどのような利用がなされたのだろうか。まず、明治元年に弘明会社（蒸気船弘明丸を運用）へ五丁目の旧御船蔵用地が払い下げられた<sup>一九</sup>。これは、海岸通りの造成と運上所まわりの空間の刷新をうけることであろう。

しかし、明治十四年の商人録を見る限り、海岸通り南側の商店は二丁目六番地を除いて認められない。むしろ元浜町側に多くの商店が登録されており、海岸通り側は裏側であったことを想像させる（図6、表1）。

#### 4 海岸石庫の誕生

明治三年十月に出版された先述の鳥瞰図には海岸通りの海側に埋立地と倉庫が描かれ、「御蔵」と記載される（図7）。新たな海岸通りは、早くも海に面した通りではなくなったのであった。この倉庫は税関管轄の外国人向けのものであった。税関前に建てられた保税倉庫（こちらにも「御蔵」と同様の機能であったと考えられる）。

倉庫用地の造成は、絵図から判断する限り明治二年から三年の下半期までの間に行われたようであるが、造成関係の資料は見られず、その建設目的は不明である。本稿では、保税倉庫不足への対策と、海岸の閉鎖の二点を目的として仮説的に提示したい。

まず、保税倉庫の不足であるが、明治二年四月の約定によつて、一五〇坪の税関内の石蔵一棟全体が、太平洋蒸気飛脚船会社の「エスエルヒリツプス」(S.L. Philips か)へ一年間貸借された<sup>二〇</sup>。測量地図に描かれた運上所内の「御蔵」がちょうど一五〇坪ほどの規模であり該当すると考えられ、四棟の貸庫では外国人全体の需要には応えられないことは明白であろう。貸庫の拡張はすぐに必要とされたことと思われる。

つぎに、海岸通りを覆うように倉庫地帯を造成する計画は、大火以前における貸庫の立地に関する議論のなかでの外国奉行の提案を連想させる。明治二、三年の実地法則をまとめた「金川港規則」において、波止場以外の場での物揚げ・船積み監視し、西運上所の

揚場（中央の波止場のこと）以外での物揚げがあった場合、その没収や取り押さえにあつた者、または報告者に対して荷物の代金の半分を与えたとする布達が収録されるなど、きわめて強硬な海岸の取り締まり方針が打ち出されている<sup>二一</sup>。そうしたなかで神戸のように開放的な海岸空間の誕生が見過ごされうる状況とは考え難い。

後に見る通り、明治六年当時、一八棟建つていた石庫の寸法は一棟が二階建てで梁間五間、桁行一五間、のこり一七棟が梁間四間、桁行一五間と大規模なものであった<sup>二二</sup>。ただし七千坪を超える敷地の半分程度は空地のままであった。将来的な拡大を見越した面積とも解しうるが、日本人町海岸全体にわたる新地を造成することが先行した事業であつたとも想像しうると思われる。

ただし、こうして完成した倉庫用地は外国人のための貸倉庫であり<sup>二三</sup>、保税倉庫の利用は制度上外国人に限定されたものではなかったものの、日本人には利用されなかったとされる<sup>二四</sup>。つまり、明治三年ごろには外国奉行が当初提案していた海岸の貸庫が実現したのであり、「第二回地所規則」で策定された外国人への海岸の明け渡しは形をかえて実現されていたといえるだろう。

#### 5 小括

元治元年と慶応二年の約定は、居留地の拡大を求める外国人公使の論理が日本人町にも及んだ点において画期的であつた。同時期に議論された保税倉庫の建設とともに、既存の地所拝借人が一掃されかねない危機をへて、慶応期における海岸通りが造成されたのであつた。そして、海岸通りは日本人町の裏手であり、ウォーターフロントの景観の誕生を意味していなかったように思われる。

さらにその直後に海岸の保税倉庫が完成した。そして、後にみる明治六年の三井組への倉庫払下げまでのごく短い期間ではあれ、外国人のための空間が海岸を占有したのである。物資の出入りの取り締まりには適した空間構成は実現された一方、日本人も含めた市民全体へ開放された海岸は、海岸通りの造成と倉庫の建設の間のごく一時の産物だったのである。

表 1 海岸通り、元浜町の商店（横山錦柵編『横浜商人録』（大日本商人録社、1881 年）から作成）

通り	丁目	地番	名前	屋号	職種
海岸	2	6	杉田猪太郎		茶葉商
海岸			木島こと		茶箱商
海岸	3		吉川泰三郎	三菱会社支店	
海岸			三菱会社支店		会社
海岸	4	19	福田兵右衛門		売込引取商
海岸			鈴木忠右衛門		売込引取商
海岸			田島八百蔵		煎餅商
海岸			井上平次郎	三河屋	宿屋商
海岸			田中寅吉	小島屋	米商
海岸			井田鎌太郎	伊勢屋	煎餅商
海岸			松永政蔵		煮売商
海岸			中島千代三		煮売商
海岸			長島菊太郎	土佐屋	料理商
海岸	5	20	中田与兵衛	蓬萊屋	宿屋商
海岸			渡辺万吉	木更津屋	宿屋商
海岸			野口みよ	藤沢屋	宿屋商
海岸			鈴木吉松		宿屋商
海岸			中村三蔵	中村屋	酒商
海岸			田丸金太郎		洗湯商
海岸			野村啓吉	河内屋	炭薪商
海岸			高橋きせ		土方職
海岸			椎名宗次		土方職
海岸			田村利七	三井銀行	
元浜	1	1	渡辺福三郎	石炭屋	干物類
元浜			朝田又七		回漕
元浜			永井惣左衛門		時計計商
元浜			渡辺福三郎	石炭屋	売込引取商
元浜			朝田又七	石川屋	運送商
元浜	1	2	手塚文平	角屋	売込引取商
元浜	1	3	宮橋七蔵		売込引取商
元浜			金指七蔵	中島屋	売込引取商
元浜	1	4	高橋惣兵衛	伊勢屋	売込引取商
元浜	1	5	藤波幸三郎		売込引取商
元浜	1	6	三井銀行		銀行
元浜			三井銀行		会社
元浜	1	7	橋本弥七		鉄物商
元浜	1	8	廣業会社		売込引取商
元浜	2	9	石野峰吉		仲買商
元浜			名坂莊三郎		売込引取商
元浜	2	10	松谷喜助		料理商
元浜			森平次郎	笹屋	売込引取商
元浜	2	11	富山清太郎	笹屋	売込引取商
元浜	2	12	新田保之助		仲買商
元浜			手塚茂十郎		仲買商
元浜	2	13	村松吉平		茶商
元浜			村松吉平	角屋	売込引取商
元浜	2	14	大西富次郎	柳川屋	売込引取商
元浜					
元浜	2	15	大谷嘉兵衛		茶商
元浜			大谷嘉兵衛	巴屋	売込引取商
元浜	2	16	川崎安蔵		仲買商
元浜			高橋甚蔵		仲買商
元浜			青木嘉市		煙草商
元浜			西村庄太郎		売込引取商
元浜			安達重助	駿河屋	売込引取商
元浜	2	17	狩野弘		売込引取商
元浜			高木七五郎	八幡屋	運送商
元浜	3	18	奥田左藏		売込引取商
元浜			海老塚孝助		運送商
元浜	3	20	田辺喜八	村田屋	質商
元浜	3	22	増田勘右衛門		売込引取商
元浜			小林彦助		売込引取商
元浜			狭山会社支店		会社
元浜	3	23	小川茂吉	駿河屋	売込引取商
元浜	3	24	松田才三郎		売込引取商
元浜			村松儀兵衛		荒物商
元浜	3	28	影山佐兵衛	柿屋	売込引取商
元浜			渡辺次郎	駿河屋	売込引取商
元浜	3	-	加藤りせ		煙草商
元浜	4	30	堀内由次郎		仲買商
元浜			栗田弥作	東屋	運送商
元浜			鈴木長七	柳川屋	宿屋商
元浜			栗田弥作		宿屋商
元浜			中村吉六		青物商
元浜	4	31	斉藤清吉		舶来什裁職
元浜	4	32	長島栄次郎	長島屋	売込引取商
元浜	4	33	矢野宗次郎		売込引取商
元浜	4	35	杉川林平	駿河屋	製茶商
元浜			三輪忠兵衛	住吉屋	売込引取商
元浜			川島吉郎	清水屋	炭薪商
元浜	4	36	中村正吉	池仲屋	売込引取商
元浜	4	37	望月平吉	駿河屋	売込引取商
元浜	4	38	高橋元吉		酒商
元浜	4	39	西緑弥		酒商
元浜	4	40	奥村寅吉		理髪職
元浜			土橋佐七		売込引取商
元浜			土橋佐七	万屋	売込引取商
元浜	4	41	池谷定七		宿屋商
元浜			高野三五郎	三浦屋	炭薪商
元浜			寺尾要治		米商
元浜	4	42	森本万蔵		売込引取商
元浜	4	43	御国弥一郎	内津屋	売込引取商
元浜	4	44	鈴木周三郎		茶葉商
元浜			高橋住蔵		仲買商
元浜			森川要蔵		売込引取商
元浜			高橋住蔵		売込引取商
元浜	4	45	高橋文蔵		水油商

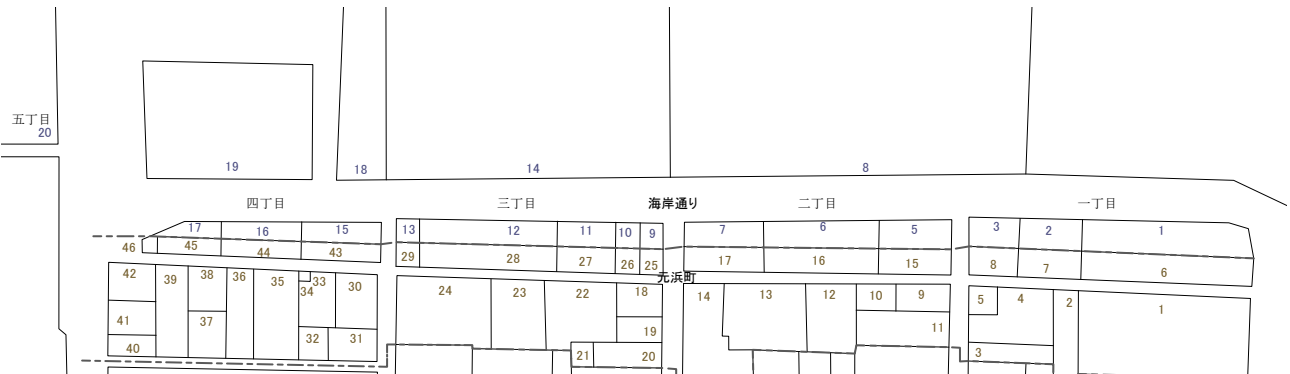


図 6 海岸通り、元浜町の地番

藤本測量事務所「横浜市土地宝典」（大正 5 年、国立国会図書館デジタルアーカイブにて公開）より作成。

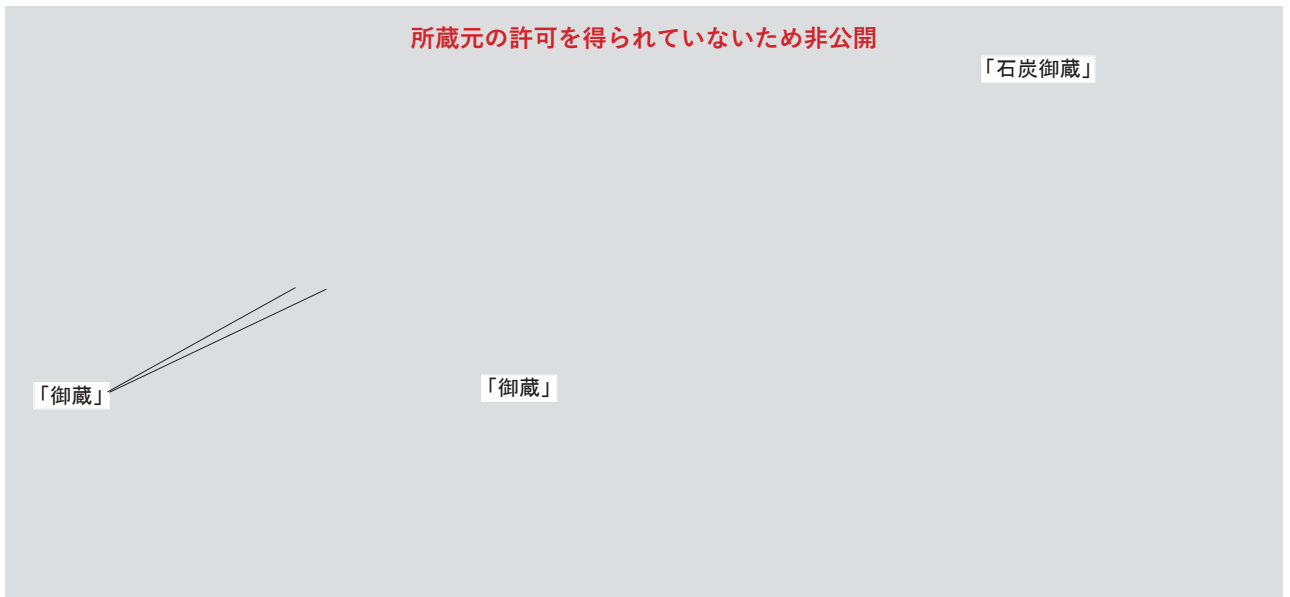


図 7 明治 3 年「横浜明細之全図」 横浜開港資料館所蔵、Bb2-06.3-1-1

## 三 倉庫用地の払下と海岸の民有地化

### 1 三井組への売却と国産方

明治六年に海岸の倉庫用地は三井組へと払い下げられた。明治六年二月に三井組三野村利左衛門から払下げの願書が提出され、同年三月には開届けられた。払下に際して作成された一連の資料からその規模が明らかとなり、七千百坪強の海岸の土地に石倉が一八棟建てられていた。鳥瞰図にみられた「御蔵」である。

三井組による払い下げられた土地の改修に際して作成されたとみられる絵図は、四一間×一八一間半の敷地の様子を描く(図8)<sup>二五</sup>。石倉は海岸に沿った一六棟と陸側の二棟で、陸側半分は空地のままであった。

同絵図は、明治八年三月二十三日に東側の一六四〇坪が税関によって買い戻される以前の状況を示している。まず目に付くのは朱書きによる石庫の表記で、これは次節にて検討する曳家の計画を示している。また、中央の道の東側には「新規往還」と記載され、払下げ後の敷地計画を推測させる。ただ、敷地の西側は既存の石庫の立地から考えれば道はすであつたと考えられる。

つぎに、払下げの請願と誓約書を検討したい<sup>二六</sup>。資料3は倉庫用地の払い下げの条項の一つである。

#### [資料3]

(前略)

一、右石倉之儀者、外国人江被対御条約面之廉も被為在候二付、同港貿易之景況ニ寄税関御用之節者、前々之御振合を以、外国人荷物御預可申上候、尤、相当之蔵敷料者其時々御下渡被下候様仕度候

(後略)

三井組三野村利左衛門は、近年の業体の拡大に比して横浜の倉庫が足りないとして払下げを願ひ出た。払下げは、石庫の価格一万六五二三円七〇銭を即時、土地代一四万二四〇六円を五ヶ年賦で支払うというもので、さらに、①外国人への貸庫の機能の維持、②天災の被害を受けて倉庫や土地に欠損がでたとしても滞りなく代金を納めること、③代金が完済されるまでは抵当に入れないこと、④事情があつて倉庫や土地を譲り渡す際には代金の

残りを即時納入し、譲り渡された者が外国人への貸庫の機能を維持するよう約定を結ぶこと、⑤地税は神奈川県庁の指図に従うことが誓約された。

とくに、①と④にみられる税関の御用については払下げ以前の御蔵の機能を表しており重要である。払下げ後も税関の要請に応じて外国人へ倉庫を供出するというものであり、税関による保税倉庫の機能が残された条件付きの民有地化であつたことが理解される。

東側が買い戻されて五千七百坪ほどとなつた海岸地は、「横浜海岸地所」と題された図面に描かれる<sup>二七</sup>。海岸通りの一丁目から三丁目までわたる土地で、東隣りは税関御用地所で、西隣りには「松下定助」と記載される。松下定助は、運送方の駿州屋定助のことであり、運送方・人足方によつて造成された御国産波戸場の土地であることを示していると考えられる。なお、別の図では西隣は「波戸場」と記載される<sup>二八</sup>。御国産波止場が運送方駿州屋定助の土地となつていたことが理解される。

三井組に払い下げられた後、海岸の倉庫地帯は、東京の兜町とならぶ三井国産方の拠点となつた<sup>二九</sup>。三井国産方は明治七年八月末に開始された部門で、諸国から送られた荷物を蔵で保管し、希望に応じて入札払いによる売却をおこない、口銭を受け取るというものであつた。預かつた荷物や落札品を引き当てにした貸金もおこなつていた。また、各地の支店で荷為替によつて貸し付けをおこなつた場合には、送り状の宛先を東京海運橋兜町が横浜海岸通り石庫の国産方にするのが定められ、汽船による運送を指定している。

国産方は明治九年十一月に三井物産へと吸収された。そのころの国産方の営業は前記のような委託販売のみに限定されていたわけではなかつたようである。三井物産の明治九年の決算書によれば、「十二月中三井組大元方ト示談結約シ、東京及ヒ横浜ノ国産方商業ヲ一切当社ヘ譲リ受ケタリ、此ニ於テ伊豆諸島ノ産物売捌及鉄道荷物取扱ノ事ヲモ引続キ本社ニ於テ營業ス 横浜国産方ノ商業ヲ譲受ケシニ因リ、同地ニ支店ヲ開キ、生糸・茶・石炭・其外ノ売込ヲ為サシム」とされる。三井国産方が輸出貿易に着手していたことを表している<sup>三〇</sup>。三井国産方の経営内容は、荷為替による全国の産地への金融とセツトになつた倉庫業と売買の仲介業にとどまらず、自らも売込貿易に参与する多角的なものであつたといえるだろう。

三井組のもとで、唯一梁間五間の二階建ての石庫であつた「い石庫」は国産方・貸付方の事務所として改修された(図9)<sup>三一</sup>。開口部を設けて床をつけ直し、西側に木造で二間

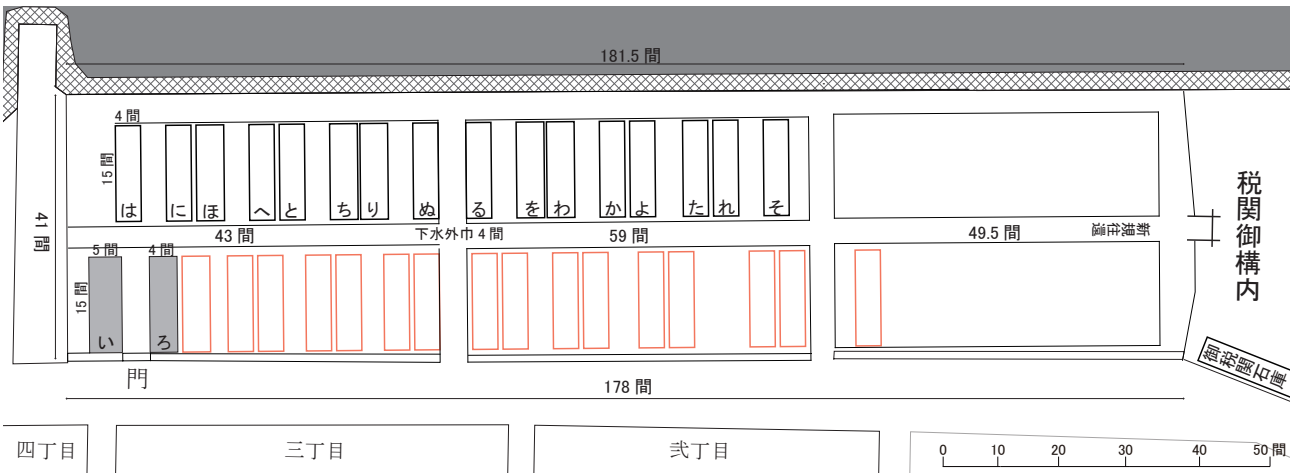


図 8 石蔵図面見取り図  
三井文庫所蔵資料（別 2403 - 2 - 6）と「横浜実測図」から作成。白：曳家の対象、橙：曳家先、灰：移動なし。

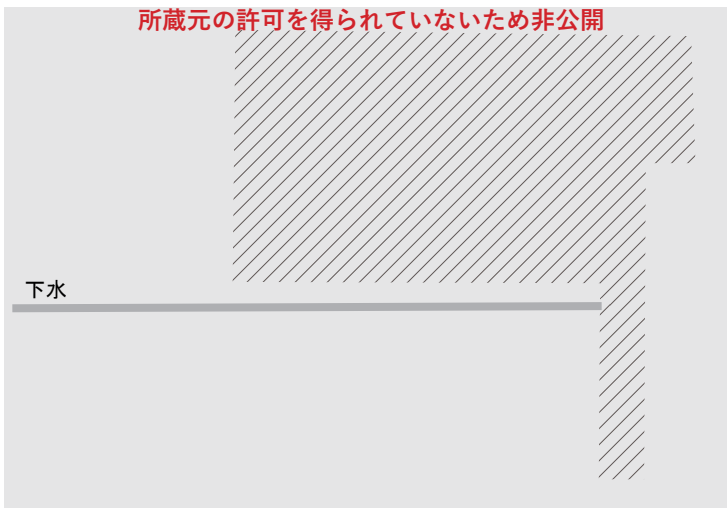


図 10 三菱会社への貸地図面 三井文庫所蔵、続 122 - 2  
明治 11 年の借地契約の附図。朱書きが新しい貸地、明治 9 年の契約による借地を斜線で示した。

所蔵元の許可を得られていないため非公開

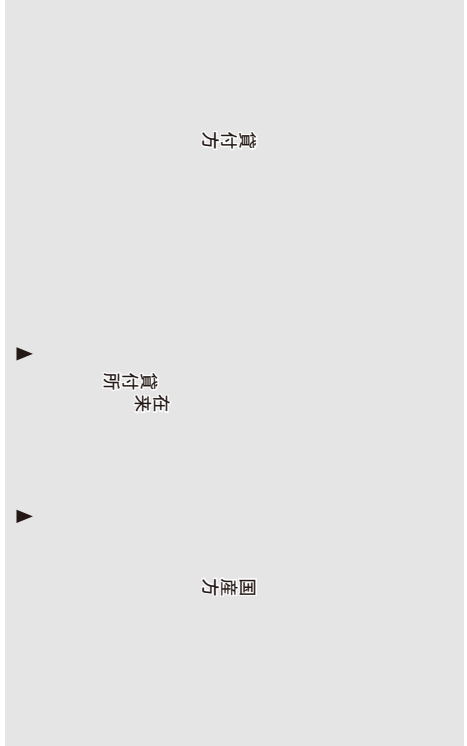


図 9 石蔵改修図面  
三井文庫所蔵資料、別 2 - 7 - 2403

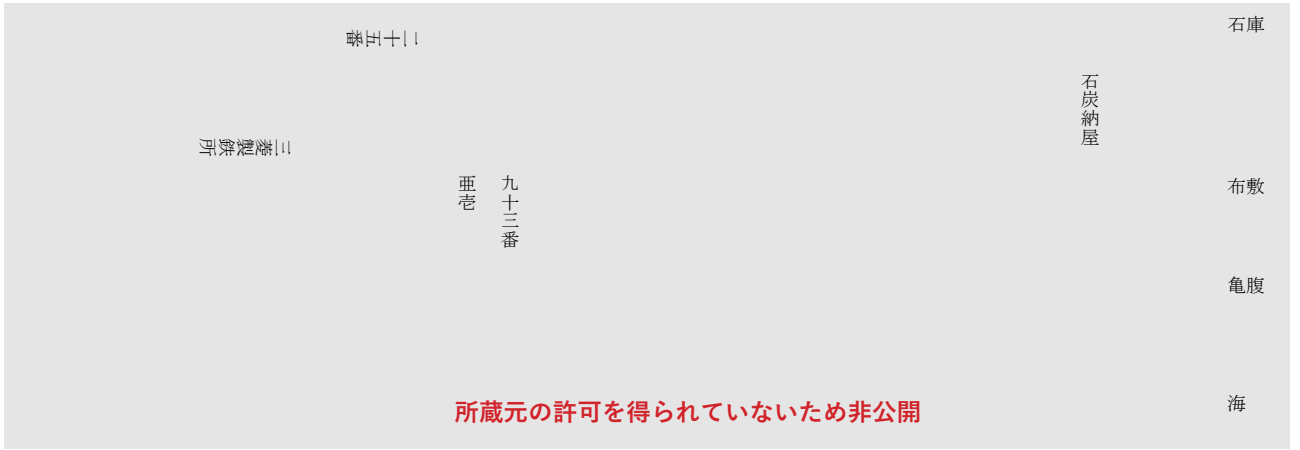


図 11 明治 10 年の風損時の図面 三井文庫所蔵、続 124

分増築して八畳間、便所、押入れ、台所等に利用する計画であった。「い石庫」はもとより中央部に大きな開口と「霧除庇」が付されており、貸付方の入口となった。隣の国産方の入口はそれにならって両開き戸、上に車型のガラス窓を設ける計画で、西側の増築部も南北の一部に元の仕上げと同様に立瓦を打ち付けるなど、既存の石庫のデザインを踏襲するものであった。ガラスの車窓は洋風の意匠を想像させるものであり、外国人技師の関与を思わせる。三井国産方は、新たな拠点を既存の洋風建築の活用によって設けようとしたといえるだろう。

## 2 石庫の曳家と海岸の空地

三井組による倉庫用地の改修は事務所の設置に留まらず、海岸に沿って並んだ一六棟の石庫の曳家が行なわれた。三井文庫に伝わる石庫の配置図には<sup>三</sup>、朱書きの丸印の下に「此所江石庫引事、但庫前者此一運中にて壹尺五寸ツ、割出し候積り」と書かれた貼紙がつき、朱で描かれた位置へ移動する計画であったことを示している。この曳家は実行され、三菱会社への貸地を示した図面は、倉庫が陸側に林立し、海側は広い空地となっている様子を伝える(図10)。

曳家によって海岸に広大な空地をつくった目的は何であろうか。明治十年の修繕の資料から推定を試みたい<sup>三</sup>。暴風雨によって石垣と土地がくずれ、全長一四〇間のうち三五間には損傷なし、のこりは石垣の修復が必要とされた。海岸には波除の杭を打つことが決定された。仕様書には、登り巾六間の亀腹石と、幅二間の布鋪石の二つの部分に分けた記載がなされ、被害状況の図面でも石垣と布鋪石の描き分けがなされている(図11)。登り巾とは、石垣の斜め寸法のことであろう。

同図には「三菱製鉄所」、「亜壺」、「二十五番」、「九十三番」が朱で、「石炭納屋」が黒で描かれる。明治十一年の三菱会社への売却にあたって作成された図面によれば、朱で描かれた部分は貸地を表現しており、三井国産方(三井物産)の石炭納屋とは区別しているとみられる(後掲図12)。「亜壺」や「九十三番」は外国人の商館の番号である。

このように、石庫を曳家して完成した広大な空地は、三井組自身の倉庫用地としてだけでなく、貸地に供されたのであった。そして、請負人となった平野芳太郎・川村亦左衛門から提出された仕様書の題名が、「海岸石庫前波止場築造向仕様并御入費書」とされている

る点に注目したい。「海岸石庫前波止場」という表現は、この海岸沿いの空地が船着き可能な空間であったことを示しているのではないか。第五章にて言及したとおり、横浜開港場における物揚場は、海岸に築かれたものに限らず、大岡川のものであっても「湊町波止場」の名で呼ばれた。そして、護岸が傾斜のついた亀腹石だけではなく、その縁が平坦な布敷石の仕上げであったこと、くわえて外国人の借地が海岸に寄り添っていた事実が(図11)、海岸地の船着き機能を傍証しているように思われる。

## 3 三菱会社への売却当時の状況

明治十一年六月、海岸倉庫用地は三菱会社へと売却された<sup>三四</sup>。売却以前にむすばれた三菱会社との借地契約や売却当時の貸地、建家、貸家の状況とその収入や支出、地券の写しや名義変更のための請願書の写しなど、当該の土地売却にあたって作成されたとみられる一連の書類をまとめた資料が三井文庫に伝わる<sup>三五</sup>。

とくに本資料で注目されるのは、売却当時の状況を巻末で図面化している点である。石庫部分には方眼紙へ直接借主を書き、そのうえに借主を記入した和紙の貼紙が張られる。石蔵の借主を書きだしたリスト(同資料に所収)と貼紙の人名はおおむね一致する。また、引払いの日限は貼紙にのみ記載される。そして、北側の海岸周辺の貸地を示す貼紙は、方眼紙の貼紙のうえに和紙の貼紙が張られているため、少なくとも二つの時期にわたっており、明治十一年六月時点で一度に作成されたものとは思われない。本図面は三井組地所掛のなかで把握していた状況を記録したものに(方眼紙の貼紙)、土地・建物の全てが三菱会社の手に渡るにあたって財産の現状を再確認した結果を和紙の貼紙で表現したものと推測される。本項では、この資料から当時の海岸倉庫用地の状況の読解を試みたい。

### (1) 土地貸借

#### ① 三菱会社の借地

三菱会社の借地は、始めは明治八年十二月一日から二十二年の十一月までの十五季で千坪(貸地契約書は明治九年三月一日)、その後、明治十一年には六二六坪が一年季で追加された。海岸通りからつながる旗竿状の敷地で、海岸に広い間口を確保している。なお、三菱会社にかぎって借地の図面が収録される(図10)。

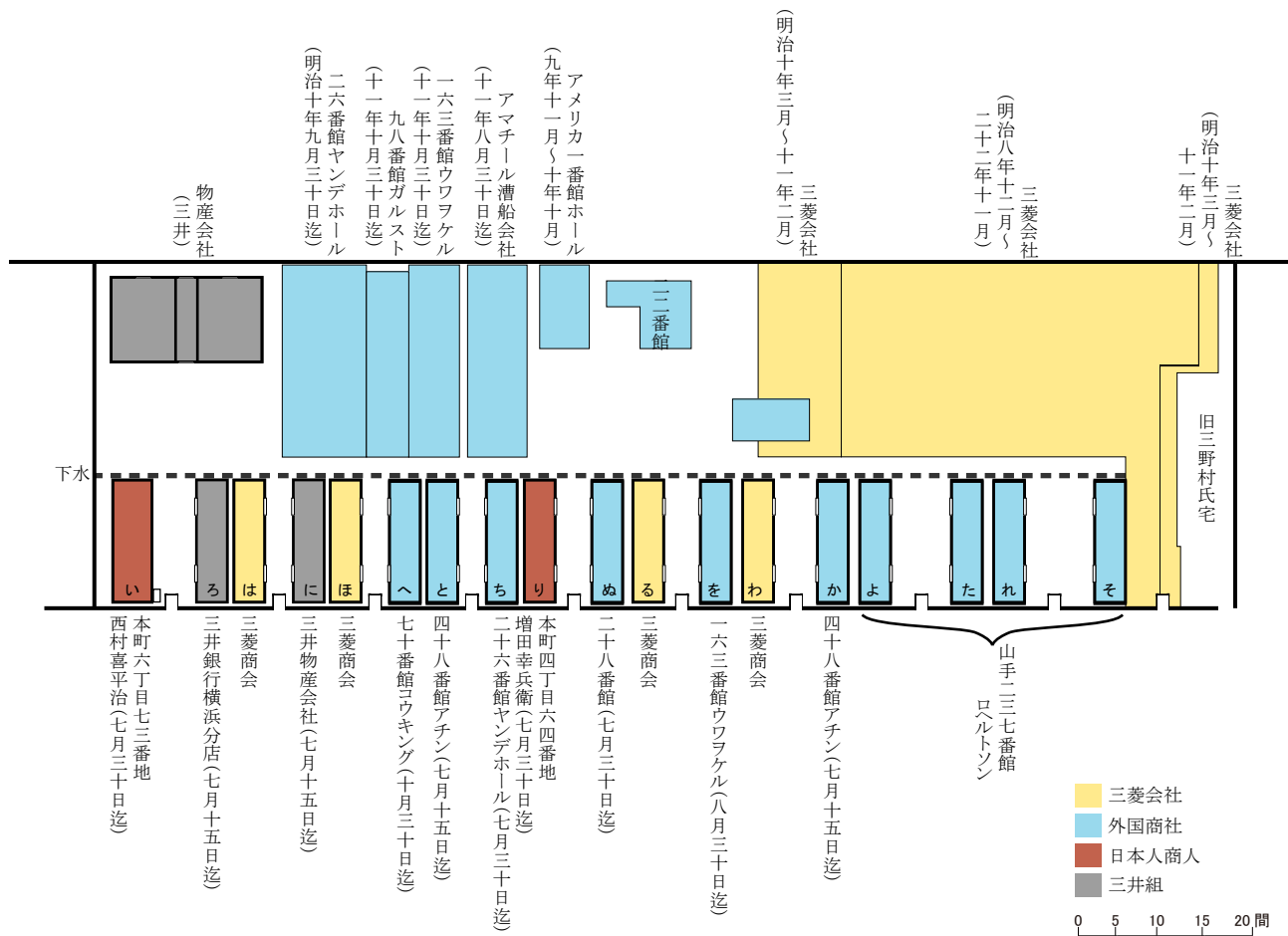


図 12 明治 11 年の海岸地・倉庫の貸借状況 三井文庫所蔵、続 122 - 2

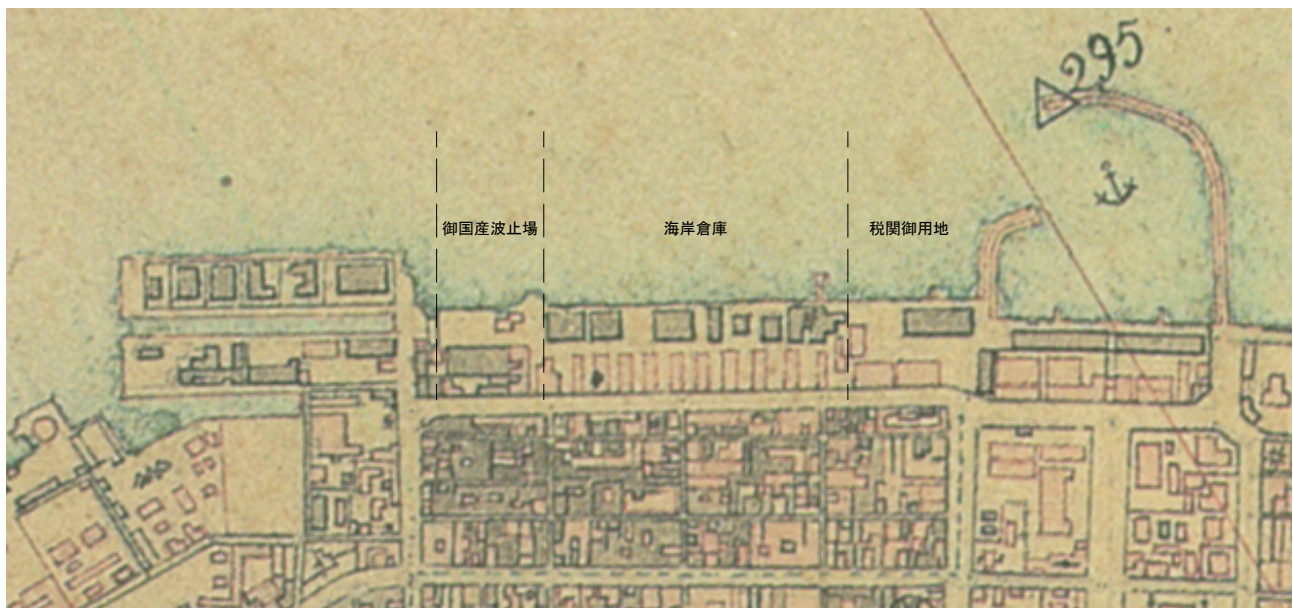


図 13 明治 15 年の海岸  
明治 15 年「迅速側図」に加筆。

一ヶ条からなる借地の契約書も収録されており、地代の取り決め、工作物や営業内容に関する協議の義務、土地の収公がなされた場合や止む負えない場合の土地の返却へ同意することなどが議定されている。なかでも注目されるのは、工作物と営業内容に関する第三・四条である（明治九年三月一日の契約書）。

#### 〔資料4〕

### 第三條

一、貸地ニ建設スル家作・土蔵并ニ營業ノ為該地ニ溝渠或ハ掘鑿或ハ海岸石垣及ヒ海中ニ係ル工業或ハ陸揚場等、新ニ開設スル事ハ最初ハ貸主承諾ナレトモ、若政府ニ差支ルトキハ拒ム事モアルヘシ

### 第四條

一、借主ハ該地於テ適宜之商業営ムハ素より自由ニシテ、貸主之敢テ拒ム事ナシト雖トモ、該地ハ海面ニ接続スルを以、諸貨物上下シ、或ハ海中ニ係ル義ハ自ラ国法モ有之ニ付、右ニ関スル事業ハ政府之許可ヲ得ヘキハ勿論ナリト雖、尚貸主江モ熟議アルヘシ

但、其營業、尙シ危險之物品ヲ取扱ヒ、近隣為ニ或患害ナキヲ保チカタキニ係ル

トキハ貸主於テ拒ム權アリトス

海岸の揚場の設置、また、海岸からの陸揚げをおこなう営業が想定されていることが明らかである。修繕の仕様書にみられた「波止場」の機能の存在を明示しているといえる。ただし、御国法のもと、政府の許可を得たうえで地主とも熟談することが条件づけられている。さきにみたとおり、海岸の物揚げは明治三年の規則において厳禁とされていた。海岸における揚げ降ろしは、法的なレベルでは未だに許可されておらず、そうしたなかで、新たな請願によって海岸の機能の導入を図ろうとする様子が読み取れるのではないだろうか。

### ②明治十年一月、アマチイル漕船会社幹事ホール

間口六間、奥行二三間の土地が明治十年元日から十四年末までの五ヶ年季で貸し渡された。貸借の約定は三菱会社と類似するが、横浜漕船会社で雇った日本人を居住させないことを約している。

契約者のアメリカ一番館ホールは古参の巨大商会ウォルシュ・ホール商会のことである

う。彼が幹事を務めた「アマチイル漕船会社」は「競船会社」や「アマチュル・アソルテック」(Amateur Athletic か)とも呼ばれたボート競技のクラブと推測される<sup>三六</sup>。競技用のボートの改修や道具を収める納屋の用地に利用したのだろうか。

### ③契約書の収録されていない借地人

①と②のほか、巻末の図面には多くの借地が認められる。しかし、商館の番号と名前のみで人物や営業内容の特定は困難である。二六番館ヤンデホールと二六三番館ウワケルはそれぞれ石庫を借りており、一体の利用であった可能性も想定できる。図10にみられる石庫の建つ部分と海岸地の間にひかれた線は、その位置から推測するに図8にみられた下水であり(中央の往還に「下水外中四間」と記載される)、庫の間にみられる仕上げの表現は溝をわたる板であろう。つまり石庫と海岸の土地は行き来可能であったことが理解される。

居留地人名録から彼らに該当するとみられる人物は抽出できるが、経営内容は明らかにはない。ただ、貸地の多くは海岸に接した区画であり、海岸との関係が重要であったことを示している。①や②でみた海岸の利用や船着き機能が想定されようだろう。

## (2) 石庫

つぎに明治十一年段階での石庫の借主を検討したい(表2)<sup>三七</sup>。外国人が多いものの、三井国産方の倉庫や三菱会社の貸借もみられ、本町四丁目六四番地増田幸兵衛、同六丁目七三番地西村喜平治も借りている。増田幸兵衛は、増田屋安部幸兵衛のことと思われる。明治十四年の「横浜商人録」によれば四丁目の六八番地に増田屋安部幸兵衛(禿込・引取商)が確認される。これは江戸海産物問屋榎並屋の出店を譲り受けた増田嘉兵衛と安部幸兵衛による共同の店であった。「横浜商人録」には商工会議所の常務員として六三番地の砂糖引取商の安部幸兵衛も認められる。他の資料によれば増田屋嘉兵衛は砂糖・石油商であり、同一の経営体とみられる<sup>三八</sup>。本町六丁目七三番地の西村喜平治は、現状他の資料に名前を確認することができない。横浜実測図や土地宝典の地籍図によれば、七三番地は本町五丁目である。

なお、明治九年七月には三井国産方によって、石庫を製茶場として活用するように請願が出された<sup>三九</sup>。外国人向けの保税倉庫が日本人・外国人双方の営業を支えたことが理解さ

れよう。この点は民有地化の成果であったといえる。

(3) 建築物

明治十年の修繕の絵図にもみられた三菱会社の製鉄所、国産方の納屋、事務所に改修された石庫が確認できる。また、払い下げの際の図面には「旧三野村氏宅」と記載された区画と三菱会社の借地した敷地の南東部分（旗竿状敷地の竿部分）の上に住宅の図面が添付されている。通り側の三間半四方ほどの小住宅（納屋とも記載される）と中央の井戸、奥側に片廊下の二階建て住宅が建った。書類から敷地内の建造物の書上げをみると、「ロヘルトソン」の居家として建家が記録されており、「元田村氏」という注記が付く。

田村氏は土地売却の際に三井八郎右衛門の名代人となつてゐる田村利七のことであろう。

表2 石蔵の貸借人

石庫	人名	図面に記載された人名	人名比定	拝借単位	賃料
い	西村喜平治	本町6丁目73番地 西村喜平治	不明	半棟	18円
ろ	横浜店貸付係	三井銀行横浜分店		一棟	35円
は	三菱商会	三菱商会		一棟	35円
に	物産会社	三井物産会社		半棟	18円
ほ	三菱商会	三菱商会		一棟	35円
へ	コッキング	70番館コウキング	Cocking, S., Jr., Cocking & Co. (70)	一棟	35円
と	アチン	48番アチン	Austen, W. T., Seamaen's Mission & 48B, Bluff	一棟	40円
ち	カルスト	26番ヤンデホール	不明、28番カ(「ぬ」 を参照)	一棟	35円
り	増田幸兵衛	本町4丁目64番地 増田幸兵衛	増田屋安部幸兵衛 砂糖引取商	一棟	35円
ぬ	28番館	28番館	Jno. W. Hall (28) 会計士	一棟	35円
る	三菱商会	三菱商会		一棟	35円
を	ワヲケル (163)	163番館ウヲヲケル	Walker, F. D. (163) ※明治10年～	一棟	35円
わ	三菱商会	三菱商会		一棟	35円
か	アチン	48番館アチン	「と」を参照	半棟	18円
よ	ロベルトソン	山手237番地ロヘルト ソン	Robertson, W., Manager, Mitsui Bishi Iron	一棟	35円
た	ロベルトソン			一棟	35円
れ	ロベルトソン			一棟	35円
そ	ロベルトソン			一棟	35円

三井文庫所蔵資料(続122-2)、『幕末明治在日外国人・機関名鑑』2、3から作成。

明治九年に三菱会社への貸地にあたつて作成された図面は、通り側を「西野住居」、奥側を「田村住居」とする。一方、ロヘルトソンは東側四棟の石庫を借りる山手二三七番館の者である。一八七八年の外国人の名簿をみると、三菱製鉄所の管理人とされており<sup>四〇</sup>。技術者として近くに居住していたことがうかがえる。

以上にみた土地や建物の貸借はいずれも明治十一年中には年限となり、引払われたと考えられる。明治十四年の迅速側図をみると(図13)、防火建築(ピンク色)が海岸通り側に並んでおり、これは払下当時から建つていた石庫であろう。北東の棧橋らしきものが付された建物は製鉄所に該当するとみられる。そのほかに、海岸には六棟の建造物が確認される。三菱会社の手渡つた後で建設が進んだことがわかる。

4 小括 日本人町におけるウォーターフロント

以上、税関管轄の倉庫用地の払下のあとの三井組による改修と土地・倉庫の貸借を、三菱会社への売却時点まで追跡した。外国人向けの倉庫用地としての海岸地が、石庫の曳家を経て「波止場」とも称された陸揚げ可能な場所へと変貌したことはほぼ間違いないと思われる。幕末における海岸通りの拝借地所は、駿府町人の店も含まれたが、多くは船宿、運送方、または芝居小屋の営業主による長屋として活用され、開港直後では茶屋、曲馬の興業の例がみられる<sup>四一</sup>。そこでは中央の波戸場への物資出入の限定によって、船着きはなされなかつたと考えられる。

明治前期の海岸地は、三井組、三菱会社のようなのちの財閥や、増田幸兵衛のような有力売込商、または外国人など、幕末とは異なる主体によつて占有されていた。これは内外人民が混在したウォーターフロントの誕生といつて良い。限られた主体によつてではあるが、海岸が船着き可能な空間として活用されるようになりつつあったといえるだろう。

四 明治二十五年の請願にみる海岸の状況

明治二十五年、外洋船の着岸可能な鉄製棧橋を建設する第一次築港事業のさなか、海岸に沿つて計画された鉄道敷が既存の営業に支障をきたすとして、日本郵船会社の谷井保、日本波止場の回漕業者、海岸通り二〇番地の土地所有者左右田金作によつて計画変更の請

願が出された<sup>四二</sup>(図14)。幕末の運送方・人足方を母体とした集団である廻漕業者の主張は第五章で検討したので、ここでは日本郵船会社と左右田金作の主張を簡単に検討したい。

## 1 日本郵船会社(図14①)

日本郵船会社の横浜支店谷井保の請願は長文であるが、幅一五〇間の沿岸の土地は、①輸出入貨物倉庫と貨物揚卸場、②船用品倉庫と物品揚卸場、③鉄工所と物品揚卸場など、海岸を介した海との連続があつてこそその利用が展開していたことを主張している。そして、揚げ降ろしの人足賃の増加による物価への影響、非常時の救助船・救助物品の遅れや、内国貨物の揚げ降ろし場がなくなることを列挙して鉄道敷設の影響の重大さを主張している。そして、「日本波止場」(御国産波止場のこと)から日本郵船会社の所持する倉庫への蔵入れとともに、同社の扱う荷物は海岸から揚げ降ろしをおこなつており、海岸までを含めて「日本波止場」であるとしても過言ではない、というように海岸が評価されている点が目される。明治十年ごろに成立したとみられる海岸の物資出入りの機能が、明治二十五年には一日に五、六千個という大きな規模で実現されていたのである。

## 2 左右田金作と海岸通り二〇番地(図14③)

海岸通り二〇番地は二万平米ほどの広大な埋立地である。所有者の左右田金作は上野国出身で、文久三年に横浜へ移住し、明治元年に両替店(松野屋)を開いた<sup>四三</sup>。所在地は南仲通り一丁目の二番地である。

海岸通り二〇番地は明治六年六月以前に田中平八ほか二人から埋立の出願があり(図15)、同年の終わりに造成がすすみ、七年七月ごろには概ね完成していたようである(図16)。図16は、埋立の完成間近になされた、入船町へ通じる新道の造成にかかるオランダ長官館の土地買い上げ申請に添付された絵図面である。このときには入堀が描かれる。

資料中で埋立の願人となっている弁天通り三丁目の田中平八は信州出身の生糸売込商(糸屋)であるが、東京本町一丁目の蓬萊社の惣代として記名している。蓬萊社は、後藤象二郎と、大坂の旧十人両替を中心とした大坂商人の合同による会社である。貢米買い受

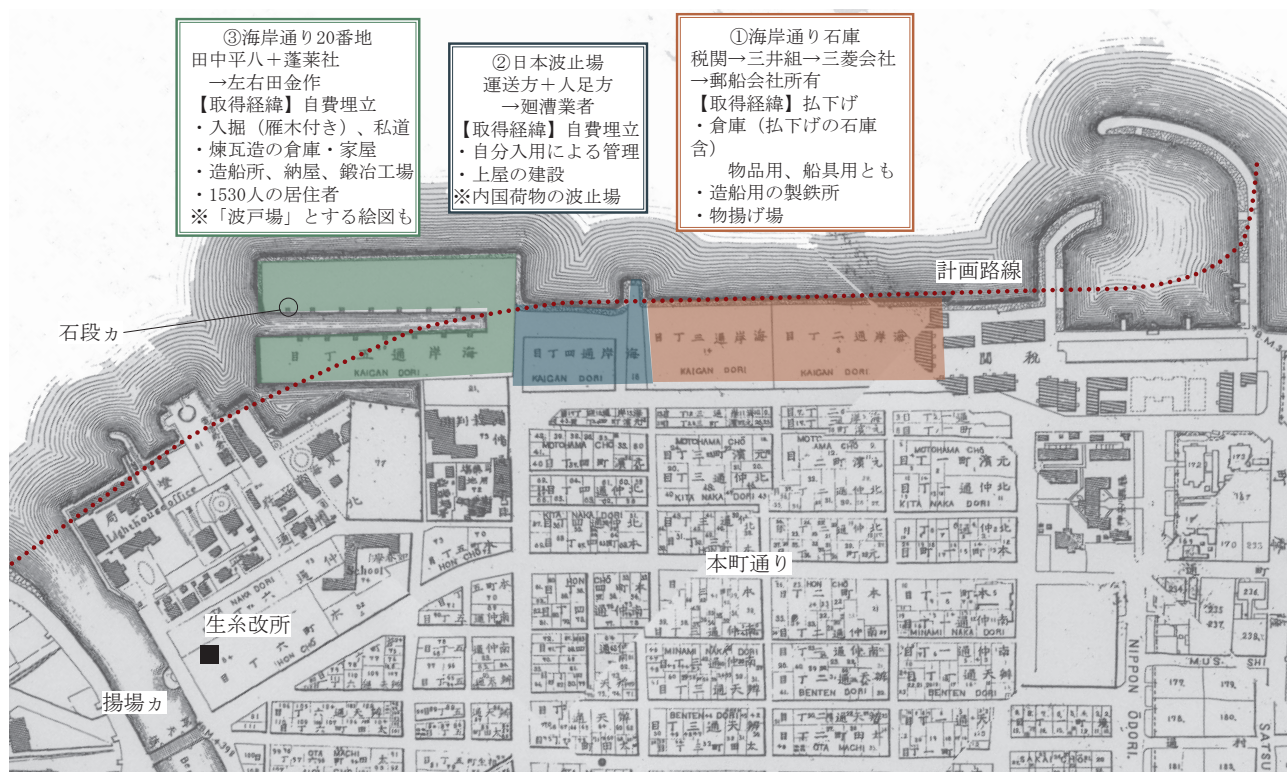


図14 三つの民有地と明治25年の鉄製棧橋・鉄道敷の連絡計画

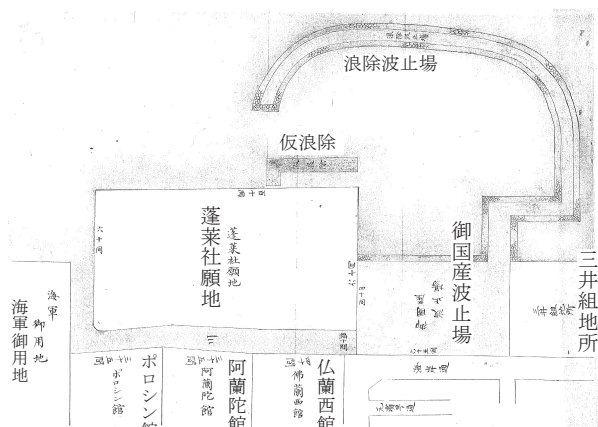


図15 蓬萊社埋立地の申請当初の図

図17に見られる波止場の計画の名残が認められる（実現せず）。「外務省記録」の附図に加筆（JACAR：B12083340000、注44）



図16 蓬萊社埋立地と新道の計画申請

赤で新道を示した（左半分がオランダ長官館の敷地）。また、新道と埋立地の間は橋を架ける計画であった。「外務省記録」の附図に加筆（JACAR：B12083340000、注44）

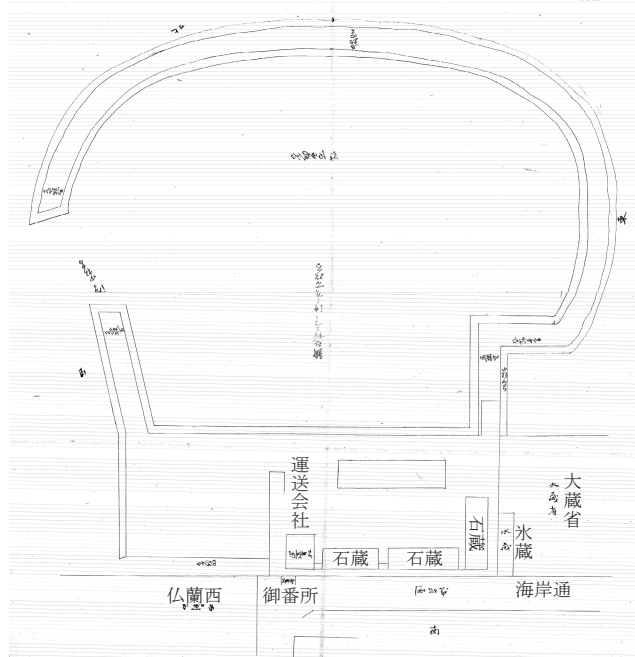


図17 明治5年の波止場計画（文字加筆）

「外務省記録」の附図に加筆（JACAR：B12082649600、注48）

け、官金取り扱い、貸付や藩札の両替などの金融業を主とし、製糖・製紙・石炭業のような製造業や製品売買もなす会社企業であった<sup>四五</sup>。かかる多角的な業務に対する新地の利用計画は現段階ではわからないが、工事期間中の外務省・神奈川県による建築の工期に関する諮問には、そこに建つ建物として「石室」、「石庫」、「土蔵」のみが挙げられている。蓬萊社の大橋元賢は工期や計画についての回答を保留しているが、埋立造成の申請にあたって倉庫用地を挙げていたことを示しているのではなかろうか。

また、明治七年七月に請願された入船町まで通ずる道の新設も埋立地の利用方針を暗示しているように思われる（図16）。おおまかにいえば本町通りの端部に位置するこの埋立地の陸運の便を向上させるための計画であるが、開港場西側の、とくに大岡川端に設立された生系改所への動線を確保しようとするものではなかったかと考えられる。明治六年五月に横浜生系売込商が生系改会社を設立し、大蔵省は同社に荷物の改めを委任した<sup>四六</sup>。会社の位置は本町六丁目八五番地であり、各地からの生系は大岡川に設けられた専用の波止場から搬入されることが義務付けられた<sup>四七</sup>。「横浜実測図」にはその様子が読み取れる（図

14）。生系改会社設置の直後において、生系売込商の田中平八を代表として請願されたことが、埋立計画と生系流通の強い関係を示唆しているよう。

なお、蓬萊社と田中平八による申請に先立ち、神奈川県は御国産波止場の位置から同所にかかるほどの波止場を築く計画をしていたが、フランス公使による苦情をうけて中断された<sup>四八</sup>。このときの図面に描かれた波止場は、防波堤のようなものとして描かれる（図17）。

また、埋立地完成後の地図をみると、明治五〇八年の作成とされる神奈川県による「横浜全図」には「蓬萊社埋立新地」と記載されるが<sup>四九</sup>、明治十二年の「横浜改正新図」には海岸通り二〇番地に当たる位置に「国産波戸場」、御国産波戸場に該当する四丁目の海岸には「物揚場」と書かれる<sup>五〇</sup>。明治二十五年の請願において、左右田金作の所有地である海岸通り五丁目二〇番地と、回漕業者の持場である四丁目の「日本波止場」が区別されていることから、両者は別であったと考えられる。ただし、郵船会社の谷井保による主張に似て、蓬萊社埋立地をも含む御国産波戸場周辺一帯が「波戸場」として機能していたと考

えることは十分可能であろう。

鉄道敷設に対する左右田の請願によれば、私設の道とそれに沿った煉瓦造倉庫一六棟、煉瓦造家屋一棟、木造家屋一棟、中央の入堀が機能を失うとされ、広大な土地の利用の一端が明らかとなる。入堀は「横浜実測図」にも確認され、不明瞭ながらも石段らしきものが描かれており(図14)、船着きが可能であったと考えられる。

そして一五三〇人の住人の存在にくわえ日本人波止場、郵船会社の土地を核として非常に多くの廻漕業や舁輸送に従事する人びとがあり、さらにはこうした船着き場に関連する営業者が海岸地に集結していたことも主張される。明治十四年の「横浜商人録」によれば、海岸通り二〇番地には土方職一軒、宿屋商(Hotels)三軒、酒商(Spirits and Liquor dealers)一軒、洗湯商(Bath House)一軒、炭薪商(Char Coal and Wood Merchants)一軒が店を開いていた<sup>五二</sup>。請願文にみられた一五三〇人の住人は煉瓦造と木造の家屋一棟ずつに比して多大であり、上記の各店舗も請願にみられないことから、中央の私道沿いではない建物が相当あったことを推測させる。煉瓦造倉庫や巨大な入堀もあわせれば、三井組へ払い下げられた旧税関の倉庫用地に匹敵する規模と設備であったといえる。

以上のとおり、海岸通り北側の土地は、御国産波戸場と日本郵船会社の海岸を核とした港湾の重要な一角となっており、内国荷物運送に関わる多様な人びとが出入りした。総体として大規模な「波戸場」の機能を有した空間であったといえるだろう。明治二十五年の請願は、ようやく獲得された海岸を保持せんとした都市住人の意思表示であったといえる。

## 五 課題と展望

本章では、慶応から明治前期にかけての海岸の変化を検討した。とくに慶応二年末の新条約によって造成された新しい海岸通りの周辺の利用や土地については、想像の域に留まっております。神戸開港場との関係も含めて説明するべき問題である。また、海岸通りに誕生した貸庫用地については、その建設の背景や普請について直接的な資料から考察ができていない。また、三井組から倉庫を借りていた人物や、税関保税倉庫用地がどのような営業と結びついていたのかについても今後の課題としたい。

つぎに、御国産波止場の造成、海岸の倉庫用地の払下、蓬萊社による埋立はほぼ同時期

に進行したことをどのように考えるべきか。民間の積極的な投資によって海岸の開発が進められたともいえるが<sup>五三</sup>、税関所管の外国人向け貸倉庫の払い下げ、神奈川県・外務省による波止場造成に代わって行われた波止場の移転とその後の外国人公使館沖の埋立事業など、そこに神奈川県や税関による主導や誘導がなかったとは思われないのである。

たとえば神奈川県と税関の協議によって決定された御国産波止場の設定は、内外荷物の明確な分離を目指した施策であったとされる<sup>五四</sup>。明治五年の段階では神奈川県と外務省が大規模な波戸場築造を計画していたことを考えれば(図17)、波戸場運送業者らによる出資と埋立、その後の設備の管理を勘案しても、県・政府主導の事業であったと判断すべきであろう。石庫用地の払下に関しても、三井組側の資料しか現段階では確認されておらず、その経緯は未だ不明瞭である。同時期に三井組が税関の御用金を預かりはじめるなど<sup>五五</sup>、官金抵当令を目前にした三井組の官庁との結合が読み取れる程度である。

そして海岸地の大規模な倉庫を、条約面の適用を約しながらも払い下げること自体が、いかなる政治的な状況下で実行されたのだろうか。本章では、外国奉行の主張を参照しつつ、同時期における取締の強化方針を鑑みて、倉庫用地による海岸の更新の背景に、取り締まりの徹底を目的とした海岸の閉鎖を推定した。三井組への払い下げ段階において巨大な土地の半分ほどが空地であり、大規模事業とは裏腹にその倉庫運営を民間へ委託していく過程そのものが、倉庫の需要よりも対外的な問題から埋立事業が進んだことを暗示しているのではないか。

最後に、海岸の民有地化とその成熟から近代築港事業と都市の関係展望したい。

明治六年の倉庫用地の払下は、三井組による倉庫の曳家と海岸の開放、三菱会社や日本郵船会社による設備の拡充を経て、西側の御国産波戸場、さらには蓬萊社埋立地と一体となった内国貨物のための基盤の誕生へと帰結したといえる。そして、幕末以来営業の続く運送方・人足方、新興の海運業者である三菱会社と日本郵船会社、物資輸送の従事者、関連する地借り出店者など、多様な人びとの生きる空間となったのであった。その形態と景観は、市民全体に開放されたバンドとは似つかぬものではあったが、日本人町全体、つまり都市の海岸の半分以上を覆う「波止場」と、集約された海岸の倉庫によって近代の港町にふさわしい設備を達成していたと評価できる。

他方、こうした海岸の成熟は、国家的な港湾の改修である築港事業であっても一方的な

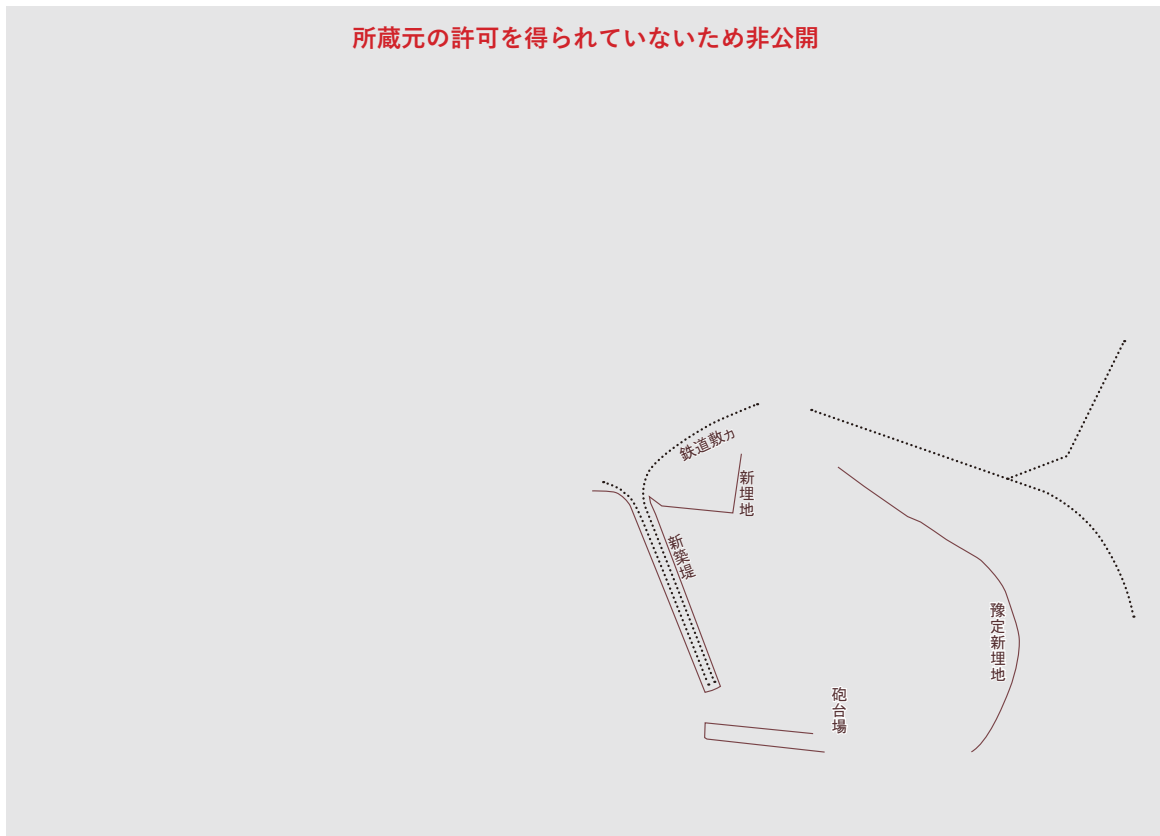


図 18 明治 12 年「新鑄横浜明細図」(横浜開港資料館所蔵、請求記号 Bb2-06.3-06) に加筆された「新築堤」と「新埋地」

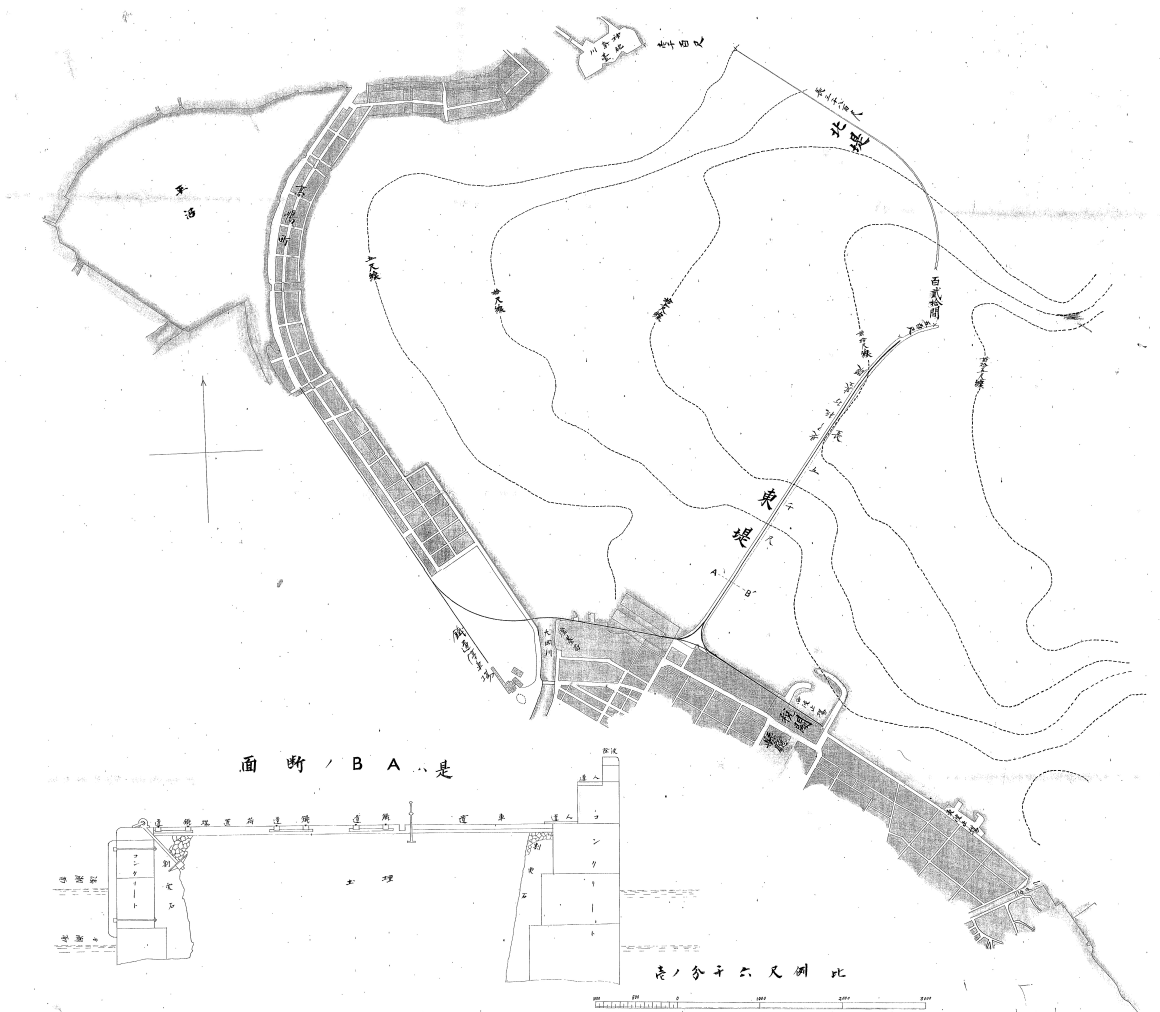


図 19 明治 20 年のパーマーによる初期計画(「横浜築港一件」(JACAR : B12082652900、注 58 参照)に収録された「埠頭図」)。

表3 横浜埠堤会社発起人

住所	人名	営業内容
野毛町4丁目62番地	原六郎	銀行
南仲通2丁目28番地	西村喜三郎	両替商(西村屋)
弁天通5丁目96番地	木村利右衛門	唐糸金巾引取商
弁天通3丁目55番地	大浜忠三郎	織物引取商
本町1丁目14番地	箕田長二郎	売込引取商(陶器・漆器、杉本屋)
花咲町2丁目28番地	樋口登久二郎	国立第二銀行
真砂町4丁目49番地	戸塚千太郎	横浜商業銀行、横浜貿易倉庫の 重役、商工会議所常務員
南仲通1丁目4番地	小野光景	正金銀行
元浜町1丁目1番地	朝田又七	廻漕
弁天通6丁目105番地	来栖壮兵衛	不明、商工会議所常務員
弁天通3丁目49番地	原善三郎	生糸売込商
弁天通2丁目30番地	茂木惣兵衛	生糸売込商
元浜町1丁目1番地	渡辺福三郎	乾物類
元浜町2丁目15番地	大谷嘉兵衛	茶商
本町2丁目27番地	平沼専蔵	売込引取(石炭屋)
弁天通2丁目32番地	田中平八	生糸売込商(糸屋)
本町4丁目69番地	洋行中、代飯田文太郎 馬越恭平	三井物産会社

〔出典〕住所と人名は、『神奈川県史』資料編 18(原資料は「外務省記録」の「横浜築港一件」(注58参照))。営業内容は、横山錦柵編『横浜商人録』大日本商人録社、1881年、肥塚龍『横浜開港五十年史』、1909年。

計画の実行は成立しえない、対話を要する状況を作り出したといえる。そして明治二十五には鉄製栈橋と鉄道敷の連結が妨げられてしまったわけであるが、事業への対抗的性格を指摘するだけでは不十分であると考ええる。築港計画に関する横浜市民の姿勢は、稲吉晃が築港に消極的な横浜市民の象徴として言及しているものの<sup>五五</sup>、明治二十年に売込商や銀行家、そして元「運送方」の朝田又七らを発起人として、パーマーによる築港案を実現すべく提出された自費による栈橋築造の申請や(表3)<sup>五六</sup>、明治七年のブラントンの計画において舁輸送の不便が訴えられていることが指摘されるなど、明治前期においても築港思想に類するものが認められる。「横浜市民」というべき集団が、交易商を頂点とする大きな格差と業種の偏りをもつて存在していたことを思えば、築港構想そのものと横浜住人の関係は未だに大きな研究上の課題であるといわねばならないだろう。

明治十二年の地図には、鉄道敷を伴う「新築堤」が朱書きで、御国産波止場に付随するように描かれている(図18)<sup>五七</sup>。また、防波堤によって囲まれた海域は、明治五年に決

定された日本船の停泊域である(第七章図4参照)。この築港のスケッチについては史料批判が必要であろうが、現段階では実現された計画の前に作成されたイギリス人パーマーによる計画との類似性を指摘しておきたい。明治二十年の横浜埠堤会社の設立の前提となったパーマーによる初期の計画案は、「日本波止場」(御国産波止場)と神奈川台場からそれぞれ堤防が伸び、前者は船着き可能で鉄道が敷かれる計画であった(図19)<sup>五八</sup>。

明治初頭以降の海岸の成熟は、近代港町の端緒として、築港構想と連続する可能性もあったことを示している。明治二十五年の請願については、外国人荷物の揚げ降ろしの場として機能した中央の波止場の拡張計画として採択された第一次事業が、既存の内国荷物の運送網から乖離した点において、その計画の代償に海岸を失うことが大いに反発を招いたと解するべきであろう。

明治二十年の横浜埠堤会社を否定して実施された第一次計画は、政府の計画に対する主体性を維持し、物資の揚げ降ろしを効率化・単純化することには成功した一方で、内地との連結は、国産波止場や海岸、鉄道敷との連絡を欠いた点において先送りにされてしまったといつてよい。

明治六年前後に実施された波止場の分離と民有地化、つづく海岸の成熟を経て、都市横浜開港場の利害を代表する港湾インフラは容易には達成されなくなってしまった。そこでは、既存の港湾の秩序を温存しながら展開する計画が求められたのである。

一宮本雅明「日本型港町の成立と交易」歴史学研究会・深沢克己編『シリーズ港町の世界史② 港町のトポグラフィ』青木書店、二〇〇六年。

二伊藤毅「水辺の空間―都市と建築―」伊藤毅・吉田伸之編『水辺と都市』山川出版社、二〇〇五年。  
三岡本哲志・日本の港町研究会『港町の近代 門司・小樽・横浜・函館を読む』学芸出版社、二〇〇八年。

四『横浜市史』第二巻、一九五九年。第四編第三章二・四節。

五『横浜市史』資料編三、一九六四年。「横浜外国人居留地一件」の六七番。

六『大日本古文書 幕末外国関係文書』四〇(東京帝國大學文庫史料編纂掛編、資料番号四四。  
七『横浜市史』資料編四、一九六七年(二五頁からの「各港貸庫設置一件」抄)。原典は「続通信全覧」、館舎門「各港貸庫設置一件」七。

八「続通信全覧」編年編、「英国往復書翰」一(慶応三年)。慶応三年一月十一日の江戸公使館での会談。

九 石井孝編『横浜売込商 甲州屋文書』有隣堂、一九八四年。文書番号二〇四番。慶応二年十月の大火の報告。

一〇 「御触書并留帳」（慶応二年十一月十四日から三年八月四日まで、神奈川町藤井家文書、請求記号 2200463013、神奈川県立公文書館所蔵。藤井家は、神奈川町の成仏寺門前の名主である。神奈川宿本陣、神奈川町の名主石井家文書よりも、最幕末の御用留が期間を空けずに残されており、神奈川奉行による布達を把握することのできる資料群である。

一一 「横浜市史」資料編六、一九六九年。「統通信全覧」、「横浜外国人居留地一件」五。また、斎藤多喜夫「幕末期横浜の都市形成と太田町—太田屋新田西部地区造成関係資料を中心に—」（『横浜開港資料館紀要』第四号、一九八六年三月）。

一二 横浜市中央図書館所蔵（同館デジタルアーカイブにて公開、請求記号 E-088）。

一三 横浜開港資料館所蔵、請求記号 Bb2-06-2-10.1。

一四 慶応二年「御触書并留帳」（神奈川宿成仏寺門前藤井家文書、請求記号 2200463012、神奈川県立公文書館所蔵）。

一五 前掲斎藤多喜夫論文（注一一）。

一六 青木祐介「幕末・明治初期の横浜」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市Ⅰ イデア』東京大学出版会、二〇一〇年。

一七 当然、開放的な道の造成だけではなく、海岸通り沿いの土地取得がなくては物揚げに便利な場にはならないだろう。ただ、後にみる三井組所有の海岸石庫と土地の多くが外国人の貸借となっていたことから、借地や借家（倉庫）によって海岸周辺の空間を外国人側が手にする可能性は十分あったと考えられる。

一八 稲吉晃「不平等条約の運用と港湾行政（一）」首都大学東京法学会編『法学会雑誌』第四六巻二号、二〇〇六年一月。同論文によれば、居留地の海岸への上陸は明治前期にたびたびおこなわれ、取り押さえた税関職員に対して苦情が出されている。外国側と日本側の海岸に対する認識の差を示しているといえるだろう。

一九 太田久好『横浜沿革誌』、一九九一年。

二〇 「金川港規則」人（外務省引継書類、東京大学史料編纂所所蔵）所収の「税関内石蔵借貸約定書」。

二一 「金川港規則」人（同右）所収の「西税関見張番心得」や「巷三四番見張所規則」、「一番見張番所規則」、「覚」（取り押さえた際の規則）。本資料の性格は、斎藤多喜夫「明治初年の横浜居留地—「金川港規則」から—」（横浜開港資料館・横浜居留地研究会編『横浜居留地と異文化交流』山川出版社、一九九六年）に依拠した。

二二 三井文庫所蔵資料、本二二五・一四。

二三 保税倉庫の利用事例は未見であるが、明治三年十月官許の地図「横浜全図」には、倉庫部分に「Ice Co.」と記載される（三井文庫所蔵資料）。茶会所への転用を依頼した資料によれば、梁行五間の一棟は水貯蔵のために建てられたとされ、氷を扱う商會が利用したと推測される（三井文庫所蔵資料、本二二五・一四）。明治五年の図面には「氷蔵」と書かれる（図17参照）。

二四 石井寛治『近代日本とイギリス資本—ジャーディン・マセソン商會を中心に—』東京大学出版会、

一九八四年。第四章三節、注三四（三九三頁）。

二五 三井文庫所蔵資料（別二四〇三・一・一六）。

二六 「横浜税関附属海岸石庫及附属地等払下願書（租税頭指令及請書等添）」（三井文庫所蔵、請求記号 本二二八・一一）。題名のとおり租税頭陸奥宗光による払い下げの許可と請書の提出指令、三野村による請書、払い下げの請願書が収録される（いずれも写し）。

二七 三井文庫所蔵資料（別二四〇三・二・一四）。石庫図面（前掲注二五）とともに「他所図面」と書かれた封筒に収められている。

二八 三井文庫所蔵資料（別七五〇・四六・五〇）。こちらは買上げ前の広い敷地を描く。地券の写しに付されていることから、明治六年四月の地券交付の時点の状況であろう。

二九 安岡重明「三井国産方から三井物産へ」『同志社商学』第一九巻三号、一九六七年十一月。以下、国産方に関する記述は注記がない限り同論文に依拠した。

三〇 前掲論文に所載（注二九）。安岡も明治九年に政府よりの貸金をうけて各地から廻漕米を購入した事例を紹介する。

三一 「いさ番石庫貸付所国産会社模様替仕様之略記」（三井文庫所蔵、別二・七・二四〇三）。

三二 前掲資料注二五。

三三 「神奈川県横浜海岸通九百五拾二号地海岸石垣及亀腹破損二付受負仕様書并二受負証書」（三井文庫所蔵、統一二四）。明治十年九月二十六日の暴風雨による被害の把握と修繕の見積もりを記録する。

三四 明治十年の修繕の書類のなかに（注三三）、当該の土地が売却の示談中であるという記載がみられる。三菱会社への売却交渉が進んでいたと考えられる。

三五 三井文庫所蔵資料、統一二二・一。目録の題は、「三菱会社ト横浜河岸通九百五十三号地、同元浜町三丁目、百三十三号地三菱支社地所貸借二付約定書并二図面元価見積調書類」。

三六 明治七年、居留地海岸の東波止場の土地を英国の「アマチュル漕船会社」へ小屋の敷地として貸し渡した記録が残る（「外務省記録」三門十二類一項「横浜英吉利国「アマチュル」漕船会社へ地所貸渡並其社家屋建築二就テ仏国公使苦情一件」、アジア歴史資料センターによる請求記号（以下、JACAR）B12083339400「横浜「アマチュル」アソルテック」会社へ競船用ノ為東波止場九番地十番地地先貸渡一件」、JACAR: B120833352200「外務省外交史料館所蔵」。英文では Y.A. (Yokohama Amateur) Rowing Club とされる。外国人のスポーツクラブについては、横浜開港資料館編『図説 横浜外国人居留地』（有隣堂、一九九八年）を参照。

三七 外国人の特定については、立脇和夫監修「幕末明治在日外国人・機関名鑑 Japan Directory」（ゆまに書房）によった。

三八 藤本実也『開港と生糸貿易』中巻（名著出版（一九八七年）、一九三七年刊行の書籍の復刻）によれば、江戸海産物問屋の榎並屋の出店に勤めていた増田嘉兵衛と安部幸兵衛が、攘夷運動の高まりから同店が閉店するにあたり譲り受けた店である。地番の揺れ（六三番地、六八番地）については、榎並屋は本町二丁目（明治三年以降は四丁目）の北西角地三井横浜店の東隣であったため、店が継続していれば、六八番地が正しい（もしくは旧来の店）ということになるだろう。

三九 三井文庫所蔵資料、本二二五・一四。製茶場とは、長期保存のための加工（再製）をする場所と

推測される。なお、明治十年ころの横浜の地図に「茶会所」がみられる（改正横浜細地図新訂、五味文庫、請求記号 B62-01-30、横浜開港資料館所蔵）。

四〇 前掲書注三七。なお、明治十一年の六月二十八日段階で、地代の過払い分から三菱会社の借りていた石庫四棟と、ロヘルトソンの石庫四棟と納屋と建家の賃料が差し引かれた証書が収録されている（前掲資料注三五）。売買のなされた六月分の決済をしたものとみられ、ロヘルトソンの借りた物件の賃料を三菱会社が支払ったことを示していると考えられる。製鉄所の監督者の住宅として借り上げていたのであろう。

四一 安政四年（文久四年）「永書」十七（三井文庫所蔵、本一三八）。安政六年七月二十八日の記事。

四二 中野健明・臨時横浜築港局編『横浜築港誌』、一八九六年（五一～六四頁）。この請願は築港計画を論ずる既往研究にて紹介されており、稲吉晃は、後の東京市民の言説を引きながら、築港に消極的な横浜市民の性格を示す事件として紹介した（稲吉晃『海港の政治史 明治から戦後へ』名古屋大学出版会、二〇一四年、第三章一節）。また、築港計画を通過的に叙述した松浦茂樹も言及しており、鉄道が主要な輸送方法ではなかったと評した（松浦茂樹『明治の国土開発史』鹿島出版会、一九九二年（第六章））。しかし、請願の主体の一人である朝田又七は、明治二十年の民間の出資による棧橋築造申請に参加しており、築港に消極的な横浜市民という評価には疑問が生じる。一方、鉄道と一体化した埠頭の建設は明治七年のプラントンによる計画案にも描かれており（一九七四年

『Yokohama Harbour General Plan』、大隈重信文書、請求記号 J14 a5154、早稲田大学図書館所蔵）、棧橋と鉄道が結局は幹輸送によってつながれることが事業後の課題となることを考えれば、計画の変更は軽視できないだろう（横浜市『横浜市史』第四巻上、一九六五年、二編五章四節）。

四三 『横浜開港五十年史』下巻、一九〇九年（附録「横浜の功労者」）。横山錦柵編『横浜商人録』（大日本商人録社、一八八一年）に、両替店「松の屋」左右田金作（南仲通一丁目一番地）が確認できる。

四四 「外務省記録」三門一二類一項「横浜海岸通和蘭国公使館独逸領事館前波戸場脇海面埋立ノ義ニ付両国公使苦情一件」（JACAR：B12083340000、外務省外交史料館所蔵）。蓬萊社の埋立地に関する以下の記述は本資料による。なお、埋立地の造成に対する外国公使の反対と土地の補償については、西隣に設置された鎮守府に関する田中宏巳の論考を参照（東京湾の防備政策と東海鎮守府―英仏駐屯軍撤退前後を中心に―、横浜対外関係史研究会・横浜開港資料館編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』東京堂出版、一九九九年）。

四五 宮本又郎「明治初期の企業と企業家―蓬萊社の場合」経営史学会編『経営史学』第四巻三号、一九七〇年七月。石井寛治『近代日本とイギリス資本―ジャーディン・マセソン商会を中心に―』東京大学出版会、一九八四年（第三章一節）。

四六 『横浜市史稿』産業編、一九三二年（第二期第一章六節「横浜生糸改会社」）。

四七 明治六年「坤部布令」（東京都公文書館所蔵、請求記号 606 D6 08.071）。

四八 「外務省記録」三門一二類一項「横浜海岸通和蘭西国公使館前波止増築二箇シ在本邦同国公使苦情一件」（JACAR：B12082649600、外務省外交史料館所蔵。明治五年、一丁目にあった「渡船波止」を改修して「大波止荷揚場」を造成しようとしたところ、近傍にあったフランス公使館からの

眺望を損なうとして計画への異議が唱えられた際の絵図面である。前掲の田中宏巳による論考にて言及されている（注四四）。また、稲吉晃も、開港場における港長・港則が決定されていなかったことによって、インフラ整備に支障が出る事例として紹介している（『海港の政治史 明治から戦後へ』名古屋大学出版会、二〇一四年）第一章）。

四九 「横浜港全図」（内務省引継地図・0041、史料編纂所所蔵）。表紙には「神奈川県ヨリ出ス」と記載される。

五〇 横浜市中央図書館所蔵、請求記号 map\_064。

五一 横山錦柵編『横浜商人録』大日本商人録社、一八八一年。

五二 前掲資料によれば（注四四）、海岸通り二〇番地の埋立造成は蓬萊社の請願によるとされるものの、その背景に神奈川県による都市計画が全くなかったかはわからない。

五三 前掲論文注一八。

五四 三井文庫所蔵資料、本五〇五・一。

五五 稲吉晃『海港の政治史 明治から戦後へ』名古屋大学出版会、二〇一四年。東京商工会や田口卯吉らの言説による。

五六 『神奈川県史』資料編一八（一九七五年）、資料番号三三三。

五七 明治十二年「新鶴横浜細図」（横浜開港資料館所蔵、請求記号 B62-063-06）。

五八 「横浜築港一件 附船舶出入数並貨物噸数取調ノ件、築港用器械其他ノ代価在米国我領事ニ於テ取調ノ件」（「外務省記録」、JACAR：B12082652900、外務省外交史料館所蔵）。なお、稲吉晃前掲論文（注四二）に言及されるが、日本人町と神奈川県砲台から堤防（係船可能）を築く計画として説明がなされる。本論では、日本人町の海岸のほかならぬ「日本人波止場」部分から堤防が伸びている点にも注目したい。これは水深の浅い一帯に埠堤を築くという計画意図によるものであるが、埠堤会社を興した横浜住人にとっては、波止場や日本人町の海岸を中心とした既存の物流秩序の延長として、受け入れやすい計画であったのではないだろうか。

## 第七章 鉄道開通と神奈川—近代化事業と「伝統都市」—

## 一 鉄道敷設計画の評価

明治初頭、東京・横浜間の鉄道敷設用地としての高島町、鉄道用地地地を含めた七軒町一丁目・二丁目、青木町名主鈴木利貞が埋立を主導したとされる宮洲町・瀧下町が造成された(図1)。この埋立は、横浜開港場が湾を横断して拡大する画期的な事業であり、明治中期以降に神奈川沖までを含む大横浜港へと変化する端緒であった。本章は鉄度開通事業に付随したこれらの埋立地の分析から神奈川宿・湊への事業の影響を検討する。

鉄道の開通については、『横浜市史』に詳しい記述がある<sup>一</sup>。慶応三年の英人ウエストウツドによる敷設事業請負要請、旧幕時代の契約として破棄された米国公使ポートマンの例、ブランドンによる鉄道事業の推薦、明治政府との契約をむすび、技師や部品の調達までこぎつけるも、公債発行にあたっての情報開示による行き違いから契約破棄となってしまう英人レイの例が紹介される。

また、鉄道事業に加担せんとする横浜商人の願書も紹介され、国家統一の推進を説きつつ、運営や金札発行の特権を得ようとした横浜商人の姿を描く。請願者の一人である弁天通り二丁目の中屋徳兵衛をのちの益田孝と比定しており、明治初頭における新興の商業資本の萌芽が見て取れる。同じく請願者の松屋栄次郎は本町五丁目の売込商というほかは不明だが、残りの人物について若干補足すれば、益田孝の義兄の中屋謙治、伊東玄朴の長男で、講武所頭取を辞したあと慶応四年五月に開業した呉服商の門屋幸之助、その実弟であった門屋繁次郎というメンバーであった<sup>二</sup>。旧藩士や幕臣を中心とした新興の横浜住人が事業の申請者となっていたことが明らかであろう。また、中屋徳兵衛・門屋繁次郎・門屋幸之助は横浜の廻漕会社頭取となったことが確認される<sup>三</sup>。新政府による物資流通の再編にのって蒸気船による都市間交通へと参入したことが理解される。明治初頭の旧士族層による新規事業展開の典型的な事例といえるだろう<sup>四</sup>。

他方、鉄道敷設による既存の都市・地域への影響という点については、吉田伸之の高輪海

岸を対象とした論考がまず想起されよう<sup>五</sup>。船着き・漁業に便利で、夏季には葦簀小屋が展開するなど、江戸周縁の豊かな成熟がみられた名所・高輪海岸を切り裂く「現代都市インフラ」としての鉄道敷と、封建制から解放され、土地買収を見据えた投機的な土地売買に乗り出した「拝金主義者たちの欲望」を取り上げ、両者を「伝統都市」から「現代都市」への移行過程のなかに位置付けた論考である。

本章では、鉄道敷設に付随した神奈川までの埋立地と、同時期に行われた神奈川地先の埋立地の空間を読解することにより、横浜商人・外国人が野心的に加担せんとした「現代都市インフラ」たる鉄道の誕生を、地域史的視点から再評価することを試みたい。

## 二 埋立地の概要と明治初頭における県政の方針

まず埋立造成の概略を見ていくことにしたい。高島町は、鉄道用地・公道と、埋立主に与えられた宅地部分からなり、開港場と神奈川をつなぐ埋立地である。明治四年に完成した。埋立地の「七軒町」は元町と七軒町の地先に造成された。七軒町は江戸時代以来ある青木町の小字であるが、鉄道用地の代地として高島町につづく埋立地の一部にもこの名がつけられた。宮洲町と瀧下町は七軒町の東につづき、滝之町から宮之町の地先に位置する。この二町について『横浜開港五十年史』と『横浜市史稿』の記述を紹介する<sup>六</sup>。

## 『横浜開港五十年史』

鈴木利貞(故) 文政十年神奈川宿に生る、万延元年名主役と為り、引続き戸長の職に就き、明治初年青木町地先海面一万二千余坪を埋め立てたるは、今の滝下、宮洲の地にして商家櫛比の市街なり、(後略)

『横浜市史稿』政治編<sup>3</sup>

明治初年に当って、名主役を勤め、引続いて戸長の職に在った鈴木利貞(青木町本陣。)は、青木町地先の海面一万二千余坪を埋立てた。後の滝下町・宮洲町である。(開港五十年史。明治四年、高島町埋立竣工の後、高島嘉右衛門は其継続事業として、青木町字七軒町・七軒町代地・七軒町二丁目・宮洲町・滝下町の地を埋立てた。鈴木利貞の埋立てた二町と、この高島の埋立てたものとで、宮洲町・滝下町は全部出来上がったものと見る可きである。

高島町・七軒町が高島嘉右衛門による埋立事業で、宮洲町・瀧下町が青木町戸長鈴木利貞による埋立事業であったの<sup>二</sup>が、『市史稿』の記述には後者にも高島の関与が想定されている。

高島町に合わせて造成された埋立地の背景には神奈川県による方針もあったと考えられる。神奈川県は明治元年から県内の不毛な地の開拓申請を推進し、埋立地に対して数年間の地租免除を与えており、新地造成を推進する立場をとっていた<sup>七</sup>。たとえば、鉄道開通とほぼ同時期に、横浜の土地不足の対策としての吉田新田の埋立が実施されている<sup>八</sup>。運河の開削を伴う巨大な事業にもかかわらず投機的な土地需要から入札は殺到したといい、結果的には吉田新田の権利者が請負人（の一部）となり事業は始まった。

吉田新田の埋立事業からは、開港場における深刻な土地不足の解決と運河の開削を、あわせて民間の出資によって実現しようとする県の意図が認められる。官費による都市計画と並行させることで、より効率的な都市形成を目指す方針をもっていたといえよう。次節で述べる高島町の造成過程においても、鉄道開通事業を民間の資本によって推進しようとする県の意図がうかがえる。

## 三 高島町の形成と影響

### 1 埋立地の計画

明治三年五月、神奈川県裁判所は鉄道用地と残地の造成事業を布達したが、希望者が出なかったため、かねてから鉄道敷設の必要性を唱えていた高島嘉右衛門が担当することとなった。高島嘉右衛門は、本町四丁目の「肥前屋小助」の共同出店者のひとり<sup>九</sup>で、禁じられていた金貨輸出に加担したのち自首をし、釈放後には入船町で建設業を開業した人物とされる<sup>一〇</sup>。

「埋立地仕様書」によって工事の概略をまとめると、長さ七七〇間、馬踏み幅四二間、そのなかで鉄道敷用地五間と道路用地六間を除く幅三二間の残地が、埋立主に与えられるというものであった<sup>一一</sup>。一方で「埋立地図面（図2）」によると全体の幅は六二間となっており、図に描かれた街区割をみると、西側から五間（街区）・五間（鉄道用地）・一〇間（街区）・六間（馬車道）・一六間（街区）・四間（道）・一四間（街区）・二間（道）である<sup>一二</sup>。明治十一年測量の「横浜実測図」を見ると全体の幅が後者の形に近いことから<sup>一三</sup>、計画の変更があったと

理解される。

また、後述するとおり造成後に線路両脇三間幅の土地が収用され、「横浜実測図」における線路の西側の街区は細長い空地になっている。また、線路東側の街区が三列から二列に変化した。大枠の寸法は仕様書に従いつつ、街区割に関しては造成後の変更があったことが想定できる。

また、工事の途中に出された訴えによれば、「神奈川海灣鉄道続地埋立事、入用見込書去年ノ十月奉差上候所、右成功中、嵐ニて流損」とあり、工事中の嵐によって埋立地が流失してしまったという<sup>一四</sup>。明治十三年にも風災によって高島廓が大きな被害を受けたよう<sup>一五</sup>で、海上に細長く伸びる高島町の脆弱性を示している。

### 2 竣工当初の高島町と遊廓

埋立事業は明治四年二月に完了するが、当時の開港場は不景気で、高島町は閑散としていた。以下は明治五年の高島嘉右衛門の神奈川県に対する嘆願である。

【資料1】 二五

鉄車道海面埋立地光景之儀ニ付願

石崎方神奈川青木町迄の埋立地、既に鉄車道御開創、形之如ク御盛行ニ相成、私之一身ニ取り候而も、乍恐大慶不奉過之、右埋立地鉄車添之儀ハ、高島町是迄町名御免許ニ相成候得共、未ダ渺漠たる草原、実に見るに忍びず、（中略）就而ハ右高島町之内九丁目ハ取分ケ舟附便利も宜敷候間、諸国回漕取扱方仕度、左候ハゞ自然土地繁栄、人民融通之道も相開可申と奉存候間、何卒前頭之次第御憐察被成下置、格別之評議を以御免許ニ相成候様、此段奉願上候、以上

申六月

高島嘉右衛門

神奈川県御庁

埋立地完成から一年が過ぎても「渺漠たる草原」という状況であった。繁栄のために営業許可を求めた「諸国回漕取扱方」の内容はわからないが、遠隔地へむかう廻船を差配する廻船問屋のような事業であろうか。第二章で紹介した廻漕会社の頭取として、明治五年段階で高島嘉右衛門の名もみられ、同社の分会社が高島町に設立されたことを考えれば、両者は類似した営業であったか、共同での開業の画策があったようにも考えられる。

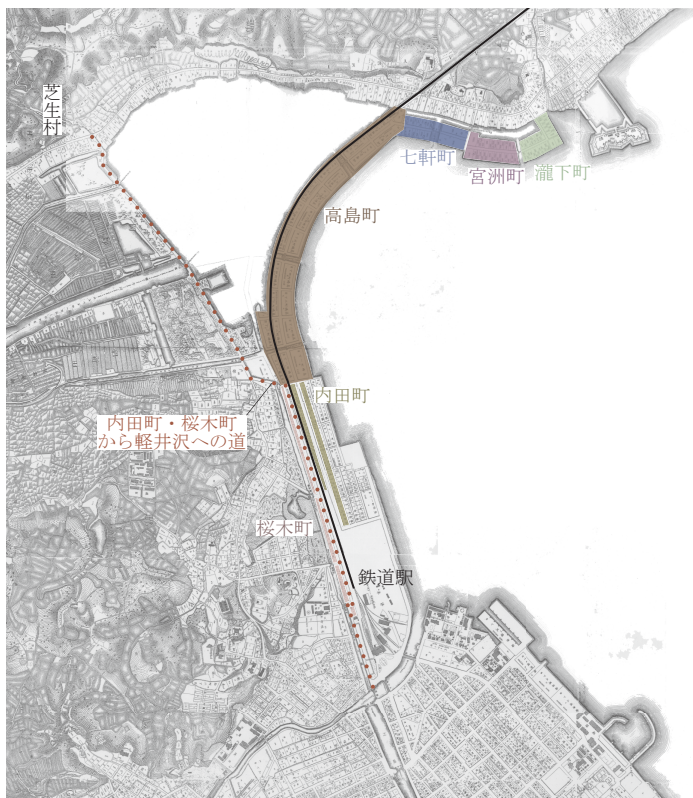
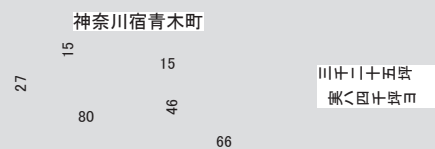


図1 埋立地の概要  
「横浜実測図」をもとに作成。



所蔵元の許可を得られていないため非公開

5 5 10 6 16 4 14 3  
街鉄 街 馬 街 道 街 道  
区道 区 車 区 道 区 道  
道 道 道 道 道 道 道

東京

図2 「埋土地図面」(横浜開港資料館所蔵)に加筆  
青木町地先においては、七軒町1丁目・2丁目描かれていたのに対し、宮洲町・瀧下町は描かれていない。

このように、土地経営による収益が見込めない状況のもと、先述のとおり鉄道敷地の両側三間分の土地を差し出すよう命じられることとなった。この命令に対し高島は、両側幅三間の土地がなくなってしまうと西側の街区が幅二間となり、使いようのない土地になってしまうので、不毛の地となる幅二間分も含めた八間分を買い取るように県庁に願い出た<sup>二六</sup>。先述の「埋立地図面」の街区割をみると、鉄道敷の西側が五間幅の宅地として描かれている（図2）。この宅地は鉄道敷と海に挟まれているため、三間分の土地が収用されてしまつては使い物にならないという高島の主張はもつともなものであろう。

結局この出願は取り下げられてしまつたが、こうした買収が計画されることは、県側が完成した高島町の都市計画にさほど関心がなかったことを示している。吉田新田埋立事業と運河開削事業の際に見られた姿勢と同様で、県としては東京・横浜間の鉄道敷設という国家的な事業を民間の資金によつて推進することが目的であり、高島町そのものは、仕様書に見られる通り鉄道用地の「残地」にすぎなかったのである。

そうしたなか、慶応の大火後に港崎廓から移転した吉原廓において明治四年十一月に火災が起こり、移転先として「太田村中畑山」が指定された。しかし遊廓移転のためには山地を削る必要があつたため、遊女屋一同は明治五年七月二十日、高島町への移転開業を出願し、許可されることとなった。以下の二つの資料は当時の高島町と遊廓の関係を示すものである。

資料2は、神奈川県役所に対する吉原町戸長の父佐藤佐吉と町並遊女屋山口衆蔵の請願（明治五年七月二十日）、資料3は吉田町の森資路と山口菊造の代理人から県令に提出された高島町遊廓の移転申請の一部である（明治十二年一月十五日）<sup>二七</sup>。

#### 〔資料2〕

（前略）当吉原町遊女屋共、去未十一月中類焼後、太田村之内、中畑山畑地江替地の（被か）仰付一同承知奉畏候処、右地所之儀は、遊女屋共家作補理仕候には、山地凡三四丈余も切下げ、土取運送仕、並山畑持主江相当之示談金差出し、其他諸掛り莫大の入費（中略）尤遊女屋共儀、近年不景氣相続き、折柄殊に類焼仕、太田村替地の儀、前頭の通銘々難及自力候。然る処今般鉄道線石崎海岸通、高島嘉右衛門埋立之地所江、神奈川宿旅籠屋共出転渡世度段奉願候処、御開濟相成由、粗承知仕候。就ては当町遊女屋共一同、右地所持主嘉右衛門江示談之上、土取相濟候迄仮宅渡世仕度（後略）

#### 〔資料3〕

（前略）然ル折柄、高島町埋立人高島嘉右衛門ハ貸座敷之者へ示談ヲ以、高島町埋地へ神奈川宿貸座敷渡世之者ハ出稼営業ヲ請願及候処、御許可相成居候得共、埋立人等ニ於テ望ム処ハ、横浜貸座敷ヲ該地へ移転被為致度、依テ右移転ニ付而之入費等ハ、悉皆地主ニ於テ出金可致候間、是非当分仮営業ニテモ請願致度旨、達而之依頼ニ付、高島嘉右衛門之頼談ニ任セ、太田中畑山地概普請中、仮営業之義ヲ出願候処、即御開濟ニ相成（後略）

高島町の繁栄につながる遊廓の移転は、高島にとつて願つてもない好機であつたと考えられる。資料3に、高島町への移転費用は地主、つまり高島自身が負担する条件を出していることから明らかである。また、高島の提案をうけた神奈川宿の貸座敷・旅籠屋渡世の者達が、高島町での営業を申請して許可をえていたこともわかる。神奈川の住人が開港場に続く高島町を有効な出稼の場として捉えていたことも推測されうらう。江戸時代以来新地には繁栄策として遊廓が置かれる場合が多かつたが、高島としても、神奈川の遊興施設が町の繁栄につながるという希望があつたのだろう。

こうして高島町には遊廓が置かれることとなり、大きな店は一丁目から四丁目の間に集ま

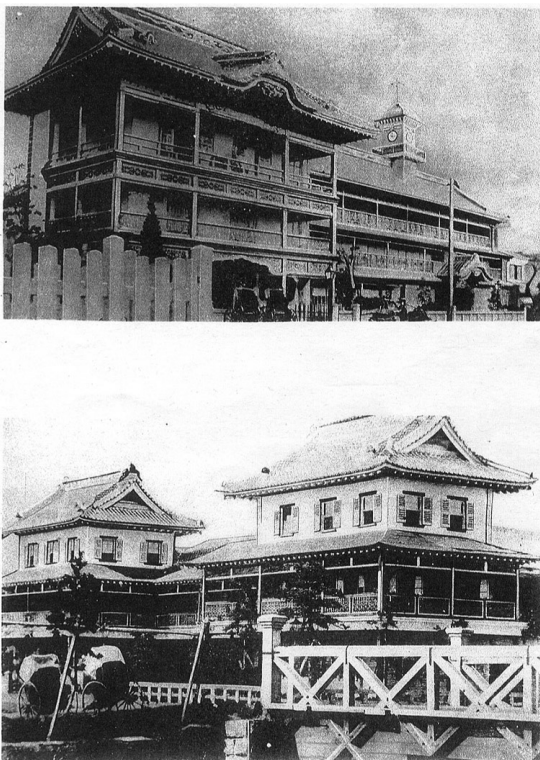


図3 高島廓の古写真  
『横浜市史稿風俗編』から転載。上が岩亀楼、下が神風楼である。  
両者とも、手前に人力車が確認される。

り(図3)一八、『横浜開港五十年史』によると、全体としては当時の横浜船渠会社(二丁目)のあたりから七・八丁目当りまで広がっていたという<sup>一九</sup>。その後、明治十三年四月には、山吹町・富士見町・山田町・千歳町を遊廓地とする旨が達せられ、高島廓は移転することとなった。鉄道沿いの遊廓は外間が悪く移転の必要性を感じていた県と、土地開発に野心的な事業者の働きによって移転が決定され、明治十三年秋の風災によって被害を受けた貸座敷営業者も同意し、移転が進んだようである。なお、高島町からの移転の際に神風楼が七軒町に支店を残した<sup>二〇</sup>。

以上の記録から、竣工時の高島町は鉄道敷を支える土堤に近いものであり、都市の基盤が未完成であったと考えられる。こうした状態にあった高島町が、横浜遊廓の移転をきっかけとした整備を受け、都市と呼ばれるべき環境を獲得していったのであろう。第四章でみたとおり、移転前の遊廓であった吉原町の明治元年における人口は、男五七三、女五六一、遊女一三九六人であった。明治七年に布達された高島町の「遊女渡世」の規則によれば<sup>二一</sup>、遊女は鑑札によって管理され(第四条)、第一区内(北方村・根岸村から野毛町・戸部町、羽衣町、高島町をふくむ開港場周辺)では高島町以外の居住は認められていなかった(第九条)。遊女の家屋の都合がつかない場合は貸座敷渡世の者(借家、同居することが想定されており、遊女自身の経済的な負担を考えれば多くは借家・同居する居住形態であったと推測される。遊廓の移転は顧客の勧誘のみならず、高島町の人口を一举に増大させたと考えられる。

### 3 高島町形成の影響

以上のような高島町の誕生が持った意味とは何か。本論では、①神奈川と横浜開港場の連結、②新たな海岸の誕生の二つを提示したい。

#### (1) 神奈川と横浜の連結

高島町は明治七年、大区小区制のもと、第一大区第二小区に編入され、内田町・福島町・桜木町といった鉄道駅・鉄道敷周辺の町々の戸長会所が置かれた<sup>二二</sup>。鉄道敷の「土手」から、新市街地として確立しつつあったことが伺われる。そして、竣工後の閑散とした状態を打開しようとした高島の行動によってもたらされた遊廓の移転は、高島町に繁栄をもたらしただけでなく、神奈川宿の遊興空間と開港場の周縁に位置した横浜遊廓の接触をもたらした。

また、都市整備が行われ、土地の借り手が付くようになった高島町が、開港場と神奈川を従前のような回り道を隔てた関係から、町並により連結された地続きの関係へと変化した点も重要である。「埋立地図面」にみられるとおり、中央の通りは幅六間の馬車道なのである(図2)。

横浜駅のわきにある桜木町と内田町周辺は(図1)、鉄道用地に先立って明治二年から埋め立てが始まり、明治六年に修繕されている。修繕の際には、野毛の海浜を埋め立てて以来、神奈川までを高低差なくつなぐ内田町周辺は人馬交通の多い「本港第一ノ大道」であると考えた<sup>二三</sup>。高島町が内田町と同様の交通量を誇ったかは不明であるが、内田町から平沼新田にそって神奈川へ至る既存の道と異なり、台町の東側の東海道までを平坦な大通りによって連結した意義は小さくなく<sup>二四</sup>。

明治八十年ごろの褒章記録には、高島町において人力車渡世の者が溺水者を救出したという記事がみられる<sup>二五</sup>。これは、高島町が横浜から神奈川への往還であったことにくわえ、遊廓とも密接な関係をもっていたことも要因であろう。図3は、『横浜市史稿』に収録された岩亀楼・神風楼の古写真であるが、店の手前には人力車が止まっていることが確認される。吉田伸之は江戸の周縁たる品川宿の宿駅と疑似遊廓(飯売旅籠とそこに携わる水茶屋・芸師・煮売渡世など)に吸着する駕籠舁に注目しているが<sup>二六</sup>、横浜開港場の周縁に位置した高島廓と人力車渡世の関係も想定されうるだろう。遊廓の立地により、横浜開港場の都市域が高島町を介して神奈川へ延伸したと評価できる。

#### (2) 新たな海岸の誕生

明治六年の海図(図4)をみると、高島町の七、八、九丁目あたりは深い海域に接しており、資料1にて高島が主張していたとおり、船着きに便利であったことが推測される。かつての神奈川湊に入津した船の停泊場所が、湾を横断する高島町に接することとなったといえるだろう。神奈川湊廻船問屋が主体となった回漕会社の分会社設置は、こうした海岸の機能を明示するものである。

ここで、高島町の埋立地が、第二章にて言及した安永六年の一件においてまさに争論の種となった海域に接するものであったことを確認しておきたい。明治五年の十月には、神奈川県が大蔵省へ停泊船の取り締まりに関する上申をおこない、和船の停泊域に関しては、「新波

止場燈標」から「神奈川砲臺南隅」を結ぶ線の岸側とされた三。神奈川湊にとって重要であった旧来の停泊域を引き継いだ新しい区画が、高島町や御国産波止場のような新しい揚場に囲まれるようになったといえる。

ほかにも大きなものではないが、遊廓移転の途中においては仮の物揚場が海岸通りに設定された二八。また、敷地内への生簀の設置においては貫樋をつくつており、下水の排水路も建設している二五。こうした事業は、高島町の海岸通りや河岸横町が、店舗地先の水際空間としての多様な利用に供されたことを示している。資料が得られた場所は岩亀楼周辺であり、横浜開港場に接した高島町一丁目のみであるが、高島町の海岸通り・河岸横町、ひいては高島廓そのものが海と一体となった空間として成熟していったことが推測される。

#### 四 七軒町・宮洲町・瀧下町の形成

##### 1 宮洲町・瀧下町の造成

本項では、宮洲町・瀧下町の形成過程について考察を加えたい。本章第一節にて抄写した内容に若干の資料を加えることで、両町の特性に迫る。

宮洲町・瀧下町の造成に関する資料として、まず太田佐兵衛・相模屋長兵衛兩人宛に出された「埋立入用」や「埋立地代金」の受取証文が挙げられる二〇。表1にあるとおり、明治三年から明治六年までの間に証文が作成された。差出人の鈴木源太左衛門は、

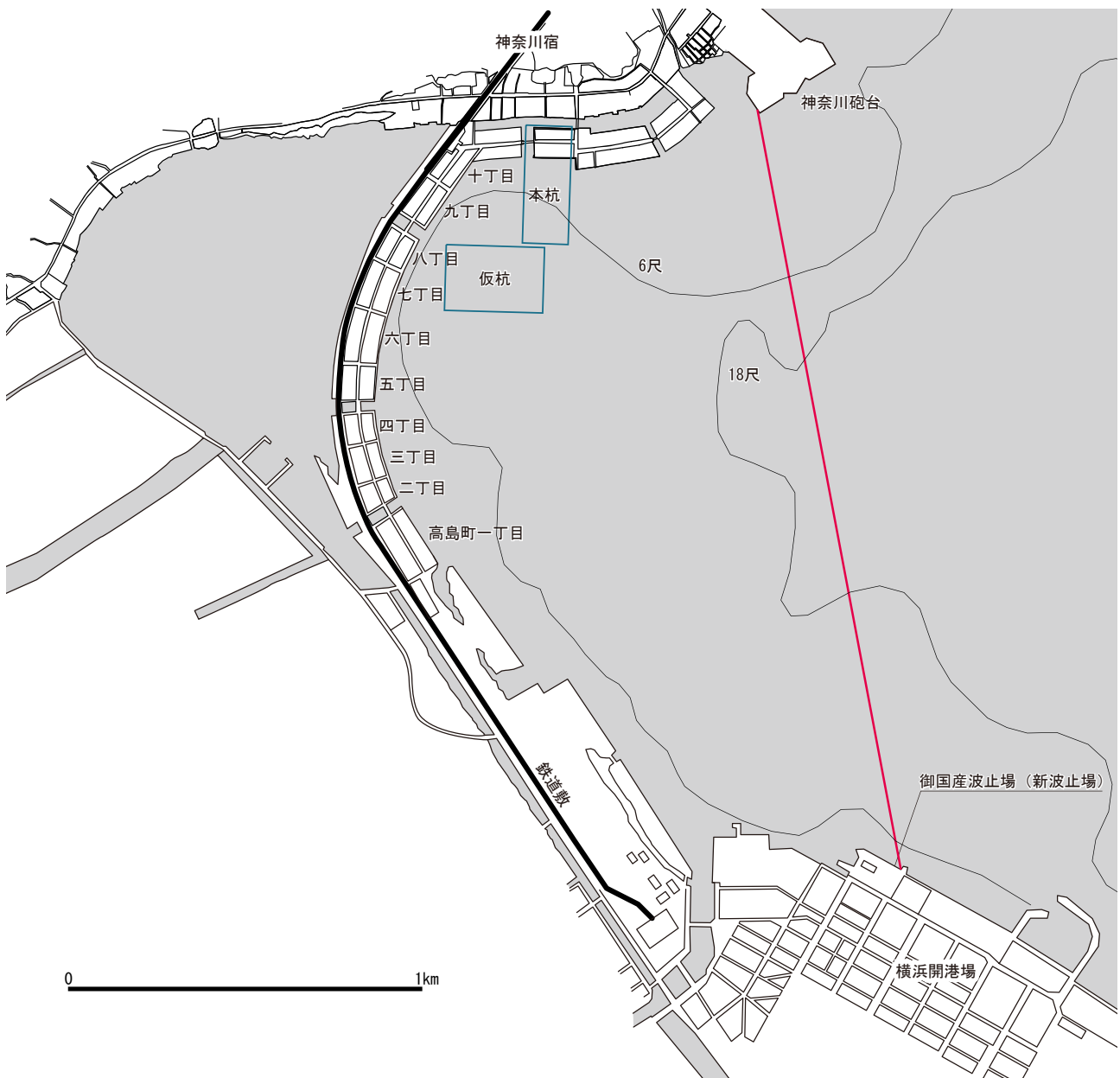


図4 高島町と明治五年に決定された和船碇泊域、安永六年の生け簀位置

表1 埋立入用出資の記録

作成年代	作成人	宛先	金額	文書
明治3年12月1日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	茅木屋佐兵衛	金 400 両 海面埋立入用	太田家旧蔵 関東大震災被災文書
明治4年1月11日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	茅木屋佐兵衛	金 100 両 埋立入用	太田家旧蔵 関東大震災被災文書
明治4年4月11日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	茅木屋佐兵衛	金 300 両 埋立地代金	太田家旧蔵 関東大震災被災文書
明治4年4月18日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	茅木屋佐兵衛	金 25 両 埋立地代金	太田家旧蔵 関東大震災被災文書
明治3年10月21日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	相模屋長兵衛	金 100 両 海面埋立入用	相模屋文書
明治3年11月晦日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	相模屋長兵衛	金 150 両 海面埋立入用	相模屋文書
明治4年1月14日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	相模屋長兵衛	金 100 両 埋立入用	相模屋文書
明治4年1月晦日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	相模屋長兵衛	金 150 両 埋立入用	相模屋文書
明治4年4月17日	鈴木源太左衛門 長谷川清九郎	相模屋長兵衛	金 50 両 埋立地代金	相模屋文書
明治6年5月20日	鈴木源太左衛門	相模屋長兵衛	金 50 両 埋立地代金	相模屋文書
明治6年8月2日	鈴木源太左衛門	相模屋長兵衛	金 100 両 埋立地代金	相模屋文書

〔出典〕太田家旧蔵関東大震災被災文書(横浜開港資料館所蔵)、相模屋文書(横浜市歴史博物館蔵)。

青木町の名主であり後の戸長鈴木利貞である。また、大部分の証文に差出人として連印している長谷川清九郎は、青木町側の神奈川宿の間屋である<sup>三</sup>。宮洲町・瀧下町が鈴木利貞の主導の元に埋め立てられたという記録は、こうした資金収集として具体的な側面を知ることができる。そして、明治四年四月以降にみられる「埋立地代金」は、宅地の切り売りが鈴木・長谷川によっておこなわれたことを示唆する。

つぎに出資者についてみていこう。相模屋長兵衛という人物について他の記録は残っていないが、表1に利用した証文は、享保から明治初頭まで、長兵衛が土地を担保に貸金をおこなった際の証文を巻物にまとめた資料であり、同家が宿内で高利貸し経営をおこなっていたことを推測させる。第一章でみたとおり、享保十七年には久保町の質地を獲得したとみられ

る(第一章表7・F)。

茅木屋佐兵衛は元町で呉服・太物渡世を営み<sup>三</sup>、横浜へも出店した。また、尾州廻船の経営者の内田佐七家との取引も行っていた。そして旧土地台帳によれば宮洲町三五九番地の土地を所有していた。鈴木源太左衛門から茅木屋への書付には(年欠、十二月一日)、埋立費用の收受と、間口五間の土地の平均・地上げについて連絡したものが残る。間口寸法が一致するため後の三五九番地に該当するとみられる。

事例が少ないものの、宿内の富裕者から資金を収集して海面埋立を実施し、明治三年末から四年正月ごろには完成をみて、四月以降に土地が切り売りされたと推測しうるだろう。

同地の形成について情報が得られるもう一つの資料は、安政五年「海面請地名寄帳」である<sup>三</sup>。屋敷地尻の海面を請地とし、屋敷地表間口に基づいて藻草永を賦課したことを記録する資料である。同資料の冒頭の貼紙には、「三町八反二畝七分 明治五年壬申埋立 引残二町一反五畝二十三分 請地」と記載されている。つまり、安政五年に登録された海面請地が埋め立てによって減少したのである。埋立地の完成後、明治五年から台帳へ反映されたと考えられる。

## 2 鉄道敷補償用地としての七軒町

『神奈川県史料』によれば明治七年に高島町の地券が公布された<sup>三〇</sup>。『神奈川県史料』の記載をまとめた表2のとおり、七軒町、第三大区内の埋立地(神奈川宿・芝生村・子安村とその内陸側)、高島町がばらばらに地券を公布されており、さらに一年後、第三大区の海面埋立地に新しく地券が公布された。第三大区のなかでの詳しい場所は資料から把握できないが、埋立地の面積や他の資料を用いて推定を試みたい。

第三大区の中で海岸沿いの町は子安村・神奈川宿・芝生村である。「横浜実測図」を見ると、『神奈川県史料』に見られる面積に相当するような大規模な埋立地は、七軒町・宮洲町・瀧下町だけである。

高島町の造成に伴う代地埋立に関しては、明治三年の埋立の仕様書に以下の記載がある(第一九条目)。

〔資料4〕<sup>三五</sup> ○は割注

神奈川青木町鉄道御用地相成候地所之海岸ニ、図面并仕様書之通二千拾七坪(鉄道御用

二相成候地坪江三割を増たるもの）を埋立させ政府之所有とすへし、其代り二埋立たる地坪より五割を増し三千二拾五坪半之地を埋立させ、其内六間通を路鋪とし残地ハ普通の規則ニ従ひ埋主へ拝借せしむべし

「埋立地図面」には、七軒町二丁目の部分に、三千二十五坪 実ハ四千坪ヨ（余の意か）と記載されている（図2）。三〇二五坪とは、資料4に書かれた代地の面積にほぼ合致する。そして、初めは高島町十二丁目であつた場所を七軒町としたという『横浜市史稿』の記録や三六、「埋立地図面」には瀧下町・宮洲町が描かれていないのに対して七軒町は描かれていることから（図2）、七軒町の造成は高島町と同じ鉄道敷設事業の一環であつたとみてよい。

つぎに、「埋立地図面」に描かれた七軒町に着目すると、七軒町の西側の土地、つまり七軒町一丁目の南北幅は二七間、東側は四六間となっており、東西寸法が「横浜実測図」とほぼ同じ大きさであるのに対し、南北寸法は小さく、ちょうど七軒町一丁目の南側街区を除く寸法となっている。また、「旧土地台帳」によつて小字を検討すると、七軒町一丁目の北側街区は「七軒町代地」南側は「七軒町」となっている。地番も七軒町一丁目北側のみが四〇〇番台である。

以上は、鉄道敷設の代地が三〇二五坪余り、実際には四千坪超の広さとして与えられ、それが七軒町一丁目の北側と二丁目に該当すること、ただし七軒町の北側は高島町の一角として（十一丁目）当初は二丁目と分離されていたことを示す。そして、鉄道敷設と同時に造成された土地は、七軒町二丁目と七軒町一丁目の北側のみであり、一丁目南側の街区は一年ほど後に造成されたと考えられる。当所の計画では高島町十一丁目として一体の計画であつたことが、七軒町一丁目の南側街区を除いた場合に現れる、湾に対して海岸通りを持つ曲線状の外形という共通点から裏付けられるのである。

したがって、明治七年六月に地券が公布された埋立地（表2④）は、七軒町一丁目の南側であると考えられ、地券公布と埋立地の対応は、①高島町②七軒町③宮洲町・瀧下町となる（表2、図5）。

つぎに、青木町名主文書として残された明治四年作成の新田検地帳から考察を加えたい三七。この帳簿にのる一四筆の土地はすべて「七軒町代地」で、多くは北側が「川」に面した土地である。「川」は入り堀状になった海を表現していると思われる。代地を得た人物は表3の通りである。寸法と隣接関係をもとに各筆を復元し、「横浜実測図」の地割と比較すると、帳簿

の寸法を、面積が一・三二倍（四〇〇〇／三〇二三）になるように拡大した形態と一致する。いずれも七軒町の北側の土地に比定される（図6）。

代地を得た人物について概観すると、長谷川清九郎は青木町の問屋、柳下（鴨居屋）藤兵衛は元町の住人である（第一章表6参照）。嘉永三年、鴨居屋藤兵衛は大坂屋銀次郎とともに麦を船で輸送した記録が残っており三八、仲買の人名にも藤兵衛・銀次郎がみられることから仲買とみられる。犬山銀次郎は台町の住人で三九、金五郎の隣の清八の築出新地を嘉永元年に獲得している四〇。彼の屋号は不明だが、大坂屋で仲買の可能性もあるだろう。高木利兵衛は、元町から七軒町の住人として、「金川日記」に登場する近江屋利兵衛とみられ、仲買と推測される四一。中村（紀伊国屋）三郎兵衛、杉崎（和泉屋）金五郎は廻船問屋であろう。玉置与八は陸運会社を開業する人物で四二、三文字屋与八と同一人物の可能性がある。

表2 埋立地の面積比較表  
『神奈川県史料』の免税に関する記述

面積	町名	資料	地券授与年	対応
2522.196 坪	七軒町	1	明治六年五月	②
20994.913 坪	高島町	1	明治六年中	①
9992.59 坪	第三大区	2	明治六年四月	③
1612.568 坪	第三大区	2	明治七年六月	④

「横浜実測図」上での土地

面積(概算)	場所	対応
2418 坪	七軒町二丁目	②
1334 坪	七軒町一丁目 南側	④
1570 坪	七軒町一丁目(代地)北側	①
22582 坪	高島町(十ヶ町)	
5432 坪	宮洲町	③
5095 坪	瀧下町	③

〔典拠〕『神奈川県史料』第1巻、制度部、「租法」。  
上段「資料」列は、1が『神奈川県史料』の明治9年の記録(50～52頁)、2が同書の明治10年の記録(60～62頁)にあられる土地であることを示す。右列の「対応」は、上段の『神奈川県史料』と下段の「横浜実測図」の対応を表す。

表3 明治4年の新田検地帳に記録された埋立地

番号	名前	隣接	渡世、屋号の推定
1	長谷川清九郎	東:川、南:道	問屋(宿駅)
2	長谷川清三郎	東・北:川	
3	長谷川清三郎	南:道、北:川	
4	柳下藤兵衛	南:道、北:川	仲買(鴨居屋)カ
5	中村三郎兵衛	南:道、北:川	廻船問屋(紀伊国屋)
6	杉崎金五郎	南:道、北:川	廻船問屋(和泉屋)
7	犬山銀次郎	南:道、北:川	仲買(大坂屋)カ
8	玉置与八	南:道、北:川	三文字屋カ
9	鈴木藤右衛門	南:道、北:川	
10	鈴木藤右衛門	北:川	
11	鈴木藤右衛門	北:川	
12	吉川伊兵衛	南:道	
13	本覚寺	南:道	
14	高木利兵衛	南:道	仲買(近江屋)カ

〔典拠〕明治四年「新田検地帳」（青木町名主文書、横浜開港資料館所蔵）。

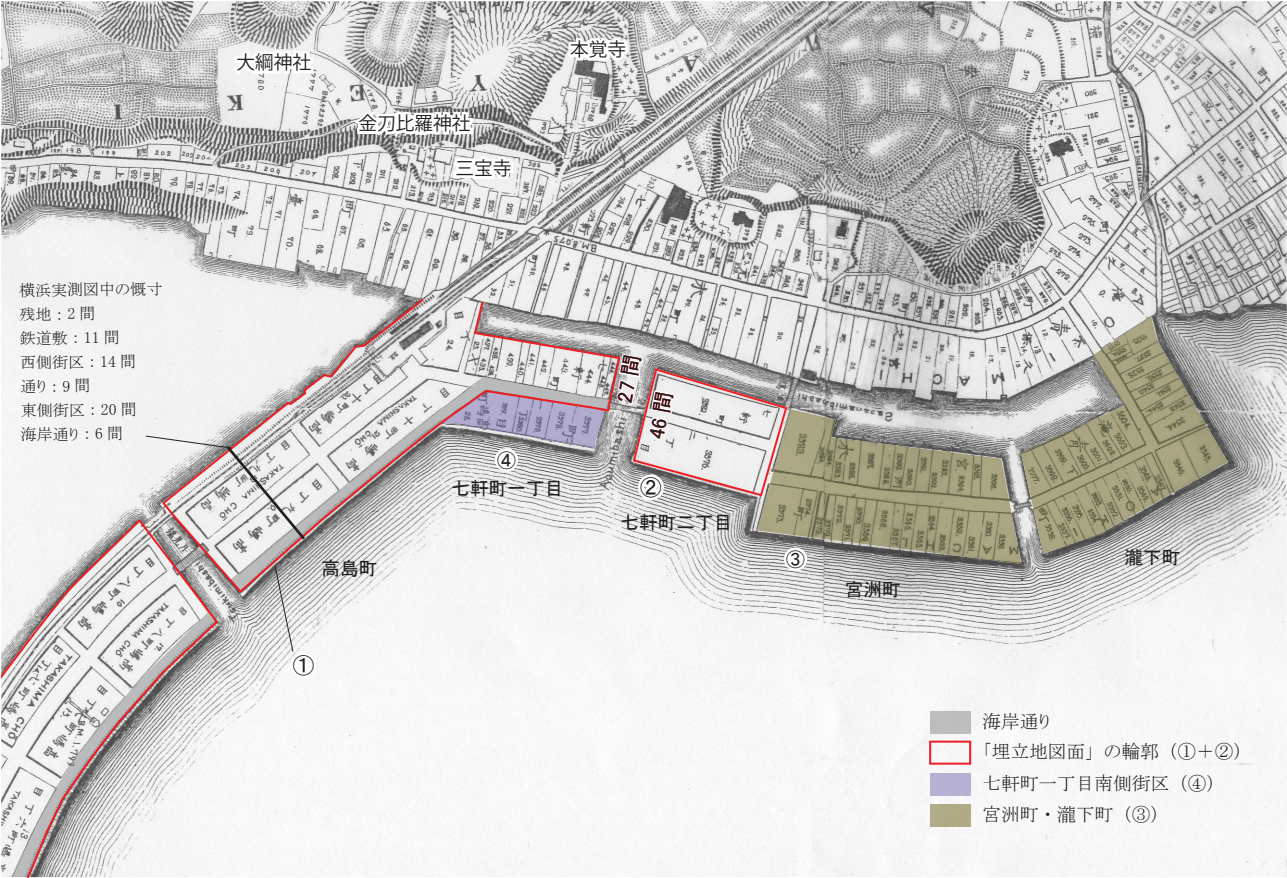


図5 高島町・七軒町1丁目・2丁目街区の形成過程による分類  
「横浜実測図」をもとに作成。番号は、表2に対応。



図6 明治四年の新田検地帳の復元図（オレンジの線、番号は表3に対応）  
横浜実測図の地割線、第一章にて復元した海岸築出新地を合わせて示した。

これらから、鉄道敷が神奈川湊の中枢を切り裂くものであったことは疑いえない。小さな水路を介しているとはいえず、埋立地の西側の台町を外海から切り離れた影響の大きさも想像に難くない(第一章の図11も参照)。<sup>四六</sup>『横浜開港五十年史』によれば、鉄道開通にあたっての用地買収に対し、地主からは苦情が百出し、戸長鈴木利貞が仲裁に入ったという<sup>四七</sup>。高輪海岸と同じく、突如として現れた巨大な埋立地は神奈川へ、とくに諸国廻船取引の中枢となっていた廻船問屋・仲買へ相当の打撃を与えたことが推測される。

### 3 埋立地の住人と機能

本項では、青木町地先埋立地の住人と展開した渡世を瞥見し、埋立地がもたらした影響についてみていきたい。

#### (1) 市場

鈴木利貞は瀧下町における自らの所有地を青物・薩摩芋市場にしていた<sup>四八</sup>。安政二年の段階では、神奈川宿で市は開かれていなかったことは第一章でみたとおりである。埋立地の完成をもって、あらたな流通拠点が形成されたと評価できるだろう。なお、大正七年の段階では三五四番地で青物市場が開催されていた(図7)<sup>四五</sup>。

#### (2) 廻船取引

つぎに、廻船との取引についてみるが、すでに横浜市立歴史博物館の展示にて、尾州廻船と取引をしていた者の分布が明らかにされているので、まずはその成果を簡単におさえない(図7、表4)<sup>四六</sup>。表4の地番・取扱品については、明治三十三年の商人録の『百家名鑑』、大正四年の商人録『横浜商工案内』、大正五年の商人録『横浜近代史辞典』を参照した<sup>四七</sup>。宮洲町・瀧下町・七軒町に廻船業がある程度集中していたことが理解されよう。たとえば内田佐七家文書から読みとれる取引相手の中で最も数が多い⑬紀伊国屋三郎兵衛は七軒町の代地所有者である。船入堀の周辺が新たな廻船業の中心としての性格を持ちつつあったことが推測される。

埋立地の具体的な空間を示す資料は少ないが、明治中期ごろとみられる写真が残る(図8)。埋立地と東海道海側の宅地との間の入り堀に船が写っており、そこを取り囲むように土蔵が

建ち並んでいたことがわかる。新たな物流の拠点となっていたことが読み取れる。鉄道敷の写り方から推測するに、三宝寺から七軒町一丁目・二丁目を撮影したものであろう。

次に、『横浜近代史辞典』に載る埋立地の人物から、岩井惣吉(三五五番地)と水橋太平(三五六番地)に触れたい<sup>四八</sup>。岩井惣吉は、商用にて横浜市に來た際に帆柱が林立するのを見て出店を思い立ち、海陸の便を考慮して明治三年、青木町三五五番地(瀧下町)に進出した。明治三年の時点で横浜港に携わろうとした場合には、神奈川に出店することも選択され得たことがわかる。

もう一人着目すべきは水橋太平である。水橋太平は宮洲町・七軒町の衛生組合の会長となっており、同人と親類関係と思われる人物が『横浜商工案内』に名の載る水橋濱男である。同資料によれば水橋濱生は米穀商、『百家名鑑』によれば水橋太平の営業内容は米穀問屋、食塩、肥料、委託販売である。『百家名鑑』には住所が記載されていないが、『横浜商工案内』によればそのころの水橋濱男の住所は三五六番地である。この地番は水橋太平が会長となつた衛生組合の所在地であり、水橋太平の営業地・居所と考えられる。

つぎに、水橋太平は幕末において内海船と取引をしていたことが明らかにされている水橋太次郎とも同族の可能性がある<sup>四九</sup>。そして仲買には「太次郎」の名が確認される(第一章表4)。また、水橋太次郎は、『金川日記』によれば台町の住人である<sup>五〇</sup>。以上の水橋姓の者に関する情報をつなぎ合わせると、水橋太次郎が台町から宮洲町に店を移したということになるのではないだろうか。水橋氏がいつ拠点を移したかは定かではないが、先述の内田佐七家との取引商人が、宮洲町・瀧下町あたりに集中する傾向とは無関係ではないだろう。高島町と鉄道敷の形成による海岸の破壊は、一部の旧廻船問屋・仲買の移転に帰結し、新しい拠点の成立へとつながったのではないだろうか。

また、本論では高島町と青木町地先の三町がつくりだした新たな海岸の影響にも注目したい。明治二年以降、廻船問屋への自由な参入が可能となり<sup>五一</sup>、廻船との取引が多様な人びとによって担われる状況ができていた。そうしたなかで形成された沿海の巨大な新地は、旧来の廻船問屋・仲買と、新規開業者の双方による廻船渡世の中枢の成立の大きな契機になったと考えられる。

表 4 尾州廻船の取引先

商人名	宛名	地番対応	備考
①麻屋徳次	青木町		不明
②麻屋紋兵衛	青木町		不明
③飯田五右衛門	青木町		不明
④いせや嘉吉	青木町		不明
⑤伊勢屋甚三郎	青木町		不明
⑥伊藤酒店	青木町	67	⑪紀伊国屋金次郎、紀伊国屋伊東与右衛門と同一
⑦小川屋豊吉	青木町		不明
⑧加藤商店	青木町	3577	『百家名鑑』に字青木3577番地加藤商店、米雑穀、食塩、肥料、砂糖委託販売並廻船問屋とある。
⑨茅木や佐兵衛	青木町	33	元町の名請人に佐兵衛がおり(第1章表6、海面請地36・37・築出新地26・27)、『百家名鑑』によれば青木町33番地で呉服太物商である。開港場への出店を行った商人でもあり、宮州町・瀧下町の埋め立て入用として出資を行っている。
⑩新満屋万吉	青木町		新満屋は廻船問屋の屋号であり、新満屋甚兵衛と関係がある可能性がある。
⑪紀伊国屋金次郎	青木町	67	⑬廻船問屋紀伊国屋三郎兵衛は屋号・名前ともに一致するので同一人物若しくは同じ系列の人物であると考えられる。
⑫紀伊国屋五右衛門	青木町宮之河 岸埋地		⑫紀伊国屋五右衛門は、「金川日記」によれば紀伊国屋五右衛門は「青木町」の人物である(安政4年1月2日)。
⑬紀伊国屋三郎兵衛	青木町		『横浜近代史辞彙』によれば、伊東与右衛門(屋号は紀伊国屋)の幼名は金次郎であったという。同人の店の「伊東酒店」と紀伊国屋金次郎と同じ店であるということであろう。
⑭きの八	青木町		もう一人紀伊国屋を名乗る者に明治二年以降名請人となる久保町紀伊国屋佐右衛門がいるが(海面請地10・11と築出新地5)、詳しいことは不明である。
⑮陸井支店	青木町	3578	『横浜商工案内』に3578番地の「石炭、コークス小売り(薪炭参照)合資会社陸井商店」、同所の「米穀、塩、肥料販売合資会社陸井商店」が確認される。『百家名鑑』には、「陸井合資会社米雑穀、食塩、肥料、糠委託販売並廻船大阪摂津製油株式会社製種粕特約一手販売」とあり(3578番地)、米穀・肥料、塩の販売の他に大阪と廻船を通じて種粕を独占的に仕入れていたようである。『横浜近代史辞典』には、陸井幸平は愛知県浅井太郎右衛門の二男として明治14年に生まれ、明治39年に陸井商店の代表社員となったこと、陸井商店は、明治30年4月に開かれ、物品販売・仲買・運送及び代弁業ことが記される。社員は陸井幸平・陸井かつ・陸井麗次郎・陸井市太郎・盛田久左衛門であった。
⑯相模屋喜兵衛	青木町		不明
⑰諏訪屋忠次郎	青木町		不明
⑱諏訪屋密蔵	青木町 横浜		曾根勇二の復元によれば明治20年までは高島町、それ以後は宮洲町に移ったようである。
⑲帳面屋(貞)	青木町		不明
⑳津屋利兵衛	青木町	3564か	『百家名鑑』には「津屋増田利八、米穀、食塩問屋、米雑穀委託販売」(3564番地)があり、同一人物の可能性もある。津屋は廻船問屋の屋号(津屋太兵衛)に認められる。
㉑ときわや源次郎	青木町		不明
㉒当蔵	青木町		不明
㉓富士屋豊吉	青木町		不明
㉔前田佐吉(尾張屋)	青木町		不明
㉕榊村専次郎	青木町	25 3585	宮之町の大旅籠榊村専次郎と同一人物であると思われる。なお、「旧土地台帳」によれば榊村専次郎は、江戸時代以来の屋敷地である25番地の対岸にある3585番地を所有していた。
㉖松喜	青木町		不明
㉗みのや佐右衛門	青木町		不明
㉘八百屋	青木町		不明
㉙山田屋七蔵		3569か	『百家名鑑』に「山田屋坂戸七蔵、米穀商」(3569番地)とあり、尾州廻船との取引品も白米であることから同一店である可能性が高い。
㉚柳下八郎兵衛	青木町		『百家名鑑』にのる宮之町の米穀商の鴨井屋柳下八郎兵衛と考えられる。その場合、仲買の可能性もある。
㉛井筒屋利左衛門	台町		斎藤善之によると井筒屋利左衛門は台町の人物である。
㉜長谷川薬店	西之町	294	『百家名鑑』によれば「相模屋長谷川寛孝、薬種商」(294番地)とある。同一人物であろう。
㉝永嶋屋栄蔵	宮前町		開港場の商人。
㉞吉田平三郎	宮前町		開港場の商人。
㉟伊豆屋(林助)	瀧下町		斎藤善之によれば、瀧下町に店を持っているがその人物像は不明である。「金川日記」(安政4年1月2日)によれば瀧之町に伊豆屋という人物がいたようだが、関係は不明である。
㊱田嶋屋宇之吉(ろ屋)	瀧下町		不明
㊲田嶋密蔵(諏訪屋)	高島町10丁目		㉛と同一人物か。
㊳松木屋平之助	相生町 宮洲町	3567	相生町(開港場)の商人である。曾根勇二による復元によれば松木屋吉田平之助が明治15年まで相生町、以後は宮州町に店を持っているとされており、『百家名鑑』によれば「松木屋吉田平之助、米雑穀、食塩、肥料類、石炭、木炭、雑貨、石油、外国品引取其他数品委託販売」(3567番地)とある。

〔典拠〕『海からの江戸時代—神奈川湊と海の道—』(注44参照、地番と備考列を加筆)。  
『金川日記』:(小林紀子・横浜古文書を読む会「資料紹介「金川日記」について」『横浜歴史博物館紀要』第14号、2010年3月)、『百家名鑑』(明治33年、注32)、『横浜商工案内』(大正4年、注47)、『横浜近代史辞典』(大正5年、1986年復刻版、注45)。また、第1章表6も参照。



図 7 尾州廻船と取引をおこなった人物の分布

『海からの江戸時代—神奈川湊と海の道—』所収の図に加筆。番号は表4と対応。

### (3) 和船のメンテナンスと貸座敷

年欠の絵図によれば、両町地先海面は「焚舟預場所」としてもつかわれていた(図9)。「焚舟預場所」は和船のメンテナンスをおこなう場であつたと考えられる。また、船宿渡世の者が船の虫を払うための「たて草」売買を独占していたことを示す資料が残る<sup>五三</sup>。神奈川湊に成立していた生業が継続していたといえる。また、斎藤善之によれば紀伊国屋三郎兵衛や五右衛門が茅木、焚草を尾州廻船の内田佐七家へ売却していた。とくに紀伊国屋五右衛門は、その住所を「青木町宮ノ川岸埋地」としており、宮洲町や瀧下町に店を構えていたと考えられる。

また、宮洲町・瀧下町の海岸沿いには、旅籠屋が統廃合のちに廻船目当ての安値の遊女屋を建てたという<sup>五四</sup>。「旧土地台帳」をみると、三三八五番地の所有者が飯売持の大旅籠屋とされた榑村(榑村屋)専次郎であり、傍証となつているといえよう(図7・<sup>五五</sup>)。宿内の者が埋立へ出資し土地を購入していたと推測されるので、榑村屋も新地造成の金主の立場にあつた可能性がある。他の資料による確認は困難であるが、神奈川県の褒章記録には、瀧下町一六番地の徳井米太郎、同町の飯田弥七の二名が貸座敷渡世の者として確認される<sup>五五</sup>。

高島町へ進出した神奈川宿貸座敷渡世と旅籠屋渡世の者、横浜遊廓の移転による高島廓の成立に並行して、青木町地先の埋立地でも貸座敷営業がなされたのであつた。神奈川宿の旅籠屋が飯売り女を抱え、船宿を介して廻船乗りの人びとを顧客としていたことは既往研究でも指摘されている<sup>五五</sup>。伝統的な海岸の生業が、場所を移しながら確かに存続している様子が確認されたといえるだろう。

## 4 埋立地の平面形態と海岸

七軒町・宮洲町・瀧下町の三町の街区計画は、宅地裏が直接海に面しているという点で、海岸通りという公道が海岸沿いに設けられた高島町の街区計画とは異なるものである。三町が青木町の海岸線から離れて造成され、「船入堀」として海面請地が残っている点からも、宅地と海岸の接触を残すように計画されたと考えることができる。

少なくとも埋立地の完成する明治四、五年の段階では、青木町の商人は内海船と取引を続けていた。「焚舟預場所」や廻船目当ての遊女屋について、その内容は詳らかにはできなかったが、宮洲町・瀧下町の海岸が江戸時代以来続く神奈川の生業が営まれた場であつたことは

確かである。そして、埋立によつて海岸線は一五〇メートルほど前進した。海図を見る限り水深が大きく変わったわけではない。ただ、着岸可能な時間が長くなり、干潮時に砂州化する部分を解消することはできたと考えられる。

つまり、七軒町・宮洲町・瀧下町の造成は、伝統的な水辺利用が展開し、青木町の海岸を再生産する計画であつたといえよう。前節にて、高島町の海岸通りや河岸横町が海と宅地を結び付ける機能を果たした可能性を指摘したが、青木町地先の三町においては、街区計画の段階で海岸を重視していたと想像されるのである。

その一方で、竣工後十年ほどの間に神奈川外から移転してきた人びとが店を構えたことも重要な事実である。青木町の都市空間は山が寸前まで迫る狭隘なものであり、そこに造成された広大な新地は、新たな商業拠点を構える格好の場所となつたことが推測される。廻船との取引を始める者や、統廃合を繰り返した旅籠屋による遊女屋開業、「焚舟預場所」のように、渡世替えの者も含めた新たな社会が形成されたことであろう。また、高島町の造成によって開港場と連結され、神奈川・開港場に入津する船が輻湊する湾に面した青木町においては、外部からの参入も起こりやすかつたと考えられる。

## 5 神奈川湊の行く末―埋立の進行と工業地帯化―

最後に埋立造成後の展開を簡単にみておきたい。明治以降の神奈川・横浜の埋立をおおまかに整理すれば、(1)高島町・七軒町・宮洲町・瀧下町四町の埋立(明治四年ころ)、(2)高島町西側の入江の埋立(明治八年〜十四年)、(3)馴導堤の築造と開港場沿岸部の造成(明治二十二年〜二十九年)、(4)神奈川地先海面の埋立(明治三十七年〜四十四年)、(5)港内と神奈川沖のさらなる埋立(大正三年〜昭和四年)という過程をたどつた(図10)<sup>五七</sup>。

明治後期から大正期にかけて埋立地が増加し、工場が設立することになる。神奈川県は商業港としての地位を確立するために、明治四十四年から工場・倉庫用地の免税措置を行つて<sup>五八</sup>。そして馴導堤の北側において埋立が拡大したことは、横浜港を隔する同堤防が基準線となつて神奈川の沖合を横浜港の附属地とする計画のきつかけになつたことを示している(図11)<sup>五九</sup>。本章でみた(1)の影響としての神奈川・横浜の物理的・社会的な連結は、横浜開港場の拡張のもとに神奈川の地先海面が工場用地・倉庫用地化していく過程の前提となつたといえる。

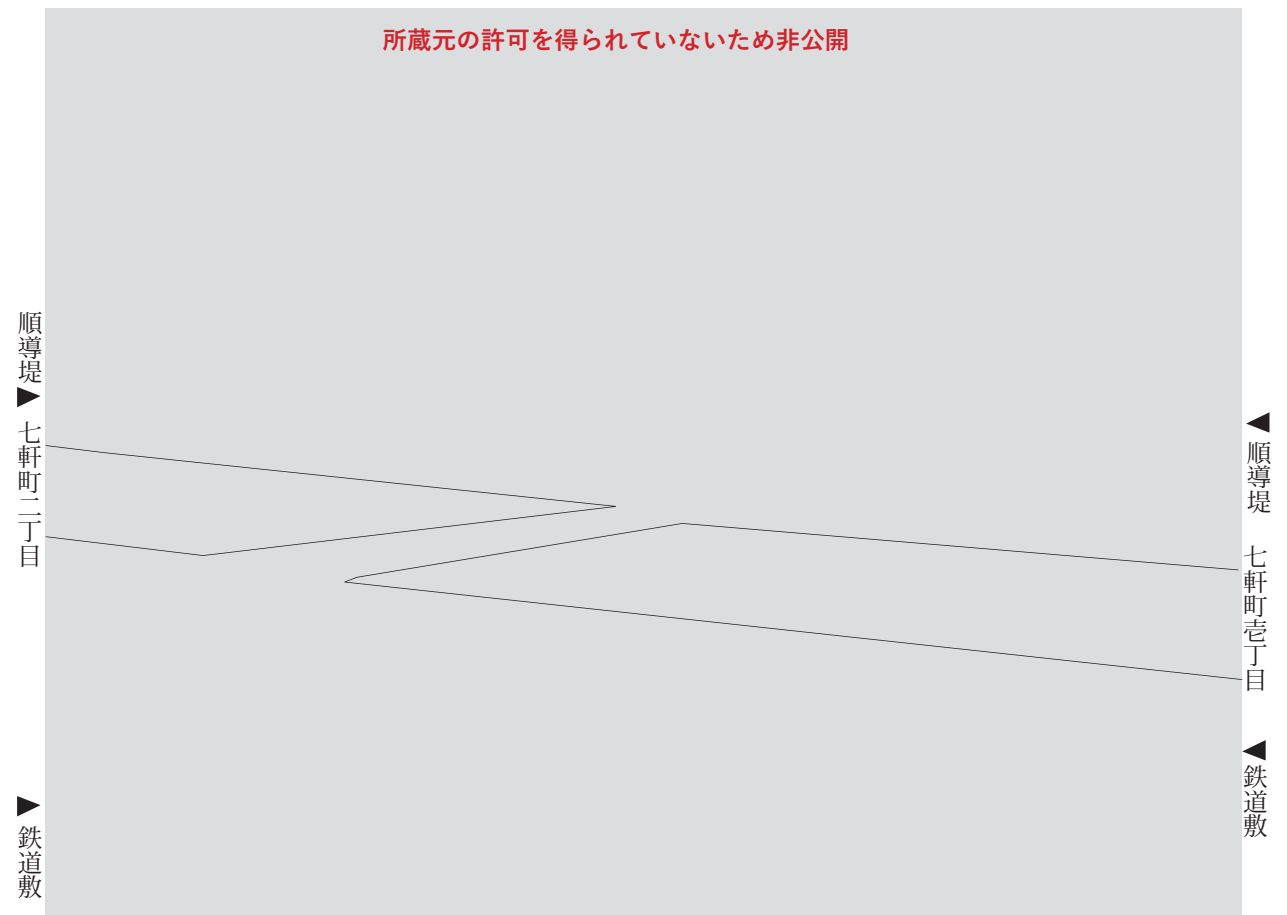


図8 明治後期の神奈川  
横浜開港資料館所蔵の写真に加筆(請求記号 FA50-27-24)。黒枠が七軒町(埋立地)の輪郭。船入堀の海岸に入口を設けた土蔵や柵の門扉、  
栈橋らしきものも確認される。

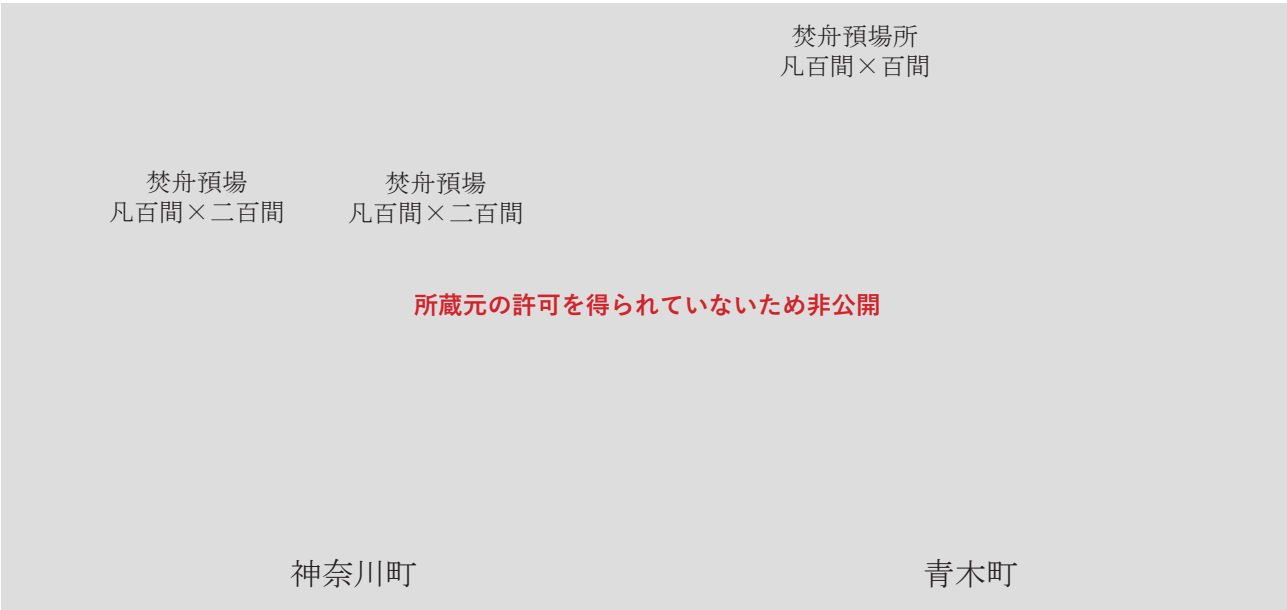


図9 神奈川町・青木町の「焚き舟預場所」  
「宿内町図」(神奈川宿本陣石井家文書、請求記号 2199436351、神奈川県立公文書館所蔵)に加筆。

ただし、神奈川湊の海岸は、明治初頭の埋立を経て、明治後期ごろまでその機能の重心を移動させつつも存続した。図8に示した神奈川の古写真は沖合に馴導堤がみられることから第一次築港計画実施以降の様子であることが明らかである。また、第二章にて言及した通り、明治二十九年には馴導堤に燈明台を設置することが神奈川宿側から請願され、実際に船が行き来していたことを伝える。高島町四丁目から東へ延びる馴導堤によって、旧来の神奈川の海は直接的には破壊されず、埋立が進むなかでも残存し続けたのである(図12)。既存の海岸が消失するのは昭和初期の震災復興期のことであった。現在では、(4)の時期に工場用地として造成された埋立地に水路が残るのみである。

## 五 結語

宮洲町・瀧下町は、青木町名主鈴木氏のもと、埋立入用出資に青木町の住人が関わっていた点に加え、神奈川の伝統的な水辺利用が展開されるなど、江戸時代以来の青木町の社会が色濃く投影されていた。また、敷地の地尻が直接海に接しており、街区計画において海岸が重要視されていたことを示唆する。

そして、青木町名主と住人による埋立地の造成は、鉄道と高島町の形成による既存の海岸の破壊に対する、補償としての七軒町代地の獲得にはとどまらない行為として注目される。東京(江戸)・横浜間の鉄道事業は、最幕末から明治初頭にかけて、利権を求める内外諸主体によって多数の参入が試みられたという点で、吉田の提示した「現代都市インフラ」の性格が大変強いものであった。そして、大局的にみれば神奈川の沖合は横浜港の工場用地として併呑されていく。

ただ、明治初頭の神奈川についてみれば「現代都市インフラ」が「伝統都市」を一方向的に破壊しつくしたわけではない。高島町の形成への対応としての宮洲町・瀧下町の造成、そして、神奈川の生業が高島町や横浜開港場まで



図10 埋立地の展開

大正11年測図地形図(国土地理院発行)に加筆。(1)～(5)は本文と対応。以下、地名と造成年代を列記(典拠は、『横浜市史稿』政治編3、『神奈川区誌 区制五十周年記念』、横浜市企画調整局『港町・横浜の都市形成史』(注57参照))。

(2) ①裏高島町(明治8年) ②仲町・材木町(明治9年) ③南・北幸町(明治14年、陸揚・運送のため、芝生村村民による埋め立て。ただし、明治末まで造成が続いたとみられる)。 (3) ④第一次築港計画(明治22年～29年、鉄製棧橋・帷子川の水の馴導堤建設) ⑤入船町埋め立て。横浜船渠会社敷地(明治22年)。 (4) ⑥宝町・棉花町(明治37年) ⑦大野町・林町(明治38年) ⑧山内町一丁目(明治39年～。明治44年までに4丁目まで完成)。・星野町⑨新浦島町・千若町(明治36～40年) ⑩鶴屋町(明治42年)。 (5) ⑪第二次築港計画完了(大正3年、新港埠頭) ⑫浅野造船所・製鉄所(大正6年、入渠建設) ⑬出田町(大正12～昭和4年)。

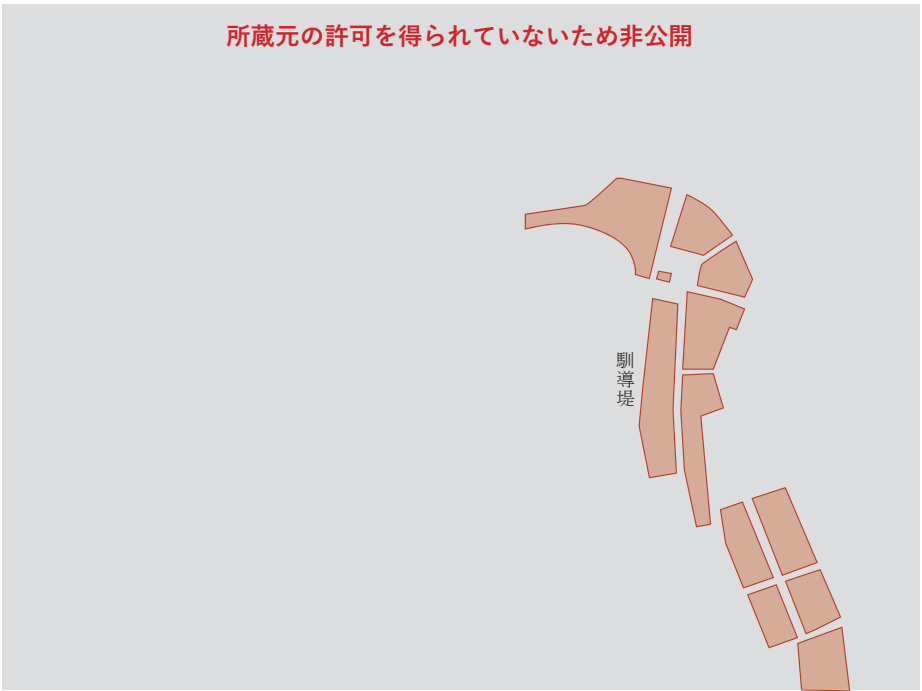


図 11 明治後期の埋立予定地  
明治 38 年「横浜明細新図」（日文研デジタルアーカイブにて公開）に加筆。赤の塗りつぶしで「埋立計画地」を示した。

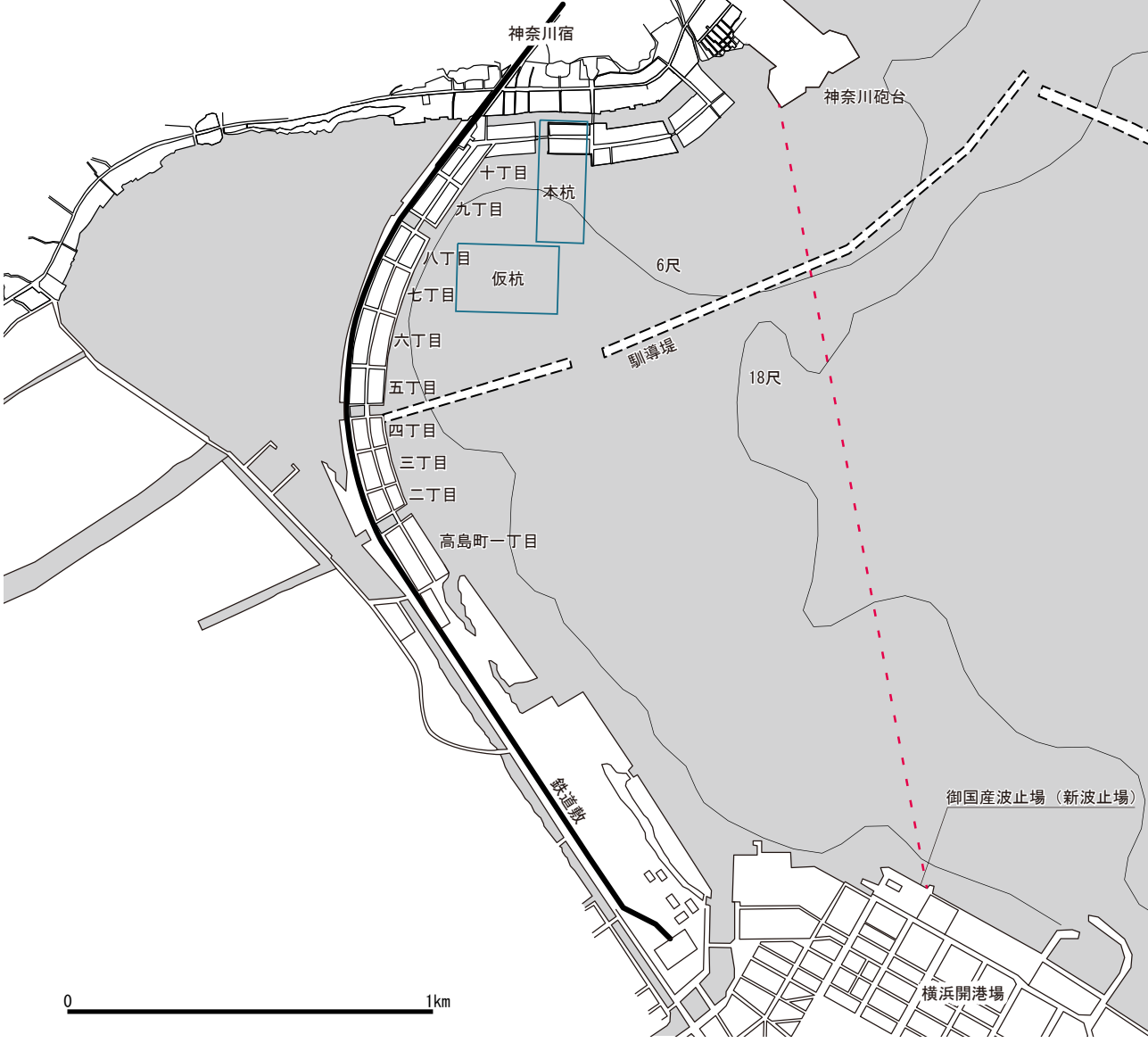


図 12 築港事業と神奈川の海（図 4、明治 38 年「横浜明細新図」をもとに作図）。

も延伸した事実は、廻船の停泊域を囲んで、中心となる海岸を移動・拡大していく過程として読解できるのではないだろうか。おそらく神奈川宿における廻船業や旅館屋の営業主が家持層であつたことに、投機的な売買に手を染めた土地所持者層がみられた高輪海岸との大きな差があつただろうと考えられるわけであるが、そこには、近世を通して成熟を遂げた空間類型としての海岸を再生産することで変貌を遂げようとする、「伝統都市」、あるいはその住人たちのしたたかな対応が看守されるのである。

一 『横浜市史』第三卷上、一九六一年（第一編四章六節）。

二 松永秀夫『益田孝 天人録 横浜で実学を修め三井物産の誕生へ』新人物往来社、二〇〇五年。

三 明治三年「諸向掛合」三（東京都公文書館所蔵、請求記号605-B3-17）。

四 岡田俊平「明治初期における民間企業の生成について」『成城大学経済研究』第一五号、一九六二年六月。

五 吉田伸之「高輪海岸 現代都市インフラの起点」伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、二〇一〇年。

六 肥塚竜『横浜開港五十年史』下巻（横浜商業会議所、一九〇九年、附録「横浜の功労者」）、『横浜市史稿』政治編三（一九三二年）。なお、神奈川区誌編さん刊行実行委員会編『神奈川区誌 区制五十周年記念』（一九七七年）にも言及があるが、五十年史の「明治初年」を「明治元年」と書き換えてしまっている。現段階の理解では、明治二・四年ころの埋立とみられ、問題のある解釈・修正のように思われる。

七 神奈川県立図書館編『神奈川県史料』第一巻、一九六五年（租税）、『神奈川県史料』第二巻、一九六九年（拓地）。

八 前掲書注一（第一編四章七節「埋立事業と外資導入問題」）。

九 肥塚竜『横浜開港五十年史』下巻（横浜商業会議所、一九〇九年、附録「横浜の功労者」）。

一〇 高島鉄道用地埋立関係書（館蔵諸文書、請求記号六六七・②、横浜開港資料館所蔵）。

一一 同右（六六七・⑦）。

一二 地図資料編纂会編『明治前期内務省地理局作成地図集成』第一巻、柏書房、一九九九年。

一三 明治四年四月「口上之覚」（館蔵諸文書のうちの高島鉄道用地埋立関係書、請求記号六六七・③、横浜開港資料館所蔵）。

一四 『横浜市史稿』風俗編、一九三二年（第八章第一節「横浜遊廓」八）。

一五 『横浜市史稿』政治編三、一九三三年（第十一章「土木」三「高島町の埋立」内の高島家所蔵日記録の内の願書）。

一六 前掲書注一五 第十一章第三節「高島町の埋立」の掲載資料「拝借金無利息年賦上納方願」。

一七 前掲書注一四 資料2は第八章第一節「横浜遊廓」七の注より（四二〇頁、資料3は同節八の注一より（四二六頁）それぞれ抜粋、原資料の所在は不明で、出願者の山口糸蔵と山口菊蔵は誤読ではないかとも思われる）。

一八 前掲書注一四 第八章第一節「横浜遊廓」七。

一九 前掲書注九（第十八章）。

二〇 前掲書注一四 第八章第一節「横浜遊廓」八。

二一 『神奈川県史料』第一巻（一九六五年、明治一〇七年「規則」（六二七頁））。

二二 前掲書注一五（第三章）。

二三 『神奈川県史料』第二巻、一九六五年。明治一〇七年「工業」（一四五頁）。

二四 西川武臣によれば、明治二年には海岸に馬車道が造られていた『横浜開港と交通の近代化』日本経済評論社、二〇〇四年。ただしその位置は不明である。

二五 『神奈川県史料』第三巻、一九六六年。「刑賞」のうち明治八〇十年「救助之部 溺水」。

二六 吉田伸之「幕末期、江戸の終焉と民衆世界」歴史科学協議会編『歴史評論』第七五八号、二〇一三年六月。

二七 『神奈川県史料』第五巻（一九六九年、明治八〇十年「駅通」（五四四頁）。また、「太政類典（国立公文書館所蔵、第二編、運送二十一、海運二）には、神奈川県の上申を受けた大蔵省による、ほぼ何いの通りの案文でひとまず実施することを許可する指令が収録される。そこで停泊域が図示されているのだが、中央の波止場から台場まで線が引かれている。これはおそらく大蔵省側の誤解で、「新波止場」とは国内荷物の出入りの場として新設された御国産波止場（海岸通り四丁目）を示すと考えられる。

二八 「岩亀楼記録」一（市史稿写本、横浜開港資料館所蔵）所収の明治九年「仮物揚場願」。

二九 同右（明治九年「以書付奉願上候」、明治十年「以書付奉願上候」）。

三〇 太田家旧蔵関東大震災被災文書（横浜開港資料館所蔵、神奈川宿青木町相模屋文書（横浜市歴史博物館所蔵））。

三一 神奈川町・青木町は両町から問屋を一人ずつ差し出して交代で勤めていた『神奈川区誌 区制五十周年記念』（注六参照）。

三二 開港場への出店は第三章にてみた（表2丁目三番および図8）。取扱品は『百家名鑑』（小幡宗海編『神奈川文庫』第五集、神奈川文庫事務所発行、明治三三年）を参照した。

三三 武蔵国橘樹郡青木町名主文書（開港資料館所蔵）。

三四 前掲書注二一。「制度」の部、「粗法」（五〇〜五二頁および、六〇〜六二頁）。

三五 明治三年「鉄道御造営二付横浜野毛海岸石崎より神奈川青木町海岸迄土堤築地之條目」（明治三年横浜神奈川間鉄道用地埋立資料、館蔵諸文書、請求記号七九・③、開港資料館所蔵）。

三六 『横浜市史稿』地理編、一九三二年。第二章第二節。

三七 武蔵国橘樹郡青木町名主文書（購入地方文書、横浜開港資料館所蔵）。

三八 「金川日記」の嘉永三年十一月一日の記事には、「一、鴨居屋藤兵衛、大阪屋銀次郎等積出候小麦船、伊豆沖二而破船致、米千五百俵余も有之与云ひ、関東者豊作二候得共上方凶年故積登候也、困民之乱以起処也」とある（小林紀子・横浜古文書を読む会「資料紹介」「金川日記」について一」（横浜市歴史博物館『横浜市歴史博物館紀要』第三号、二〇〇九年）より引用）。

三九 元禄八年「山検地帳」（青木町名主文書、購入地方文書、横浜開港資料館所蔵。明治五年の貼紙で、台町の銀次郎が犬山銀次郎であることが判明する）。

四〇 弘化元年「海岸築出新地請名寄帳」（青木町名主文書、購入地方文書、横浜開港資料館所蔵）。清八から銀次郎への変更が貼紙で示される（第一章表6、築出新地五〇番）。御用地とはなっていない台町の犬山銀次郎が代地を得ていることは、新しく名請人となった銀次郎が犬山銀次郎であったことを明示している。

四一 近江屋利兵衛は、『横浜市史稿』産業編（二四一頁）に所載の「水橋氏の日記」に、廻船問屋の津屋太兵衛とともに登場する。その内容は、津屋太兵衛と近江屋利兵衛が訪ねてきて、神奈川町の魚問屋・仲買へ五島鰯を五〇両分仕入れたところ、入金ができず三〇両が不渡りとなったことに對し、青木町廻船問屋と仲買から、在方・神奈川町への直売を今後おこなわないことを条件に金子を立て替えることが提案されたというものである。おそらく両人は廻船問屋・仲買の仲間の代表として水橋を訪問したと考えられ、近江屋が仲買の可能性は高いと考える。

四二 神奈川県立図書館編『神奈川県史料』第五卷、一九六九年。「駅通」のうちの「陸運会社」の項（四九〇、四九一頁）。

四三 前掲書注九（鈴木利貞の項目）。

四四 戦前に書かれた佐伯藤之助による卒業論文である「維新前に於ける神奈川ノ経済事情」に収録された資料（市史稿写本、開港資料館所蔵）。

四五 山田忠発行『横浜近代史辞典（改題横浜社会辞書）』湘南堂書店、一九八六年。

四六 横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団『海からの江戸時代—神奈川湊と海の道—』横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団、一九九七年。同書所収の「尾州廻船取引先 神奈川商人名一覽」（斎藤善之作）、および明治における青木町の商人分布図（曾根勇二作）。

四七 『百家名鑑』は注三二を参照。保科文次郎編『横浜商工案内』横浜商工協会発行、大正四年。『横浜近代史辞典』は注四五を参照。

四八 前掲書注四五。

四九 西川武臣「江戸内湾地域の湊の諸相」（西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院、一九九三年）において氏が紹介した盛田家文書のなかに、神奈川宿の水橋太次郎という者がみられる。

五〇 小林紀子・横浜古文書を読む会「資料紹介」「金川日記」について二『横浜市歴史博物館紀要』第一四号、二〇一〇年三月。

五一 明治二年「神奈川湊廻船問屋仲間前印鑑帳」（武蔵国橘樹郡青木町廻船問屋間宮家文書、神奈川県立公文書館所蔵）。

五二 横浜市神奈川図書館編『武蔵国橘樹郡神奈川宿青木町枝郷三ツ沢山田家文書…東海道シンポジウム神奈川宿大会記念刊行』横浜市神奈川図書館、二〇〇四年。

五三 前掲書注一四。第八章第二節第一項「神奈川遊廓」二「埋地時代」より。『横浜市史稿』風俗編の記述については、斎藤多喜夫が近年厳しい批判を加えており、文書資料の引用がない記述は、傍証が必要である。本記述については、資料の都合から判断は困難であるが、もと大旅籠屋の枡村専次郎の土地所有が傍証になると考える。

五四 「旧土地台帳」（神奈川県法務局）。

五五 前掲書注二五。明治八年（十）「刑賞」（六〇七頁）。なお、横浜実測図に記入された地番への比定は

できない。

五六 前掲書注三一。

五七 『横浜市史稿』政治編三（一九三三年）、神奈川区誌編さん刊行実行委員会編『神奈川区誌 区制五十年記念』（一九七七年、横浜市企画調整局『港町・横浜の都市形成史』（一九八一年）。

五八 前掲書注三一。

五九 保科文次郎編『横浜商工案内』（横浜商工協会発行、大正四年）によれば、大野町に浦賀船渠株式会社の横浜分工場（造船及修繕）と新井鉄工所（船舶修理、林町は谷鉄工所（造船鉄工）と鈴木鉄工所（造船、鉄工、汽機、汽罐、製造修繕）が確認される。

六〇 昭和十六（二）十八年「公有水面埋立竣工原議」（神奈川県立公文書館所蔵）には、七軒町の海岸（二五七五〜九番地）の埋立に對し、七軒町や高島町九、十丁目を中心とした住人の訴えが収録される。明治中期以降の神奈川の海岸の状況は今後の課題とせざるを得ないが、少なくとも、昭和初期の国道開通による埋立直前まで、海岸の利用が存続していたことが理解される。



## 第八章 江戸内湾における横浜開港場―運送方と最寄船乗―

## 一 問題の所在―江戸・横浜の二都市関係―

本稿は、開港後における江戸内湾の動向を、江戸・横浜舟運の分析から論ずることを目的とする。交易都市横浜の成立を、内湾の広がりのおかげで評価することを試みたい。

序章にて言及した通り、五品江戸回送令をめぐる江戸問屋と生糸売込商・外商の対抗関係を提示した『横浜市史』以降<sup>一</sup>、開港後における江戸・横浜関係は幕末における流通構造と社会の変革を論ずる上で重要な論題であり続けたといつてよい。本章では、「引取商体制」論を提起した石井寛治の論考<sup>二</sup>、生糸の輸送ルートを江戸との関係で論じた高村直助の論考をふまえ<sup>三</sup>、江戸・横浜の関係を対立構造からはずしたうえで、江戸内湾のなかの開港場を論じたい。具体的には、両都市間の物資流通をその担い手である江戸の横浜廻漕業者（運送方）と船乗に注目して分析する。

江戸・横浜間の舟運を論じた先行研究について、高村直助の論考から紹介したい。氏は江戸系問屋の開港期における集荷能力には限界があったこと、五品江戸回送令が物価調整策としては失敗したものの、江戸を経由して生糸を輸送させる点においてはほぼ全面的に機能したことを指摘した。そのうえで、生糸廻漕を担った江戸の「船積問屋」を取り上げ、奥州・上州が幕末の輸出生糸の主流であったことを論拠として、その産地となる北関東との河川舟運を担った奥川船積問屋であったと推定した。系問屋が「奥州船積問屋・舩下宿」に至るまで調査をおこなった記録も根拠となっていると思われる。また、横浜向けの船積問屋らが明治三年に通商司の廻漕会社へと編成されたことも指摘している。横浜開港場に關係する物資流通のルートと担い手を解明した特筆すべき成果である。

つぎに、西川武臣による神奈川宿の文書と東京市の文書を活用した研究が挙げられる<sup>四</sup>。神奈川御師町の住人による両都市間の旅客輸送、蒸気船稲川丸の就航と東京の横浜運送問屋一五名による蒸気船就航申請を検討し、和船から蒸気船へ、最終的には鉄道へと両都市間交通の主幹が変遷したと整理した。横浜に残存した資料から物資流通網の復元は容易でないなか、東京市の資料を活用した成果は研究手法上意義深いものがある。ただし、氏の

論考においては水主頭取九藏と、横浜の運送業者（運送方）が混同されているように見受けられる。

そして、東京・横浜間に就航した蒸気船の稲川丸、シティー・オブ・エド号、弘明丸については松永秀夫による研究に詳しい<sup>五</sup>。

このように、とくに江戸・東京の横浜廻漕の担い手については既往研究で数回言及されており、奥川船積問屋による江戸・横浜舟運という高村の推定は本稿の分析から妥当であることが確認された。一方で、横浜側の運送業者については、第五章にて検討した波戸場の国内荷物運送を担った「運送方」が横浜から江戸への運送を担ったと考えられる。

ただし、五品江戸回送令のもとで、奥川筋↓江戸↓神奈川↓横浜という生糸輸送ルートが確立したという高村直助の指摘は首肯できるものの、その成立の過程については未だ検討の余地が残ると考える。この点について、幕末の資料から考察をくわえたい。

また、高村自身も課題としているとおり、舟運を実際に担った船はどのようなものであったか、という点についても検討する必要がある。この点については、西川武臣による横浜周辺の舟運についての研究が重要である。氏は開港以前における現横浜市の一帯の経済的到達を、生麦村などの東海道の町村、海沿いの村、金沢のような観光地など、神奈川宿を筆頭とした非農業的な町村（米の消費地）が多数存在したことから示した。神奈川湊に関する研究のほか、明治前期の統計資料を用いた多数の船の存在の指摘や、天保飢饉の際に米輸送をおこなった内湾各地の廻船業者の紹介、久良岐郡町屋村の廻船業者のケーススタディなど、横浜市域における舟運の発達とその担い手を事例から示したきわめて重要な業績である<sup>六</sup>。さらに、西川は横浜開港場側の資料を用いて、流動する船乗に言及している<sup>七</sup>。

とはいえ、西川の諸研究においても、開港場周辺に存在したであろう船乗と、横浜開港場との関係は明瞭ではない。また、横浜都市発展記念館・横浜開港資料館共同による展覧会は、内湾の舟運と開港の関係を問うものであったが、問題提起の範囲にとどまっており、開港場の船乗の存在形態の解明は、関心が寄せられつつも未だ課題として残されているといわねばならない。本章は、現段階で得られた事例から、流入や編成についての仮説的考察を加えるものである。

二 両都市間舟運の前提―荷主としての江戸問屋―

江戸と横浜の舟運を考えるうえで重要な前提は、荷物の送り主としての江戸問屋の存在である。江戸の出店商（本店・支店間輸送）、引取商（輸入商人）の荷主、売込商の荷主の三形態が想定される。

文久二年の段階での江戸の出店商は少なくとも六一軒はおり、両都市間の物資流通の要因となった。外国奉行による江戸問屋の優遇は、開港場への出店・荷物輸送の希望者が他に先立って江戸問屋に対して募集されたことによく表れている。そして貿易で有力な商品になると見込まれていた生糸について、長崎奉行が堀留町・伊勢町の人物に集荷を命じていた（第四章資料8）。

現金決済が必要で、輸入品の販路が江戸を核とせざるをえなかったため、引取商については主として江戸の商人が担ったことが推定されている。江戸問屋による引取貿易への関与は、深川黒江町家持の正助による新規販路にその一端をみることができ、慶応元年六月に舶来砂糖の加工と市中・近在への販売のための会所設立が出願された。資料1はこの請願に関する世話掛名主の上申の一部である。

〔資料1〕一〇

（前略）

深川黒江町家持正助儀、舶来玉砂糖与唱候品、黒砂糖ニ製方仕度、仕様書を以御訴訟奉申上候願意其外御尋二付、取調候趣左ニ奉申上候

深川黒江町

家持

正助

此もの儀者、昆布・砂糖渡世ニ而、横浜表売込人を以外国人江昆布売渡、右代りニ玉砂糖与唱候品引請候得共、右品者其低遣用相成兼候ニ付、白下与唱候有来砂糖并甘蔗、石灰調合製方致候得者、黒砂糖ニ取用候由、是迄製方致候者有之候処、調合品等違、此程御吟味ニ相成候ものも有之候ニ付、願之上製法致度趣ニ御座候、右ニ付、仕様書之内申立候廉々取調候処（後略）

舶来砂糖の加工をうたいながらも、砂糖販売を独占する試みとして取り下げられてしま

表1 安政六年下半期の佐藤屋才兵衛の仕入れ記録

月日	作成、宛名	内容	品目、荷主
6.10	才兵衛代専左衛門→町会所	これまでに仕入れた諸品。	郡内海気絹七百疋、川和縞千二百疋、墨八丈絹千疋、白太織絹五百疋、白綾織絹二百疋、紋縮緬五百疋、縞縮緬三百疋、廣巾転多帯地千筋、鉄器物類、傘并笠類、茶一万斤、蠟三千斤、石炭百俵、紙類、小草物、蒼木百貫目、酒五十駄、醤油千五百樽、味噌酢・焼酎五十駄、未着の品もあり。
6.17	才兵衛代専左衛門→外国御奉行所	着船、水揚げにあたり、改め願（六口とも才兵衛への送り荷物）	瀬戸物 江戸霊岸島三木屋武兵衛出 酒 江戸南新川三木屋武兵衛出 仙香、草履、木柄 小網町二丁目柏屋市助出 釘鉄物類 本銀町井坂屋半兵衛出 蠟燭 霊岸島藤田安右衛門 笠、ござ（ござ） 堀江町一丁目清水九兵衛出
7.14	専左衛門→奉行所	水揚げにつき改め願	土瓶 江戸本所相生町三丁目稲本兼助・伊勢屋彦右衛門出
7.28	才兵衛、武左衛門→奉行所	着船、水揚げにつき改め願	葛、帆立 西浦賀掛塚屋権七出
8.2	才兵衛、半右衛門→奉行所	着船、水揚げにつき改め願	大豆 江戸芝新銭さ（座）町藤田惣右衛門出
8.3	井坂屋半兵衛→御改所御役人衆中様	送り状の写し 才兵衛へ外国取引のために送付した旨。	針金、銅延板 江戸本銀町一丁目井坂屋半兵衛出
8.12	佐藤才兵衛→江戸通塩町炭屋八兵衛殿	蘭三番船シキウドより受け取った荷物を改め、送付した旨の連絡。	象牙（輸入品で、江戸塩町炭屋八兵衛行か）
8.17	専左衛門→御奉行所様	着船、水揚げにつき改め願	銅紙、銅十能 江戸高輪町三丁目伊勢屋彦右衛門出
8.23	才兵衛→御奉行所様	着船、水揚げにつき改め願	銅船釘、銅十能 江戸本横町中嶋屋太兵衛出
9.8	神奈川宿三文字屋与八→横浜御改御役人衆中様	佐藤才兵衛へ荷物積入につき、改め願	銅船釘、銅火屋江戸中嶋屋彦兵衛出

〔典拠〕「御触書并願書扣」（「神奈川県立博物館所蔵資料1」（県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵）。

う。砂糖・昆布渡世の黒江町正助は、元治元年に仮組へ加入した乾物問屋の昆布屋正助とみられる。横浜の交易商を介して昆布を輸出し、代わりに玉砂糖を仕入れていたことが明らかである。新興の江戸問屋でも、輸出品・輸入品の交換によって交易をおこなうことができたことが理解される。輸入した砂糖は江戸へ輸送、加工の後、売却されたことであろう。輸入品が横浜から江戸へどのように輸送されたかについて具体的な資料は未見であ

るが、第五章でみた運送方が廻漕を担ったと推測される。

そして江戸問屋による商品輸送は、弁天通り四丁目佐藤屋才兵衛の記録にもみられる。佐藤屋は、江戸に滞在した弟彦次郎と共同出店者の津久井縣若柳村の山口市郎右衛門の努力もあつて三、安政六年六月には交易品の集荷を成功させていた。開港当初に巨大な地所を取得した人びとは、江戸を中心とした人脈を駆使して横浜への出店を果たしていたが、こうした開港前の関係は輸出品の入荷にも寄与したことが理解される。開港当初に佐藤屋へ荷物を廻漕した人物は数例だが明らかとなる(表1) 二三。

掛塚屋によるもののほかは江戸問屋からの仕入れであつたことが明らかである<sup>二四</sup>。五品江戸回送令を待つまでもなく、一定の物資は江戸問屋から横浜へ送られたのであつた。そして、五品江戸回送令後は、とくに生糸の輸送において江戸→神奈川→横浜というルートが確立する。次節では五品江戸回送令後の江戸の横浜廻漕業者を検討したい。

### 三 江戸の横浜廻漕業者

西川武臣の研究によれば、明治初頭に横浜への運送を担った東京の横浜廻漕業者一五人は、「開港以来の実績をもったとされる。本節では、幕末の江戸における横浜廻漕業者に關する資料を検討し、開港後における大量の生糸輸送と流通統制が江戸の内部でどのような状況を誘引したかを検討する。ただ、その前提として、横浜の石炭屋福三郎に向けた運送の送り状をまとめた明治三年の帳簿(「水揚帳」)から<sup>二五</sup>、簡単に物流の骨格をつかんでおきたい。

〔資料2〕 ※○内と①⑦は引用者注。

二月廿五日入

送り状之事

一、干鮑 百箱

正味 (空欄)

① 板屋市兵衛殿分

② 船賃金三両也 此分二月廿五日

石川屋立合

船頭江相渡候

③ 世話料 銀五十匁也

④ 引込ミ 五貫文

ベ 当地払

⑤ 二月廿三日 東京大橋

梶屋勝五郎

⑥ 石川屋又四郎殿揚

⑦ 石炭屋福三郎殿

資料2は、東京の板屋市兵衛から干し鮑が運送された際の送り状の写しである(①)。②「船賃」は東京から横浜までの運賃で、⑥横浜運送方の石川屋又四郎が立ち会って船頭へ支払われた。③「世話料」は横浜運送方の波止場での仲介料で、その内容は波止場改めや水揚げ、陸送の請負手数料とみられる。④「引込ミ」は、「引込車力」と書かれる場合が多く、注文主、この場合は⑦石炭屋福三郎の店や蔵への陸送運賃と考えられる。⑤は東京の横浜廻漕業者である。この事例は東京から横浜への舟運として単純であるが、つぎの例はやや複雑となる。

〔資料3〕 ※○内と①⑦⑭は引用者注。

送り状之事

① 八月十七日入 鉄五郎船

② 一、×七印 東国一茶

三拾五櫃

ベ 拾老駄七分五厘

③ 水海道運賃済

元掛り

ベ 金三両三朱分

錢七貫九百七十九文

④ 口錢 拾老匁也

⑤ 運賃 ベ 五百九匁五分

⑥ 積込

金四両壹分式朱分

錢七貫八百四十四文

⑦ 世話料 七匁也

⑧ 引込・車力 (空欄)

ㄨ (空欄)

⑨ 釜金払

⑩ 常州土器屋村

午八月十二日出 飯島伝右衛門

⑪ 水海道

かきや平右衛門殿

⑫ セト

岡田平右衛門殿

⑬ 仲ノ台

問屋五右衛門

⑭ 東京小網町

駿州屋定次郎殿

⑮ 横はま

石炭屋福三郎殿行

資料3は、常盤国土器屋村(現茨城県つくば市)の荷主である⑨飯島伝右衛門から横浜までの茶②の運送の送り状である(図1)。「又七印」は屋号、「東国一」はブランド名とみられる。①は運送船に関する記載で、鉄五郎は船頭と推測される。③は、利根川の河岸水海道(茨城県常総市)の船積み問屋とみられる⑩かきや平右衛門から、江戸川を下り、瀬戸村(千葉県野田市)の⑫岡田平右衛門のもとで陸揚げして陸送し、江戸川の河岸である中野台(千葉県野田市)の⑬問屋五右衛門のもとで再び船積みし、東京小網町の⑭駿州屋定次郎に至るまでの運賃を示すと推測される。ここまでの運賃は「元掛り」として、水海道にてすでに決済されたのだろう。

なお、この例では、土器屋村から陸路で水海道にいたり、利根川を下って瀬戸村で水揚げ、陸路で中野台に運んで江戸川から小網町までを舟運によるルートだが、土器屋村から

布施村、流山村を経由する例もみられる。この場合は霞ヶ浦から利根川を遡上して布施村へ、陸路で流山村へ、その先は舟運で運ぶルートが想定される。

続いて④「口銭」、⑤「運賃」、⑥「積込」は江戸から横浜までの舟運に関する部分で、④は駿州屋定次郎の問屋口銭であろう。⑤「運賃」は東京から横浜までの運賃、⑥「積込」は川舟から海舟への積み替えを意味するとみられる。事例によつては、「運賃」と「積込」はセットになることもある。⑦と⑧は資料2と同様である。⑨は茶の実質的な宛先である茶商の釜屋金兵衛(他の事例によれば北仲通り三丁目)が、運賃を支払ったことを示す。高村直助によれば、石炭屋は倉庫を利用した荷為替や、荷物を担保にした貸金をおこなっており、金を借りた人物に釜屋金兵衛(茶が担保)が認められる<sup>一六</sup>。⑮石炭屋福三郎「行」とは、おそらく石炭屋の敷地内の倉庫を釜屋が借り、茶を納めていたことを示すであろう。なお、この事例には、横浜の運送方が含まれてはいないが、第五章の推測に基づけば、駿州屋定助が水揚をおこなったと思われる。

以上のとおり、東京と横浜の運送業者が、東京や北関東の荷主からの廻漕を仲介していたことが理解されよう。以下では、槌屋勝五郎や駿州屋定次郎ら東京(江戸)の廻漕業者(運送方、運送宿、運送問屋と呼ばれる)について、資料からその発生や集団の拡大の過程を見ていきたい。

## 1 万延から慶応期の生系流通仕法の変更と新規願

(1) 慶応元年閏五月、木屋小左衛門らによる横浜廻漕業の人数限定の願

まず、江戸から横浜への廻漕を担った小舟町木屋小左衛門らによる慶応元年の請願を取り上げたい。廻漕業の人数を限定するよう求めたもので、請願の内容と諮問を受けた系問屋による回答の部分を以下に引用する。

「資料4」二七

小船町一丁目小左衛門外四人

横浜生系荷物運送方人数取極願之儀、取調申上候書付

館市右衛門

当丑閏五月中、根岸肥前守殿御勤役中御下ケ

小舟町一丁目



図1 江戸（東京）、横浜舟運見取り図

陸軍迅速側図を参照して作成（歴史的農業環境閲覧システム [http://habs.dc.affrc.go.jp/] にてインターネット公開された現状地形への補正データを利用）。地形段彩図はUSGS [https://www.usgs.gov/] がインターネット公開しているデータから作成。水揚帳にあらわれる産地を橙の丸で、中継地を水色の丸で示した。なお、石炭の荷主として常州磯原村（現北茨城市）緑川治平の名が確認される（表示範囲外）。



図2 東京の運送方の所在

「安政改正江戸大全図」（国立国会図書館デジタルコレクションにて公開）に加筆。

藤次郎地借

願人 小左衛門

外四人

右之もの共、横浜御開港以来、生糸荷物運送仕来、安穩ニ相暮難有、然ル処、右生糸之儀、外品と違別格ニ御世話被為在、糸問屋共江荷物改方被仰付、右之もの共改済之上、私共請取、横浜表江運送仕候処、去々亥年横浜弁天海岸江多分之糸荷物隠積致し、其後去子八月中は又多分之糸荷物異国船江船積等仕候もの、其外如何之荷物取扱候もの、御手数被為在候儀、兼而承知仕、私共五人之儀者聊蒙御察斗候もの無御座渡世仕、去々亥年十月浮浪人及乱妨糸問屋詰所江立入候砌、跡取御付夜番等世話致遣候へ、後々迄渡世相続仕度存意ニ候処、当時世上穩ニ相成候逆、若餘人を加入為致候而者、先前之苦心取失ひ何共難渋仕、右荷物之儀者一ヶ年出荷高限も有之候儀ニ付、向後加入之もの有之候節者、渡世向衰微仕候間、何卒只今迄之通、五人江糸荷物運送之儀、御差免被下置候様奉願、右為冥加渡世向利潤之内を以、一ヶ年金千両ツ、上納仕度旨、奉願之候

右願訴状御渡、取調被仰渡候間、願人并糸問屋共呼出、相調候趣左ニ申上候

右願人

小舟町一丁目

藤次郎地借

小左衛門

同町二丁目

藤兵衛地借

半右衛門

小網町一丁目

太兵衛地借

宇右衛門

同町二丁目

善次郎地借

定次郎

本船町

留藏地借

伝次郎

右申立候は、糸荷物之儀、諸国荷主共方私共名宛之送状にて荷物積送、来着荷糸問屋え申入、右問屋之内行事并手代之もの私共宅え罷越、正不正貫数等改済之上、糸問屋差図ニ付神奈川宿三文字屋与八、漆原専助と申両人之もの共え隔日積込、夫方陸路横浜売込問屋荷主望之宅え附送候、是迄私共五人之外糸積回渡世之もの無御座候、今般上納金奉願候逆無謂賃銀請取不申、運送之儀は是迄請取来候通、直増等不仕候間（朱書き注記で「本ノマ、」。「旨」ではないという意味か）申之候  
（中略。内容は朱書きによる五人の者の身元調査。）  
右願之趣糸問屋共相尋候処、左之通御座候

糸問屋行事

酒田町二丁目

家持

小市煩二付代

次兵衛

通旅籠町

半兵衛地借

清兵衛煩二付代

善次郎

右者横浜貿易去ル申年私共江取締向被仰付候ニ付、諸国生糸荷主共、飛脚問屋、船廻し者船積宿江着荷仕候ニ付、其もの共方荷主名前・箇数等相認、私共行事方江通達仕、其者共方江行事共手代召連罷越、荷物切解品見分仕、貫目并正不正相改、如元見作致し、内外封印仕、順番付相印（ママ「しるし」（記し）か）候荷札・送状相添候儀ニ有之、右荷物神奈川表次所迄運送之儀者、弁理のため元来飛脚問屋之内、京屋弥兵衛、嶋屋佐左衛門江引合、馬附陸送り相任候處、其後神奈川表迄船積送り方致度旨、前書小左衛門願出候ニ付、身元取調之上、任其意取計、猶四人より同様申出、是迄右五人之者共江船積運送相任セ置候処、当五月初旬、小船町貳町目徳兵衛と申者、前同様船

積之儀申出候ニ付、私共方右五人之者申談、当六月方五人之者同様取締向申談、運送相任せ候處、猶又小網町壹町目金子屋健藏と申もの同様申出、取調中混雜仕候引合中ニ候處、健藏儀苦情申出候、依之五人之外右徳兵衛・健藏差加、都合七人自法等不立、是迄仕来之通私共指図請、万事取計候様被仰付被下度奉願、尤前書申上候陸送荷物、追々船積相始メ候得共、今以馬附送り之儀者、飛脚問屋弥兵衛・佐左衛門継立致し、且風雨之節者、出船無之ニ付、馬附陸送り無之候而者、差支候旨申之候

(後略)

後略部分には世話掛名主の進言が続く、諸問屋再興後の方針に忖ること、冥加金を申し出ており神妙であるが地借の身であること、横浜にもかかわる問題であるため新しい仕法は立て難いことを挙げ、認可には及ばないことが述べられている。その後ろに、下げ札として新規加入の希望者である徳兵衛と健藏の身元調査、木屋小左衛門らの願書の写し(慶応元年閏五月十日)、「再ヒレ付案」として、北市中取締懸による諸願の取り下げの上申が続く。

訴えによれば、五人は開港当初から横浜への運送を担ってきたという。とくに取締りの厳しい糸荷物について、これまで弁天海岸でのひそかな陸揚げや外国船への直積などの不正な輸送が起ったことを引き合いに出し、攘夷浪士による生糸改め所の襲撃への対応など、自らの実績をもとに人数の限定を請願している。五品回送令の撤回から慶応二年正月の新仕法布告(地方代官の改め印による統制の開始と江戸糸問屋による検査の廃止)の間の時期にあたっており、江戸糸問屋による検査は続いている段階であった<sup>二八</sup>。

生糸輸送は、荷主から木屋らを宛名とした送り状が作成され、糸問屋の行事と手代の者が来訪のうえで確認し、糸問屋の指示のもとで神奈川宿の三文字屋与八と漆原専助(漆原屋専助とも書かれる)<sup>二九</sup>へ廻漕され、陸路によって横浜の売込商へともたらされていた。おそらく北関東から川船によって輸送された生糸を、水揚げ、改めの後に海舟に積みかえていたのだろう。神奈川宿の二軒は一日交替で担当したようである。

表2は、同資料の省略部分から旧来の五人の出願者とあらたに参入しようとしていた二人の身元をまとめたものである。それぞれの居所と渡世内容、家族構成が書き出されているが屋号の記載がないため、高村直助の言及した明治三年の廻漕会社頭取への任命の資料と比較することで、屋号を推定した(表2、3、図2)<sup>一九</sup>。

出願の代表である小舟町一丁目小左衛門は旅人宿・船積渡世で、屋号は木屋であろう(表2・1)。天保四年の奥川船積問屋に木屋小左衛門の名が確認される<sup>三〇</sup>。糸問屋の返答によれば、初めに横浜廻漕の開業申請をおこなったのが木屋であった。奥川船積問屋とは、関東北部から荷物を運ぶ川船が再び河川を登り帰る際に、北関東の荷主の求める品を川船へと積み込む問屋である<sup>三一</sup>。

本船町伝次郎も船積渡世とされ、屋号は大村屋であろう(表2・5)。「船積渡世」は木屋の例から考えれば奥川船積問屋のことを示すと推測されるが、その構成員を記した資料にその名は確認されない。小舟町二丁目半右衛門は、奥川附船宿渡世とされ、佐野屋半右

表2 江戸の横浜廻漕業者(慶応元年)

No.	屋号、名前	居所	渡世内容	身元
1	木屋小左衛門	小船町一丁目地借	旅人宿、船積渡世	自分家作、河岸土蔵2ヶ所、16人暮らし、渡世手広。
2	佐野屋半右衛門	小舟町二丁目地借	百姓宿、奥川附船宿渡世	自分家作、河岸土蔵1ヶ所、9人暮らし、渡世手広。
3	松坂屋宇右衛門	小網町一丁目地借	旅人宿、奥川附船宿、炭薪問屋・仲買渡世。	自分家作。11人暮らし。
4	駿州屋定次郎	小網町二丁目地借	横浜船積宿のみ	自分家作裏家住居。7人暮らし。
5	大村屋伝次郎	本船町地借	船積渡世	自分家作、河岸土蔵2ヶ所。9人暮らし。
6	松野屋徳兵衛	小舟町二丁目	菜種渡世、	店、土蔵、家作、河岸土蔵1ヶ所、10人暮らし、半右衛門の隣家
7	金子屋健藏	小網町一丁目地借、きり後見。健藏は亀嶋町。		河岸土蔵1ヶ所、6人暮らし。

[典拠]「市中取締書留」(旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵、注17)

表3 明治三年廻漕会社頭取(横浜への生糸・蚕種廻漕)

No.	屋号、名前	住所	備考
1	木屋小左衛門	小舟町一丁目組合持地借	
2	佐野屋半右衛門	小舟町二丁目栄次郎地借	
3	松坂屋弥兵衛 : 宇右衛門と同店カ	小網町一丁目太兵衛地借	
4	駿州屋定次郎	小網町三丁目善兵衛地借	
5	大村屋伝次郎	本船町富蔵地借	惣代
6	松野屋徳兵衛	小舟町二丁目清八地借	
a	上中屋与八	小網町一丁目宇兵衛地借	惣代
b	大村屋利八	小網町一丁目庄蔵地借	
c	野田屋与助	小網町三丁目宇八地借	奥川船積問屋
d	鈴木屋平吉	本船町組合持地借	
e	田中屋鉄五郎	瀬戸物町安兵衛地借、武州埼玉郡渡ル瀬村住宅ニ付店支配人茂兵衛	
f	久保田屋条次郎	堀江町辰次郎地借	
g	油屋金三郎	川口町彦作地借	
h	大井屋勝四郎	坂本町二丁目伝左衛門地借 ※「水揚帳」では深川大橋。	
i	尾張屋文次郎	芝田町四丁目組合持地借	

[典拠]『東京市史稿』市街編51(注19)。

衛門であろう（表2・2番）。「付船宿」という名は、奥川筋から運ばれてきた荷物を江戸市中の荷主へ届けていた舁下宿の仲間である小網町付船仲間を連想させるが、佐野屋は文政七年の段階で奥川筋船積問屋であった。吉田伸之の指摘した舁下宿と船積問屋の機能が分化していない事例であろうか<sup>三〇</sup>。

旅人宿、奥川附船宿、薪炭問屋・仲買の小網町一丁目宇右衛門の屋号は不詳であるが（表2・3）、廻漕会社の松坂屋弥兵衛が小網町一丁目太兵衛地借りであり、宇右衛門と同一の屋敷地を借りていることから、同一の店で店主の交代があったことを推測させる。そして、松坂屋弥兵衛が炭薪問屋（川辺七番組）であり<sup>三一</sup>、蚕種紙の荷主を記録した帳簿では、小網町一丁目の卯右衛門と弥兵衛が同一の印形を使用していることから、両者は同一の経営体として間違いないと思われる<sup>三四</sup>。

横浜船積宿のみの渡世となっている小網町二丁目の定次郎は、明治三年には居所を小網町三丁目としている駿州屋定次郎の可能性がある。その場合、横浜開港場の運送方として明治以降にその名がよくみられるようになる駿州屋定助と対になった営業であったといえる。

以上のように、横浜廻漕の当初の担い手は、奥川筋の舟運関係者を中心とした。また、全員が自分家作の地借りであり、三人は河岸土蔵を所持した。高村直助の指摘した通り、幕末における輸出生系の主要産地は奥州・上州であり、北関東や東北と江戸を結ぶ奥川筋の輸送網が重要であったと推測される<sup>三五</sup>。ここでは、奥川船積問屋が北関東の河岸とそれぞれ築いていた関係が重要な役割を果たしたと考えられる。糸問屋の回答の冒頭に諸国からの荷物が陸運なら飛脚問屋、舟運なら「船積宿」に到着するとあることが、奥川筋から船積問屋への生糸輸送の延長として木屋による新規願がなされたことを示している。

江戸の横浜廻漕業者のなかで、発起人とみられる木屋小左衛門の性格が特に重要であろう。「江戸買物独案内」（文政七年）の奥川筋船積問屋のリストには、木屋の名前は確認されない。木屋の開港以前の活動として、株仲間再興直後における紀州の下り蠟燭送が確認された。資料5は、安政六年五月に「紀州殿」（紀伊藩）が江戸問屋への口銭抜き産物販売を依頼したことに対する下り蠟燭問屋の回答である。

【資料5】 二六

（前略）

一、蠟燭

下り蠟燭問屋

室町式丁目

家持九兵衛代

平右衛門

右組行事

本町四丁目

家持孫左衛門

京都住宅二付

店支配人

彦七代

徳三郎

右下り蠟燭之儀、古来方私共問屋家業取締宜渡世仕候処、天保度一旦問屋御停止被仰

出、其砌方専ラ紀州出稼之もの、荷物持下り御府内并近国・近在江壳捌候趣、嘉永四

亥年間屋再興被仰付候間、古復仕、問屋江可便所、兎角直売不相止、同七寅年六月、

江戸内引合、奥川筋船積屋小舟町老丁目小左衛門外式人方江、関東筋相越通荷物入津

致し、当御番所江出訴仕、御吟味相成、追々引合之者被召出、荷物之内紀州御定用者

差戻、其余者問屋入札払二仕、右小左衛門外式人江積送候荷物、荷主共儀も出府之上、

御当地相越荷物差下し候段心得違之旨相詫、荷物は又入札払二仕、出入熟談仕、同年

八月御吟味下ケ相願（後略）

小左衛門ほか二名のもとへ入津した「関東筋相越通」の荷物とは、下り蠟燭問屋の改めや口銭の支払いを回避して奥川筋へと直接輸送されようとしたものと考えられる。木屋は株仲間解散後に流通網を拡大した新興の奥川船積問屋であったことが推測される。

資料4の読解に戻る。慶応元年に二人の者が、横浜廻漕への加入を希望していた。小舟町二丁目の松野屋徳兵衛は、廻漕会社の松野屋徳兵衛とみられ、菜種渡世であった（表2・6）。小網町一丁目金子屋健蔵（きり後見）は、横浜の運送方の金子屋健蔵と同一と推測される（表2・7）<sup>三七</sup>。金子屋は明治三年の廻漕会社の構成員に確認されない。

このように、幕末の横浜廻漕業者は、横浜廻漕のみを担った定次郎や菜種渡世の松野屋徳兵衛など、奥川船積問屋にメンバーが限定されたというよりは、江戸河岸の中核となつ

た本舟町、小網町、小舟町という店の所在地が共通していたといえる(図2) <sup>二八</sup>。河川舟運によって北方から輸送される大量の生糸が木屋らの店先で改められていた状況は、株仲間解散・再興後の都市内における新規開業への熱も相まって、近隣での新規参入を促したことが想像される。

つぎに、糸問屋による返答を検討したい。彼らの主張は、馬による生糸運送を飛脚問屋二名に任せてきており、舟運は天候によって欠航になってしまうこともあるので、従来通り陸送も継続できるようにしてほしいというものであった。江戸から神奈川表までの運送が飛脚問屋を介した陸運を基本としていたことが明らかになる。横浜廻漕業者による船積は、むしろ新規の申請であったことが理解されよう。

江戸から神奈川宿の漆原屋・三文字屋までを舟運、神奈川から横浜までを陸運による、一見非効率的な生糸の輸送ルートは、東海道の陸送による輸送の一部を船積みによって代替することによって成立したことがわかる。神奈川宿の漆原屋・三文字屋が舟運路を中断してまで仲介者であり続けたことは、糸荷物の量を確認するうえで彼らの存在がきわめて重要であったことを示している。

第四章で若干言及したが、五品江戸回送令の発令後、生糸改め所を設ける位置について江戸糸問屋と売込商で議論となった。糸問屋は開港場内の建設を提案したが、売込商は反対し、神奈川宿から芝生村あたりへの建設案に妥結された。結局改め所は建てられなかったが、送り状や荷物の状態について、江戸糸問屋と横浜売込商の双方から問い合わせや依頼を受けたのは三文字屋と漆原屋であった <sup>二九</sup>。簡易な改め所として、江戸・横浜を連結する機能を持ったといえるだろう。漆原屋・三文字屋は開港以前からその名が確認される神奈川宿青木町の住人とみられるが、生糸の取締り強化のなかでその基盤を確実にしていたことがわかる。

最後に、三文字屋・漆原屋から開港場までの駄送を担ったのは誰であったか。第五章でみたとおり、明治五年の陸運会社の頭取に、関屋音次郎や三文字屋与八と思しき玉置与八の名がみられることがヒントになると思われる。神奈川宿の馬持・馬士や、二俣川出身の関屋音次郎、すなわち東海道と八王子街道の結節点たる神奈川宿に出入りした馬士が動員されたことを想像させるのである。

結局この請願は、窮屈な独占的営業を防ぐという株仲間解散・再興以後の政策方針に合

わないとして、取り下げられた。その結果、江戸の横浜廻漕業者の人数は急速に増加することとなる。

## (2) 慶応二年四月の江戸・横浜舟運の開業申請

慶応二年、木屋を中心とした運送集団とは異なる人物による新規願がなされた。資料6は木挽町家主助七らによる江戸・横浜間の旅客輸送業と生糸・蚕種輸送業の新規開業申請である。慶応二年四月二十七日の願書、六月十二日に再提出された願書、臨時廻による請願者三名の身元調査部分を引用する。

〔資料6〕 <sup>三〇</sup>

(前略)

乍恐以書付御訴訟奉申上候

一、木挽町七町目家主助七外式人奉申上候、先般横浜表御開港以来、次第二繁栄仕候ニ随ひ、彼地往返之もの共不少候処、素より船都合宜敷場所ニ付、近來海岸・川筋方雇船或者乗合船ニ而、竊ニ往返致候もの共多分ニ有之候哉之趣、從來自己相對之儀ニ付、更ニ規則も無之不相当之船賃を請、又者海上ニおあて水主之もの共酒代等をねたり、難渋致候ものも有之、或者不都合之場合方猥リニ上陸いたし旅人江難儀相掛候義も有之由、剩人躰身分も不見定怪敷もの又者御口(尋力)者忤乗組、不取締之儀有之候哉も難計、殊ニ荷廻し船・小船等ニ而度々風波之危難も有之候哉之趣ニ御座候、

(中略)

且又船賃之儀ハ四人水主押送船ニ而、雇切老艘ニ付金三両、乗合老人ニ付銀拾匁ツ、老艘式拾人を限乗組、所持荷物嵩高・目方等ニ応シ乗人老人又ハ半人等歩合ニ而取極、猶又急ギ別雇等ニ而増水主いたし候分者、賃銀相定之餘無益之失費無之様、可仕候

(中略)

且又、彼地往返諸荷物之儀、是迄船積請負之ものも有之候得共、今般生糸・蚕種紙等御改革被仰出候処、右運送方請負之者も未タ無之候間、右生糸・種紙ニ限り、船運送方被仰付被下置候様仕度、奉願上候、左候得者、彼地御遣シニ相成候御用柄并

御掛様方往返御荷物之儀も、為冥加無賃ニ而何時ニ而も積立相早可申候間、何卒右願之通横浜渡船之儀、御免許被成下候様、偏ニ奉願上候、以上  
慶応二寅年四月廿七日

木挽町七丁目  
家主  
願人 助七 印  
五人組 吉蔵 印  
駒込行町  
家持  
願人 忠蔵 印  
五人組 辰五郎 印  
小石川宗慶寺門前  
家主  
願人 助次郎 印  
五人組 徳次郎 印

乍恐以書付奉願上候

奉行所宛

一、木挽町七丁目家主助七外式人奉申上候、(中略)横浜通船 御免許被成下候様、委細以書付当四月廿八日御訴訟奉申上候処、訴状上ケ置候様被仰付奉畏候、然ル処、右願筋二付、彼地往返船之儀、押送形船相用候積ニ申上置候処、右押送船之儀、海上晴和之節ハ弁利宜敷御座候得共、海上波立或者汐合不宜候節、又者乗組人等込合候節者、手狭ニ相成、諸事不都合之儀も御座候間、尚又再考仕候処、異船形川蒸氣船与唱候船之儀者、蒸氣船小形ニ而、近海川筋等々相用弁利之船ニ而、大艫之風波ニ而も危難之患無之、且多人数乗組ニ而彼地江——(ママ)  
一日ニ往返致候儀ニ付、前願ニ申上候通り、彼地御用 御役人様方御用船差出候節、右川蒸氣船ニ御座候得者、急速之御用向も無滞相弁え、縦令重キ 御役人様御乗船ニ相成候而も、更ニ風破之心配も無御座、誠ニ手広ニ而万事都合も宜敷御座候哉与奉存候間、何卒右川蒸氣船製造御免許被成下置候様、奉願上候

(中略)  
上

臨時廻  
木挽町七丁目助七外式人、横浜表江旅人通船并生糸・種紙等運送方一手請負、御用船をも可相勤旨願出ニ付、右之者共身元其外差支有無等、搜索仕候様被仰渡候間、取搜左ニ申上候

木挽町七丁目  
家主  
助七  
寅四十六才  
駒込行町  
家持  
忠蔵  
寅廿三才  
小石川町宗慶寺門前  
家主  
助次郎

右助七儀者、年来家主役致し、右可成ニ相暮罷在、先年横浜御開港之砌、願濟ニ而同所弁天通五丁目二間口式拾五間、奥行式拾間、并本町四丁目横町海岸通二間口拾式間、奥行式拾間之地所拝借、家作致し、式ヶ所共、当時店預人差置揚金取罷在候由  
一、忠蔵儀者間口七間奥行拾老間余之所持地面ニ住居、春米・炭薪渡世致し可成ニ相暮罷在候由  
一、助次郎儀者、年来家主役相勤、老番組人宿渡世致し、出入屋敷等大小廿軒程有之、相心ニ相暮居候由  
右之通ニ而、三人共是迄御咎等請候儀者勿論、悪敷風聞等無御座、尤、助七・助次郎共、山氣与申二者無之候得共、諸請負様之儀ニ携、折々損失致し候儀も有之由、今般願出之儀、助七重立、助次郎者金主之由、相聞申候、且右願之内旅人通船之廉者、一

体御当地方東海道神奈川宿辺まで海上船二而罷越候儀者不相成、品川宿八ツ山下方上陸可致旨、天保十三寅年九月中改被仰渡も有之、殊諸荷物運送之方者、表立候儀二者無之候得共、横浜荷物運送宿凡拾軒程も内仲間有之由

(朱書) 此運送宿仲間組合取極度様、小舟町老町目藤次郎地借木屋小左衛門外四人之者、去丑八月中当御役所江願出、当時御調中之趣ニ御座候

其外神奈川番船宿与唱、往来荷物運送稼方致し候ものも有之、是迄別段差支候儀も無之処、此度糸・種紙等、前書願人二限候様二相成候ハ、却而窮屈相成、誠自然株立手狭之所置ニ成行、品々差支之儀も生し可申哉之趣ニ専ラ風許仕候

右取搜別紙寅年被仰渡書を相添此段申上候、以上

寅十一月

臨時廻

(後略)

前略部分にて、この請願は、小左衛門による運送請負人の人数限定の請願と同じ扱いを受け、取り下げられた旨が説明される。

近在の海岸や川筋から雇った船、乗合の船によって江戸と横浜の往復をしている者が多く、なかには密かに往返する者、旅人に迷惑をかけたり許されていない場所から乗り降りさせたりしている水主、素性を確認せずに乗船させる場合もあるなど、取締がなされていないことを指摘し、旅客輸送の開業許可を求めている。省略部分には木挽町河岸と高輪周辺に出張所をつくること、乗客の身元を改めること、冥加として江戸・横浜を往復する御用船を供出することが記載される。また、通船の規則や運賃、御用船についての説明のあと、諸荷物の船積を請け負っている者はいが、生糸・蚕種紙の改め仕法の変更のあと、生糸・蚕種紙の運送方を担う者がいないとして、独占的な営業を出願している。

慶応二年正月に江戸糸問屋による生糸・蚕種紙の改めが廃され、生産地の支配領主ごとに改め印をしたうえで輸送するようになり、文書中で言及される「改革」はこれに該当すると考えられる。既存の運送集団である小左衛門らは糸問屋の指示のもとで横浜運送を担ってきたのであり、糸問屋の仲介が不要になったことは、助七らにとって新規営業の機会として映ったのであろう。

また、運送の手段に関する提案も注目される。運賃の検討のなかで、水主四人が乗る押

送り船を例示しており、江戸・横浜間の舟運にはこうした海舟が利用されていたことを示している。押送船は小型船であるが、文書中では二〇人まで乗る想定がなされている。押送り船は江戸内湾の沿岸町村に多くの所有者がおり、魚荷物のほか物資輸送にもよく利用された<sup>三</sup>。

そして、六月には、想定していた押送り船では天候や混み合った際には不都合なので、小型の蒸気船を活用したいとして、新たに請願書を提出しており、蒸気船の製造の許可を求めている。

請願者の調査を命ぜられた臨時廻の報告によれば、助七は年来家主役をしており、横浜開港の際に弁天通り五丁目之間口二五間奥行二〇間、本町四丁目横町海岸通りに間口二二間奥行二〇間の土地を拝借し、家作のうえ、店預り人を派遣し収入を得ているという。忠蔵は間口七間奥行一一間ほどの所持地面で春米、炭薪渡世を営んでおりそれなりの暮らし向きであった。助次郎は家主頭を勤め、老番組の宿渡世で出入の屋敷は二〇軒ほどあり、相応の暮らし向きであるという。

ここで、助七と助次郎は「山気」とは言わないまでも、諸種の請負に携わり損失をうけることもあると報告されている点が注目される。この請願は助七が主体となり、助次郎は金主であるとのことであった。そして、江戸・神奈川での旅人便船の禁令が出されていること、すでに木屋小左衛門ほか十人ほどの運送宿にくわえ、「神奈川番船宿」という従来荷物運送稼ぎをしているものも居り、とくに支障は出ていないので、生糸・蚕種紙の運送請負人を限定しては支障がでると上申ししている。

「山気」に類する気質、諸種の請負業、蒸気船の製造申請にみられる壮大な構想が明示する通り、本件の請願者は多分に山師の性格を持っていた。町人による発起としては早い慶応二年の蒸気船営業が、横浜開港場の地所拝借人として江戸・横浜をまたにかける助七を主体に構想されたのである。最幕末の江戸・横浜の一帯が、こうした新規開業の熱に満ちていたことを示している。

## 2 明治初頭までの展開

先述の横浜廻漕は、木屋小左衛門をはじめとした五人によって担われたが、徐々に人数を増やしたとみられ、慶応三年十二月には一五人の集団となっており、横浜・野毛への運

送を担った。慶応三年に課された上納金に関して、本船町留蔵地借伝次郎と小舟町一丁目藤次郎地借小左衛門を惣代として二通の願書が提出された<sup>三三</sup>。先述の大村屋伝次郎、木屋小左衛門であろう（表2・1、5）。

一通目は横浜・野毛への輸送にくわえ、神奈川・横須賀への輸送許可を申請したものである。文久元年に野毛の住人から提出された物揚げ場の設置申請が許可されたよう<sup>三四</sup>、野毛への輸送が行なわれていたことがわかる。

二通目の内容は、大まかに以下の通りである。築地居留地（鉄砲洲御起立地）の開設をうけ、横浜開港場との間の舟運が許可されたところ、「海舟問屋」にも同様の営業が許可されており、そこへ加入するよう指示された。そこで冥加金の上納を提案して「海舟問屋」からは独立した営業許可を求めている。「海舟問屋」とは後にみる「廻船方」や「船方」と同じで、江戸に入津した廻船の世話をし、舁へと積み替える差配をした廻船問屋のこととみられる<sup>三五</sup>。

慶応三年には一五人の仲間となり、築地居留地関係の運送にも着手していたことがわかる。おそらくこの一五名が、明治三年の廻漕会社頭取の一五名になるのである<sup>三六</sup>。

慶応四年五月六日には、居留地の関係者たちによって、築地居留地の御用について維新前と同様に指名するよう願書が提出された<sup>三七</sup>。その連名のなかに「船方惣代」の五名と「横浜運送方惣代条次郎」（表3・f）、「同蒸気船扱人惣代新兵衛」の名が確認される。船方への編入は実行されなかったのだろう。

ここでの蒸気船扱人惣代とは稲川丸の運用の代表者を指すと考えられる。同船は米国人「ウエンリット」から小網町の松坂屋（表3・3松坂屋弥兵衛か）が買い受けたが、代金支払いが滞り、それを弁済した神奈川県の所有船として東京・横浜間を運航した<sup>三八</sup>。のちに神奈川県のもとで稲川丸の差配役となる横浜の岸田吟香の回顧に

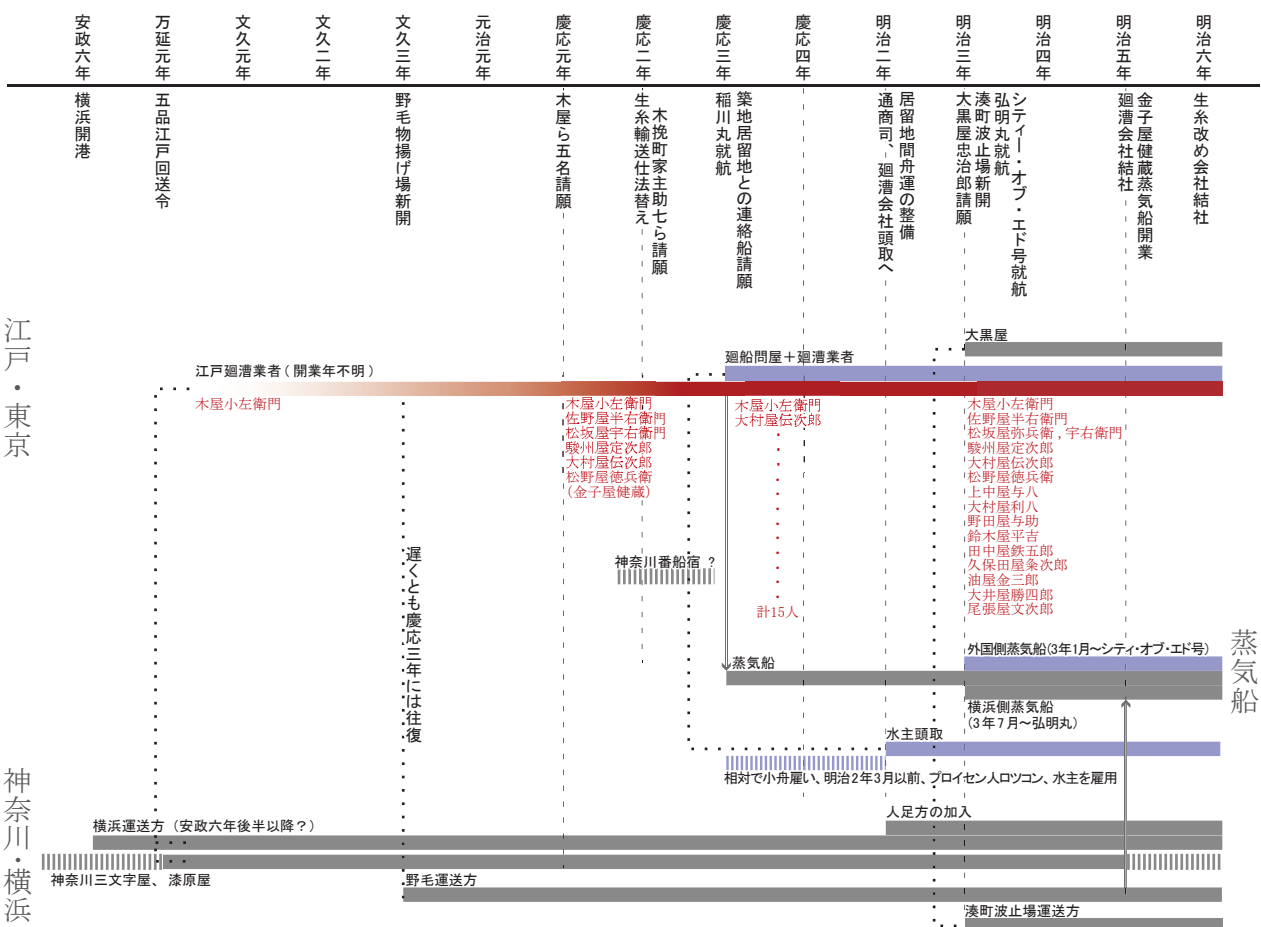


図3 江戸・東京と横浜の運送業者の変遷

赤帯：江戸の横浜運送方（構成員の人数も表現）、青帯：築地・横浜の外国人居留地間舟運、灰帯：その他両都市間の舟運  
[典拠]「市中取締書留」（資料4、6）、「諸問屋身元金調」（旧幕府引継書、国立国会図書館蔵）、『神奈川県史 資料編』10、資料番号410番、明治元年「諸願・諸届」、請求記号A605.A3.11.D193、東京都公文書館蔵、明治元年「諸届込」（請求記号605.A4.14・105頁、東京都公文書館蔵）明治2年「達掛合」（請求記号605.A3.16.D192、東京都公文書館蔵）、明治3年「達掛合」、請求記号A605.B3.13.22、東京都公文書館蔵、松永秀夫論文（1993年、注5参照）、『東京市史稿 市街編』51（470頁、明治3年8月23日「積荷運送問屋新規営業許可」）。

よれば、慶応三年ごろに江戸から横浜への廻漕をおこなう「船仲間」十人ばかり（木屋らのことであろう）と相談し、小さな蒸気船を購入し、両都市間を運行させることを取り決めたという<sup>三六</sup>。さきに挙げた木挽町助七らと同様に、横浜廻漕業者からも早くから蒸気船の運行に関心を持っていたことが理解される。

一方、築地居留地と横浜居留地の間の外国人荷物輸送や旅人の通船の体制は、外国船による往復が始まったことで税関を通過しない荷物の輸送を取り締まる必要が実感され、明治二年に整備された<sup>三八</sup>。東京側では先述の一五人と廻船問屋五四人、横浜側は水主頭取九蔵が引き受けることとなった。

そして明治三年七月、永嶋町地借の忠次郎により、横浜に新設された「鉄橋際波戸場」と東京の間での荷物の往復輸送の新規開業が請願された<sup>三九</sup>。新たな波戸場とは、新設された湊町波戸場のことである（第五章図7参照、鉄橋とは吉田橋のこと）。従来の横浜運送問屋一五名は、開港以来の苦難を主張して新規開業に反対するも、問い合わせをうけた通商司は、この反対を旧習へ泥む姿勢と一蹴し、忠次郎が生糸・蚕種紙を扱わないとしているため問題はないと回答し、開業は許可された<sup>四〇</sup>。

つまり、江戸の横浜運送問屋は、生糸・蚕種紙の輸送という糸問屋による改め仕法以来の運送と、それ以外の荷物輸送を独占し、さらに築地居留地の成立後に生じた両都市間の外国人荷物輸送も廻船問屋とともに担うようになったといえる。

かくして江戸の横浜廻漕業者は、木屋の新規開業に始まり、慶応三年までには一五人の集団となり、通商司廻漕会社へと編入されたのである。その居所を確認すると、尾張屋文次郎を除いて、小網町・小船町の周辺であることが理解されよう（表3、図2）。

一方、資料6にみられた「神奈川番船宿」や永嶋町の忠次郎の存在、第五章でみた横浜運送方による蒸気船の就航など<sup>四一</sup>、両都市間の運送は必ずしも木屋たちに限定されたものではなくっていく。横浜開港場の波戸場が大岡川の湊町波戸場と二分されたのと同様に、とくに明治以降は東京側でも多様な営業者が現れつつあったといえる（図3）。

### 3 小括

以上、やや断片的ではあるが、江戸住人の横浜廻漕への参入を瞥見した。江戸から神奈川への舟運は五品江戸回送令の下での生糸輸送についてみれば、陸送の代替として成立し

たことが明らかとなった。そして最大の輸出品であった生糸と蚕種紙の輸送は、江戸のなかでも旺盛な参入が試みられたといえる。明治三年に廻漕会社へ取り立てられる江戸の横浜廻漕問屋の人数が慶応三年までに急増していることが明示している。また、江戸・横浜の両都市間において、生糸改め仕法の変化や波止場の増設のような流通構造の転換を機として、蒸気船営業を最たるものとした新規開業が盛んになされたことも理解される。

## 四 「最寄船乗」の動向

### 1 波止場に入出入りする船乗—舩か海運か—

本節では横浜から江戸までの運送を担った船乗について検討する。

まず、横浜波戸場で国内荷物の運送を担った運送方による明治二年の請願をみていく。本文書は波止場に入出入りする「船乗・水主」に対する鑑札配布を出願したもので、西川武臣が運送を担った船乗について述べる際に紹介し、また、神奈川県による無宿人対策を検討する中で、船乗の取締規則に言及している<sup>四二</sup>。ただし、さらに検討すべき点もいくつかあると思われるため、再読を試みたい。

〔資料7〕<sup>四三</sup>

乍恐以書付奉願上候

運送方仲間惣代半右衛門・長吉奉申上候、近來海賊等有之、西波止場先ニて紛失荷物等も度々有之候処、今般御当港江立入候諸職人・日雇人足ニ至る迄御鑑札御下ニ相成り御取締被為在候ニ付、西御波止場江水揚致し上陸仕候船乗・水主等江も御鑑札御下被下置、入船・出船・舩船等都て船方之者、年来差配仕来り候運送方溜り所ニて取締向仕候様被仰付度、尤野毛町戸部神奈川最寄船乗之者、惣人数凡式千人余も有之へく、御鑑札為御冥加老人ニ付壹ヶ月銀拾分宛上納為致、御波止場御普請并海賊防御之御用途金ニ御差向被下置候ハ、難在仕合奉存候、右御鑑札私共江御下ケ被下置候御義ニ御決候ハ、別紙ニ奉申上候通規則相立、取締向精勤仕度奉存候間、何卒以御憐慰之思召願之通被仰付被下置候様偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年十一月十三日

運送方

惣代

長吉

半右衛門

名主

兵助

御裁判所

前書之通願出候二付、奥印仕奉差上候、以上

惣年寄

清兵衛

船乗之者取締向規則

一、船毎二船頭之生国、其所之村役人名印之書附取置、御鑑札相渡可申事

一、水主・炊等生国・年齢睨与相糺召仕候様、船頭江得与申聞、会所帳面江明細控置、札数相渡し可申事

一、御波止場近海江鑑札無之怪敷船見請候ハ、早速御訴可申上候事

一、御鑑札所持無之船乗之者猥ニ上陸為致間敷、尤、旅船等着岸之節者、出帆所積問屋送状承、名前等得与相糺、上陸為致可申事

一、船乗之者船中ニ而急病或者風波之怪我、海賊等非常之難事有之候節者、相互ニ助ケ合可申、万一御鑑札紛失等有之候ハ、其次第并番附等委敷御訴可申上候事

一、最寄船乗之者、番組相定置御触面之義者不申及、被 仰出候御趣意、其時々早速触達し可申候事

右之通規則相定、諸荷物大切ニ取扱為致、万端正路ニ船渡世相稼候様、取締向精勤仕度奉存候

右書面を以当十一月中奉願上、猶又、此度会所入用筋調、別紙ニ御同奉申上候、何卒御情愍之御沙汰奉願上候、以上

巳十二月

運送方

村田屋

与次右衛門

石川屋又四郎

店支配人

又七

駿州屋

定七

月行事

八幡屋

七五郎

金子屋健藏

店支配人

小助

惣代

長吉

半右衛門

御裁判所

会所入用

一、御鑑札凡式千枚

老月老枚ニ付銀拾匁ツ、

金三百三拾三両

内

金七拾五両 取締五人

金四拾両 肝煎四人

金式拾両 書役式人

金拾両 小使式人

金式拾両 諸入用

金百六拾五両

引而

金百六拾八両

御差図之方江積金

西川武臣も言及しているが、「野毛町戸部神奈川最寄船乗之者」が合計二千人ほど波戸場に入入していた。こうした者へ鑑札を配り、その対価を波止場の御普請や海賊への対策に回すことが主張されている。御普請の資金については、慶応三年に波止場前の埋立普請費用が運送方に課されたことを受けていると思われる（第五章四節三項）。

運送方が取締り対象として想定しているのは「入船・出船・舢舨船」などの船乗で、入船・出船とは他所への運送船、舢舨船は廻船から波戸場までの輸送船を指していると考えられる。つぎに、「船乗之者取締規則」の案文を検討しよう。第一条は他の村落出身の船頭が乗る船、第二条は水主・炊を配下にした比較的大きな船を想定した案文である。ここで、船一艘に対応させた船頭を介して水主・炊を掌握しようとしていることが読み取れる。そして、札は船頭以下、すべての乗組員に配布されることとされた。

第三、四条は鑑札の無い船乗の取締り、第五条は非常時の対応についての条目である。第六条は「最寄船乗之者」を番組にわけ、布達内容の連絡を徹底しようとするものである。最後に、鑑札配布による収入と取締りにかかる人員への給金の試算が掲載されており、鑑札配布の予定人数は請願書に対応する二千人である。

では、「最寄船乗之者」とはどのような人びとを想定しているのだろうか。この表現は、運送方の主観的な領域意識を表しており、基本的には自らの管理下に置かれるべき存在として彼らが認識している船乗であろう。しかしそれは、横浜波止場に入入りする船乗の実像から発想された集団であつたと考えられる。第一、二条の船乗にも鑑札配布を計画している点に注目したい。請願書内での「野毛町戸部神奈川最寄船乗之者」は、村落出身の船頭や、比較的大きな船の乗組員を含み、その総体が第六条の「最寄船乗之者」であつたのではないか。横浜開港場の西波止場に入出入する「最寄船乗之者」とは、野毛・戸部・神奈川を中心としながらも、より広い範囲を含んだ

表4 「宿村大概帳」に載る神奈川宿の舟

船種	数
五大力船	11
茶船	9
大鯊船	10
鯊船	6
無極印鯊船	83
無極印式百石積廻船	1
御年貢船御極印船	9
瀬取船	29
小伝馬船	5
船役永	1900 文

〔典拠〕 児玉幸多編『近世交通史料集4 東海道宿村大概帳』吉川弘文館、1970年。

ことが推測されるのである。

なお、天保期ごろの神奈川宿の船数をみると、中小の漁船八九艘をふくむ一六三艘であつた（表4）<sup>四四</sup>。もともと漁村であつた野毛・戸部の船数を合計しても、船乗が合計二千人に達する規模にはならないと思われる。

また、請願や規則において、入船・出船・舢舨船の区別が特になされていない。第五章で検討した通り、波止場には物資を運送する海舟が着岸できたと推測されることと関係すると考えられる。江戸・横浜を中心とする中距離の運送船と、港内を行き来する舢舨船の間に大きな差はなかったと考えられるのではないだろうか。

つぎに、明治三年五月の布告された港内の荷船・客船に関する規則を検討したい。

〔資料8〕<sup>四五</sup>

横浜港内往來の荷船・客船の規則

一、横浜港内二碇泊の船々へ往來する客船并荷物等運送する船々、以來西運上所船番所へ官許を願出へし、且、三ヶ月目毎ニ官許の改を乞受へき事

但、客船・荷船とも壹艘ニ付壹ヶ月手数料永六拾貳文五歩、船子壹人ニ付同断

一、官許を得ずして港内ニ於て稼方いたし候船々は、吟味之上相当之咎申付候事

一、官許を受たる船頭或ハ支配する者共ハ勿論、其船々ニ雇ひ置船子共の住所名前書を洩なく船番所江差出候ハ、其船々へ焼印を打番号の旗、船子へハ船の番号・名前書入たる免許の鑑札を渡、且、客船ニ限り番号ある燈籠を与ふへし、若、其船子細ありて休業又ハ右船子共の内入替り、或ハ其外故障ありて業を止る時ハ速ニ可申出事

一、官許の船々持主相改まる時は、速に申出、新持主の名前ニ而更ニ官許を受へき事  
一、番号の旗は昼夜とも必ず揚げ置へし、往來の客船は東西波止場標杭の内江繫事を許さず、客船番所江來る時ハ行先の船号、当人の名前等承り書留、其船の番号を以船を波戸場ニ呼寄乗船さすへし、而して船中の世話丁寧にいたすへし、又、夜中は番数ある燈籠を必ず用ゆへし

附、船客若し泥酔ニ而名面等告る事出來さる時ハ、舢舨江乗組事を断へし  
一、兼而渡し置たる番号ある旗を掲げず、或は燈火點せず鑑札を所持せず、或は風波もなき二定りの賃金ニ而船客を載せず、渡海中不法の義ある時は、其ものハ勿論其

船官許願受しもの迄も吟味之上其罰申付べき事

一、港内ニありて右規則を犯し、又は運上所の規則に背き、船子共船中或ハ溜り所等におゐて賭の勝負事、喧嘩口論、不法の義有に於ては、其船の持主・船子至迄吟味之上答申付候事

午五月

一条目から、沖合の碇泊船との間を往返する客船・荷船、つまり舢舨を対象としていることがわかる。この規則は、外国船との間を往復する船の規則である「港内碇泊之外国船江往來いたし候船々取締方取扱」(第五章資料1・2)とは区別されており、国内船のための舢舨送船に対するものとみられる。

対象となった舢舨は西運上所の船番所にて三ヶ月ごとの官許を受け、船一艘、船子一人ごとに手数料を収めることが義務付けられた。その際、船頭から船子に至るまで住所・名前を船番所へ届け出ることとなった。第三条で船頭とならば「支配する者共」とは、第四条に「船持」とされる船の所有者と異なると考えられることから、数艘の船頭を取りまとめる頭取を想定しているのだろう。最後の条項にあるとおり、一艘ごとで乗組員に連帯責任を負わせており、船を単位としてそこに属する者として船子(船頭も含むか)を掌握する規則であったことがわかる。

この明治三年の規則は荷物運送については舢舨が対象となったものであるが、船頭と複数の船子が乗る規模までが想定されているのである。舢舨が小さなボートのようなものはなかったことを示唆している。

以上、さらなる資料による検討が必要であろうが、波止場に入り出る舢舨と海舟は、船の形状として共通する部分をもった可能性があったといえる。以下では、両都市間をつないだ船乗りの姿に迫ることを試みるが、船乗に関する資料の乏しさやその働き(都市・村落との間の海運か、舢舨など)について必ずしも把握できない例も多いため、舢舨輸送船も含めて横浜開港場へ参入した船乗りを探索する方法に依りたい。

## 2 幕末における船乗―文久二年の外国人荷物窃盗事件における舢舨―

幕末において横浜開港場の荷物輸送をおこなった船乗の実名が把握される資料として、文久二年の窃盗事件をとりあげたい。資料9は、神奈川宿神奈川町の名主を勤めた石井家

の「願書訴書留」に収録された請証文の写しである。

〔資料9〕<sup>四六</sup>(便宜のため、各人の罪状となっている各条に①から⑫の番号を付した。)

差上申一札之事

武州稲荷新田七五郎次男伊三郎外五人盗いたし候一件、再応御吟味之上、左之通被仰渡

① 一、太田町源蔵儀、名前不存外国人ニ被雇運送方引請輸出荷物船積いたし、右積荷之内、老入立又者武州小向村市郎右衛門忤藤五郎外四人申合、大豆・薬種・銅板等盗、殊二横浜町紋十郎弟角蔵外老人任頼、同人共盗品一同神奈川宿青木町藤五郎相頼、同宿七軒町彦次郎外老人江壳払、右金子夫々配分致し候始末、不届二付、入墨之上重放被仰付候

② 一、神奈川宿源蔵儀、名前不存外国人任頼、輸出荷物手船ニ而運送致候積荷之内、大豆・麦粉盗取壳払、又者武州小向村市郎右衛門忤藤五郎外老人、大豆・水油等壳捌方頼受、右者同人共盗取品二茂可有之与乍察、世話料可貴請右頼之趣承知、町内松五郎相頼、神奈川町惣助江壳渡候、右金子之内、世話料貴請候始末不届二付、入墨・重放被仰付候

③ 一、元次郎儀、名前不存外国人ニ被雇、輸出荷物運送致節ニ、船中おひて大豆・薬種・茯苓盗取、殊二武州小向村市右衛門(市郎右衛門力)忤藤五郎勸二随ひ、同国稲荷新田七五郎次男伊三郎外式人忤銅板盗取、右之品々壳払、代金配分致候始末不届二付、入墨之上重放被仰付候

④ 一、鶴吉儀、名前不存外国人ニ被雇輸出荷物運送致候、右積荷之内、魚油三樽盗取、壳払候始末不届二付、入墨之上重放被仰付候

⑤ 一、藤五郎儀、兼而懇意致候太田町忠兵衛忤源蔵外四人壳捌方任頼、不正之品ト乍察、多分之世話料可貴請与存、大豆・銅板等宿内彦次郎外老人江壳渡遣し、礼金貴請候始末不届二付、重放被仰付候

⑥ 一、万五郎儀、兼而知人武州稲荷新田七五郎忤伊三郎外老人、又者忤由五郎任頼、不正之品二茂可有之旨乍察、多分之世話料可貴請与存、大豆・水油・鰯等町内松太郎相頼壳払遣し、礼金貴請候始末不届二付、重放被仰付候

⑦ 一、松太郎儀、町内万五郎外式人より壳払方頼請候品々者不正之品二茂可有之与相察、

多分之世話料可賞請与存、大豆・水油等、宿内荒宿町惣助江預置、又者売払遣し、追而同人売徳金配分請取候積申合候段、配分不請候与茂、右始末不届二付、放（後欠力）

- ⑧ 一、彦治郎儀、兼而懇意致候宿内藤五郎外四人、払物之由二而持参申候大豆・茯苓・水油等、盗物与者不存候与茂、同人共船乗渡世之身分、右鉢之品取扱候而如何之儀与乍心附、得与出所茂不相糺売捌方世話致遣し、又者買取所持罷在候始末、不届二付、右買取所持之品御取上ケ、放被 仰付候

- ⑨ 一、松五郎儀、兼而懇意致候宿内藤五郎外四人、払物之由二而持参り候銅板、盗物与者不存候而茂、船乗渡世之身分、右鉢之品取扱候而如何之儀与乍心附、得与出所茂不相糺、買取所持罷在候趣不埒二付、右所持之品御取上ケ、手鎖

- ⑩ 一、惣助儀、兼而懇意致候宿内松太郎払物之由二而、持参り候大豆・水油・麦粉等、盗物与者不存候与茂、同人身分不相応之品取扱候而如何之儀与乍心附、出所茂不相糺、預り置、又者買置見世売致候始末不埒二付、右預り品并売払代金与茂御取上ケ、手鎖被 仰付候

- ⑪ 一、武州稻荷新田百姓七五郎次男伊三郎儀、武州小向村市右衛門（市郎右衛門力）忤藤五郎申合、同人手船二藤五郎一同乗組、名前不存外国人輸出荷物運送致、右荷物之内、大豆・薬種盗取、猶藤五郎外六人申合、前同様外国人より請取積荷物之内、銅板・茯苓等、度々盗取品々住居・名前不存者、又者神奈川宿七軒町藤五郎外七人相頼、同宿彦治郎等江売払、右代金之内札金二差遣し、又者銘々配分致候始末不届二付、死罪可被仰付之処、死病致候間、其旨可心得 段被仰付候

- ⑫ 一、横浜町紋十郎弟留蔵儀、名前不存外国人二被雇輸出荷物運送致候節、船中二おひて大豆・薬種・茯苓盗取、殊二武州小向村市右衛門忤藤五郎随ひ、同国稻荷新田七五郎（忤）欠力）伊三郎外七人任二、銅板盗取、右品売払代金配分致候始末不届二付、入墨之上重放可被仰付之処、病死致候付、其旨可心得 右被 仰渡之趣、一同承知奉畏候、仍御請証文差上申処如件 戊六月十八日

太田町忠兵衛忤

源蔵

七軒町藤兵衛店

源蔵

善六弟

元治郎

横須賀六左衛門忤

鶴吉

神奈川青木町清九郎店

藤五郎

藤兵衛店

安五郎

荒宿町

松五郎

同 百姓

惣助

稻荷新田役人惣代

藤兵衛

横浜元町役人惣代

半右衛門

神奈川町役人惣代

清三郎

一二名の罪状からなり、提出先は記載されないが、鶴吉に関するほぼ同文の文書が神奈川奉行へと提出されていることが確認され<sup>四七</sup>、神奈川奉行が宛先であったと推測される。「角蔵」と「留蔵」、「万五郎」と「安五郎」、「市郎右衛門」と「市右衛門」などの人名の混乱や誤字・脱字がみられる。

まず、人物を整理すべく①から⑫までの番号を付し、罪状の簡単な要約を表に、また、それぞれの関係を図化した（表5、図4、出身地は図5参照）。ここで、神奈川宿青木町七軒町の藤五郎（⑤）とは別人の、武州小向村（現川崎市）市郎右衛門忤藤五郎は、本人も彼に対応する村役人も文末の署名がみられないことを確認しておきたい。証文の序文も「伊

表5 文久二年の窃盗事件の概要

人名	居所	咎の内容	罪状の内容
①源蔵	太田町	窃盗、売買の仲介	名前不明の外国人に雇われて運送を引き受け、輸出荷物を船積みする。運送荷物のうち、一人で、または★藤五郎+4名と申し合わせて大豆・粟種・銅板を盗み、⑫留蔵+1名に頼まれ、⑤藤五郎を頼って⑧彦治郎へ売却、売上の配分。【不届き、入墨・重放】
②源蔵	神奈川県青木町(七軒町)	窃盗、売買の仲介	名前不明の外国人に頼まれ、輸出荷物を船で運送。積荷のうち、大豆・麦粉を盗み取り売却。★藤五郎+1名に、大豆・水油などの売捌きを頼まれ、盗品とは察しつつも世話料目当てに引き受け、⑨松五郎(⑦松太郎の誤りか)を頼って⑩惣助へ売却、世話料の收受。【不届き、入墨・重放】
③元次郎	神奈川県青木町(七軒町)か	窃盗、売却	名前不明の外国人に雇われ、輸出荷物を運送し、船中で大豆・粟種・茯苓を盗み、さらに、★藤五郎の勧めに従って、⑪伊三郎+2人とともに銅板を盗み取り、いずれも売却し、売上の配分。【不届き、入墨・重放】
④鶴吉	横須賀村	窃盗、売却	名前不明の外国人に雇われ、輸出荷物を運送し、積荷のうちの魚油3樽を盗み、売却。【不届き、入墨・重放】
⑤藤五郎	神奈川県青木町	売買の仲介	以前から懇意にしていた①源蔵+4人に盗品の売捌きを頼まれ、世話料目当てに大豆・銅板などを宿内の彦治郎へ売却。礼金を收受。【不届き、重放】
⑥万五郎	神奈川県青木町(七軒町)か	売買の仲介	以前から知人であった⑪伊三郎+1人、または、倅由五郎(詳細不明)に頼まれ、不正の品とは察しつつも、世話料目当てに大豆・水油・鰯を町内の松太郎に頼って売却し、礼金を收受。【不届き、重放】
⑦松太郎	神奈川県青木町	売買の仲介	町内の万五郎+2人から売却を頼まれた品々は不正の品とは察しつつも、世話料目当てに大豆・水油を荒宿町惣助へ預け、または売却し、売上の一部を收受するつもりでいた(実際はもらっていない)。【不届き、放】
⑧彦治郎	神奈川県(神奈川県)か	売買の仲介、購入	以前から懇意にしていた⑤藤五郎+4人から不用品として持ち込まれた大豆・茯苓・水油などを盗品とは知らずに売捌きの世話をし、自らも買い取り、所持した。【不届き、取上げ、放】※船乗りに不相応の品なのに所を確認しなかった落度(下記2名も同様)。
⑨松五郎	神奈川県荒宿町	購入	以前から懇意にしていた⑤藤五郎+4人から不用品として持ち込まれた銅板が盗品とは知らずに買い取り、所持した。【不埒、取上げ、手鎖】
⑩惣助	神奈川県荒宿町	購入、転売	以前から懇意にしていた⑦松太郎が不用品として持ち込んだ大豆・水油・麦粉などを、盗品とは知らずに預り、または買い置きして見世で売っていた。【不埒、取上げ、手鎖】
⑪伊三郎	稲荷新田	窃盗、売却、(扇動か)	★藤五郎と申合せ、(伊三郎の?)手船に藤五郎とともに乗組み、名前不明の外国人の輸出荷物を運送し、その積荷の内、大豆・粟種を盗み取り、さらに、藤五郎+6人と申合せ、同様の手口で銅板・茯苓などを度々盗み取り、住所や名前のわからない者、または⑤藤五郎+1人を頼り、神奈川県彦治郎らへ売却。売上の一部を礼金とし、または配分。【不届き、死罪 ※病死。】
⑫留蔵	横浜町(元町)か	窃盗、売却	名前不明の外国人に雇われ、輸出荷物を運送し、船中で大豆・粟種・茯苓を盗み取り、さらに、★藤五郎に同調し、⑪伊三郎+2名とともに銅板を盗み取り、売上の配分。【不届き、入墨、重放 ※病死。】

「願書・訴書留」(神奈川県本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵)から作成。小向村市郎右衛門倅藤五郎を、★藤五郎として示した。

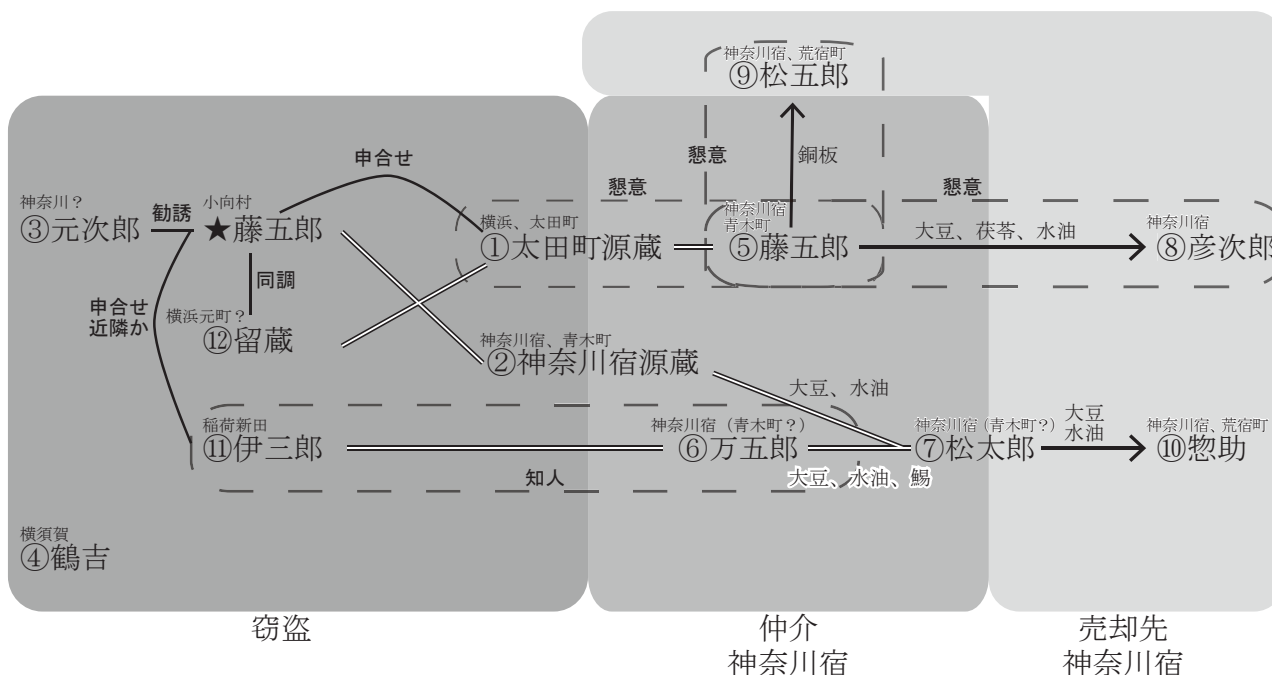


図4 文久二年の窃盗事件の構図

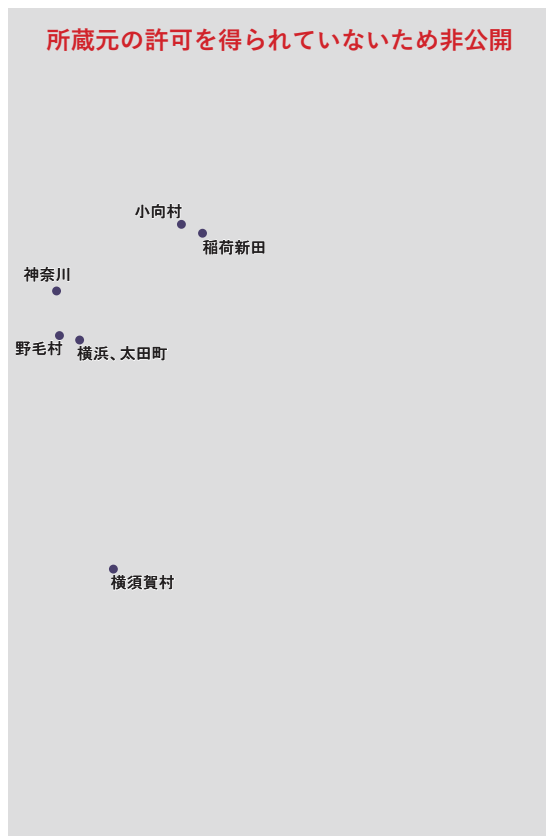


図5 文久2年の窃盗事件関係者の出身地

米海軍による海図に加筆（「YEDO Bay and Harbour, Japan Islands Nipon」、横浜開港資料館所蔵）。

三郎外五人」、つまり①源蔵、②源蔵、③元次郎、④鶴吉、⑤伊三郎、⑥留蔵のみで、藤五郎を除いた人数となっている。身柄が確認されていないのであろう。右の六人と藤五郎を合わせた七人が窃盗におよんだ船乗となる。

つぎに、各人の関係を検討したい。まず、船乗が盗み取った品物を神奈川宿の住人へと売却するまでに、旧知の者が仲介していることが理解できる。仲介者は、七軒町の船乗②源蔵のほか、青木町七軒町の⑤藤五郎、伊三郎と知人であった⑥万五郎、売却もおこなった⑦松太郎である。

万五郎と松太郎は署名から居所が把握できないものの、資料中の「宿内」（神奈川宿の別の町）と「町内」（同じ町）が書き分けられていることから推定したい。⑦松太郎の記述から、万五郎と松太郎は同じ町で、かつ荒宿惣助とは異なり、②源蔵と同じ町、つまり青木町の住人であろう。末尾の「藤兵衛店」の安五郎（万五郎）という署名の記載は、二人目の「七軒町藤兵衛店」の源蔵と同一の店であることを示しているようにも考えられる。青木町の住人、とくに七軒町の者が二名含まれていることは、神奈川湊の中枢であった廻船問屋・仲買、おそらく船宿も集中したであろう七軒町・台町周辺において船乗と関係の深

い人物がいたことを表している。

つぎに荒宿の⑨松五郎と⑩惣助の人物像を推測したい。惣助は百姓（家持）で、この一件のうちに売上金の返金に滞り屋敷地を失ってしまう<sup>四八</sup>。荒宿松五郎は百姓かが明確ではないが、百姓であれば惣助の隣家であった<sup>四九</sup>。そしてその場合、第一章でみた、開港後に船着きを許可された「荒宿松五郎」と同一人物となる。以上から、神奈川宿の東のはずれの船着き場周辺で舟運に関係した生業を営む、経営規模はさほど大きくない家持ということになる。

藤五郎の小向村と⑪伊三郎の稲荷新田（現川崎市）は、多摩川の上流・下流に位置し、川崎宿周辺の川を介した人脈と思われる。

では、この事件はどのように評価することができるだろうか。まず、「輸出品」とされた大豆、小麦、葉種、水油、魚油、鰯、茯苓、銅板のなかで、小麦と銅板は輸出禁止の品である<sup>五〇</sup>。また、慶応三年以前は、外国人荷物の輸送は東波止場の水主方が統括したはずであるが、②源蔵の条の「名前不存外国人任頼」からは相對の関係を思わせる。そして、船乗を雇った外国人がいずれも「名前不存」とされた点も、船による輸送荷物が必ずしも正当な輸出品ではなかったことを想像させる。

したがって、本事件は船乗による開港場荷物輸送の事例としては特殊な例であったと評価すべきであろう。ただし、窃盗をとくに煽動した小向村の藤五郎や⑪伊三郎は措くとしても、他の窃盗者は舟を持ち、宿内や同業者に旧知の関係者がおり、社会から逸脱した存在とは言いが切れない。むしろ、出稼ぎによって生活を支えるべく江戸内湾に奔走する零細な船乗の姿が読み取れるのではないか。この窃盗事件は特殊な例でありながら、先述した開港場に入出入りする船乗が広域的に成立したことを証明していると考ええる。

### 3 明治三、四年の東京・横浜舟運の船乗

船乗の出身地は、前掲の資料2、3が収録される明治三年の「水揚帳」からも明らかとなる。明治三年に石炭屋に送られた荷物の送り状や水揚げの許可申請の写しからなる帳簿で、東京から、または東京を介して横浜へ送られた物資、箱館から外国の蒸気船によって運ばれた物資、下田所属の船が運んだ豆州の鮑など、多様な事例が四五〇件ほど記録される。一度の物資の量としては箱館からの蒸気船輸送が圧倒的であるが、事例の多くは東京

47	建材	株呂縄 6 箇	河浦(場所不明)松五郎船	当方払 / 運賃、世話料、引込	1.30	2.3	新屋敷分	明石屋治右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
48	海産物	長切昆布 140 丸	神奈川、長三郎船	運賃、世話料、引込、水揚げ改	2.2	2.3	山田屋太兵衛殿分	明石屋治右衛門	立合 大井屋勝四郎	運送方中嶋屋喜助	石炭屋福三郎
49	海産物	長切昆布 461 丸	下総稲毛、富藏船	運賃	2.3	2.5		明石屋治右衛門	大井屋渡し	中嶋屋喜助	石福店入
50	海産物	長切昆布 180 箇	大師、条次郎船	当方払、石川屋へ渡し / 運賃、世話料、車力、貢目荷造、蔵入	2.3	2.5	「品」店持分	明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	石川屋又四郎	石炭屋福三郎
	海産物	長切昆布 136 箇	新七船	※二口分。前半は条次郎船、後半は新七船。							
51	海産物	長切昆布 240 俵	冬田(カ)伊之助船	運賃、水揚げ改	2.3	2.5		明石屋治右衛門	大井屋	中嶋屋喜助	石炭屋福三郎
52	海産物	長切昆布 116 箇	金澤、新七船		2.3	2.5	「品」店持分	明石屋治右衛門	大井屋	石川屋	石炭屋福三郎
53	海産物	長切昆布 147 俵	三浦、又右衛門船	運賃、水揚げ改	2.3	2.5		明石屋治右衛門	大井屋	中嶋屋喜助	石炭屋福三郎
54	海産物	長切昆布 150 俵	森中原、長五郎船	運賃、水揚げ改	2.3	2.5		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	中嶋屋喜助	石炭屋福三郎
55	建材	二階梁松 2 本(ほか)、建材	市郎兵衛船	世話料、運賃(21 日石川屋江松)、新屋敷着入車力、橋丸太七拾本、夜番、水揚	2.18	2.21	新屋敷分	宝田屋		石川屋	石炭福
56		大戸前鋤◎付一ヶ所、鋤鋤◎付三ヶ所、窓口老餅 2 つ	清十郎船	2 月 24 日村田屋殿払 / 運賃、世話料、引込			紀伊国屋甚兵衛殿出	上中屋与八		村田屋与治右衛門	石炭屋福三郎
57	建材	杉大貫(ほか)、建材 285 品	江島屋与八殿積、留吉船	当方払 / 運賃船頭相渡 水揚、世話、店持込車力、新屋敷持込車力	3.1	3.3	新屋敷分	東京木場宝田屋太郎右衛門	江嶋屋与八殿積	石川屋又四郎	石炭屋福三郎
58	建材	松丸太 4 本	三右衛門船	運賃	2.21	3.2		宝田屋		石川屋	石炭福
59	建材	二階梁松 1 本(ほか)、計 13 本	治郎吉船	運賃船頭相渡 水揚、世話、引込	3.5	3.9		宝田屋太郎右衛門		石川屋	
60	建材	松木板 444 枚(ほか)、計	乙松船	運賃:船頭江相渡 世話料、店入引込車力	3.7	3.10		宝田屋太郎右衛門		石川屋	
61	海産物	干鰯 19 箇、鮭 1 箇	埜島、新七船	4 月 1 日新七船江運賃渡し 世話、引込	3.29	4.1	増川様分	明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	中嶋屋喜助	
62	石炭	石炭 1350 俵	中後屋権十郎船 □□丸沖船頭伊助乗	右者上北津田村亀屋喜八る前書依敷 当口より積送候間、着船之期改口(テカ)受取運賃金者船頭方江御渡一被成候送り状□	4.2	4.7	常州磯原緑川治平野口彦六			中嶋屋	横浜石炭屋福三郎 東京四日市明石屋治右衛門
63	建材	小窓鋤蛇之日附 木柄とも	清太郎船	村田屋与次右衛門方へ 4 月 26 日払	4 月	4.12	新屋敷分	紀伊国屋甚兵衛		村田屋与次右衛門	石炭屋福三郎
64	茶	白龍 8 櫃、蘭山 19 櫃	喜平船	釜金払	4.25	4.28	長谷村横嶋彦兵衛				石炭屋福三郎 釜屋金兵衛協り
65	建材	松中板 50 枚(ほか)建材	大野屋小兵衛船	運賃:5 月 2 日船頭小兵衛江渡し 水揚:世話料、新屋敷引込 当地払	4.28	5.2		宝田屋太郎右衛門		石川屋又四郎	石炭屋福三郎
66	建材	松中板(ほか)建材	大野屋藤三郎船 藤兵衛乗	運賃:5 月 6 日船頭藤兵衛渡し 世話料、ハトハと新屋敷車力:当地払	4.29	5.3		宝田屋太郎右衛門		石川屋又四郎	石炭屋福三郎
67	建材	松 11 丁	勘五郎船	運賃:勘五郎江相払。世話料、引込:当方払	5.3	5.7		宝田屋太郎右衛門	大野屋徳三郎	[ ]又四郎	石炭屋福三郎
68	出殻蛸	出殻蛸 15 本	大師、友吉船	当地払 / 運賃・積込、世話料、引込	7.10	7.12		明石屋治右衛門		運送方石川屋又七	石炭屋福三郎
69	出殻蛸	出殻蛸 28 本(麻袋入)	大師、友吉船	運賃・積込、世話料、引込	7.10	7.12	桔梗屋江	明石屋治右衛門		運送方石川屋又七	石炭屋福三郎
70	出殻蛸	出殻蛸 6 本	稲川船	運賃元払、世話料、引込(車力、蒸気はしけ水揚)	7.30	8.2		東京ニ而米屋嘉兵衛		石川屋揚	石炭屋福三郎
71	建材カ	沓扱 縦老丈	三右衛門船	夫由蔵殿へ相渡	7.28	8.4		宝田屋太郎右衛門			
72	出殻蛸	出殻蛸 5 本	稲川蒸気船便	運賃(元払)、世話料(5 歩)、引込(1 貫 250 文)、はしけ・水上ケ(12 匁 5 分)		8.8		本店ニ而米嘉		石川屋	
73	海産物	干鰯 34 箇	土屋茂吉船	当方払 / 運賃:8 月 14 日土屋茂吉船江渡し。世話料、引込	8.13	8.14	柴田稲作殿荷物(松岡藩)		土屋勝次郎	石川屋	
74	穀物	肥後米 100 俵	大師、時郎船	当方払 / 運賃、世話料、引込	8.11	8.14		明石屋	木屋小	石川屋	
75	海産物	干鰯 5 箇	土屋船	運賃、世話料、軽子(8 月 16 日相渡し相済)	8.14	8.14	柴田稲作殿荷物(松岡藩)			湊町太田屋源助	
76	海産物	伊豆節 12 樽	船頭半五郎	当方払 / 運賃 船頭半五郎渡し。兩改所世話料 6 匁、ハトハと吹上分、積込(石川屋懸り)	8.15	8.16	箱館丸岡芳之助殿行分	明石屋治右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
77	穀物	肥後米 150 俵、鳥取米 100 俵	大師、甚蔵船	運賃、世話料、引込車力	8.23	8.27		明石屋治右衛門	木屋小	八幡屋七五郎	石炭屋福三郎
78	海産物	鰹節 12 箱	金沢、治兵衛船	運賃東京払、世話料、引込	9.22	9.26		明石屋治右衛門	大井屋勝士(四)郎	鈴村要蔵	当店入
79	石炭	石炭 48 俵	宝刀丸源藏船	運賃、世話料、引込	10.7	10.10		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	鈴村屋要蔵	石炭屋福三郎
	海産物カ	甲永半切 5000 枚 1 箇	宝刀丸源藏船	運賃、世話料、引込							
80	海産物	上々伊豆節 10 樽	金沢、新太郎船	東京方運賃 35 匁、ハトハ世話料 3 匁、引込・車力	10.22	10.27		明石屋治右衛門	運送方大井屋勝四郎	鈴村屋要蔵	石炭屋福三郎
81	石炭	石炭 1000 俵	喜福丸	世話料、引込	11.13			明石屋治右衛門		石川屋又七	石炭屋福三郎
82	海産物	昆布 10 丸	諏訪丸重左衛門船	運賃、世話料、引込	11.22	11.24		明石屋治右衛門		運送方鈴村屋要蔵	石炭屋福三郎
83	穀物	白胡摩 161 俵	大師、利右衛門船	運賃東京払、世話料、引込	11.20	11.22	米嘉殿分	☞出		八幡屋	石炭屋福三郎
84	建材	樫八分板ふなし、ほか 建材	政五郎船	運賃、世話料、引込	11.23	11.25	新屋敷分	宝田屋太郎右衛門			叶
85	海産物	□岸昆布 745 駄	砂見丸文七船	運賃横浜払、水揚げ改(重さ)、世話料	11.25			明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
86	海産物	厚岸昆布 880 俵	徳吉丸源藏船	運賃横浜払、水揚げ改(重さ)、世話料	11.25			明石屋治右衛門		鈴村屋	□「叶」行カ
87	海産物	鮭 4000 本+30 箇	稲荷丸惣七船	運賃横浜払、世話料、引込	11.25	12.1		明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
88	海産物	モロ別昆布 297 箇、同 31 箇、三ツ石昆布 1 箇	清郎船	世話料(一ツ書は三つだが空欄二項目)	12.1	12.3		明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
89	海産物	シノノ昆布 115 箇	金沢、万吉船	世話料、引込(空欄 1 項目)	12.2	12.3		明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
90	海産物	モノイ昆布 360 箇、同 1 箇	本牧、源五船	東京方運賃、諸掛り、高	12.1	12.3	カンカイ丸積戻し分	明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
	海産物	長切昆布 11 箇					堺屋作次郎殿分				
91	海産物	シノノ昆布 300 箇	金沢、治兵衛船	世話料	11.29	12.3	カンカイ丸取締受 [ ]	明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
91	海産物	同 350 箇		世話料							
	海産物	長切昆布 268 駄	金沢、文七船		12.5	12.8	星野栄七殿分送り、堺屋作次郎殿分	明石屋治右衛門		鈴村屋	「叶」行
93	海産物	干鰯 30 箱	土屋船	船賃、世話料、引込	12.6	12.8	柴田稲作殿(松岡藩)				石炭屋福三郎
94	海産物	厚岸昆布 660 駄	若宮丸浅吉船	世話料、引込 目方の改め	12.11、12	12.15		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	〇ス	「叶」入
95	海産物	厚岸昆布 360 駄、「叶」ヨリ鮭 40	金沢、平老郎船	世話料、引込 昆布は水揚げ改めあり							
96	海産物	厚岸昆布 368 駄	金沢、金左衛門船	世話料、引込車力 目方の水揚げ改め	12.12	12.15		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	鈴村屋要蔵	「叶」入
97	海産物	鮭 30 箇	金沢、徳二郎船	運賃継代り、世話料、引込	12.21	12.24	☞	大井屋	〇ス	「叶」入	
98	海産物	鮭 40 箇	由五郎船	運賃、世話料、引込	12.23	12.24	☞		〇ス	「叶」入	
99	海産物	鮭 24 箇	長吉船	運賃継代り、世話料、引込	12.23	12.24	☞		〇ス	「叶」入	
100	海産物	鰯 17 箇、鮓	新兵衛船	運賃、世話料、引込	12.7	12.8	山崎屋善吉		〇ス	「叶」入	
101	海産物	紋別撰鮭 35 箇	尾張屋船主	運賃東京払、世話料、引込	12.25	12.27	☞		石川屋	「叶」入	

〔典拠〕明治三年「水揚げ帳」(三丸興業株式会社文書、横浜開港資料館所蔵)。船乗の列は、所属(…屋など)がわかる例を緑、出身の記載のあるものを灰で示した。

表6 「水揚帳」にみられる東京・横浜舟運（船乗の記載がある事例の抜粋）

	分類	品目	舟、船頭	運賃細目、備考	出荷日	水揚日	荷主、目的、中継ぎの運送業者	東京の荷主、販売店	東京の運送方	横浜運送方	
1	油	新油樽 65 樽	権右衛門船	当地払 / 運賃、世話料、持込	5.18	5.21		小松屋善兵衛	大井屋渡し	中嶋屋喜助	石福
2	油	明油樽 61 樽	権右衛門船	当地払 / 運賃、世話料、持込	5.19	5.21		亀屋甚兵衛	大井屋渡し	中嶋屋喜助	石福
3	日用品	蚊屋 2 張、半切 5 ㍻	清吉船	当方払 / 運賃、世話料、持込	5.27	6.3		明石屋治右衛門	大井屋積	中嶋屋喜助	店入
4	茶	霜の本 8 櫃、鳳凰山 2 櫃	小兵衛船	釜金殿払 / 運賃、世話料 ※引込がないが、世話料銀の横に銭 748 文が記載される		6.13		中村宗三郎	駿州屋定次郎	駿州屋定助殿	釜屋金兵衛殿行
5	茶	茶 19 櫃	安五郎船	釜金払 / 立替、口銭、運賃・積込、持込ミ	6.14	6.15	常州土器屋出、飯島伝右衛門殿分	小網町二丁目初村嘉兵衛	駿州屋定次郎	駿州屋定助殿	釜屋金兵衛殿行
6	茶	茶荷 12 箇	安五郎船	釜金払 / 元運賃、水揚、積込、船賃・積込	6.14	6.15	浜野清太夫殿分		駿州屋定次郎	駿州屋定助	釜屋金兵衛殿行
7	油	油新樽 69 本	留八船	口預け / 運賃、世話料	6.2	6.23		堀江町小松屋善兵衛	佐野半	山形屋五三郎殿	小松屋半兵衛行、当店入ニ成分
8	建材	杉三間六寸 44 本	三五郎船	石川屋江弘 / 運賃、世話料、水揚、車力	6.11	6 月	新宮山	宝田屋太郎右衛門		石川屋又四郎殿	石福店入
9	建材	松丈六五尺ニ五寸など、計 14 種	銀次郎船	石川屋へ払 / 運賃、世話料、水揚、車力	6.26	6.29		宝田太郎右衛門		石川屋又四郎殿	石炭屋福三郎殿
10	茶	松緑印茶 16 櫃、鈴木園茶 1 櫃、宝山茶 1 櫃、桜川茶 3 箇	金五郎船	釜金殿払 / 東京迄運賃立替、口銭、運賃、積込、引込	7.1	7.3	飯島伝右衛門殿分	西村嘉兵衛		駿州屋定助	釜屋定兵衛殿行
11	茶	松みどり 4 櫃、宝山 2 櫃	惣助船	釜金払 / 立替、口銭、運賃・積込、引込車力、世話料	6.27	7.5	常州松塚村鈴木屋源右衛門		東京小網町駿州屋定次郎		横浜石炭屋福三郎殿行
12	茶	松の波 8 櫃	惣助船	釜金払 / 運賃、世話料、引込	7.1	7.5		東京南新堀湊橋角中村宗三郎		横浜駿州屋定助	北仲通三丁目釜屋金兵衛殿行
13	建材	松板 43 箇(赤身)	徳八方佐治兵衛船	石川屋へ払 / 運賃、世話料、引込車力	6.27			深川木場太郎右衛門		石川屋又四郎殿	石炭屋福三郎
14	茶	万国一 55 櫃	安五郎船	釜金払 / 伊勢藤行 運賃先方払(元懸り)、口銭、運賃・積込、世話、引込ミ	7.6	7.8	蒼井幸兵衛殿分	関宿産物方	駿州屋定次郎	駿州屋定助	石炭屋福三郎
15	茶	関の本 7 櫃、清禁樹 10 樽	半五郎船	釜金殿払 / 運賃・積込㍻、口銭、世話料、引込	7.6	7.口		中村宗三郎	駿州屋定次郎	駿州屋定助	釜屋金兵衛殿行
16	店遣用	紙包 1(店遣用分)、人形箱 1(海津屋分箱館行)	孫八船	石川屋へ払 / 運賃、世話料、引込	7.11	7.12		明石屋治右衛門		石川屋	石福店入
17	建材	松三間 22 本	七郎右衛門船	石川屋へ払 / 運賃、引込ミ、せわ、水揚	7.10	7.14		深川宝田屋		石川屋	石炭屋福三郎殿行
18	建材	桧二間六寸角七本、ほか	重五郎船	当地払 / 運賃、引込・車力、世話料	7.24	7.25		東京深川宝田		石川屋	石福入
19	茶	東国一茶 35 櫃	鉄五郎船	釜金払 / 元掛り、口銭、運賃・積込、世話料、引込車力	8.12	8.17	常州土器屋村飯島伝右衛門 水海道かきや利兵衛殿、せと宮田平左衛門殿、仲ノ台間屋五左衛門殿		東京小網町駿州屋定次郎		横はま石炭屋福三郎殿行
20	日用品	筵包 17 箇 太物小間物入	弥助手船	当方払 / (運賃元払)、世話料、車力賃	9.3	9.4	山田屋忠次郎殿分	東京深川境屋弥助			石炭屋福三郎殿行
21	海産物	干鰯(松岡産物) 71 箇	手船金藏乗	当方払 / 運賃、元船賃・はしけ・立替: 此分船頭金藏江直渡し、世話料、引込ミ車力	9.5	9.6	松岡産物	板屋市兵衛殿	深川新大橋穂屋勝次郎	石川屋又四郎	石炭屋福三郎殿行
22	荷造り用品	荷苫上百枚	若宮丸清七船	当地払 / 運賃、世話料、引込ミ	9.15	9.20		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎渡	中嶋屋喜助殿	石炭屋福三郎殿行
23	穀物	上小豆 24 俵、小豆 29 俵、大豆 7 俵	孫八船	運賃・東京世話料、世話料、引込ミ、[ ]、積込	10.6	10.9		明石屋治右衛門		石川屋又四郎	石炭屋福三郎殿行
24	日用品	綿 3 箇、傘 1 箇	清十郎船	当地払 / 運賃、世話料、持込	10.16	10.21		明石屋治右衛門	大勝渡し	中嶋屋喜助	石福店入
25	荷造り用品	株欄皮 1,000 枚入り 2 箇	清重郎船	当地払 / 運賃、世話料、持込	10.17	10.21		明石屋治右衛門	大勝渡し	中嶋屋喜助	石福店入
26	海産物	豆州干鰯 12 箇	下田、与八船	当方払 / 世話料、持込	10	10.29		豆州田子三升屋長右衛門			石炭屋福三郎殿
27	茶	都山 25 櫃	大師、市郎兵衛船	当方払 / 元掛、口銭、運賃・積込、引込	間 10.27	間 10.28?	横嶋彦兵衛殿分	関宿産物方		駿定	石炭屋福三郎
28	茶	花蘭	大師、市五郎船	釜金払 / 元掛、口銭、運賃・積込、引込	間 10.28	間 10.29	金久保藤右衛門	関宿産物方		駿州屋定助	石炭屋福三郎
29	不明	琉球包 2 箇(差替入)	登戸、市五郎船	当地払 / 運賃、世話料、持込・車力	間 10.27	11.2	村上仁兵衛殿分	明石屋治右衛門	大勝渡し	中嶋屋	石炭屋福三郎
30	石炭	石炭 150 俵	黒砂、熊藏船	当地払済(先払) / 運賃、世話料、引込	11.4	11.10					
31	石炭、店遣品	石炭 20 俵、半天 10 枚・暖簾一枚計 1 箇	岩藏船	先払 / 運賃、世話料、引込・車力	11.4	11.10		明石屋治右衛門	大勝渡し	中嶋屋喜助	石福店入
32	石炭	石炭 350 俵	黒砂、与三郎船	11.15 中喜江相払 / 運賃、世話料、引込・車力	11.12	11.14		明石屋治右衛門	大勝渡し	中嶋屋喜助	石炭屋福三郎
33	穀物	大豆 106 俵、小豆 16 俵	庄七船	当地払 / 運賃、世話料、引込、ハト場荷造り、蔵入・積込、蔵出・内移・積込		11.26		明石屋治右衛門	木屋小	石川屋	石福入
34	建材	杉 10 本ほか計 147 本	安五郎船	運賃、川并乗賃共、此分舟頭安五郎船江十二月朔日渡候。世話料、引込ミ、水揚	11.28	12.1	新屋敷分	宝田屋太郎右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
35	建材	檜 7 本ほか計 172 本	船頭兵十郎	運賃・積込手伝共(此分船頭兵十郎江相払)、世話料、引込、水揚		12.2	新屋敷分	東京宝田太郎右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
36	海産物	干鰯	大勝船	当方払 / 運賃相済、世話料、引込	12.1			板屋市兵衛 飯島七右衛門	深川新大橋大勝	石川屋	石福店入り
37	建材	松 13 本	七右衛門船	運賃、船頭七右衛門江渡し 世話料、新屋敷引込	12.3	12.6	新屋敷分	宝田太郎右衛門		石川屋	石福店入
38	海産物	干鰯 12 箇	善兵衛船	当方払 / 運賃・積込、世話料、引込	12.7	12.8		明石屋治右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
39	建材	天井板他	船頭青松	当方払 / 運賃(船頭青松江渡候)、世話料、四丁目引込ミ	12.12		新屋敷分	東京宝田太郎右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
40	建材	竹 70 束	長十郎船(船頭)		12.15	12.18	新屋敷分	東京深川宝田太郎右衛門、油合今(カ)出		石川屋又四郎	石炭屋福三郎
41	建材	備後表 20 枚入り 2 箇、田作畳縁入 1 箇	忠藏船	当地払 / 運賃、世話料、持込	12.19			明石屋治右衛門		石川屋	石炭屋福三郎
42	鹿肉	鹿肉 20 箇	黒川手船	当地払 / 船運賃(船頭江直払)、世話、車力	12.27		嶋屋七兵衛殿分	明石屋治右衛門		石川屋	石炭屋

以下、明治 4 年

43	建材	土台檜二間 11 本、建材 160 本、2000 丁、16 枚	常七船積入(船頭)	当方払 / 運賃(正月 26 日船頭常七船渡中候)、世話料、車力、水揚	正月			東京宝田屋太郎右衛門		石川屋又四郎	石炭屋福三郎
44	石炭、海産物	石炭 100 俵(16 貫目入) 若布 1 俵(170 把入)	大師、甚四郎船	正月三十日払 / 運賃、世話料、引込	1.23	1.27		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎	鈴村要藏	石炭屋福三郎
45	建材	土台桧 4 本ほか計 35 本	治三郎船(船頭)	当地払 / 運賃 2 両 2 分、うち、1 両 1 月 30 日に船頭治三郎へ、残り、1 元方ら出不足之書付持参仕候ニ付残運賃渡候)、世話料、引込・車力、水揚	1.27	1.28	新屋敷分	宝田太郎右衛門		石川屋又四郎	石炭屋福三郎
46	海産物	モロラン昆布 30 箇	三浦、要藏船	運賃 75 匁、セハ料 6 匁、引込 1 貫 500 文	1.26	1.27		明石屋治右衛門	大井屋勝四郎渡し	鈴村屋要造	石炭屋福三郎
	海産物	長切昆布 30 箇	三浦、佐助船	運賃 54 匁、セハ料 6 匁、引込 1 貫 500 文 式口ノ銀 141 匁 3 貫文、未正月三十日鈴村屋払							

から廻漕された荷物である。そして、なかには、資料2のように船乗の記載がみられる。以下、船乗の名前と出身者を書きだした表6をみながら彼らの存在形態に迫りたい。

まず、少数であるが東京の運送方の手船と思しき例が認められる。「尾張屋」とは尾張屋文次郎であろう（表3・i）。同様に、「土屋船」は東京大橋の榎屋勝次郎の手船と考えられる。表3に示した運送問屋一五人の名には見えないが、「水揚帳」全体で廻漕者として一五例確認されるので、同様の営業者と考えられる。なお、湊町波止場の運送問屋にも榎屋勝次郎の名がみられる（後掲資料10）。横浜に移転したか、駿州屋のように東京・横浜に店をもつ運送業者とみられる。ほかに、江嶋屋与八、大野屋小兵衛、大野屋藤三郎の船名がみられるが、いずれも運送問屋一五人の名前には確認されない。

多くは「金沢金左衛門船」のように地域名（または居村）と名前のみの記載である<sup>51</sup>。出身をみると、金沢（現横浜市、一〇例）、大師（現川崎市、九例）、三浦（三例、三浦郡全般の呼称と推測される）、登戸（現千葉市、一例）など、東京湾の各村の出身者が両都市間をつないでいたことがあきらかであろう（図6）。大師や神奈川など、文久二年の窃盗事件に携わった船乗の分布を含みこんでおり、下総国にまで及んでいる。開港後の東京・横浜間の舟運の発展は、江戸内湾に散在した船乗を引き付け、まとめ上げる原動力となったといえるだろう。

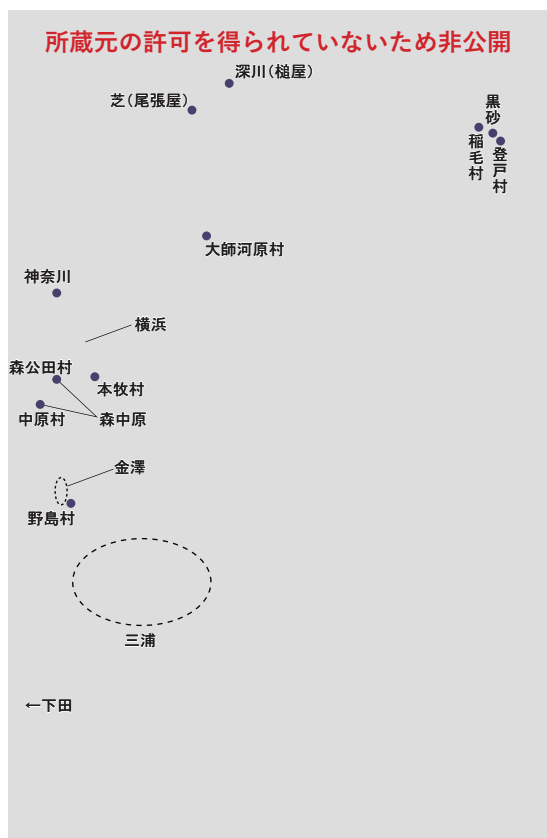


図6 明治3年「水揚帳」にみられる船乗の出身地  
米海軍による海図に加筆（「YEDO Bay and Harbour, Japan Islands Nipon」、横浜開港資料館所蔵）。

#### 4 明治十二年の運送船夫組合と運送方

最後の具体例として、時代は下るが明治十二年・十三年の運送船夫と波止場の運送問屋の議定を検討したい。野島浦（現横浜市）の名主であつた鈴木家に残された本資料は、東京・横浜間の船賃を値上げすべく、東京湾の各町村の「船仲間惣代」が横浜の運送問屋へ交渉した結果むすばれた契約に関するものである。資料10は、明治十二年に横浜の波止場運送問屋から横浜区の荷主に対し、運賃の増額に関して承認を求めた資料の写し、資料11は明治十三年に船仲間惣代から「東京運送中」へ提出された書付の写しである。

〔資料10〕<sup>52</sup>

##### 運賃改正嘆願

今般太政官第五号本縣丙第三百七拾壹号ヲ以テ御布達上、式拾石以上百石以下ハ小船燈、百石以上千五百石迄者、大船燈、且亦航海中ハ紅緑舷燈碇泊ニ至ル迄相用候様、該船則ヲ尊守シ履行スヘキ旨御達シニ就而者、該事ニ関シ若干之入費モ相掛リ、如之諸色等モ高価格別之儀ニ付、船舶ニ於テ活計難相立旨、本年第八月中、私共迄申通候処、程々説諭ヲ加ヘ、追日罷在候、然ル処、其後モ日々嘆談而已、依テ其事情ヲ聞クニ不得止場合モ可有之様思慮仕候、就而者、万一方ノ御差支等相醸シ候テハ恐縮之至リニ付、今般一同協議之上、左ニ其定賃ヲ記載致シ候間、何卒左之定額御払渡被成下度、此段歎願仕候也

（中略、内容は品目と運賃のリスト。表7参照。）

右之件々御承認之上、御調印被成下度、歎願仕候也

明治十二年卯九月

横浜区御国産波止場附

八幡屋七五郎  
平間屋平五郎  
鈴木要蔵  
石川屋又七  
駿州屋久郎  
山形屋五三郎  
村田屋幸介

同区湊町波止場附

太田屋庄蔵

太田屋源介

丸屋熊次郎

山田屋良介

万屋久兵衛

梶屋勝次郎

横浜区荷主

御中

〔資料11〕 五三

一、私共儀従来東京・横浜運送荷物往復船営業仕来候所、御仲間衆之御引□ヲ以、是迄永統罷在難有仕合奉存候、然ル所、近年諸物価等格別高直ニ相成、実々従前之運賃ニ而者、往々活計難相立、殆困難仕候ヨシ、今般右営業之者一同協議之上、夫々船数等取調候所、大船小舟取交総計百八拾艘ニ至リ居候ニ付、此度一同組合法方ヲ相立、契約ヲ相設シ運賃直増之儀、御歎願申出候所、早速御集会之上、夫々は迄之振合ニ基付御直増御聞濟被成下、難有仕合奉存候

一、□（近カ）年荷主方自俣ニ荷物直積・直揚等猥ニ相成、往々営業上ニ相関候ニ付、今般更ニ一同之者契約仕、御当所者不及申、横浜ニ於テ茂直積荷物ハ一切積参申間敷儀、確定仕候、乍併、多船之儀ニ付、万々一心得違之者有之、御仲間内御扱ニ無之荷物積揚等致候者見聞候得者、早速惣代之者罷出、事実取調之上、其限り組合除名致、其他一切御仲間営業上ニ御不都合不相成様、注意致し取計可申候、且又、運送積元有之候得共、右積元江掛合之上、已後壹艘茂相廻し申間敷條  
右之通り、御約定申上候処、聊相違無御座候、為後日連印ヲ以証差入申処如件  
明治十三辰十月日

東京運送中

船仲間惣代

資料10に連印した波戸場の運送問屋は、第五章でみた運送方と（明治五年以降は御国産波止場附）、新しくできた湊町波止場の運送業者である。資料11の宛名「東京運送中」

は、「御当所」と横浜の直積をしないことを誓約しているため、東京の運送問屋のことであろう。

太政官布告による運送船への灯明設置の指令と物価高騰をうけ、東京・横浜の往復舟運を担っている者が協議のうえで組合を立て、横浜の運送問屋とおそらく東京の運送問屋へ掛け合いのうえで契約が結ばれ、運賃が改定された。明治十二年八月に船仲間が運賃改定についての打診をしたのが横浜の波止場運送問屋であり、彼らを介して横浜開港場の荷主との合意が形成されたことが注目される。運送問屋が、開港場の商人と船乗を媒介する立場にあったことを確認しておきたい。それは、波止場の運送問屋（運送方）からみれば「最寄船乗之者」との関係に他ならない。

その後、協議のうえで同年十月に運送に関する規則が、運送船夫惣代（船仲間惣代と同義と思われる）と、波止場の運送問屋の間で議定された（表8、明治十二年の議定を参照）。資料11は、その一年後、荷主の勝手による直積みや直降ろしが横行したことを受け、規則の改定をした際のものである。表8に示した明治十三年の議定内容からは、波止場の運送問屋による船乗の取締と、それを介した物資流通の支配強化が読み取れよう。とくに六条目が荷主から船乗への運賃の支払いと、直接雇用による運送の依頼を禁じている点は、波止場の運送問屋が船乗と荷主の間に生まれた相対の関係へ徹底的に介入し、否定していく動きと認められる。

明治十二年版の議定の第四条にみられるとおり、運送問屋は運賃の一部から口銭収入を得ており、荷主と運送船夫を仲介する彼らの収入となっていた。運送問屋を介さない、空

表7 横浜から東京への運賃

運賃	品目
金2円	砂糖皆掛1万斤
金2円	細鉄1万斤
金2円25銭	平鉄、延鉄1万斤
金2円75銭	古針金1万斤
金3円	唐綿50斤入り100本
金1円40銭	石炭油100箱
金1円35銭	茶明箱100箱
金2円30銭（→2円）	石炭1万斤
金2円	米穀物類皆掛1万斤
金2円25銭	硝子100箱
金3円	蘇木1万斤
金3円	丸藤1万斤
金3円50銭	水油100樽
金3円	酒100樽
金10銭	唐糸1箇
金10銭	金巾1箇
金3円50銭	茶明壺100本
金1円20銭	西洋酒1タース入100箱
金7円	セメント100樽
金3円	茶櫃100箱
金6円	鮭5千本を以て100石
金6円	鱈1万本を以て100石
金2円50銭	丸茶100本
金17銭	西洋紙大1箇
金12銭	西洋紙小1箇
金2円25銭	唐紙100箇
金3円	硝子（石か）1万斤
金2円	地糠100俵
金5銭	ヒイル1樽
金3銭	炭酸大1樽
金10銭	ランプほや小1樽
金12銭	ランプほや大1樽
金10銭	炭酸100本入1樽
金3円50銭	大黃1万斤
金3円	明礬1万斤
金25銭	光砂糖大樽1本

〔典拠〕 鈴木裕一家文書（注52、資料10）。

問的にいえば波止場外の物資輸送を排除することが、彼らの営業上重要な課題だったのである。

では、「運送船夫」や「船仲間」の構成員はどのような存在だろうか。明治十二年九月、両波止場の運送問屋と契約を締結するにあたり、「運送船夫」の惣代が選出されているが、惣代を任せたのは一二カ村、二五人の人物である（表9）。資料12は年欠であるが、内容から「運送船夫」の惣代の依頼についてのものとみられ、彼らが船持であったことが明らかである。

〔資料12〕 五四

約定証

一、今般運賃直増之義ニ付、当船持一同協議之上、貴殿ヲ以テ惣代之任ヲ依頼致候、然ル上者、諸事貴殿之専決ヲ以テ各貨主ヲ回顧被成下、就而者既往及ヒ示来之諸入費悉皆貴殿御立換置被下候段、一同忝奉存候、然ル上者、前願結句ニ至り、費用何程相掛り候共、諸金員一同方割当シ、速ニ出金皆済仕、聊貴殿江御迷惑・御損毛等相掛け申間敷候、為後日確約証書仍而如件

惣代となった鈴木吉兵衛は、「酒屋」ともよばれ、浦賀への荷物廻漕や、年欠の送り状のなかには江戸か東京へ荷物を廻漕した記録もみられる<sup>五五</sup>。そして、同村の農間渡世は、天保九年に書き出された資料から明らかに、「浦賀渡舟宿渡世」と呼ばれる者が三軒存在した。吉兵衛の例を鑑みれば荷船・便船の営業であったことが推測される。

なお、料金表の品目をみると、茶や海産物のような輸出品、金巾、唐糸、洋紙、洋酒のような輸入品が確認され、日用品と輸出入品の双方が彼らによつて輸送されたことが

表8 運送船夫と横浜波止場運送問屋の議定

明治12年の議定

1	私用品ではない歩合金にかかわる荷物(輸出入品)は御国産波止場・湊町波止場に限って揚げ降ろしするように、船の側においても承諾しておくこと。 ただし、運送営業人と荷主が歩合金を免れようと共謀した場合、即刻除名し、新聞紙で公開すること。
2	横浜から東京への運賃は別紙のとおりに間違いなく従うこと。
3	船舶の取り締まりのため、両波止場に船舶取扱所を設け、諸事を取り扱う。
4	運送船夫は、運賃定額高のうち、二割五分を差し出すこと。 1割7分5厘は問屋口銭、3分7厘5毛は運送仲間の諸費用、3分7厘5毛は船取扱所の入費に充てる。 ただし、砂糖に限って運賃の二割を差し出し、問屋口銭1割5分、運送仲間諸費用2分5厘、船取扱所2分5厘とする。
5	運送船夫が物品輸送中に紛失・損傷した場合は、取調のうえ船夫に落ち度があった場合は弁償すること。やむを得なかった場合は兼ねて布告されている難破船規則にのっとること。
6	荷主の依頼を受けて直に積みいれた荷物であっても、運送賃定額のうち5分を船扱所へ納めること。
7	運送問屋が運送船を雇おうとする場合は、必ず最寄の船取扱所へ任せること。船取扱所では注文に応じて差し支えなく船を回すこと。
8	実地履行上で不足があった場合は協議のうえ賛成多数になったうえで改定をすること。

明治13年の議定

1	御布告、警官の指示に従い、横浜波止場と東京の廻漕船積問屋(運送問屋、運送方のこと)の仕法を守ること。
2	荷物を船積する際は、御改所で手続きをすまし、手荒な扱いをせず、数量の過不足を手板・送り状とつきあわせて確認すること。
3	船中に付属の品を取りそろえておき、もし急に必要な品ができた場合も差し支えないようにすること。
4	船子を雇うときは、その身分を仲間全体で確認し、不正の者を雇わないようにすること。もし船子に心得違いがあった場合は、口入をした人物へ差し出し、仲間全体への周知のために船会所にその者の住所・名前・始末を書いて六か月間張り出しておくこと。
5	入船・出船ともに船会所へ届け出て、船号と木札を出入りの際に改め、順番に積荷を受け取り、どのような荷物であっても順番が当たった場合は苦情を言ってはならない。
6	船運賃、舁下・沖瀬取の運賃は、廻漕積問屋の定則のとおりにする。荷物を水揚げした場合、船会所に詰めた惣代が荷物を受け取り、店々へ持参して引き換えに運賃を受け取り、船会所から船頭へ渡す。店々の荷主から船手へ直に渡すことは一切してはならない。 ただし、荷主から骨折りの心づけがあった場合はこの限りではない。
7	廻漕問屋・荷主の都合によって、荷物の多少があり、船の積石高によっては、順番となっても過不足が出る場合がある。その場合に惣代の者が融通しても異議を唱えないこと。
8	仲間全体で協議し、惣代人を所々から一人ずつ依頼しておき、横浜の船会所へ常駐させる。両波止場で陸揚げ・船積の際には、不都合がないように注意し、日々積問屋を訪問し、出荷手配をうけたら順番の船を不都合なく回すように取り計らうこと。
9	仲間の船が非常・難事・異変にあった場合には、直接見聞きしたものが船会所惣代へ飛脚を遣わし、惣代の者はその場へ出張し、不都合がないように、万事取り計らうこと。
10	横浜と東京の廻漕積問屋の手を経ない荷物を、荷主からの相談によって受け取ってはならない。また、荷主の都合であっても、積問屋の介入を除いて船手の者が自力で積み降ろしをするようなことは、一切あってはならない。
11	仲間に加する船があった場合は、一艘につき金十円を差し出し、仲間の規則を守り、惣代がすべてを調節すること。毎年一月と八月に仲間の参会を催し、協議すること。加入金は参会のときに入費へ加えること。
12	船会所に常駐する惣代の月給と会所の入費は、仲間運賃高の3分7厘5毛ずつを船毎に回収して賄う。過不足があっても、詰めている者で融通すること。不足した場合も仲間一統へ出金の請願をしてはならない。
13	仲間一統で協議して規則を締結すること。万一違反した者がいた場合は、船仲間から除名し、積問屋一統へそのことを断り、違約金として金50円を即刻差し出させる。そのときに難渋している旨を主張してはならない。
14	船仲間はもちろん、誰に対しても喧嘩・口論・博奕・賭け勝負は一切おこなってはならない。

〔典拠〕 鈴木裕一家文書（神奈川県立公文書館所蔵）。明治12年版は「為取換之証」（請求記号 2200433538）、明治13年版は「船仲間申合規則証」（請求記号 2200433539）。

表9 横浜両波止場の船仲間(ゴシック体は惣代)

居所	人名
下総国千葉郡寒川村	鈴木庄之助
東京府荏原郡羽田村	増田歌次郎
神奈川県久良岐郡高嶋町	石井藤左衛門
神奈川県久良岐郡野毛町	長谷川伝五郎
神奈川県橋本郡潮田村	林定七
神奈川県久良岐郡野島浦	鈴木吉兵衛
相州三浦郡浦郷村	小山重左衛門 小山勘造 小山吉郎兵衛 桐ヶ谷源兵衛
相州三浦郡長浦村	鈴木文右衛門 鈴木要蔵
相州三浦郡田浦村	小山源兵衛 鈴木佐助 鈴木庄兵衛
相州三浦郡浦郷村之内榎木戸	鈴木清兵衛
相州三浦郡浦郷村 日向	田川佐五兵衛 平埜象治郎
相州三浦郡浦郷村深浦	渡戸久造
武州久良岐郡三分村之内室木	部吉重郎 長谷川良助 長谷川伝八
武州久良岐郡三分村之内瀬ヶ崎	桐川兼吉
武州久良岐郡埜嶋浦	山田仁三良 木川弥惣左衛門 黒河差七 川島太平次 黒川孫治郎
武州久良岐郡杉田村	深埜甚九郎 間辺彦右衛門 深埜金造
武州久良岐郡中原	厚浦長造
武州久良岐郡森	金子平蔵

[典拠]「委任証」(鈴木裕一家文書、請求記号 2200433536、神奈川県立公文書館所蔵)。

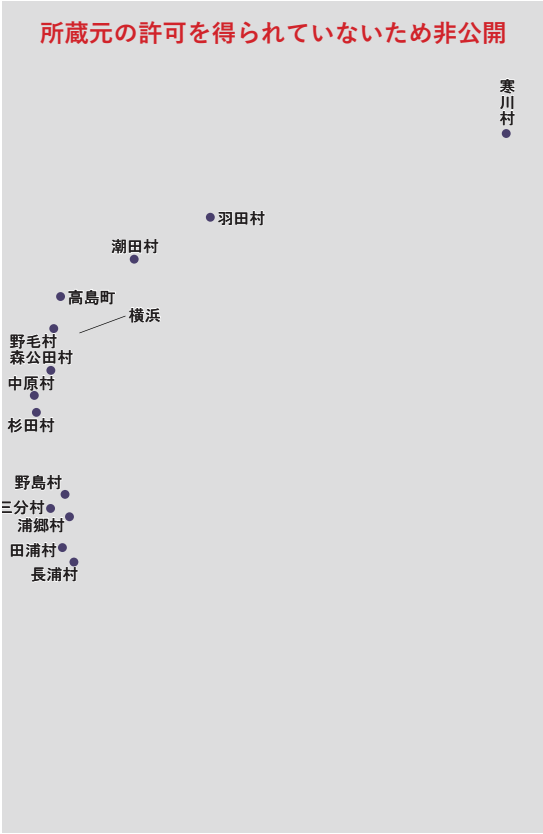


図7 明治12年の船仲間の出身地(船持の分布)

米海軍による海図に加筆(「YEDO Bay and Harbour, Japan Islands Nipon」、横浜開港資料館所蔵)。

知られる(前掲表7)。一方、生糸と蚕種紙はリストにみられない。明治六年に生糸売込商の発起によって生糸改会社が創立されたことで、本町六丁目の生糸改め所へ直接積み入れることとなっており、別個の運送網となっていたのだらう<sup>五六</sup>。

5 小括 船乗の参入と編成

以上、幕末の船乗りの動向はさらなる調査が必要であるが、その一端を示すことはできたと考える。荷船として機能した海付村落における既存の船は新都市横浜の舟運の前提であり、江戸内湾各村の船乗にとつて横浜は出稼ぎの場として機能したのであらう。それは、船乗の生きた江戸内湾の世界における都市の誕生であつたことが重要な点ではないだらうか。窃盗事件ではあつても、広範な船乗りの生活圏(航路)および人脈の広がり、新都市への吸着の関係の一端を、文久二年の事件は示している。

一方、明治十二年の契約に署名した「船仲間惣代」の存在にも注目したい。文久期の窃盗事件や、船乗之者取締規則からイメージされる散発的な船乗りの参入とはやや異なり、鈴木屋のように近傍の町村へ広がる商圏を持つた村内の商人的存在(船持)が組合を結成したのである。つまり、「船仲間」の構成員が実際に物を運ぶ船乗と一致しない状況であり、村落の中心的存在による船乗の編成も想定されるだらう。波戸場に入出入する海上輸送船と舢舨の差は、船や船乗りの差よりも、むしろそれを編成する主体(運送方か村落船持か)にあつたのではないか。

慶応三年までの間に江戸の横浜廻漕問屋は一五名へと人数を大きく増加させており、横浜側でも明治三年には「湊町波止場」の運送集団が加わつて、両都市間の舟運の体制は拡張されたといつて良い。蒸気船の就航も合わせ、東京・横浜間の舟運は貿易の拡大とともにさらに進展したことを表している。こうした状況のなか、東京湾沿岸の町村に叢生した輸送業者の参入があつたのではないか。その到達が、十数町村の大船・小舟一八〇艘であつたのだらう(資料11)。

そして、明治十二年、十三年の契約の締結は、明治二年の横浜運送方による最寄船乗への鑑札配布の請願の延長に位置付けられよう。運送方は手船と呼びうる船乗を抱えつつも、急激に拡大する物量に対し、江戸内湾の広汎にわたつて散在する船乗との流動的な関係を主として結んでいたと考えられるのであり、明治二年の鑑札配布案は、彼らの手船化を試みたものではなかつたか。運送船夫の仲間結成と横浜の運送方(運送問屋)との契約は、それまで内湾各地に分散していた船持・船乗が、物価高騰を機に束ねられ、ついに両都市間の海運業者たる「運送方」のもとへなれば従属する形で再編されたことを意味しているように思われるのである。

## 五 結語と展望

江戸・横浜間の舟運は、五品江戸回送令を契機とした生糸輸送の拡大とともに発達した。新興の奥川船積問屋たる木屋小左衛門をさきがけとして、各種の間屋や解宿が両都市間運送へ参入し、慶応末期までには小網町・小舟町を中心に構成員は急速に拡大した。そして、そこでは新技術であった蒸気船の利用が、江戸・横浜双方から画策されたのである。山師的な請願者も含め、外国船がまさに存在した江戸と横浜を含む一帯が新規事業への野心に満ちていたことを示している。

一方、実際の舟運については江戸内湾各所から船乗の参入がみられた。波戸場周辺の解輸送と都市間輸送の担い手についての精緻な分析は今後の課題であるが、船乗の生活圏や村落有力者の商圏に誕生した新都市横浜は、容易に参入しうる場となったことが推測される。そして、彼らの参入は、拡大し続ける新興の港湾都市であったがゆえに横浜住人だけでは不十分であった船乗の数を補完し、両都市間の舟運を支えたのである。

最後に、築港事業との関連を展望して結語としたい。渋沢栄一は、東京と横浜の間を小舟がつないでいることを指摘し、益田孝を中心とした東京の築港を主張する実業家たちは、小舟による輸送コストを問題視した<sup>五七</sup>。両都市間の舟運による連絡が、東京と横浜のどちらに築港を実施するかという問題のなかでの論点となったといえる。

明治二十九年の鉄製栈橋によって外洋船の着岸は実現し、その後の第二次築港事業による新港埠頭の誕生は、港と鉄道との連絡を実現した。これらの事業は国際交易港と内地の流通の関係を合理化するものであったが、それでも東京と横浜の間の舟運は継続したのである<sup>五八</sup>。

かくして築港事業によって克服されなかった二都市間の舟運は、江戸の外港として成立した横浜開港場の立地の事情によって生まれ、江戸・横浜の運送方と、おそらく江戸内湾全体に叢生した海付村落の人びとによって実現されたのである。そして、明治十三年の運送方による船乗の編成先の空間となった波止場はより集約的なインフラとなっていき、築港事業まで機能したのであり、内湾の船乗による運送は、事業後に至るまで港湾インフラを補完する存在でありつづけたと評価できるだろう。

一 横浜市『横浜市史』第二巻、一九五八年。

二 石井寛治「維新変革の基礎課程―対外的契機と『編成替』―」『歴史学研究』第五五四号、一九八六年五月（近代史部会報告「一九世紀近代化過程における『外庄』と国家―従属か自立か」）。

三 高村直助「水上のシルクロード」吉田伸之・高村直助編『商人と流通 近世から近代へ』山川出版社、一九九二年。

四 西川武臣「幕末・明治初年の東京（江戸）・横浜間の水運について―和船から蒸気船へ―」横浜開港資料館・横浜近世史研究会編『一九世紀の世界と横浜』山川出版社、一九九三年。

五 松永秀夫「明治維新時の横浜―江戸（東京）通船の消長―稲川丸、シテ・オブ・エド、弘明丸の三船を中心に―」『海事史研究』第五〇号、一九九三年六月。

六 西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院、一九九三年。

七 西川武臣「明治初年の神奈川県の無宿人対策」『横浜開港資料館紀要』第三号、一九八五年三月。

八 横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜』横浜市ふるさと歴史財団、二〇一四年。

九 石井寛治『近代日本とイギリス資本―ジャーディン・マセソン商会を中心に―』東京大学出版会、一九八四年。

一〇 「市中取締書留」元治十一ノ十七分冊ノ二（旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵）。

一一 『諸問屋名前帳』細目四（国立国会図書館参考書誌部、一九六四年）。

一二 佐藤英雄家資料、箱⑦一・二七・二〇（相模原市博物館所蔵）。また、安政六年四月十四日の書簡によれば、諸国への掛け合いによって百万両ほどの仕入れは差し支えないことが報告される（箱⑦一・九）。

一三 「御触書并願書扣」（神奈川県立博物館所蔵資料）一（県史写真製本、神奈川県立公文書館所蔵）。三分冊のうちの一冊目。

一四 西浦賀の掛塚屋は、安政期ごろに加賀藩の廻船御用達を勤めるようになったとされる人物とみられる（斎藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房、一九九四年（第三章第四節）。また、同名の者が弁天通り三丁目の地所拝借人として確認される）。

一五 明治三年「水揚帳」（三丸興業株式会社文書、横浜開港資料館所蔵）。

一六 高村直助「幕末・明治前期における売込商石炭屋の経営形態」『横浜市史』補巻、一九八二年。

一七 「市中取締書留」慶応十一ノ二十・二（旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵）。

一八 『横浜市史』第二巻、一九五九年（第二編四章一節）。

一九 『東京市史稿』市街編五。明治三年八月二十三日「積荷運送問屋新規営業許可」（四七〇頁）。

二〇 田中康雄編『江戸商家・商人名データ総覧』第三巻（終風舎、二〇一〇年）。

二一 吉田伸之「江戸の積問屋と解下宿」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三号、二〇〇三年三月。

二二 同右。

二三 『諸問屋名前帳』細目一（国立国会図書館参考書誌部、一九六一年）。

二四 慶応三年「生糸・蚕種紙御改御冥加取立上納控」（館蔵諸文書、請求記号七六一、横浜開港資料館）。

所蔵。江戸や横浜の者が「荷主」として印形し、生糸・蚕種紙の種別と量が記入された帳簿である。

二五 前掲論文注三。

二六 「市中取締書留」安政十ノ百四十七（旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵）。引用部分の前後には塗物間屋と小間物間屋（下り傘）の回答が収録される。

二七 文久三年までは金子屋常次郎、その後の作成と推測される商人番付（横浜市史編纂掛編『開港七十年記念 横浜史料』（一九二八年）所収の「大港光商君」）や、明治二年の運送方の訴え（「諸留記」（小野忠秋家文書、横浜開港資料館所蔵）に収録）では金子屋健蔵の名義となっている。

二八 吉田伸之は、炭薪間屋の千葉屋・下総屋が艀下宿でもあった事例を紹介している（吉田伸之「佐倉炭荷主と江戸間屋」近藤和彦・伊藤毅編『別冊都市史研究 江戸とロンドン』山川出版社、二〇〇七年十二月）。よって某種渡世の松野屋が江戸河岸における舟運と、艀宿として関係がなかったと言いつてもいいが、松坂屋が炭薪間屋・仲買と艀下宿を併記していることから現段階では本文のような推定をおこなった。

二九 万延元年八月十九日に江戸間屋のもとで改められた上州前橋道具屋又蔵の糸荷物が濡れていたことをうけ、調査のために送り状を伝って三文字屋・漆原屋へ問い合わせがなされ、肥前屋小助らも奉行所へ兩人に問い合わせれば真実が把握できることを進言している（『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四〇二）。三文字屋・漆原屋が送り状に名の記載される当事者としての対応を求められたといえるだろう。

三〇 「市中取締書留」慶応十一ノ二十五・二（旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵）。

三一 原直史「近世房総をめぐる物流と海船」『千葉県史研究』第三号、一九九六年三月。

三二 「諸間屋身元金調」（旧幕府引継書、国立国会図書館所蔵）。

三三 『神奈川県史』資料編一〇、資料番号四一〇番。

三四 明治元年の横浜廻漕業者一五人と船方惣代による居留地関係の御用の報告には、廻漕業者一五名に対する「廻船方」や「船方」への編入指示が言及され、慶応三年の「海舟間屋」への編入指示を指していると考えられる（明治元年「諸願・諸届」、請求記号805.23.11.D103、東京都公文書館所蔵）。一方、「廻船方」は、同一の文書内で「廻船間屋」とも名乗っており、両者が同一の集団であったことがわかる。

三五 明治元年「諸綴込」（請求記号805.A4.14、一〇五頁、東京都公文書館所蔵）。

三六 太田久好「横浜沿革誌」一八九二年。前掲論文注五によれば、ヴァンリード Eugene Miller VanReed である。

三七 前掲論文（注五）にて紹介された岸田吟香の回顧録。

三八 明治二年「達掛合」（請求記号805.A3.16.D192、東京都公文書館所蔵）。本資料についてはすでに西川武臣が東京・横浜舟運の通時的な検討のなかで言及する（前掲論文注四）。ただし、東京・横浜間の一般的な運送と、当該資料で議論される居留地間舟運の性格の違いを氏はさほど意識していないのではないかと思われる。まず、本資料は税関を通過しない両都市間の荷物輸送こそが議論の対象となっているのであり、外国船による運送が先に始まったために、取り締まりが行届くよう東京運上所と神奈川県の間で仕法の確定が急がれたのである。また、横浜側の運送の担い手を、水主頭

取九蔵としてしまっている点は、居留地間運送以外を担った運送方の存在を見落とした考察であるといわねばならない。水主頭取と運送方は、幕末以来別種の業務を担ってきたことを確認する必要があるだろう。

三九 前掲資料注一九。高村直助は本資料から横浜運送間屋が廻漕会社頭取・肝煎りとなったことを述べているが、具体的な内容は検討されていない（前掲論文注三）。なお、忠次郎は別の資料で「大黒屋忠次郎」とされる。

四〇 同資料には、横浜運送間屋から提出された明治初頭の変遷が記載されるので簡単にまとめておく。明治元年五月、大総督府会計局から、小左衛門ほか一四人へ運送間屋の名義が許可された。この間屋名義は生糸と蚕種紙に限られたもので、他の荷物は一五名のほかでも運送をおこなうことができた。その際、小左衛門と弥兵衛は高張提灯、他の者へは弓張提灯、焼印が配布された。その後、数回の改所の変化を経て、通商司へ日々出入りしていたことから、明治三年二月、小左衛門と弥兵衛を通商司廻漕会社頭取へ任命、のこり一三人は肝煎りに任命された。

一方、鉄砲洲居留地開市以来、廻船間屋と一五人で運上所船方御用を勤めており、船方会所に交代で参上し、居留地開門通行の焼印と割羽織を受け取っている旨、仲間内での仕法を立て、順調な営業をおこなっている旨が報告される。

四一 当時の横浜に属した蒸気船として、横浜開港場売込商の鈴木保兵衛、元長州藩士の山城屋和助、水町久兵衛による弘明会社の蒸気船弘明丸も挙げられる（明治三年「達掛合」、請求記号805.B3.13.22、東京都公文書館所蔵）。『横浜沿革誌』によれば、三者は海岸通り五丁目の旧船蔵用地の松下げをうけており、「横浜海岸五丁目」の者として就航の申請がなされた。弘明丸の資料で注目されるのは、船員の出自が記載されている点である。フランス人の御雇技師のほか、稲川丸や燈明丸、イギリス船、アメリカ船に乗っていた機軸方、水夫が乗りこんでいた。その出身は三浦郡の村が多く、慶応年間から明治初年にかけて運航が始まった蒸気船には、三浦郡の出身者が多く雇われたことが理解できる。蒸気船に乗りこむ以前の生業は明らかではないが、おそらく船乗であろう。一名ずつではあるが上総国西川村、豆州網代村の出身者もみられる。おそらく横須賀製鉄所が核となり、海付村落の出身者が再編されたこともあろうかと思われるが詳しくは今後の課題としたい。

四二 前掲論文注七。氏は規則が実現されたことを前提に議論を進めているようにみうけられるが、本文書の規則は、運送方が提案した規則案とみるべきである。後掲の艀船の取締規則を見る限り、政府かられの配布がなされており、運送方による鑑札配布が実現しなかった可能性もあるだろう。

四三 「諸留記」（注二七参照）に所収。

四四 児玉幸多編『近世交通史料集』4 東海道宿村大概帳「吉川弘文館、一九七〇年」。

四五 「金川港規則」人（外務省引継書類、東京大学史料編纂所所蔵）。この簿冊については、第五章注九一を参照。

四六 文久元年〜元治元年「願書・訴書留」（神奈川宿本陣石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵）。

四七 「永島重美氏所蔵資料」一七（書状型①）、元禄十二〜年未詳、六七頁。横須賀市安浦永島重美家文書（横須賀市図書館寄託資料）の神奈川県立公文書館による写真製本である。

四八 前掲資料注四六。「戊戌六月」の、松五郎・惣助に対する返金申し渡しと、惣助の親類による返金の

日延べ願いが確認される。

四九 第一章の図4参照。また、荒宿の町並図（神奈川県本陣石井家文書、請求記号2199433253、神奈川県立公文書館所蔵）。

五〇 『大日本古文書 幕末外国関係文書』三五（東京帝國大學文科大學史料編纂掛編）。万延元年二月の触れで、貨幣ではない金、器物ではない銅、米・麦の輸出は禁止されている（資料番号一四五）。以下、同資料集からその後の過程を簡単に記す。典拠は（巻・資料番号）で示す。同年三月、器物に見立てた銅輸出を食い止めるべく、器物に關しても役所を介して売却することを決定し、外国側へ通達した（三九・四六）。そして、江戸鉄物銅問屋から横浜へ輸送することが万延元年十月に決定された（四三・四六）。一方で、外国人の合意は必ずしも得られておらず、英米からは条約違反との反論があり（三九・六九、七七）、同年九月にはオランダ総領事から米・麦の売買が長崎会所でのものに限定されている点が条約違反にあたるという苦情が出されている（四一・四七）。そして、対内的には禁令を出していた一方で、文久元年の船修理のために銅板輸出が申請された際には、銅輸出の禁止は外国側からの同意を得たものではないことが外国奉行・神奈川県奉行によつて自覚されていた（五〇・一一〇）。ただし、運上所役人による銅器物差し押さえが外交問題にも発展していた一方で（四三・二二五）、文久元年の例では、上海での修理用の銅板として、幕府側の提示した手法による銅板輸出申請がおこなわれており、禁令がまったくの虚構であつたわけではないと考えられる。

五一 「新編武蔵風土記稿」（卷之七十四）によれば、「金澤領」とよばれる中世の金沢氏の領地に由来する領域があり、久良岐郡のうち谷津村・寺前村・町屋村・洲崎村・寺分村・社家分村・平分村の一带を「金沢」と称したという。洲崎村から北側の称名寺周辺まで広がる一帯である。

五二 明治十二年「運賃改正嘆願」（鈴木裕一家文書、請求記号2200433535、神奈川県立公文書館所蔵）。

五三 明治十三年「運送荷物往復船運賃直増ニ付約定証」（鈴木裕一家文書、請求記号2200433540）。

五四 「約定証」（鈴木裕一家文書、請求記号2200433602）。

五五 文化十五年「浦賀御番所通船手形・川船御役所下書」（鈴木裕一家文書、請求記号2200028509）。荷物運送の実例については、たとえば「野島仁三郎船送り状」（同、請求記号2200434179）は、下り油問屋とみられる山崎屋角兵衛へ、水油を送った記録である。

五六 「坤部布告」（東京都公文書館、請求記号606.D6.08（071））。明治六年五月二十九日、生糸、熨斗糸、真綿、生皮芋、皮ムギ、屑糸、繭、山繭、出売繭、玉糸、蚕種紙は、横浜港へ船積する場合、本町六丁目生糸改め会社前の大岡川縁物揚場からのみ陸揚げするように東京府知事から布告がなされた。

五七 稻吉晃『海港の政治史―明治から戦後へ』名古屋大学出版会、二〇一四年（第一章三節）。また、前掲書注八。

五八 前掲書注八。

## 結章 近世近代移行期の湊と「港湾都市」によせて

近世後期の神奈川宿・湊から、横浜開港場の都市形成、神奈川や江戸内湾町村との相互関係、そして築港事業を迎えるまでの港湾設備の成熟まで、港湾都市横浜の成立までの過程を論じた。幕末の大都市である横浜開港場と、湾を囲む神奈川とが一円性を帯びつつ物流を成立せしめ、より遠隔地の江戸と内湾町村も、神奈川とは濃度が異なりつつも再編がおよんでいた。技術的に、そして既存の物流秩序を更新する志向性を有した点で大きな画期といえる築港事業の直前まで、近世後期の神奈川湊を下地として横浜開港場に成立した広域にわたる関係が確かに存在し続け、拡大していたこと、そして、事業前後の設備を補完し、他方で事業を拘束したことを明らかにできたと考える。

以下、本論で得られた理解と今後深めるべき論点や課題を整理して結章とするが、①横浜開港場の売込商と地所拝借人の性格、②神奈川湾、江戸内湾の住人の開港後の対応、③近代築港事業までのインフラの展開の三節に分けて論じたい。これは、産地や中継地から、日本人町、外国人居留地、外国船、国際市場、国際市場へという交易品の流れのなかで、交易の場としての横浜日本人町の特徴①、交易品の流通を実現させた周辺の都市・地域との相互関係②、開港場の内外を接続する沿海部分の史的展開③という整理にもとづいている。

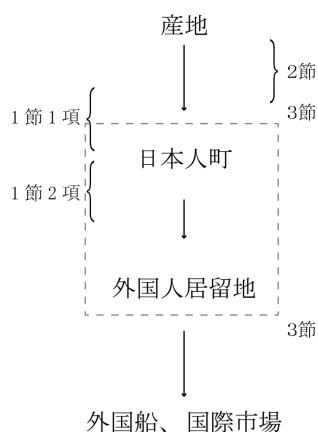


図1 結章の内容

### 一 交易の場としての日本人町

#### 1 惣町、売込商と「近代都市」横浜

まず、吉田伸之の「近代都市」論について、第三・四章の内容から現段階での理解と展望を述べておきたい。

横浜開港場は、関東地方を中心とした各地からの移住によって誕生した大都市である。そこには、惣町・町会所による町政と、本町通りを軸とした両側町、そして均等な地割など、近世都市の言語が多く認められる。同時に、みずからの人脈を駆使して数十間四方の地所を得た拝借人の存在から、都市の形態は不均質な要素が混ざり合うこととなった。横浜開港場は当初から、均等な地割と巨大な地所が混在するカタチで誕生したのであった。

とくに後者は、藩専売制を顕著な例とする産地との緊密な結び付きと、江戸を核とした人脈のネットワークを個々に保持した豪農を主体としていた。これは、江戸の一等地に町屋敷を所持し、問屋株を持つこともあった江戸と豪農の関係よりも、横浜が大都市であり、かつ巨大な地所を取得した点から、産地と都市が直結される可能性を強く内包していたといえる。ただし、地所拝借当時に有力であったものがそのまま交易を成功させたわけではない。

これは、洋銀の交換率が安定するまで本格的な交易が始まらず、外国人側の店舗も万延元年の居留地の割渡しまで待たねばならなかったことが関係しているだろう。そして、さらに重要と思われるのが草創期の開港場においては商法や組合が未熟であった点である。外商は資力のうえで優位にたち、外国公使のもとにある彼らとの取引においては奉行による保護は期待できなかった。石井寛治が五品江戸回送令の撤回と生糸売込商の組合の本格的成立を関連付けて論じたように、最初期の売込商ではなく、慶応期に本格的に開業したとされる亀屋（原）善三郎が明治以降に頂点にたつのである<sup>三〇</sup>。

そこで本論は、万延元年の荷改所の設置と仕法の議定に注目した（第四章）。荷渡所での売込仕法（以下、荷渡所仕法）の策定においては各丁の有志による主導がみられ、彼らは必ずしも巨大売込商といわれる人物ではない。むしろ、江戸の海屋久次郎、浦賀の出身とみられる掛塚屋権七、小机村出身だが御用商人の朝田屋重作など、都市商人の系譜であ

つたと推測される。荷渡所仕法には、町会所の売込歩合金の積み立てへ介入し、有事の際の救恤へ備えるなど、自立的な利益保証のシステムでありながら、町政にかかわる側面も読み取れる。万延期における売込商の共同は、町を母体とし、惣町的な結合を取り込みつつ成立したといえる。

だが、こうした共同は、生糸売込商の組合で決定した売込口銭に反して値下げ競争がなされたことに表される通り、個々人と産地の関係の重要さを上回るものではなかったといえる。そもそも、形成段階において地所拝借人は出身の町村役人の身元保証のうえで、個別的に奉行から掌握されたのであった。

そして、開港以前よりみられた情報収集と集荷準備の格差の表現としての、明治二年における專業の生糸売込商の少なさに象徴される組合内部の力量の不均等さも相まって、結果からみれば、産地と外国人とを連絡するところの個々の商人の論理を超えてまとめ上げる要因として、惣町や組合が機能しなかったのではないだろうか<sup>四</sup>。むしろ組合の意義は、対外的な部分が大きいものであったことが推測される。つまり、組合による利益保証は最低限の範囲としてつと各人の営業に実質的な干渉はなく、そうしたなかで重要であり続けたのが、百人を超える「惣商人の存意」から得られる利害の主張の根拠であり、神奈川奉行や江戸糸問屋、荷主、外国人への発言権と信頼を担保する機能であったと考えられる。

売込商による生産者や産地商人への金融は、慶応三年に始まる三井組の御用金貸付以降に広がり、明治初頭から亀屋の貸付事例が認められ、本格的には明治十年代以降に進んだとされる<sup>五</sup>。一部の店は莫大な利益を得て江戸を中心とした問屋による流通統制を揺るがした売込商ではあったが、個々の都市商人としての立場は外国交易の許可のものとの新規願によるものにほかならず、明治初頭に至るまではさほど大きくなかったのではないだろうか。都市商人としての自立がすぐに達成されなかったがために、空洞化した大規模な組合が意味を持ったように思われる。

関連して注目されるのは、生糸売込商の中居屋重兵衛が万延元年に、亀屋善三郎が明治二年にそれぞれ江戸（東京）の糸問屋に加入している点である<sup>六</sup>。問屋へゲモニーを解体して上昇するところの売込商＝商人という側面は、同時に問屋仲間への加入と利用を通じて達成されたことを示している。

その点、三二名の構成員に絞った生糸改会社の創設は、都市における有力売込商の自立を示しているとみられ、大きな意味を持つと考えられる。そして生糸の出入りは改所の前での水揚げに限定された。それは波止場を避け、さらにいえば運送方や神奈川の荷次問屋による介入を避けて都市近傍における生糸の流通を内部化する試みであったといえる。

石井孝は、生糸改会社について大蔵省陸奥宗光らの主導を強調し、商人組合としての性格をさほど評価していない<sup>七</sup>。しかし、氏が引用した「横浜表おゐてハ、既に従来之売込問屋共会同いたし、改会社取設度旨申立、時勢適宜之儀二付、即免許いたし候」という陸奥から地方官への通信書の文言をみたとき、官僚主導であることは否定しないまでも、氏の主張した会社設立の正当性を外国側にアピールするための政治的な虚構という以上の、売込商側の要望を読み取ることも可能であろう。五品江戸回送令撤回後の生糸売込商組合の仕法が荷主と外国人に対する立場の強まりを表していることを考えれば、生糸売込を專業としていた商人が大人数による既存の組合を脱し、さらに流通の掌握までを見据えた組合を結成するに至ったと評価できるのではないだろうか。

横浜開港場の都市形成における、宮本雅明の「マチ空間」<sup>八</sup>に全く適合するところの均等な地割と巨大な拝借地所が混在する様は、仕法確立期における惣町的な結合と、そこには統括され切らない売込商の個別的な利益追求活動の構図と親和的である。横浜開港場は形成段階から商人的な自由が内包されたが、都市内における伝統的な空間構造と地縁的な共同は、奉行側の都市計画や都市の支配方法の適用を示すだけではなく、売込商たちの営業の下支えとして機能した。そして前者が後者を脱するなかで横浜が「近代都市」化していった過程が見いだせるのではないだろうか。

## 2 拝借地所と売込商の性格

横浜開港場の町を考えるうえで、地所拝借人の変容も重要である。拝借地所は、産地と開港場、そして外国商館を連絡するところの交易商の営業を支える店と倉庫用地として使われた一方で、早くから地所拝借人と交易商の対応は崩れていったとみられる。そこには借家人の交易商（の予備軍）の存在が想定される。

明治二年の段階では、生糸売込の営業許可を得ながらも売込はさほど行わず、茶の売込や日用品の営業との副業をおこなう者が多くいた。同時に、貸家・貸店の経営も含まれた

ことであろう。元治二年の人別帳にみられた借家人は、召仕を抱える大通りの世帯と、ほとんどが家族のみからなる裏通りの世帯に分かれた。前者は店の人数から判断すれば地所拝借人や店支配人の世帯に迫り、凌駕する規模であった。

裏通りの借家人は小商いや職人、または日雇い労働に従事する層もいたことが推測される。そして、地所拝借人でさえも流動的な横浜開港場においては、人別外の人びとが多く存在したことを、元治二年の根津宮永町地借の定七が証言している。

ただ、流動的な「住人」は「日用」層に限られない。とくに横浜開港場研究として注目されるのは甲州屋忠右衛門が明治二年に開業した旅人宿の顧客である。開港場随一と忠右衛門が自負した座敷で営まれ、日々数十名もの止宿者を抱えて盛況をきわめた。その顧客は、産地の荷主や出店を志す人びとであったのではないだろうか。

開港当初、生糸荷主の止宿は中居屋重兵衛のもとで行われており、開港前の塩谷新八郎の請願した渡世も旅籠屋であった。そして、開港場の都市計画において野毛や戸部は旅籠屋営業の者に土地を割渡すことが計画されていたのである<sup>九</sup>。

売込の代行業が明治期以降につながる安定した経営方法であったとする西川武臣の指摘をふまれば<sup>一〇</sup>、荷主の止宿や滞在は売込商にとってきわめて重要な行為であったといえる。亀屋善三郎が開港当初に横浜を訪れ、その後店を譲り受けた過程が伝えられているが<sup>一一</sup>、こうした旅人宿の顧客が借家人や地所拝借人として交易商となっていたことが推測される。第三、第四章にて開港場における座敷の機能に若干言及したが、駿府町人が遠路をはばからずに駿府城下から座敷を移築したように、座敷は非常に重要な建築であり、その機能は、荷主のための宿や応接空間であったことが推測される。

本論にて十分に論ずることができなかったが、上記のような、地所拝借人としての交易商による荷主宿は、借家人への外国交易の名義貸しにも通底し、横浜開港場の地所を得た売込商をどのように位置付けるかに関わる問題である。交易の権利と一体となった拝借地所の経営や、荷主の手先としての商人を受け入れる問屋的な側面と、自らの才覚による仕入れと買い付けとが、いかなるバランスをもっておこなわれていたのだろうか<sup>一二</sup>。おそらくさきにみた「近代都市」化の過程が意味するところの都市商人としての横浜売込商の確立が、売込の基幹となる形態の変遷と同義であったといえるだろう。

この点は売込の商法も関係すると思われる。第四章でみた売込の商法は、店先（もしくは土蔵・納屋の前）での売込を義務付けるものであった。これは品物を直接商館へ持ち込む行為（万延元年九月の四ヶ条）や、見本を商館へ持ち込む行為（万延元年十月の五ヶ条）の禁止を意図したものであったが、同時に、横浜の売込商には固有の売場が必要であったことになろう。

交易都市としての横浜を理解するには、本論で注目した地所拝借人にくわえ、都市に赴く荷主の存在と、商法決定の直接的な要因であったと考えられる外国商人の存在を考慮にいれねばならない。交易商周辺の社会的関係をもとに交易の形態の分析をおこなう必要があり、今後の課題としたい。

## 二 神奈川と江戸内湾における住人の対応

### 1 神奈川湊・神奈川宿と横浜開港

宿駅設定から二百年後の神奈川は、宿駅の中核に広く町場が付随する都市となっていた。本論でとくに注目した神奈川湊と八王子街道周辺の運送の担い手は、横浜開港場の物資運送に直接的に関係したとみられる。彼らは横浜開港場周辺の物資流通にとって、江戸とは別の確固たる前提であった。西川武臣・斎藤善之両人の研究が明らかにしている点ではあるが<sup>一三</sup>、神奈川の周辺は、複合的地域の「環江戸湾」を構成する固有の一地域であったといえるだろう<sup>一四</sup>。

第二章でみた廻船問屋による開港前の外国奉行への請願や国産塩売買の仲介への新規願は、横浜開港場が誕生したことによる物流の変動を予期した対応であったといえる。そして、明治五年の廻漕会社の開業は、鉄道敷設による湾の再編と海岸の破壊を経てもなお、廻船問屋がテリトリーとしてきた湾を廻船との関係を担保する場として保持し、拡大すらしていった活動として注目される。廻船問屋たちが停泊域として知悉し、海岸から海へのびる視線・利権の展開した湾は、地理的な広がりをもちつつも不定形ではない、都市に付随する具体的な環境であったことに触れることができたと考ええる。

また、こうした新規願は、江戸から廻漕される生糸の中継は船問屋の三文字屋与八や荷次問屋の漆原専助が担ったものの、神奈川を中心とした一帯における廻船荷物の流通につ

いては神奈川湊廻船問屋が掌握し続けたことを示す。その背景は、廻漕会社の営業内容に売買の仲介と宿の機能が含まれていることが暗示しているように思われる。それは、同社の頭取の過半を占めた廻船問屋の営業経験や旧来の業務の延長としての性格を示しているともいえようが、より積極的に、陸上の商人と廻船を結ぶ「問屋」と「宿」という海岸における二つの渡世が、買積船のように船頭の自分荷物が流通する場合も多かった近世後期から明治初頭の湊においては不可欠であったと考えられるのではなからうか<sup>一五</sup>。

そして高島町の造成後に見られた宮洲町・瀧下町の造成と、廻船問屋による高島町や横浜開港場沿海部への進出は、停泊域を中心にした海岸の再生産・移転として解釈することができ。水域を中心とした陸上の空間の交換可能性<sup>一六</sup>については高島町の打撃や既存の海岸に対する建築的営為を過小評価することになるが、湊に固有の柔軟な対応であったと評価しておきたい。廻船との関係を担保する水域に沿って店や蔵、揚場を建設するという点は神奈川に限られたことではなく、より一般的な危機としての風災や流損への対応にも共通して見いだせる可能性があるのである。「水辺都市」の空間に関する論点として、今後追求する価値があるように思われる。

明治五年の廻漕会社の設立で廻船問屋と横浜交易商との共同がみられる点も注目される。鈴木保兵衛や高島嘉右衛門、吉田平之助との共同のうえで、廻船問屋が神奈川にて担ってきた売買の仲介や、彼らと密接な関係にあったと推測される船宿にくわえ、倉庫業、海上保険が盛り込まれていた。三井国産方・貸付方や、三菱会社による海運網の発展のなかで同社の営業がどの程度の規模に及んだかは不明である。ただ、明治六年の相生町火災に対し廻漕会社頭取として米百俵を納め、同年には高島町へ分会社を立てたとみられることは、ある程度順調な営業を物語っている。開港以後の御用の増加を新規願によって乗り越えた廻船問屋が、新たな海運業者へ成長する兆しが確かにみられたことを評価したい。すくなくとも明治初頭までの過程は、神奈川湊の廻船問屋が横浜開港場へ主体的な関係をもっていたのである。

もう一つの神奈川の重要な要素である陸運の拠点的性格は、本論で十分に論ずることができなかった。明治五年の陸運会社の人物として、三文字屋とみられる玉置与八や、八王子街道に程近い二俣川村出身の横浜出店商であった関谷関屋馬持音兵衛が注目される。神奈川と横浜の間の陸運は、おそらく、三文字屋・漆原屋と神奈川宿の馬士、関屋と八王

子街道の馬士がともに担ったと想像される。神奈川と開港場の関係をより立体的にとらえるためにも陸運の担い手に関する研究が重要であろう。

五品江戸回送令のもとでの生糸流通に対する三文字屋与八と漆原屋専助の介入は、陸路による江戸から神奈川、横浜への輸送ルートが先行し、その一部が江戸の廻漕業者によって舟運に替えられたことによると考えられる。第八章では江戸糸問屋と横浜売込商を仲介する神奈川の両人の立場を重視したが、江戸から横浜への直接的な廻漕が主流とはならなかった要因を特定することは現段階では難しい。

断片的ながらも安政六年の中頃に確認された三文字屋を介した横浜への荷物輸送は、旧来の陸運・海運の拠点としての神奈川宿・湊の住人として、三文字屋自身が新都市横浜に未整備であった運送業への参入を果たしたことを示している<sup>一六</sup>。くわえて、江戸を介さない抜け荷としての生糸が、ときに三文字屋ら神奈川の住人に対する荷主の掛け合いのもとに実行されようとした例をみたとき、江戸の糸問屋が取り締まりの中枢におかれた当該時期において、流通路の選択権が荷主や売込商にどの程度あったかも重要な論点となるだろう<sup>一七</sup>。

## 2 横浜開港後の江戸と内湾町村

巨大都市江戸の存在と、内湾町村の近世後期における経済的達成を、開港との関係でどのように評価するかという論点については、主として第三章と第八章で検討した。第三章では、まず都市形成の段階において江戸のもった重要な位置を強調した。北関東の村々と横浜をつなぐ人脈形成の場として江戸が機能したことは具体的に明らかにしえたと考える。

第八章では、横浜開港と江戸または内湾町村との相互関係の一端を明らかにした。株仲間解散後の内湾一帯において、横浜開港を機とした流通のさらなる変動と新規願の開花は、開港場外の人びとが開港の客体としてのみ存在したのではなく、主体的な対応をおこなった例として注目される。

また、新興の都市として成立し、その貿易量を拡大させていった横浜開港場において、都市に自閉した状態は成り立ちえなかった。横浜開港場に定住しておらず、それゆえに流動的な、しかしながら不可欠な、横浜の運送に関係する船乗が広汎に存在し、運賃の一部を収受する波止場の運送方が、彼らを自らの管轄下へ、すなわち波止場付きの船乗へと編

成しようとする構図が明らかとなった。流動的な都市住民は、とくに近世後期以降の都市に共通する問題であると思われるが、本論は、幕末に誕生した港湾都市横浜という特殊な事例を通して、海を介した広大な領域の再編の一端に迫ることができたと考える。

ただ、開港以前には漁獲物や商品の輸送を担っていたとみられる船乗の参入の過程や、村内の商人的位置にあった船持との関係は吟味が必要である。明治十二年の組合結成が、航路のなかで開港場に接触した船乗の参入の延長として位置づけるのか、船乗よりもむしろ船持（運送商人）の繋がりを意味しているのかは十分に明らかにしえなかった。現段階では原直史による都市の船宿での船乗の関係構築という仮説に学んで<sup>一八</sup>、波止場や東京の運送方（運送問屋）のもとで、船乗の結合が果たされたと推察しておきたい。

関連する点として、横浜の出店商による江戸の宿利用にも触れておきたい。万延元年に在駿の出店商の砂張屋善右衛門が江戸・横浜へ訪問する際には小舟町の旅宿に止宿しており<sup>一九</sup>、元治元年には、甲州屋も外国人との出入を機に江戸に止宿し、そこで桃光院の仮宅の守護をするよう内談をうけている<sup>二〇</sup>。巨大都市江戸の旅人宿が開港場出店商のサロンとして機能していたことが想像される。序章にて提起した売込商の多面的な営業という性格は、こうした各都市の旅人宿においてもはぐくまれたのであろう。その点、江戸・神奈川間の運送を担った江戸の横浜廻漕業者に、旅人宿渡世の木屋小左衛門と松坂屋宇右衛門、百姓宿の佐野屋半右衛門が含まれたことは大きな意味を持つ。彼らが「運送宿」とも呼ばれた点も示唆的である。

第八章でやや詳しく扱った江戸（東京）の横浜廻漕業者については、江戸河岸の中心的な存在たる奥川船積問屋・舂下宿を母体とした新たな集団の形成と拡大の過程を示すことができた。一方で、既存の集団との関係については論ずることができなかった。たとえば関宿産物方から駿州屋定次郎へと廻漕された茶の流通については、おのおのの船積問屋の持ち場や開港以前に存在した茶の流通網が想定される<sup>二一</sup>。駿州屋定次郎は、慶応元年の段階で、「横浜船積宿」のみの渡世とされていた小網町の定次郎と同一人物と推測されるが、こうした新規開業の運送業者がいかにして関宿産物方との関係を築いたのだろうか。都市の運送業者である江戸（東京）と横浜の運送方の上昇を理解するうえで、また、江戸への開港の影響をみるうえでも重要な論点となると考えられるため、今後の課題としたい。

本論では横浜開港に主体的な対応をした神奈川や江戸、内湾町村の人びとの活動を検討したが、こうした商人的対応の検討は、他の開港場や新都市の成立に関する研究においても有効な手法であろう。

### 三 インフラの史的展開と近代築港事業の評価

#### 1 インフラの史的展開

まず、近世湊に重要なインフラは、第一章でみた海岸であった。屋敷地の地尻としての海岸は、揚場や倉庫用地にくわえ、売場として機能した部分もあったとみられる。個々人の屋敷地ではあっても、台町周辺の海岸は開放的に連なった形態で描かれており、廻船問屋・仲買が共有する売買の基盤として機能したことも想定しうる。神奈川宿青木町の海岸築出地は、流損のリスクと一体の脆弱な地盤であり、賦課される負担も半分にされた。そして、とくに廻船問屋・仲買の集結した台町周辺では、段差によって街道沿いの屋敷地とは物理的にも区切られた空間であったと考えられる。より人工的に造成された海岸であったといえるだろう。

こうした海岸は、七軒町・台町を中心としつつも「神奈川港湾中」に遍在したものであったと思われる。横浜開港にあたって、こうした海岸は部分的に否定され、新たなインフラとしての波止場が誕生した。波止場は下田や箱館、築地居留地に共通するが、少なくとも長崎の大波止を先例として確認できたため、幕末開港場に特有なものではない。ただ、横浜開港場に造成された波止場は馬踏み五間、長さ六〇間と巨大で、台場普請に共通する海際の大土木事業として<sup>二二</sup>、近世の普請請負体制の達成物であったといつてよい。その巨大さは横浜開港場に必要とされる海岸すべてを取り締まりの都合から代替するためのものであり、幕府権力による物流統制思想の結実であった。それと同時に、江戸内湾を航行する海舟が着岸可能であったとみられる点において、港湾設備としてある程度高い機能性を持ったと考えられる。そして波止場は、慶応末期には運送方の出金による倉庫用地の造成やイギリス人技師による延長がなされるなど<sup>二三</sup>、開港場の公的なインフラとして充実していくのである。

そして、波止場運送を担った運送方の構成員のなかから、「廻漕業」者として商工会議所の役員を務めた石川屋朝田又七を筆頭に、実業家が輩出された。なかでも彼らが蒸気船を所持して東京や千葉、清水との航行に乗り出した点は注目される。江戸・横浜において、慶応二年に山師的な木挽町家主の助七や、東京の廻漕業者と岸田吟香による稲川丸の購入など、早くから技術革新がみられたことと関係するだろう。国際市場へ開かれた開放的な公道（バンド）の成立に港町の近代を認めた宮本に倣えば<sup>二四</sup>、運送方の面々は波止場と海岸の拝借地所において、沖合の蒸気船を間近でみていたことが重要であったのではなからうか。

波止場運送方は、第五、八章でみたように、波止場での水揚げにあたって必要な業務を代替した。運送方の営業上の根拠は、改めや重量の確認の代行者であるとともに、実際の運送手段をもった船頭や船持と都市の荷主を仲介する立場にもあったと考えられる。それは逆に言えば、横浜開港場の交易商が物流の基盤となる江戸の「揚場」売場<sup>二五</sup>や「干鰯場」のような場を持つてはいなかったということを示している。都市外部との接続は波止場の運送方や、神奈川の三文字屋・漆原屋のような、より純粋な運送業者が担っていた。

遅くとも文久期以降には成立していた石炭屋の貸倉庫が運送方によって借り上げられ、釜屋金兵衛のような中小の売込商の倉庫としても機能したことをみれば<sup>二五</sup>、売込商に最低限求められるものは仕入れをおこなうための在方との関係に限定され、大規模な建築が必要ではなくなる。波止場と運送方の存在は、前節にてみた借家人による交易を強く支えるものであったと想像される。

くわえて、明治五年に設立された廻漕会社による倉庫業、明治六年の三井国産方・貸付方による倉庫（石庫）の営業が注目される。外国人との契約によって建設された保税倉庫が日本人によってさほど利用されなかったとされる一方で、少なくとも石炭屋の倉庫と三井の石庫は日本人の利用者が確かにおり、荷為替による金融をおこなう三井国産方の倉庫とは（第六章図12の南西の倉庫）、実質的には荷主やその手先の商人の交易を支える倉庫であったといえる。

むしろ、借家人のなかから成長する交易商も想定されるが、有力な売込商は地所拝借人でありつづけた。第三章と前節にて指摘した座敷と、固有の土蔵が彼らの営業にとつて重

要な建築であったと考えられる。売込商たちが各々所持した土蔵と併存した集約的な倉庫地帯は、交易と営業倉庫の分離過程を表していると考えられるだろう。

こうした前期的な営業倉庫<sup>二六</sup>と波止場の機能を併存させた明治十年ごろの日本人町の海岸は、安政六年に造成された波止場とも、個々の屋敷地の集合による旧来の海岸とも異なる民間の運送の専門的な空間として成熟していったといえる。もともと、純粋な都市住人による海岸の発達ではなく、明治初頭の神奈川県・税関（大蔵省）の主導した港湾の整理、そして大規模な建設事業を直接のきっかけとするものであった。

それでも、三井組による海岸石庫の曳家や、蓬萊社埋立地における多くの住宅・倉庫の建設、波止場の運送業者（旧運送方と人足方）による波止場の整備と設備の拡張を経て巨大な「波止場」が誕生したことは都市住人側の成果として評価されるだろう。第一次築港事業を控えた明治前期、内国荷物に関しては舢舨輸送を伴いながらも十分に機能した港湾インフラであったのではなからうか。第八章にて検討した内湾の運送船の両波止場への編成も、都市運送業者の成長と波止場への人員集約の強化を意味しており、波止場の物理的な規模や機能性を補完したと考えられる。

つまり、やや図式的に整理を試みれば、以下になるだろう。

#### ①開港以前

湾一帯に偏在する海岸。これは伊藤毅による水辺の空間の特質や宮本雅明による近世港町の類型によく合致する<sup>二七</sup>。

#### ②開港から明治五年前

海岸の否定と波止場の誕生。都市内の交易商と物流の場は分離される。

ただし、横浜の波止場は神奈川の海岸と併存し続け、湾全体が交易のための物流を成し立てしめる。

#### ③明治五年から十年前

明治初頭の波止場の移転、海岸の埋立と民有地化。海岸の倉庫地帯が波止場と融合し、波止場の運送業者と密接な関係をもちながら成立した巨大海運会社（三菱会社、日本郵船会社）の拠点となる。

他方、高島町の形成と廻漕会社の設立によって神奈川の海岸が横浜の機能を代替する構図が変化し始める。幕末における「神奈川港湾中」全体での物資流通という段階を

超え、ある程度横浜の設備のみで自立しうるところの海岸が成立したとみられる。そしてそれは、東京の外港として内湾全体に広がる船乗との関係を集約するに至っていた。近代港湾インフラとしての海岸Ⅱ波止場の誕生である。

#### ④ 明治二十二年から二十九年

第一次築港事業による鉄製棧橋の完成によって外洋船が着岸できるようになる。また、港区が明確となり神奈川の沖が横浜港の附属地化する契機となる。ただし、③の海岸Ⅱ波止場が残存する。

## 2 都市・地域からみた第一次築港事業の性格

第五、六章でみたとおり、明治二十年代後半に実施された第一次築港事業は、鉄製棧橋によって大型蒸気船の着岸を可能にしたものの、総体が波止場として成熟しつつあった日本人町海岸の機能を否定することはなかった。また、明治四年に開通した鉄道敷との連絡は小舟による輸送によっている<sup>二六</sup>。そして、安政六年以来つづく東京の外港としての横浜の位置は、東京築港の延期とともに温存されたのであった。

既存の運送業者と海岸Ⅱ波止場、そしてそこに編成された内湾全体に分布した運送船の存在が、港湾設備の近代化の初期段階では合理化されきらなかったことを意味する。これは港湾の近代化事業の挫折であろうか。本論では、第一次築港事業で残された課題が第二次築港事業や東京の築港事業へとつながっていったという問題の端緒としてではなく、近世以来蓄積された秩序を包含し、段階的に更新しつつ港湾の近代化が果たされたと評価したい。

明治二十年に波止場運送業者の朝田又七をまじえて結成された横浜埠頭会社は、都市を超越して展開する言説的な築港構想とは異なり、実際の利用者による、物資流通の現実にもとづいた築港構想が、交易商や廻漕業者を含む実業家によって抱かれえたことを示している。明治二十年代の港湾は、国家の主導による港湾行政と一致しきらない築港構想が生じうる、いまだ都市の論理が濃厚な状況を示していたのではないだろうか。

稲吉晃が指摘した、事業を推進しようとする外務省と、横浜住人の築港への消極的な態度の差は<sup>二九</sup>、「築港」という新たな事業が展開するスケールが、国家的なものか、都市に属するものか、という点での思想上の大きな乖離が伏在したことを表しているのではな

ったか。第一次築港事業は、国家的な計画が都市を離脱しきらずにあった、「港町」から「港湾都市」への過渡期の状況を示しているように思われるのである<sup>三〇</sup>。

## 3 明治中期以降への展望——「港湾都市」研究にむけた課題——

最後に、明治初年までを中心とした本論の考察から、その後の時期についての検討課題を二点あげ展望を述べる。

まず、近世以来の運送集団が、横浜開港場にて本格的な営業を開始した初期的な政商とどのような関係をもったのか、という問題である。明治十年ごろから倉庫と広大な海岸地を得て本格的に営業を開始したとみられる三菱会社は、第五章で若干言及したとおり横浜開港場の既存の運送集団を吸収していったと推測される。同様の構図として、神奈川湊廻船問屋と鈴木保兵衛、高島嘉右衛門らが設立した廻漕会社と、三井国産方・貸付方の営業内容の類似は、とくに廻漕会社の側にいかなる影響を与えたのだろうか。運送方・人足方や神奈川湊廻船問屋の行く末をみるため、そして近代的な物資流通や海運業の成立過程に迫るうえで明らかにしなくてはならない課題である。

もう一点は、第一次築港事業後から新港埠頭が築かれるまでの運送の変動である。本論で扱った第一次築港事業で実現されなかった鉄道・埠頭・倉庫の一体化は、第二次築港事業による新港埠頭をもって完遂された。まさに巨大な港湾インフラというべき埠頭の誕生による、本格的な「港湾都市」化は、既存の運送をどのように変革したのか。一点目にした運送業の主幹となる主体の変化と並行して展開した倉庫・棧橋・鉄道の統合は、おそらく船舶の変化も大きな要素となっていたと考えられる。そこにはいかなる再編や葛藤、または参入や成長があったのだろうか。

船方と陸上の商人の中間に位置した海岸の廻船問屋や波止場の運送方のような既存の運送集団が、巨大な船舶の停泊可能な海域と陸上を直結し、巨大な倉庫へ、そして鉄道をつたって内地へと流れていく新たな、より純粋な「物流」の成立のなかで変化を迫られたはずである。「港湾都市」における物資流通を交えた住人の対応の分析が必要であると考えるが、今後の課題としたい。



## 初出一覧

序章	本研究の視角―横浜開港場の都市史研究の意義―	新稿
第一章	近世後期の神奈川―宿と湊― 「屋敷地裏の埋立造成に関する研究―神奈川宿青木町における「海岸築出新地」の造成と水際空間―」（『日本建築学会計画系論文集』八〇巻七二七号、二〇一五年十一月）に加筆（一節〜三節部分）。	
第二章	開港期の「神奈川港湾中」 「開港期の「神奈川港湾中」―近世湊と海の空間史―」（『日本建築学会計画系論文集』三二二巻七四二号（二〇一七年十二月）に掲載予定。	
第三章	横浜開港場の都市形成―地所割渡し過程と地割から― 「横浜開港場の都市形成―地所割渡し過程と地割から―」（『建築史学』七〇号（二〇一八年三月）に掲載予定。	
第四章	惣町と交易商―町の変容と売込商仲間から―	新稿
第五章	横浜開港場の波止場―移行期の港湾インフラと物流―	新稿
第六章	海岸の民有地化と成熟―近代築港計画空間史序説― 「明治初頭の横浜開港場における海岸の民有地化と築港事業」（『二〇一七年度大会（中国）日本建築学会大会学術講演梗概集』（二〇一七年七月）をもとに加筆。	
第七章	鉄道開通と神奈川―近代化事業と「伝統都市」―	新稿
第八章	江戸内湾における横浜開港場―運送方と最寄船乗―	新稿
結章	近世近代移行期の湊と「港湾都市」によせて	新稿